

昭和前期の師範学校における 音楽教育実践に関する史的研究

2006 年

兵庫教育大学大学院 連合学校教育学研究科
教科教育実践学専攻 芸術系教育連合講座
(岡山大学配属)

D03602K 鈴木 慎一郎

昭和前期の師範学校における音楽教育実践に関する史的研究

目 次

凡例

<序論> 研究の主題と方法	1
1, 問題意識と主題の設定	1
2, 研究の目的・研究対象	3
3, 先行研究の検討	8
4, 研究の視点と方法	17
5, 用語の設定	19
<本論>	
第Ⅰ部 師範学校における制度の変遷と音楽教育	26
第1章 1930（昭和5）年以前の師範学校における音楽教育の概観（1872-1930）	26
第2章 府県立師範学校時代における音楽教育（1931-1942）	35
第1節 1931（昭和6）年「師範学校規定」・「師範学校教授要目」の改正	35
1. 「師範学校規定改正」「師範学校教授要目改正」	35
2. 増課科目	37
第2節 「師範学校音楽教員協議会」（1932）	42
第3章 官立専門学校昇格後における師範学校の音楽教育（1943-1945）	48
第1節 専門学校程度昇格後のカリキュラム	49
1. 「師範教育令改正」	49
2. 「芸能科音楽」の目的	57
3. 「師範学校教科教授及修練指導要目」における「芸能科音楽」	58
第2節 戦時下のカリキュラム	61
1. 戦時教育体制に関する法令下における音楽教育	61
2. 事例	64
第3節 考察	67

第Ⅱ部 師範学校における音楽教育実践：教科書分析と聞き取り調査から	74
第1章 師範学校音楽教科書の変遷と経緯	74
第1節 文部省検定済師範学校音楽教科書の変遷	77
1. 教科書制度	77
2. 文部省検定済師範学校音楽教科書	78
3. 師範学校標準教科書	84
4. 共益商社書店「文部省選定昭和17年度中等学校・青年学校音楽教科書」一覧	84
第2節 国定師範学校音楽教科書の編纂の経緯	86
1. 教科書制度	86
2. 師範学校音楽科教員講習会	90
3. 『師範音楽 本科用巻一』『師範器楽 本科用巻一』	91
第2章 師範学校における歌唱指導	98
第1節 「師範学校教授要目」等における歌唱指導	99
第2節 福井編『師範音楽教本 二部用』（1932）における歌曲	102
第3節 黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』（1938）における歌曲	106
1. 黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』（1938）の特徴	106
2. ナショナリズム、ミリタリズム的色彩の強い歌曲の分析	110
第4節 文部省『師範音楽 本科用巻一』（1943）における歌曲	118
1. 文部省『師範音楽 本科用巻一』（1943）の特徴	118
2. 《白楽天》の分析	123
第5節 聞き取り調査から明らかになった歌唱指導の実態	129
1. 『標準師範学校音楽教科書』（1938）の《皇軍凱旋》：香川県師範学校金光氏の実践	129
2. 『師範音楽 本科用巻一』（1943）：岡山師範学校の卒業生、岡嶋氏の証言	130
まとめ	135
第3章 師範学校における発声指導	140
第1節 「師範学校教授要目」等における発声指導	141
第2節 読譜・発声等を扱った教科書の変遷	144
1. 文部省検定済師範学校音楽教科書	144
2. 文部省『師範音楽 本科用巻一』（1943）における「発声練習」	147
第3節 国民学校教師用指導書における「発声練習」	149
1. 大正期以来行われてきた児童発声の研究の成果との関係	150
2. 国民学校教師用指導書が求める教師の技術	155

第4節	聞き取り調査から明らかになった発声指導の実態	157
1.	香川県師範学校音楽科教員、金光武義氏による発声指導	157
2.	師範学校における増課科目と東京音楽学校における発声指導との関連	161
まとめ		166
第4章	師範学校における器楽指導	171
第1節	「師範学校教授要目」等における器楽指導	172
第2節	オルガン・ピアノ教科書の変遷	174
1.	オルガンとピアノの生産状況	174
2.	師範学校へのオルガン・ピアノの導入	174
3.	オルガン・ピアノ教科書の変遷	176
第3節	黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』(1938)における器楽	181
1.	『標準師範学校音楽教科書』における器楽教材の検討	181
2.	「解説」と「楽器奏法練習」との関連性	186
第4節	文部省『師範器楽 本科用巻一』(1943)	189
1.	『師範器楽 本科用巻一』の特徴	189
2.	真篠俊雄編『改訂初等オルガン教科書』(1930)と『師範器楽本科用巻一』(1943)との比較	192
第5節	聞き取り調査から明らかになった器楽指導の実態	205
1.	オルガン・ピアノの設置状況	206
2.	オルガン・ピアノ教科書	208
3.	オルガン・ピアノ指導の実態	209
4.	他校の事例	215
まとめ		218
第5章	師範学校における鑑賞指導	225
第1節	「師範学校教授要目」等における鑑賞指導	226
第2節	黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』(1938)における鑑賞	228
1.	鑑賞指導の根本方針と「主要音楽家の小伝」	228
2.	「鑑賞用名曲」	229
第3節	聞き取り調査から明らかになった鑑賞指導の実態	233
1.	香川県師範学校における鑑賞指導計画	234
2.	『標準師範学校音楽教科書』を使用した鑑賞指導	235
まとめ		244

第6章 師範学校における聴覚訓練249

第1節 「師範学校教科教授及修練指導要目」における聴覚訓練 252

第2節 講習における聴覚訓練の内容 254

1. 「聴覚訓練を主とする音楽教育講習」 255

2. 「国民学校芸能科音楽講習」 256

3. 聴覚訓練用レコード 260

第3節 聞き取り調査から明らかになった聴覚訓練の実態 268

1. 香川県師範学校音楽科教員，金光武義氏の実践 268

2. 香川師範学校卒業生，渋谷清寿氏の証言 273

まとめ 275

補論 戦前における音楽教員養成281

1, 東京音楽学校における教育実習の実態：『同声会報』の記事と聞き取り調査から 281

2, 音楽教員養成の独自性 299

<結論>309

1, 要約 309

2, 総括 312

3, 昭和前期の師範学校における音楽教育実践の歴史的意義 317

3, 今後の課題 319

資料・参考文献等 322

謝辞

凡例

1. 注は各章ごとにまとめた。
2. 和文の引用の場合、旧漢字は原則として常用漢字に直した。仮名遣いはそのままにした。
3. 短い引用文は「 」でくくり、長い引用文は、2文字下げた（前後1行空ける）。
4. 雑誌、単行本、曲集名に関しては『 』、論文名、法令、教科名は「 」、曲名は《 》を使用した。ただし引用の箇所に関してはその限りではない。
5. 強調語句には、＜ ＞を使用した。
6. 暦年は、西暦で表記し、カッコ書きで日本年号を併記した。
7. 文献、史料の刊行年の指示は奥付に従って記した。

序 論

<序論> 研究の主題と方法

1. 問題意識と主題の設定

現在、教員養成の専門職大学院の設置が検討されている¹。その一方で、戦後確立された「教員の養成は大学において行う」という原則²が、崩れつつある。例えば、「東京教師養成塾」³や「杉並師範館」⁴のように行政単独による養成が開始された。また、京都市や奈良県では高等学校の段階で教員養成のコースを設置する動きがみられる⁵。これら新しい教員養成機関の目的は、実践力、指導力、人間力の溢れる力量のある教員の養成という点で共通している。今後、予想される大量の教員需要に伴い⁶、こうした独自の方法による教員養成は、ますます拡大されると思われる。

現在の教員養成における<実践>志向の動きの源流は、「杉並師範館」の名称に端的に表れているように、<師範学校>にあるように思われる。では、師範学校とはどのような学校だったのだろうか。また、師範学校は本当に力量のある教員を養成していたのだろうか。

師範学校の制度に関しては、中島太郎⁷（1961）、水原克敏⁸（1990）、三好信浩⁹（1991）等をはじめとして多数の先行研究がある。しかしながらこれらの研究は、以下の点が不足していると思われる。

- 1) これらの先行研究は、制度史ということもあり、カリキュラム全体の特徴や変遷等を指摘するということはなされているものの、各教科の内容や実態についてまで明らかにされていない。また、それらの研究の中には、師範学校の擁護論や批判論ないしは<アカデミズム>対<プロフェッショナリズム>の視点から議論が行われ概念的なものが多い。
- 2) これらの先行研究は、文理科大学、高等師範学校、師範学校という範囲内での論及であって、東京音楽学校を頂点に置いて構成されていた「音楽」については等閑視されている。

上記の不足を教科教育学の研究者が補ってきたかという点、そうとはいえない。音楽に関していえば、明治期については唱歌教育の普及と師範学校が密接に関連していたということもあり、山住正巳¹⁰（1967）、河口道朗¹¹（1996）、坂本麻実子¹²（2000）等の複数の研究者によって明らかにされてきた。しかし、それ以後の大正期、昭和期については、戦後60年も経っているにもかかわらず、空白に近い状態である¹³。

そもそも師範学校は、1942（昭和17）年度まで、中学校や高等女学校と同列の中等学校として位置付けられていた。また、師範学校は義務教育である小学校（1941年以降は国民学校）の教員を養成する機関であったため、中央の強い管理下に置かれていたことは周知の事実である¹⁴。カリキュラムは、「師範学校教授要目」（1943年以降は「師範学校教科教授要目及修練指導要目」）で規定されていた。また、そこでは文部省検定済師範学校教科書

や国定師範学校教科書が使用されていた。しかしながら、多くの師範学校は戦災に遭い、戦後の混乱期を経ているため、それらの資料が焼失、散逸してしまった。このような状況もあり、師範学校というのは、教科教育の研究の対象になりにくかった。その他、研究未着手のままになっている原因として次の点が考えられる。

- 1) 戦後、師範教育に対する痛切な批判が起き、戦前の師範学校の存在が否定されることが多かったため。
- 2) 教員養成史と教科教育という二つの領域にまたがる分野であるため、研究が着手されにくかったため。
- 3) 師範学校は、歴史的価値も低く、取り立てて研究対象とする分野ではないと認識されていたため。

(師範学校は、1951(昭和26)年3月に廃止された。しかし、1985(昭和60)年頃までは、師範学校の卒業生が各都道府県の教育界において中心的な存在であった。また、同時期までの大学の教官には、師範学校の元教員や卒業生が存在した。)

- 4) 戦後、師範学校を前身とする教員養成大学では、中等学校の教員養成が重視され、初等教員の養成方法を教科教育の視点から総体的、歴史的に研究しようとする意識が低かったため。

(小学校教員養成の方法は、担当教官の専門分野の内容を薄めて講義すればよいという考え方があったように、あまり重要視されてこなかった傾向があった¹⁵⁾。)

山田昇は、「師範教育は日本の近代教育に何をもたらしたのか、師範教育が培ったものは何であったのか、教師の専門的知識技能の育成について寄与したところをどのように評価するか、そのことを改めて吟味すること」を今後の課題として投げ掛けている¹⁶⁾。一方、横須賀薫は、「今や師範学校が近代日本の建設にどんな役割を果たしたのか、そのプラスとマイナスを冷静に計量できる時期が来ていると思う」と述べる¹⁷⁾。本研究では上記の指摘を受け、師範学校の実践そのものをつぶさにみていきたい。

ここで音楽教育に目を向けてみると、前述の坂本は、明治期における師範学校の音楽教育が果たした役割について以下のように捉える¹⁸⁾。

師範学校は、地域における西洋音楽振興の拠点となり、師範学校の音楽教員は、西洋音楽の伝道師として、赴任し、歌や楽器の演奏技術を教授した。

日本において西洋音楽が根付いたのは、＜昭和前期＞といわれている¹⁹⁾。また、初等教育において「唱歌」教育ではなく、「音楽」教育が開始されたのは1941(昭和16)年である²⁰⁾。これまでの教育史の歴史区分では、戦前、戦後で捉えるのが一般的であったのに対し²¹⁾、音楽教育学を専門とする山本文茂は、「戦後日本音楽教育史の重大な画期は、戦後学習指導要領＜試案期＞から始まるのではなく、1941(昭和16)年の芸能科音楽にその本質的起点を求めるべき」と主張する²²⁾。このように、＜昭和前期＞というのは、西洋音楽の普及、学校音楽教育

の拡大、戦後の教育との連結といった意味において非常に重要な時期に当たる。師範学校はこれらの動向に密接に関わっていたため、この時期の研究にとって師範学校は、欠かすことができない。

ところで、先述の国民学校「芸能科音楽」に関しては、本多佐保美・西島央等により、当時の実態が鮮明になってきた²³。研究手法の特徴として、文献資料に基づく制度史的な視点の他、子どもや教師へのアンケート調査やインタビュー調査を採った点は注目される。この方法を採ることによって、当時行われていた指導法や子どもや教師の意識等をつかむことができ、制度と実態との乖離を防ぐことができる。したがって、本研究でも研究方法の一つとして聞き取り調査を取り入れていきたい。

子どもは、教師によって変わる。また、教師は養成される段階で受けてきた音楽教育によって、音楽の授業の内容も変わる。先述の通り、師範学校は1951（昭和26）年3月に廃止された。しかし、そこで育った教師たちの力が戦後の教育を支えたといっても過言ではない。専ら初等教員の養成を担ってきた師範学校における音楽教育実践を検討することは、教員養成史、音楽教育学の両分野にとって必要ではなかろうか。また、＜実践＞が声高に叫ばれている今日こそ、冷静な目で師範学校を捉えたい。

以上から、本研究の課題は、昭和前期における師範学校に焦点を当て、当時の社会情勢や学校教育の動向と関連付けながら、師範学校で展開された音楽教育実践について解明していくことである。なお、師範学校で教えた教員や学んだ卒業生たちの年齢も高くなってきた。師範学校の存在を知る世代も減ってきた。このようなこともあり、本研究の課題の解決は急務となっている。

2. 研究の目的・研究対象

本研究の目的は、「師範学校規定」「師範学校教授要目」が改正された1931（昭和6）年4月から敗戦の1945（昭和20）年8月までにおける師範学校の音楽教育実践に関する制度・内容・実態を明らかにすることである。

（1） 対象とする時期

① 時代区分

本研究の対象とする時期は、「師範学校規定」「師範学校教授要目」が改正された1931（昭和6）年4月から敗戦の1945（昭和20）年8月までである。国立教育研究所編『日本近代教育百年史』（1974）で行われている時代区分に基づくと、「戦時期」に該当する。なお、『日本近代教育百年史』では、戦前は以下のように時代区分されている²⁴。

- ・創始期：1872（明治5）年～1879（明治12）年 「学制」以降
- ・模索期：1880（明治13）年～1885（明治18）年 「改正教育令」（第二次教育令）以降

- ・ 確立期：1886（明治 19）年～1896（明治 29）年 「師範学校令」以降
- ・ 整備期：1897（明治 30）年～1917（大正 6）年 「師範教育令」以降
- ・ 展開期：1918（大正 7）年～1930（昭和 5）年 「臨時教育会議」以降
- ・ 戦時期：1931（昭和 6）年～1945（昭和 20）年 満州事変以降

② 戦時期

この時期は「戦時期」として命名されるだけあり、1931（昭和 6）年満州事変、1932（昭和 7）年上海事変、1937（昭和 12）年日中戦争、1940（昭和 15）年第 2 次世界大戦、1941（昭和 16）年太平洋戦争と、1945（昭和 20）年にポツダム宣言を受諾するまで戦争が続く²⁵。これらを一連の戦争とみなして、「十五年戦争」と呼ぶこともある。戸ノ下達也は、日中戦争開戦以後、「あらゆる文化領域で国策協力体制が構築されていった」と分析する²⁶。実際に音楽に関しても「音楽は兵器なり」の掛け声のもと、慰問音楽会等が開催されていた²⁷。

また、この時期の音楽教育の特徴について、木村信之は以下の点を指摘するように、国民学校「芸能科音楽」が発足する重要な時期に当たる²⁸（以下、筆者要約）。

1) 昭和の初期には、以下のような海外教育思想を紹介した音楽教育の理論や指導法に関する著書が数多く刊行され、音楽教育界は、徐々に活況を呈し始めた。ただし、普通教育に広く普及徹底するところまでは至らなかった。

- ・ 青柳善吾…『音楽教育の諸問題』（1923 年、大正 12 年）、『音楽教育』（1927 年、昭和 2 年）、マーセルの『音楽教育の原理』の訳本（1930 年、昭和 5 年）、『音楽教育新思潮』（1931 年、昭和 6 年）、『本邦音楽教育史』（1934 年、昭和 9 年）

※海外の音楽教育と日本の実状を比較考察している。

美学や心理学的な面から音楽教育にアプローチしようとしている。

- ・ 草川宣雄…『唱歌法と発声法』（1922 年、大正 11 年）、「鑑賞を主とした学年別の唱歌教育書全 7 冊」（1929-30 年、昭和 4-5 年）、『最新音楽教育学』（1934 年、昭和 9 年）

※ヨーロッパ、特にドイツの音楽教育理論を取り入れると共に、リズム練習における速度についての心理学的考察、聴音や読譜の史的考察、読譜の心理学的考察、鑑賞教育の史的考察などを試みている。

その他、北村久雄、山本正夫、山本寿、幾尾純らが、実践的な啓蒙書を出した。

2) 小学校の唱歌教科書として、1932（昭和 7）年『新訂尋常小学唱歌』と 1935（昭和 10）年『新訂高等小学唱歌』が、発行された。

3) 1937（昭和 12）年 5 月 6 日から 8 日にかけて「全国初等音楽教育研究大会」が開催され、唱歌科を音楽科にするための改正案、敬虔愛国に資する教材を取り入れること、儀式唱歌の制定などの建議案を決議した。

4)1940（昭和 15）年 5 月 17 日から 21 日にかけて、第 5 回「全国訓導（音楽）協議会」が開催され、1941（昭和 16）年度から発足する国民学校の「芸能科音楽教科書編纂ニ関スル建議案」を審議した。

5)1941（昭和 16）年に施行された国民学校令は、皇国民の錬成を目標に掲げ、絶対主義、軍国主義に徹したものであった。「唱歌」は「芸能科音楽」となり、「芸能科音楽は歌曲を正しく歌唱し、音楽を鑑賞するの能力を養い、国民的情操を醇化するものとす」という目標を掲げた。学習領域を唱歌と鑑賞、器楽に広げたこと、初等科から輪唱や合唱を加えたこと、基礎的な面を考えて体系的にしたこと等は、一つの進歩であった。

なお、この時期、東京音楽学校においては、1933（昭和 7）年に作曲科、1936（昭和 11）年に邦楽科が新設された。また、1933（昭和 8）年に上野児童音楽学園の設置、1942（昭和 17）年に甲種師範科が 3 年制から 4 年制へと延長され、音楽教員養成の機能の充実が図られた。

このような事実から本研究の対象とする 1931（昭和 6）年 4 月から 1945（昭和 20）年 8 月の時期は、戦時下にもかかわらず音楽教育が拡大され、日本音楽教育史上、重要な時期であることが分かる。この時期を「師範学校」という視点から取り上げる理由としては、以下の 4 点が挙げられる。

- ・ 師範学校が官立専門学校程度へ昇格した 1943（昭和 18）年の「師範教育令改正」前後の動向を明らかにすることができる点。
- ・ 1941（昭和 16）年「国民学校令」を受け、「唱歌」から「芸能科音楽」へと変わる、日本の音楽教育史上重要な時期に当り、師範学校がどのような役割を果たしたかについて明らかにすることができる点。
- ・ 戦争等の社会情勢が、師範学校の音楽教育に及ぼした影響について考察できる点。
- ・ 戦後の学制改革につながる時期に当る点（なお、戦後の学制改革については本研究では取り扱わない）。

本研究ではさらに 1943（昭和 18）年 4 月の「師範教育令改正」を境として、以下のように制度上異なる前後二つの時期に区分する。

- ・ 1931（昭和 6）年 4 月～1943（昭和 18）年 3 月 府県立師範学校時代
- ・ 1943（昭和 18）年 4 月～1945（昭和 20）年 8 月 官立専門学校昇格後

（２） 研究の対象校

本研究の対象とする学校は、初等教員養成を担っていた師範学校とし、事例としては、香川師範学校²⁹、岡山師範学校³⁰を主に取り上げる。この 2 校を対象とした理由は以下の通りである。

<香川師範学校>

- ・香川県師範学校本科第二部に「満支方面日本人小学校教員養成師範学校特別学級」（以下「特別学級」と略記）（1939-44）が設置されていたことから、国家主義的な教育が行われていたと考えられる点。

なお、「特別学級」の設置された師範学校の多くが、定員割れをしていた中、香川県師範学校では定員を満たしていた³¹。

- ・公的、私的資料が豊富な点。

『香川大学十年史』³²（1959）、『香川大学三十年史』³³（1980）の他、『香川大学教育学部百年のあゆみ』³⁴（1989）という教育学部独自の大学沿革史が編纂されており、師範学校における音楽教育に関する資料が掲載されている。また、香川師範学校男子部本科・昭和 23 年 3 月卒同窓生『わが香川師範時代』³⁵（1996）のように卒業生の手によって綿密な回想録がまとめられている。

- ・当時の音楽科教員が、現在（2006 年）も生存中であり、聞き取り調査が可能な点。

<岡山師範学校>

- ・岡山県師範学校本科第二部の「増課科目」における音楽の履修率が、全国的に見て非常に高い点³⁶。
- ・岡山県女子師範学校では、『和音感教育』³⁷の著者、佐藤吉五郎³⁸が音楽科教員として勤務していたため、音楽教育が盛んであり、1933（昭和 8）年ごろにはピアノ 20 台設置され、環境面でも恵まれていた点³⁹。

その他、上記以外の師範学校や師範学校の音楽科教員を主として養成していた東京音楽学校甲種師範科についても必要に応じ取り上げる。

なお当時、東京高等音楽学院（現、国立音楽大学）、武蔵野音楽学校（現、武蔵野音楽大学）のように「師範学校、中等学校、高等女学校教員無試験検定許可規定」の認可を受けて、音楽教員養成を行っていた私立の音楽学校も存在した⁴⁰。しかしながら、それらの私立学校と師範学校との関係は薄い。また、教育内容に関しても東京音楽学校に準じた教育を行っていたにすぎず、特筆すべき内容が少ないため、本研究では対象としない。

（３） 資料

本研究で主に対象とする資料は、「師範学校教授要目」（「師範学校教科教授及修練指導要目」）と師範学校音楽教科書である。この他に、文部省関係公文書、法令、雑誌、沿革史、師範学校の音楽教育に関する内容が掲載されている著書等を用いる。本研究が依拠した主な資料を摘記すれば、以下の通りである（使用頻度の高い資料から掲載）。

- ・文部省検定済師範学校音楽教科書、国定師範学校音楽教科書
- ・『小学校・師範学校・中学校・高等女学校検定済教科用図書表』（1886-1912）、『師範学校中学校高等女学校小学校検定済教科用図書表』（1912-1935）、『師範学校中学校高等女学校小学校検定済教科用図書表』（1935-1939）⁴¹

- ・『同声会報』⁴²『学校音楽』⁴³『教育音楽』⁴⁴掲載の師範学校の音楽教育に関する記事
- ・旧師範学校，教員養成大学・学部沿革史，府県教育史，回想録
- ・師範学校における音楽教育に関連する著書
- ・文部省関係公文書
- ・『教育週報』⁴⁵『日本教育』⁴⁶掲載の師範学校に関する記事
- ・『全国師範学校ニ関スル諸調査』⁴⁷（明治40－昭和15年）

「師範学校教授要目」を含めた法令に関しては、『師範教育関係法令の沿革』⁴⁸（1938），『師範教育関係法令の沿革 続篇』⁴⁹（1943），『近代日本教育制度資料』⁵⁰（1956），『明治以降教育制度発達史』⁵¹（1939）を使用する。

「師範学校教科教授及修練指導要目」（1943）については，上記の法令集には所収されていないので，高知大学附属図書館所蔵の文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』⁵²（1943）を用いる。

その他，本研究では＜聞き取り調査＞を実施し，文献調査の補完ならびに師範学校における音楽教育の実態を明らかにする。聞き取り記録はもちろんのこと，調査を通して入手した，当時の講義メモ，授業で使用された楽譜やSPレコード，師範学校音楽教科書に記載されている教師の書き込み，書簡等も資料として扱う。

聞き取り調査の主な対象者は，香川県師範学校（香川師範学校）音楽科教員の金光武義氏，香川県師範学校卒業生の故田山清美氏，香川師範学校卒業生の渋谷清寿氏，岡山師範学校卒業生の岡嶋信夫氏，原卯三次氏である。

香川県師範学校音楽科教員であった金光氏の略歴は，以下の通りである。

金光武義氏の略歴

岡山県第二岡山中学校（現，岡山県立岡山操山高等学校）卒業後，1938（昭和13）年4月に，東京音楽学校甲種師範科入学。1941（昭和16）年3月，東京音楽学校を卒業。香川県師範学校へ勤務。1944（昭和19）年12月，岡山県第一岡山高等女学校（現，岡山県立岡山操山高等学校）へ移る。1951（昭和26）年，岡山大学教育学部へ変わり，現在，岡山大学教育学部名誉教授。

香川県師範学校卒業生の田山氏，香川師範学校卒業生の渋谷氏，岡山師範学校卒業生の岡嶋氏，原氏の略歴については，次の表1の通りである。

表1 聞き取り調査対象者 師範学校卒業生

名前		略 歴
香 川	故田山清美氏	香川県師範学校附属小学校高等科卒業後、1937（昭和12）年4月、香川県師範学校本科第一部へ入学。1942（昭和17）年3月、香川県師範学校本科第一部を卒業。その後、香川県の義務教育学校の教員を務める。 師範学校在学中、1937（昭和12）年度から1940（昭和15）年度まで、鈴木武五郎氏、1941（昭和16）年度、金光武義氏の音楽の授業を受ける。
	渋谷清寿氏	高等小学校卒業後、1943（昭和18）年4月、香川師範学校予科へ入学。1945（昭和20）年4月、本科へ進み、1948（昭和23）年3月、香川師範学校本科を卒業。その後、香川県の義務教育学校の教員を務める。 師範学校在学中、鈴木武五郎氏の音楽の授業を受ける。
岡 山	岡嶋信夫氏	閑谷中学校卒業後、1943（昭和18）年4月、岡山師範学校本科へ入学。1945（昭和20）年9月、岡山師範学校本科を卒業。その後、岡山県の義務教育学校の教員を務める。 師範学校在学中、難波正氏の音楽の授業を受ける。
	原卯三次氏	高等小学校卒業後、1940（昭和15）年4月、岡山県師範学校本科第一部へ入学。1943（昭和18）年4月、岡山師範学校本科へ進み、1945（昭和20）年9月、岡山師範学校本科を卒業。その後、岡山県の義務教育学校の教員を務める。 師範学校在学中、1940（昭和15）年度、森清氏、1941（昭和16）年度、植木忠氏、1942（昭和17）年以降は難波正氏の音楽の授業を受ける。

なお、聞き取り調査は、必ず質問すべき最小限の質問事項を事前に決めた以外は、内容をあらかじめ構成しない自由な形式で行った。その際、ICレコーダーとメモで記録し、文字化した。

上記の他、金光氏の同学年である東京音楽学校甲種師範科 1941（昭和16）年3月卒業生をはじめとして、聞き取り調査を行っているので、その都度紹介していきたい。

3. 先行研究の検討

本研究の主題である「昭和前期の師範学校における音楽教育実践」を扱った総体的な先行研究は、皆無といつてよい。しかし、明治時代を対象とした研究が複数みられる。その他、本研究と部分的に関連する分野における先行研究があるので取り上げたい。以下、「明治時代の師範学校における音楽教育」「教員養成史」「音楽教育史」「教科書」「国民学校」「その他」に分類し、検討を行う。

（1）明治時代の師範学校における音楽教育

明治時代については、山住正巳⁵³（1967）、大畑祥子⁵⁴（1976）、松下直子⁵⁵（1980）、河口道朗⁵⁶（1996）の複数の研究者によって行われている。これらの研究は、東京師範学校、東京女子師範学校における日本で最初に行われたL.W.メーソンの唱歌教育の実践を西洋音楽の受容の視点から分析している。河口道朗は、養成方法の特徴について以下の点を指摘している⁵⁷。

- 1) 初等教員養成段階の教員として学級の唱歌の教授に当る立場において最低の水準で要求される、自己の音楽に関する知識と技術の習得を目指すための教科課程である。

2) 伝統音楽はほとんど無視され、教員の資質および能力としての音楽性の陶冶は専ら近代西洋音楽についての初歩的な知識と技術の習得によって、差し当っての学級での音楽の授業が展開できる程度を目指していた。

ただし、東京師範学校、東京女子師範学校は、1886（明治 19）年に高等師範学校へと改組された学校であるため、本研究の対象としている地方の師範学校とはやや性格の異なる学校ではある。地方の師範学校を取り上げた希少な研究としては、坂本麻実子「明治時代の師範学校への音楽教員の配置」⁵⁸（2000）が挙げられる。坂本は、師範学校への音楽教員の配置という観点から、明治時代における各府県下の師範学校に勤務した音楽教員を調査し、その結果、次の点を指摘している⁵⁹。

- ・師範学校は、地域における西洋音楽振興の拠点となり、師範学校の音楽教員は、西洋音楽の伝道師として赴任し、歌や楽器の演奏技術を教授した。その結果、師範学校を卒業し、東京音楽学校に進学する者も出た。
- ・師範学校の音楽教員は、その前身の音楽取調掛を含め、東京音楽学校で訓練を受けた者が主流で、東京音楽学校なら、卒業生は学科を問わず師範学校に迎えられ、中退者でも採用された。地方の師範学校には、私立の音楽学校出身や師範学校、女子高等師範学校出身の音楽教員もいたが、やはり東京音楽学校卒以外の音楽教員は非主流であったし、彼らが学んだ学校もまた、東京音楽学校卒の音楽教員が教えているのである。

上記の指摘内容が、本研究の対象時期である昭和前期においても継承されているか否かについては、本研究の中で考察したい。

（２） 教員養成史

教員養成史の研究は多数あるので、ここでは昭和前期を対象とした主要な先行研究のみを取り上げる⁶⁰。

- ・対村恵祐「初等教員の養成カリキュラム」⁶¹（1961）
- ・逸見勝亮「戦時体制下における師範学校政策の展開に関する一考察」⁶²（1972）
- ・小沢薫「教育審議会における師範学校制度の改革構想に関する一研究」⁶³（1974）
- ・寺崎昌男「師範学校改革諸案と師範学校の昇格」⁶⁴（1974）
- ・倉沢剛『教育令の研究』（1975）⁶⁵
- ・林三平「教員養成構想の変容と制度の改革」⁶⁶（1979）
- ・篠田弘「戦時教育体制と教員養成」⁶⁷（1979）
- ・倉沢剛『続学校令の研究』⁶⁸（1980）
- ・寺崎昌男・戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育——皇国民「練成」の理念と実践』⁶⁹（1987）
- ・横畑知己「1943 年〈師範教育令〉に関する一考察——師範学校昇格運動とその思想」⁷⁰（1987）
- ・横畑知己「教員養成諸学校」⁷¹（1987）

- ・逸見勝亮『師範学校制度史研究——十五年戦争下の教師教育』⁷²（1991）
- ・佐藤幹男『近代日本教員現職研修史研究』⁷³（1999）
- ・清水康幸『教育審議会の研究 師範学校改革』⁷⁴（2000）

上記の研究は師範学校の制度の変革に着目しているため、学科課程を概観することはあっても、教科の内容にまで踏み込んだ記述は見られない。しかし、横畑、逸見、清水の研究は本研究にとっても論点となる箇所が含まれているので、関連する部分について触れておきたい。

まず横畑は、1943（昭和 18）年に改正公布された「師範教育令」の成立過程およびその歴史的な性格を明らかにしている。その中で横畑は、教育審議会における三国谷三四郎の議論について「制度論」「師範教育の目標としての教師像」「学科課程論」の 3 視点から論じている。横畑は、「学科課程論」の中で三国谷の構想した学科課程の概略を以下のように紹介している⁷⁵。

まず、学科は履修方法の違いによって、大きく共通必修の学科、専攻的学科、一科専修の学科、随意科の 4 種類に分けられる。その中、この学科課程の特徴を示す専攻的学科は、文科的諸学科（国語漢文、地理歴史）を専攻する第一種課程と理科的諸学科（数学、物理化学博物）を専攻する第二種課程に分れる。専攻的学科の履修方法は、第一学年は未分化で、第二学年から部分的に分化が始まり、第三学年で完全に理科、文科に分かれることになっていた。次に、専門分化の程度を専攻的学科の三学年総時間数を取り上げてみておきたい。文科専攻の場合は、専攻科目と非専攻科目の時間数の比が 890 時間対 360 時間、理科専攻の場合が 910 時間対 440 時間となり、専攻科目の割合が相当高い比率を占めている。

上記の三国谷が構想した学科課程を「特殊化専門化」する方法は、1943（昭和 18）年以降の学科課程においても実現されることはなかった。横畑は今後の研究課題について「師範教育主体の動向に着目して新制師範学校教育実態に関する実証的研究（中略）が深められねばならない」⁷⁶と自身で述べている通り、教科教育に関する検討についてはやや不十分である。たとえば上記の引用の部分に関しても、音楽、図画工作、体操といった教科に関する言及が一切見られない。

次に、逸見（1991）は、政府・文部省の施策を示す資料・文献から、1930（昭和 5）年から敗戦までにおける師範学校の制度を軍隊教育と関連付けて明らかにしている。第二章では、本研究の事例の一つである香川県師範学校にも設置されていた「満支方面日本人小学校教員養成師範学校特別学級（大陸科）」について論じている⁷⁷。そこには「満支方面日本人小学校教員養成師範学校特別学級要項」の全文が掲載され、増課科目の音楽は「ラッパ鼓隊及ブラスバンド楽器ノ使用法指揮法ヲ授クルコト」と規定されている。また、逸見は「＜特別学級＞の設置が師範学校の他の課程に対しても大きな影響を与えたことを指摘しなければならない」⁷⁸と述べている。

第四章「師範学校生徒の勤労働員」の 379 ページに掲載されている表 4-11「＜学徒勤労働員ノ徹底強化二伴フ師範学校教育二関スル件＞と＜師範学校規定＞の授業時間総数（師範学校男子部本科）の比較」は、学徒勤労働員に伴う授業時数の削減案が示されているため、本研究にとって重要な資料である。

1943（昭和 18）年の本科の授業時数に関しては、清水康幸（2000）が次のように言及している⁷⁹。

31 年規定の図工・手工。音楽が男女とも 8 時間だったものが、芸能科（音楽・書道・図画・工作）として男子は 17 時間へと倍化し、女子は 14 時間へと増加している。

これについて清水は「新制師範学校で養成されるべき教員資質を、＜専門学校程度＞の教職専門教科とは何かという原理的考察から導かれた教科目編成で養成するというよりは、国民学校の教科目編成の論理に従属させたものであること」⁸⁰と指摘している。しかし、そこでは芸能科の授業時数がなぜ増加したのか、増加された内容は何かといった点については言及されていない。清水は、国定教科書の使用義務付を重要な特徴として捉えている。しかしながら、教科書の内容について「学問の体系からは大きく離れ、かつ国家統制が極限にまで進んだ」⁸¹と論じているものの、各教科書の内容の分析は行っていない。とはいえ、清水の研究は教育審議会発足段階から昇格後の師範学校までを扱った総体的な研究である。本研究の対象時期とも重なり、本研究において基盤となる制度面の内容を網羅した重要な文献である。

その他、師範学校 1 校に焦点を当て、変遷を論じた先行研究として、影山昇⁸²（1974）、阿波根直誠⁸³（1980）、千葉昌弘⁸⁴（1981-88）、柳井久雄⁸⁵（1999）、野村新・佐藤尚子・神崎英紀⁸⁶（2001）、廣畑力⁸⁷（2003）、陣内靖彦⁸⁸（2005）を挙げることができる⁸⁹。

上記の先行研究の成果の中から本研究において関係する重要な事項を整理すると、次の点が挙げられる。

1) 1943（昭和 18）年 3 月「師範教育令改正」により、師範学校は官立専門学校程度へと昇格した。その背景には次の点があった。

- ・国防国家体制確立の基礎ともいうべき国民学校制度の充実のためには、「国家自ラ」教員養成に責任を持つべく官立で専門学校程度の師範学校への改革が必要であったこと。
- ・師範学校入学希望者の激減と質的低下、有資格男子教員の減少による国民学校教育の質的低下という事態が、教育審議会答申段階で是認されていた府県立師範学校という従来の形態を許さないまでの深刻さをもって認識されたこと。
- ・義務教育年限延長が 1944（昭和 19）年度から実施予定であったこと。

2) 師範学校の学科課程は、初等教育の学科課程と密着していた。

3) 1944（昭和 19）年度以降師範学校生徒の勤労働員に伴い、師範学校の制度改革は、ほとんど実質的意味を持ち得なかった。

このように教員養成史は多数あるというものの、制度史が中心となっているため、教科教育の面は手薄になっている。ゆえに、上記の教員養成史研究の成果に基づき、音楽教育の側面を補完するのが本研究の使命である。

（3）音楽教育史

音楽教育史研究の中で部分的に師範学校を取り上げているものがあるので検討したい。当然のことながら、こ

これらの研究は「師範学校における音楽教育実践」を主題とした研究ではないため、師範学校という視点で検討した場合、断片的な内容となっている。

第一には、浜野政雄の「教員養成制度と音楽教育」（1968）を挙げる⁹⁰。浜野は、戦前の小学校教員の養成機関として各地の師範学校、戦前の中等学校・師範学校教員の養成機関として東京音楽学校の二つを挙げ、概説している。特に「師範学校における音楽教育を考えるに当っては、その背景として一般の学校、特に小学校における音楽科がいかに行われてきたかという実態の把握が必要」との貴重な示唆を与えている⁹¹。また、他の研究ではほとんど着目されていない「師範学校教授要目」についても紹介している。しかしながら、師範学校に関しては1931（昭和6）年までしか論じられていない。

第二には、岩上行忍の「鳥取県における音楽教育の変遷——主として鳥取師範学校および鳥取大学の音楽科教員と卒業生について」（1970）を挙げる⁹²。これは、1890（明治23）年から1970（昭和45）年までの鳥取師範学校と鳥取大学教育学部音楽科における教員および卒業生の進路についての変遷を明らかにしたものである。鳥取県という一地域を扱った研究ではあるものの、卒業生名簿、訪問録音テープ等の資料に基づき、緻密に行った研究である。時代区分については以下のように行っている。

第1期：1890（明治23）年～1908（明治41）年 は種期

第2期：1908（明治41）年～1922（大正11）年 発芽期

第3期：1922（大正11）年～1940（昭和15）年 開花期

第4期：1940（昭和15）年～1950（昭和25）年 変動期

第5期：1950（昭和25）年～1959（昭和34）年 第2は種期

上記の中で本研究の対象とする時期に該当するのは、第3期の開花期と第4期の変動期である。この時期について、岩上は次のように述べている⁹³。

<第3期 開花期>

この期間は日本全国のほとんどが音楽教育隆盛期にあたっている。師範学校における音楽教育ばかりでなく高等女学校の音楽教育も向上しはじめ音楽教育担当者が全国に充実した。

<第4期 変動期>

戦前末期から音楽教育面に強く打ち出された音感教育、そして固定ドか移動ドかの論争は、そのまま戦中時代に日本音名改称問題へ進み、あたらしい音名のよびかたが文部省公示として官報に掲載されるまでとなった。

このように岩上は当時の音楽教育の動向を端的に把握しているというものの、音楽教員と卒業生の動向を主眼とした研究であるため、師範学校の音楽教育の内容については深く言及していない。師範学校音楽教科書についても一切取り上げていない。とはいえ、師範学校音楽科教員の出身校や師範学校の卒業生の進学先を明らか

にしているため、師範学校と東京音楽学校甲種師範科との関係性を指摘する重要な先行研究である。

第三には、上原一馬『日本音楽教育文化史』(1988)の第六章「近代」の第九節「教員養成と音楽教育」が挙げられる⁹⁴。「三 東京両師範学校の音楽教育」においては、山住正巳の先行研究⁹⁵(1967)を基に音楽教育の内容の記述が見られる。しかし、それ以外の時代に関しては、文部省『学制百年史』⁹⁶(1972)に掲載されている法令に依拠した記述にすぎず、師範学校の音楽教育の内容が規定されていた「師範学校教授要目」が紹介されていない。また、教科書に関しては、1941(昭和18)年の「師範教育令改正」によって「教科用図書はすべて国定とした」⁹⁷という記述があるのみで、具体的な教科書名が明らかにされていない。とはいえ、「六 教員の資格、免許と検定制度」を最後に置き、師範学校と教員の免許状の関係性を論じた点等があり、当時の教員養成の状況が集約されている⁹⁸。

第四に、平井啓『奈良県音楽近代史——音楽教育を中心に』(1995)を挙げる⁹⁹。これは1872(明治5)年から1945(昭和20)年までにおける奈良県の音楽教育の変遷を学校種ごとに記述した研究である。＜明治＞＜大正＞＜昭和・戦前＞＜昭和・戦時下＞の四区分に分け、使用された教科書や学科課程の内容に関する詳細な記述があり、重要な先行研究である。師範学校だけではなく、奈良女子高等師範学校、小学校(国民学校)等についても豊富な資料に基づいて記述されている。特に第4章「昭和・戦時下」の第3節「国民学校教育と音楽」では、1941(昭和16)年から1943(昭和18)年にかけて開催された「芸能科音楽講習会について」言及している¹⁰⁰。この講習会についてここまで詳細に取り上げた先行研究は他にはない。

あえて難を言うとするれば、「師範学校教授要目」との関係についてほとんど触れていないということと、1943(昭和18)年以降の記述がやや希薄であるということである。また、論文ではないため、資料の掲載に留まっていることである。とはいえ、本研究を進める上で重要な文献の一つである。

(4) 教科書

初等教育の音楽教科書を扱った先行研究としては、以下のものが挙げられる。

- ・唐沢富太郎『教科書の歴史』¹⁰¹(1956)
- ・堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』¹⁰²(1958)
- ・海後宗臣編『日本教科書体系近代編』第二十五巻唱歌¹⁰³(1965)
- ・井上武士「教材・教科書にみる明治一〇〇年の歩み」¹⁰⁴(1968)
- ・仲新・稲垣忠彦・佐藤秀夫『近代日本教科書教授法資料集成』第十巻教師用書6 図工・音楽篇¹⁰⁵(1983)
- ・佐藤秀夫・中村紀久二編『文部省掛図総覧』十 音楽・図工掛図¹⁰⁶(1989)
- ・海後宗臣監修『図説教科書の歴史』¹⁰⁷(1996)
- ・江崎公子「唱歌科と教科書(一)」¹⁰⁸(2004)・「唱歌科と教科書(二)」¹⁰⁹

研究手法に関して述べると、唐沢の歌詞内容の分類法は、しばしば音楽教育研究者の間でも音楽教科書（唱歌教科書）の分析を行う際に参考とされている。唐沢は歌詞の大意に基づき一つの項目に分類する方法を採っている。しかしながら、歌詞の大意が一つの項目に適合するとは限らない場合も生じるため、十分とはいえない。

一方、戸澤義夫は「小学校レベルの唱歌集がその重要なものはすべて刊本になっているのに対して、中学校レベルでは、今迄のところ、そうしたものを見出せない」と述べている。そのような中、財団法人教科書センター『旧制中等学校教科内容の変遷』¹¹⁰（1984）があり、「音楽」の項は、浜野政雄が担当している。ここでは教授要目と関連付けて中学校、高等女学校の教科書の変遷が記されている。しかし、対象を中学校、高等女学校、実業学校に絞っているため、師範学校については取り扱われていない。

なお、以下の目録には中等学校用の音楽教科書が掲載されている。

- 1) 鳥居美和子『教育文献総合目録 第3集 明治以降教科書総合目録Ⅱ 中等学校編』¹¹¹（1985）
- 2) 大阪教育大学附属図書館情報管理係編『大阪教育大学図書館蔵教科書目録 第一集 明治初年から昭和 20 年まで 小学校・中等学校編』¹¹²（1998）
- 3) 森恭子・吉永誠吾「戦前の音楽関係文献目録——熊本大学所蔵」¹¹³（1998）

戸澤は、上記 1)、2)の目録に基づいて中等音楽教科書の資料の整理を図っている¹¹⁴。中でも 1)鳥居の目録は、国立教育研究所附属図書館、東京書籍KK内東書文庫、国立国会図書館に所蔵されている教科書を収録し、緻密である。しかし、上記の図書館に所蔵の目録という性格上、当時発行されていた全教科書が掲載されているわけではなく、例えば黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』（1938）は掲載されていない。同様なことは、2)、3)の目録でもいえる。

その他、別府愛「福井直秋の教育活動と当時の教育状況——師範学校の教育を中心にして」（2000）の中にも師範学校音楽教科書が紹介されている¹¹⁵。しかし、『福井直秋解題』（2000）という中に収蔵された論文という性格から、福井直秋が著した教科書のみしか扱っていない。

さらに、木村信之が橋本清司に対して行ったインタビュー記録の中で、国定教科書である『師範音楽 本科用巻一』¹¹⁶（1943）と『師範器楽 本科用巻一』¹¹⁷（1943）に関する内容が、含まれている（『音楽教育の証言者たち 上 戦前を中心に』¹¹⁸1986）。これらの国定教科書に関する編纂者、編纂の様子が明らかにされている唯一の資料であり、非常に重要なデータである。これらの国定教科書の性格、構造については本研究で明らかにしていきたい。

（５） 国民学校

国民学校における音楽教育に関する研究は、近年、急速に進みつつある。主なものは以下の通りである。

<制度>

- ・水島昭男「『国民学校』時代の音楽教育」¹¹⁹ (1973)
- ・佐藤敏雄「国民学校の音楽教育」¹²⁰ (1977)
- ・河口道朗「軍国主義と音楽教育」¹²¹ (1983)
- ・権藤敦子「芸能科音楽の成立経緯」¹²² (1999)
- ・山本文茂「芸能科音楽の理念と内容——法令条文の解釈を中心に」¹²³ (1999)

<教科書>

- ・近藤幹雄「国民学校芸能科音楽教師用書の成立」¹²⁴ (1983)
- ・宮瀬重美「『国民学校』時代の音楽教育について」¹²⁵ (1984)
- ・山本文茂「芸能科音楽教材の特質——教科書・教師用指導書の分析を通して」¹²⁶ (1999)
- ・赤井励「唱歌の終焉」¹²⁷ (2000)
- ・菅道子「『ウタノホン上』『うたのほん下』『初等科音楽』」¹²⁸ (2004)

<実態>

- ・本多佐保美「芸能科音楽の指導実践——「総合授業」の授業細目の検討」¹²⁹ (1999)
- ・西島央「児童からみた国民学校芸能科音楽——音楽教育の歴史の読み直しに向けて」¹³⁰ (2000)
- ・藤井康之「国民学校期における音楽指導の実際——東京女子高等師範学校附属国民学校と青森市立新町国民学校の教師を中心に」¹³¹ (2000)
- ・本多佐保美「国民学校期における音楽教育の受容——東京女高師附属国民学校と青森市立新町国民学校の卒業生へのインタビュー調査に基づいて」¹³² (2000)
- ・本多佐保美・国府華子「国民学校期における鑑賞教材の音楽内容に関する一考察——教師用指導書と音盤の分析を中心に」¹³³ (2000)
- ・本多佐保美・藤井康之・中里南子・勝谷祥子・幸山良子「誠之国民学校における音楽授業の諸相——学校所蔵文書とアンケート調査にもとづく実践史の試み」¹³⁴ (2003)
- ・本多佐保美代表『音楽教育史研究における制度・教師・学習者の関係性の探究——国民学校時代の音楽教育体験者の聞き取り調査に基づいて』¹³⁵ (2004)
- ・菅道子「国民学校における芸能科音楽のカリキュラム編成」¹³⁶ (2004)

国民学校の「芸能科音楽」の最大の特徴は、歌唱だけではなく、鑑賞、器楽等の領域が取り扱われるようになったことである。実際の実践について、本多らは東京の誠之国民学校、菅は明石女子師範学校附属国民学校を事例に挙げ、音楽学習の領域の拡大を指摘している。しかし、これらの事例は先進校であり、一般の国民学校では実態が異なったのではないかと推察する。西島も、「芸能科音楽の実際の授業で扱われた領域として、聴音練習は一定程度普及していたが、鑑賞や器楽はかなり実施率が低かった」と言及する¹³⁷。

国民学校の児童用の教科書ならびに教師用指導書については、複数の研究者によって分析が行われ、明らかにされている。以下は、菅が執筆した『日本音楽教育事典』から引用したものである¹³⁸。

- 1) 児童の特性を配慮し、表紙および挿絵が色塗り（初等科音楽からは単色）となり美しく親しみやすいものとなっている。
- 2) 巻頭に＜儀式唱歌＞が掲載され、儀式、学校行事との関連性が重視されている。
- 3) 巻末の和音練習と練習用五線譜は聴覚訓練と視唱訓練を目的としており、重要な指導領域とされている。
- 4) 歌唱教材は各学年 20 曲ずつで、児童用書には記されていないが 8 曲ずつの必修教材が設定された。
- 5) 調については、＜わが国芸術技能の特質＞を知らしめるとして日本音階の曲が多数取り入れられている。
- 6) 拍子は 4 分の 2 拍子、4 分の 4 拍子が多く、4 分の 3 拍子は各学年 2-4 曲程度である。
- 7) 曲の形態は単音唱歌だけでなく、合唱、輪唱が加えられている。
- 8) 曲の長さは、子どもの歌いやすさという点から比較的短いものにする方針が打ち出された。
- 9) 教師用書については、指導の具体的な目標から、歌詞の解釈、表現の内容方法にいたるまで詳細に記述されており、それらが国定基準として規定されていた。

国民学校の教科書は、師範学校でも使用されることがあったため、上記の指摘は本研究においても重要な内容である。本研究でも考察を行う際に上記で明らかになった成果に拠る部分がある。

（6） その他

朴成泰『韓国近代学校における民族主義教員養成の成立過程』¹³⁹（1996）、劉麟玉『植民地下の台湾における学校唱歌教育の成立と展開』¹⁴⁰（2005）といった当時日本の植民地であった国を対象とした研究の中に、日本の師範学校に関する記述が若干含まれている。

その他、『日本音楽教育事典』では「師範学校」の項が設けられ、長谷川慎が執筆している¹⁴¹。しかしながら、記載内容が明治時代の制度の概観に留まっている。

（7） まとめ

最初に述べた通り、「昭和前期の師範学校における音楽教育実践」を扱った先行研究はないため、先行研究の問題点を指摘し、論を構想するという手法をとることができない。そのため本研究では関連する法令の分析、教科書の収集整理といった初歩的な作業から開始する必要がある。しかし、師範学校の制度に関しては、すでに「教員養成史」の先行研究の蓄積が厚いため、それらで明らかにされた成果に基づき、論を展開していきたい。

なお、本論を展開していく中でここでは取り扱っていない分野の先行研究もある。それらに関しては、その都度取り上げ、検討することにした。

本研究の論点については以下のように設定した。

第一に、中等学校程度であった師範学校が、1943（昭和 18）年の「師範教育令改正」を受け、「官立専門学校程度」へと昇格を果たす。その昇格に伴い、音楽教育の内容も充実したか、否か。また、師範学校において求められていた音楽教育実践の内容は何であったのか。

第二、1941（昭和 16）年、国民学校において「芸能科音楽」が発足したことを受け、国民学校の音楽教育の内容には鑑賞や器楽等が加えられた。師範学校における音楽教育は、国民学校「芸能科音楽」発足に伴い、どのような対応を行ったか。

第三に、本研究の対象とする 1931（昭和 6）年から 1945（昭和 20）年までの間は、戦時期にあたり、社会全体が戦争協力を強いられていた。そのような中、師範学校における音楽教育も影響を受けたのだろうか、否か。とりわけ歌唱教材の歌詞等ではどうだったのだろうか。

4. 研究の視点と方法

西島央は、権藤（浜松）敦子¹⁴²や岩崎洋一¹⁴³の先行研究を評価しつつも、従来の音楽教育史研究の大部分が「上からの視点」（＝音楽教育や公定イデオロギーの生産者）をもって、制度や言説レベルにおける検討に留まっていると指摘する¹⁴⁴。また、江利川春雄は、「戦前では文部省法令と現場の実態との乖離は珍しくなく、中央法令のみから演繹的に各校の実状を推測することは危険である」と述べる¹⁴⁵。

このような西島、江利川の言及を生かし、本研究では、師範学校における音楽教育実践を＜制度＞＜内容＞＜実態＞の三つの側面から考察する。

本研究は、全体を以下のように 2 部構成とし、第Ⅰ部で制度、第Ⅱ部で内容と実態を取り上げる。

第Ⅰ部：師範学校における制度の変遷と音楽教育

第Ⅱ部：師範学校における音楽教育実践：教科書分析と聞き取り調査

各部の研究の視点と方法は以下の通りである。

第Ⅰ部：師範学校における制度の変遷と音楽教育

第Ⅰ部では、師範学校における制度の変遷の中で音楽教育がどのように位置付けられてきたかを明らかにする。

研究方法としては、「師範学校規定」「師範学校教授要目」等の法規の分析と検討をし、学科課程の特徴、音楽の授業時数、「師範学校教授要目」等に定められている音楽の内容の特徴を明確にすることである。

具体的な作業としては、本研究の対象時期以前の 1872（明治 5）年から 1930（昭和 5）年までの師範学校にお

ける音楽教育の変遷を概観する。その上で本研究の対象とする 1931（昭和 6）年から 1942（昭和 17）年については、

- ・府県立師範学校時代 1931（昭和 6）年 4 月－1943（昭和 18）年 3 月
- ・官立専門学校昇格後 1943（昭和 18）年 4 月－1945（昭和 20）年 8 月

に分け、検討する。その際、官立専門学校程度昇格という制度変革が、音楽教育に関してどのような影響を与えたかについても考察する。

第Ⅱ部：師範学校における音楽教育実践：教科書分析と聞き取り調査

第Ⅱ部では、師範学校における音楽教育実践の内容と実態を明らかにする。

研究方法としては、師範学校音楽教科書の変遷を概観した後、「歌唱」「発声」「器楽」「鑑賞」「聴覚訓練」の領域ごとに、「師範学校教授要目」（「師範学校教科教授及修練指導要目」）の検討と、師範学校音楽教科書の分析を行う。また、師範学校音楽教科書を実際に使って行われた実践事例についても考察する。

具体的な作業として第一には、1942（昭和 17）年以前に発行された文部省検定済師範学校音楽教科書と 1943（昭和 18）年に発行された国定師範学校音楽教科書を一覧に集約し、師範学校音楽教科書変遷の動向を明らかにする。

第二には、「師範学校教授要目」「師範学校教科教授及修練指導要目」や師範学校音楽教科書等の中で、「歌唱」「発声」「器楽」「鑑賞」「聴覚訓練」の 5 領域がどのように扱われていたかを明らかにする。ここでは以下の二つの視点から分析と検討を行う。

- ・師範学校における音楽教育は、1941（昭和 16）年の国民学校芸能科音楽発足に伴い、どのような対応を行ったか。
- ・戦争の影響を受け、音楽教科書の軍用化の傾向がみられるか、否か。

文部省検定済師範学校音楽教科書に関しては、比較的多くの師範学校で使用されていた以下の教科書を分析対象とする。

- ・真篠俊雄編『改訂初等オルガン教科書』（1930）
- ・福井直秋編『師範音楽教本 二部用』（1932）
- ・黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』（1938）

国定師範学校音楽教科書については、以下の2冊が発行されたのみである。これらについても分析対象とする。

- ・『師範音楽 本科用巻一』（1943）
- ・『師範器楽 本科用巻一』（1943）

第三には、師範学校の元音楽科教員と卒業生対象に聞き取り調査を実施し、彼らの証言を基に実践事例を考察する。考察の視点は以下の通りである。

- ・師範学校音楽教科書がどのように使用されていたのか。
- ・「歌唱」「発声」「器楽」「鑑賞」「聴覚訓練」の各領域の指導がどのような内容であったのか。

5. 用語の設定

（1） 「師範学校」

「師範学校」について『新教育学大事典』（1990）には「狭義には1943（昭和18）年までは公立で中等学校程度の学校であり、その時点で官立の専門学校程度の学校となった初等学校教員養成機関をさす。しかし、広義には明治初期の官立師範学校や教員伝習所等、1886（明治19）年以降の高等師範学校等の教員養成機関をも含む」と二つの解釈が掲載されている¹⁴⁶。本研究では前者の狭義の意味で「師範学校」の用語を使用する。なお、「師範学校」は、1872（明治5）年5月から1873（明治6）年7月までにおいて、東京師範学校の名称が使用される前の固有名詞でもある。この場合については、校名として認識できるよう文脈の中で明確にしていきたい。

また、師範学校は、1943（昭和18）年3月の「師範教育令改正」を受け、4月から官立専門学校程度へと昇格すると同時に校名が改められている。香川県師範学校、香川県女子師範学校を例に挙げると次のようになる。

香川県師範学校 → 香川師範学校男子部
香川県女子師範学校 → 香川師範学校女子部

本研究では原則としてその時期に呼ばれていた校名を使用する。ただし、時期を特定しないで使用する場合は、昇格後の名称を用いる。

同様な問題は初等教育でも生じる。小学校は1941（昭和16）年の「国民学校令」を受け、国民学校と改称される。「唱歌」は「芸能科音楽」と改編される。これらの場合に関しても、師範学校と同じくその時期に呼ばれていた名称を使用する。小学校、国民学校を総称する場合は、先ほど使用したように初等教育という用語を用いたい。

なお、師範学校では1886（明治19）年の「尋常師範学校学科程度ノ事」においてすでに「音楽」という学科目
が使用されている¹⁴⁷。したがって、本研究では「師範学校における音楽教育実践」という用語を用いる。

（2） 「師範学校教授要目」

冒頭で述べた通り、「師範学校教授要目」によって教科の内容は示されていたので、本研究では頻繁にこの法規
を取り扱う。「師範学校教授要目」は、1910（明治43）年に制定された後、1925（大正14）年、1931（昭和6）
年、1937（昭和12）年に改正される。また、師範学校の1943（昭和18）年昇格時は、「師範学校教科教授及修練
指導要目」が制定される。

「師範学校教授要目」と「師範学校教科教授及修練指導要目」は、法規の名称が異なるものの、同一の性格の
ものである。本研究においても、1910（明治43）年の「師範学校教授要目」から1943（昭和18）年の「師範学
校教科教授及修練指導要目」を一貫した流れで捉えることが多い。その場合、例えばタイトルとして、＜「師範
学校教授要目」「師範学校教科教授及修練指導要目」における歌唱指導＞と名付けるのが正確であろう。しかし、
あまりにも長く、ほぼ同じ性格の法規ということもあるので、タイトル等では後を省略して＜「師範学校教授要
目」等における歌唱指導＞と省略して使用する。なお、個々の法規を指す場合には、正式な名称を用いている。

その他、説明の要する用語を使用する場合には、その都度、注等で補足したい。

- 1 「教員養成分野における専門職大学院の活用について（専門職大学院ワーキンググループにおける審議経過（素案）」中央教育審議会，初等中等教育分科会教員養成部会，専門職大学院WG（第6回），2005年6月6日。
その他，2005年10月17日の『朝日新聞』朝刊には，「教員の資質向上を図るため，文部科学省は教員免許を取るのに必要な大学の教職課程に「教職実践演習」の科目を新設して必修化する方針を固めた」と報じられている。
- 2 「戦前の師範学校制度と戦後の教員養成制度とを分かち最も基本的な特徴は，それが，（一）大学において，（二）開放制の原則にもとづいて行われるようになったという点であった」（海後宗臣編『教員養成』戦後日本の教育改革第八巻，東京大学出版会，1971年（1976年重版使用），546頁）。
山田昇「大学における教員養成」と教員養成の研究『教育学研究』第54巻第3号，日本教育学会，1987年，247-257頁。
- 3 <http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/press/pr030911s.htm>
- 4 <http://www.kyouiku.city.suginami.tokyo.jp/news/pdf/kyoiku.pdf>
- 5 <http://www.asahi.com/kansai/news/OSK200510060012.html>
- 6 教員養成系学部等の入学定員の在り方に関する調査研究協力者会議『教員分野に係る大学等の設置又は収容定員増に関する抑制方針の取扱いについて（報告）』2005年，6頁。その他，以下の研究を参考とした。山崎博敏『教員採用の過去と未来』玉川大学出版部，1998年，67-87頁。山崎博敏「21世紀における学校教員の養成と確保——教員需要の変動と計画養成」『教育学研究』第70巻第2号，2003年，204-211頁。
- 7 中島太郎編『教員養成の研究』第一法規，1961年。
- 8 水原克敏『近代日本教員養成史研究——教育者精神主義の確立過程』風間書房，1990年（1991年の重版使用）。
- 9 三好信浩『日本師範教育史の構造——地域実態史からの解析』東洋館出版社，1991年。
- 10 山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会，1967年（1979年重版使用）。
- 11 河口道朗『近代音楽教育論成立史研究』音楽之友社，1996年。
- 12 坂本麻実子「明治時代の師範学校への音楽教員の配置——東京音楽学校卒業生の勤務校の調査から」『富山大学教育学部紀要』第54号，富山大学教育学部，2000年，49-61頁。
- 13 森恭子・吉永誠吾『戦前の音楽関係文献目録——熊本大学所蔵』熊本大学教育実践研究第15号，1998年，171-177頁。
また，吉永には次の研究がある。吉永誠吾『音楽教員養成制度——カリキュラムおよび教授内容についての一考察』東京芸術大学大学院音楽研究科修士論文，1977年。
- 14 「師範学校の学科課程は国家的基準のもとに詳細に規制され，各学科教育の系統も制度として定められ，その内容は教授

- 要目と検定教科書によって画一化されていた。また、小学校の学科課程に照応しつつ小学校教員として間にあう教養という観点から、学科課程が構成されていた。つまり、小学校の教科に対応した全科の準備教育が教職教育であり、「教育」科教育には教育者精神の涵養などが期待されたのである」(山田昇「学科課程の改革」海後宗臣編『教員養成』戦後日本の教育改革第八巻、東京大学出版会、1971年(1976年重版使用)、140頁)。
- 15 奥忍「「コールユーブンゲン」を用いた場合」『昭和60・61年度教育方法等改善経費による小学校教員養成課程教科専門「音楽」におけるソルフェージュの学習方法の現代化』奈良教育大学、1987年、35頁。
林竹二「小学校教員養成のための教育における二、三の問題点と改善の方向について(私見)」日本教育学会大学教育研究委員会編『宮城教育大学の大学改革』1974年、46-48頁。
- 16 山田昇「師範学校」『新版現代学校教育大事典』3、ぎょうせい、2002年、412頁。
- 17 横須賀薫「教員養成専門大学の必要性と可能性」日本教育大学協会『会報』第84号、2002年6月、1頁。
- 18 坂本麻実子「明治時代の師範学校への音楽教員の配置——東京音楽学校卒業生の勤務校の調査から」『富山大学教育学部紀要』第54号、富山大学教育学部、2000年、49-61頁。
- 19 「ヴァイオリン、ハーモニカ、オルガン、ピアノをはじめ、大正琴等の音律を固定された西洋(風)楽器の普及、ラジオ放送の開始、商業ペースのレコード販売と共に、大衆の求める歌い方も徐々に変化していった」(奥忍「中山晋平の流行歌はどのように歌われていたか——松井須磨子、後藤紫雲、佐藤千代子の場合」『奈良教育大学紀要』第37巻第1号(人文・社会)、1988年、47頁。Shinobu OKU Changes of Temperaments in Japan before the Second World War, The First International Conference on Music Perception and Cognition, Japanese Society for Music Perception and Cognition, 1989, pp.175-178)。
「1926年のラジオ放送の開始、レコードと蓄音器の普及といったメディアの発達、映画やダンスホールなど都市大衆文化の広がりとも連動して大衆歌謡や軽音楽の流行という形でさらに国民各層に洋楽を広め、大衆娯楽としての性格をも併せもつこととなった」(戸ノ下達也「音楽による国民教化動員——演奏家協会、日本音楽文化協会の活動から」『立命館大学人文科学研究所紀要』1999年、82頁)。
- 20 1941(昭和16)年3月14日「国民学校施行規則」(文部省令第四号)第十三条(石川謙代表『近代日本教育制度史料』第二巻、大日本雄弁会講談社、1956年、234頁)。
- 21 木村元は次のように捉えている。「戦時下の教育がどのようなものであるかを押さえることが今日に至る教育を捉えるためには欠かせないという認識が共有され、理念・制度的な側面での戦前・戦後の教育の断絶を強調するだけでなく、社会構造と教育認識に着目する広い対象認識(時期区分)が求められることになった」(木村元「戦時下の教育史研究の動向と課題——近年の教育科学運動研究に注目して」藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学編『教育史像の再構築』教育学年報6、世織書房、1997年、200頁)。
- 22 山本文茂「芸能科音楽教材の特質——教科書・教師用指導書の分析を通して」浜野政雄監修『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社、1999年、290頁。
- 23 本多佐保美代表『音楽教育史研究における制度・教師・学習者の関係性の探究——国民学校時代の音楽教育体験者の聞き取り調査に基づいて』平成13年度～平成15年度科学研究費補助金(基盤研究B1)、2004年。
- 24 国立教育研究所『日本近代教育百年史』第三巻 学校教育1、1281-1375頁。第四巻 学校教育2、1403-1521頁。第五巻 学校教育3、1325-1447頁。
- 25 山中恒『アジア・太平洋戦争史』岩波書店、2005年。
- 26 戸ノ下達也「音楽による国民教化動員——演奏家協会、日本音楽文化協会の活動から」『立命館大学人文科学研究所紀要』73号、立命館大学人文科学研究所、1999年、98頁。
- 27 高橋巖夫『昭和激動の音楽物語』葦書房有限会社、2002年、2頁。
- 28 木村信之「教育思潮を背景にした音楽教育の流れ」『音楽教育研究』4、音楽之友社、1968年、35-41頁。木村信之『音楽教育の証言者たち 下 戦後を中心に』音楽之友社、1986年、248-255頁。
- 29 香川県師範学校を扱った先行研究としては以下のものが挙げられる。ただし、本研究の対象とする時期とは異なり、いずれも明治期である。
・熊野勝祥『香川県明治教育史』香川県図書館学会・香川県中学校社会科研究会、2000年。
・嶋田由美「戦前の高等女学校の音楽教育実践——大阪府立大手前高等女学校における牛屋リョウの実践を中心として」『関西楽理研究XXII』関西楽理研究会、2005年、1-16頁。
- 30 岡山県師範学校を扱った先行研究としては以下のものが挙げられる。いずれも対象時期は明治期である。
・竹田宏子「岡山県の師範学校における保育者養成史の研究(第一報)」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』第38巻第1部、中国四国教育学会、1992年、78-83頁。
・竹田宏子「岡山県の師範学校における保育者養成史の研究(第二報)」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』第39巻第1部、中国四国教育学会、1993年、82-87頁。
・神立春樹『明治高等教育制度史論』御茶の水書房、2005年。
- 31 逸見勝亮『師範学校制度史研究——十五年戦争下の教師教育』北海道大学図書刊行会、1991年、145-146頁。
- 32 香川大学編『香川大学十年史』1959年。
- 33 香川大学30年史編集委員会編『香川大学三十年史』1980年。
- 34 香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会編『香川大学教育学部百年のあゆみ』1989年。
- 35 香川師範学校男子部本科・昭和23年3月卒同窓生『わが香川師範時代』1996年。
- 36 文部省『全国師範学校ニ関スル諸調査』。
- 37 佐藤吉五郎『和音感教育』三喜堂、1940年。

- 38 佐藤吉五郎, 1902 年-1991 年。木村信之『音楽教育の証言者たち上 戦前を中心に』音楽之友社, 1986 年, 187 頁。
- 39 岡山県女子師範学校『記念誌岡山県女子師範学校』校友会, 1932 年。
- 40 上原一馬『日本音楽教育文化史』音楽之友社, 1988 年, 273-274 頁。大谷奨「中等教員無試験検定取り扱いの許可過程に関する研究——審査における復命書の視点」『日本教育史研究』第 21 号, 日本教育史研究会, 2002 年, 1-24 頁。船寄俊雄, 無試験検定研究会編『近代日本中等教員養成に果たした私学の役割に関する歴史的研究』学文社, 2005 年, 416 頁。
- 東京高等音楽学院については以下の研究が詳しい。
- ・渋谷久子「東京高等音楽学院の研究」『研究紀要』第 22 集, 国立音楽大学, 1988 年, 262-233 頁。
 - ・渋谷久子「東京高等音楽学院史の研究 (二)」『研究紀要』第 23 集, 国立音楽大学, 1988 年, 196-74 頁。
 - ・渋谷久子「東京高等音楽学院・国立音楽学校史の研究」『研究紀要』第 24 集, 国立音楽大学, 1990 年, 230-208 頁。
- 武蔵野音楽学校については以下の研究が詳しい。
- ・福井直秋伝記刊行会, 加藤成之編『福井直秋伝』1969 年。
- 41 文部省図書局編『小学校・師範学校・中学校・高等女学校検定済教科用図書表』1886-1912 年。文部省図書局編『師範学校中学校高等女学校小学校検定済教科用図書表』1912-1935 年。文部省図書局編『師範学校中学校高等女学校小学校検定済教科用図書表』1935-1939 年 (上記の 3 冊は国立国会図書館蔵)。なお, 1940-45 年については, 中村紀久二編『検定済教科用図書表』教科書研究資料文献第九集 七 (文部省「師範学校・中学校・高等女学校・実業学校・小学校 至昭和十二年四月至昭和十二年四月至昭和十九年十二月, 付: 不認定図書表」1986 年, 国立国会図書館等所蔵本の復刻版を使用)。
- 42 同声会編集部編『同声会報』1930-1942 年 (国立音楽大学附属図書館, 東京芸術大学附属図書館所蔵)。
- 43 学校音楽研究会編『学校音楽』共益商社書店, 1933-1941 年 (東京芸術大学附属図書館所蔵)。
- 44 日本教育音楽協会編『教育音楽』日本教育音楽協会, 1923-40 年 (東京芸術大学附属図書館所蔵)。
- 45 『教育週報』教育週報社, 1925-1944 年 (大空社, 1986 年復刻版使用)。
- 46 『日本教育』国民教育図書, 1941-1947 年 (岡山大学附属図書館所蔵)。
- 47 文部省普通学務局編『全国師範学校ニ関スル諸調査』1907 (明治 40) -1940 (昭和 15) 年 (佐々木享監修, 文部省教育統計・調査資料集成, 第一巻-第九巻, 大空社, 1987 年復刻版使用)。
- 48 文部省教育調査部『師範教育関係法令の沿革』1938 年。
- 49 文部省総務局調査課『師範教育関係法令の沿革 続篇』1943 年 (文部省調査部調査資料第十集, 湘南堂書店, 1981 年復刻版を使用)。
- 50 石川謙代表『近代日本教育制度資料』1956 年 (野間教育研究所蔵)。
- 51 教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史』第 1 巻-第 12 巻, 1938-1939 年。
- 52 文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943 年 (高知大学附属図書館所蔵)。
- 53 山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会, 1967 年 (1979 年重版使用), 64-67 頁。
- 54 大畑祥子「両師範・学習院における音楽教育」東京芸術大学音楽取調掛研究班編『音楽教育成立への軌跡』音楽之友社, 1976 年, 387-400 頁。
- 55 松下直子「音楽取調掛での唱歌教員養成」田甫桂三編『近代日本音楽教育史 I』学文社, 1980 年, 144 頁。
- 56 河口道朗『近代音楽教育論成立史研究』音楽之友社, 1996 年, 183-213 頁。
- 57 河口道朗『近代音楽教育論成立史研究』音楽之友社, 1996 年, 186-187 頁。
- 58 坂本麻実子「明治時代の師範学校への音楽教員の配置——東京音楽学校卒業生の勤務校の調査から」『富山大学教育学部紀要』第 54 号, 富山大学教育学部, 2000 年, 49-61 頁。
- 59 同上, 53 頁。
- 60 その他, 次の先行研究がある。阿波根直誠『沖縄県の戦前における師範学校を中心とする教員養成についての実証的研究』昭和 54 年度科学研究費補助金 (一般研究 B), 1980 年。千葉昌弘「高知県教員養成史研究ノート (Ⅷ) ——大正末~昭和戦前期における高知県の教育及び教員養成」『高知大学教育学部研究報告』第 1 部第 40 号, 高知大学, 1988 年, 99-127 頁。野村新・佐藤尚子・神崎英紀『教員養成史の二重構造的特質に関する実証的研究——戦前日本における地方実践例の解明』溪水社, 2001 年。
- 61 対村恵祐「初等教員の養成カリキュラム」中島太郎編『教員養成の研究』第一法規出版, 1961 年, 119-141 頁。
- 62 逸見勝亮「戦時体制下における師範学校政策の展開に関する一考察」『北海道大学教育学部紀要』第 19 号, 北海道大学教育学部, 1972 年, 111-126 頁。
- 63 小沢薫「教育審議会における師範学校制度の改革構想に関する一研究」『弘前大学教育学部紀要』第 32A, 弘前大学教育学部, 1974 年, 11-24 頁。
- 64 寺崎昌男「師範学校改革諸案と師範学校の昇格」中内敏夫・川合章編『日本の教師 6 教員養成の歴史と構造』1974 年。
- 65 倉沢剛『教育令の研究』講談社, 1975 年。倉沢剛『続学校令の研究』講談社, 1980 年。
- 66 林三平「教員養成構想の変容と制度の改革」仲新監修『学校の歴史 第 5 巻 教員養成の歴史』第一法規出版, 1979 年, 60-76 頁。
- 67 篠田弘「戦時教育体制と教員養成」仲新監修『学校の歴史 第 5 巻 教員養成の歴史』第一法規出版, 1979 年, 77-92 頁。
- 68 倉沢剛『続学校令の研究』講談社, 1980 年。
- 69 寺崎昌男・戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育——皇国民「練成」の理念と実践』1987 年。
- 70 横畑知己「1943 年<師範教育令>に関する一考察——師範学校昇格運動とその思想」日本教育学会『教育学研究』第 54 巻第 3 号, 1987 年, 258-267 頁。

- 71 横畑知己「教員養成諸学校」寺崎昌男、戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育——皇国民「練成」の理念と実践』東京大学出版会、1987年、142-168頁。
- 72 逸見勝亮『師範学校制度史研究——十五年戦争下の教師教育』、前掲書。
- 73 佐藤幹男『近代日本教員現職研修史研究』風間書房、1999年。
- 74 清水康幸『教育審議会の研究 師範学校改革』野間教育研究所紀要第42集、2000年。
- 75 横畑、前掲書、15頁。
- 76 同上、18頁。
- 77 その他、平田宗史が福岡県師範学校に設置された大陸科の実態について考察している（平田「福岡県教員養成史研究（九）」『福岡教育大学紀要』第34号第4分冊、福岡教育大学、1984年、111-118頁）。
- 78 逸見、前掲書、143頁。
- 79 清水、前掲書、526頁。
- 80 同上。
- 81 同上、531頁。
- 82 影山昇『愛媛県師範教育の歴史』青葉図書、1974年。
- 83 阿波根直誠代表『沖縄県の戦前における師範学校を中心とする教員養成についての実証的研究』昭和54年度科学研究費補助金（一般研究B）課題番号345030、1980年。
- 84 千葉昌弘「高知県教員養成史研究ノート（Ⅰ）——「学制」期高知県の教員及び教員養成」『高知大学教育学部研究報告』第1部第33号、高知大学教育学部、1981年、1-21頁。「高知県教員養成史研究ノート（Ⅱ）——「教育令」期高知県の教員及び教員養成」『高知大学教育学部研究報告』第1部第34号、高知大学教育学部、1982年、43-70頁。「高知県教員養成史研究ノート（Ⅲ）——所謂諸〈学校令〉期高知県の教員及び教員養成」『高知大学教育学部研究報告』第1部第35号、1983年、25-44頁。「高知県教員養成史研究ノート（Ⅳ）——〈教育勅語〉の渙発から〈師範教育令〉の公布に至る時期の高知県の教員及び教員養成」『高知大学教育学部研究報告』第1部第36号、1984年、27-48頁。「高知県教員養成史研究ノート（Ⅴ）——〈師範教育令〉から〈師範学校規定〉に至る時期の高知県の教員及び教員養成」『高知大学教育学部研究報告』第1部第37号、1985年、57-69頁。「高知県教員養成史研究ノート（Ⅵ）——〈師範学校規定〉以降の高知県の教員及び教員養成」『高知大学教育学部研究報告』第1部第38号、1986年、39-53頁。「高知県教員養成史研究ノート（Ⅶ）——明治末～大正期における高知県の教員及び教員養成」『高知大学教育学部研究報告』第1部第39号、1987年、27-48頁。千葉昌弘「高知県教員養成史研究ノート（Ⅷ）——大正末～昭和戦前期における高知県の教員及び教員養成」『高知大学教育学部研究報告』第1部第40号、1988年、99-127頁。
- 85 柳井久雄『師範学校——太平洋戦時下の教育』上毛新聞社、1999年。
- 86 野村新・佐藤尚子・神崎英紀編『教員養成史の二重構造的特質に関する実証的研究——戦前日本における地方実践例の解明』溪水社、2001年。
- 87 廣畑力『史料でみる大阪府池田師範学校の軌跡』2003年。
- 88 陣内靖彦『東京・師範学校生活史研究』東京学芸大学出版会、2005年。
- 89 その他の先行研究として次のものが挙げられる。富樫裕・黒岩祐一郎「明治末期における教育実習の実状について——明治43年度群馬県師範学校における一教生の日誌より」『群馬大学教育実践研究』第9号、群馬大学教育学部、1992年、81-92頁。木全清博「大津師範学校における小学校教員養成教育の展開——滋賀県教員養成史研究（Ⅱ）」『実践センター紀要』第6巻、1998年、17-43頁。
- 90 浜野政雄「教員養成制度と音楽教育」『音楽教育研究』第4号、音楽之友社、1968年、69-81頁。
- 91 同上、71頁。
- 92 岩上行忍「鳥取県における音楽教育の変遷——主として鳥取師範学校および鳥取大学の音楽科教員と卒業生について」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』第12巻第2号、1970年、55-71頁。
- 93 同上、59、61頁。
- 94 上原、前掲書、259頁。
- 95 山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会、1979年（第一版は1967年）。
- 96 文部省『学制百年史』ぎょうせい、1972年。
- 97 上原、前掲書、263頁。
- 98 同書、266-268頁。
- 99 平井啓『奈良県音楽近代史——音楽教育を中心に』1995年。87-94頁（第1章 明治）、212-217頁（第2章 大正）、348-368（第3章 昭和・戦前）、437-440（第4章 昭和・戦時下）。
- 100 同上、422-423頁。
- 101 唐沢富太郎『教科書の歴史』創文社、1956年。
- 102 堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』岩波書店、1958年。
- 103 海後宗臣編『日本教科書体系近代編』第二十五巻唱歌、講談社、1965年。
- 104 井上武士「教材・教科書にみる明治一〇〇年の歩み」『音楽教育研究』第4号、1968年、44-60頁。
- 105 仲新・稲垣忠彦・佐藤秀夫『近代日本教科書教授法資料集成』第十巻教師用書6 図工・音楽篇、東京書籍、1983年。
- 106 佐藤秀夫・中村紀久二編『文部省掛図総覧』十 音楽・図工掛図、東京書籍、1989年。
- 107 海後宗臣監修『図説教科書の歴史』日本図書センター、1996年。
- 108 江崎公子「唱歌科と教科書（一）」『音楽研究』大学院研究年報第十五輯、国立音楽大学大学院、2004年、132-102頁。

- 109 江崎公子「唱歌科と教科書（二）」『音楽研究』大学院研究年報第十七輯，国立音楽大学大学院，2005年，132-102頁。
- 110 財団法人教科書センター『旧制中等学校教科内容の変遷』ぎょうせい，1984年。
- 111 鳥居美和子『教育文献総合目録第三集 明治以降教科書総合目録Ⅱ 中等学校編』小宮山書店，1985年。
- 112 大阪教育大学附属図書館情報管理係編『大阪教育大学図書館蔵教科書目録 第一集 明治初年から昭和20年まで 小学校・中等学校編 付：往来物』1998年。
- 113 森恭子・吉永誠吾「戦前の音楽関係文献目録——熊本大学所蔵」『熊本大学教育実践研究』第15号，熊本大学教育学部，1998年。
- 114 戸澤義夫「中等学校音楽教科書における「故郷」の位置」『群馬県立女子大学紀要』第22号，群馬県立女子大学，2001年，65-161頁。戸澤義夫「絶対の創失——音楽に見る近代—中等学校音楽教科書における《故郷》像の変遷（2）」『群馬県立女子大学紀要』第24号，群馬県立女子大学，2003年，97-222頁。
- 115 別府愛「福井直秋の教育活動と当時の教育状況——師範学校の教育を中心にして」武蔵野音楽大学音楽教育学科編集委員会『福井直秋著作解題』2000年，60-71頁。
- 116 文部省『師範音楽 本科用巻一』師範学校教科書，1943年。
- 117 文部省『師範器楽 本科用巻一』師範学校教科書，1943年。
- 118 木村信之『音楽教育の証言者たち 上 戦前を中心に』音楽之友社，1986年，187-204頁。
- 119 水島昭男「『国民学校』時代の音楽教育」『音楽教育学』第3号，日本音楽教育学会，1973年，90-92頁。
- 120 佐藤敏雄「国民学校の音楽教育」『秋田大学教育学部研究紀要 教育科学』第二十七集，1977年，167-173頁。
- 121 河口道朗「軍国主義と音楽教育」『小学校音楽教育講座 第2巻 音楽教育の歴史』音楽之友社，1983年，78-93頁。
- 122 権藤敦子「芸能科音楽の成立経緯」浜野政雄監修『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社，1999年，253-263頁。
- 123 山本文茂「芸能科音楽の理念と内容——法令条文の解釈を中心に」浜野政雄監修『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社，1999年，264-277頁。
- 124 近藤幹雄「国民学校芸能科音楽教師用書の成立」『季刊音楽教育研究』1983年春号，音楽之友社，1983年，11-20頁。
- 125 宮瀬重美「『国民学校』時代の音楽教育について」『埼玉大学紀要 教育学部（増刊）』第33巻，1984年，169-180頁。
- 126 山本文茂「芸能科音楽教材の特質——教科書・教師用指導書の分析を通して」浜野政雄監修『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社，1999年，286-295頁。
- 127 赤井励「唱歌の終焉」安田寛代表編『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』ビクターエンタテインメント，2000年，82-87頁。
- 128 菅道子『『ウタノホン上』『うたのほん下』『初等科音楽』』日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社，2004年，52-53頁。
- 129 本多佐保美「芸能科音楽の指導実践——「総合授業」の授業細目の検討」浜野政雄監修『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社，1999年，296-307頁。
- 130 西島央「児童からみた国民学校芸能科音楽——音楽教育の歴史の読み直しに向けて」『音楽教育研究ジャーナル』第14号，東京芸術大学音楽学部音楽教育研究室，2000年，3-18頁。
- 131 藤井康之「国民学校期における音楽指導の実際——東京女子高等師範学校附属国民学校と青森市立新町国民学校の教師を中心に」『音楽教育研究ジャーナル』第14号，東京芸術大学音楽学部音楽教育研究室，2000年，19-32頁。
- 132 本多佐保美「国民学校期における音楽教育の受容——東京女高師附属国民学校と青森市立新町国民学校の卒業生へのインタビュー調査に基づいて」『音楽教育研究ジャーナル』第14号，東京芸術大学音楽学部音楽教育研究室，2000年，33-45頁。
- 133 本多佐保美・国府華子「国民学校期における鑑賞教材の音楽内容に関する一考察——教師用指導書と音盤の分析を中心に」『音楽教育史研究』音楽教育史学会，2000年，43-58頁。
- 134 本多佐保美・藤井康之・中里南子・勝谷祥子・幸山良子「誠之国民学校における音楽授業の諸相——学校所蔵文書とアンケート調査にもとづく実践史の試み」『音楽教育学』第32・2号（通巻66号），日本音楽教育学会，2003年，1-8頁。
- 135 本多佐保美代表『音楽教育史研究における制度・教師・学習者の関係性の探究——国民学校時代の音楽教育体験者の聞き取り調査に基づいて』平成13年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究B1），2004年。
- 136 菅道子「国民学校における芸能科音楽のカリキュラム編成」『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』第54集，2004年，和歌山大学教育学部，103-126頁。
- 137 西島，前掲書，12頁。
- 138 菅「『ウタノホン上』『うたのほん下』『初等科音楽』」，前掲書，53頁。
- 139 朴成泰『韓国近代学校における民主主義教員養成の成立過程』風間書房，1996年。
- 140 劉麟玉『植民地下の台湾における学校唱歌教育の成立と展開』雄山閣，2005年。
- 141 長谷川慎「師範学校」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社，2004年，416-418頁。
- 142 浜松敦子「民衆の音楽活動と唱歌教育の関連性についての一考察——東京都台東区住民の実態調査にもとづいて」『音楽教育学』第15号，日本音楽教育学会，1986年，76-87頁。
- 143 岩崎洋一「男子児童発声の系譜——1930年代から1950年代にかけて」日本音楽教育学会編『音楽教育学研究1 音楽教育の理論研究』音楽之友社，2000年，213-226頁。
- 144 西島央「児童からみた国民学校芸能科音楽——音楽教育の歴史の読み直しに向けて」『音楽教育研究ジャーナル』第14号，東京芸術大学音楽教育研究室，2000年，3-4頁。

¹⁴⁵ 江利川春雄「師範学校における英語科教育の歴史（1）——明治・大正期」『日本英語教育史研究』第12号，日本英語教育史学会，1997年，123頁。

¹⁴⁶ 細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜清編『新教育学大事典』第一法規，1990年，517頁。

¹⁴⁷ 「尋常師範学校学科程度ノ事」（明治19年5月26日文部省令第九号）における「音楽」については，「単音唱歌複音唱歌楽器用法及音楽上ノ名称記号旋律和声拍子等ノ要略」と定められている（文部省『師範教育関係法令の沿革』前掲書，68頁）。

本 論

第 I 部 師範学校における制度の変遷と音楽教育

<本 論>

第 I 部 師範学校における制度の変遷と音楽教育

第 1 章 1930（昭和 5）年以前の師範学校における音楽教育の概観（1872-1930）

本章では、本研究の対象時期とする 1930（昭和 5）年より以前の時期における制度の変遷を概観しておきたい。表 I-1-1 は、師範学校に関する主な制度の変遷を年表にしたものである。高等師範学校に関する主要な動向についても掲載した。序論で述べた通り、時代区分は、国立教育研究所編『日本近代教育百年史』（1974）に基づき、「創始期」「模索期」「確立期」「整備期」「展開期」「戦時期」の 6 区分に分けた。

表 I-1-1 師範学校の制度の変遷

	年	師範学校，高等師範学校	その他
創始期	1871（M4）		文部省設置 「学制」頒布 東京大学設立 「学制」を廃し「教育令」を公布 文部省音楽取調掛を設置 文部省音楽取調掛において、初めて生徒 22 人の入学を許可 文部省、音楽講習所にピアノ 11 台を購入 「教育令」を改正公布 「小学校教則綱領」を制定 東京女子師範学校への皇后行啓に際し、音楽取調掛による管弦楽演奏が行われる（管弦楽演奏の初め） 森有礼，初代文部大臣に就任 「帝国学校令」「小学校令」「中学校令」を公布 音楽取調掛を東京音楽学校と改称・改組 「小学校令」を公布 「教育ニ関スル勅語」発布
	1872（M5）	東京に師範学校設置	
	1873（M6）	師範学校に附属小学校を設ける 師範学校を「東京師範学校」と改称。この年初めて卒業生 10 名を出す	
		大阪府および宮城県下に官立師範学校を設置	
	1874（M7）	愛知・広島・長崎・新潟各県下に官立師範学校設置（全国に 7 官立師範学校設置。各大学区本部に 1 校となる） 東京に女子師範学校を設置（1875 年開校）	
	1875（M8）	東京師範学校に中学師範科を設置（1876 年開業）	
	1877（M10）	愛知・広島・新潟各官立師範学校を廃止	
	1878（M11）	大阪・長崎・宮城の各官立師範学校を廃止 東京女子師範学校の「附属小学」を「附属練習小学校」と改称	
	1879（M12）		
模索期	1880（M13）	<u>音楽取調掛，内外音楽の取調ならびに東京師範学校および女子師範学校の附属小学校および幼稚園生徒に唱歌教授を開始</u>	
	1881（M14）	「師範学校教則大綱」を制定	
	1882（M15）	東京女子師範学校予科を廃し，附属高等女学校を設置（修業年限 5 年，高等女学校の初め） 東京女子師範学校附属小学校を，附属女児小学校と改称	
	1883（M16）	「府県立師範学校通則」を制定	
	1885（M18）	東京女子師範学校を東京師範学校に合併，同校女子部となる	
	1886（M19）	「師範学校令」を公布（尋常師範学校・高等師範学校の 2 段階） 「尋常師範学校ノ学科及其程度」を制定	
確立期	1887（M20）		
	1890（M23）	女子高等師範学校創設（高等師範学校女子部を分離）	

	1891 (M24) 1892 (M25) 1893 (M26)	「尋常師範学校ノ学科及其程度」を改正	「小学校祝日大祭日儀式規定」を制定 東京音楽学校を、高等師範学校附属音楽学校とする 文部省、小学校における祝日、大祭日の儀式に用いる歌詞・楽譜を選定 高等師範学校附属音楽学校が独立して「東京音楽学校」と改称 小学校令を改正（義務教育年限を6か年に延長。尋常小学校を6年、高等小学校を2～3年とする）
--	--	--------------------	---

出典 文部省『学制百年史（資料編）』ぎょうせい、1972年。

注 下線は筆者による。

1. 師範学校における「音楽」の目的の変遷の概観

最初に師範学校における「音楽」の目的の変遷を概観しておきたい。表 I-1-2 は、「師範学校規定」における「音楽」を一覧にしたものである。昇格前の 1907（明治 40）年から 1931（昭和 6）年では、「音楽ニ関スル知識技能」「小学校ニ於ケル唱歌教授ノ方法」を通して、「美感ヲ養ヒ」「心情ヲ高潔」「徳性ノ涵養」にすることを目的としていた。昇格後は「教育者タルノ資質ヲ錬成スルヲ以テ要旨トス」を最終的な目標としている。

表 I-1-2 「師範学校規定」における「音楽」

年	「師範学校規定」における「音楽」
1907（明治 40）	音楽ハ音楽ニ関スル知識技能ヲ得シメ且小学校ニ於ケル唱歌教授ノ方法ヲ会得セシメ美感ヲ養ヒ心情ヲ高潔ニシ徳性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス、 音楽ハ単音唱歌、複音唱歌及楽器使用法ヲ授ケ且教授法ヲ授クヘシ
1925（大正 14）	音楽ハ音楽ニ関スル知識技能ヲ得シメ且小学校ニ於ケル唱歌教授ノ方法ヲ会得セシメ美感ヲ養ヒ心情ヲ高潔ニシ徳性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス、 音楽ハ単音唱歌、複音唱歌及楽器使用法ヲ授ケ且教授法ヲ授クヘシ
1931（昭和 6）	音楽ハ音楽ニ関スル知識技能ヲ得シメ美感ヲ養イ心情ヲ高潔ニシ徳性ノ涵養ニ資シ且学校ニ於ケル唱歌教授ノ方法ヲ会得セシムルヲ以テ要旨トス、 音楽ハ単音唱歌、複音唱歌、楽典ノ大要及楽器使用法ヲ授ケ且教授法ヲ授クヘシ
1943（昭和 18）	芸能科ハ国民生活ニ須要ナル芸術技能ヲ修練セシメ工夫創作及鑑賞ノ能ヲ養ヒ国民的情操ト実践的性格トヲ陶冶シ我が国芸能ノ創造発展ニ貢献スルノ信念ニ培ヒ教育者タルノ資質ヲ錬成スルヲ以テ要旨トス、 芸能科ハ之ヲ分チテ音楽、書道、図画及工作ノ科目トス、

出典 文部省『師範教育関係法令の沿革』1938 年。『近代日本教育制度史料』第五巻，1956 年。

2. 1930（昭和 5）年以前の師範学校における音楽教育の概観

以下、先行研究の成果に基づきながら、簡単に各時期の特徴を記したい。

（1）創始期 1872（明治 5）年～1879（明治 12）年

1872（明治 5）年、わが国最初の師範学校が東京に設立される。「音楽」は学科課程の中に置かれていない¹⁾。なお、水原克敏は学科課程の特徴として以下の「三重構造の型」を指摘している²⁾。

①教科専門を配置することで、基礎学力を形成する。

↓

②教授法を中心とする教職教養を形成する。

↓

③附属小学校で「実地授業」を課す。

(2) 模索期 1880(明治13)年～1885(明治18)年

模索期は、「教育令」を改正公布した1880(明治13)年以降の時期である。この時期で特筆すべきことは、やはりメーソン³による唱歌教育が開始されたことであろう。これについては、山住正巳⁴(1967)、大畑祥子⁵(1976)、松下直子⁶(1980)、河口道朗⁷(1996)によって明らかにされている。以下、先行研究の成果から重要な点を要約する。

- 1) 音楽取調掛伝習生対象の音楽訓練が開始されたのは、1880(明治13)年10月であった。一方、東京師範学校(現、筑波大学)、東京女子師範学校(現、お茶の水女子大学)、東京師範学校附属小学校(現、筑波大学附属小学校)、東京女子師範学校附属小学校(現、お茶の水女子大学附属小学校)においては、1880(明治13)年4月から唱歌教育が先駆けて開始されていた。
- 2) 東京女子師範学校においてはメーソンによる唱歌教育が開始される以前から唱歌の伝習が行われていたこととも重なり、東京女子師範学校の生徒は、東京師範学校の男子生徒と比べて音楽的な能力が高かった。なお、二つの附属小学校の間における児童の音楽的な能力の違いはほとんど見られなかった。
- 3) 音楽取調掛伝習生と師範学校生徒の教科課程については共通点と相違点があった。『音楽取調掛申報書』⁸(1884)では次のように規定されていた。

「伝習人に授くべきものは、唱歌、洋琴、風琴、箏、胡弓及び欧州管弦楽器とす」⁹

「女子師範学校に於て伝習すべきものは、唱歌、風琴、箏及び胡弓とす」¹⁰

「東京師範学校に於て伝習すべきものは、女子師範学校に大同小異なりと雖も、甲校の唱歌は乙校の唱歌に比すれば稍下等に居り、又、箏、胡弓の伝習は難きに過ぎ、到底之を施すこと能わざるものとす」¹¹

上記3)について河口は、「音楽家の養成と音楽教員の音楽能力の形成のあり方の分岐点が設定されていた」と考察する¹²。この問題は、中山裕一郎¹³や佐野靖¹⁴が指摘する東京音楽学校における本科と師範科の在り方にも関連する¹⁵。

ところで、師範学校における教科目として「唱歌」の名が登場するのは、1881(明治14)年8月の「師範学校教則大綱ヲ定ムル事」¹⁶(達第二十九号)からである¹⁷。「唱歌ハ教授法等ノ整フヲ待テ之ヲ設クヘシ」(第三条)とあるものの、模索期には一部の府県立師範学校においても唱歌教育の実施が確認できる。水原によると、府県立師範学校の中で「唱歌」の設置がもっとも早かったのが、長野県師範学校である¹⁸。1882(明治15)年、校長の能勢榮によって模造ヴァイオリンを用いた唱歌教育が行われた¹⁹。能勢の実践の詳細については、松下が明らかにしている²⁰。結局、「文部省—音楽取調掛は、能勢榮の行なった唱歌教育に対して好意的ではなく、むしろ、文部省—音楽取調掛が意図する唱歌教育の普及に反し、その障害ともなるべきもの」²¹と捉え、長野県の独自の唱歌教育は挫折せざるを得ない状況となる。

その他、松下は、千葉県師範学校音楽科教員の木下邦昌の琴を用いた唱歌教育の実践を挙げている²²。1882(明

治 15) 年ということで能勢の実践と時期が重なり、結末も同じである。松下は、能勢と木下の実践の背景には洋楽器不足入手不可能な状態があったと分析している²³。なお、村尾忠廣によると、音楽取調掛へ楽器購入依頼の第一号は、千葉県女子師範学校で、1881 (明治 14) 年 11 月 8 日に風琴 1 台を注文している²⁴。

ちなみに、最初の唱歌教員となるべき、東京女子師範学校の卒業生が出たのは、1882 (明治 15) 年である。卒業生の一人、菊池ノブは、岩手師範学校二等助教諭として赴任し、唱歌教育を開始している²⁵。このように、模索期というのは、メーソンによる唱歌教育が開始され、彼の教育を受けた卒業生たちが地方へ広がり始めた時期である。松下は、「音楽取調掛―師範学校―唱歌講習会―小学校という上意下達の一貫した図式」であったことを指摘している²⁶。この図式は、これ以後の制度にも受け継がれていったのである。

(3) 確立期 1886 (明治 19) 年～1896 (明治 29) 年

確立期は、1886 (明治 19) 年 4 月 10 日の「師範学校令」(勅令第十三号)によって、師範学校の制度が確立された時期である。水原は、「師範学校令」について以下の 2 点を指摘している²⁷。

- 1) 制度論的には、高等師範学校の創設と同時に、高等師範学校による尋常師範学校教員養成の体制が確定されたこと。
- 2) 内容論的には、「三気質」(順良・信愛・威重)養成が目的とされたこと。

師範学校の学科目については「唱歌」から「音楽」へ変更されている。同年の「尋常師範学校学科程度ノ事」(文部省令第九号)の第二条において「音楽」は、「単音唱歌複音唱歌楽器用法及音楽上ノ名称記号旋律和声拍子等ノ要略」と規定され、授業の時間も確保されている²⁸。1892 (明治 25) 年、「尋常師範学校ノ学科及其程度改正ノ事」(文部省令第八号)が出され、学科目の内容が規定される。

その他、1887 (明治 20) 年、音楽取調掛は東京音楽学校へと改称、改組される²⁹。このように、確立期には、小学校教員養成を府県立の尋常小学校、中等学校の音楽教員養成と小学校の専科唱歌教員養成を東京音楽学校が担うという制度が法令上においても明確になった。また、この時期は、1891 (明治 24) 年の「小学校祝日大祭日儀式規定」の制定に伴い、唱歌教育が急速に普及する³⁰。奥中康人は、儀式唱歌の普及には師範学校が先進的な役割を果たしたと述べている³¹。

(4) 整備期 1897 (明治 30) 年～1917 (大正 6) 年

整備期は、1897 (明治 30) 年 10 月 6 日の「師範教育令」(勅令第三百四十六号)の公布以降の時期である³²。第一条で次のように規定している³³。

高等師範学校ハ師範学校尋常中学校及高等女学校ノ教員タルヘキ者ヲ養成スル所トス、

女子高等師範学校ハ師範学校女子部及高等女学校ノ教員タルヘキ者ヲ養成スル所トス、
師範学校ハ小学校ノ教員タルヘキ者ヲ養成スル所トス前三項ニ記載シタル学校ニ於テハ順良信愛威重ノ徳
性ヲ涵養スルコトヲ務ムヘシ、

高等師範学校は中等学校の教員養成を担うことが明文化されている。なお、東京音楽学校は、1893（明治26）年、高等師範学校附属音楽学校となったものの³⁴、1899（明治32）年、再独立を果たす³⁵。

一方、師範学校に関しては、1907（明治40）年4月17日、「師範学校規定」（文部省令第十二号）が制定される。第二条「本科ヲ分チテ第一部及第二部トス」³⁶とあるように、中学校、高等女学校卒業生対象の本科第二部が新設される。修業年限は、第四条において以下のように規定される³⁷。

予備科ノ修業年限ハ一箇年トス、
本科第一部ノ修業年限ハ四箇年トス、
本科第二部ノ修業年限ハ男生徒ニ就キテハ一箇年、女生徒ニ就キテハ二箇年又ハ一箇年トス、

「音楽」に関しては、第二十三条で次のように規定されている³⁸。

音楽ハ音楽ニ関スル知識技能ヲ得シメ且小学校ニ於ケル唱歌教授ノ方法ヲ会得セシメ美感ヲ養ヒ心情ヲ高
潔ニシ特性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス、
音楽ハ単音唱歌、複音唱歌及楽器使用法ヲ授ケ且教授法ヲ授クヘシ、

1910（明治43）年5月31日、「師範学校教授要目」（文部省訓令第十三号）が定められる。山田昇は、学科課程の特徴として次の4点を指摘している（下線は筆者による）³⁹。

- 1) 修身科において、教育勅語、戊申詔書はもとより、師範学校生徒心得、教師の心得などを教授することと定めた。
- 2) 教育科の教授体系は、心理（2年）、論理、教育の理論、教授法及保育法（3年）、近世教育史、教育制度、学校管理法、学校衛生、教育実習（4年）と定められた。
- 3) 各学科とも、第3学年のときに教科教授法を学習するものとし、各教科の「教授の要旨、教授教材の選択及排列、教授の方法、教授用具及教授上必要なる注意、教科用図書の研究」などを取り扱うこととした。
- 4) 国語及び漢文については、読本の文体の標準や材料選択の標準を示した他、各学科について、各学年、各学期ごとの教授要綱と教授上の注意事項を詳細に指示した。また、各学科とも、小学校教則に準拠して、教授内容に配慮を加えたものとみなすことができる。

当然のことながら、上記3)の特徴は、音楽でも見られる。本科第一部の第3学年と本科第二部の第2学年女生徒の部においては、「小学校ニ於ケル唱歌教授法」が置かれ、その中に「教授ノ要旨」「教授材料ノ選択及排列」「教授ノ方法」「教授用具及教授上必要ナル注意」が含まれている⁴⁰。

このように、各学科の内容を「師範学校教授要目」において示すという方法は、この時期に始まり以後踏襲される。

(5) 展開期 1918（大正7）年～1930（昭和5）年

展開期は、1917（大正6）年の臨時教育会議設置後の時期である。

1925（大正14）年4月1日、「師範学校規定中改正」（文部省令第八号）が行われ、予科の廃止とともに本科第一部の修業年限が5箇年と変更された。同年4月18日、「師範学校教授要目」も改正される。山田によると、主な改正点は次の4点である⁴¹。

- 1) 男女生徒を通して「法制経済」を必修とし、男生徒には「英語」を必修とした。
- 2) 女生徒については男生徒と共通の学科の他に「家事及裁縫」の教授時数が多いため、「英語」と「農業又ハ商業」を随意科目とした。
- 3) 本科第二部の学科目については、男生徒には「農業又ハ商業」を、女生徒には「法制及経済」を必修に加え、さらに「家事」も必修とした。
- 4) 新たに設置された専攻科の学科目は必修科目（修身、哲学、教育、国語及漢文、農業又ハ商業＜男子＞、家事及裁縫＜女子＞、体操）と選択科目（英語、歴史及地理、数学、博物、物理及化学、図工及手工、音楽）によって編成された。

音楽に関して「小学校ニ於ケル唱歌教授法」が、本科第一部の第4学年と本科第二部の最終学年に置かれている⁴²。また、「注意」の項には「読譜力及鑑賞力ノ養成ニカムヘシ」⁴³と掲げられ、鑑賞の領域が設けられる。

ところで、展開期は中等学校数や中等学校に在籍する生徒数の増加が著しい時期でもある⁴⁴。そのような動向を受け、1922（大正11）年「臨時教員養成所規定中改正」（文部省令第十六号）があり⁴⁵、第四臨時教員養成所が東京音楽学校に設置された（1932年廃止）⁴⁶。

一方、師範学校においては第二部卒業者数の増加の傾向が見られる。清水康幸は、「1926（大正15、昭和元）年段階で第二部卒業者数が第一部卒業者数をわずかながら上回り、1930（昭和5）年まで拮抗状態を続けている」と述べている⁴⁷。ちなみに、一部の師範学校では生徒の抵抗運動が起きている⁴⁸。

また、木下竹次の奈良女子高等師範学校附属小学校における実践⁴⁹のように、附属小学校を中心に新教育運動が広がったのも展開期の特徴の一つである⁵⁰。

以上、創始期から展開期（1871～1930年）までを概観した。戦時期（1931～1945年）については、本研究の対象とする時期であるので、次章において詳細に検討したい。

- 1 水原克敏『近代日本教員養成史研究——教育者精神主義の確立過程』風間書房、1990年（1991年重版使用）、37-38頁。
- 2 同上、52頁。
- 3 Mason, Luther Whiting (1818～1896, 米)。メーソンについては、小川昌文「メーソン」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社、2004年、761-765頁、が詳しい。
- 4 山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会、1967年（1979年重版使用）、64-67頁。
- 5 大畑祥子「両師範・学習院における音楽教育」東京芸術大学音楽取調掛研究班編『音楽教育成立への軌跡』音楽之友社、1976年、387-400頁。
- 6 松下直子「音楽取調掛での唱歌教員養成」田甫桂三編『近代日本音楽教育史Ⅰ』学文社、1980年、144頁。
- 7 河口道朗『近代音楽教育論成立史研究』音楽之友社、1996年、183-213頁。
- 8 伊沢修二『音楽取調成績申報書』1884年（山住正巳校注『洋楽事始』平凡社、1971年、1987年重版使用）。
- 9 同上、27頁。
- 10 同上、28頁。
- 11 同上、29頁。
- 12 河口、前掲書、187頁。
- 13 中山裕一郎「わが国における教員養成課程の歴史」『季刊音楽教育研究』春号第19巻第2号、音楽之友社、1976年、78-87頁。中山裕一郎「音楽教員養成の歴史」『音楽教育の歴史』小学校音楽教育講座第2巻、音楽之友社、1983年。
- 14 佐野靖「東京音楽学校と教員養成——その教育内容の変遷をめぐって」『季刊音楽教育研究』春号第31巻第2号、音楽之友社、1988年。
- 15 浜野政雄「教員養成制度と音楽教育」『音楽教育研究』4、音楽之友社、1968年、76-79頁。
- 16 文部省教育調査部『師範教育関係法令の沿革』1938年、44-48頁。
- 17 浜野、前掲書、72-73頁。
- 18 水原、前掲書、342-351頁。
- 19 長野県教育史刊行会『長野県教育史 第一巻 総説編一』長野県教育史刊行会、1978年、806頁。
- 20 松下直子「独自の唱歌教育」田甫桂三編『近代日本音楽教育史Ⅰ』学文社、1980年、162-171頁。
- 21 同上、168頁。
- 22 同上、171-172頁。
- 23 同上、172頁。
- 24 村尾忠廣「唱歌教育の地方への普及」『音楽教育研究』8月号、音楽之友社、1970年、145頁。村尾忠廣「学校唱歌の開設と地方への普及」東京芸術大学音楽取調掛研究班編『音楽教育成立への軌跡』音楽之友社、1976年、423頁。
- 25 作道好男・作道克彦編『岩手大学教育学部百年史』教育文化出版、1983年、111頁。『吉田久五郎「岩手県における唱歌教育の普及過程について」』『音楽教育学』第2号、日本音楽教育学会、1972年、148-157頁。村尾「学校唱歌の開設と地方への普及」、前掲書、408-409頁。北原かな子「明治期津軽地方における唱歌の普及——地方への唱歌普及の一例として」安田寛代表編『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播— 解説・論文・索引』ビクターエンタテインメント、2000年、198頁、201頁。
- 26 松下「独自の唱歌教育」、前掲書、174頁。
- 27 水原、前掲書、507頁。
- 28 文部省教育調査部『師範教育関係法令の沿革』1938年、68-70頁。
- 29 玉川裕子「明治日本と西洋音楽——制度史からみた「美的受容」の成立」『比較文学・文化研究会』vol.2-1、1986年、31-49頁。
- 30 山住、前掲書、268-282頁。
- 31 奥中康人「五線譜による儀式唱歌の国楽化」劉麟玉代表『近代音楽・歌謡の成立過程における国民性の問題』平成13・14年度科学研究費補助金研究成果報告書、2003年、80頁。なお、山住は、千葉県尋常師範学校においては1888（明治21）年から天長節の儀式が行われていたことを例に挙げている（山住、前掲書、278頁）。
- 32 1897（明治30）年から1931（昭和6）年までの師範学校における音楽教育に関する法令については、別府愛が概観して

- いる（別府愛「福井直秋の教育活動と当時の教育状況——師範学校の教育を中心にして」武蔵野音楽大学音楽教育学科編集委員会『福井直秋著作 解題』2000年，60-71頁）。
- 33 同上，181頁。
- 34 日本教育音楽協会『本邦音楽教育史』音楽教育書出版協会，1934年，156-159頁（第一書房，1982年復刻版使用）。
- 35 同上，209-212頁。
- 36 文部省教育調査部『師範教育関係法令の沿革』1938年，258頁。
- 37 同上，258頁。
- 38 同上，261頁。
- 39 山田昇「大正期師範教育の問題」中内敏夫・川合章編『日本の教師6／教員養成の歴史と構造』明治図書出版，1974年，162-163頁。
- 40 教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』第五巻，教育資料調査会，1939年（1964年重版），673-674頁。
- 41 山田昇「師範教育制度の確立」仲新監修『学校の歴史 第5巻 教員養成の歴史』第一法規出版，1979年，68頁。
- 42 教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』第七巻，教育資料調査会，1939年（1964年重版），631-633頁。
- 43 同上，634頁。
- 44 谷口琢男「中等学校の制度的発達」教科書研究センター編『旧制中等学校教科内容の変遷』ぎょうせい，1984年，32頁。
- 45 杉森知也「中等教員養成史上における臨時教員養成所の位置と役割」『日本の教育史学』教育史学会紀要第43集，2000年，60-76頁。
- 46 芸術研究振興財団・東京芸術大学百年史編集委員会『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』音楽之友社，2003年，1052-1070頁。
- 47 清水康幸『教育審議会の研究 師範学校改革』野間教育研究所紀要第42集，2000年，62-64頁。
- 48 山田昇「師範学校生徒の抵抗運動」中内敏夫・川合章編『日本の教師6／教員養成の歴史と構造』明治図書出版，1974年，196-200頁。
- 49 平井建二「1920・1930年代の音楽教育の動向に関する一考察——奈良女子高等師範学校附属小学校を中心に」『音楽教育学』11号，日本音楽教育学会，1981年。平井建二「わが国の音楽教育における創造性の思想的系譜」日本音楽教育学会編『音楽教育学の展望Ⅱ（上）』音楽之友社，1991年，32-39頁。三村真弓「大正後期から昭和初期の小学校唱歌科における児童作曲法の展開と特質」『音楽教育学』30-1号，日本音楽教育学会，2000年。橋本静代「サティス・コールマンによる“Creative Music”の思想——米国における資料と日本の簡易楽器導入時への影響について」『音楽教育史研究』第3号，音楽教育史学会，2000年，31-42頁。
- 50 山田「大正期師範教育の問題」，前掲書，173-180頁。

第2章 府県立師範学校時代における音楽教育（1931－1942）

本章では、1931（昭和6）年4月から1943（昭和18）年3月における府県立師範学校の音楽教育を制度の視点から明らかにすることを目的とする。

第1節 1931（昭和6）年「師範学校規定」・「師範学校教授要目」の改正

1. 「師範学校規定改正」「師範学校教授要目改正」

1930（昭和5）年12月4日、文政審議会に「師範教育改善ニ関スル件」（諮詢第十二号）が諮詢された¹。これを受け、1931（昭和6）年1月10日、「師範学校規定」が改正（文部省令第一号）²、3月11日には「師範学校教授要目」（文部省訓令第七号）が改正された³。表I-2-1は、学科目・毎週教授時数を示したものである。

表I-2-1 1931（昭和6）年「師範学校規定改正」以降の学科目・毎週教授時数

学年 学科目		第一部（男子）						第一部（女子）						第二部（男子）			第二部（女子）			
		1年	2年	3年	4年	5年	計	1年	2年	3年	4年	5年	計	1年	2年	計	1年	2年	計	
基本科目	修身	1	1	2	2	2	8(5)	1	1	2	2	2	8	2	2	4	2	2	4	
	公民科				2	2	4(4)				2	2	4	1	1	2	1	1	2	
	教育			2	4	5	11(0)			2	4	5	11	6	6	12	6	6	12	
	国語漢文	6	6	5	4	4	25(27)	6	6	5	4	4	25	2	2	4	3	3	6	
	歴史	4	4	4	2	2	16(15)	4	4	4	2	2	16	2	2	4	2	2	4	
	地理																			
	英語	4	4	4			12(16)	3	3	3			9							
	数学	4	3	3	2	2	14(11)	4	3	3	2	2	14	2	2	4	3	2	5	
	理科	4	5	4	3	2	18(16)	4	5	4	3	2	18	2	2	4	2	3	5	
	実業	1	1	2	2	2	8(0)							2	2	4				
	図面	4	3	2	2	2	12(10)	3	3	2	2	2	12	2	2	4	2	2	4	
	手工																			
	音楽	2	2	1	1	1	7(3)	2	2	2	1	1	8	2	2	4	2	2	4	
	体操	5	5	5	4	4	23(25)	3	3	3	2	2	13	3	3	6	2	2	4	
	家事							4	4	4	4	4	20				3	3	6	
	縫裁																			
合計	34	34	34	28	28	158	34	34	34	28	28	158	26	26	52	28	28	56		
増設科目	国語漢文				2-4	2-4					2-4	2-4		2-4	2-4		2-4	2-4		
	歴史				2-4	2-4					2-4	2-4		2-4	2-4		2-4	2-4		
	地理				2-4	2-4					2-4	2-4		2-4	2-4		2-4	2-4		
	英語				2-4	2-4					2-4	2-4		2-4	2-4		2-4	2-4		
	数学				2-4	2-4					2-4	2-4		2-4	2-4		2-4	2-4		
	博物				2-4	2-4					2-4	2-4		2-4	2-4		2-4	2-4		
	物理及化学				2-4	2-4					2-4	2-4		2-4	2-4		2-4	2-4		
	実業				2-4	2-4					2-4	2-4		2-4	2-4		2-4	2-4		
	図面				2-4	2-4					2-4	2-4		2-4	2-4		2-4	2-4		
	手工				2-4	2-4					2-4	2-4		2-4	2-4		2-4	2-4		
	音楽				2-4	2-4					2-4	2-4		2-4	2-4		2-4	2-4		
合計				6	6	12					6	6	12	8	8	16	6	6	12	
総時数		34	34	34	34	34	170					34	34	170	34	34	68	34	34	68

出典 文部省教育調査部『師範教育関係法令の沿革』1938年、531-540頁から作成。

注 ()は中学校の学科目の教授時数（1931年）。ゴシック体は筆者による。

上記の改正については、対村恵祐⁴、林三平⁵、清水康幸⁶の複数の研究者によって考察され、以下の特徴が指摘されている。

- 1) 学科目の全体を「基本科目」と「増課科目」に分け、本科第一部の3学年までは「基本科目」を共通に学ばせるが、第一部の第4学年以上と第二部ならびに専攻科では、必修の「基本科目」の他に増課科目中から数科目を選択させ、「生徒ノ性能、趣味等ニ応ジ進ミタル程度ノ学修ヲナサシムル（文部省訓令第一号）こととしたこと。
- 2) 「公民科」の新設。博物、物理及化学を総合した「理科」の新設。
- 3) 農業または商業を「実業」として工業を含め、男子の必修としたこと。
- 4) 「習字」を国語漢文に含めたこと（専攻科では「習字」を独立させた）。
- 5) 男子の「体操」で剣道および柔道を必修としたこと。
- 6) 「英語」は従来女子本科第一部では随意科目とされ、第二部では課せられていなかったが、本科第一部では男女とも第3学年まで必修とし、第4学年以降および第二部・専攻科では増課科目として選修できるようにしたこと。
- 7) 軍事教練が実施されるようになったこと。

では、「音楽」は、「師範学校規定」においてどのように規定されていたのかをみてみたい。以下に規定を掲げる（下線は筆者による）⁷。1925（大正14）年の「師範学校規定」と異なる点は、「楽典ノ大要」が含まれたことである。

第二十三条 音楽ハ音楽ニ関スル知識技能ヲ得シメ美感ヲ養ヒ心情ヲ高潔ニシ徳性ノ涵養ニ資シ且小学校ニ於ケル唱歌教授ノ方法ヲ会得セシムルヲ以テ要旨トス
音楽ハ単音唱歌、重音唱歌、楽典ノ大要及楽器使用法ヲ授ケ且教授法ヲ授クヘシ、

表I-2-2では、「師範学校教授要目改正」における「音楽」の内容を一覧にした。1931（昭和6）年改正内容は、1925（大正14）年の「師範学校教授要目改正」の内容をほぼ継承している。

表I-2-2 「師範学校教授要目改正」（1931）における「音楽」の内容

学年		基本練習	楽器使用	歌曲	楽典	小学校に於ける唱歌教授法及教材の研究	指揮法	鑑賞
第一部	1年	○		○	○			○
	2年	○	○	○	○			○
	3年	○	○	○	○			○
	4年	○	○	○	○	○	○	○
	5年	○	○	○	○		○	○
第二部	1年	○	○	○	○	○		○
	2年	○	○	○	○	○		○

出典 教育史編集会『明治以降教育制度発達史』第七巻、1939年（1964年重版）、753-756頁から作成。

2. 増課科目

今回の改正の特徴である増課科目に着目してみたい。「師範学校教授要目」では、増課科目について「基本教材ニ於ケル教授事項ニ就キ程度稍進ミタルモノヲ課スベシ」との記述に留まり、特に具体的な内容は規定されていない⁸。「師範学校規定中改正ノ要旨並施行上ノ注意」（文部省訓令第一号，昭和6年1月20日）には、「増課科目中ヨリ適宜数科目ヲ選択シテ生徒ノ性能，趣味等ニ応シ進ミタル程度ノ学修ヲナラサシムルコトトナセルハ教授ノ効果ヲ一層大ナラシメンコトヲ期シタルカ為ナリ」とある⁹。

以下、本研究の事例対象である香川県師範学校と参考事例として奈良県女子師範学校を挙げる¹⁰。

（1）香川県師範学校

『香川大学教育学部百年のあゆみ』（1989）には、増課科目について次のように綴られている¹¹。

何といっても思い出の多いのは増課科目の学習であろう。（中略）第一部4年生になると第二部1年生と共に、二つの教科群から一つずつ2教科を自分で選定して、週2時間学習した。

また、当時の音楽科教員のメモによると、増課科目の「音楽」の時間配当は次のようになっている¹²。

- 火 4. 唱歌（合唱）並に楽典
- 金 1. 音感訓練方法，音楽史
- 2. 検閲

上記には教授法に関することは含まれていないものの、基本科目の内容を補充，発展させた授業が展開されている。当時の音楽科教員，生徒の証言によると，増課科目では生徒一人ひとりの能力に応じた指導が行われていたそうである¹³。

しかし，これだけの資料では増課科目が年間を通じてどのように指導されたかといった点については明らかにすることができない。平井啓『奈良県音楽近代史』¹⁴には，奈良県女子師範学校の音楽科「教授予定進程表」から転載した，1931（昭和6），1932（昭和7），1935（昭和10）年度における増課科目の年間の指導内容が掲載されているので，次項において取り上げたい。

(2) 奈良県女子師範学校

『奈良教育大学史』において、増課科目は以下のように記されている¹⁵。

増課科目別の導入によって、七年間独自に実施してきた自由研究を含む準課制度は廃止され、本科は第一類（国漢・数学・家事・図画）、第二類（歴史・博物・音楽・手工）、第三類（地理・物理化学・裁縫・英語）などの各類から各一科目計三科目を選択させることにした。この場合、同一類に属する四科目は毎週一回二時限を同一時限におくことにし、増課科目にかぎって同一科目を選択した一部四年と二部一年、及び一部五年と二部二年を合併して授業することとした。（中略）学習内容も「基本教材ノ補充」と「教材教具ノ研究」を主なものとした。

文部省『全国師範学校ニ関スル諸調査』¹⁶によると、1931（昭和6）年度、奈良県女子師範学校における増課科目の「音楽」選修者数は、第一部第4学年が16人、第5学年が11人、第二部第1学年が4人、第2学年が17人である。第一部第4学年と第二部第1学年で20人、第一部第5学年と第二部第2学年で33人が選択したことになる。同様に算出すると、次の通りである。20人前後のクラスサイズである。

1932（昭和7）年度 第一部第4学年（12人）＋第二部第1学年（8人）＝20人

第一部第5学年（14人）＋第二部第2学年（6人）＝20人

1935（昭和10）年度 第一部第4学年（8人）＋第二部第1学年（14人）＝22人

第一部第5学年（9人）＋第二部第2学年（10人）＝19人

平井啓『奈良県音楽近代史』¹⁷に所収されている奈良県女子師範学校の音楽科「教授予定進程表」から増課科目の箇所を転載したものが、表I-2-3、表I-2-4である。これらの表から奈良県女子師範学校の増課科目では、歌曲、楽器、楽典、教授法の内容が扱われていることが分かる。下線で示したように、楽器（器楽と記してある箇所もある）については、毎週1時間、時間が確保されている学期が多い。その他、教授法については、第一部第4学年と第二部第1学年では3学期に、第一部第5学年と第二部第2学年では1学期に主に指導されている。特に1931（昭和6）年度、第一部第4学年と第二部第1学年の3学期の内容には、「低学年に於ける教授法」「中学年に於ける教授法」「音階教授法」「楽譜教授法」と4種類の教授法が置かれている。さらに、「小学教材（生徒実習）」が4回にわたって実施されているように、学年や指導内容に関する多様な視点の教授法が指導されている。

表 I-2-3 奈良県女子師範学校における増課科目 第一部第4学年、第二部第1学年

		1931（昭和6）年度	1932（昭和7）年度	1935（昭和10）年度
一 学 期	1		花の競馬、邦楽の音	
	2		〃、移調	移調
	3	忘れられたお月さん、移調練習	〃、転調	邦楽の音階
	4	〃、音階名称とその特性		〃
	5		〃	関係調
	6	〃、関係調		転調
	7	宿題批評、 1年器楽、4年学会歌練習	〃、富士と桜	
	8	器楽		人声の種類
	9	山を歌ふ、転調について	富士と桜、人声の種類	声楽伴奏 助奏
	10		〃、楽器（オルガンについて）	室内楽と管弦楽
	11	〃、声域・人声について	〃、オルガン（ストップ）	オルガンについて
	12	花の競馬、オルガンについて	藪の花	ストップ
	13	〃、オルガン使用法		各国国歌
	14	器楽練習	海洋行進	〃
	15	〃	〃、海と月光	〃
	16		〃	〃
二 学 期			毎週1時間楽器	
	1	器楽		音楽の形式について
	2	〃	ジョスランの子守歌、音楽の形式について	形式的様式
	3	〃	〃	〃
	4	悲しき鏡、器楽の様式	〃	〃
	5	〃	驚愕、音楽の形式について	〃
	6	〃	〃	内容的様式
	7	〃、器楽の様式		〃
	8	〃	母と子、音楽の形式について	〃
	9		楽器練習	〃
	10	器楽1時間、理論及び歌曲1時間	母と子、理論、楽器	〃
	11	〃	〃	声楽に於ける諸形式
	12	〃		〃
	13	新緑小景		〃、宗教的方面
	14	〃	〃	〃
	15	〃	〃	〃、世俗的方面
	16	ふるさとの	〃	〃
三 学 期	1		夜の平和、教授法	
	2	伊太利国歌	〃	考查、形式初歩
	3	小歌曲1時間	〃	教授法要旨
	4	〃、低学年に於ける教授法	紡ぐ少女、教授法	〃
	5	〃、中学年に於ける教授法	〃	教授法目的
	6	教授要旨、小学教材（生徒実習）	〃	教材
	7	器楽	花の少女、教授法	〃
	8	声音教授の研究、小学教材（生徒実習）	〃	音階
	9	音階教授法、小学教材（生徒実習）	〃	〃
	10		〃	〃
	11	楽譜教授法、小学教材（生徒実習）	〃	音程
	備	毎週1時間器楽	毎週1時間楽器	毎週1時間楽器

出典 平井啓『奈良県音楽近代史——音楽教育を中心に』1995年、364-366頁。

注 下線は筆者による。備＝備考、各学期内において共通して実施されていたこと。

表 I-2-4 奈良県女子師範学校における増課科目 第一部第5学年、第二部第2学年

		1931（昭和6）年度	1932（昭和7）年度	1935（昭和10）年度
一 学 期	1		教授法，小学校教材生徒教授実習	
	2	四匹のお馬，教授法	〃	教授法 1 時間
	3	〃	〃	〃
	4		〃	〃
	5		〃	
	6	さくらんぼ，教授法	〃	
	7	〃	〃	〃
	8	いちご，教授法		
	9	白馬，教授法	バッハ	教材研究，実際授業練習
	10	〃	ヘンデル，月夜のうさぎ（実習）	
	11	〃	グルック	
	12	ままごと，教授法	ハイドン	〃
	13	〃	モツアルト	〃
	14	からすさん，教授法	ベエトオベン	〃
	15	〃	〃	〃
	16			〃
二 学 期	備	教授法，音階練習まで	毎週 1 時間楽器	毎週 1 時間楽器
	1	5 年器楽，二部音程指導につきて	和声について（伴奏作曲基礎）	和声学
	2	世界童謡，5 年器楽，二部リズム，読譜指導	〃	三和音，主三和音
	3	からすさん，ポテト，楽器	〃	〃
	4	5 年大船，二部小学，2 年実際教授		和音の連合
	5	〃		〃
	6			〃
	7			
	8	1 時間曲 5 年器楽 二部教授法	〃	〃
	9	〃		増音程の連合
	10	器楽，奈良県小学唱歌 1 年のもとより	〃	〃
	11	5，6 年までの歌曲数曲練習 実際方法	〃	
	12		〃，第一第二転回和音まで	〃
	13	〃		
	14			和音練習課題
	15	〃	〃，属七の和音まで	〃
	16	〃		〃
三 学 期	備		発声練習，毎週器楽 1 時間	毎週 1 時間楽器
	1	三和音，音の質・名称，さざんかの音名呼称，その他	和声	楽式論，動機について
	2	和音，声の進行形式，さざんか	楽式	一部形式
	3	和声	〃	〃
	4	〃	〃	二部形式
	5	和声練習		〃
	6	伊太利国歌	〃	三部形式
	7		〃	〃
	8	仏国国歌		伴奏の付け方，説明
	9	和声		〃 実習
	10	〃		〃
	備	毎週 1 時間器楽	毎週 1 時間楽器	毎週 1 時間器楽

出典 平井啓『奈良県音楽近代史——音楽教育を中心に』1995 年，366-368 頁。

注 1 学期の 9 週以降は第二部生のみ（第一部生，教育実習のため）。2 学期の 10 週以降は第一部生のみ（第二部生，教育実習のため）
下線は筆者による。備＝備考，各学期内において共通して実施されていたこと。

ちなみに奈良県女子師範学校の基本科目の「音楽」は、若干楽典が含まれる程度で、大部分は歌唱活動によって占められている¹⁸。増課科目の「音楽」に関しても、『奈良教育大学史』に記されている通り、「基本教材ノ補充」と「教材教具ノ研究」が主な指導内容となっている¹⁹。

その他、清水が指摘する群馬県師範学校のように増課科目の中でドルトン案プロジェクト法が実践される例もあった²⁰。しかし、それは例外的で、基本科目の「音楽」の毎週教授時数の不足を解決するために、多くの師範学校の増課科目では奈良県女子師範学校、香川県師範学校のように基本科目の内容を補充、発展した形で進めていたと考えられる。

では、増課科目で音楽を選修した生徒は、全国規模でどのくらい存在したのだろうか。図 I-2-1 は、1931（昭和 6）から 1939（昭和 14）年間の増課科目における音楽選択率である。ここでは男女差が見られ、女子の選択率が高く、半数近く的女子生徒が音楽を選択している。また、男子に関しては第二部の選択率が第一部より高い。

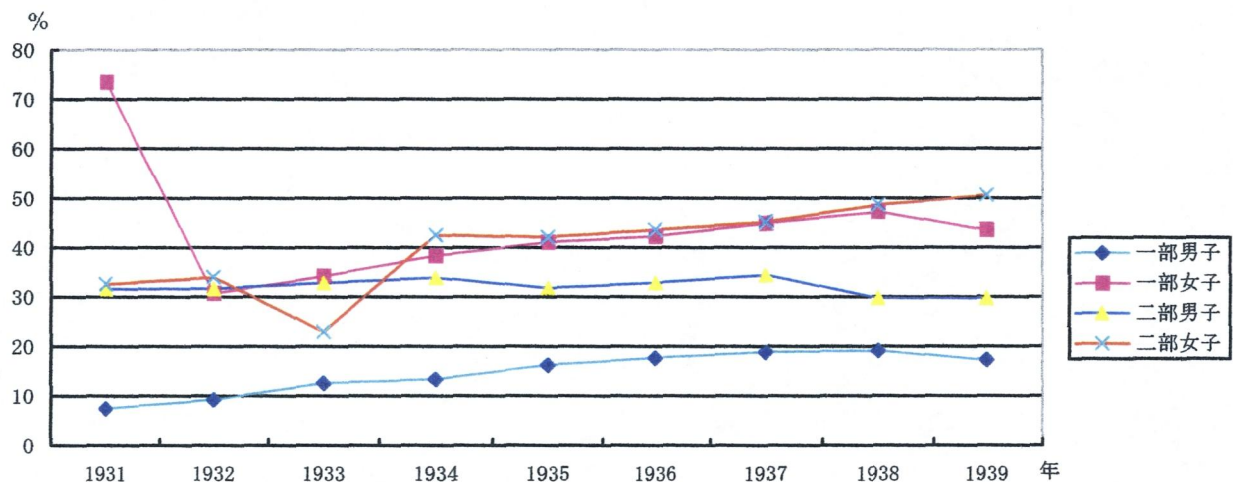


図 I-2-1 増課科目における音楽選択率

出典 『全国師範学校に関する諸調査』第 8 巻、第 9 巻、1987 年から作成。

増課科目で音楽を選択した場合はある程度の授業時数が確保される。しかし、基本科目だけで音楽の履修を終えた場合、小学校において音楽を指導する力が育成できたのだろうか²¹。次節では、1932（昭和 7）年の「師範学校音楽教員協議会」を取り上げ、当時の師範学校の抱えていた課題を探りたい。

第2節 「師範学校音楽教員協議会」(1932)

1932(昭和7)年2月18日から20日にかけて東京音楽学校において、日本教育音楽協会²²主催の「師範学校音楽教員協議会」が開催される²³。師範学校音楽科教員、師範学校附属小学校訓導の76名の他にも参加者があり、総100名程度の集まりとなる²⁴。文部省からは武部普通学務局長、龍山、木村の両督学官、赤間専門学務局長が顔を見せている²⁵。日程は、表I-2-5の通りである。

1932(昭和7)年の『同声会報』第180号には、「第1日は乗杉会長の開会の辞を講演あり引つづき同会長議長席につき文部省諮問案「師範学校の音楽教育を一層有効ならしむべき方案如何」より引つづき十数項の協議題に入つたが其他談話題意見交換、船橋教授の講演、会員の研究発表等の外一同は、新任声楽教師ヴァーハー・ペニツヒ教師の独唱、本校管弦楽や学友会土曜演奏会の見学等があつて各参加者は極めて大きな収穫を得て夫々帰任した」と報告されている²⁶。

表I-2-5 「師範学校音楽教員協議会」の時間割

	8:30— 9:30	9:30— 10:30	10:30— 11:30	11:30— 12:30	12:30— 13:00	13:00— 14:00	14:00— 15:00	15:00— 16:00
18日 (木)	諸事承合 開会式 乗杉会長講演	文部省諮問 案説明 討議	協議題 討議	協議題 討議	休憩 記念撮影	談話題 意見交換	ヴァーハー, ペニツヒ教 師独唱	委員会
19日 (金)	船橋教授講演	協議題 討議	協議題 討議	談話題 意見交換	休憩	会員 研究発表	管弦楽演奏	委員会
20日 (土)	会員 研究発表	談話題 意見交換	委員報告 討議	同上 閉会式				

出典 『同声会報』第182号、1932年、34頁。

以下に文部省諮問案²⁷と協議題を示す²⁸。両方で挙げられている事項には下線を付した。

文部省諮問案

一、法律に関する事項

- 1 師範学校ノ音楽科教授要旨ハ音楽教育全般ノ進運ニ鑑ミ適當ニ改正セラレタキコト
- 2 師範学校ノ音楽科教授要目中左ノ三項ヲ改正セラレタキコト
 - A 楽典ヲ音楽理論ト改メ広ク音楽的知識ヲ養フコト
 - B 器楽ヲ本科第一部第一学年ヨリ課シ得ルヤウ改ムルコト
 - C 音楽史ヲ課スルコト
- 3 基本科目ノ教授時数ヲ本科第一部ニアリテハ各学年ヲ通ジテ毎週二時間トシ、本科第二部ニアリテハ各学年ヲ通ジテ、毎週四時間ニ改正セラレタキコト

ニ、施設ニ関スル事項

- 1 文部省並ニ東京音楽学校ニ於テ師範学校ノ音楽教科書ヲ編纂セラレタキコト
- 2 独立セル音楽高等師範学校ヲ建設セラレタキコト
- 3 文部省ニ音楽課ヲ設置セラレタキコト
- 4 師範学校生徒入学ノ当初ニ於テ音楽的素質有無ヲ吟味スルコト
- 5 師範学校ニ於ケル音楽教育施設ノ改善ニ留意スルコト
- 6 師範学校音楽担当者ヲ県内小学校唱歌科指導ノ委員タラシムルコト

三、教授及ビ研究ニ関スル事項

- 1 音楽教育観ノ確立ニ努ムルコト
- 2 生徒ノ音楽的实力ヲ養ヒ一層自学態度ヲ助成スルコト
- 3 一層基本教練ノ徹底ヲ期スルコト
- 4 全校生徒ノ合唱時間ヲ設クルコト
- 5 自発的音楽団ヲ奨励スルコト
- 6 常ニ音楽ノ善用ニ留意スルコト
- 7 教育音楽研究会ヲ開催シ教師相互ノ修養ニ資スルコト
- 8 健全ナル学校音楽ノ確立ヲ図リ之ガ社会化ヲ期スルコト

協議題

- 一、師範学校音楽科ノ基本科目ノ教授時数ヲ本科第一部ニアリテハ各学年ヲ通ジテ毎週二時間トシ、本科第二部ニアリテハ各学年ヲ通ジ毎週四時間ニ改メタシ

決議 改正ノ必要ヲ認ム。

- 二、小学校ノ唱歌科ヲ各学年ヲ通ジ必ズ毎週二時間宛実施スルノ要ナキカ

決議 必要アリト認ム。

- 三、師範学校ニ於ケル楽器使用法ヲ本科第一部ニアリテハ第一学年ヨリ課スルノ必要ナキカ

決議 師範学校ニ於ケル楽器使用法ハ第一学年ヨリ課スルヲ以テ最モ適當ナリトス。

- 四、師範学校音楽科教授要目中ニ音楽史ヲ加フル必要ナキカ

決議 師範学校音楽科教授要目中ニ音楽史ヲ加フル必要アリト認ム。

- 五、師範学校音楽科主任並ニ附属小学校唱歌科主任ヲ管内小学校ノ唱歌科指導委員タラシムル必要ナキカ

決議 必要アリト認ム。

- 六、小学校令施行規則第九条第二項中ニ「又便宜平易ナル複音唱歌ヲ授クルコトヲ得」ト加フルコトヲ其筋

ニ建議スル件

決議 建議スルヲ適當ト認ム。

七、小学校令施行規則第五十三条中ノ「及尋常小学校第四学年以下ノ唱歌」ノ十五字ヲ削除スルノ必要ナキカ

決議 小学校令施行規則第五十三条中ノ「及尋常小学校第四学年以下ノ唱歌」ノ十五字ハ速ニ之ヲ削除スルノ必要アリト認ム。

八、師範学校生徒ノ員数ト練習楽器ノ設備数トノ適当ナル割合如何

決議 師範学校生徒ノ員数ト練習楽器ノ設備数トノ適当ナル割合ハ最少限度八人ニ一台宛トス。

九、師範学校及小学校ニ於テ鑑賞教材トシテ使用スルレコードヲ検定スル必要ナキカ

決議 師範学校及小学校ニ於テ鑑賞教材トシテ使用スルレコードヲ検定スル必要アリト認ム。

十、師範学校ノ音楽科教科書ヲ編纂セラレンコトヲ其筋ニ建議スル件

決議 建議ノ必要ヲ認ム。

十一、小学校ノ体操科ニ使用スル遊戯教材並ニ学校劇ノ名ニ於テ行ハルル歌曲ヲ検定スル必要ナキカ

決議 小学校ノ体操科ニ使用スル遊戯教材並ニ学校劇ノ名ニ於テ行ハルル歌曲ヲ検定スル必要アリト認ム。

十二、師範学校音楽科設備充実費ヲ交付セラレンコトヲ文部省ヘ建議スルノ件

決議 建議ノ必要ヲ認ム。

文部省諮問案、協議題ともに議題に挙がっているのは、授業時数、環境設備、教科書、器楽、音楽史、小学校に関することである。ここでは本章の流れ上、授業時数に限定して取り上げたい。基本科目の音楽として、第一部においては毎週2時間、第二部においては毎週4時間も要求している。以下の理由が添えられ、少ない授業時数にもかかわらず、取り扱う内容が多く、十分な指導ができていないという現状を訴えている。少々長いけれども、引用する²⁹。

国民教科ニ於ケル音楽科ノ重要性ニ鑑ミ、此ヲ指導スベキ教師ノ実力ハ相当優秀ナラザルベカラザルハ論ヲ俟タズ。然ルニ現行法令ニ於テ教授スベキ事項ハ頗ル多ク、之ニ充当スル時間ハ甚ダ少シ、例セバー学期ニ歌曲七曲ヲ教授スルトシテモ最モ効果ヲ収ムルニハ平均一曲三時間ヲ要シ、從テ唱歌ノミニ二十一時間ヲ費スベク更ニ楽器検閲ニ於テ一学級四十人定員トシ、一学期一人三回（一時間十人）検閲スルトシテ十二時間ヲ要ス。其ノ他声楽ニ於テ基本練習、教材ノ研究、楽器ニ於テ楽器使用法指導、理論ニ於テ楽典、和声学初歩、楽式初歩、小学校唱歌教授法、指揮法、鑑賞教授等ナスベキ事極メテ多ク、到底現今ノ状態ニ於テハ此等ヲ教授シ得ザルコト火ヲ睹ルヨリモ明カナリ。カルガ故ニ師範学校教科目中音楽科ノ実績極メテ不振ニ陥リ、卒業生ニ対スル非難ノ百出スル所以モ亦実ニ此ニアルナリ。尚修業年限四箇年当時ニアツテハ本科ノ授業時数ハ、第一学年ヨリ四箇年ヲ通ジ、毎週二時間ノ配当ニシテ、四箇年ノ延時数ハ四百四十時間ナリシナリ。然ルニ往年師範学校令ノ改正ニ際シ、修業年限五箇年ニ延長サレシニ拘ハラズ、音楽科ノ教授時間ハ却テ削減セラレ、第三学年以上ハ僅ニ一時間トナリシ為メ、本学科ノ授業総時間数三百八十五時間トナリ、此ヲ延

長ノ為メ増加スベカリシ時間ニ比較セバ、実ニ百十時間ノ減少トナレリ。而モ刻々ニ進歩スル今日ノ時勢ニアリテハ、到底其ノ進運ニ伴フ実績ヲ得ラレザルコト明カナリ。又男子二部生ニ至ツテハ卒業後一部生ト何等異ナルコトナキ教育ノ実務ニ従事スルモノナレバ、一部生ト同程度ノ時間ヲ要スルコトハ当然ト思惟ス。然ルニ事実ハ、教授時間数二百二十時ニシテ一部生ノ第二学年ヲ修業シタルニ相当セリ。此モ本来一週三時間ナリシヲ削減サレテ一週ニ時間トナリタルモノナリ。女子二部生ニアリテハ男子二部生ニ比シ少々程度ヲ異ニスルモ、素ヨリ師範教育上ノ見地ヨリセバ不充分タルヲ免レズ。殊ニ器楽ニ於テ甚ダシキヲ見ル。依テ時代ニ適応セル教育ヲ施サンガ為メ、音楽科ノ教授時数ヲ改正セラレンコトヲ望ムモノナリ、

別の角度から読むと、師範学校の歌唱指導では1曲を3時間かけて指導すること、器楽指導では一人あたりのレッスン（当時は「検閲」を使用）時間は、6分程度で1学期に3回程行うのが標準であったことが分かる。

ところで、上田誠二は、「第一次大戦後の公教育は、実科教育の重視と国民道德の徹底とを掲げていたのだが、ここで重要なことは、そうした動向が音楽の教授時数の削減を招いた」と述べている³⁰。確かに表I-2-6を見ると、1925（大正14）年の改正で、師範学校においても音楽の教授時数が削減されている³¹。1931（昭和6）年の改訂では若干の内容の追加があったにもかかわらず、授業時数の回復はなされていない。授業時数削減に対する音楽教師たちの不満が日本教育音楽協会設立の引き金であった。したがって、日本教育音楽協会が主催するこの「師範学校音楽教員協議会」の出席者の最大の関心事は、授業時数の増加の請願であったと考えられる。別の見方をすれば、1931（昭和6）年でも授業時数が据え置かれたということから、文部省は音楽に対してさほど期待を寄せていなかったと推察される。

表I-2-6 師範学校における音楽の毎週教授時数の推移

学年 年	男子 第一部		男子 第二部		女子 第一部		女子 第二部		備考
	学年 時数	平均 時数	学年 時数	平均 時数	学年 時数	平均 時数	学年 時数	平均 時数	
1910 (M43)	(2)-2-2-2-2	2	2	2	(2)-2-2-2-2	2	2-1 or 2	1.75	
1925 (T14)	2-2-1-1-1	1.4	2	2	2-2-2-1-1	1.6	2-1 or 1	1.25	
1931 (S6)	2-2-1-1-1	1.4	2-2	2	2-2-2-1-1	1.6	2-2	2	+増課科目
1943 (S18)	(2)-(2)-2-2-2	2			(2)-(2)-2-2-2	2		2	+選修教科

出典 『明治以降教育制度発達史』第五巻、第七巻、1939年、『近代日本教育制度史料』第五巻、1956年から作成。

注 学年時数は各学年の時数。左側が若い学年。()内は予科の毎週教授時数。各欄の右端は毎週教授時数の平均。

1943年、官立専門学校程度昇格に伴い、第一部、第二部の区分がなくなる。ここでは便宜上第一部の欄に毎週教授時数を記入した。

下線は筆者による。

なお、1937（昭和12）年3月にも「師範学校教授要目」が改訂された（文部省訓令第八号）。しかし、「修身」「公民科」「国語漢文」「地理及歴史」の改正のみで、音楽についての変更点はない³²。その後、1941（昭和16）年3月、「師範学校教授要目中改正」（文部省訓令第八号）が行われ、「小学校ニ於ケル唱歌」を「国民学校ニ於ケル芸能科音楽」と用語が改められた³³。

- 1 日本近代教育史料研究会編『資料 文政審議会 第一集 総覧』明星大学出版部, 1989年, 140-142頁。なお, 諮詢第十二号「師範教育改善ニ関スル件」については, 清水康幸『教育審議会の研究 師範学校改革』野間教育研究所紀要第42集, 2000年, 43-54頁, が詳しい。
- 2 文部省教育調査部『師範教育関係法令の沿革』1938年, 525-542頁。
- 3 文部省『師範教育関係法令の沿革』546-611頁。
- 4 村村恵祐「初等教員の養成」中島太郎編『教員養成の研究』第一法規出版, 1961年, 135-136頁。
- 5 林三平「教員養成構想の変容と制度の改革」仲新監修『学校の歴史 第5巻 教員養成の歴史』第一法規出版, 1979年, 68-69頁。
- 6 清水康幸『教育審議会の研究 師範学校改革』野間教育研究所紀要第42集, 2000年, 120頁。
- 7 教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』第七巻, 1939年(1964年重版使用), 教育資料調査会, 656頁。
- 8 教育史編纂会, 前掲書, 755頁。
- 9 文部省『師範教育関係法令の沿革』1938年, 546頁。
- 10 広島大学二十五年史編集委員会『広島大学二十五年史包括校史』広島大学, 1977年, 605-608頁。なお, 「広島県男子師範学校」1931(昭和6)年では, 「基本教材ニ於ケル教授事項ニ基キソノ程度ヲ進メタルモノヲ課ス」と規定されている(599, 601頁)。
- 11 香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会『香川大学教育学部百年のあゆみ』香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会, 1989年, 86-87頁。
- 12 香川県師範学校音楽科教諭, 金光武義氏の教師メモ。金光氏は, 1941(昭和16)年3月, 東京音楽学校甲種師範科を卒業後, 香川県師範学校に1944(昭和19)年12月まで勤務した。増課科目が設けられていたのが, 1931(昭和6)年度から1942(昭和17)年度までであるので, 1941(昭和16)年度か1942(昭和17)年度に記されたメモであると推定する。
- 13 香川県師範学校音楽科教員の金光武義氏(2003年10月1日, 於:岡山市の金光邸)や1942(昭和17)年3月に香川県師範学校本科第一部を卒業した故田山清美氏(2005年3月16日, 於:全日空ホテルクレメント高松)の証言によると, 増課科目の「音楽」は, 音楽に対する興味, 関心の強い生徒が選択し, 基本科目より高度な内容が展開されたとのことである。両人とも「検閲」(個人レッスン)の印象が強く残っており, 金光氏は「増課科目はけっこう専門的でした。中には優秀な生徒ですと, 卒業後東京音楽学校へ進み, もう退官しましたが, 大学の先生になった生徒もいます」と語る。田山氏は「ヴァイオリンを演奏した」と語る。
- 14 平井啓『奈良県音楽近代史——音楽教育を中心に』1995年, 364-368頁。
- 15 奈良教育大学創立百周年記念会百年史部編『奈良教育大学——百年の歩み』1990年, 368頁。
- 16 文部省『全国師範学校ニ関スル諸調査』教育統計・調査資料集成, 第八巻, 大空社, 1987年。
- 17 平井啓『奈良県音楽近代史——音楽教育を中心に』1995年, 364-368頁。
- 18 平井, 前掲書, 353-364頁。
- 19 男子生徒が通う奈良県師範学校の増課科目については, 奈良県師範学校『奈良県師範学校五十年史』1940年(1988年復刻版, 第一書房), 293-294頁の「昭和9年当校教育の方針」の中に以下のように記されている。
一, 本科第二部一, 二学年は左の各段中より夫々一科目を選びて一科目毎週二時間宛合計八時間学習せしむ, 但し二重線上の科目は二科目組合せのまま履修することを要す,

国語漢文一習	字	英	語	図	書
地 理一歴	史	数	学	手	工
物理化学一博	物	農	業	音	楽

二, 本科第一部四, 五学年生は未だ旧制度によれるものなれども, 改正師範学校規定の趣旨を酌みて歴史(五年は物化)英語, 国語, 漢文各一時間を減じて第一項表二十線上の組合せ科目を選択毎週合計四時間を履修せしむ,
三, 専攻科にありては(以下略),
- 20 群馬大学教育学部百年史編修委員会編『群馬大学教育学部百年史』1979年, 340頁(清水, 前掲書, 120-121頁)。
- 21 供田武嘉津は, 文部省『新訂尋常小学唱歌』が発行された1932(昭和7)年前後の時期について次のように著している。「当時の師範学校音楽科では, 一般的に, 『新訂尋常小学唱歌』の伴奏をこなすほどの音楽的技能が養成されてはいなかったのである。伴奏はともかくとしても, 多岐にわたる調の視唱に, まがりなりにも対応しうる一般教師はきわめて寥々たるものであった」(供田武嘉津『日本音楽教育史』音楽之友社, 1996年, 362頁)。
- 22 日本教育音楽協会は, 1922(大正11)年12月創立。小山作之助が初代理事長に就任, 1923(大正12)年1月31日に『教育音楽』創刊号を刊行した(木村信之『音楽教育の証言者たち上 戦前を中心に』音楽之友社, 1986年, 60-63頁)。日本音楽教育協会の成立事情と果たした役割を分析した研究として, 山住正巳「昭和初期の音楽教育」『音楽教育研究』11, 音楽之友社, 1966年, 12-19頁, がある。日本教育音楽協会設立時から大正末までの時期における日本音楽教育協会の動向を分析した研究としては, 上田誠二「第一次世界大戦後日本の音楽教育運動——日本教育音楽協会の設立と展開」歴史学研究会編『歴史学研究』No.799, 青木書店, 2005年, 1-20頁・64頁が挙げられる。
- 23 同声会編集部『同声会報』第181号, 1932年, 32頁。
- 24 同上, 32-34頁。同声会編集部『同声会報』第180号, 1932年, 22頁。
- 25 同声会編集部『同声会報』第180号, 1932年, 22頁。
- 26 同上。

-
- 27 同声会編集部『同声会報』第181号, 1932年, 35-37頁。
- 28 同上, 38-44頁。
- 29 同上, 38-39頁。
- 30 上田, 前掲書, 4頁。
- 31 1925(大正14)年4月1日の「師範学校規定中改正ノ要旨及施行上ノ注意事項」(文部省訓令第四号)では次のように説明されている。「習字, 手工, 音楽ノ如キ技能ノ時数ヲ減少シタルノ觀アレトモ是等ノ学科目ノ本来実習ヲ必要トシ且人々巧拙能不能ノ差多キモノナレハ実習ハ課程表ノ時数外ニ於テ尚之ヲ課スコトヲ認メ当事者ヲシテ生徒ノ能力ヲ斟酌シテ適宜ニ奨励セシムルノ余地ヲ置キタルモノニシテ決シテ技能ノ価値ヲ輕視シタルノ結果ニアラサルナリ」(文部省教育調査部『師範教育関係法令の沿革』1938年, 430頁)。なお, 1925(大正14)年の「師範学校規定中改正」「師範学校教授要目改正」については, 清水, 前掲書, 110-116頁, が詳しい。
- 32 石川謙代表『近代日本教育制度史料』第五卷, 1956年, 540-567頁。
- 33 同上, 570-571頁。

第3章 官立専門学校昇格後における師範学校の音楽教育（1943－1945）

本章では、1943（昭和18）年4月から1945（昭和20）年8月における官立師範学校の音楽教育を制度の視点から明らかにすることを目的とする。

序論でも述べた通り、師範学校の官立専門学校程度昇格を扱った先行研究としては、高木太郎¹（1959）、内堀玉男²（1961）、逸見勝亮³（1972）、寺崎昌男⁴（1974）、小沢熹⁵（1974）、林三平⁶（1979）、横畑知己⁷（1987）、清水康幸⁸（2000）等がある。これらの研究では次の点が指摘されている⁹。

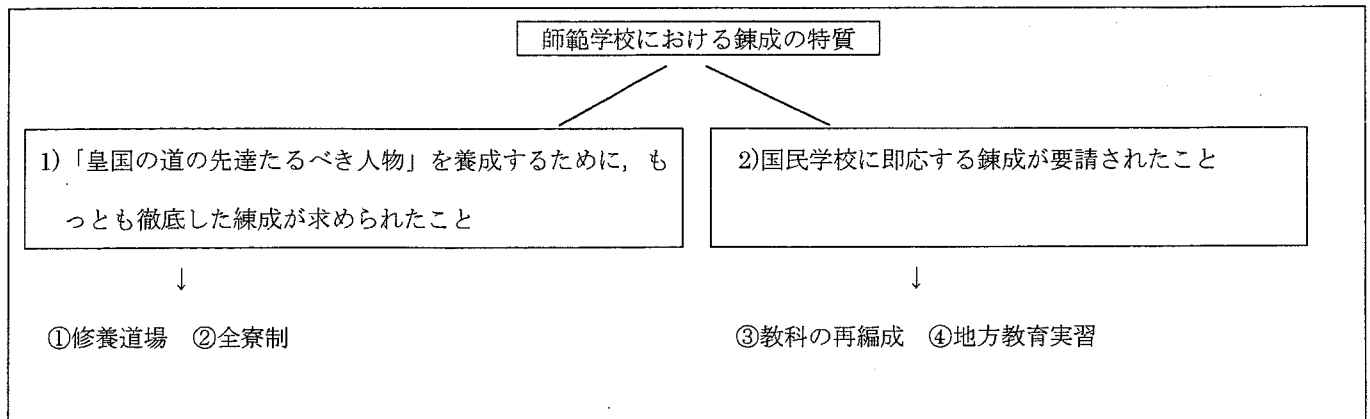
- 1)官立化および専門学校程度への昇格…本科3年・予科2年
- 2)学校の統合…男子部・女子部の設置
- 3)公費養成の明確化…自費生を廃止し、全生徒を公費により養成
- 4)研究科の設置…国民学校の指導的教員の養成
- 5)附属学校の重視…国民学校教育の指導および研究機関

中でも、横畑は、昇格運動の歴史的意義として次の3点を挙げている¹⁰。

- 1) 43年の学制改革が全体として年限短縮を課題としていた状況下で、官立専門学校程度への師範学校の昇格という根本的制度改革の実現に於て決定的な役割を果たしたこと。
- 2) 教師像の問題に関連して「師範型」批判に対して当事者の立場から主体的に克服しようとする発想を示したこと。
- 3) 学科課程論に於て「万遍主義」の克服を大胆に提起したこと。

しかしながら、逸見の研究で端的に明らかにされているように、戦時体制下の教育機能の崩壊により、昇格時に打ち出された内容はほとんど実行されずに終わってしまったのである。

なお、横畑は、1943（昭和18）年の「師範教育令改正」について「師範学校における「錬成機構」の完成を意味するものであった」と捉えている¹¹。横畑の主張について筆者は図I-3-1を作成した。



出典 横畑知己「教員養成諸学校」寺崎昌男編『総力戦体制と教育』1987年から作成。

図 I-3-1 横畑の指摘する師範学校における錬成の特質

図 I-3-1 を香川県師範学校の事例を照合させると、①の修養道場である「石清尾修錬道場」は、1939（昭和 14）年 10 月に完成した。宿泊訓練が開始されたのは 1940（昭和 15）年である¹²。②の全寮制となったのは、1933（昭和 8）年度入学生からである¹³。④の地方教育実習については、1942（昭和 17）年度から実施されていた¹⁴。

③の教科の再編成について、横畑は、「国民科」と「理数科」の国定教科書の分析を通して教科の再編成を論じている¹⁵。本章では、「芸能科」の中の「音楽」のカリキュラムを明らかにするのが主な作業である。しかし、ここでは、法令分析に留め、教科書分析は第Ⅱ部に譲りたい。

第 1 節 専門学校程度昇格後のカリキュラム

1. 「師範教育令改正」

新制師範学校の骨格は 1942（昭和 17）年 1 月 6 日の閣議決定（発普三〇〇号）¹⁶ならびに 8 月 14 日の閣議決定「師範教育制度の刷新に関する要項」¹⁷によって定められた¹⁸。

1943（昭和 18）年 3 月 8 日、「師範教育令改正」（勅令第百九号）が公布された¹⁹。師範学校に関する第十一条までを以下、抜粋する。

第一章 師範学校

第一条 師範学校ハ皇国ノ道ニ則リテ国民学校教員タルベキ者ノ錬成ヲ為スヲ以テ目的トス、

第二条 師範学校ハ官立トス、

第三条 師範学校ニ男子部及女子部ヲ置ク、但シ土地ノ状況ニ依リ男子部又ハ女子部ノミヲ置クコトヲ得、

第四条 本科ノ修業年限ハ三年トシ予科ノ修業年限ハ二年トス、

第五条 本科ニ入学スルコトヲ得ル者ハ当該学校予科ヲ修了シタル者、中学校若ハ高等女学校ヲ卒業シタル者又ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依リ之ト同等以上ノ学力アリト認めラレタル者トス、

予科ニ入学スルコトヲ得ル者ハ国民学校高等科ヲ修了シタル者又ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依リ之ト同等以上ノ学力アリト認メラレタル者トス、

第六条 師範学校ノ編制、教科、教授訓練、教科用図書、生徒ノ入学、退学、懲戒、学資ノ給与及卒業後ノ服務等ニ関スル規定ハ文部大臣之ヲ定ム、

第七条 師範学校ニ於テハ授業料ヲ徴収セズ、

第八条 師範学校ニハ師範学校ヲ卒業シタル者ノ為ニ研究科ヲ置クコトヲ得、
研究科ニ関スル規定ハ文部大臣之ヲ定ム、

第九条 師範学校ニ附属国民学校ヲ置ク、
師範学校ニ附属幼稚園ヲ置クコトヲ得、

特別ノ事情アル場合ニ於テハ国民学校ヲ以テ附属国民学校ニ代用スルコトヲ得、

第十条 国民学校令第一条乃至第四条、第五条第一項及第三項、第六条、第七条、第十四条並ニ第二十条ノ規定ハ附属国民学校ニ之ヲ準用ス、

幼稚園令第一条、第六条及第十三条ノ規定並ニ国民学校令第二十条ノ規定ハ附属幼稚園ニ之ヲ準用ス、

第十一条 附属国民学校ノ児童ノ入学及退学、授業料等ニ関スル規定並ニ附属幼稚園ノ幼児ノ入園及退園、保育料等ニ関スル規定ハ文部大臣之ヲ定ム、

また、4月1日には「師範教育改正ニ際シテノ訓令」(文部省訓令第九号)が発せられ、新制度の趣旨について以下の8点が挙げられている²⁰。

- 一、皇国ノ道ノ先達タルベキ人物ノ鍊成ヲ為スコト
- 一、学校ノ程度ヲ高ムルト共ニ官立トセルコト
- 一、学校ノ組織ヲ整備シタルコト
- 一、教科体系ヲ樹立シ其ノ内容ヲ刷新セルコト
- 一、教育実習ノ指導要目ヲ編成シタルコト
- 一、修練課程ヲ編成シタルコト
- 一、教科用図書ヲ国定トシタルコト
- 一、研究科ヲ設置シタルコト

1943(昭和18)年3月8日には、文部省は「師範教育令改正」に伴い、「師範学校規定」(文部省令第六号)を新たに公布した²¹。全八十七条ある内、本研究に関連のある条項を掲げる(下線は筆者による)。

第一条 師範学校ニ於テハ教育ニ関スル勅語ノ旨趣ヲ奉体シ師範教育令第一条ノ本旨ニ基キ左ノ事項ニ留意

シテ生徒ヲ教育スベシ、

一 国体ノ本義ヲ闡明シ皇国ノ使命ヲ自覺セシメ皇国ノ道ノ先達タルノ修練ヲ積ミ至誠尽忠ノ精神ニ徹セシムベシ、

二 教学ノ本義ヲ体得セシメ身ヲ教職ニ挺シテ国本ニ培ヒ皇謨ヲ翼賛シ奉ル信念ヲ涵養スベシ、

三 学行ヲ一体トシテ心身ヲ修練セシメ国民練成ノ重キニ任ズルノ徳操識見ヲ涵養シ師表タルノ資質ヲ鍊成スベシ、

四 挙校一体修文練武ニカマルノ風ヲ振作シ闊達ニシテ質実剛健ヲ尚ビ協同ト勤勞ヲ重ンズルノ氣風ヲ作興スベシ、

五 教育ヲシテ特ニ国民生活ノ實際ニ適切ナラシムルト共ニ実践體驗ニ依ル學習ヲ基礎トシテ自發研究ノ態度ヲ育成スベシ、

六 教育内容ノ全体的統一ニ意ヲ用ヒ学校ノ全施設ヲ挙ゲテ人物練成ノ一途ニ帰セシムベシ、

第二条 本科ノ教科ハ男子部ニ在リテハ国民科，教育科，理数科，実業科，体鍊科，芸能科及外国語科トシ，女子部ニ在リテハ国民科，教育科，理数科，家政科，体鍊科，芸能科及外国語科トス，

第三条 本科ノ教科ハ之ヲ分チテ基本教科及選修教科トス，

基本教科トシテハ前条ニ掲グル各教科（外国語科ヲ除ク）ヲ必修セシム但シ実業科ニ在リテハ其ノ一科目又ハ数科目トス，

選修教科トシテハ前条ニ掲グル教科ノ一ヲ選修セシム，但シ必要ニ依リ特定ノ科目ノミヲ選修セシメ又ハ異ナル教科ニ属スル科目ヲ併セ履修セシムルコトヲ得，

外国語科ハ英語，独語，仏語，支那語又ハ其ノ他ノ外国語ノ内其ノ一ヲ選修セシム但シ必要ニ依リ他ノ外国語ヲ併セ履修セシムルコトヲ得，

「師範学校規定」で規定されている本科の毎週教授時数を表 I-3-1，予科の毎週教授時数を表 I-3-2 に示す。

表 I-3-1 1943（昭和 18）年師範学校規定における本科の毎週教授時数

学年 学科目				男子部								女子部			
				1 年	2 年	3 年	計					1 年	2 年	3 年	計
基本 教科	国民科	修身公民	2	2	4	8	基本 教科	国民科	修身公民	2	2	4	8		
		哲学	4	2	2	8			哲学	4	2	2	8		
		国語漢文	3	2	2	7			国語漢文	3	2	2	7		
	教育科	歴史	2	2	3	7		教育科	歴史	2	2	3	7		
		地理	3	2	1	6			地理	3	2	1	6		
		教育心理衛生	2	2	1	5			教育心理衛生	2	2	1	5		
理科	数学象物	5	3	3	11	理科	数学象物	5	3	3	11				

実業科	農業工業 商業水産	3	3	3	9	家政科	家庭保健 育児被服 農芸	3	3	3	9
体錬科	教体武 練操道	2 4	2 4	2 4	6 12	体錬科	教体武 練操道	4	4	4	12
芸能科	音書図工 楽道画作	2 1 3	2 1 3	2 2 3	6 2 9	芸能科	音書図工 楽道画作	2 1 2	2 1 2	2 2 2	6 2 6
合 計		36	30	30	96	合 計		36	30	30	96
教育実習				凡そ 12 週		教育実習				凡そ 12 週	
選修教科	国民科		3-6	3-6		選修教科	国民科		3-6	3-6	
	教育科		3-6	3-6			教育科		3-6	3-6	
	理数科		3-6	3-6			理数科		3-6	3-6	
	実業科		3-6	3-6			家政科		3-6	3-6	
	体錬科		3-6	3-6			体錬科		3-6	3-6	
	芸能科		3-6	3-6			芸能科		3-6	3-6	
	外国語科		3-6	3-6			外国語科		3-6	3-6	
合 計			6	6	12	合 計			6	6	12
修 練		4	4	4	12	修 練		4	4	4	12
総 時 数		40	40	40	120	総 時 数		40	40	40	120

出典 石川謙『近代日本教育制度史料』第五巻，1956 年，591-593 頁から作成。

表 I-3-2 1943（昭和 18）年師範学校規定における予科の毎週教授時数

学年 学科目			男子部				女子部			
			1 年	2 年		計	1 年	2 年		計
国民科	修 身	語 史	1	1		2	国民科	修 身	語 史	1 1 2
	国 歴	地 理	5	5		10	国民科	国 歴	地 理	3 5 8
	地 理		4	3		7	国民科	地 理		4 3 7
理数科	数 物	学 象	4	5		9	理数科	数 物	学 象	4 4 8
	物 生	物	6	6		12	理数科	物 生	物	5 6 11
							家政科	家庭保健 育児被服		4 4 8
							家政科	家庭保健 育児被服		4 4 8
体錬科	教体武	練操道	3	3		6	体錬科	教体武	練操道	4 4 8
			4	4		8	体錬科	教体武	練操道	4 4 8
芸能科	音 書	楽 道	2	2		4	芸能科	音 書	楽 道	2 2 4
	図 画	画 作	1	1		2	芸能科	図 画	画 作	1 1 2
	工 作		3	3		6	芸能科	工 作		2 2 4
外国語科			3	3		6	外国語科			(2) (2) (4)
合 計			36	36		72	合 計			34 36 70
修 練			4	4		8	修 練			4 4 8
総 時 数			40	40		80	総 時 数			40 40 80

出典 石川謙『近代日本教育制度史料』第五巻，1956 年，591-593 頁から作成。

注 女子部の「外国語科」は選択のため，（ ）で表記。女子部の第 1 学年の総時数が合わないけれども資料の通り掲載した。

以下は、毎週授業時数に対する清水康幸の指摘を要約したものである²²。

本科について

- 1) 基本教科がきわめて重要視されている。
- 2) 教育実習の期間が大幅に増大している。
- 3) 理数科（特に物象・生物）、体錬科、芸能科、家政科（女子）に集中的に時間配分がなされている。
- 4) 教育科の時間配分がほとんど増えていない。
- 5) 国民学校の教科目編成の論理に従属させた学科課程。

予科について

- 1) 国民科、外国語の時間配分が減っている。
- 2) 理数科、体錬科、芸能科の時間配分が増大している。

清水は、「予科の場合も本科と同様の傾向がうかがえる。すなわち、理数科、体錬科、芸能科などを増やした上で修練を特設し、そのぶん国民科や外国語を減らす」とくくっている²³。

ここで国民学校に目を向けたい。水原克敏は、国民学校のカリキュラムについて「主知的な教科の時間数が減少して、実業的・技能的教科の時間数が増大した」と指摘し、「体錬科と芸能科音楽重視」の特徴を挙げている²⁴。その理由については、文部省「国民学校教則案説明要領」（1940）の中において次のように説明されている²⁵。

尚今回の課程表に於て著しく教授時数を増加せるは芸能科音楽と体錬科とである。前者は音楽が国民的情操の涵養上並びに聴覚の育成に於て重要な地位を占むるにより、後者は体位の向上が国力の発展に至大の関係を有するが為である。

「国民的情操の涵養」について、文部省督学官の松久義平は次のように述べている²⁶。

従来往々にして唱へられた美感至上主義の考へ方より脱却し、音楽をして文字通り国民的ならしめることが肝要である。即ち歌詞及び楽曲は快活純美にして児童の程度に應ずるものなるとともに、力めて国民的感情の豊かなるもの、児童の士気を鼓舞し乃至大国民的気迫に富めるもの等を選び、国民としての情操を醇化し、大国民たるの性格陶冶に資するものたらしめねばならぬ。由来音楽は直接情意に訴へて魂の根底より動かす力を持つてをり、国民錬成の上には大なる効果があるのであつて、この点特に留意せらるべきであると考え

また、松久は「聴覚の育成」について次のように述べている²⁷。

聴音の練習が音楽の基礎として大切なるはいふまでもないが、特に音に対する鋭敏なる感覚を訓練することは国防その他にも必要とせられるものである。

1943（昭和 18）年 5 月 10 日、文部省は新制度実施以来初の全国師範学校長会議を開催した²⁸。その中で、岡部文部大臣は、新制度運営に関する心構えとして次の 3 点を発言している²⁹。

- 一、学校一体、剛健闊達な校風の発揚を期すと共に学校の全施設を挙げて人物錬成の一途に帰せしむべきこと、
- 一、その根底たるべき理念は飽くまで皇国の真姿の認識体得にあること、
- 一、国民学校における科学教育振興の前提として師範学校は極力科学技術に関する教育を徹底強化すべきこと、

この会議では芸術教育に関する内容については触れられていない。しかし、「教科の全体的関連に意を用ひ、教科統合の趣旨を達成すると共に、教授修練の一体化に努め、学校の全施設を挙げて人物錬成の一途に帰せしめねばならぬ」と主張され、教科教育であっても精神教育との関係が強調されている³⁰。

次に、『岡山師範学校一覧』（自昭和十八年至昭和十九年）所収の「岡山師範学校規則」の一部を掲げる³¹（下線は筆者による）。

第一章 本科予科及専攻科

第一節 学期及授業ヲ行ハザル日

第一条 学期ハ之ヲ左ノ三学期ニ分ツ、

第一学期 自四月一日 至八月三十一日

第二学期 自九月一日 至十二月三十一日

第三学期 自一月 1 日 至三月三十一日

第二条 授業ヲ行ハザル日ハ左ノ如シ、

一、一月一日及昭和二年勅令第二十五号ニ依ル祭日祝日及皇后陛下御誕辰

二、日曜日

三、夏 季 自七月二十五日 至八月二十三日

四、冬 季 自十二月二十四日 至一月七日

五、学 年 末 自三月二十五日 至三月三十一日

六、開校記念日 六月一日

第三条 本科ノ教科ハ師範学校規定第二条及第三条並ニ昭和十八年文部省訓令第六号ノ定ムル所ニ依ル、
実業科ニ在リテハ農業及商業ヲ課ス、

外国語科ハ支那語、独逸語、英語ノ中一ヲ選択履修セシム、

第四条 男子部本科ノ専修教科ニ在リテハ一教科ヲ履修セシム（甲号表ニ依ル）

第五条 予科ノ教科ハ師範学校規定第十三条ニ依ル、

外国語科ハ英語ヲ履修セシム、

第六条 女子部専攻科ノ専修教科ニ在リテハ異ナル教科ニ属スルニ教科ヲ履修セシム（乙号表ニ依ル）

甲号表

教 科	時 数
国民科	一二
教育科	一二
理数科	一二
実業科	一二
芸能科	一二
体錬科	一二

乙号表

教 科	時 数	一二
国民科	六	
教育科	六	
理数科	六	
家政科	六	
芸能科	六	
体錬科	六	

第三節 成績考查

第七条 生徒ノ成績ハ教科成績、修練成績及教育実習成績並ニ性行、出欠状況及身体状況等ヲ総合シテ之ヲ定ム、

第八条 教科成績ハ平素ノ課業勤怠及考查ノ成績ヲ参酌シテ之ヲ定ム、

第九条 修練成績ハ平素ノ行状及所定ノ修練ノ状況ニヨリテ之ヲ定ム、

第十条 成績考查ニ関スル細則ハ別ニ之ヲ定ム、

「授業規定」は以下の通りである（『岡山師範学校一覧』所収）³²。

授業規定

第一条 生徒ハ授業ノ始及終ニ於テ教官ニ対シ起立敬礼スベシ、

敬礼ハ学級週番ノ指揮ニヨツテ之ヲ行フ、

第二条 授業中ハ教官ノ許可ナクシテ教場外ニ出ヅベカラズ、

第三条 受持教官定刻ニ至ルモ教場ニ出場セザル時ハ週番ハ教官ノ在所ニ至リ連絡ヲナスベシ、若シ教官ノ在所不明ナル場合ハ教務課ニ問合せ其指揮ヲ受クベシ随意退散スベカラズ、

第四条 課業上必要ナル物品ノ外ハ一切教場内ニ携帯スベカラズ、

上記の「岡山師範学校規則」第四条から、岡山師範学校（男子部）の選修教科は、「師範学校規定」第三条で謳われている「教科ノ一ヲ選修セシム」の方法を採っていることが分かる。選修教科について、文部省師範教育課長の稲田清助は以下のように説明している³³。

大体専門学校程度の学校でありますから、これに入つて参ります生徒におきましても、それ位の年齢のものとしてそれぞれ嗜好も分れ特性をも有つております。然しながら師範学校は全科担任たるべき国民学校教員を養成いたしますのでありますからあらゆる教科目の全般にわたつて修得せしめるのは勿論必要のことでありますが、その上に或教科或ひは或る科目を特に精深なる程度に於て修得せしめるといふ方法を講ずることが適當であると考えたのがこの選修教科の制度であります。また卒業したものが国民学校に入つて参りまして職員構成の一員となる点を考へましてもいろいろな教科目に特長を有つてをりますものが集まつて国民学校の職員構成を成すといふことも必要であるといふ見地から致しましてさうした選修教科と云ふ課程を設けましたわけであります。選修教科におきましては相当精深なる程度において専攻せしむることになるであらうと思ふのであります。

1931（昭和6）年の「師範学校規定中改正」においても増課科目が設けられていたことから、選修教科の制度は名称が変わっただけでことさら真新しい改革ではない。稲田の発言はやや誇張している。しかし、下線部分で示したように全教科担当する国民学校教員であっても柱となる専門教科を有していることが望ましいと提言した点は注目に値する。つまり、戦後多くの教員養成大学の小学校教員養成課程で導入された「ピーク制」の基になる考えが、稲田の発言に表れている。

ところで教科の再編成について、文部省の稲田は次のように述べている³⁴。

従来各学科目が平面的に羅列されてをつた形でありますが国民学校の教育に対応いたしまして師範学校に於ても錬成面を幾つかの教科に分つて更にその中に文節として科目を立て全一的な錬成を行つて行く、専門学校程度の学校で斯の如く教科に分けることは全く初めての試みであり、而もこの各教科たるや、日本の新なる教学であります。

横畑は、上記の引用に対し、「新制師範学校に於ける教科の再編は、「全一的な錬成」を行うためのものであり、国民学校の教科構成に即答するものであった。と同時に、それは「日本の新なる教学」を内容として、専門学校程度の学校を構想する初めての試みであった」と捉えている³⁵。次項では、再編された「芸能科音楽」に着目して検討したい。

2. 「芸能科音楽」の目的

1943（昭和 18）年 3 月の「師範学校規定」第十条には、「芸能科」の目的が次のように規定されている³⁶（下線は筆者）。

第十条 芸能科ハ国民生活ニ須要ナル芸術技能ヲ修練セシメ工夫創作及鑑賞ノ能ヲ養ヒ国民的情操ト実践的性格トヲ陶冶シ我が国芸能ノ創造発展ニ貢献スルノ信念ニ培ヒ教育者タルノ資質ヲ錬成スルヲ以テ要旨トス、
芸能科ハ之ヲ分チテ音楽、書道、図画及工作ノ科目トス、

文部省教学官の松久義平は、「各教科が夫々独自の内容を持つのはいふ迄もありませぬが、師範学校本科の教科としてはその何れも、国民学校における教育者たるの資質を錬成するといふ教育的性格を持たねばならない」と述べる³⁷。松久は「芸能科」について次のように説明し、「心身一体」を強調している³⁸。

芸能科は大体に於いてこれまで技能科と称されて来た学科グループに当るのであるが、従来それはややもすれば単なる趣味的な教科乃至単なる手技の教科といふように、比較的軽く見られた傾きがないではない。しかしながら国民の基礎的錬成としての芸能科はかくの如き単なる趣味や手先の教科であつてはならないのであつて、技能とともに精神を訓練し、技と心とを一つにして根底から人を作るといふ観点に立たなければならぬと思ふのである。本来この教科は単に知的な又は身体的な他の教科と異り、心身を一体として働かせるところにその特色があるのであり、真に人を作り、創造的実践的な国民性格を築き上げるに適してをるのである。教育審議会に於いて特に技能科といふ名称をさけて芸能科とした所以のものは、蓋し我が国芸道の精神をこの教科の中に活かし、心身を一体として技を練り心を磨くことによつて、真に国民錬成の実を挙げようとしたものに外ならぬと考へるのである。かくの如くして本教科の指導に当りては、常に心身を一体として真摯なる学習態度を育て上げるに力むことが肝要である。徒らに自由放恣の学習に流れたり、結果や形の末にのみ捉はれて作業過程における訓練を忘れるやうなことがあつてはならぬ。而して躑を重んじ姿勢や態度に留意するは勿論、用具や材料の取扱等に関しても十分指導するの心掛がなくてはならぬ、

しかし、実際のところ「教科組織は国民学校教科にあわせて統合されたが、実際の授業は従来の教科目ごとに行われている」³⁹との清水の指摘が一般的であつたと考えられる。「師範学校規定」に示されている毎週教授時数に関して、「図画」と「工作」は両科目の合計の時数で表記されているので、合科的な指導が行われた可能性も考えられる（表 I-3-1、表 I-3-2）。しかし、「音楽」は各学年 2 時数と独立して明記されているので、他の科目との合科は考えられにくい。また、そのような証言も得ていない。

3. 「師範学校教科教授及修練指導要目」における「芸能科音楽」

「師範学校規定」の公布以前の、1942（昭和17）年5月、文部省『秘 師範学校教科教授要綱案』⁴⁰が発行された。1943（昭和18）年4月1日に出された「師範学校教科教授及修練指導要目」⁴¹（文部省訓令第六号）の原案であると考えられる。表I-3-3に示したように両法規の比較を行いたい。

表I-3-3 「秘 師範学校教科教授要綱案」と「師範学校教科教授及修練指導要目」の比較

	「秘 師範学校教科教授要綱案」1942（昭和17）年	「師範学校教科教授及修練指導要目」1943（昭和18）年
予 科	<p>芸能科教授要旨</p> <p>芸能科ハ国民生活ニ須要ナル芸術技能ヲ修練セシメ工夫創作及鑑賞ノカヲ養ヒ国民精神ヲ涵養シ我が国芸能ノ創造発展ニ培フヲ以テ要旨トス</p> <p>芸能科音楽ハ国民生活ニ須要ナル歌唱及器楽演奏ニ習熟セシメ音楽鑑賞ノカヲ養ヒ国民的情操ヲ醇化シ我が国音楽ノ創造発展ニ培フモノトス</p> <p>芸能科音楽ハ歌唱法・器楽奏法・聴覚訓練及音楽鑑賞ヲ課シ音楽理論ノ初歩ヲ授クベシ</p> <p>芸能科教授方針</p> <p>一、国民生活ニ須要ナル芸術技能ノ基礎的陶冶ヲ重ンジ工夫創作ノカヲ養ヒ我が国芸能ノ創造発展ニ培フベシ</p> <p>一、技能ノ陶冶ト相俟チテ作品ノ鑑賞ヲ指導シ我が国芸能ノ特質ヲ会得セシメ国民精神ヲ涵養シ情操ノ醇化ニカムベシ</p> <p>一、技能ノ科学的訓練ニ意ヲ用ヒ実践的性格ト共ニ科学的態度ヲ鍊成シ国防及産業ノ根底ニ培フベシ</p> <p>一、心技ヲ一体トシテ修練セシメ技能ト共ニ精神ヲ練磨セシムベシ</p> <p>芸能科音楽 教授方針</p> <p>一、国民生活ニ須要ナル歌唱及器楽ノ基礎的修練ヲ通ジテ音楽的資質ヲ陶冶シ我が国音楽ノ創造発展ニ培フベシ</p> <p>一、演奏ト相俟チテ鑑賞ヲ指導シ我が国音楽ノ特質ヲ会得セシメ国民精神ヲ涵養シ情操ノ醇化ニカムベシ</p> <p>一、心技ヲ一体トセル正シキ演奏態度ヲ訓練シ技能ト共ニ精神ヲ練磨セシムベシ</p>	<p>芸能科 教授要旨</p> <p>芸能科ハ国民生活ニ須要ナル芸術技能ヲ修練セシメ工夫創作及鑑賞ノ能ヲ養ヒ国民的情操ト実践的性格トヲ陶冶シ我が国芸能ノ創造発展ニ培フヲ以テ要旨トス</p> <p>芸能科音楽ハ歌唱及楽器ニ習熟セシメ音楽鑑賞ノ能ヲ養ヒ国民的情操ヲ陶冶シ我が国音楽ノ創造発展ニ培フモノトス</p> <p>芸能科音楽ハ歌唱法・器楽奏法・聴覚訓練及音楽鑑賞ヲ課シ音楽理論ノ初歩ヲ授クベシ</p> <p>芸能科 教授方針</p> <p>一 国民生活ニ須要ナル芸術技能ノ基礎的陶冶ヲ重ンジ工夫創作ノ能ヲ養ヒ我が国芸能ノ創造発展ニ培フベシ</p> <p>一 技能ノ陶冶ト相俟チテ作品ノ鑑賞ヲ指導シ我が国芸能ノ特質ヲ会得セシメ国民精神ヲ涵養シ情操ノ醇化ニカムベシ</p> <p>一 技能ノ科学的訓練ニ意ヲ用ヒ実践的性格ト共ニ科学的態度ヲ陶冶シ産業及国防ノ根底ニ培フベシ</p> <p>一 技能ニ即シテ精神ヲ練磨セシメ心技ヲ一体トシテ修練セシムベシ</p> <p>一 他教科及修練トノ関連ニ留意シ本教科ノ趣旨達成ヲ期スベシ</p> <p>芸能科音楽 教授方針</p> <p>一 国民生活ニ須要ナル歌唱及器楽ノ基礎的修練ヲ通ジテ音楽的資質ヲ陶冶シ我が国音楽ノ創造発展ニ培フベシ</p> <p>一 演奏ト相俟チテ鑑賞ヲ指導シ我が国音楽ノ特質ヲ会得セシメ国民精神ヲ涵養シ情操ノ醇化ニ努ムベシ</p> <p>一 技能ニ即シテ精神ヲ練磨セシメ心技ヲ一体トスル正シキ演奏態度ヲ訓練スベシ</p>
本 科	<p>芸能科教授要旨</p> <p>芸能科ハ国民生活ニ須要ナル芸術技能ヲ修練セシメ工夫創作及鑑賞ノカヲ養ヒ国民精神ヲ涵養シ我が国芸能ノ創造発展ニ貢献スルノ信念ニ培ヒ教育者タルノ資質ヲ練成スルヲ以テ要旨トス</p> <p>芸能科音楽ハ国民生活ニ須要ナル歌唱及器楽演奏ニ習熟セシメ音楽鑑賞ノカヲ養ヒ国民的情操ヲ醇化シ我が国音楽ノ創造発展ニ貢献スルノ信念ニ培ヒ教育者タルノ資質ヲ練成スルモノトス</p> <p>芸能科音楽ハ歌唱法、器楽奏法、聴覚訓練ノ方法、音楽鑑賞、音楽理解、作曲法、音楽ノ史的発達等ニ付テ授ケ国民学校芸能科音楽ニ関スル研究ヲ課スベシ</p>	<p>芸能科 教授要旨</p> <p>芸能科ハ国民生活ニ須要ナル芸術技能ヲ修練セシメ工夫創作及鑑賞ノ能ヲ養ヒ国民的情操ト実践的性格トヲ陶冶シ我が国芸能ノ創造発展ニ貢献スルノ信念ニ培ヒ教育者タルノ資質ヲ練成スルヲ以テ要旨トス</p> <p>芸能科音楽ハ歌唱及器楽ニ習熟セシメ音楽鑑賞ノ能ヲ養ヒ国民的情操ヲ陶冶シ我が国音楽ノ創造発展ニ貢献スルノ信念ニ培ヒ教育者タルノ資質ヲ練成スルモノトス</p> <p>芸能科音楽ハ歌唱法、器楽奏法、聴覚訓練ノ方法、音楽鑑賞、音楽理解、作曲法、音楽ノ史的発達等ニ付テ授ケ国民学校芸能科音楽ニ関スル研究ヲ課スベシ</p>

<p>芸能科教授方針</p> <p>一、国民生活ニ於ケル芸術技能ノ重要性ニ付テ知ラシメ我が国芸能ノ創造発展ニカムルノ精神ヲ涵養スベシ、</p> <p>一、芸術技能ノ基礎的陶冶ヲ重ンジ工夫創作ノ力ヲ養ヒ芸能科指導ノ実力ヲ錬成スベシ、</p> <p>一、技能ノ陶冶ト相俟チテ作品ノ鑑賞ヲ指導シ我が国芸能ノ特質ヲ会得セシメ国民精神ヲ涵養シ情操ノ醇化ニカムベシ、</p> <p>一、技能ノ科学的訓練ニ意ヲ用ヒ実践的性格ト共ニ科学的態度ヲ錬成シ国防及産業ノ根底ニ培フベシ、</p> <p>一、心技ヲ一体トシテ修練セシメ技能ト共ニ精神ヲ練磨セシムベシ、</p> <p>一、国民学校ニ於ケル芸能科ノ精神ヲ明ニシ其ノ教育ノ要諦ヲ会得セシムベシ、</p>	<p>芸能科 教授方針</p> <p>一、国民生活ニ於ケル芸術技能ノ重要性ニ付テ知ラシメ我が国芸能ノ創造発展ニカムルノ精神ヲ涵養スベシ、</p> <p>一、芸術技能ノ基礎的陶冶ヲ重ンジ工夫創作ノ能ヲ養ヒ芸能科指導ノ実力ヲ錬成スベシ、</p> <p>一、芸能ノ陶冶ト相俟チテ作品ノ鑑賞ヲ指導シ我が国芸能ノ特質ヲ会得セシメ国民精神ヲ涵養シ情操ノ醇化ニカムベシ、</p> <p>一、技能ノ科学的訓練ニ意ヲ用ヒ実践的性格ト共ニ科学的態度ヲ陶冶シ産業及国防ノ根底ニ培フベシ、</p> <p>一、技能ニ即シテ精神ヲ練磨セシメ心技ヲ一体トシテ修練セシムベシ、</p> <p>一、国民学校ニ於ケル芸能科ノ精神ヲ明ニシ其ノ教育ノ要諦ヲ会得セシムベシ、</p> <p>一、他教科及修練トノ関連ニ留意シ本教科ノ趣旨達成ヲ期スベシ、</p>
<p>芸能科音楽 教授方針</p> <p>一、国民生活ニ於ケル音楽ノ重要性ヲ自覚セシメ我が国音楽ノ創造発展ニカムルノ精神ヲ涵養スベシ、</p> <p>一、歌唱及器楽ノ基礎的修練ヲ通ジテ音楽的資質ヲ陶冶シ音楽指導ノ実力ヲ錬成スベシ、</p> <p>一、演奏ト相俟チテ鑑賞ヲ指導シ我が国音楽ノ特質ヲ会得セシメ国民精神ヲ涵養シ情操ノ醇化ニカムベシ、</p> <p>一、心技ヲ一体トセル正シキ演奏態度ヲ訓練シ技能ト共ニ精神ヲ練磨セシムベシ、</p> <p>一、教育者トシテノ責務ヲ自覚セシメ学習ノ過程ニ於テ国民学校芸能科音楽ノ精神ト其ノ教育ノ要諦トヲ会得セシムベシ、</p>	<p>芸能科音楽 教授方針</p> <p>一、国民生活ニ於ケル音楽ノ重要性ヲ自覚セシメ我が国音楽ノ創造発展ニカムルノ精神ヲ涵養スベシ、</p> <p>一、歌唱及器楽ノ修練ヲ通ジテ音楽的資質ヲ陶冶シ音楽指導ノ実力ヲ錬成スベシ、</p> <p>一、演奏ト相俟チテ鑑賞ヲ指導シ我が国音楽ノ特質ヲ会得セシメ国民精神ヲ涵養シ情操ノ醇化ニカムベシ、</p> <p>一、技能ニ即シテ精神ヲ練磨セシメ心技ヲ一体トスル正シキ演奏態度ヲ訓練スベシ、</p> <p>一、教育者タルノ責務ヲ自覚セシメ学習ノ過程ニ於テ国民学校芸能科音楽ノ精神ト其ノ教育ノ要諦トヲ会得セシムベシ、</p>

出典 文部省『秘 師範学校教科教授要綱案』1942年、文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943年から作成。

注 下線：相違点，ゴシック体：「練成」に関する箇所。いずれも筆者による。

相違点（下線）は少ないように、1942（昭和 17）年の時点で新制師範学校のカリキュラムが完成していたことが分かる。「師範学校教科教授及修練指導要目」のみで掲載されているのは、「他教科及修練トノ関連ニ留意シ本教科ノ趣旨達成ヲ期スベシ」という一文である。

基本的に芸能科の教授方針を受けて芸能科音楽の教授方針が作成されている。本科には、予科にはみられない国民学校芸能科音楽に関する内容が含まれている。「練成」の用語については、「芸能科 教授方針」では「芸能科音楽指導ノ実力ヲ錬成スベシ」，「芸能科音楽 教授方針」では「音楽指導ノ実力ヲ錬成スベシ」とある。

「教授方針」に挙がっている項目中の文言を大まかに分類すると、第一に精神や情操に関すること、第二に演奏や鑑賞に関すること、第三に国民学校芸能科に関すること、第四に国防・産業に関することの4点となる。当然のことながら、第二に挙げた音楽活動そのものの習得を最終目的とするのではなく、音楽活動を手段として情意面や国防・産業面に貢献し、最終目標である「皇国民の錬成」を究極の目的としている。

表 I - 3 - 4 は、「師範学校教科教授及修練指導要目」における「芸能科音楽」の教授事項を一覧にしたものである。予科は、「歌唱」「聴覚訓練」「器楽」「音楽理論」「鑑賞」の5領域、本科は、「歌唱」「聴覚訓練」「器楽」「指揮法」「音楽理論」「鑑賞」「音楽史」「国民学校芸能科音楽に関する研究」の8領域で示されている。このように

領域名が明確に示されたのは、1943（昭和 18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」が最初である。ここで特筆すべきことは、以下の点である。

- ・「聴覚訓練」が新設されたこと。
- ・「器楽」が、予科、本科ともに第 1 学年から開始されていること。
- ・従来の楽典が「音楽理論」として改められていること。
- ・「音楽史」が本科において新設されていること。

上記の点は、1932（昭和 7）年の「師範学校音楽教員協議会」で議論された内容である。各領域の詳細な内容に関しては第Ⅱ部で検討したい。

表Ⅰ-3-4 「師範学校教科教授及修練指導要目」（1943）における「芸能科音楽」の教授事項

学 年		歌唱	聴覚訓練	器楽	指揮法	音楽理論	鑑賞	音楽史	国民学校芸 能科音楽に 関する研究
予 科	1 年	基本練習 歌曲	和音聴音	ピアノ又は オルガン		楽典	声楽曲 器楽曲		
	2 年	基本練習 歌曲	和音聴音、旋 律の聴音	ピアノ又は オルガン		和声学 楽式論	声楽曲 器楽曲		
本 科	1 年	基本練習 歌曲	和音聴音	ピアノ又は オルガン		楽典 和声学	声楽曲 器楽曲	日本音楽史 （江戸時代末 期まで）	
	2 年	基本練習 歌曲	和音聴音、	ピアノ又は オルガン	合唱指揮	和声学 楽式論	日本古来の 音楽	日本音楽史 （明治時代以 降）	
	3 年	基本練習 歌曲	和音聴音	ピアノ又は オルガン	合唱指揮、器 楽合奏指揮	和声学 楽式論 楽器論	合奏曲、合 唱曲、日本 古来の音楽		

出典 文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943 年，161-169 頁，292-296 頁から作成。

注 教授事項の各内容については筆者が要約している。

第2節 戦時下のカリキュラム

1. 戦時教育体制に関する法令下における音楽教育

戦時教育体制に関する法令を年表にしたものが、表 I-3-5 である。

表 I-3-5 戦時教育体制に関する法令

年 月	内 容
1938 (S13) 年 4 月	「国家総動員法」公布
1938 (S13) 年 6 月	集団的勤労作業運動実施に関して通達
1939 (S14) 年 7 月	「国民徴用令」公布
1940 (S15) 年 9 月	文部大臣、高等専門学校諸学校に「学校報国団」を組織すべきことを指示（高等学校長会議）
1941 (S16) 年 2 月	文部省、「青少年学徒食糧増産運動実施要項」を通達
1941 (S16) 年 8 月	学校単位に学校報国隊の編成を訓令
1941 (S16) 年 10 月	中等学校最高学年在学者に対する臨時措置に関して通達（最高学年の修業年限を実質的に短縮）
1941 (S16) 年 10 月	「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ臨時短縮ニ関スル件」を公布。
1941 (S16) 年 10 月	「大学学部等の在学年限の昭和 16 年度臨時短縮に関する省令」公布（大学学部、専門学校等の修業年限を、昭和 16 年度に卒業すべき者について 3 か月短縮）
1941 (S16) 年 11 月	「大学学部等の在学年限の昭和 17 年度臨時短縮に関する省令」公布（大学学部・予科、高等学校、専修学校等の修業年限を、昭和 17 年度に卒業すべき者について 6 か月短縮。一部の実業学校の修業年限を同年度に卒業すべき者について 3 か月短縮）
1941 (S16) 年 11 月	「国民勤労報国協力令」公布（勤労奉仕を義務法制化）
1942 (S17) 年 1 月	「国民勤労報国協力令施行規則」に基づく「学徒動員命令」出る
1942 (S17) 年 8 月	「中学校・高等学校学年短縮案要綱」を閣議決定（修業年限を中学校 4 年、高等学校 2 年とする）
1942 (S17) 年 11 月	「大学学部等の在学年限の昭和 18 年度臨時短縮に関する省令公布（大学学部・予科、高等学校、専門学校等の修業年限を、昭和 18 年度に卒業すべき者について 6 か月短縮。一部の実業学校の修業年限を同年度に卒業すべき者について 3 か月短縮）
1943 (S18) 年 3 月	「戦時学徒体育訓練実施要綱」を通達
1943 (S18) 年 6 月	「学徒戦時動員体制確立要綱」を閣議決定
1943 (S18) 年 10 月	学生生徒の徴兵猶予停止（文科系学生のいっせい入営）
1943 (S18) 年 10 月	「教育ニ関スル戦時非常措置方策」を閣議決定（国民学校の義務教育 8 年制の施行延期等）
1943 (S18) 年 10 月	「教育ニ関スル戦時非常措置ニ関スル件」を通達。
1943 (S18) 年 11 月	「大学学部等の在学年限の昭和 18 年度臨時短縮に関する省令」公布（大学・高等学校等は 6 か月、一部の実業学校は 3 か月短縮）
1944 (S19) 年 1 月	国民学校教育の戦時非常措置について通達
1944 (S19) 年 1 月	「緊急学徒勤労働員方策要綱」を閣議決定
1944 (S19) 年 2 月	「学徒軍事教育強化要綱」決定
1944 (S19) 年 2 月	師範学校教育の戦時非常措置を通達
1944 (S19) 年 2 月	「国民学校令等戦時特例施行規則」を制定
1944 (S19) 年 3 月	「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」を閣議決定（中等学校以上、原則として通年動員実施）
1944 (S19) 年 3 月	「学徒動員実施要綱による学校種別学徒動員基準」について通達
1944 (S19) 年 4 月	「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒勤労働員ニ関スル件」を訓令
1944 (S19) 年 4 月	「学徒勤労働員実施ニ当リ其趣旨ヲ諒得シ奮励精進以テ成果発揚方」を訓令
1944 (S19) 年 4 月	「学徒動員本部規定」を制定
1944 (S19) 年 5 月	「師範学校及青年師範学校ニ於ケル学徒勤労働員ニ伴フ課程及教育実習等ニ関スル臨時特例」発令
1944 (S19) 年 8 月	「学徒勤労働員ノ徹底強化ニ伴フ師範学校教育ニ関スル件」を通牒
1944 (S19) 年 8 月	「学徒勤労令」「学校勤労令施行規則」「女子挺身勤労令」公布（学校報国隊を組織）
1944 (S19) 年 12 月	「動員学徒援護事業要綱」を閣議決定
1945 (S20) 年 3 月	「国民勤労働員令」公布
1945 (S20) 年 3 月	「決戦教育措置要綱」を閣議決定（国民学校初等科を除き、学校における授業を原則として 4 月から 1 年間停止）
1945 (S20) 年 5 月	「戦時教育令」ならびに同施行規則を公布
1945 (S20) 年 7 月	文部省の機構を改革。学徒動員局を設置、総務局、体育局を廃止

出典 清水康幸『教育審議会の研究 師範学校改革』2000 年、逸見勝亮『師範学校制度史研究』1991 年、文部省『学制百年史』1972 年、石川謙『近代日本教育制度史料』第七巻、1956 年から作成。

注 下線は筆者による。

(1) 「師範学校及青年学校師範学校ニ於ケル学徒勤労働員実施ニ伴フ課程及教育実習等ニ関スル臨時特例」
(1944年5月31日)

1943(昭和18)年10月12日、閣議決定「教育に関する戦時非常措置方策」が出されるものの、教員養成諸学校における授業は継続された⁴²。1944(昭和19)年5月31日、文部省は「師範学校及青年師範学校ニ於ケル学徒勤労働員実施ニ伴フ課程及教育実習等ニ関スル臨時特例」(文部省令第三十五号)を発令した⁴³。逸見勝亮は、「初めて師範学校の教育機能の縮小を指示した」法令と捉え、内容について次の2点を挙げている⁴⁴。

- 1) 学校長は、集団勤労作業を行うために毎週授業時数を減らすことができる。
- 2) 教育実習を第2学年で実施し、その期間を縮小することができる。

(2) 「学徒勤労働員ノ徹底強化ニ伴フ師範学校教育ニ関スル件」(1944年8月14日)

文部省国民教育局長は、1944(昭和19)年8月14日、「学徒勤労働員ノ徹底強化ニ伴フ師範学校教育ニ関スル件」を各師範学校長殿に通牒する⁴⁵。ここでは逸見⁴⁶が取り上げていない教科指導、中でも音楽教育に着目して考察したい。通牒では「第一、通年動員ノ場合ニ於ケル教育」と「第二、通年動員ニ非ザル場合ニ於ケル教育」に分けて規定されている。「第一、通年動員ノ場合ニ於ケル教育」では音楽教育に関係する部分は以下のように、鑑賞指導が重視されている(下線は筆者による)。

一、教科指導

休業日、交替制ニ依ル時間ノ余裕、手待時間等ヲ活用シテ適宜軍事教育並教科中特ニ重要ト認ムル事項ニ付指導ス、

一、教養ノ向上

- (一) 日常生活ノ躰ニ留意スルト共ニ読書、音楽鑑賞等ノ指導ヲ通ジテ国民的教養ヲ高メ且質実剛健ノ風尚ヲ育成ス

- (二) 女子ニ在リテハ特ニ女子トシテ必要ナル教養訓練ニ意ヲ用ヒ皇国伝統ノ婦徳ヲ育成ス、

一方、「第二、通年動員ニ非ザル場合ニ於ケル教育」では、「教科内容ノ重点」が挙げられている。逸見は、男子部本科の基本教科に限って、通牒前後における授業時数の比較を行っている。筆者はさらに「選修教科」「修練」と女子部の時数を加え、表I-3-6を作成した。「学徒勤労働員ノ徹底強化ニ伴フ師範学校教育ニ関スル件」では、どの教科も授業時数が削減されている。

表 I-3-6 「学徒勤労動員ノ徹底強化ニ伴フ師範学校教育ニ関スル件」(1944 年)と「師範学校規定」(1943 年)の授業時

数総数の比較

		男子部				女子部			
		第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	合計	第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	合計
基本 教科	国民科	100 (315)	50 (210)	50 (280)	200 (805)	110 (315)	50 (210)	50 (280)	210 (805)
	理数科	150 (245)	50 (175)	50 (140)	250 (560)	130 (245)	50 (175)	50 (140)	230 (560)
	実業科	— (105)	— (105)	— (105)	— (315)	170 (210)	50 (140)	50 (210)	270 (560)
	芸能科	150 (210)	100 (210)	100 (175)	350 (595)	170 (175)	100 (175)	100 (140)	370 (490)
	教育科	100 (175)	50 (140)	50 (140)	200 (455)	110 (175)	50 (140)	50 (140)	210 (455)
	体錬科	200 (210)	100 (210)	100 (210)	400 (630)	110 (140)	50 (140)	50 (140)	210 (420)
選修教科		300 (0)	150 (210)	150 (210)	600 (420)	300 (0)	150 (210)	150 (210)	600 (420)
修練		不定時 (140)	不定時 (140)	不定時 (140)	不定時 (420)	不定時 (140)	不定時 (140)	不定時 (140)	不定時 (420)
合計		1,000 (1,400)	500 (1,400)	500 (1,400)	2,000 (4,200)	1,000 (1,400)	500 (1,400)	500 (1,400)	2,000 (4,200)

出典 「学徒勤労動員ノ徹底強化ニ伴フ師範学校教育ニ関スル件」1944 年(国立公文書館所蔵),『近代日本教育制度史料』第五卷,1956 年,『師範学校制度史研究』1991 年から作成。

注 「師範学校規定」(1943 年)は,()内に表記。女子部の実業科の欄は,「家政科」の授業時数を記入した。下線は筆者による。

削減率は次のようになる。

男子部:国民科 75.2%, 理数科 55.4%, 芸能科 41.2%, 教育科 56.0%, 体錬科 36.5%

女子部:国民科 73.9%, 理数科 58.9%, 芸能科 24.5%, 教育科 53.8%, 体錬科 50.0%, 家政科 51.8%

男子部では,「体錬科」に次いで授業時数が確保されているのが「芸能科」である。女子部では,「師範学校規定」上の 75.5%も「芸能科」の授業時数が確保されている。1943(昭和 18)年の「師範学校規定」制定の際にも,「芸能科」の授業時数の増加が見られたように,1944(昭和 19)年の授業時数削減の中においても,「芸能科」は比較的手厚い保護を受けていることが分かる。

この通牒では,各教科の「教科内容の重点」が掲載され,「芸能科」については以下のように記されている⁴⁷。第 1 節で紹介した 1943(昭和 18)年 5 月の全国師範学校校長会議において科学教育が強調されていた。さらにここでは「芸能科」の中においても科学教育との結び付きが重要視されている。

其ノ一 師範学校予科

芸能科 科学的技術ノ基礎訓練及音楽練習ヲ重視ス

其ノ二 師範学校本科

芸能科 科学的技術ノ基礎訓練ニ関スル教材及音楽練習並ニ国民学校芸能科教材ノ研究ヲ重視ス

2. 事例

1944（昭和 19）年 8 月 23 日に「学徒勤労令」（勅令第五一八号）が公布⁴⁸。1945（昭和 20）年 3 月 18 日、「決戦教育措置要綱」が閣議決定され、「国民学校初等科ヲ除キ学校ニ於ケル授業ハ昭和二十年四月一日ヨリ昭和二十一年三月三十一日ニ至ル期間原則トシテ之ヲ停止ス」と規定される⁴⁹。1945（昭和 20）年 5 月 22 日には「戦時教育令」（勅令第三百二十号）が公布される⁵⁰。このように学校における授業の停止が明文化されたのは、1945（昭和 20）年 3 月 18 日の「決戦教育措置要綱」である。しかし、逸見は、1944（昭和 19）年 8 月 14 日通牒「学徒勤労動員ノ徹底強化ニ伴フ師範学校教育ニ関スル件」の段階で師範学校における授業はほぼ完全に停止したと分析する⁵¹。ここで本研究の事例対象である香川師範学校、岡山師範学校の事例をみてみたい⁵²。

（1）香川師範学校

香川師範学校（男子部）では、1944（昭和 19）年 5 月頃から学徒動員が開始された⁵³。予科の生徒が林村の飛行場建設へ本科第 2，第 3 学年が直島三菱精錬工場へ動員されている。1944（昭和 19）年度，動員が免除されていたのは，本科第 1 学年だけである。しかし，1945（昭和 20）年 2 月以降はすべての学年が動員されている。その他，1944（昭和 19）年 1 月から 1945（昭和 20）年 7 月の間は，軍隊に召集される生徒も出てきた。

『年表 わが香川師範時代』によると，1945（昭和 19）年度の 1 学期について，動員が一部開始されていたものの授業は確保されている⁵⁴。定期試験も実施され，8 月 3 日には「音楽検閲」が行われている。ただし，落ち着いて授業に専念できる雰囲気ではなくなりつつあったことが，次の記録からうかがえる⁵⁵。

軍事教練や勤労奉仕や農作業も多くなり，教室で学ぶ空気ではなくなっていった。応召される先生も多くなり，授業担任も替わることが多く，時間割の変更もしばしばで，週番が走り回ることもたびたびあった。

9 月 13 日，「これから，1 週間に 1 日しか教室で勉強できないと言われた」と記され，実際に 9 月 26 日から「決戦時間割」が実行，授業は週に 1 回のみとなる⁵⁶。11 月 28 日「1 日授業」の記録を最後に⁵⁷，敗戦後の 9 月 5 日に授業が再開されるまで，授業に関する記録はみられない⁵⁸。

香川師範学校（女子部）では，1945（昭和 20）年 1 月 26 日から 3 月 16 日にかけて，本科第 2 学年の生徒が女子挺身隊として川西航空機会社宝塚製作所へ動員されたのが最初である⁵⁹。その後，本科第 1 学年と予科第 1，第 2，第 3 学年の生徒も動員され，2 月 14 日から 7 月 31 日まで愛知県半田市の中島飛行機半田工場で働いている⁶⁰。このように香川師範学校（女子部）では，1944（昭和 19）年度においても比較的授業が確保されている。

(2) 岡山師範学校

表 I-3-7 に示したように、岡山師範学校（男子部）では、1944（昭和 19）年 7 月から本科第 2 学年と予科第 2、第 3 学年の生徒が玉野市三井造船所へ勤労働員されたのが最初である。12 月以降は予科第 1 学年の生徒が、水島三菱飛行機製作所へ動員される。本科第 3 学年が 9 月に卒業しているため、1944（昭和 19）年 12 月の時点で全生徒が学徒動員されたことになる。当時の状況について『岡山大学二十年史』には、「満足な授業はできがたい状態となった」と記されている⁶¹。

『回想岡山師範学校』には、1945（昭和 20）年 4 月以降の動向について「徴兵猶予廃止、続々と陸海軍へ入隊す。終戦時までには同級生 160 名中、150 名程度入隊、学校は事実上休校となる」とある⁶²。

表 I-3-7 岡山師範学校での主な出来事

年	学年	月	主な出来事
1943 (S18)	1	4	岡山師範学校官立へ昇格
		8	水泳特別合宿訓練実施（北木島）
		12	冬休み勤労奉仕（大阪窯業 K K）
1944 (S19)	2	3	春休み勤労奉仕（岡山陸軍兵器廠）
		6	勤労奉仕（藤田村へ麦刈り奉仕）
		7	学徒動員のため三井造船玉野製作所へ就労
1945 (S20)	3	2	動員中、一人生徒肺炎にて死亡
		4	徴兵猶予廃止、続々と陸海軍へ入隊（敗戦時までには同級生 160 名中、150 名程度入隊、学校は事実上休校）
		6	鉄筋 1 棟、寄宿舎 1 棟、食堂以外を空襲にて焼失（6 月 29 日）
		8	敗戦
		9	卒業式（師範学校食堂にて、9 月 25 日）

出典 岡山師範学校記念碑建立委員会『回想岡山師範学校』1976 年、9 頁。

岡山師範学校（女子部）では、1944（昭和 19）年 4 月から予科の生徒が、倉敷レーヨン飛行機製作所へ勤労働員されている。その後、12 月以降、本科の生徒が水島三菱飛行機製作所へ動員された⁶³。このように予科と本科とでは動員される時期が異なる。岡山師範学校（女子部）では 12 月の時点で全員が動員された。

以上、香川師範学校、岡山師範学校とも多少時期にはばらつきがみられるものの、逸見の指摘通り 1945（昭和 20）年 3 月の「決戦教育措置要綱」が決定される前から、授業が停止され、学徒動員が行われていた。しかし、過酷な環境のさなかにあっても、学徒動員先で授業を継続していたところがある。それは香川師範学校（女子部）である。『香川大学教育学部百年のあゆみ』には、愛知県半田市における動員生活について次のように記されている⁶⁴。

山方工場の第 1 寮では 5 人（交代で常時 5 人）の先生のいたわりと指導のもとで、苦しいなかにも生死を共にしようとする師弟の、心温まる毎日が続いた。学徒の本分である学業もおろそかにならないようにと、講義の計画が立てられすぐに実施され、娯楽まで配慮された。

昼間の時間が有効に使えるようにと、4月9日から夜勤が開始され、昼間に講義や学校参観（乙川国民学校など）に行き、やがて巣立つ時のために、日課も工夫された。学生の気持ちを察して先生方が余興をしてくれ、仕事の疲れとホームシックを忘れさせる、楽しい一時を作ってくれた。松韻報国隊の歌・中隊節など、先生方の作詞になる歌は、今もなおはっきりと皆の心に残り、同窓の集いにはいつも懐かしく歌われている。

ここでは音楽の指導も行われている。1945（昭和20）年5月24日から6月2日にかけて、尾形サダ教授によって「拡声器を通しての音楽鑑賞の指導、レコードの聴き方」が指導されている⁶⁵。これはまさに「学徒勤労動員ノ徹底強化ニ伴フ師範学校教育ニ関スル件」（1944年8月）に示されていた、教養の向上を目的とする音楽鑑賞指導である。

香川師範学校（男子部）や岡山師範学校では、学徒動員先で音楽指導が実施されたという記録はみられない。しかし、作業中ないしは合間、寮生活の中で軍歌がしばしば歌われたと記されている⁶⁶。曲目としては香川師範学校（男子部）では《戦友》⁶⁷、岡山師範学校（男子部）では《空の神兵》⁶⁸《轟沈》⁶⁹《勘太郎月夜歌》が挙げられている⁷⁰。また、香川師範学校（男子部）では、勤労動員の見送りの際に《ああ紅の血は燃ゆる》⁷¹や寮歌が歌われたという記録がある⁷²。

では、1943（昭和18）年の改訂で重要視された教育実習はどのように実施されたのだろうか。ここでは1943（昭和18）年4月本科入学、1945（昭和20）年9月卒業の香川師範学校（男子部）と岡山師範学校（男子部）の生徒に限定してみたい。まず、香川師範学校（男子部）の場合、最終学年ではなく、第2学年の1944（昭和19）年度に附属国民学校において教育実習を行うことになった⁷³。この措置は「師範学校及青年師範学校ニ於ケル学徒勤労動員実施ニ伴フ課程及教育実習等ニ関スル臨時特例」（1944年5月）に基づいていると考えられる。『香川大学教育学部百年のあゆみ』によると、当初1学期に東組、2学期に西組、3学期に南組と時期をずらして実施する予定であった⁷⁴。実際に東組は、1944（昭和19）年5月上旬に石清尾修練道場で1週間の事前訓練を受けた後、10週間の教育実習を行っている。しかし、先ほど述べたように2学期以降は学徒動員に借り出され、西組、南組の教育実習は行われていない。かろうじて、敗戦直後で卒業直前の1945（昭和20）年8月末、分散して授業をしていた附属の各教場で、全員の生徒が2週間程度の教育実習を経験できたことである。

一方、岡山師範学校（男子部）の場合、教育実習は実施されていない⁷⁵。

第3節 考察

第2章、第3章で述べてきた、昭和前期（1931-45年）における師範学校の音楽教育の特徴を表I-3-8に一覧にした。

表I-3-8 昭和前期（1931-45年）における師範学校の音楽教育

	1931（昭和6）年4月－1943（昭和18）年3月	1943（昭和18）年4月－1945（昭和20）年8月
制度	府県立中等学校程度 本科第一部…5年（高等小学校修了者） 本科第二部…2年（中学校、高等女学校修了者） 専攻科（現職教員）	官立専門学校程度 本科…3年（中学校、高等女学校、予科修了者） ※予科…2年（高等小学校修了者） 研究科（現職教員）
師範学校の目的	師範学校ハ小学校ノ教員タルヘキ者ヲ養成スル所トス、前三項ニ記載シタル学校ニ於テハ順良信愛威重ノ徳性ヲ涵養スルコトヲ務ムヘシ（「師範教育令」第一条、明治30年）	師範学校ハ皇国ノ道ニ則リテ国民学校教員タルベキ者ノ練成ヲ為スヲ以テ目的トス（「師範教育令改正」第一条、昭和18年）
学科名	音楽 基本科目（必修）と増課科目（選択）	芸能科音楽（芸能科の下に音楽、書道、図画、工作の科目が置かれる） 基本教科（必修）と選修教科（選択）
音楽教育の目的	音楽ハ音楽ニ関スル知識技能ヲ得シメ美感ヲ養ヒ心情ヲ高潔ニシ徳性ノ涵養ニ資シ且小学校ニ於ケル唱歌教授ノ方法ヲ会得セシムルヲ以テ要旨トス 音楽ハ単音唱歌、重音唱歌、楽典ノ大要及楽器使用法ヲ授ケ且教授法ヲ授クヘシ（「師範学校規定中改正」第二十三条、昭和6年）	芸能科ハ国民生活ニ須要ナル芸術技能ヲ修練セシメ工夫創作及鑑賞ノ能ヲ養ヒ国民的情操ト実践的性格トヲ陶冶シ我ガ国芸能ノ創造発展ニ貢献スルノ信念ニ培ヒ教育者タルノ資質ヲ錬成スルヲ以テ要旨トス 芸能科ハ之ヲ分チテ音楽、書道、図画及工作ノ科目トス（「師範学校規定」第十条、昭和18年）
音楽教育の内容	基本練習、楽器使用、歌曲、楽典、小学校に於ける唱歌教授法及教材の研究、指揮法、鑑賞（「師範学校教授要目改正」昭和6年）	歌唱、聴覚訓練、器楽、指揮法、音楽理論、鑑賞、音楽史、国民学校芸能科音楽に関する研究（「師範学校教科教授及修練指導要目」昭和18年）
教科書	文部省検定済教科書	文部省国定教科書

出典 文部省教育調査部『師範教育関係法令の沿革』1938年。『近代日本教育制度史料』第五巻、1956年。

1943（昭和18）年4月を境とし、師範学校は制度上大きな変革を果たした。しかし、初等教員を養成するという目的は変わっていない。さらに「師範学校の目的」の中に記されている教師像について比較すると、昇格後においては、森有礼が提唱し1886（明治19）年以降から掲げられてきた「順良信愛威重」の文言が消え、「皇国ノ道ニ則リテ」となった。

1931（昭和6）年の府県立師範学校時代のカリキュラムについて、林三平や清水康幸は、師範学校本科第一部男子と中学校の毎週教授時数の比較を行っている。その結果、林は、「師範学校本科第一部の教育内容を中学校教育の内容に近接させ、これに教職教育を配するという方針によるものだった」⁷⁶、清水は、「師範学校と中学校のそれ（学科課程）を同一の論理で再構成した点」⁷⁷と、ほぼ同一の結論を出している。

一方、三好信浩は、師範学校と中学校、高等女学校との関係について次のように指摘する⁷⁸。

男子の師範学校と中学校との間に大きな懸隔があったのに比べると、女子の師範学校と高等女学校は、むしろその距離の近さのほうが目立ってくる。

このように先行研究によって学科課程の捉え方が異なるので、ここでは「音楽」に焦点を当て検討してみたい。

表 I-3-9 に示した、男子の師範学校と中学校における基本科目の「音楽」の毎週教授時数を比較した結果をみると、師範学校では計 7 時数に対し、中学校では計 3 時数と差がみられる⁷⁹。しかし、女子師範学校計 8 時数、高等女学校計 7 時数と、女子に関してはほぼ同時数である。三好の指摘通り、女子師範学校と高等女学校は類似したカリキュラムをとっている。

表 I-3-9 師範学校、中学校、女子師範学校、高等女学校における「音楽」の毎週教授時数

	(男子) 師範学校		中学校		女子師範学校		高等女学校	
	基本科目	増課科目	基本科目	増課科目	基本科目	増課科目	基本科目	増課科目
第 1 学年	2		1		2		2	
第 2 学年	2		1		2		2	
第 3 学年	1		1	1-2	2		1	
第 4 学年	1	2-4		1-2	1	2-4	1	
第 5 学年	1	2-4		1-2	1	2-4	1	
計	7		3		8		7	

注 (男子) 師範学校、女子師範学校：1931 (昭和 6) 年「師範学校教授要目改正」。中学校：1931 (昭和 6) 年「中学校令施行規則ノ改正」の甲号表。高等女学校：1920 (大正 9) 年「高等女学校施行規則改訂」。

では、師範学校が昇格した後はどのように変化したのだろうか。表 I-3-10 は、師範学校、中学校、高等女学校における「音楽」の授業時数を一覧にしたものである。師範学校では週 2 時数の「音楽」の授業が確保されている。それに対し、中学校、高等女学校では週 1 時間となっている。昇格前のカリキュラムでみられた女子師範学校と高等女学校のカリキュラムの共通性はみられない。このように、昇格前は、師範学校と高等女学校との類似性が強かったのに対し、昇格後は専門学校程度である師範学校と中等学校程度である中学校、高等女学校との間には制度上明確な区分がなされている。

表 I-3-10 師範学校、中学校、高等女学校における「音楽」の授業時数 1943 (昭和 18) 年

	師範学校 (男子部)		師範学校 (女子部)		中学校		高等女学校	
	基本教科	選修教科	基本教科	選修教科	基本	選択	基本	選択
予科 1 年 (1 年)	2		2		1		1	
予科 2 年 (2 年)	2		2		1		1	
本科 1 年 (3 年)	2		2			3	1	
本科 2 年 (4 年)	2	3-6	2	3-6		3		1
本科 3 年	2	3-6	2	3-6				
	10		10		2		3	

注 カッコ内の学年は、中学校、高等女学校を示す。なお、修業年限 4 年の授業時数。

出典 『師範学校教科教授及修練指導要目』(1943)『中学校教科教授及修練指導要目』(1943)『高等女学校教科教授及修練指導要目』(1943)。

「学科名」に関しては、「音楽」から「芸能科音楽」へと変わった。師範学校と初等教育間の学科名の関係に触れると、昇格前は、師範学校では「音楽」、小学校では「唱歌」と異なっていた。昇格後においては両校とも「芸能科音楽」が使用され、学科課程の密着が図られた。「音楽教育の目的」「音楽教育の内容」と合わせて考えると、

「唱歌」だった時期（1941年3月まで）においては、歌唱指導ができるということが小学校教員において最大に求められていた。それに対し、「芸能科音楽」が発足したことに伴い、「聴覚訓練」「鑑賞」等の内容についての指導力が必要とされた。

対村は、「師範学校の学科課程は小学校のそれと密着している（中略）。師範学校の学科課程は「上向き」の学科課程であるよりも「下向き」の学科課程として構成されてきた」と指摘する⁸⁰。ここで師範学校と初等教育における授業時数についてみてみたい。表 I・3・11 は、1931（昭和6）年4月から1941（昭和16）年3月における師範学校と小学校との教科目授業時数を比較したものである。師範学校のみにな置かれている教科目は、「公民科」「教育」「英語」「実業」である。小学校のカリキュラムにおいて一番授業時数の多い教科目は、「国語」40%、「算数」18.8%、「体操」11.3%となっている。それに対し、師範学校では、「国語漢文」15.8%が最多を占め、「体操」14.6%、「理科」8.9%、「歴史、地理」10.1%と続く。このように、小学校と師範学校のカリキュラム構成は必ずしも一致しているわけではない。なお、この時期の「音楽」の比率は、小学校、師範学校ともに高くはない。

表 I・3・11 師範学校と小学校との教科目授業時数比較

	師範学校 本科第一部（5年制）		女子師範学校 本科第一部（5年制）		小学校（男子） 尋常科（6年制）		小学校（女子） 尋常科（6年制）	
	教授時数	同比率	教授時数	同比率	教授時数	同比率	教授時数	同比率
修身	8	5.0	8	5.0	12	7.5	12	7.6
公民科	4	2.5	4	2.5				
教育	11	7.0	11	7.0				
国語漢文	25	15.8	25	15.8	64	40	64	40.5
歴史、地理	16	10.1	16	10.1	8	5	8	5.0
英語	12	7.6	9	5.7				
数学	14	8.9	14	8.9	30	18.8	30	18.9
理科	18	11.4	18	11.4	6	3.8	6	3.7
実業	8	5.0		5.0				
図画、手工	12	7.6	12	7.6	6	3.8	4	2.5
音楽	7	4.4	8	5.1	8	5	8	5.0
体操	23	14.6	13	8.2	18	11.3	18	11.4
家事・裁縫			20	12.7	8	5	8	5.1
計	158		158		160		158	

次に国民学校発足後はどうなったのだろうか。表 I・3・12 は、1943（昭和18）年4月から1945（昭和20）年8月までにおける師範学校と国民学校との教科目授業時数を比較したものである。師範学校のみにな置かれている教科目は、「教育科」「実業科」（男子のみ）である。表 I・3・12 に示したように、国民学校と師範学校の比率は必ずしも一致しているわけではない。しかし、表 I・3・11 と表 I・3・12 を比較すると分かるように、師範学校、初等学校ともに「音楽」の授業時数は確実に増加している。

表 I-3-12 師範学校と国民学校との教科目授業時数比較

	師範学校（男子部） 本科（3年制）		師範学校（女子部） 本科（3年制）		国民学校（男子） 初等科（6年制）		国民学校（女子） 初等科（6年制）	
	教授時数	同比率	教授時数	同比率	教授時数	同比率	教授時数	同比率
国民科	23	22.5	23	22.5	68	37.0	68	37.0
教育科	13	12.7	13	12.7				
理数科	16	15.7	16	15.7	37	20.1	37	20.1
実業科	9	8.8						
家政科			18	17.6			6	3.3
体錬科	18	17.6	12	11.8	31	16.8	31	16.8
芸能科	17	16.7	14	13.7	36	19.6	30	16.3
音楽	6	5.9	6	5.9	12	6.5	12	6.5
計	102		102		184		184	

注 芸能科に関しては、音楽の授業時数、同比率について抜き出して示している。

ところで、このような大幅な制度変革の中、教科の専修性については継続された。第2章で述べた通り、1931（昭和6）年の「師範学校規定」改正で、「増課科目」が誕生した。各校により内容は多少異なるとはいえるものの、それ以前の均一の内容で初等教員養成を推し進めてきたカリキュラムは、教科の専門性を配慮したカリキュラムへと修正された。「増課科目」の性格は、1943（昭和18）年の改正の際でも「選修教科」として受け継がれた。第3章第1節で引用したように、文部省師範教育課長の稲田は、「いろいろな教科目に特長を有してをりますものが集まって国民学校の職員構成を成す」といった発言もみられた。

さて、音楽教育の内容に目を向けてみよう。1943（昭和18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」では、音楽の内容が8領域に細分化されて表示された。国定教科書も作成された。教授時数も確保された。このような改革は、1932（昭和7）年の「師範学校音楽教員協議会」で議論された点が、今回の改正でほぼ実現されたと捉えることができる。これは文部省が国民的情操の涵養や聴覚の育成にとって重要な役割を果たす音楽教育に対し多大な期待を寄せている証拠であり、また、専門学校程度へと昇格した一つの表れと捉えてよい⁸¹。

¹ 高木太郎「教員養成制度の歴史」『教員養成大学』三一書房、1959年、212-216頁。

² 内堀玉男「初等教員の養成」中島太郎編『教員養成の研究』第一法規出版、1961年、105頁。

³ 逸見勝亮「戦時体制下における師範学校政策の展開に関する一考察」『北海道大学教育学部紀要』第19号、北海道大学教育学部、1972年、119-123頁。

⁴ 寺崎昌男「師範学校改革諸案と師範学校の昇格」中内敏夫・川合章編『日本の教師6／教員養成の歴史と構造』明治図書出版、1974年、221-241頁。

⁵ 小沢熹「教育審議会における師範学校制度の改革構想に関する一研究」『弘前大学教育学部紀要』第32A、弘前大学教育学部、1974年、11-24頁。

⁶ 篠田弘「戦時教育体制と教員養成」仲新監修『学校の歴史 第5巻 教員養成の歴史』第一法規出版、1979年、77-98頁。

⁷ 横畑知己「1943年「師範教育令」に関する一考察——師範学校昇格運動とその思想」『教育学研究』第54巻第3号、日本教育学会、1987年、258-267頁。

⁸ 清水康幸『教育審議会の研究 師範学校改革』野間教育研究所紀要第42集、野間教育研究所、2000年、410-563頁。

⁹ ここでは、篠田弘「戦時教育体制と教員養成」仲新監修『学校の歴史 第5巻 教員養成の歴史』第一法規出版、1979年、80-81頁から引用。

¹⁰ 横畑、前掲書、18頁。

- 11 横畑知己「教員養成諸学校」寺崎昌男，戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育——皇国民「錬成」の理念と実践』東京大学出版会，1987年，164-165頁。
- 「錬成」論議について，水原克敏『近代日本カリキュラム政策史研究』風間書房，1997年，693頁には次のように著されている。「『専門家ノ研究ニ依リマス，『鍛錬』ト云フ時ニハ金扁ガ正シイヤウニ考ヘラレル，後漢書カ何カニサウ云フ用法ガアル，『錬成』ト云フ字ハ実ハ余リハッキリシタモノデハナイヤウニ思ハレル，唯今マデ典籍デ使ッテアルノハ，十八史略ノ『旨ヲ承ケテ錬成』ト云フ字ガアリマス，其ノ時ニハ金扁ヲ使ッテ居リマス，其ノ程度ノ結論デアリマス，今マデ書キマシタノハ文部省デ使ヒマシタ用例ヲ其ノ伝統ヲ追ッテ書キマシタノデ，アト『訓練』『教練』『修練』ト云フ場合ニハ全部糸扁ヲ使ッテ居リマスノデ，其ノ伝実ハ糸扁ヲ使ヒマシタ』という説明で，今度は，金扁の「錬成」の方が妥当性が高いと説明された。これが字義解釈の最終結論で，金扁の「錬成」に落ち着くことになった」（なお，水原は，『教育審議会諮問第一号特別委員会整理委員会会議録 第一輯』263頁から引用している）。米田俊彦によると，「錬成」の最初の使用は1938（昭和13）年6月9日の文部次官通牒「集团的勤労作業運動実施ニ関スル件」（『文部時報』第六百二十三号，1938年6月21日，所収）である（米田俊雄『教育審議会の研究 教育行財政改革——付 国民学校・幼稚園審議経過』野間教育研究所紀要第44集，2002年，203頁）。
- 12 香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会編『香川大学教育学部百年のあゆみ』1989年，79-81頁。
- 13 同上，92頁。
- 14 同上，110頁。
- 15 その他，横畑は，1943（昭和18）年の新制度発足以前の段階で，錬成の立場からの教科の再編が行われていた例として，東京府大泉師範学校（1938年開校，本科第二部のみの単独設置校）を紹介している。横畑は以下の二つの特徴を指摘している。①従来の各教科が，「修練科，教学科，学術科，芸能科」という，後の師範学校規定とは大きく異なる四教科に「統合」されたこと。②全ての教科教授に「行」的な取扱いを徹底していること。
- 「芸能科」は，「国民芸術ノ立場ヨリ情操ノ醇化ヲ期ス」を要旨とし，「音楽」「図画」「書道」「園芸」が含まれていた（横畑，前掲書，155-157頁）。
- 16 石川謙代表『近代日本教育制度史料』第五巻，大日本雄弁会講談社，1956年，574-576頁。
- 17 「師範刷新要項 十四日の閣議で決定」『教育週報』第901号，1942年8月22日，1頁。
- 18 清水康幸『教育審議会の研究 師範学校改革』野間教育研究所紀要第42集，2000年，502頁。
- 19 石川，前掲書，第五巻，576-577頁。
- 20 石川謙代表『近代日本教育制度史料』第六巻，大日本雄弁会講談社，1956年，6-8頁。
- 21 石川，前掲書，第五巻，579-597頁。
- 22 清水，前掲書，526-530頁。
- 23 清水，前掲書，530頁。
- 24 水原克敏『近代日本カリキュラム政策史研究』風間書房，1997年，806-813頁。
- なお，文部省督学官の松久義平は次のように説明する。「国民学校に於いては国民の基礎的錬成上，芸能科の有する重要な意義を認めて，その毎週教授時数を大いに増加せるのみならず，総べてこれらを必須科目とし，その内容の面目を改めて再出発することとなつたのであつて，芸能科はここに極めて重要な地位を与へらるるに至つたのである」（松久義平「芸能科に就いて」日本放送協会編『文部省 国民学校教則案説明要領及解説』日本放送出版協会，1940年，790頁）。
- 25 文部省『国民学校教則案説明要領及解説』日本放送出版協会，1940年，109-110頁。
- 26 松久義平「芸能科に就いて」文部省『国民学校教則案説明要領及解説』日本放送出版協会，1940年，83-84頁。
- 27 同上，83頁。
- 28 「新制師範学校，初の校長会議 皇国の真姿体得 科学教育に努力せよ 文相訓示」『朝日新聞』夕刊，朝日新聞東京本社，1943年5月11日，1頁。
- 29 同上。
- 30 同上。
- 31 岡山師範学校編『岡山師範学校一覧』（自昭和十八年至昭和十九年），1944年，54-57頁（宮城教育大学附属図書館所蔵）。
- 32 同上，114頁。
- 33 座談会「新師範学校を語る」中，稲田清助，文部省師範教育課長の発言『日本教育』第三巻第一号，1943年4月，30頁。
- 34 座談会「新師範学校を語る」中，稲田清助，文部省師範教育課長の発言『日本教育』第三巻第一号，1943年4月，28-29頁。
- 35 横畑知己「教員養成諸学校」寺崎昌男，戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育——皇国民「錬成」の理念と実践』東京大学出版会，1987年，155頁。
- 36 石川，前掲書，第五巻，581頁。
- 37 座談会「新師範学校を語る」中，松久義平，文部省教学官の発言『日本教育』第三巻第一号，1943年4月，31頁。
- 38 松久義平「芸能科に就いて」日本放送協会編『文部省 国民学校教則案説明要領及解説』日本放送出版協会，1940年，79-80頁。
- 39 清水，前掲書，548頁。なお，清水は，群馬大学教育学部百年史編修委員会編『群馬大学教育学部百年史』1979年，459頁に掲載されている「本科3年時間表（例）」（昭和18「群馬師範卒アルバム」より）を例に挙げている。
- 40 文部省『秘 師範学校教科教授要綱案』1942年。

- 41 文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943年, 157-158頁。
- 42 石川謙代表『近代日本教育制度史料』第七卷, 大日本雄弁会講談社, 1956年, 223-224頁。
- 43 同上, 256-266頁。
- 44 逸見勝亮『師範学校制度史研究——15年戦争下の教師教育』北海道大学図書刊行会, 1991年, 377頁。
- 45 国立公文書館所蔵文部省文書『昭和十九年～昭和二十年師範学校令・昭和十九年青年師範学校規定』所収。
- 46 逸見, 前掲書, 377-380頁。
- 47 国立公文書館所蔵文部省文書『昭和十九年～昭和二十年師範学校令・昭和十九年青年師範学校規定』所収。
- 48 逸見, 前掲書, 371-375頁。
- 49 石川, 前掲書, 第七卷, 273-274頁。
- 50 石川, 前掲書, 第七卷, 274-275頁。
- 51 逸見, 前掲書, 382-383頁。
- 52 先行研究は以下の通り。群馬師範学校の動向については, 柳井久雄『師範学校——太平洋戦時下の教育』上毛新聞社, 1999年, 129-164頁。青山師範学校の動向については, 陣内靖彦『東京・師範学校生活史研究』東京学芸大学出版会, 2005年, 157-161頁。
- 53 香川大学, 前掲書, 113頁。
- 54 香川師範学校男子本科・昭和23年3月卒同窓生『年表 わが香川師範時代〔昭和17年2月15日～昭和23年3月6日〕』1996年。
- 55 香川師範学校男子部本科・昭和23年3月卒同窓生『わが香川師範時代』1996年, 29頁。
- 56 香川師範学校男子本科・昭和23年3月卒同窓生『年表 わが香川師範時代〔昭和17年2月15日～昭和23年3月6日〕』1996年, 22頁。
- 57 同上, 25頁。
- 58 同上, 36頁。
- 59 香川大学, 前掲書, 197-200頁。
- 60 同上, 198頁。なお, 1946(昭和21)年3月, 香川師範学校(女子部)を卒業した鬼無玲子氏によると, 香川師範学校(女子部)では1944(昭和19)年度の授業はしっかり行われたとのことである。また, 鬼無氏は、『香川大学教育学部百年のあゆみ』(198-199頁)の記述通り, 1945(昭和20)年2月14日から7月31日まで愛知県半田市の中島飛行機半田工場で勤労動員を行った(2005年3月16日, 於: 香川県高松市内の村井建設KK)。
- 61 岡山大学二十年史編さん委員会編『岡山大学二十年史』1969年, 72頁。
- 62 岡山師範学校記念碑建立委員会『回想岡山師範学校』1976年, 9頁。
- 63 同上。
- 64 香川大学, 前掲書, 198-199頁。
- 65 同上, 199頁。
- 66 香川師範学校男子部本科・昭和23年3月卒同窓生『わが香川師範時代』1996年, 38頁。岡山師範学校記念碑建立委員会, 前掲書, 22頁。
- 67 真下飛泉(ましもひせん)作詞, 三善和気(みよしかずおき)作曲《戦友》1905年。安田寛は, 「それまで長音階で書かれていた軍歌を短音階で書いた画期的軍歌で, 士気を鼓舞すること一辺倒だった軍歌に反戦につながる要素を持ちこんだ軍歌」と分析する(安田寛「軍歌の流行」安田寛代表編『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』ビクターエンタテインメント, 2000年, 97頁)。
- 68 梅木三郎作詞, 高木東六作曲。
- 69 米山忠雄作詞, 江口夜詩作曲。
- 70 同上。
- 71 野村俊夫作詞, 明本京静作曲。
- 72 香川師範学校男子部本科・昭和23年3月卒同窓生『年表 わが香川師範時代』1996年, 29頁。
- 73 香川大学, 前掲書, 110頁。
- 74 同上。
- 75 岡山師範学校(男子部)1945(昭和20)年9月卒業の生徒が教育実習を受けていないと筆者が判断したのは以下の資料からである。①岡山師範学校記念碑建立委員会『回想岡山師範学校』1976年, 9頁に掲載されている「岡山師範学校8カ年の学生の動静」の「20年卒」の欄に教育実習の記録が掲載されていない点。②1945年9月卒業生の岡嶋信夫氏(2004年4月5日, 於: 岡山県備前市の岡嶋邸), 原卯三次氏(2004年5月7日, 於: 児島天満屋2階喫茶)へ行った聞き取り調査における証言。その他, 『回想岡山師範学校』には卒業生の一人, 吉田仁士氏が「卒業すれば, 教育実習もすんでないので, どうなるであろうか。不安であった」(24頁)と記している。
- 76 林, 前掲書, 68-69頁。
- 77 同上。
- 78 三好信浩『日本師範教育史の構造——地域実態史からの解析』東洋館出版社, 1991年, 135頁。
- 79 比較はすでに, 林, 前掲書, 70頁で行われている。
- 80 対村恵祐「初等教員の養成」中島太郎編『教員養成の研究』第一法規出版, 1961年, 141頁。

⁸¹ なお、国民学校「芸能科音楽」に関しては以下の研究がある。水原克敏『近代日本カリキュラム政策史研究』風間書房、1997年、828-832頁。山本文茂「芸能科音楽の理念と内容——法令条文の解釈を中心に」浜野政雄監修、東京芸術大学音楽教育研究室創設30周年記念論文集編集委員会編『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社、1999年、264-277頁。山本文茂「芸能科音楽教材の特質——教科書・教師用指導書の分析を通して」浜野政雄監修、東京芸術大学音楽教育研究室創設30周年記念論文集編集委員会編『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社、1999年、278-295頁。

第Ⅱ部 師範学校における音楽教育実践

：教科書分析と聞き取り調査から

第Ⅱ部 師範学校における音楽教育実践：教科書分析と聞き取り調査から

第1章 師範学校音楽教科書の変遷と経緯

本章では、師範学校音楽教科書の変遷と経緯について概観することを目的とする。

別府愛は、1911（明治44）年に改正された「師範学校規定」（文部省令第十二号）第四十七条を挙げ、師範学校教科書の検定制度が採用されたと主張する¹。しかし、中村紀久二は、1886（明治19）年の「教科用図書検定条例」（文部省令第七号）を挙げ、「ここに師範学校教科書をふくむ教科書検定制度が確立され、教科書は国家管理のもとに統括されるにいたった」と述べる²。平田宗史も中村と同一の見解である³。まずは、1886（明治19）年「教科用図書検定条例」をみてみたい（下線は筆者による）⁴。

第一条 小学校師範学校若クハ中学校ノ教科用ニ充ツルニ足ルト思考スル所ノ図書ヲ有スルモノハ文部省ニ願出テ其検定ヲ請フコトヲ得、

別府の主張は、上記の法令と照らし合わせても誤りである。師範学校教科書の検定制度開始は、1886（明治19）年「教科用図書検定条例」をもってとするのが正しい。事実、1888（明治21）年、大村芳樹『音楽之枝折』（上下2冊）が、検定に合格し、師範学校音楽教科書として発行されている⁵。

その後、文部省検定済師範学校教科書は、1943（昭和18）年3月の「師範学校規定」（文部省令第六号）を受け、国定師範学校教科書へと変わる⁶。そこで本章では、第1節で文部省検定済師範学校音楽教科書、第2節で国定師範学校音楽教科書と分けて考察したい。

ここまで話を進めてきた中においても、「教科書」と「教科用図書」という類似した用語が混在して使用されている。ここで用語の確認を行いたい。

「教科書」「教科用図書」の用語に関しては、谷原義一『教科書行政法』（1935）の中で次のように説明されている⁷。

教科書と云ふのが正しいのか、教科用図書と云ふのが正しいか。此の両者の区別如何。現行規定の上では大体師範学校・小学校の分をば教科用図書と称し、中学校・高等女学校・高等学校等の分をば教科書と書き分けてある。然し、教科用図書と教科書との間には、特に本質的な差がない。

（中略）

小学校及其の教員の養成機関である師範学校では、其の教授は幼少なる児童を対象とするものなる故に比較的多くの図書を利用するから之等の学校の分を教科用図書と云ひ、其の他のものを教科書なりと云はん。然し此の区別は判然としない。中学校・高等女学校にても教授上可なり多くの図書を利用せられるのは、周知の事実であつて畢竟するに教科書と教科用図書とは異語同義である。

その他、先行研究⁸や事典等⁹を見る限り、「教科書」という用語を使用することが一般的になっているので、本研究でもそれに倣う¹⁰。ただし、音楽の場合は「ピース楽譜」と呼ばれる1枚程度の楽譜も検定済教科用図書に含まれている（後述）。これらは現在の「教科書」の概念から捉えるとかなり隔たりがあるので、本研究では「ピース楽譜」を指す場合に関してのみ、「教科用図書」という用語に置き換えたい。

表Ⅱ-1・1は、戦前の師範学校と初等教育の教科書の歴史と区分を一覧にしたものである。唐沢富太郎は、戦前の教科書の歴史を8区分¹¹、山本文茂は音楽教科書の歴史を4区分している¹²。なお、表には、教科書の検定か国定かの区別を示し、主な教科書についても併記している。

初等教育の音楽教科書（唱歌教科書）に関して、唐沢は、「明治44年5月から大正3年6月にかけて文部省編纂の『尋常小学唱歌』（全6冊）が発行されたのが、国定として最初であり（以下略）」と述べる¹³。海後宗臣編『日本教科書大系 近代編 第二十五巻 唱歌』の目次においても、『尋常小学唱歌』は、「第一期国定時代唱歌教科書」という補足がある¹⁴。

しかし、堀内敬三・井上武士は、次のように記述する¹⁵。

文部省の『尋常小学唱歌』は国定ではなかったが唯一の官版唱歌曲集であったため、民間版の唱歌集を完全に圧倒し去って、ほとんど全国の小学校で用いられたから事実上国定と同じであった。

また、木村信之も『尋常小学唱歌』¹⁶について、

この教科書は必ず用いなければならない教科書ではなく、したがって検定教科書を採択する自由も残されていた。しかしそれまでの検定教科書に比べて教育的な配慮が行き届いていたから、ほとんどは文部省の教科書を使用したので、事実上は国定教科書のようなものであった。

と言及している¹⁷。このように、教育学の研究者たちと音楽教育学の研究者との間に隔たりがみられる。前者は1911（明治44）年の『尋常小学唱歌』を国定の始まりとするのに対し、後者は『尋常小学唱歌』ではなく、1941（昭和16）年の国民学校初等科音楽教科書を最初の国定教科書として捉える。鈴木治は、『尋常小学唱歌』について「法令上厳密に言えば唱歌の教科書は国定扱いではない。1894年12月8日の文部省訓令第7号が「唱歌集」の編纂、発行当時もまだ生きていた」と説明する¹⁸。また、国民学校初等科音楽教科書のための教科用指導書には、「教科書が国定となった」と明記されている¹⁹。したがって、本研究では1941（昭和16）年の国民学校初等科音楽教科書である『ウタノホン上』²⁰『うたのほん下』²¹『初等科音楽』²²を初等教育において最初の国定教科書と捉え、区分する。

表Ⅱ-1-1 戦前の教科書の歴史と区分

区分	年	師範学校		初等教育										
			主な教科書		主な教科書	山本による区分	唐沢による区分							
創始	1872 (M5) 1879 (M12)					明治前期 音楽取調掛による唱歌教材の開発	翻訳教科書							
模索	1880 (M13) 1882 (M15) 1885 (M18)		『小学唱歌集』		『小学唱歌集』		儒教主義復活の教科書							
確立	1886 (M19) 1889 (M21)	検定	『音楽之技折』	検定	『小学唱歌』	ペスタロッチ主義唱歌教育論の受容	検定教科書							
整備	1892 (M25) 1897 (M30) 1903 (M36)					明治後期 文部省唱歌の開発	『尋常小学唱歌』	国定一期教科書						
	1904 (M37) 1905 (M38) 1907 (M40) 1909 (M42)													
	1910 (M43) 1911 (M44) 1914 (T3) 1917 (T6)								国定二期教科書					
	1918 (T7) 1925 (T14) 1930 (S5) 1931 (S6)								大正・昭和前期 文部省唱歌への批判・国民学校芸能科音楽の新設	『新訂尋常小学唱歌』	国定三期教科書			
	1932 (S7) 1933 (S8) 1934 (S9) 1939 (S14) 1940 (S15)													
	1941 (S16) 1943 (S18) 1945 (S20)											国定	『ウタノホン上』『うたのほん下』『初等科音楽』	国定五期教科書

出典 唐沢富太郎『教科書の歴史』創文社、1956年、1頁。山本文茂「教科書」『日本音楽教育事典』音楽之友社、2004年、300-303頁。
文部省『学制百年史』（資料編）ぎょうせい、1972年、575-709頁。

注 教科書は主なもののみ挙げた。下線が付いた年は、「師範学校教授要目」等の法規が改正された年である。

第1節 文部省検定済師範学校音楽教科書の変遷

1. 教科書制度

本研究の対象時期は1931（昭和6）年以降である。しかし、ここでは教科書制度を明確にするためにさらに対象を広げて変遷を概略する。表Ⅱ-1-2は、師範学校教科書に関する法規を年表にしたものである。

表Ⅱ-1-2 師範学校教科書に関する法規

年月日	法規名	制度
1880 (M13)	文部省通達…教育上弊害あるものは教科書として採用しない	認可制
1883 (M16) 7/31	教科用図書認可ノ達 (文部省達第十四号)	
1886 (M19) 4/10	師範学校令 (勅令第十三号) 第十二条	検定制
1886 (M19) 5/10	教科用図書検定条例 (文部省令第七号)	
1886 (M19) 7/7	尋常師範学校教科書ヲ定ム (文部省訓令第七号)	
1887 (M20) 3/25	尋常師範学校教科用図書ハ該学校教員ノ会議ニ付シ文部大臣ノ裁定ヲ経ヘキ事 (文部省訓令第四号)	
1887 (M20) 5/7	教科用図書検定規則 (文部省令第二号)	
1894 (M27) 8/11	文部省版權所有図書ノ翻刻出版ニ関スル件 (文部省令第二十二号)	国定制
1907 (M40) 4/17	師範学校規定 (文部省令第十二号) 第四十七条	
1911 (M44) 1/13	師範学校規定中改正 (文部省令第二号) 第四十七条	
1939 (S14) 8/24	師範学校中学校高等女学校実業学校並青年学校ニ於テ唱歌用ニ供スル歌詞楽曲ニ関スル件 (文部省令第四十九号)	
1939 (S14) 8/29	師範学校中学校高等女学校実業学校並青年学校唱歌用歌詞, 楽曲採用ニ関スル件 (発図第一四三号)	
1941 (S16) 5/19	教科用図書調査会官制 (勅令第五百九十六号)	
1941 (S16) 5/21	教科用図書調査会規定 (文部省訓令)	
1943 (S18) 3/8	師範教育令改正 (勅令第百九号) 第六条	
1943 (S18) 3/8	師範学校規定 (文部省令第六号) 第二十四条, 第二十五条	
1943 (S18) 4/6	師範学校教科用図書翻刻発行規定 (文部省告示第二百六十七号)	

出典 谷原義一『教科書行政法』有斐閣, 1935年。文部省教育調査部『師範教育関係法令の沿革』1938年。文部省総務局調査課『師範教育関係法令の沿革 続篇』1943年 (『文部省調査部調査資料第十輯』湘南堂書店, 1981年使用)。『近代日本教育制度史料』第五卷, 大日本雄弁会講談社, 1956年。岩井正浩『資料日本音楽教育小史』青葉図書, 1978年。

検定制が導入された1886（明治19）年前後の時期については、水原克敏が明らかにしている²³。水原によると、当初、自由発行・自由採択であった師範学校教科書制度は、1880（明治13）年の文部省通達、1883（明治16）年の認可制を経て、1886（明治19）年の「教科用図書検定条例」（文部省令第七号）の制定を受ける²⁴。

さらに7月に出された文部省訓令第七号では、「尋常師範学校ノ教科書ハ当分左ノ図書中ヨリ選用スヘシ」と規定される²⁵。音楽では、以下の6冊の図書が指定されている²⁶。

- ・文部省音楽取調掛編『小学唱歌集』²⁷ (1881-84)
- ・文部省音楽取調掛編『唱歌掛図』²⁸ (1882-83)
- ・瀧村小太郎訳『音楽問答』²⁹ (1883)
- ・神津元訳『楽典』³⁰ (1883)
- ・内田彌一訳『音楽指南』³¹ (1884)
- ・内田彌一訳『音楽捷徑』

1887（明治 20）年以降については、谷原義一『教科書行政法』（1935）の記述を基にたどっていきたい。それによると、

明治二十年教科用図書検定条例制定以後は小学校、中学校、師範学校の教科書は総て検定済のものを採定すべきこととなったのであるが、師範学校の教科書としては検定済のものが少ないから十九年訓示する所の図書をも併せ使用することを許した。

明治二十六七年の交に至りて、時勢の進歩と共に新著の教科書を採用すべき必要が生じた。然し尚当時にては検定済のものが少いから、府県からの申請に依りて検定済の図書の出るまで当分無検定図書を使用することを許した。

とある³²。

その後、1911（明治 44）年に改正された「師範学校規定」（文部省令第十二号）に、以下の通り、検定制度が明確に位置付けられる³³。この規定は、1943（昭和 18）年 4 月に国定制度³⁴が導入されるまで適用される³⁵。

第四十七条 師範学校ノ教科用図書ハ文部大臣ノ検定ヲ経タルモノニ就キ地方長官ノ認可ヲ経テ学校長之ヲ定ムヘシ、但シ文部大臣ノ検定ヲ経サル教科用図書ヲ使用スル必要アルトキハ地方長官ハ文部大臣ノ認可ヲ経テ一時其ノ使用ヲ認可スルコトヲ得、

また、1939（昭和 14）年、唱歌用の歌詞、音楽の採用については、「文部省令第四十九号」によって次のような規定が加わる³⁶。これに伴い、＜ピース楽譜＞³⁷についても検定を受けなければいけなくなる³⁸。

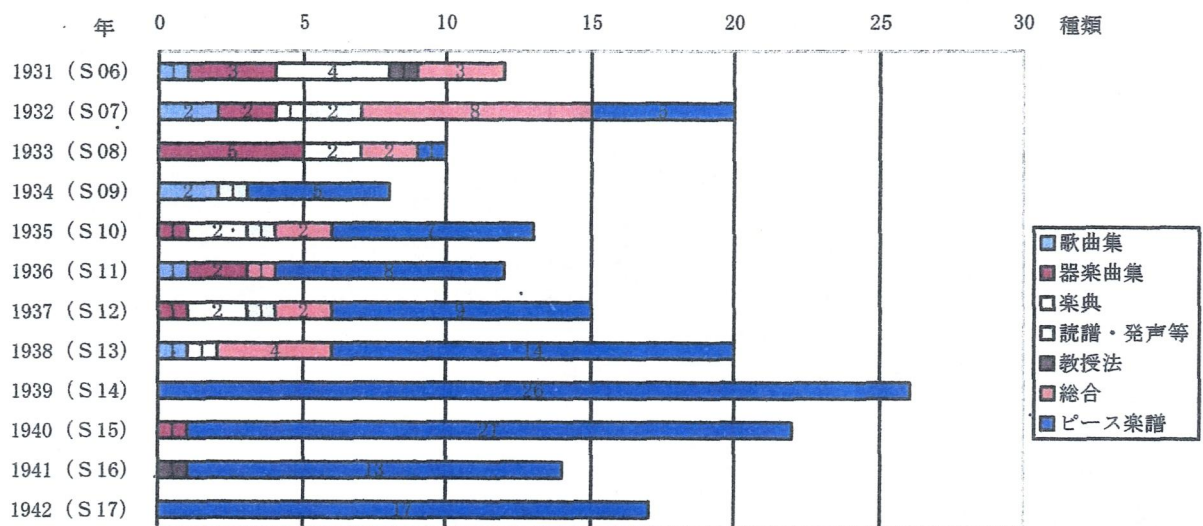
師範学校中学校高等女学校実業学校並青年学校に於て唱歌用に供する歌詞楽曲は文部省の選定又は制定に係るもの文部大臣の検定したる教科用図書中にあるもの及其の採用学校に特に関係あるものにして地方長官に於て文部大臣の認可を経たるものたるべし、

2. 文部省検定済師範学校音楽教科書

ここでは本研究対象とする 1931（昭和 6）年から 1942（昭和 17）年における文部省検定済師範学校音楽教科書を取り上げる。資料としては、『小学校・師範学校・中学校・高等女学校検定済教科用図書表』（1886-1912）、『師範学校中学校高等女学校小学校検定済教科用図書表』（1912-1935）、『師範学校中学校高等女学校小学校検定済教科用図書表』（1935-1939）³⁹を用いる。

1931（昭和6）年から1942（昭和17）年までに師範学校音楽科用として検定許可を受けた教科用図書は、189種類ある。図Ⅱ-1-1では、教科用図書名に基づき、「歌曲集、器楽曲集、楽典、読譜・発声等、教授法、鑑賞、指揮法、総合（師範学校、中学校、高等女学校用に編纂された音楽教科書）」の8つのカテゴリー⁴⁰とピース楽譜に分類した。

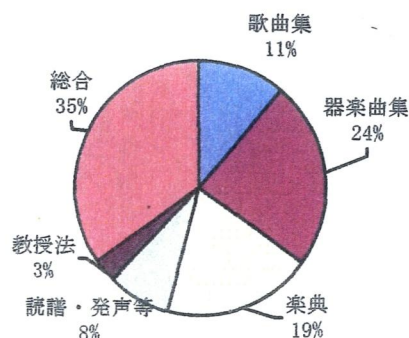
全体の約67%をピース楽譜が占めている。ピース楽譜は、教科用図書というよりはむしろ楽譜としての性格が強いので、これ以降分けて考察したい。



図Ⅱ-1-1 文部省検定済師範学校音楽教科書
(全189種類)

(1) ピース楽譜以外の教科用図書

図Ⅱ-1-1で示した中で、ピース楽譜以外の教科用図書全63種類を、図Ⅱ-1-2の円グラフに表した。63種類の内訳は、「歌曲集」7種類、「器楽曲集」15種類、「楽典」12種類、「読譜、発声等」5種類、「教授法」2種類、「総合」22種類である。「鑑賞」「指揮法」を独立して取り扱った教科書はない。



図Ⅱ-1-2 文部省検定済師範学校音楽教科書の分類
(1931-1942年度、全63種類)

表Ⅱ-1-3は、文部省検定済師範学校音楽教科書の兼用、専用の関係を集計したものである。高等女学校との兼用が、最多となっている。師範学校で使用する教科書全体の9割近くが、中学校ないしは高等女学校と兼用して作成されている。高等女学校との兼用の比率が高いのは、女子師範学校には高等女学校が併設され、同一の教育内容が展開されていたことが背景にあったと考えられる⁴¹。

表Ⅱ-1-3 文部省検定済師範学校音楽教科書の兼用、専用 (1931-1942年度、全63種類)

教科書の兼用、専用	種類 (%)
高等女学校と兼用	36 (57.1)
中学校、高等女学校と兼用	13 (20.6)
中学校と兼用	6 (9.5)
中学校、高等女学校、小学校 (1941年以降国民学校) と兼用	2 (3.2)
師範学校専用	6 (9.5)

師範学校専用の文部省検定済師範学校音楽教科書は、表Ⅱ-1-3に示した通り、1931(昭和6)年4月から1942(昭和17)年3月までに6種類しか発行されていない。6種類の師範学校専用の文部省検定済師範学校音楽教科書を一覧にしたものが、表Ⅱ-1-4である。それによると、内訳は、楽典1種類、教授法2種類、総合2種類、器楽1種類である。

表Ⅱ-1-4 師範学校専用の文部省検定済師範学校音楽教科書 (1931-1942年)

図書名	巻	発行年月日	検定年月日	著者	発行者	分類
昭和オルガン教科書	1	1931.11.7訂正	1931.11.25	楽書刊行協会	高井徳造	器楽
唱歌教授法教本	1	1932.2.19修正再版	1932.2.27	工藤富次郎	共益商社書店	教授法
師範音楽教本 二部用	2	1932.7.27訂正	1932.8.23	福井直秋	帝国書院	総合
師範学校楽典教科書五訂	1	1935.7.18五訂訂正	1935.7.20	楽書刊行協会	高井徳造	楽典
標準師範学校音楽教科書	2	1938.12.20修正再版	1939.1.28	黒沢隆朝・小川一朗	共益商社書店	総合
芸能科音楽指導法教本	1	1941.9.8	1941.12.10	工藤富次郎	共益商社書店	教授法

出典 文部省『検定済教科用図書表』から作成。

表Ⅱ-1-4にみるように、著書には福井直秋、黒沢隆朝等の音楽教科書作成の権威者が含まれている。以下、福井、黒沢の主な教科書をみてみよう。

① 福井直秋の教科書

まず、福井直秋⁴²の『師範音楽教本 二部用』は2巻からなり、はしがきによると、「現行の師範学校教授要目に拠り、師範学校の音楽教科用たらしめんがために編纂したもの」とされている。その内容は、1巻では25曲の「歌曲」の他、「読譜及音程練習」「楽譜論」「音階論」「音程論」によって構成されている(A5版、全95ページ)。2巻では、25曲の「歌曲」の他、「読譜及音程練習」「和声論」「楽式論」によって構成されている(A5版、全95ページ)⁴³。なお、この教科書の「歌曲」については、第2章において検討したい。

② 黒沢隆朝の教科書

黒沢隆朝・小川一朗の『標準師範学校音楽教科書』は、第一編（B 5 版，全 160 ページ）と第二編（B 5 版，全 170 ページ）の 2 巻からなる。緒言では、「文部省の音楽教授要目に準拠して師範学校第二部音楽科用教科書として編纂せられたもの」とされている。また、「本書一部を以つて、音楽の時間に課せられる教材の総ての分野を網羅することにつとめた」と書かれているように、『標準師範学校音楽教科書』には「教材歌曲」「読譜基礎練習」「楽典及び音楽に関する理論」「楽器奏法練習」「主要音楽家の小伝」「鑑賞用名曲」等の内容が掲載されている。この教科書についても、歌唱、器楽、鑑賞の視点から、第 2 章，第 4 章，第 5 章において検討したい。

ところで、編者の一人である黒沢は多くの音楽教科書の編纂を行っていた⁴⁴。黒沢の音楽教科書には「教授資料集成」という教師用書が別冊で発行されている。ただし、『標準師範学校音楽教科書』については「教授資料集成」が作成されていない。

表Ⅱ-1-5 は、黒沢が戦前に編纂した音楽教科書、関連書籍の一覧である。ちなみに、ここに挙げた『標準女子音楽教科書』⁴⁵（1933）や『改訂標準女子音楽教科書』⁴⁶（1939）は、多くの高等女学校、女子師範学校において使用されたと考えられる音楽教科書である。実際に 1943（昭和 18）年以降、中等学校の教科書が国定制となった際、この『改訂標準女子音楽教科書』は文部省の指定を受け全国の高等女学校において使用されていた⁴⁷。

表Ⅱ-1-5 黒沢が編纂した音楽教科書等一覧（戦前）

年	著 名	巻冊	出版社	共著者
1932（昭和 7）	標準男子音楽教科書 初級用	3	共益商社書店	小川一朗
1933（昭和 8）	※音楽教授資料集成	1	共益商社書店	小川一朗
1933（昭和 8）	標準女子音楽教科書	5	共益商社書店	小川一朗，林幸光
1933（昭和 8）－34（昭和 9）	※男子音楽教授資料集成	3	共益商社書店	小川一朗
1933（昭和 8）－35（昭和 10）	※女子音楽教授資料集成	5	共益商社書店	小川一朗，林幸光
1934（昭和 9）	女子楽典教本	1	三省堂	小松清
1935（昭和 10）	※音楽鑑賞図譜	1	共益商社書店	小川一朗
1935（昭和 10）－37（昭和 12）	※小学校唱歌教授資料集成	6	共益商社書店	井上武士
1938（昭和 13）	※高等小学青年学校音楽教授資料	1	共益商社書店	小川一朗
1938（昭和 13）	標準師範学校音楽教科書	2	共益商社書店	小川一朗
1938（昭和 13）	※楽器大図鑑・西洋編	1	共益商社書店	
1939（昭和 14）	改訂標準女子音楽教科書	5	共益商社書店	小川一朗，林幸光
1940（昭和 15）	※改訂標準女子音楽教授資料集成	5	共益商社書店	小川一朗，林幸光
1940（昭和 15）	標準オルガン教則本	2	共益商社書店	小川一朗

出典 文部省『師範学校中学校高等女学校小学校検定済教科用図書表』（大正 15 年～昭和 14 年），「文部省選定昭和十七年度中学校・青年学校音楽教科書」（共益商社書店），NACSIS Webcat を基に作成。

注 ※は関連書籍（文部省検定済教科書ではない）。ゴシック体は筆者による。

なお、黒沢の甥にあたる武石佳久氏は、次のように述べる⁴⁸。

叔父があのような教科書を作る上で、高知師範で教えたことや、東京の小学校で専科教員として教えた経験が役立ったと思われます。それに何より音楽学校卒業直前、牛山充先生の雑誌「音楽」を手伝ったり、敬文社の「音楽講義録」で、唱歌法・作曲法・音楽史・楽器奏法など多種の原稿を書かされたことが生かされたのだと思います。この講義録は先輩の成田為三がドイツ留学の資金を作るため企画したもので、その後始末をさせられたのでした。

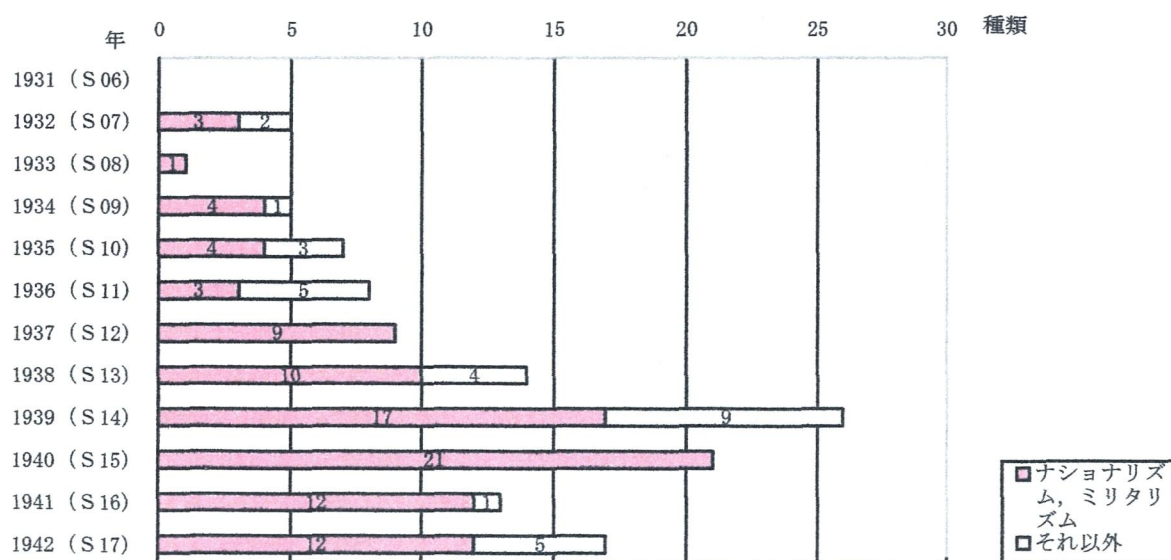
叔父は絵を描くのが得意で、小学校の授業にも唱歌の情景を板書したとみえ、昭和12年に完成した「小学校唱歌教授資料集成」にも反映しています。東南アジア訪問の際も民俗楽器を精細に写生しています。「楽器図鑑」のためでしょうか。小学校の唱歌の授業のイメージを先にあって、それを実施する教師像を「師範学校教科書」で追及したものと思われます。実際にあの教科書で学ばれた先生方の感想をお聞きしたいものです。
(2005年12月25日 武石氏 書簡から)

その他、楽書刊行協会の『師範学校楽典教科書五訂』は、1925（大正14）年に発行された『師範学校楽典教科書』⁴⁹が基になっている。これとは別に楽書刊行協会から『師範学校本科二部楽典教科書』⁵⁰（1913年）が出ている⁵¹。

以上に挙げた、福井、黒沢、楽書刊行協会編集の教科書は、師範学校の本科第二部を意識して編纂されたという点で共通している。このような教科書が発行された背景には、1931（昭和6）年の本科第二部の修業年限が2年間に延長されたこと⁵²が関係している。

（2） ピース楽譜

図Ⅱ-1-3は、1931（昭和6）年から1942（昭和17）年におけるピース楽譜の推移を表したものである。ここでは、ピース楽譜のタイトルが、ナショナリズム、ミリタリズム的色彩が強いかどうかについても示している。全126種類の内、96種類、約76%が、ナショナリズム、ミリタリズムに該当する。それ以外の30種類は、健康、体育、郷土に関する内容のタイトルが付けられている（表Ⅱ-1-6）。これらの曲のタイトルには直接的にはナショナリズム、ミリタリズムの内容が含まれていないとはいうものの、最終的にはそのような意味が込められている。したがって、ほとんどすべてのピース楽譜が、ナショナリズム、ミリタリズムを色濃く反映しているといえよう。



図Ⅱ-1-3 ピース楽譜（全126種類）

1931（昭和6）年にはゼロであった冊数が、年々増加し、第二次世界大戦が勃発した1939（昭和14）年には26種類に達している。1939（昭和14）年に急増した背景には、「文部省令第四十九号発令」を受け、ピース楽譜に関しても生徒に歌わせるためには検定を受けなければいけなかったことが起因している⁵³。その後、ピース楽譜の発行冊数はやや減少する。この原因としては、1940（昭和15）年に「新聞雑誌用紙統制強化」が行われたように⁵⁴、紙不足が影響していると考えられる。

表Ⅱ-1-6 ピース楽譜

	ナショナリズム, ミリタリズム	それ以外
1932	《爆弾三勇士の歌》《神社参拝唱歌》《日本国民歌》	《大東京市歌》《栄養の歌》
1933	《日の丸の旗》	
1934	《奉迎歌》《元師東郷》《満州国皇帝陛下奉迎歌》（小松耕輔）《満州国皇帝陛下奉迎歌》（読売新聞社）	《日本産業歌》
1935	《日本精神作興歌》《吾等の日本》《奉迎歌》《御親閲奉迎歌》	《大日本消防歌》《選挙厳正の歌選ぼうよ、みんな》《鶯絲の歌》
1936	《満洲出動皇軍歓送歌》《後親閲奉唱歌》《奉迎歌》	《オリンピック応援歌あげよ日の丸》《群馬県の歌》《オリンピック応援歌起てよ若人》《群馬県の子守歌》《生きよ国民結核予防の歌》
1937	《奉迎歌》《航空愛国の歌》《奉迎歌》《奉迎記念日奉唱歌》《進軍の歌》《愛国軍歌海軍将校の母》《愛国軍歌長城高し日の御旗》《賀茂神社式年正遷宮奉祝歌》《愛国行進曲》	
1938	《皇后宮御歌やすらかに》《紀元二千六百年頌歌》《日の丸行進曲》《大日本の歌》《婦人愛国の歌》《傷疾の勇士》《大陸行進曲》《愛馬進軍歌》《大日本傷疾軍人歌》《明治天皇御製馬》	《紀元二千六百年記念日本万国博覧会行進曲》《道民奉公歌》《勤労貯蓄の歌みのり》《健生歌》
1939	《軍馬祭、傷疾軍馬》《太平洋行進曲》《国民歌》《愛国歌戦時市民の歌 銃は執らぬ》《愛国勤労歌》《皇紀二千六百年奉祝歌》《山縣神社奉讃歌》《世界一周大飛行の歌》《官幣近江神宮奉讃大社歌》《御神火行進曲》《空の勇士》《奉祝国民歌》《軍人援護に関する皇后宮御歌》《皇軍に捧ぐる感謝の歌》《英霊讃歌》《紀元二千六百年讃歌》《○国聖地の歌》	《長崎県自嘲歌》《体育行進曲 くろがねの力》《和歌山県県勢歌》《宮城県民歌》《明治神宮国民体育大会の歌》《令旨奉體結核予防の歌 太陽の愛子》《九州健児の歌》《象山佐久間先生》《山口県民歌》
1940	《満洲建国の歌》《防空の歌》《満洲帝国皇帝陛下奉迎国民歌》《興亜行進曲》《此一戦》《日本勤労の歌》《国民進軍歌》《みんな兵士だ弾丸だ》《航空日本の歌》《靖国神社の歌》《国民協和の歌》《靖国神社の歌》（修正）《国民歌出せ一億の底力》《埼玉青年の歌》《「戦陣訓」の歌》《大政翼賛の歌》《皇后陛下御誕辰奉祝歌》《同胞融和の歌》《生民健生歌》《国民学校の歌》《護れ太平洋》	
1941	《国民総意の歌「さうだその意気」》《農民歌・国の幸》《大日本青少年国制定歌「世紀の若人」》《空襲なんぞ恐るべき》《興亜行進曲「アジアの力」》《翼賛愛知の歌》《大東亜決戦の歌》《十億の進軍》《信濃宮（宗良親王）御歌君のため》《戦時名古屋市民歌》《大詔奉戴の歌》《防空監視の歌》	《女子体育の歌》
1942	《大詔奉戴日の歌》《特別攻撃隊》《軍神岩佐中佐》《大南洋唱歌》《七洋制覇の秋「海行く日本」》《大君の醜の御槍》《子賓の歌》《小国民進軍歌》《アジアの青雲》《大日本婦人会合歌》《愛知県勤労報国隊歌》《青年歌 起てよアジアの若き友》	《橋本左内》《日本の母の歌》《日本の母を頌ふ》《日本の母の歌（二部合唱用）》《女子青年歌をとめの幸》

出典 文部省『検定済教科用図書表』から作成。

3. 師範学校標準教科書

1937（昭和12）年3月、修身、公民科、教育、国語漢文、歴史、地理の6科目の「師範学校教授要目」が改訂された⁵⁵。清水によると、1937（昭和12）年7月、文部省に「中等学校教科書調査委員会」が設置され、1938（昭和13）年に『師範修身書巻一』⁵⁶、1939（昭和14）年に『師範修身書巻二』と『師範公民書（上巻）』⁵⁷、1940（昭和15）年に『師範公民書（下巻）』⁵⁸という師範学校標準教科書が刊行されたとされている⁵⁹。

では、音楽の場合においては、師範学校標準教科書編纂の動きはなかったのだろうか。第Ⅰ部で取り上げた通り、1932（昭和7）年2月18日から20日まで、東京音楽学校において「師範学校音楽教員協議会」が開催された⁶⁰。その中で師範学校音楽教科書についての協議も行われた。実際には1943（昭和18）年の国定教科書制度が導入されるまで、音楽科に関しては師範学校標準教科書が刊行されることはなかった。現に刊行された修身、公民の師範学校標準教科書に関しては、教科書の統制化という動向に対して一部の批判の声があった⁶¹。しかし、音楽についてはそのような声はほとんど見られず、上記の討議を見る限り、「規範的理想の良教科書」を求める声が強かったことがうかがえる。

4. 共益商社書店「文部省選定昭和17年度中等学校・青年学校音楽教科書」一覧

表Ⅱ-1-7は、共益商社書店の「文部省選定昭和17年度中等学校・青年学校音楽教科書」の一覧である⁶²。表の左端に下記のように記されていることから、教科書の注文票であると考えられる。

御願ひ

御通報書は昭和十六年七月三十一日迄に弊社に到着する様御配慮相願度候用紙の配給上是非御実行相願度旨
文部省御当局より御注意有之候次次第特に御願申上候、

共益商社書店

「男、女師範学校の部」の欄に目を向けたい。この欄には、『新男子音楽教科書』『標準師範学校音楽教科書』『改訂標準女子音楽教科書』『バイエルピアノ教則本』『ツエルニー（三十番）ピアノ教本』『標準オルガン教則本』『中等発声練習教本』『複音練習教科書』『新選重音唱歌集』『唱歌教授法教本』の10種類の教科書が掲載されている。『唱歌教授法教本』については、「目下文部省検定修正中、年内に検定の予定」と説明されているのは、1941（昭和16）年の国民学校芸能科音楽発足に伴い、教科書の内容を書き改めたと推察する。実際に1941（昭和16）年には『芸能科音楽指導法教本』が発行されている⁶³。

表Ⅱ-1-7 共益商社書店の「文部省選定昭和17年度中学校・青年学校音楽教科書」の一覧の一部

【男女師範学校の部】

書名	巻名	定価	発行年月日	検定年月日	著者	摘要
新男子音楽教科書	一編	・五五	昭和一〇、二、五 修正再版	昭和一〇、二、二七	若狭萬次郎	
同	二編	・五五				
同	三編	・五五				
標準師範校音楽教科書	一編	・一六五	昭和一二、二、一〇 修正再版	昭和一二、二、一八	黒澤隆朝 小川一朗	
改訂標準女子音楽教科書	一編	・六五				
同	二編	・七〇				
同	三編	・七〇	昭和一二、二、二五 修正再版	昭和一二、二、二五	黒澤隆朝 小川一朗 林幸光	
同	四編	・七五				
同	五編	・七五				
バイエルピアノ教則本	全	・一五〇	昭和七、六、二七 修正二七版	昭和七、七、九	萩原英一	
ビツエル・ノ教本(三十番)	全	・一〇〇	昭和八、一、二五 修正再版	昭和九、二、二二	萩原英一	
標準オルガン教則本	一編	・八五	昭和一五、七、一九 訂正再版	昭和一五、八、二八	黒澤隆朝 小川一朗	
同	二編	・一〇〇				
中等段聲練習教本	全	・二五	昭和八、二、一八 訂正再版	昭和八、三、一	水口廣	
複音練習教科書	全	・二五	昭和八、一、二五 修正再版	昭和八、二、六	池尻景順	
新選重音唱歌集	全	・五〇	昭和九、七、二一 修正再版	昭和九、七、一五	井上武士	
唱歌教授法教本	目下文部省検定修正中、年内に検定の豫定					
	工藤富次郎					

第2節 国定師範学校音楽教科書の編纂の経緯

1. 教科書制度

師範学校の官立専門学校程度への昇格をうたった1943（昭和18）年3月8日の「師範教育令改正」（勅令第百九号）では、

第六条 師範学校ノ編成，教科，教授訓練，教科用図書，生徒ノ入学，退学，懲戒，学資ノ給与及卒業後ノ服務等ニ関スル規定ハ文部大臣之ヲ定ム，

と規定される⁶⁴。また、同日に出された「師範学校規定」（文部省令第六号）では次のように教科用図書を定めている⁶⁵。

第二十四条 師範学校ノ教科用図書ハ文部省ニ於テ著作権ヲ有スルモノタルベシ，

特別ノ必要アルトキハ学校長ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ受ケ前項ニ規定スル教科用図書以外ノ教科用図書ヲ使用スルコトヲ得，

第二十五条 歌詞楽譜ハ教科用図書中ニ揚グルモノノ外ハ文部大臣ノ選定シタルモノ若ハ其ノ図書ニ付検定シタルモノ又ハ当該学校ニ特ニ関係アルモノニシテ学校長ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ受ケタルモノタルベシ，

同年4月6日、「師範学校教科用図書翻刻発行規定」（文部省告示第二百六十七号）が以下のように発せられ、文部省国定教科書は師範学校教科書株式会社から発行されることが規定される⁶⁶。

第一条 文部省ニ於テ著作権ヲ有スル師範学校教科用図書ハ本規定ニ依リ其ノ翻刻発行ヲ師範学校教科書株式会社ニ許可ス，

会社ハ前項ノ図書ヲ師範学校及該生徒ノ需要ニ応ジ供給スベシ，

このように昇格後の師範学校では国定教科書の使用が義務付けられた。

では、どのような経緯で国定師範学校教科書が作成されたかをみてみたい。

1942（昭和17）年5月、文部省は図書局を改組し、師範教科書専管の第二編修課を新設した⁶⁷。以下は、「図書局分科規定」である⁶⁸。

「図書局分科規定」

第七条 図書局に総務課、第一編集課、第二編集課及国語課を置き其の事務を分掌せしむ

(中略)

第二編集課に於ては左の事務を掌る

- 一 師範学校教科用図書の編集に関すること
- 二 師範学校教科用図書の調査検定及認可に関すること

1942 (昭和 17) 年 5 月 16 日の『教育週報』では、「第二編集課長には監修官塩野直道氏が榮進した。(中略) 第二編集課は師範学校教科書の編集、調査、検定、認可に関することを専管するわけで、このため一課を設けたといふことは、文部省としても特別に師範教科書を重視してゐることがうかがわれる」と記されている⁶⁹。第二編集課長の塩野直道は、「算術教育の恩人」と呼ばれ、後の 1945 (昭和 20) 年 5 月以降には金沢高等師範学校長、戦後は啓林館取締役を務めた人物である⁷⁰。

1943 (昭和 18) 年 1 月 16 日の『教育週報』には、「新制師範学校の教科書は、すでに国語、漢文が印刷に付されており、近く修身公民、国史、物理、数学、生物等が相次いで印刷されることになつており、全二十五冊の完成も近きにある」と報じられた⁷¹。その記事の中で、第二編集課長の塩野は、次のように語っている⁷²。

今度の教科書は全体に程度が高く、調子が高く編纂してあるので師範の先生たちには、よほどしつかり勉強して貰はねばならぬと思つてゐる。一般国民学校に一冊宛送つて勉強してもらふとよいが残念ながら用紙不足のため印刷部数が少くてそれができない。教科書編纂の従来^{つづ}の考へ方は、どちらかといふと重要な事項がいくつもならべてあつて、それを教師が説明し、生徒が理解できればよいやうなことになつてゐたが、教科書は皇国の道を修練する手引であり道を知り行ずる契機、手がかり、方向を与へるものでなければならぬ。従つて、今度の教科書は師弟同行の道の修練の媒介物といふ考へ方に立つて編纂されてゐる。

国民学校への配本に関しては、「用紙不足の折柄として文部省でも二万部しか印刷しないことになつてゐるが、国民教育の創期的な転換のときに当つて、もう一奮発してせめて国民学校と同数くらゐの増刷をすべきであると当局を激励する声が高くなつてゐる」と同日の『教育週報』に説明されている⁷³。

このように、国定師範学校教科書に対する期待は高く、また、塩野も意気込んでいた。しかし、結局は新制度が発足する 4 月 1 日にすべての教科の教科書を用意することができなかった。4 月に発行できたのは、『師範漢文』と『師範生物』の 2 種類だけに過ぎない。塩野は、3 月 15 日に行われた座談会の中で次のように述べる⁷⁴ (下線は筆者による)。

専門学校程度の教科書二十五種類を四月に間に合ふやうに出せといふ命令だつたのでありますが、監修官といふのは、これは十人ばかり、さうして雇員を合せて三十人、委員七十人ばかり任命して貰つてやつて居るのですが、これは無理な話です。今発行状況とか何とかいはれたが遅れるのは誰が悪いかわからぬが、当面の責任者としては何とかして授業に支障を来さしめざる工夫は致したいといふやうに考へて居ります。そこでお詫びしなければならぬのは、私としては四月初めに教科書二十五種類を間に合はすといふことは殆ど不可能でありそれから又もう一つは師範学校の本科一年だけしか出さない。師範学校が今度新たになるのだから全部文部省から出さなければならぬのに一年しか出せない、それから本科一年にしても男子と女子と非常に異ひがあるに拘はらず、それが工作だつたか何だかに男子用女子用があつてあとは全部男子だけで、殊に教育なんか男子は一年「教育史」二年が「教育要義」女子は入れ替つて居るにも拘はらず、「教育史」しか出せぬ。男子用、女子用が男子用だけある。さういふ点さつきから基本教科と選修教科とかいつて居りますが、選修教科なんかについて教科書は一切目をつむつて居る。かういつたやうな点に教科書として不十分な点がある、さういふ点は非常に文部省としては相済まぬことと思つて居ります。かういふ時局ですからさういふところはおほらかに呑込して戴く、かういふ風に思つて居ります。

塩野は、教科書編纂の大体の根本方針として、「日本肇国以来の伝統を顕示するといふことと、その伝統を現実に将来に活かして行くといふこと」を基本とし、さらに以下の4点を挙げる⁷⁵。

- 第一が、雄大にして強靱な国民性格を錬成する、
- 第二が、主体的活動精神を鼓吹する、
- 第三が、絶えず創造の熱情を涵養する、
- 第四が、率先窮行一世を率ゐるの氣迫と実践力を培ふ、

文部省『学制百年史』（1972）によると、師範学校用国定教科書は次の通り発行されている⁷⁶。

修身、公民、教育、心理、国文、国文学史、国語要説、書道、漢文、歴史、地理、数学、生物、物象、音楽、器楽、図画、工作、家政、被服、衛生、育児保健、農業、農芸、商業の三学年制用書を逐次刊行し、その数は57点にのぼった。

57点とあるけれども、その内訳は明らかにされていない。参考までに筆者がNACSIS Webcat⁷⁷（総合目録データベース www 検索サービス）や国立国会図書館蔵書検索申込システム⁷⁸（NDL-OPAC）から得た情報を基に作成したものが、表Ⅱ・1・8である。この表から「理数科」の教科書の発行が比較的早かったことや、8種類の教科書に巻二や下巻が作成されていたことが分かる。音楽については、巻一しか出ていない。

表Ⅱ-1-8 師範学校用国定教科書

	教科書名	発行年月	教科書名	発行年月	備考
国民科	『師範修身公民：本科用』 卷一	1943年11月	『師範修身公民：本科用』 卷二	1944年6月	
	『師範国文』	1943年5月	『師範国文』 卷二	1944年10月	
	『師範漢文：本科用』 卷一	1943年4月	『師範漢文：本科用』 卷二	1944年2月	
	『師範国文学史』	1943年7月			
	『師範国語要説』	1943年11月			
	『師範歴史：本科用』 卷一	1944年5月	『師範歴史：本科用』 卷二	1945年1月	
教育科	『師範地理：本科用』 卷一	1943年7月			
理科	『師範教育』 卷一上	1943年6月	『師範教育』 卷一下	1943年6月	
	『師範心理』 上巻	1943年5月	『師範心理』 下巻	1943年11月	
	『師範衛生』 巻一	1943年7月			
実業科	『師範数学：本科用』	1943年5月	『師範物象：本科用』 卷二	1944年	
	『師範物象：本科用』	1943年5月			
	『師範生物：本科用』	1943年4月			
家政科	『師範農業』	1943年6月			男子のみ
	『師範商業』 巻一	1943年6月			
芸能科	『師範家政：本科用』 巻一	1943年9月	『師範家政：本科用』 卷二	1945年1月	女子のみ
	『師範育児保健：本科用』 巻一	1944年3月	『師範育児保健：本科用』 卷二	1944年	
	『師範被服：本科用』	1943年11月			
	『師範農芸』	1943年9月			
芸能科	『師範音楽：本科用』 巻一	1943年7月	『師範書道』 卷二	1944年6月	
	『師範器楽：本科用』 巻一	1943年7月			
	『師範書道』 巻一	1944年5月			
	『師範図画：本科用』 巻一	19?			
	『師範工作：本科女子用』 巻一	1943年8月			
	『師範工作：本科男子用』 巻一	1943年10月			

出典 NACSIS Webcat, 国立国会図書館蔵書検索・申込システム MDL-OPAC. .

注 戦後の暫定教科書は含めていない。下線は筆者による。

なお、塩野は、「教科書は本当の皇国の道の修練，師範学校に於ては師たる道の修練の手引き，手がかりを与へるに過ぎない」「教科書を手がかりとして考へ或はそれを手がかりとして実践する」と述べる⁷⁹。戦前の国定教科書といえば，唯一絶対の教材であったというのが通説である⁸⁰。にもかかわらず，塩野は，「教科書を教える」ではなく，「教科書で教える」といった姿勢で説明している点は注目される。

こうして 1943（昭和 18）年 7 月 6 日に，文部省『師範音楽 本科用巻一』⁸¹（師範学校教科書株式会社），7 月 30 日に，文部省『師範器楽 本科用巻一』⁸²（師範学校教科書株式会社）が発行される。編纂者の氏名は正式に公表されていない。しかし，木村信之によれば，以下の 6 名が編纂委員に選ばれたと述べている⁸³。この中で，下総，城多は，国民学校の芸能科音楽教科書の編纂委員も兼ねており，国民学校における音楽教育との関係がうかがえる⁸⁴。

片山 顯太郎	東京音楽学校教授	日本音楽史
下 総 皖一	東京音楽学校助教授	音楽理論
城多又兵衛	東京音楽学校助教授	基本練習
橋本 清司	東京府立第一高等女学校教諭	楽典
高折 宮次	東京音楽学校教授	器楽
風巻景次郎	東京音楽学校教授	歌唱

2. 師範学校音楽科教員講習会

『師範音楽 本科用巻一』と『師範器楽 本科用巻一』の内容・指導の徹底を計るため、「師範学校音楽科教員講習会」が、1943（昭和 18）年 5 月 24, 25 日、東京音楽学校において開催された。以下は東京音楽学校の『同声会報』第 264 号（1943 年 5 月）に掲載されている「新制度師範学校音楽科教員講習会実施要綱」から転載したものである⁸⁵。

新制度師範学校音楽科教員講習会実施要綱

一、名 称	師範学校音楽科教員講習会	
一、目 的	新教科書「師範音楽」及「師範器楽」ノ研究	
一、日 時	昭和十八年五月二十四日（月）二十五日（火）午前八時ヨリ午後三時マデ	
一、会 場	下谷区上野公園東京音楽学校	
一、科目及講師	「師範音楽」及「師範器楽」ノ編纂ニツイテ	
	文部省図書監修官	山形 寛
	歌曲題材ノ選択及解説	文部省教科書編纂委員 風巻景次郎
	東京音楽学校教授	
	楽曲及音楽史ニツイテ	文部省教科書編纂委員 片山 顯太郎
	楽典ニツイテ	文部省教科書編纂委員 橋本 清司
	音楽理論	文部省教科書編纂委員 下 総 皖一
	東京音楽学校教授	
	器楽及伴奏ニツイテ	文部省教科書編纂委員 高折 宮次
	東京音楽学校教授	
	聴覚訓練、唱歌法及歌曲ノ練習	
	文部省教科書編纂委員	城多又兵衛
	東京音楽学校教授	

実演	1 伴奏	東京音楽学校嘱託	朝倉 靖子
	2 範唱	東京音楽学校研究生	石井 好子
		同	加藤 唱子
		同	益子 萬里子
	3 合唱	東京音楽学校	生徒五十五名

一、講 習 員 各道府県師範学校音楽科担任教員凡百名

『師範音楽 本科用巻一』『師範器楽 本科用巻一』の編纂委員6名全員が、講師として講習会にかかわっている⁸⁶。また、東京音楽学校の嘱託や研究生、生徒が加わり、伴奏、範唱、合唱の実演を交えた講習会である。1943（昭和18）年9月の『同声会報』第265号には、「前国民学校講習に引続き新制師範学校音楽科教員の講習を二十四、五の両日、本校奏楽堂に催した。全国各師範学校教員百二十余名参集左記各講師の熱心なる講義並に実技の講習を受けた（以下、略）」と報告されている⁸⁷。

3. 『師範音楽 本科用巻一』『師範器楽 本科用巻一』

『師範音楽 本科用巻一』（以下、『師範音楽』、と略記）はB5版、『師範器楽 本科用巻一』（以下、『師範器楽』、と略記）はA4版で、いずれも白黒印刷である。『師範音楽』『師範器楽』には緒言にあたる文章がないため、各教科書の編纂方針は明らかではない。

『師範音楽』は全180ページからなり、内容を五部で構成、最後に「附録」として「歌曲」の解説を記載する形を採っている（表Ⅱ-1-9）。教授法に関する内容は含まれていない。

『師範器楽』は全54ページからなり、鍵盤楽器用の練習曲が78曲掲載されている。

表Ⅱ-1-9 『師範音楽 本科用巻一』の構成

頁	タイトル	内 容
1-21	儀式唱歌	《君が代》《勅語奉答》《一月一日》《紀元節》《天長節》《明治節》《満州国国歌》《海ゆかば》
22-113	歌曲	《櫻》《四季》《ほととぎす》《平安の花》《夏は来ぬ》《くろしほ》《南方航空路》《日本農道の歌》《水辺歌》《靖国神社》《健歩の歌》《婦人従軍歌》《霜月》《朝びらきの歌》《箱根八里》《古歌四首》《防人の歌》《野村望東尼》《われた茶碗》《わが陸軍》《鉄》《白楽天》
114-122	基礎練習	発声練習、音程練習、二部合唱、三部合唱
123-157	音楽理論	一 楽典 (一) 音階 (二) 音程 二 和声 (一) 和音 (二) 三和音 (三) 四声部 (四) 長音階ノ三和音 (五) 三和音の連結 (基本位置ノ主要三和音) (六) 和声実習上ノ注意
158-174	日本音楽史	一 上代ノ音楽 二 蕃楽ノ伝来 三 雅楽ト平安朝ノ音楽 四 鎌倉・室町時代 五 安土・桃山時代ノ音楽 六 江戸時代ノ音楽
175-180	附録	「歌曲」22曲の解説

『師範音楽』の特徴は、「日本音階」や「日本音楽史」（表Ⅱ-1-10）が掲載され、日本音楽が導入されたことである⁸⁸。その状況については、表Ⅱ-1-11に示した。「師範学校教科教授及修練指導要目」、『師範音楽』ともに鑑賞教材が示されていないので、表Ⅱ-1-12に国民学校芸能科音楽における日本音楽を扱った鑑賞教材を参考までに挙げた。いずれにせよ、師範学校史の中で日本音楽が法制上明文化されたのは、1943（昭和18）年の改正からである。「師範学校教科教授及修練指導要目」の「教授方針」には「我が国音楽ノ創造発展ニカムルノ精神ヲ涵養スベシ」と記されている⁸⁹。ここで日本音楽が導入された背景を探るために東京音楽学校や国民学校の動向をみてみたい。

東京音楽学校選科に邦楽科が設置されたのが1930（昭和5）年、本科に邦楽科が設置されたのが1936（昭和11）年である。校長の乗杉嘉壽は次のように述べる⁹⁰。

元来邦楽は我が民族の思想感情を基調として永い伝統の下に生成されたものであるが故に、教育上国民の情操陶冶や日本文化振興の為には最も重視されねばならぬ筈である。（中略）

遮莫、我等は茲に飛躍せる日本の諸文化と並んで、我等の生活や歴史や国体などの基礎の上に日本精神を表現せる立派な国楽の創成を期せなくてはならぬ。これが今日我等国民に課せられた文化的使命である。

一方、『国民学校教則案説明要領及解説』（1940）の中で文部省督学官の松久義平は、以下のように述べる⁹¹。

我々国民が秀麗なる風土自然を背景として歴史的に優れたる芸能文化を有してをることである。従来ややもすればこれらの歴史的文化を軽んずるの傾きなしとしないのであるが、将来これを尊重し、児童をして我が国の風土自然とともに歴史的文化に親しまして、その美しさを感じ得させ、国民的感激に導くことは国土愛護の念に培ひ、国民精神を涵養し国民生活を陶冶する上に極めて大なる力があるのである。

このように国民的情操の涵養のために日本音楽が利用されている。1941（昭和16）年には、国民精神文化研究所⁹²に芸術科音楽部が設置された⁹³。なお、ヘルマン・ゴチェフスキは、この時期について「日本音楽がアジアのコンテクストで観察され、アジアの様々な音楽の相互関係、歴史的な連続性と日本音楽の代表性が強調された」と捉える⁹⁴。

表Ⅱ・1・10 『師範音楽 本科用巻一』における「日本音楽史」

項	内 容
一 上代ノ音楽	1 神楽ノ起リ 2 軍歌ノハジマリ, 久米歌 3 葬祭ト音楽 4 素戔鳴尊ノ御歌 5 上代ノ楽器
二 蕃楽ノ伝来	1 蕃楽
三 雅楽ト平安朝ノ音楽	2 大仏開眼供養会 3 平安朝ノ雅楽 4 舞楽ト管絃 5 神楽 6 東遊ト大和舞 7 五節舞・大歌ト郢曲 8 催馬楽 9 朗詠 10 今様 11 民間ノ芸能
四 鎌倉・室町時代	1 平家琵琶 2 田楽 3 猿楽 4 国民芸能トシテノ能楽 5 民間芸能
五 安土・桃山時代ノ音楽	1 三味線ノ渡来 2 舞楽・能楽 3 民間芸能
六 江戸時代ノ音楽	1 江戸芸能ノ特質 2 浄瑠璃 3 小唄 4 長唄 5 歌澤節 6 箏曲 7 地唄

出典 文部省『師範音楽 本科用巻一』1943年, 158-174頁。

表Ⅱ・1・11 1943(昭和18)年, 師範学校における「日本音楽」

	歌唱	聴覚訓練	器楽	指揮法	音楽理論	鑑賞	音楽史	教授法
「師範学校教科教授及修練指導要目」	我が国の作品を主		我が国の作品を主		日本古来の音階, 日本古来の音楽の様式, 日本古来の楽器の構造	我が国の作品を主 我が国音楽の特質を会得 日本古来の音楽	我が国に於ける音楽の発達	
教科書	作曲者, 作詞者, すべて日本人				日本音階		日本音楽史	

表Ⅱ-1-12 国民学校芸能科音楽における日本音楽を扱った鑑賞教材

第2学年	第4学年	第5学年	第6学年
・ さくらさくら（日本古謡）	・ 春の海（宮城道雄） ・ ひらいたひらいた（下総皖一）	・ 六段の調（八橋検校）	・ さくら変奏曲（宮城道雄） ・ 越天楽（雅楽） ・ 千鳥の曲（吉沢検校） ・ 正調追分（日本民謡）

出典 国民学校教師用指導書。

以上、師範学校音楽教科書の変遷と経緯について概観した。師範学校音楽教科書は原則として、1943（昭和18）年の制度改革以前までは検定制度、それ以降は国定制度が採られていた。検定制度時代は、複数社から教科書が発行され、全体の9割近くが他の中等教育機関と併用できるように作成されていた。また、ピース楽譜と称した軍国主義的傾向の強い歌曲も検定を受けて、発行されていた。

1943（昭和18）年、『師範音楽』『師範器楽』が発行された。1932（昭和7）年の「師範学校音楽教員協議会」の中で協議、要望された国定師範学校音楽教科書が完成したのである。これらの教科書は、師範学校音楽科教員が求めている「規範的理想の良教科書」であったのか。また、1941（昭和16）年の国民学校「芸能科音楽」発足に伴い、師範学校の音楽教育はそれらの動向に対応していたのか。＜音楽教科書の軍用化＞の傾向がみられたのか。それらの疑問を解決するために、次項以降では、「歌唱」「発声」「器楽」「鑑賞」「聴覚訓練」の5領域ごとに教科書分析を行い、論じていきたい。

- 1 別府愛「福井直秋の教育活動と当時の教育状況——師範学校の教育を中心にして」武蔵野音楽大学音楽教育学科編集委員会『福井直秋著作解題』2000年、69頁。
- 2 中村紀久二『教科書の社会史』岩波書店、1992年（2001年重版使用）、76頁。
- 3 平田宗史『教科書でつづる近代日本教育制度史』北大路書房、1991年（1998年重版使用）、69頁。
- 4 岩井正浩『資料日本音楽教育史』青葉図書、1978年（1979年改訂版使用）、28頁。
- 5 文部省「師範学校中学校高等女学校検定済教科用図書表 自明治十九年五月至明治三十二年四月」92頁（中村紀久二編『検定済教科用図書表 二』教科書研究資料文献第四集、芳文閣、1985年、92頁）。
- 6 石川謙代表『近代日本教育制度資料』第五巻、大日本雄弁会講談社、1956年、583頁。
- 7 谷原義一『教科書行政法』有斐閣、1935年、8・9頁。
- 8 仲新『近代教科書の成立』大日本雄弁会講談社、1949年。唐沢富太郎『教科書の歴史』創文社、1956年（1968年重版使用）。山住正巳『教科書』岩波書店、1970年。梶山雅史『近代日本教科書史研究——明治期検定制度の成立と崩壊』ミネルヴァ書房、1988年。
- 9 井上知則「教科書」『新版 現代学校教育大事典』ぎょうせい、2002年、338-339頁。「教科課程の構成に応じて組織配列し、教授・学習の用に供せられる児童生徒用図書。その概念は、学習・学習観の変化に対応して歴史的にまた国によって異なっている。また、日本において教科書は文部科学省告示学習指導要領を基準として検定制度のもとで認定され、採択制度を経て学校・児童・生徒の教科書となる」。『新版 現代学校教育大事典』には、「教科用図書検定規則」（349-350頁）「教科用図書検定調査審議会」（350頁）はあるものの、「教科用図書」の項はない。
- 10 2005年現在では法令上、以下のように定義されている。
 - ・「教科書の発行に関する臨時措置法」第二条、昭和23年7月10日
この法律において「教科書」とは、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校及びこれらに準ずる学校において、教科課程の構成に応じて組織配列された教科の主たる教材として、教授の用に供せられる児童又は生徒用図書であつて、文部科学大臣の検定を経たもの又は文部科学省が著作の名義を有するものをいう。
 - ・「教科用図書検定規則」平成元年4月4日

この省令において「教科用図書」とは、小学校、中学校、中等教育学校、高等学校並びに盲学校、聾学校及び養護学校の小学部、中学部及び高等部の児童又は生徒が用いるため、教科用として編修された図書をいう。

(上記の出典は、『教育小六法<平成17年版>』学陽書房、1950年(2005年の重版使用)、217・220頁)。

- 11 唐沢富太郎『教科書の歴史』創文社、1956年(1968年重版使用)、1頁。
- 12 山本文茂「教科書」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社、2004年、300-303頁。
- 13 唐沢、前掲書、530頁。
- 14 海後宗臣編『日本教科書大系 近代編 第二十五巻 唱歌』講談社、1965年、3頁。
- 15 堀内敬三・井上武士『日本唱歌集』岩波書店、1958年(2003年重版使用)、260頁。
- 16 文部省『尋常小学唱歌』大日本図書、第1学年用・第2学年用：1911年、第3学年用・第4学年用：1912年、第5学年用：1913年、第6学年用：1914年。
- 17 木村信之「唱歌教科書総解説」海後宗臣編『日本教科書大系 近代編 第二十五巻 唱歌』講談社、1965年、653頁。
その他、以下の研究においても『尋常小学唱歌』を国定教科書ではなく、準国定教科書として捉えている。
 - ・岩井正浩『増補子どもの歌の文化史——二〇世紀前半期の日本』第一書房、1998年(2003年重版使用)、115頁。
 - ・鈴木治「文部省唱歌成立の一断面」日本音楽教育学会編『音楽教育学研究1 音楽教育の理論研究』音楽之友社、2000年、181頁。
 - ・赤井励「『尋常小学唱歌』研究の現状」安田寛代表編『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』ビクターエンタテインメント、2000年、206頁。
 - ・杉田政夫『学校音楽教育とヘルバルト主義——明治期における唱歌教材の構成理念にみる影響を中心に』風間書房、2005年、207頁。
- 18 鈴木、前掲書、189頁。
- 19 小学校の唱歌科に於ては、文部省著作の教科用図書ばかりでなく、広く文部大臣の検定を経た教科用図書を採用することが出来たが、国民学校に於ては、国定教科書が制定され、原則として文部省に於て著作権を有するもののみが、教科用図書として採用されることになった。更に小学校に於ては、尋常小学校第四学年以下に児童用の教科用図書が無かつたけれども、国民学校に於ては、全学年に亘つて児童用の教科書が編纂され、而もその教師用書が出来て、各教材の教授方針等が詳細に示されて居る(文部省『ウタノホン上 教師用』日本書籍、1941年、11頁)。
- 20 文部省『ウタノホン上』東京書籍、1941年。
- 21 文部省『うたのほん下』東京書籍、1941年。
- 22 文部省『初等科音楽一』大日本図書、1942年。『初等科音楽二』大日本図書、1942年。『初等科音楽三』日本書籍、1942年。『初等科音楽四』大日本図書、1942年。
- 23 水原克敏『近代日本教員養成史研究——教育者精神主義の確立過程』風間書房、1990年(再版1991年)、644頁。
その他、次の研究もある。仲新『近代教科書の成立』教育名著叢書①、日本図書センター、1949年(1981年複製版使用)。
梶山雅史『近代日本教科書史研究——明治期検定制度の成立と崩壊』ミネルヴァ書房、1988年。江崎公子「唱歌科と教科書(一)」『音楽研究』大学院研究年報第十五輯、国立音楽大学大学院、2004年、132-102頁。
- 24 水原、前掲書、644頁。
- 25 水原、前掲書、644頁。
- 26 文部省総務局調査課『師範教育関係法令の沿革 続篇』調査資料第十輯、1943年、22、26頁(『文部省調査部調査資料第十輯』湘南堂書店、1981年を使用)。
内田彌一訳『音楽捷徑』以外の5冊の本については、東京芸術大学百年史刊行委員会、財団法人芸術研究振興財団『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』音楽之友社、1987年、91-111頁、参照。
- 27 文部省(音楽取調掛)編『小学唱歌集』1881-1884年。
- 28 文部省(音楽取調掛)編『唱歌掛図』1882-1883年。
- 29 ユーシー(Jousse, Z. 1760-1837)、滝村小太郎訳、神津専三郎校閲、文部省刊『音楽問答』1883年。
- 30 カルコット(Callcott, J.W. 1766-1821、英)著、神津元訳、神津専三郎校閲、文部省刊『楽典』1883年。
- 31 メーソン、L.W.著、内田彌一訳、文部省編『音楽指南』1884年。
- 32 谷原、前掲書、60-61頁。
- 33 文部省教育調査部『師範教育関係法令の沿革』1938年、374頁。
- 34 「師範学校規定」(文部省令第六号)1943(昭和18)年3月8日、第二十四条。
- 35 なお、師範学校教科書の検定、国定制度に関しては、別府愛が言及している(別府愛「福井直秋の教育活動と当時の教育状況——師範学校の教育を中心として」武蔵野音楽大学音楽教育学科編集委員会『福井直秋解題』2000年、69頁)。
- 36 秋山龍英編『日本の洋楽百年史』第一法規出版、1966年、533頁。
- 37 「1曲だけのいわゆるピース楽譜」という表現は、木村信之「唱歌教科書総解説」海後宗臣編『日本教科書体系 近代編 第二十五巻 唱歌』講談社、1965年、643頁、の中で使用されている。
- 38 福井直秋は、「文部省の検定について」次のように言及している。

教授用の歌曲は文部省の訓令で文部大臣の検定を経たものに限られてゐるのである。法令で定められてゐる以上は固よりそれを無視することは出来ない、併し吾人は検定を謳歌し検定万能の主義者でもない。さらばとて法令上の制規を軽視し、出任せ千万に何でも主義であるものの少くない現状に同するものでも尚更ない。どちらかといへば法令そのものの現存してゐる以上、従順にその範囲内で教材を採決すべきであると思ふ。教育上結構な歌曲であり瑕瑾誤謬のないものであるならば、何等の面倒あることなくして検定を経ることが出来るのであるから、検定の要不要など取り立てて

論ずるに及ばないことである。自信ある作者は進んで検定に応ずべきであり、思慮深い教師は検定未済の材料を探るやうな軽挙をしない筈のものであらう。予は常に斯く考へてゐるからして検定の可否などを論ずる必要の那邊に存するかを疑ふものである。

(福井直秋『唱歌の歌ひ方と教へ方』共益商社書店、1924年、277-278頁)。

- 39 文部省図書局編『小学校・師範学校・中学校・高等女学校検定済教科用図書表』1886-1912年。文部省図書局編『師範学校中学校高等女学校小学校検定済教科用図書表』1912-1935年。文部省図書局編『師範学校中学校高等女学校小学校検定済教科用図書表』1935-1939年(上記の3冊は国立国会図書館蔵)。なお、1940-45年については、中村紀久二編『検定済教科用図書表』教科書研究資料文献第九集 七(文部省「師範学校・中学校・高等女学校・実業学校・小学校 至昭和十二年四月至昭和十二年四月至昭和十九年十二月、付：不認定図書表」1986年、国立国会図書館等所蔵本の復刻版を使用。
- 40 1931(昭和6)年の「師範学校教授要目改正」の音楽の内容を参考にカテゴリーを設定した。
- 41 三好信浩『日本師範教育史の構造——地域実態史からの解析』東洋館出版社、1991年、129-139頁。
- 42 福井直秋については、日本教育音楽百年史研究会「日本教育音楽史に残る人々」『音楽教育研究』4、音楽之友社、1968年、96-97頁の中で紹介されている。
- 43 『師範音楽教本二部用』は、武蔵野音楽大学音楽教育学科編集委員会『福井直秋著作 解題』2000年、25頁、の中で紹介されている。
- 44 平成15年度秋田の先覚記念室企画コーナー展『秋田の音楽家——展示解説資料』秋田県立博物館2003年、3頁。
- 45 黒沢隆朝・小川一朗・林幸光『標準女子音楽教科書』第一編～第五編、共益商社書店、1932年(文部省検定済、昭和8年3月2日、師範学校・高等女学校音楽科)。
- 46 黒沢隆朝・小川一朗・林幸光『改訂標準女子音楽教科書』第一編～第五編、中等学校教科書株式会社、1938(文部省検定済、昭和14年3月11日、師範学校・高等女学校音楽科)。
- 47 黒沢隆朝「国定教科書から検定教科書へ」『音楽教育研究』8月号第14巻第8号、音楽之友社、1971年、67頁。
- 48 2005年12月25日消印、筆者宛の書簡。
- 49 楽書刊行協会『師範学校楽典教科書』高井徳造、1925年(1930年二版発行、昭和4年12月28日文部省検定済)(滋賀大学附属図書館教育学部分館所蔵)。例言には、「師範学校の教科用書に充てんがために編纂せしもの」「大正14年4月18日に発布せられたる文部省訓令第七号師範学校教授要目の音楽科に準拠して説術したるもの」と説明されている。
- 50 楽書刊行協会『師範学校本科二部楽典教科書』高井徳造、1913年(1930年四訂再版発行、昭和5年1月20日文部省検定済)(滋賀大学附属図書館教育学部分館所蔵)。例言には、「師範学校本科第二部の教科用書に充てんがために編纂せしもの」「大正14年4月18日に発布せられたる文部省訓令第七号師範学校教授要目の音楽科に準拠して大正10年刊行せしものを茲に修正再訂せしもの」と説明されている。
- 51 『師範学校楽典教科書』では、『師範学校本科二部楽典教科書』の中で取り上げられていない「オルガンの構造及び各部の名称、附、其使用法並に注意」「装飾記号」「簡易なる楽語」「和声」「楽式初歩(楽曲の構造、歌曲の形式)」が掲載されている。
- 52 「師範学校規定中改正」(文部省令第一号)1931(昭和6)年1月10日、第二条、第四条(文部省『学制百年史(資料編)』ぎょうせい、1972年、183頁)。
- 53 小学校では、1894(明治27)年12月18日に訓令が出されている(同上、643頁)。
- 54 秋山、前掲書、595頁。
- 55 石川、前掲書、540-567頁。
- 56 文部省編『師範修身書巻一』教学図書、1938年。
- 57 文部省編『師範公民書(上巻)』教学図書、1939年。
- 58 文部省編『師範公民書(下巻)』教学図書、1940年。
- 59 清水康幸『教育審議会の研究 師範学校改革』野間教育研究所紀要第42集、2000年、144-147頁。
- 60 同声会編集部『同声会報』第182号、1932年、32-34頁。
- 61 清水、前掲書、145-147頁。
- 62 香川県師範学校音楽科教員(1941-1944年在職)であった金光武義氏が所持。黒沢隆朝・小川一朗『標準師範学校音楽教科書』1937年に挟んであった。
- 63 分析対象とする時期以外の教科書ではあるけれども、楽書刊行協会『中等教育音楽教科書』全4冊、高井徳造、1930(昭和5)年12月23日修正発行(昭和6年1月9日検定)(滋賀大学附属図書館教育学部分館所蔵)、の巻4には、「小学校唱歌教授法」に関する内容が掲載されている。
- 64 石川謙代表『近代日本教育制度資料』第五巻、大日本雄弁会講談社、1956年、577頁。
- 65 同上、583頁。
- 66 石川謙代表『近代日本教育制度資料』第六巻、大日本雄弁会講談社、1956年、3-6頁。
- 67 「師範教科書専管の第二編修課を新設 文部省図書局改組」『教育週報』第887号、1942年5月16日、1頁。
- 68 同上。
- 69 同上。
- 70 松宮哲夫監修・著『塩野直道関係著作展目録』京都教育大学附属図書館編集・発行、2005年、2頁。
- 71 「師範新教科書は皇国の道の手引 編修印刷着々と進む」『教育週報』第922号、1943年1月16日、1頁。
- 72 同上。引用の続きは以下の通り。「尤もこのやうな教科書の根本性格にあてはまらぬ詔勅述義のやうな金科玉条として奉体しなければならぬものも出てゐるが、要するに道徳的行為を實踐する手引が教科書の使命であるといふ考へに立つて

- みる。理数科、生物などは従来とよほどちがつて、たとへば研究、観察といふやうなものが主体をなしてゐる。従来の説明があつて後に問題を所々にはさんだやうなものどちがつて、よほど異色あるものだと考へてゐる。かうした教科書の行き方に従つて、教師の考へ方もよほどちがつて来なければならぬと考へてゐる」。
- 73 同上。
- 74 「新師範学校を語る」『日本教育』第三卷第一号、1943年4月、33-34頁。
- 75 同上、34頁。
- 76 文部省『学制百年史（記述編）』ぎょうせい、1972年、599頁。
- 77 <http://webcat.nii.ac.jp/>
- 78 <http://opac.ndl.go.jp/Process>
- 79 「新師範学校を語る」『日本教育』第三卷第一号、1943年4月、34頁。
- 80 「宣教師がバイブルの解説者であるように、教師は教科書に聖書の如き神聖観を抱いて、その解説者という性格をもつていた」（唐沢富太郎『教科書の歴史』創文社、1956年、2頁）。「国定教科書は絶対の権威をもち、そこに書かれていることは、それが真理・真実でないことがらでも、日本人の国民常識として定着させられたのである」（中村紀久二『教科書の社会史』岩波書店、1992年、「まえがき」）。「1教科に全国共通の1教科書のみとなり、教科書は唯一絶対性をもち、教科書「を」教える注入主義が徹底される」（小池俊夫「解題・解説」海後宗臣監修『図説教科書の歴史』日本図書センター、1996年、4頁）。「教科書観は、戦前特に国定教科書時代の唯一絶対の教材とするものであり、（以下略）」（榊達雄「教科書制度」『新版 現代学校教育大事典』ぎょうせい、2002年、345頁）。「音楽教育においては、明治期から昭和前期にかけて、（中略）＜教科書の唱歌を教える＞という考え方が強かった（以下略）」（山本文茂「教科書」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社、2004年、300頁）。
- 81 奥付には次のように記されている。昭和18年7月7日文部省検査済、昭和18年6月23日印刷、昭和18年7月6日発行、昭和18年7月7日翻刻印刷、昭和18年7月15日翻刻発行。著作権発行者：文部省、翻刻発行者：師範学校教科書株式会社、発行所：師範学校教科書株式会社。
- 82 奥付には次のように記されている。昭和18年7月31日文部省検査済、昭和18年7月26日印刷、昭和18年7月30日発行、昭和18年7月31日翻刻印刷、昭和18年8月11日翻刻発行。著作権発行者：文部省、翻刻発行者：師範学校教科書株式会社、発行所：師範学校教科書株式会社。
- 83 木村信之『音楽教育の証言者たち上 戦前を中心に』音楽之友社、1986年、230頁。橋本清司へのインタビュー記録。
- 84 国民学校の芸能科音楽教科書の編纂委員は次の7名である（同上、219頁）。小松耕輔、松島彝、井上武士、橋本国彦、下総皖一、小林愛雄、林柳波。なお、これに関しては、山本文茂「芸能科音楽教材の特質——教科書・教師用指導書の分析を通して」浜野政雄監修『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社、1999年、279頁、が詳しい。
- 85 同声会編集部『同声会報』第264号、1943年。
- 86 橋本清司は、「この本はいつだったか、上野の東京音楽学校で、全国の師範学校の先生方にお集まり願って、発表会が開かれましたよ。委員が分担して説明に当たりました」と語っている（木村、前掲書、232頁）。
- 87 同声会編集部『同声会報』第265号、1943年、7頁。
- 88 初等教育に関しては、1941（昭和16）年国民学校「芸能科音楽」において日本音楽が導入された（小島美子「明治100年の音楽教育と伝統音楽の行方」『音楽教育研究』4、音楽之友社、1968年、87-88頁）。
- 89 文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943年、158頁。
- 90 乗杉恂『乗杉嘉壽遺文集』1995年、125-130頁。
- 91 松久義平「芸能科に就いて」文部省『国民学校教則案説明要領及解説』日本放送出版協会、1940年、80頁。
- 92 1932（昭和7）年8月、政府は、「我が国体、国民精神の原理を闡明し、国民文化を発揚し、外来思想を批判し、マルキシズムに対抗するに足る理論体系の建設を目的とする、有力なる研究機関」として、「国民精神文化研究所」を設置し、研究とあわせて、学校教員や学生、生徒を入所させて、思想上の指導を行った。さらに、こうした中央の動きを受けて、道府県にも「国民精神文化講習所」が設置され、国民精神文化研究所で研究員として講習を受けた学校教員が中心となって、それぞれの地方の教職員に対する思想問題の「研究的講習」を実施した。また、同様の趣旨の講習会は、「国民精神文化講習会」や「思想問題講習会」といった名称で各地に開かれていったが、文部省は、1936（昭和11）年5月に、前者を「国民精神文化長期講習会」、後者を「国民精神文化短期講習会」と改称し、同年度中の実施方を通達した。（中略）なお、1943（昭和18）年には、「国民精神文化研究所」と「国民錬成所」（1942年設置）とが統合されて「教学錬成所」が設置され、「国体ノ本義ニ基キ教学ニ関スル研究ヲ掌リ教職員其ノ他先達タルベキ国民ヲシテ其ノ錬成ヲ為サシムル所」となった。（佐藤幹男『近代日本教員現職研修史研究』風間書房、1999年、355-356頁）。
- 93 田辺尚雄「田辺尚雄思い出ばなし その23 国民精神文化研究所」『季刊邦楽』通巻23号夏、邦楽社、1980年、109-113頁。前田一男「国民精神文化研究所の研究——戦時下教学刷新における「精研」の役割・機能について」『日本の教育史学』教育史学会紀要第25集、講談社、1982年、72-75頁。
- 94 Hermann Gottschewski「音楽の特性とアイデンティティについての定義と考察」劉麟玉代表編『近代音楽・歌謡の成立過程における国民性の問題』平成13・14年度科学研究費補助金研究成果報告書、2003年、14頁。

第2章 師範学校における歌唱指導

師範学校における音楽教育について別府愛は「生徒が学ぶ音楽は歌が中心である」と指摘する¹。1940（昭和15）年まで小学校では「唱歌」という教科名の下、歌唱中心の活動を行っていたことと関連させても、別府の指摘は当然である。

本章では「師範学校教授要目」（「師範学校教科教授及修練指導要目」）、師範学校音楽教科書の分析・検討ならびに聞き取り調査を通して、師範学校における歌唱指導の内容と実態を明らかにすることを目的とする。具体的には以下の作業を行う。

- 1) 「師範学校教授要目」「師範学校教科教授及修練指導要目」における歌唱指導に関する規定の検討。
- 2) 文部省検定済師範学校音楽教科書（『師範音楽教本二部用』『標準師範学校音楽教科書』）における歌曲の傾向。
- 3) 国定師範学校音楽教科書（『師範音楽 本科用巻一』）における歌曲の傾向。

第1章で明らかにした通り、歌曲を扱った文部省検定済師範学校音楽教科書（1931-42年）は、29種類（「総合」22種類を含む）、ピース楽譜を含めると、155種類と膨大な数に上る。その中で、師範学校専用の文部省検定済師範学校音楽教科書でなおかつ、国定師範学校音楽教科書である『師範音楽 本科用巻一』と構成が類似する教科書は、以下に挙げる2冊しかない。また、福井、黒沢、小川らは、師範学校音楽科教員の経験を有し、複数の音楽教科書を編纂したといった点でもこの2冊を検討する必要性があると考え、分析対象とした。

- ・福井直秋編『師範音楽教本 二部用』帝国書院、1932年。
- ・黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』共益商社書店、1938年。

ところで、唐沢富太郎²、堀内敬三・井上武士³の研究によると、初等教育の音楽教科書において超国家主義、ミリタリズムの傾向が見られ始めたのは、1932（昭和7）年の『新訂尋常小学唱歌』⁴（全6冊）とされている⁵。その傾向がさらに顕著になるのは、1941（昭和16）年から1943（昭和18）年にかけて発行された文部省著作権発行の国民学校初等科音楽教科書⁶（以下、国民学校音楽教科書、と略記）である。

師範学校音楽教科書についても初等教育と関連付けて考えれば、超国家主義、ミリタリズムの傾向が表れるのは同時期ではないかと考える。したがって、以下の視点を設定し、各教科書の検討を行ってきたい。

視点：福井編『師範音楽教本 二部用』（1932）から黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』（1938）、そして

文部省『師範音楽 本科用巻一』（1943）へと変わるにつれ、超国家主義、ミリタリズムに関する歌曲が増加するのではないかと。

第1節 「師範学校教授要目」等における歌唱指導

1886（明治19）年の「尋常師範学校学科程度ノ事」（明治19年5月26日，文部省令第九号）の中で「単音唱歌複音唱歌楽器用法及音楽上ノ名称記号旋律和声拍子等ノ要略」（下線は筆者による）とある⁷。1892（明治25）年の「尋常師範学校ノ学科及其程度改正ノ事」（明治25年7月11日，文部省令第八号）では，以下のように規定された⁸。

男生徒（修業年限4年）：第1学年，第2学年…単音唱歌， 第3学年，第4学年…単音唱歌，複音唱歌

女生徒（修業年限3年）：第1学年…単音唱歌， 第2学年，第3学年…単音唱歌，複音唱歌

表Ⅱ-2-1は，1910（明治43）年，1925（大正14）年，1931（昭和6）年の「師範学校教授要目」の中から「歌曲」の項目を抜粋したものである。

1910（明治43）年の第一部の場合，予備科，第1学年で「平易ナル単音唱歌」を扱った後，第2学年で「単音唱歌」，第3学年で「単音唱歌，二部輪唱歌及二部ノ重音唱歌」，第4学年で「単音唱歌，二部三部ノ輪唱歌及二部三部ノ重音唱歌」と段階的に進んでいる。しかし，1925（大正14）では，第一部第1学年から「平易ナル単音唱歌，尚簡易ナル二部ノ輪唱歌並複音唱歌ヲ授クルコトヲ得」とあり，入学初年度から単音唱歌以外の形態が扱えるようになっていく。1931（昭和6）年でも同様である。

歌詞，曲調に関しては，1910（明治43）年，1925（大正14）年では，「歌曲ハ歌詞，曲調共ニ高尚優雅ナルモノヲ選フヘシ又小学校ニテ用ヒラルル唱歌ハ必ス練習セシムヘシ」と規定されている。1931（昭和6）年になると，「歌曲ハ歌詞・曲調共ニ国民精神ヲ涵養シ得ル高尚優雅ナルモノヲ選ブベシ又小学校ニテ用ヒラルル唱歌ハ必ズ練習セシムベシ」（下線は筆者による）と，変わる。

表Ⅱ-2-2は，1943（昭和18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」である。予科，本科とも「単音唱歌」と「重音唱歌」が同時に扱われている。本科第1学年では，「輪唱歌」も置かれている。取り扱う調性が明記されていることは，これまでの「師範学校教授要目」（表Ⅱ-2-1）では行われていなかったことである。ここでは「日本固有ノ音階」を含めることになっている。また，「教授上ノ注意」でも「教材ハ我が国ノ作品ヲ主トシ」とあるように，「我が国」が強調されている。

歌詞，曲調に関しては，「歌詞及楽曲ハ国民的情操ヲ涵養スルモノタルベク特ニ雄渾ニシテ青年ノ志氣ヲ鼓舞シ大国民タルノ氣迫ヲ養フニ足ルモノヲ採択スベシ」と国家主義的な内容が重視されている。

以上，上記規定の検討の結果，次の点が指摘できる。

- 1) 形態に関しては，単音唱歌以外に重音唱歌，輪唱歌が扱われている。1925（大正14）年の「師範学校教授要目」までは，単音唱歌から重音唱歌へと段階的に進む傾向がみられる。
- 2) 歌詞，曲調に関しては，1931（昭和6）年，1943（昭和18）年と改訂されるにつれ，「国民精神」「国民的情操」の涵養が重要視されている。

表Ⅱ-2-1 「師範学校教授要目」(1910-1942 年)における歌曲

年	内 容		
	第一部	第二部	
1910 M43	予備科 平易ナル単音唱歌 第1学年 平易ナル単音唱歌 第2学年 単音唱歌 第3学年 単音唱歌 二部輪唱歌及二部ノ重音唱歌 第4学年 単音唱歌 二部三部ノ輪唱歌及二部三部ノ重音唱歌 <注意> ・ 唱歌及楽器ノ教授ニハ総テ本譜ヲ用フヘシ ・ 歌曲ハ歌詞、曲調共ニ高尚優雅ナルモノヲ選フヘシ又小学校ニテ用ヒラルル唱歌ハ必ス練習セシムヘシ	男生徒ノ部 第1学年 単音唱歌	女生徒ノ部 第1学年 単音唱歌 輪唱歌 重音唱歌 第2学年 唱歌
1925 T 14	第1学年 平易ナル単音唱歌 尚簡易ナル二部ノ輪唱歌並 複音唱歌ヲ授クルコトヲ得 第2学年 単音唱歌及簡易ナル重音唱歌 第3学年 単音唱歌 輪唱歌 諸重音唱歌 第4学年 前学年ニ準シ程度稍稍進ミタルモノ 第5学年 前学年ニ準シ程度稍稍進ミタルモノ <注意> ・ 唱歌及楽器ノ教授ニハ総テ本譜ヲ用フヘシ ・ 歌曲ハ歌詞、曲調共ニ高尚優雅ナルモノヲ選フヘシ又小学校ニテ用ヒラルル唱歌ハ必ス練習セシムヘシ ・ 読譜力及鑑賞力ノ養成ニカムヘシ	男生徒ノ部 第1学年 本科第一部男生徒ノ部 第二学年第三学年及第 四学年ニ準ス	女生徒ノ部 第1学年 本科第一部男生徒ノ部 第二学年及第三学年ニ 準ス 第2学年 本科第一部男生徒ノ 部第四学年及第五学 年ニ準ス
1931 S 6	第1学年 単音唱歌 輪唱歌 重音唱歌 第2学年 前学年ニ於ケル教授事項ニ就キ程度稍稍進ミタル モノヲ課スベシ 第3学年 単音唱歌 輪唱歌 諸重音唱歌 第4学年 前学年ニ於ケル教授事項ニ就キ程度稍稍進ミタル モノヲ課スベシ 第5学年 前学年ニ於ケル教授事項ニ就キ程度稍稍進ミタル モノヲ課スベシ <注意> ・ 唱歌及楽器ノ教授ニハ総テ本譜ヲ用フヘシ ・ 歌曲ハ歌詞・曲調共ニ国民精神ヲ涵養シ得ル高尚優雅ナルモノヲ選ブベシ又小学校ニテ用ヒラルル唱 歌ハ必ズ練習セシムベシ ・ 読譜力及鑑賞力ノ養成ニカムヘシ	第1学年及第2学年 本科第一部ニ於ケル教授事項ニ就キ適宜斟酌シ テ之ヲ課スベシ	

出典 『明治以降教育制度発達史』第五巻, 1939 年, 671-675 頁, 第七巻, 1939 年, 629-634 頁, 753-756 頁から作成。

表Ⅱ-2-2 「師範学校教科教授及修練指導要目」(1943年)における歌曲

	学 年	内 容	教授上ノ注意
予 科	第 1 学 年	(イ) 単音唱歌 (ロ) 重音唱歌 (和音的ノモノ, 対位法的ノモノ) 祝祭日及儀式ニ関スルモノ其ノ他国民精神ノ涵養, 国民的情操ノ陶冶ニ資スルモノトス 調子ハハ長調・ト長調・ヘ長調ノ調号ニテ表シ得ル長音階・短音階・日本固有ノ音階ノモノトス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 歌曲又器楽曲ノ教材ハ我ガ国ノ作品ヲ主トシ適宜外国ノ名曲ヲ加フルコトヲ得 ・ 歌詞及楽曲ハ国民的情操ヲ涵養スルモノタルベク特ニ雄渾ニシテ青年ノ志氣ヲ鼓舞シ大国民タルノ氣迫ヲ養フニ足ルモノヲ採択スベシ ・ 歌曲ノ練習ニ際シテハ楽譜視唱ヲ行フベシ ・ 楽譜ハ五線譜ヲ使用スベシ ・ 歌唱ノ練習, 唱歌基本練習, 合唱基礎練習及聴覚訓練ハ相互ニ関連シテ指導スベシ ・ 歌唱ニ際シテハ発音ヲ正シ国語ノ醇化ニ資セシムベシ
	第 2 学 年	(イ) 単音唱歌 (ロ) 重音唱歌 前学年ニ於ケル教授事項ニ付程度ヲ進メテ課シ調子ハ変ロ長調ノ調号ニテ表シ得ルモノヲ加フ	
本 科	第 1 学 年	(イ) 単音唱歌 (ロ) 輪唱歌 (ハ) 重音唱歌 (和音的ノモノ) 内容ハ予科第一学年ニ示セルモノニ準ズ 調子ハハ長調・ト長調・ヘ長調・ニ長調・変ロ長調ノ調号ニテ表シ得ル長音階・短音階・日本固有ノ音階ノモノトス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 歌曲又器楽曲ノ教材ハ我ガ国ノ作品ヲ主トシ適宜外国ノ名曲ヲ加フルコトヲ得 ・ 歌詞及楽曲ハ国民的情操ヲ涵養スルモノタルベク特ニ雄渾ニシテ青年ノ志氣ヲ鼓舞シ大国民タルノ氣迫ヲ養フニ足ルモノヲ採択スベシ ・ 歌曲ノ練習ニ際シテハ楽譜視唱ヲ行フベシ ・ 楽譜ハ五線譜ヲ使用スベシ ・ 歌唱ノ練習, 唱歌基本練習, 合唱基礎練習及聴覚訓練ハ相互ニ関連シテ指導スベシ ・ 歌唱ニ際シテハ発音ヲ正シ国語ノ醇化ニ資セシムベシ
	第 2 学 年	(イ) 単音唱歌 (ロ) 重音唱歌 (和音的ノモノ, 対位法的ノモノ) 前学年ニ於ケル教授事項ニ付程度ヲ進メテ課シ調子ハハ長調・変ホ長調・ホ長調・変イ長調ノ調号ニテ表シ得ルモノヲ加フ	
	第 3 学 年	(イ) 単音唱歌 (ロ) 重音唱歌 (和音的ノモノ, 対位法的ノモノ, 種々ナル形式ニ依ル合唱曲) 前学年ニ於ケル教授事項ニ付程度ヲ進メテ課ス	

出典 文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943年, 161-167頁, 292-297頁から作成。

第2節 福井編『師範音楽教本 二部用』(1932)における歌曲

1932(昭和7)年に帝国書院から発行された文部省検定済師範学校音楽教科書である福井直秋編『師範音楽教本 二部用』は、現在、所在が不明である。しかし、1年前の1931(昭和6)年発行の同一名の教科書が、武蔵野音楽大学図書館に所蔵されている。『福井直秋著作 解題』でも1931(昭和6)年発行の教科書が紹介されていることから⁹、1932(昭和7)年の検定済の教科書とほぼ同一と考えられる。したがって、本研究では1931(昭和6)年の教科書を用い分析する¹⁰。

「はしがき」には次のように記されている。

- 一、本書は現行の師範学校教授要目に抛り、師範学校の音楽教科用たらしめんがために編纂したものである、
- 二、曲譜はすべて外国のもののみを採り、歌詞と曲譜との調和については、細心の注意をなし、遺憾なきを期したのである。
- 三、歌曲並に読譜及音程練習は、教授の便宜上幾分これを加除し、或は他のものと変更することは、教授上の任意である。

では、どのような歌曲が掲載されているのだろうか。表Ⅱ-2-3は「一」、表Ⅱ-2-4は「二」に掲載されている歌曲を一覧にしたものである。

表Ⅱ-2-3 福井編『師範音楽教本 二部用』一における歌曲

番	曲名	音楽的特徴							歌詞内容の分類	
		作曲者名	作詞者名	形態	調	拍子	発想標語	音域	歌詞	
1	春	ドイツ民謡	堀江時三	斉	C	4/4	Moderato	c1-c2	自然	
2	星を仰ぐ	Mason	中尾茂	斉	C	4/4	Moderato	c1-c2	自然	
3	青年の歓喜	J.W.Lyra	堀江時三	斉	C	3/4	Allegro	c1-d2	自然	
4	小鳥の歌	ドイツ民謡	白澤清人	斉	G	3/4	Moderato	f1-d2	自然	
5	花すみれ	デンマーク民謡	中尾茂	斉	G	2/4	Andantino	d1-e2	自然	
6	虹	C.C.Converse	久松潜一	斉	F	4/4	Moderato	c1-d2	自然	
7	友情	P.Ritter	生井武久	斉	F	3/4	Moderato	e1-d2	教訓	
8	旅路	ドイツ民謡	池田亀鑑	斉	G	2/4	Allegretto	d1-d2	他	
9	楽しき楽の音	T.H.Bayly	笹野堅	斉	D	2/4	Allegretto	c1-d2	他	
10	拝み祈る	W.B.Bradbury	城戸甚治郎	斉	D	6/8	Moderato	d1-d2	国家	
11	国の御旗	O.Holden	久松潜一	斉	F	4/4	Moderato	c1-d2	国家	
12	自然のながめ	S.Webbe	白澤清人	斉	C	2/2	Moderato	c1-e2	自然	
13	暁	Fr.Abt	中尾茂	斉	G	6/8	Allegretto	h-e2	自然	
14	よき友	Fr.Silcher	白澤清人	斉	B	3/4	Moderato	f1-e2	教訓	
15	真清水	ドイツ民謡	守随憲治	斉	B	2/4	Allegretto	c1-d2	自然	
16	秋の夕	C.Foster	池田亀鑑	斉	D	4/4	Moderato	d1-d2	自然	
17	迷へる小鳥	スペイン民謡	生井武久	斉	F	4/4	Espressione	a-d2	教訓, 自然	

18	夕陽	H.G.Nägeli	池田亀鑑	斉	Es	3/4	Andante	es1-c2	自然
19	楽しき農夫	Schumann	笹野堅	斉	Es	4/4	Moderato	b-es2	勤労
20	御代はめでたし	F.de Giardini	白沢清人	斉	G	3/4	Moderato maestoso	d1-e2	国家
21	山家のすまみ	G.Verdi	池田亀鑑	斉	G	3/8	Andante	g1-e2	自然
22	狩の歌	B.A.Weber	守随憲治	斉	Es	6/8	Allegretto	es1-es2	勤労
23	強き心	C.Groos	城戸甚治郎	斉	B	4/4	Moderato	d1-es2	教訓, 国家
24	隅田川	Fr.Silcher	堀江時三	斉	C	6/8	Andante	c1-c2	自然
25	故郷の我が家	Hays	城戸甚治郎	斉	C	4/4	Moderato	c1-c2	他

表Ⅱ-2-4 福井編『師範音楽教本 二部用』二における歌曲

番	曲名	音楽的特徴							歌詞内容の分類
		作曲者名	作詞者	形態	調	拍子	発想標語	音域	
1	櫻	S.C.Foster	白澤清人	斉	C	4/4	Poco adagio	c1-d2	自然
2	父母よ	ドイツ民謡	笹野賢	斉	B	3/4	Andante con espressione	c1-es2	教訓
3	船唄	ロシア民謡	生井武久	斉	B	4/4	Moderato	es1-es2	勤労
4	我が家のまとい	W.B.Bradbury	中尾茂	二部	D	4/4	Moderato	c1-d2	他
5	朝の海	G.Verdi	堀江時三	斉	G	3/8	Allegretto	d1-e2	自然
6	我が国祝へ	シシリー民謡	白澤清人	三部	Es	4/4	Sostenuto	as-es2	国家
7	かたみのうつしゑ	K.F.Zelter	生井武久	斉	c-m	6/4	Adagio	c1-c2	他
8	渡守	L.von Beethoven	守随憲治	斉	G	2/4	Allegretto	d1-d2	勤労
9	夏の夜	W.G.Becker	守随憲治	斉	A	4/4	Moderato	h-e2	自然
10	星の世界	ドイツ民謡	久松潜一	斉	A	4/4	Allegretto	a-e2	自然
11	夕涼み	L.Grunholzer	守随憲治	斉	G	4/8	Adagio	d1-d2	自然
12	異郷にて	Righini	城戸甚治郎	斉	C	4/4	Andantino	c1-e2	国家
13	凱歌	G.F.Händel	中尾茂	斉	Es	4/4	Allegro	d1-es2	国家
14	月下の船遊	イタリア民謡	白澤清人	斉	C	3/8	Andantino	d1-e2	他, 自然
15	友よ行け	J.Kinkel	堀江時三	斉	B	4/4	Moderato	d1-es2	教訓
16	子守歌	J.Brahms	笹野賢	斉	D	3/4	Andante con moto	d1-d2	他
17	夜の静思	F.Gruber	池田亀鑑	斉	B	6/8	Adagio	b-es2	他
18	なつかしの故郷	スワビヤ民謡	中尾茂	三部	A	3/4	Moderato	a-e2	他
19	のどけき光	W.A.Mozart	守随憲治	斉	Es	6/8	Andante	e1-e2	自然
20	思ひ出	H.R.Palmer	守随憲治	斉	As	4/4	Allegretto	es1-es2	自然
21	狩の歌	C.M.von Weber	堀江時三	二部	F	2/4	Vivace	a-e2	勤労
22	別れ悲しも	F.Abt	守随憲治	斉	As	3/4	Andantino	c1-e2	他
23	冬の太陽	イタリア民謡	生井武久	斉	Es	2/4	Moderato	b-es2	自然
24	しのべども	ケルント民謡	中尾茂	斉	f-m	3/4	Andante	c1-es2	他
25	卒業の歌	Fr.Silcher	堀江時三	斉	D	3/4	Andante	c1-e2	他

(1) 音楽的特徴

表Ⅱ-2-3, 表Ⅱ-2-4の分析を通して、『師範音楽教本 二部用』に掲載されている歌曲を構成している主な音楽的特徴をまとめると、次の通りである。

- 1) 作曲者：50曲すべての歌曲が、西洋の民謡ないしは西洋の作曲者によって作られた曲である。日本人の作曲

者は一人もいない。

- 2) 形態：一編の全 25 曲の形態は斉唱を採っている。二編では、全 25 曲の内、二部合唱が 2 曲、三部合唱が 2 曲含まれる。
- 3) 調性：全 50 曲のうち、48 曲が長調を使用している。短調は《かたみのうつしゑ》(二編 7)、《しのべども》(二編 24) の 2 曲のみである。日本旋法は見られない。一編に関しては、最初の 3 曲はハ長調から始まり、4、5 番でト長調、6、7 番でヘ長調、9、10 番でニ長調が新出していくという順序である¹¹。これは、巻末の「読譜及音程練習」で採られている順番と同じである¹²。短調が少ない背景には、福井直秋の「青少年に短調の楽曲を多く歌はしたくない」¹³という考えに依拠していると考えられる。
- 4) 拍子：4/4 が 19 曲、3/4 が 12 曲、2/4 が 7 曲、6/8 が 6 曲、3/8 が 3 曲、2/2、4/8、6/4 が各 1 曲である。4 拍子や 2 拍子の他、3 拍子が比較的多く用いられている。
- 5) 速度記号：イタリア語で表示。Moderato が最多 (19 曲)。数字による速度の示し方は行われていない。
- 6) 音域：最低音が a、最高音が e2 で、1 オクターブ程度の無理のない音域で設定されている。最多は c1-d2 の範囲 (7 曲)。

その他の特徴として、『師範音楽教本 二部用』には伴奏譜が掲載されていないことである。別冊としても発行されていない。『師範音楽教本 二部用』を授業で使用する際には、師範学校音楽科教員は各自で伴奏を付けなければならない¹⁴。

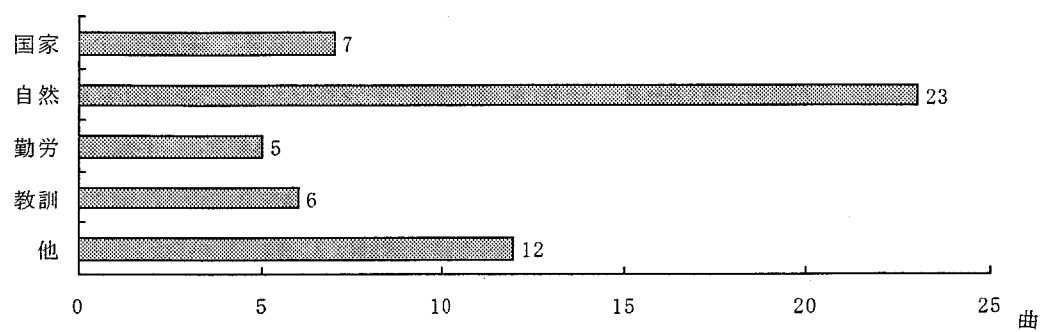
(2) 歌詞内容の分類

本研究では唐沢富太郎による方法に則ったり、次の五つの項目に分類した¹⁵。

- ・「国家」と表記…ナショナリズム、ミリタリズム的色彩の強いもの
- ・「自然」と表記…自然の風物、季節等をうたったもの
- ・「勤労」と表記…勤労生活をうたい、殖産を讃えるもの
- ・「教訓」と表記…教訓的色彩の強いもの
- ・「他」と表記…その他

もちろん、歌曲によっては複数の項目にまたがる場合もある¹⁶。本研究では 1 曲の歌詞内容が複数の項目に該当する場合には、重複してカウントする。そのため総数は曲数より多くなる。

結果は図Ⅱ-2-1 に示した通り、「自然」が 23 曲 (46%) と最多を占め、「国家」が 7 曲 (14%)、「教訓」が 6 曲 (12%)、「勤労」が 5 曲 (10%)、「他」が 12 曲 (24%) である。「国家」は全体の 14% しかなく、『師範音楽教本 二部用』はナショナリズム、ミリタリズム的色彩は弱いといえる。



図Ⅱ-2-1 福井編『師範音楽教本 二部用』歌詞内容の分類 (全50曲)

第3節 黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』（1938）における歌曲

1. 黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』（1938）の特徴

第1章でも紹介した1938（昭和13）年、共益商社書店から発行された、黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』¹⁷には第一編に28曲、第二編に22曲、全50曲の歌曲が掲載されている¹⁸。

2編とも巻頭と同じ緒言が掲載されている。以下は歌曲に関連する箇所を抜粋したものである（下線は筆者による）¹⁹。

緒言

本書は文部省の音楽教授要目に準拠して師範学校の本科第二部音楽科用教科書として編纂されたものである。

本書の編纂にあたっては次の諸点について能ふ限りの努力を払った。

一 本書一部を以つて、音楽の時間に課せられる教材の総ての分野を網羅することにつとめた。

（中略）

二 教材歌曲はその教材を広く世界の名曲に求め之を調、拍子、リズム等の形態及びその内容に留意し、系統的に配列した。

（以下略）

緒言にあるように、『標準師範学校音楽教科書』は、2編を通して歌唱の他、器楽、鑑賞、音楽理論、音楽基礎の分野を扱っている。音楽教授法に関する項目は設定されていない。しかし、歌唱や器楽の教材として「小学唱歌」が取り上げられていることから、小学校の「唱歌」との関連性が若干見られる。

「教材歌曲」は、「三 楽典事項及び音楽理論」「四 楽器奏法練習」の箇所でも例示の素材として用いられ、この教科書の中で中心的な位置を占めている。以下、音楽的特徴と歌詞の2つの視点から『標準師範学校音楽教科書』における歌曲の特徴を考察したい。音楽的特徴、歌詞内容の分類結果の一覧を表Ⅱ-2-5、表Ⅱ-2-6として揚げた。

表Ⅱ-2-5 黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』第一編における歌曲

番	曲名	音楽的特徴									歌詞内容の分類
		作曲者名	作詞者名	形態	調	拍子	発想標語	速度	音域	伴奏	
1	春露	J.Hatton	植村甫	斉唱	C	4/4		80	c1-c2	×	自然
2	靖国神社	小川一朗	上田壽四郎	斉唱	C	4/4	Andantino	100	c1-d2	×	国家
3	なみ風		小学唱歌集	斉唱	C	3/4	Moderato	56	h-c2	×	他、自然
4	才女	スコットランド'民謡	小学唱歌集	二部	C	4/4	Con molto espressione	84	h-e2	ped.	他
5	若草の古戦場	スコットランド'民謡	水田詩仙	斉唱	C	4/4	Andantino	84	c1-c2	○	他、国家
6	故郷さらば	ドイツ民謡	桑田つねし	斉唱	C	4/4	Allegretto	96	c1-d2	○	他

7	地上の歓喜	Beethoven	水田詩仙	斉唱	G	4/4	Alla marcia	104	d1-d2	×	自然
8	郭公ワルツ	J.E.Jonasson	水田詩仙	二部	G	3/4	Andantino	152	h-g2	○	自然
9	ボートの唄	H.Aller	桑田つねし	二部	G	3/4	Tempo di Valse	152	d1-e2	○	勤労, 自然
10	樹陰	A.Rubinstein	水田詩仙	独唱	F	2/4	Moderato	60	h-d2	○	他, 自然
11	夏を楽しむ	Rossini	藤村俊	二部	F	3/4		80	a-f2	○	自然, 他
12	朝霧	Spenger	水田詩仙	輪唱	F	3/4	Allegretto	116	c1-f2	×	自然
13	水に映る影	M.Glinka	水田詩仙	二部	D	2/2	Moderato	96	c1-d2	○	自然
14	須磨の秋	W.A.Mozart	黒沢隆朝	斉唱	D	6/8	Allegretto	132	d1-d2	△	自然
15	心静かに	W.A.Mozart	水田詩仙	独唱	G	4/4	Larghetto	72	d1-e2	○	教訓, 自然
16	山のうた	L.Denza	桑田つねし	二部	D	6/8	Allegro giusto	112	a-e2	○	自然
17	サンタ・ルチア	ナポリ民謡	水田詩仙	二部	C	3/8	Andantino	100	h-e2	○	自然
18	日本帝国	C.Blom	桑田つねし	斉唱	B	4/4	Allegro con spirito	104	f1-f2	○	国家
19	暮の鐘	ボヘミア民謡	水田詩仙	二部	a-m	3/4	Lento	80	a-e2	○	他, 自然
20	護れ空を	黒沢隆朝	上田壽四郎	斉唱	F	3/4	Allegretto	112	c1-d2	○	国家
21	若人の歌	J.A.Butterfield	植村甫	斉唱	Es	4/4	Allegretto	108	h-d2	○	国家
22	山村の春	不詳	桑田つねし	二部	Es	4/4	Andantino	104	h-e2	×	自然
23	鶯の歌	J.Hullah	前田純	三部	Es	4/4	Moderato	116	g-f2	×	自然
24	春の歌	Mendelssohn	水田詩仙	三部	E	6/8	Andante	56	g-e2	○	自然
25	鳩と梟	M.Hauptmann	藤村俊	三部	E	2/4		112	e-e2	○	自然
26	船路	J.Mazzinghi	水田詩仙	独付三部	G	4/4	Larghetto grazioso	116	g-e2	○	他, 自然
27	峠を越えて	小川一朗	小垣龍一	三部	F	4/4	Andantino	104	f-g2	○	他, 自然
28	吾等が精鋭	E.Jakobowski	水田詩仙	三部	G	4/4	Allegro marziale	108	g-g2	○	国家

表Ⅱ-2-6 黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』第二編における歌曲

番	曲名	音楽的特徴								歌詞内容の分類	
		作曲者名	作詞者名	形態	調	拍子	発想標語	速度	音域		伴奏
1	君が代	林廣守	古歌	斉唱	律	4/4		69	c1・d2	○	国家
2	天壤無窮	Beethoven	水田詩仙	斉唱	C	4/4	Maestoso	80	c1・f2	○	国家
3	楽しき春	Beethoven	藤村俊	斉唱	C	6/8	Grazioso	132	c1・e2	○	自然
4	野薔薇	Schubert	藤村俊	独唱	F	2/4	Lieblich	69	f1・f2	○	自然
5	夜の曲	Schubert	黒沢隆朝	独唱	F	3/4	Moderato	69	d1・g2	○	自然
6	母のおもひ		小学唱歌集	斉唱	D	4/4	Moderato	92	c1・e2	○	教訓
7	菩提樹	Schubert	藤村俊	斉唱	E	3/4	Moderato	60	e1・e2	○	他, 自然
8	海辺にて	Schubert	藤村俊	独唱	B	2/2	Molto lento	60	c1・e2	○	他, 自然
9	出陣の歌	Schumann	水田詩仙	斉唱	G	4/4	Tempo di marcia	104	d1・c2	○	国家
10	かがやくさつき	Brahms	桑田つねし	独唱	As	2/4	Allegretto grazioso	100	a1・f2	△	自然
11	山の古寺	Brahms	近藤謙次郎	三部	es・m	4/4	Andante con moto	54	b・f2	×	教訓
12	そぞろあるき	Leva	水田詩仙	三部	A	4/4	Allegro brillante	104	g・e2	○	自然
13	昭和の日本	Williams	水田詩仙	三部	G	4/4	Andante	108	g・g2	○	国家
14	疑乃の調	Offenbach	桑田つねし	三部	D	6/8	Moderato	56	a・f2	ped.	自然

15	我が太陽	ナポリ民謡	水田詩仙	独唱	F	2/4	Andante	69	c1-f2	○	自然
16	小琴のしらべ	Schubert	水田詩仙	独唱	C	4/4	Moderato	88	h-e2	○	他
17	狩人の合唱	Weber	桑田つねし	三部	G	2/4	Allegretto con brio	112	g-f2	○	勤労
18	青春の歌	Mendelssohn	水田詩仙	斉唱	F	4/4	Andante con moto	92	c1-f2	○	教訓
19	雲雀の歌	Mendelssohn	黒沢隆朝	四部	G	4/4	Allegro vivace	112	g-g2	×	自然
20	スキーの歌	黒沢隆朝	水田詩仙	三部	G	6/8		96	a-e2	ped.	自然 他
21	皇軍凱旋	Offenbach	藤村俊	三部	D	4/4	Allegretto con vivo	96	g-f2	×	国家
22	富嶽の頌	Stuntz	桑田つねし	三部、四部	C	4/4	Maestoso	108	g-g2	○	国家、自然

(1) 音楽的特徴

表Ⅱ-2-5, 表Ⅱ-2-6を通して、『標準師範学校音楽教科書』に掲載されている歌曲の主な音楽的特徴をまとめると、次の通りである。

1) 作曲者：日本人作曲の5曲、『小学唱歌集』の2曲の計7曲（14%）以外の43曲（86%）が、西洋の民謡ないしは西洋の作曲者によって作られた曲である（図Ⅱ-2-2）。西洋の中でもとりわけ、ドイツ、オーストリアの民謡ないしは作曲者によって占められている（ドイツ13曲、オーストリア7曲）。また、太平洋戦争開戦前の1938（昭和13）年発行ということなので、イギリス、ロシア、フランス等の曲も掲載されている²⁰。

なお、日本人作曲5曲の内訳は、林廣守（《君が代》）と黒沢隆朝（《護れ空を》《スキーの歌》）、小川一朗（《靖国神社》《峠を越えて》）である。黒沢、小川の教科書編纂者自らが作曲し、外部の作曲者には依頼していない。

2) 形態：第一編の全28曲、第二編の全22曲の形態を示したのが、図Ⅱ-2-3である。第一編と第二編の50曲を合計した形態の内訳は、斉唱17曲（37%）、三部合唱12曲（26%）、二部合唱9曲（20%）、独唱8曲（9%）、四部合唱1曲（2%）、輪唱1曲（2%）、その他2曲（4%）となる。合唱形態を採っているのが、23曲（46%）と全体の半数近くを占める。

歌曲の配列に着眼すると、第一編、第二編とも、斉唱曲から始まっている。第一編に関しては、途中で違う形態のものが少し含まれているとはいうものの、斉唱から輪唱を経て二部合唱、三部合唱へと配列されている。第二編に関しては、輪唱、二部合唱が姿を消し、斉唱、三部合唱、独唱を中心に構成され、第一編では見られなかった四部合唱が含まれている。第一編では2曲であった独唱が、第二編では8曲と増加している。その他、複数の形態を組み合わせた曲として、《船路》（第一編26）の独唱付三部合唱が挙げられる。

3) 調性：全50曲のうち、47曲が長調を使用している。短調は《暮の鐘》（第一編20）、《山の古寺》（第二編11）の2曲のみである。その他、日本旋法の《君が代》（第二編1）が掲載されている。

歌曲の配列に着眼すると、第一編の最初の6曲はハ長調から始まり、ト長調が3曲、ヘ長調が3曲、ニ長調が2曲と新出していくという順序である。第二編では配列の系統性はみられない²¹。

4) 拍子：4/4が26曲、3/4が9曲、2/4が6曲、6/8が6曲、2/2が2曲、3/8が1曲である。

- 5) 発想標語：イタリア語の速度記号の他に数字によって速度を示している。また、曲想に関する標語が加えられているものもある。その中には、marcia, marziale といった記号も含まれている。
- 6) 音域：最低音が g, 最高音が g2 と 2 オクターブに及び、広い。最多は c1-d2 の範囲（5 曲）。

その他、40 曲に伴奏譜が掲載されている。40 曲の中には、歌唱の旋律に左手の和音伴奏を加えただけの簡易伴奏が 1 曲（《須磨の秋》）、「人声伴奏」と記載されている和音を「ラ」で合唱するものが 1 曲（《かがやくさつき》）含まれている。ペダル記号が記されているものが 3 曲ある。

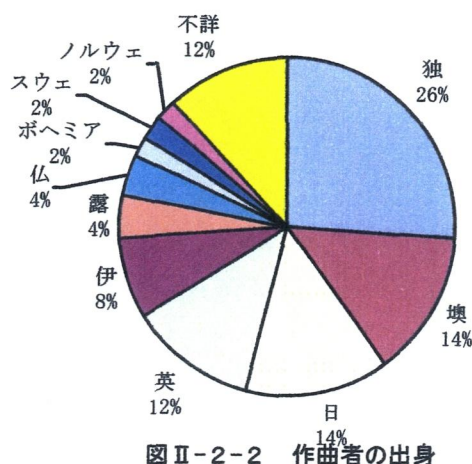


図 II-2-2 作曲者の出身

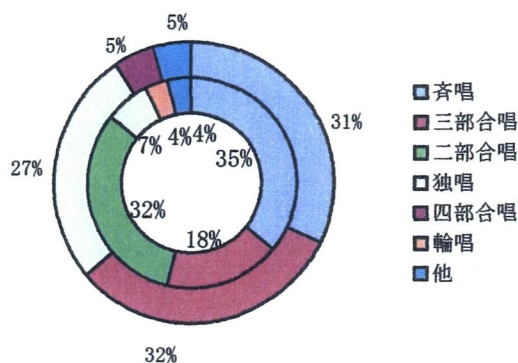


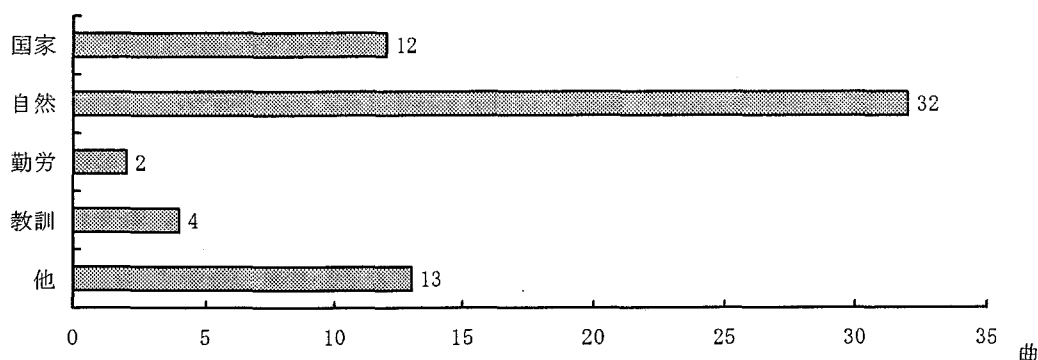
図 II-2-3 歌曲の形態

内円：第一編，外円：第二編

(2) 歌詞内容の分類

全 50 曲は、日本人の手によって日本語の歌詞が付けられている。ここで特筆すべきことは、編纂者の一人、黒沢隆朝が作詞に関わっていることである。黒沢隆朝は、山田耕筈に師事し、桑田つねし、藤原俊、藤村俊、西田徹、水田誌仙、水田詩仙などの別号を持つ²²。表 II-2-5、表 II-2-6 でも黒沢の別号が目につく。これらを合計すると、黒沢は 39 曲（78%）も作詞していることになる。

歌詞内容の分類については、第 2 節同様、唐沢の分類に基づき、「国家」「自然」「勤労」「教訓」「他」の五つで行った。第一編と第二編に掲載されている全 50 曲における歌曲の歌詞内容の大意を分類した結果が、図 II-2-4 である。「自然」が最多で 32 曲（64%）、「国家」12 曲（24%）、「教訓」4 曲（8%）、「勤労」2 曲（4%）、「他」13 曲（26%）である。



図Ⅱ-2-4 黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』歌詞内容の分類 (全50曲)

2. ナショナリズム、ミリタリズム的色彩の強い歌曲の分析

「国家」に分類した曲は、表Ⅱ-2-7に一覧にした以下の歌曲である。歌詞の中から愛国心・皇室崇拝・軍国主義に関する語をキーワードとして抜き出した。《靖国神社》以外の10曲については、黒沢、小川らが編纂した『改訂標準女子音楽教授資料集成』²³の中に各歌曲の楽曲や歌詞に対する解説が掲載されているので、「歌曲の趣旨」として一部引用した。

なお、福島師範学校音楽科教員であった供田武嘉津の体験によると、第二編の「国家」に分類した6曲は、実際に戦後の1945（昭和20）年10月頃、墨塗りされている²⁴。

表Ⅱ-2-7 『標準師範学校音楽教科書』における歌詞分類「国家」の歌曲

編	番	曲名	歌詞のキーワード	歌曲の趣旨
			愛国心・皇室崇拝・軍国主義に関する語	出典 『改訂標準女子音楽教授資料集成』(1939・42)
第一編	2	靖国神社	大鳥居, 御国の鎮, 武士, 尊き霊, 祀る, 御苑, 丈夫, 誉, 櫻花, 治る御代, すめら帝, 額づき給ふ, 畏さ	
	5	若草の古戦場	矢叫(やたけび), 城, 兵燹, 関の声(ときのこえ), 修羅の巷, 屍, 武士(もののふ), 血潮	芭蕉の名句「夏草やつはものどもが夢のあと」を残した。奥州平泉のあたりを意想して作られた歌詞である。之は古城跡, 古戦場の生徒に印象の深い郷土的状景を加味して, 地方的に取り扱はれる事を希望する(改二:37)。
	18	日本帝国	日の本, 旗, 四方の海, 我が御祖の国(わがみおやのくに), 我が生れし国(わがあれしくに), 忠孝一体, 君臣不離, 言霊, 瑞穂, 垂穂, 東洋先進, 産業文華, 蓬莱境, 大八州, 世にも類なき楽園	かかる国に生を享けたものの幸福感を高唱せしめ度い(改二:98)。
	20	護れ空を	護れ空を, わが日本の皿のかぎり, 死もて護れや	今や我が荒鷲は優秀なる技能と果敢なる行動とによつて東亜の大陸の上を羽搏いてゐる。この認識の上になつて力強く歌はせたい(改一:277)。
	21	若人の歌	世界に冠たる, 我が日の本, 四海に覇をなす, 威力(ちから), 正義, 鍛へよ	世界に冠絶せる日本帝国の将来はかかつて青年の両肩にある(改三:319)。
	28	吾等が精鋭	響く喇叭の音, 吾等が精鋭, 無敵の誉, 正義と剛毅, 勇士, 皇軍, 世界に誇る兵器, 靴音耳を衝く, 威風堂々, 守護, 万々歳	皇軍の威風堂々と行進して来るさまを歌つたもの(改四:233)。

第二編	1	君が代	君が代	「君が代」は単なるナショナルソングでなくて、禱りの歌であり、皇室奉祝の厳粛なる頌歌である（改一：29）。
	2	天壤無窮	天津日嗣（あまつひつぎ）、日の本、神惟（かんながら）、瑞穂の国、天照る神、日の本、祝歌（ほぎうた）常盤に堅磐に（ときはにかきはに）、わが君	歌の中心は「天照る神、美しくも日の本の国肇めましぬ」にある（改三：47）。
	9	出陣の歌	戦に召されるる日、誉、銃とりて、太刀、勇み行く、門出、大丈夫、国に尽す、屍、骨、大君、仇なす敵、金毘無欠	大和男児のけなげな心情を憶はせたい（改二：222）。
	13	昭和の日本	神代、瑞穂垂るる国、我がうまし国、我がおほ君、神、我が同胞、日の御旗、御稜威、昭和の御代	誠に彼等の物質文明を消化し尽した日本は、今や此の日本精神をもつて堂々とあらゆる方面に発展して行かねばならない事を此の歌を通じて説話すべき（改四：150）。
	21	皇軍凱旋	日の御旗、誉、奮戦苦闘の態、勇士、故国、皇軍、武勲、砲弾、血潮、凱旋	武勲に輝く軍旗を中心に、威武堂々と凱旋する我が帝国の将士を迎える歌（改三：330）。
	22	富嶽の頌	御国の栄の誉、御国の姿、大和島根	「富士をほめたたへる歌」の意味（改四：223）。

注 歌曲の趣旨は『改訂標準女子音楽教授資料集成』1939-42年から転載。（ ）内の数字は、編と頁を意味する。

下線は、作曲者、作詞者とも日本人の歌曲。

以下、教科書編纂者が作曲した《靖国神社》《護れ空を》，西洋人が作曲した《出陣の歌》《皇軍凱旋》について、歌詞と音楽の視点から考察したい。4曲を選定した理由は次の通りである。

- ・《靖国神社》…教科書編纂者の一人、小川一朗が作曲した点。この曲以外、表Ⅱ-2-7には、小川の曲はない。
- ・《護れ空を》…教科書編纂者の一人、黒沢隆朝が作曲した点。この曲以外、表Ⅱ-2-7には、黒沢の曲はない。
- ・《出陣の歌》…シューマン作曲の歌曲に教科書編纂者の一人、黒沢隆朝（水田詩仙）が作詞している点。作詞の際、《海ゆかば》の歌詞の基となった『万葉集』所収の大友家持の古歌が参考とされている点。
- ・《皇軍凱旋》…オフエンバック作曲の作品に教科書編纂者の一人、黒沢隆朝（藤村俊）が作詞している点。実際に香川県師範学校において行われた実践事例がある点。

なお、考察の際には『改訂標準女子音楽教授資料集成』を参考とする。

（１） 《靖国神社》 小川一朗作曲、上田壽四郎作詞

《靖国神社》の歌詞を以下に示す（下線は筆者による）²⁵。

富士が根遠く 見遥かす
九段の丘に いかしくも
青銅高き 大鳥居。
御国の鎮 武士の

尊き霊を このにはに
いつきて祀る床しさよ

二

御苑を埋み 咲匂ふ
花とも散りし 丈夫の
誉を語る 櫻花。

治る御代の 春秋は

すめら帝も いでまして

額づき給ふ畏さよ

歌詞の形式は、七五調で構成。一番の前半では靖国神社の位置と情景，後半では靖国神社の性格，二番の前半では戦死者の勇敢さを桜の花に例えたたえ，後半で天皇の「親拝」について歌っている。大江志乃夫によれば，春，秋の年2回，天皇の臨時大祭への「親拝」が実施されるようになったのは，1938（昭和13）年4月26日の日中戦争関係者合祀の臨時大祭以降からである²⁶。『標準師範学校音楽教科書』が発行されたのが1938（昭和13）年3月であるので，最新の靖国神社の動向を先取して書かれたと推察される。しかし，詳細は分からない。

音楽的な構造はハ長調，4/4 拍子，Andantino（♩=100），斉唱，24 小節からなるA（a+a'+a'）B（a+b+b'）の二部形式で構成されている。この形式は、『標準師範学校音楽教科書』の中で次のように説明されている²⁷。

これは三楽節よりなる楽段二箇からなる，即ち二部分形式の曲である。前楽段は原調（ハ長調）が最後に属調（ト長調）に転調して完全終止し，後楽段は原調（ハ長調）が最後に属調（ト長調）に転調して完全終止し，後楽段は原調に完全終止している。

無伴奏の有節歌曲である。雅楽的な音進行が含まれているため，神道との連関を感じさせる（譜例Ⅱ-2-1）。

譜例Ⅱ-2-1 《靖国神社》 bar. 1-4

出典 『標準師範学校音楽教科書』第一編，14頁。

靖 国 神 社

Andantino. (♩ = 100) 小 川 一 朗 作 曲

一 フ ジ ガ ネ ト ホ ク ミ ハ ル カ ス
ニ み そ の を う づ み さ き に ほ ふ

(2) 《護れ空を》 黒沢隆朝作曲, 上田壽四郎作詞

《護れ空を》の歌詞と大意を表Ⅱ-2-8に示す。これ以降、『改訂標準女子音楽教授資料集成』に解説が掲載されているので、このような表を用いて考察を進める。

表Ⅱ-2-8 《護れ空を》の大意

番	歌詞 (第一編, 105 頁)	大意 (『改訂標準女子音楽教授資料集成』 第一編, 1939 年, 277 頁)
1	護れ 空を 護れ 護れ たふとき此の空 荒鷲の翼に 委せじ わが日本の空のかぎり 護れ 護れ 堅く 護れや	異国の飛行機をして一步も日本の上空に翼をのばさせてはならぬといふこと。
2	護れ 空を 護れ 護れ かがやく此の地 黒雲の 影だに あらせじ わが日本の空のかぎり 護れ 護れ 死もて 護れや	日本の国土には空からの不安がいささかもない様に護れといふこと。
3	護れ 空を 護れ 護れ 澄みゆく大空 日輪の 光ぞ 治き わが日本の空のかぎり 護れ 護れ 淨く 護れや	更に積極的に極東空軍の威力をして近東大陸の上にまで輝かせよ。

へ長調, 3/4 拍子, Allegretto (J=112), 斉唱。前奏の部分を除いた, 歌の旋律の小節数は 19。A (a + b) B (c + a) の二部形式で構成²⁸ (譜例Ⅱ-2-2)。不均等な小節数であることについて『改訂標準女子音楽教授資料集成』では、「この曲は歌詞に制限されてゐるので、従来の十六小節の民謡形では纏らない」と説明されている²⁹。歌詞の形式に目を向けてみると、《護れ空を》は定型詩として構成されていない。しかし、「護れ」がリフレインされていることで、一定のリズム感を比較的保ち、また「空を護る」ということを強調している。

その他、『改訂標準女子音楽教授資料集成』には「取扱上の注意」として以下のように掲載されているように、国防との強い関係性がうかがえる歌曲である³⁰。

此の機会に飛行機の種類, 性能, 爆弾の威力それから空の防備としての聴音機, 高射砲 (海軍にては高角砲), 防毒マスク, 焼夷弾とその処理等の事項をも, 防空練習等と関連せしめて説明するやうにしたい。

譜例Ⅱ-2-2 《護れ空を》 bar. 20-24

出典 『標準師範学校音楽教科書』第一編, 105 頁。

(3) 《出陣の歌》 R. Schumann 作曲, 水田詩仙作詞

《出陣の歌》の原曲は、シューマンの《兵士の歌》(“Soldatenlied”, H. V. Fallersleben 詩)である³¹。

表Ⅱ-2-9 《出陣の歌》の大意

番	歌詞 (第二編, 35 頁)	大意 (『改訂標準女子音楽教授資料集成』第二編, 1940 年, 222 頁)
1	今ぞ来る 今日の此の日 日頃待ちに待ちし 此の日 戦に召さるる日よ 何にたとへん此の誉 銃とりて 太刀佩きて勇み行く此の門出 父母よ兄弟よ喜びて別れんいざや	家門の名誉を一身に負ひて出征する軍人は、この壮途を肉親と共に万歳を三唱して欣然として去りゆく。この大和男児のけなげな心情を憶はせたい。
2	大丈夫が 国に尽す 秋は来る いざや行かん <u>海に屍沈むとも 山に骨を晒すとも</u> <u>大君に 仇なす敵 討たで止むべき</u> <u>金匱無欠三千年の国の力示さんいざや</u>	君国一体の帝国に生を享けてその礎石たらんことに甘んじて、死地に奮戦せんと誓ふ雄々しき限りの日本男子の決意を思はせたい。之は即ち明日の兵士たるべき、われら小学生の精神であることを深く銘記せしむべき。

注 下線は筆者による。

『標準師範学校音楽教科書』には上記の歌詞の他、万葉集所収大友家持の以下の古歌が掲載されている。表Ⅱ-2-9の下線部分が、大友の古歌を踏まえて作詞された箇所である。

海ゆかば水漬屍 山ゆかば草むす屍 大君の邊にこそ死なめ のどには死なじ

ここで《出陣の歌》が作成された時期について推測してみたい。1932 (昭和 7) 年に黒沢・小川・林によって編纂された『標準女子音楽教科書』には、《出陣の歌》は掲載されていない。したがって、この『標準師範学校音楽教科書』(1938 年, 昭和 13 年 3 月) が初出である可能性が強い。1938 (昭和 13) 年 9 月発行の『改訂標準女子音楽教科書』には《出陣の歌》が掲載されている。ちなみに信時潔が《海ゆかば》を発表したのが、1937 (昭和

12) 年 10 月である³²。信時の《海ゆかば》は黒沢らが編纂した教科書には取り上げられていない。しかし、《海ゆかば》発表の当時の動向が、《出陣の歌》の作詞に多少なりとも影響を与えていたのではないかと想像する。

《出陣の歌》の音楽的な構造は、ト長調、4/4 拍子、Tempo di marcia (♩=104)、斉唱。A (a+a') B (b+a') の二部形式で構成されている。

弱起と ♩ を含めたマーチ風のリズムが使用されているものの、テンポが遅いため重みのある堂々とした曲想となっている。ピアノ伴奏については、13 小節になると、伴奏の雰囲気が変わり、低音域の和音の響きで重々しい雰囲気を持っている（譜例Ⅱ-2-3）。

譜例Ⅱ-2-3 《出陣の歌》 bar. 13-16

出典 『標準師範学校音楽教科書』第二編、34 頁。



(4) 《皇軍凱旋》 J. Offenbach 作曲、藤村俊作詞

《皇軍凱旋》は、「武勲に輝く軍旗を中心に、威武堂々と凱旋する我が帝国の将士を迎える歌」である³³。原曲について『改訂標準女子音楽教授資料集成』には、「喜歌劇「ブム大将」の勇武を表はす「剣の歌」として知られてゐる旋律」と記されている³⁴。歌詞の大意は、表Ⅱ-2-10 に示す。

表Ⅱ-2-10 《皇軍凱旋》の大意

番	歌詞（第二編、111 頁）	大意（『改訂標準女子音楽教授資料集成』第三編、1941 年、330 頁）
1	一	
A	迎へよ日の御旗 誉ある旗を	奮戦苦闘のさまをはつきりと示して、勇士等に守られ、今故国の土をふんで帰られた誉ある、栄ある軍旗を迎へませう。万歳を高唱して迎へませう。此の軍旗こそは永久に世界平和の守護神である。そして軍旗の下に身を鴻毛の軽きに比して戦ひ、連戦連捷せし勇武かくれなき帝国軍人の凱旋を迎へませう。
B	迎へよ日の御旗 栄ある旗を	
C	奮戦苦闘の態 歴然とゑがき 勇士に守られて 故国に帰る	
2	二	
A	迎へよ日の御旗 誉ある旗を	歓呼の声をあげて此の栄誉ある軍旗を賞め歌ひませう。軍旗には一目してそれと覚るに足る武勲の数々が輝かしく刻まれて、我が勇士の陛下のために如何に必死の奮闘をつづけたかが想像される。砲煙弾雨に瀑され、あるひは弾丸の痕、あるひは血潮の痕とも思はれる数多のしるしは明らかにその苦闘の日を語つてゐるものである。わが軍旗を賞め歌ひませう。このみ旗こそは世界を永久に平和に置く守護神である。そして之を奉じて縦横無尽に戦ひ、且つ捷利を得て今凱旋して来た皇軍の武勲を賞め歌ひませう。
B	迎へよ日の御旗 栄ある旗を	
C	限なき武勲を 赫然としるし 砲弾や血潮の痕 その日を語る	
	歌へよ日の御旗こそ 四海の鎮ぞ永久に 謳へよ我が皇軍の 輝くこの凱旋	

音楽的な構造は、二長調、4/4 拍子、Allegretto con vivo. (♩=96)、三部合唱、A (a+a') B (b+a') C (c+c') の三部形式で構成されている。歌詞についても三部構成でできている³⁵。A (譜例Ⅱ-2-4) と C が凱旋の場面であるのに対して、B の部分で戦場を描いている。実際に B の部分 (9 小節) では平行調のロ短調へ転調し、前後の曲想との対比がみられる。再び 12 小節から二長調へ戻り、凱旋の場面となる (譜例Ⅱ-2-5)。

全体としては、弱起と ♩ を含めたマーチ風のリズムが使用され躍動感のある曲想である。特に 17 から 18 小節の旋律が、21 から 22 小節で、反復され勇壮活発な雰囲気曲を閉じている (譜例Ⅱ-2-6)。

譜例Ⅱ-2-4 《皇軍凱旋》 bar. 1-4

出典 『標準師範学校音楽教科書』第二編, 110 頁。

Allegretto con vivo. (♩ = 96)

一ム カヘヨヒノミハタホマレアルハタヲ
二う たへよひのみはたほまれあるはたを

譜例Ⅱ-2-5 《皇軍凱旋》 bar. 9-12

出典 『標準師範学校音楽教科書』第二編, 110 頁。


フンセントウノサマレキゼントエガキ
かぎりなきいさををかくぜんとしるし

譜例Ⅱ-2-6 《皇軍凱旋》 bar. 21-24

出典 『標準師範学校音楽教科書』第二編, 111 頁。

ムカヘヨワガミイクサヲカチニカーチシミイクサ
うたへよわがみいくさのかかーやくーこのかいーせん

4 歌曲の考察の結果、以下の共通点がみられる。

- ・教科書編纂者が作曲した《靖国神社》《護れ空を》は、不均等な小節数による二部形式で構成されている。
- ・西洋人が作曲した《出陣の歌》《皇軍凱旋》は、4/4 拍子、 を含めた行進曲風のリズム、弱起、長調の特徴が見られ、力強さを表している。

前述の通り、「国家」に分類されたのは 24%に過ぎない。緒言にも「教材歌曲はその材料を広く世界の名曲に求め之を調、拍子、リズム等の形態及びその内容に留意し、系統的に配列した」とあるように、『標準師範学校音楽教科書』では音楽そのものがまだ重視されている。そのことは《野薔薇》《菩提樹》等のシューベルトの芸術歌曲も掲載されていることから分かる。

第4節 文部省『師範音楽 本科用巻一』（1943）における歌曲

本節では、1943（昭和 18）年に発行された文部省『師範音楽 本科用巻一』（以下、『師範音楽』と略記）における 22 曲の歌曲を概観し、さらに掲載されている歌曲の一つである《白楽天》の音楽分析を行うことで、国定師範学校音楽教科書における歌曲の特質を明らかにする³⁶。これまでこの教科書に関する分析的な研究は行われていない³⁷。

「師範教育令改正」第一条には、「師範学校ハ皇国ノ道ニ則リテ国民学校教員タルベキ者ノ錬成ヲ為スヲ以テ目的トス」（勅令第百九号，昭和 18 年 3 月 6 日・公昭和 18 年 3 月 8 日）と謳われた³⁸。また、「師範学校教科教授及修練指導要目」には、「歌詞及楽曲ハ国民的情操ヲ涵養スルモノタルベク特ニ雄渾ニシテ青年ノ志氣ヲ鼓舞シ大国民タルノ気魂ヲ養フニ足ルモノヲ採択スベシ」と規定された³⁹。このようなことから、『師範音楽』には、それ以前の検定教科書にはない傾向が歌詞と音楽の両方の視点から見受けられると思われる。第 1 章で述べた通り、『師範音楽』は、師範学校が官立専門学校程度へ昇格した際に発行された教科書である。制度上の変革が及ぼした音楽教育の影響を考察する上でも、この教科書は等閑視できない。したがって、音楽的特徴と歌詞の 2 つの視点から『師範音楽』における歌曲の特徴を考察したい。

1. 文部省『師範音楽 本科用巻一』（1943）の特徴

表Ⅱ-2-11 は、音楽的特徴、歌詞内容の分類結果を一覧にしたものである。

表Ⅱ-2-11 『師範音楽 本科用巻一』における歌曲

番	曲名	作曲者名	作詞者名	音楽的特徴								歌詞内容の分類
				編曲	形態	調	拍子	発想標語	速度	音域	ped.	
1	櫻	下総皖一	清水乙女		斉	C	4/4	美しく	108	c1-d2	○	自然
2	四季	橋本国彦	茅野雅子		斉	C	3/4	軽快に	116	c1-d2	○	自然, 教訓
3	ホトトギス	清水修	古歌		斉	陽	4/4	静かに	80	d1-e2	○	自然
4	平安の花	長谷川良夫	四賀光子		三	G	3/4	優雅に	80	h-e2	○	自然
5	夏は来ぬ	小山作之助	佐々木信綱	片山	二	C	4/4	優雅に	92	c1-e2	○	自然
6	くろしほ	信時潔	佐藤一英		二	C	4/4	力強く	108	g-f2	○	国家, 自然
7	南方航空路	志賀静男	西條八十		三	G	2/2	雄大に	96	h-e2	○	国家
8	日本農道の歌	安部幸明	吉植庄亮		斉	C	4/4	元気よく	108	c1-e2	○	国家, 勤労
9	水邊歌	下総皖一	風巻景次郎		二	F	6/8	優雅に	138	c1-d2	○	自然
10	靖国神社		陸軍省・海軍省 選定	下総	三	F	4/4		88	a-d2	○	国家
11	健歩の歌	内田元	前田鐵之助		二	C	2/4	元気よく	114	c1-e2		国家, 教訓
12	婦人従軍の歌	奥好義	加藤義清	下総	三	G	2/4		100	h-g2	○	国家
13	霜月	益子九郎	田中冬二		三	e-m	6/8	静かに	56	h-e2	○	自然
14	朝びらきの歌	片山頼太郎	斉藤瀏		斉	D	4/4	勇敢の心 で	92	d1-e2	○	国家
15	箱根八里	滝廉太郎	鳥居枕	片山	三	C	4/4	元気よく	100	g-e2	○	自然, 国家

16	古歌四首	片山頼太郎	古歌		二	C	2/4		66	h-e2	○	自然
17	防人の歌	下総皖一	古歌		二	C	4/4	莊重嚴肅に	80	c1-e2	○	国家, 勤労
18	野村望東尼	弘田龍太郎	關ミサオ		斉	陰	4/4	こころをこめて	69	d1-es2	○	教訓, 国家
19	われた茶碗	片山頼太郎	武者小路実篤		二	B	2/4	軽快に	104	a-es2	○	他
20	わが陸軍	平井保喜	勝承夫		斉	B	4/4	躍動するごとく	100	b-es2	○	国家
21	鉄	高田信一	永田恒雄		三	D	4/4	明るく	100	a-e2	○	勤労, 国家
22	白楽天	信時潔	南江治郎			C	4/4		92	f-e2	○	国家, 自然

注 戦後の暫定教科書である文部省『師範音楽 本科用』1946年に所収されている曲は、曲名に下線を付した。

(1) 音楽的特徴

表Ⅱ-2-11を通して、『師範音楽』に掲載されている歌曲の主な音楽的特徴をまとめると、次の通りである。

- 1) 作曲者：22曲すべての歌曲が、日本人によって作曲されている。《5 夏は来ぬ》⁴⁰《10 靖国神社》⁴¹《12 婦人従軍の歌》⁴²《15 箱根八里》⁴³以外の18曲は、『師範音楽』のために新たに作曲されている。複数の曲を担当したのは、下総皖一（作曲3曲、編曲2曲）と片山頼太郎（作曲3曲）と信時潔（2曲）の3人である。
なお、「師範学校教科教授及修練指導要目」には、「我が国ノ作品ヲ主トシ適宜外国ノ名曲ヲ加フルコトヲ得」とあるけれども、外国の作品は取り上げられていない。
- 2) 形態：合唱が14曲で6割強を占める。二部合唱が7曲、斉唱が7曲、三部合唱が7曲、その他（交声曲風）が1曲である。四部合唱は含まれていない。
「師範学校教科教授及修練指導要目」には、本科第1学年で扱う内容として「単音唱歌、輪唱曲、重音唱歌（和音的ノモノ）」が挙げられている。しかし、『師範音楽』では輪唱曲そのものは掲載されていない。しいて挙げるとすれば、《11 健歩の歌》（33-48小節）にカノンが使用されている。
- 3) 調性：長調が19曲（86.4%）を占める。調性は、ハ長調が10曲で最も多く、ト長調（3曲）、ヘ長調（2曲）、ニ長調（2曲）、変ロ長調（2曲）、ホ短調（1曲）、ト調陽音階（1曲）、ニ調陰音階（1曲）で構成されている。この調性の範囲は、「師範学校教科教授及修練指導要目」の規定内であり、国民学校音楽教科書で指導される調性とも共通する⁴⁴。
- 4) 拍子：4/4が13曲で最も多い。ついで、2/4が4曲、3/4が2曲、6/8が2曲、2/2が1曲である。
- 5) 発想標語：イタリア語ではなく、日本語で表示。数字による速度も示されている。複数使用されているものは、「元気よく」3曲、「優雅に」3曲、「軽快に」2曲、「静かに」2曲である。「力強く」「雄大に」「元気よく」等のたくましさや、「勇敢な心で」「こころをこめて」等の精神面を表したものが目に付く。
- 6) 音域：最低音はかっこつきのfで《22 白楽天》で用いられている。最高音はf2で《6 くろしほ》で登場する。いずれも信時潔の曲である。最多はc1-e2の範囲（4曲）とh-e2の範囲（4曲）。

全22曲に伴奏譜が付き、《健歩の歌》を除く21曲にペダル記号が使用されている。赤井励の指摘通り、『師範音楽』は、ピアノ向けに伴奏譜が作られている⁴⁵。

(2) 歌詞内容の分類

全 22 曲は、日本人の手によって日本語の歌詞が付けられている。作詞方法の特徴としては、表Ⅱ-2-12 に示したように、古歌を基にした曲が 5 曲あることである。これは、第 1 章で取り上げた、「日本肇国以来の伝統を顕示するということと、その伝統を現実に将来に活かして行くといふこと」という教科書編纂の根本方針を受けてのことだと考えられる。

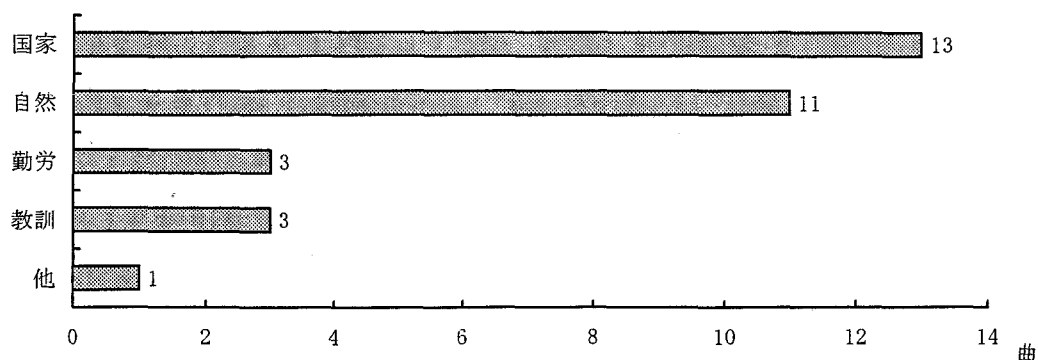
表Ⅱ-2-12 古歌を歌詞とする歌曲

番	曲名	古 歌	出典
1	櫻	枝毎に 蕾ふくらむ 桜山 さくらは今は 咲きいそぐらし 日向ひの この一山は 櫻山 五百枚の蕾 みなふくらめり	二種連作の短歌 (清水乙女作歌)
3	ホトトギス	ほととぎす 花橘の 枝にゐて 鳴き響もせば 花は散りつつ ほととぎす 鳴きつる方を 眺むれば ただありあけの 月ぞのこれる	『万葉集』第十巻, 作者未詳 『千載和歌集』第三夏歌 藤原実定
4	△ 平安ノ花	逢阪や こずえの花を 咲くからに 嵐ぞかすむ 関の杉むら さ月まつ 花橘の 香をかげば 昔の人の 袖の香ぞする たぐれはいづれの 雲のなごりとて 花たちばなに 風の吹くらむ ほととぎす はなたちばなの 香をとめて 鳴くはむかしの 人やこいしき	『新古今和歌集』第二春歌 『新古今和歌集』巻第三夏歌 藤原定家 『新古今和歌集』巻第三夏歌 読人しらず
16	古歌四首	風そよぐ ならの小川の タぐれは みそぞ夏 の しるしなりけり むらさめの 露もまだひ ぬまきの葉に 霧たちのぼる 秋のタぐれ 淡路島 かよふ千鳥の鳴く声に いくよねざめぬ 須磨の関守 かささぎの わたせる橋に おく霜の しろきを見れば 夜ぞふけにくる	『新勅撰和歌集』第三夏歌 藤原家隆 『新古今和歌集』第五秋歌 寂蓮法師 『金葉集』巻第四冬歌 源兼昌 『新古今和歌集』巻第六冬歌 大伴家持
17	防人の歌	今日よりは かへりみなくて 大君の しこの御楯と 出で立つわれは 大君の 命かしこみ 大船の 行のまにまに やどりするかも 大君の 命かしこみ 磯に触り 海原渡る 父母を置きて	『万葉集』巻第二十 今奉部與曾布 『万葉集』巻第十五 雪宅麿呂 『万葉集』巻第二十 丈部造人麿

出典 文部省『師範音楽 本科用巻一』1943 年の「附録」(175-180 頁)を基に作成。

注 △の《平安の花》は、古歌を基に四賀光子が作歌している。

歌詞内容の分類については、第 2 節、第 3 節同様、唐沢の分類に基づき、「国家」「自然」「勤労」「教訓」「他」の五つで行った。第一編と第二編に掲載されている全 22 曲における歌曲の歌詞内容の大意を分類した結果が、図Ⅱ-2-5 である。



図Ⅱ-2-5 文部省『師範音楽』歌詞内容の分類 (全22曲)

「国家」が最多で13曲(59%)。続いて「自然」11曲(50%)、「勤労」「教訓」各3曲(各13.6%)、「他」1曲(4.5%)という結果である。「国家」以外に分類した曲であっても、日本の美・文化の優越が含まれており、愛国心への育成を意図的、潜在的に行っている。『師範音楽』にはこれらの「歌曲」の他に「儀式唱歌」が掲載されている。それらを加味して考えると、『師範音楽』で扱われるほとんどすべての歌唱教材が、ナショナリズム・ミリタリズムを色濃く反映している。

表Ⅱ-2-13には、「国家」に分類した歌曲における歌詞のキーワードと歌曲の趣旨について一覧にした。

表Ⅱ-2-13 『師範音楽』における歌詞分類「国家」の歌曲

番	曲名	歌詞のキーワード	歌曲の趣旨
		愛国心・皇室崇拝・軍国主義に関する語	出典 『師範音楽』附録(175-180頁)
6	くろしお	すぐれし民、あつき血、陽の民、大和根性、日の本	日本国民ノ生活ト黒潮トノ切り離シ得ナイ関係ヲ歌ツテイル
7	南方航空路	後稷威、航空路、銀翼、民族、共栄、日本男児	最モ近代的ナ科学ノ精粹ト国民的ナ感激トハココニ渾然一体トナツテ、豊カナ創造ノ歌ヲ一層生命ニ充チテ永遠ニ若々シイモノトスル農民道ノ誇ヲ歌ヒアゲタモノデアル
8	日本農道の歌	瑞穂の国、かたじけな、天皇、御饌、兵	農民道ノ誇ヲ歌ヒアゲタモノデアル
10	靖国神社	日の本、盡忠、雄魂、宮柱、大君、靖国神社、御旗、ますらを、御魂、報国、血潮、大和、同胞、幸御魂幸、皇国、国護る	靖国神社ヲ称ヘツツ、護国ノ英靈ニ対スル感謝ヲ歌ヒ、揺ギナキ皇国ノ彌栄ヲ祀ツテイル
11	健歩の歌	剛き身、たくまし、北南大陸、国民、たくまし	タダチニ行進ノ歩調ヲアハセルヤウニ快適ノ律デ歌ヒ、健歩ノ楽シサ、ウレシサ、尊サヲ歌ツテイル
12	婦人従軍の歌	火筒、敵味方、艶れし、十字の旗、天幕、日の本、血潮、あけ、見方、兵、赤十字、勇ましや	赤十字看護婦ノケナゲナ働ヲ歌ツタモノノ中デハ、今日ニ伝ハル唯一ノモノトシテ、スデニ古典的唱歌デアル
14	朝びらきの歌	皇国、勝利、八紘宇、日本、国を思へば、大御稷威、現神、天皇、軍、敵、砕け	勝利ヲ約束サレテ往ク皇軍ノ出帆ニ寄セテ、建設戦ノ苦キ楽シサ、大御稷威ヲイタダク皇軍ノ正シサ、必ズ敵ヲ潜伏サセナイデハオカス皇軍ノ神ノゴトキ武威ヲ歌ツタモノデアル
15	箱根八里	剛毅の武士、大刀、剛毅の健児	明治時代唱歌ノ代表作ノ一ツトシテ、青少年子女ニ愛唱サレタ歌デアル
17	防人の歌	大君、御楯	奈良時代ノ国民ガ大命ヲ奉ジテ邁進スル氣迫ガ感ジラレ、身ヲ挺シテ国事ニツトメル表情ノ凛トシテ胸ニ迫ルモノガアル

18	野村望東尼	志士、「神の形見の大和魂」、大御代	幕末勤王ノ女性野村望東尼ノ業績ヲ称ヘテ、日本婦道ノ真諦ヲ歌ツタモノデアル
20	わが陸軍	往き、うち砕き、うち拉ぎ、うち平げて、わが陸軍、大御稜威、猛く、勝つ、皇御軍、国のため、勇み、神明、剛く、軍旗、戦車、兵等、神州	特ニ陸軍記念日ノ前後ニ学ビウルヤウニシタノハ、ワガ陸軍ニ対スル畏敬ト信頼トヲ深メルヨスガデアル
21	鉄	来たるべき日に備へてかたい、けふのこの日を支へて衛る	鉄ハ近代工業ノ重要資源デアリ、アラユル武器モ機械モコレナクシテハ作ルコトガデキナイ。農業ト工業トハ国家ヲマモル両輪デアル
22	白楽天	日の本、大和の国、神ごころ、神慮、海士人、君が代、神住吉、神楽舞、神風、ゆるがぬ国	謡曲「白楽天」ニ取材シタ小サナ交声曲風ノ歌デアツテ、日本文化ノ優越シテイルコトト、日本精神ノ優秀ナコトヲ表現シタ作デアル

なお、戦後に出た暫定教科書である文部省『師範音楽 本科用』⁴⁶ (1946) には、《四季》《ほととぎす》《平安の花》《夏は来ぬ》《日本農道の歌》《水邊歌》《健歩の歌》《霜月》《古歌四首》《われた茶碗》の 10 曲しか所収されていない。ということは、削除された 11 曲は、ナショナリズム、ミリタリズム的傾向が強い歌曲である。

また、《日本農道の歌》と《健歩歌》については、表Ⅱ-2-14 に示したように、戦後の暫定教科書では歌詞の修正が行われている。

表Ⅱ-2-14 歌詞の修正箇所

番	曲名	『師範音楽 本科用巻一』(1943)	暫定教科書『師範音楽 本科用』(1946)
5	日本農道の歌	一 豊葦原瑞穂の国に 天つ日の光の雫 白玉の米ぞつくる かたじけなわれは田作り 二 天皇のきこしめす御饗の 兵の命の糧の 白玉の米は尊し ことごとくわれらぞ作る	一 大和島根の国原かけて 天つ日の光の雫 白玉の米をぞつくる かたじけなわれは田作り 二 老いたる若き千萬民の あけくれの命の糧の 白玉の米は尊し ことごとくわれらぞ作る
7	健歩の歌	三 ああ 健歩 歩くたふとき ああ 健歩 歩くたふとき 国こぞりこころひとつに 北南大陸せましと 恐れなく歩み尽くせば 国民のいよいよたくまし 歩け歩けはてなき世界 行き行きてところは昂る	三 ああ 健歩 歩くたふとき ああ 健歩 歩くたふとき 肩並べ語合ひつつ 野や山や森や林や 恐れなく歩み尽くせば 友はみな心明かるし 歩け歩けはてなき山路 行き行きてところは昂る

注 下線部分は歌詞の修正箇所。左端に示した曲名の番号は、『師範音楽 本科用』(1946) に基づく。

以上、『師範音楽 本科用巻一』(1943) における歌詞内容について以下の点が指摘できる。

- 1) 全 22 曲が、すべて日本人によって作詞されている。古歌に基づいている曲が 5 曲ある。
- 2) 唐沢の分類方法で行った結果、「国家」が 13 曲 (59%) と最多である。また、戦後の暫定教科書では、11 曲が削除された。採択された 10 曲のうち、2 曲は歌詞が一部修正されている。したがって、半数以上の曲が、ナショナリズム・ミリタリズム的傾向の歌詞で構成されていたといえる。

2. 《白楽天》の分析

《白楽天》は、独唱、斉唱、二部合唱、三部合唱を組み合わせて交声曲風⁴⁷⁾に作曲され、プロットに沿って音楽を進行させるドラマツルギーを持った作品である。『師範音楽』の最後に位置付く正に重みのある曲である。その出典は、「神と君が代の、動かぬ国」のめでたさ⁴⁸⁾を描いた能の「白楽天」⁴⁹⁾である。ここでは能の「白楽天」と比較することによって、《白楽天》の歌曲としての特徴を明らかにしたい。

(1) 登場人物と楽曲構成

表Ⅱ-2-15に、《白楽天》の登場人物の関係を示した。《白楽天》では、能のワキ、前シテ、後シテという主要な3役に独唱パート充て、他の役を斉唱、二部合唱、三部合唱に編成している。能のプロットを忠実に追いながら、対話を省略し、説明的な部分を割愛しているので、全体としてはダイジェスト版となっている。

表Ⅱ-2-15 登場人物

謡曲「白楽天」		→	交声曲《白楽天》
・ワキ	白楽天	→	白楽天（独唱）
・ワキツレ	従者2人		
・前ツレ	男		
・前シテ	漁翁	→	漁翁（独唱）
・アイ	末社の神		
・後シテ	住吉明神	→	明神

分析するために楽曲を11に区分した。小節、形態との関係は表Ⅱ-2-16に示す通りである。

表Ⅱ-2-16 楽曲の構成

区分	小節	形態	区分	小節	形態
A	1-10	前奏	G	65-80	二部合唱
B	11-24	斉唱	H	81-88	間奏（舞）
C	25-28	間奏	I	89-98	独唱（明神）
D	29-44	独唱（白楽天）	J	99-106	間奏
E	45-60	独唱（漁翁）	K	107-126	三部合唱
F	61-66	間奏			

(2) 歌詞について

表Ⅱ-2-16の区分にしたがって《白楽天》の歌詞とその思想を記すと表Ⅱ-2-17のようになる。

表Ⅱ-2-17 歌詞と思想

形 態	歌 詞	思 想
A 斉唱	不知火の筑紫の海の朝ぼらけ（一声） 光普き 日の本の 智慧計らんと 来たりたり	日本礼賛
D 白楽天	ふしぎやその身漁夫なるに 「衣着ぬ山の 帯をする」と	日本文化礼賛

	かくもいみじき 詩ごころ 如何なる人の 果やらん	
E 漁翁	名もなきものぞ されどわれ 大和の国の 民なれば 歌に和らぐ 神ごころ 誰か神慮を 仰がざる	日本文化礼賛
G 二部 合唱	鳥も獣も なべてみな <u>人にたぐへて</u> * 歌を詠む ためしは多き 海士人の 心ありける ならひかな	日本礼賛
I 明神	君が代の直なる道ぞ 住吉の(一声) 神住吉の 神楽舞	皇室礼賛
K 三部 合唱	立ち舞ふ袖や 雲の峰 はや立ち帰る 唐船の 神風手風 吹き起り 君を護りの 国民絶えず ゆるがぬ国こそ 久しけれ	日本礼賛 皇室崇拝 →軍国

注 下線は筆者による。

歌詞は能の七五調を踏襲している。冒頭と明神の一声では定型通り五七五の音韻となっている。「不知火の筑紫の海の朝ぼらけ」は能では白楽天が唐から日本に到着した場面の〈真ノ一声〉である。この台詞を交声曲の冒頭に持ってきたことで、曲全体が「我が国」を強調していることが分かる。

「君が代の直なる道ぞ住吉の」に直接対応する能の台詞は見られない。この部分は海青楽を舞うシテの謡「住吉の、神の力にあらむ程は、よも日本をば、従へさせ給はじ・・・げに有がたや神と君」の翻案と考えられる。交声曲では日本が神の国であることを強調して一声の形をとっている。

なお、*の「たぐへて」については「解説」で「ダダ謡曲ノ原曲ニ古クサウ用ヒテイルノデ、ソノママ踏襲シタ」⁵⁰という記述が見られる。

この曲にはどのような思想が盛り込まれているのだろうか。素材は、文芸競技で白楽天をやりこめ、「神と君が代の、動かぬ国ぞ久しき」と歌い上げる能の「白楽天」である。能の「白楽天」の「神と君が代の、動かぬ国のめでたさ」を「君を護りの国民絶えず ゆるがぬ国こそ久しけれ」と、国民の「護り」の義務を強調し、日本礼賛から皇室崇拝、軍国奨励へという図式を読みとることができる。謡曲の「白楽天」を西洋音楽様式用の歌詞に巧みに翻案し、軍国主義的傾向を強めているといえるだろう。

(3) 音楽について


表Ⅱ-2-18に交声曲全体の音楽構成の概略を示す。

表Ⅱ-2-18 音楽の構成

	形態	拍子	調性	速度	内容の概略
A	前奏	4/4	ハ長調	92	
B	斉唱	4/4	ハ長調	92	白楽天筑紫海岸到着
C	間奏	4/4	ハ長調	92	
D	白楽天	4/4	ハ長調	92	漁翁の歌に驚く

E	漁翁	6/4	へ長調	126	日本人なら当然
F	間奏	6/4	へ長調	126	
G	二部合唱	4/4	ハ長調	116	鳥、獣も歌を詠む
H	間奏(舞)	4/4	ハ長調	92	明神、雅な舞で出現
I	明神	4/4	ハ長調	92	神楽舞についての説明
J	間奏	4/4	ハ長調	92	
K	三部合唱	4/4	ハ長調	92	神風によって唐船退散

次に作曲上特色ある点を挙げる。

- 1) ♩=92 を基調として E～G に 126・116 の部分を含む。この部分は 4/6 拍子である。これは序破急という日本的な速度形態をとらずに中間に対照的な速度をおいて対比させる西洋的な手法がとられているといえるであろう。
- 2) ハ長調を主調としつつも E, F でへ長調に転調する。速度・拍子も同時に変化するので、漁翁の出現に関して印象深い効果をもたらしている。なお、西洋音楽では速度の速まるところで転調する場合、属調が多いので、下屬調への転調が注目される。この現象は信時の他の曲にも見られるので、作曲者の個人様式と言えるかもしれない。
- 3) 伴奏の技法は「両手によるコラール風伴奏」⁵¹とも呼べるものであり、和声的進行が優勢である。とはいうものの、で示したような対位法的手法も用いられている(譜例Ⅱ・2・7)。

譜例Ⅱ・2・7 《白楽天》 **A** 冒頭 bar. 1-4
出典 文部省『師範音楽 本科用巻一』1943年, 104頁。



Hでは舞が挿入されている。これは能の「序の舞」に対応している。速度も元に戻って緩くなり、落ち着いた下降旋律が伴奏で奏でられる(譜例Ⅱ・2・8)。物静かで優雅な序の舞の雰囲気を踏んでいるといえよう。なお、舞については、歌詞の中に「神楽舞」と見えるが、附録の解説では「ソレカラ明神ガ海青楽⁵²ヲ舞ハレル」⁵³と記されている。

譜例Ⅱ-2-8 《白楽天》 **H** 冒頭 bar. 81-85
出典 文部省『師範音楽 本科用巻一』1943年, 109頁。

舞 みやびやかに ♩=92

譜例Ⅱ-2-8に關係する下降旋律が73, 99, 115, 120, 123小節に出現する(譜例Ⅱ-2-9)。

譜例Ⅱ-2-9 《白楽天》 **G** bar. 73
出典 文部省『師範音楽 本科用巻一』1943年, 109頁。

同音上に停滯する旋律がⅠの冒頭に現れる(譜例Ⅱ-2-10)。Ⅰでは旋律線は徐々に上行するものの、モチーフとしては停滯する旋律が優勢である。能のヨワ吟との関連を想起させる部分である。

譜例Ⅱ-2-10 《白楽天》 **H**→**I** 冒頭 bar. 86-94
出典 文部省『師範音楽 本科用巻一』1943年, 110頁。

明神 *p* *mp* *v*

キ ミ ガ ヨ ノ ス グ ナ ル ミ チ ゾ

フィナーレに相当する K は三部合唱でできている（譜例Ⅱ・2-11）。歌手は直前のⅡ→Ⅴを受けてⅠの和音を響かせなければならない。聴覚訓練の成果が問われるところである。

譜例Ⅱ・2-11 《白楽天》 K 冒頭 bar. 106-110

出典 文部省『師範音楽 本科用巻一』1943年, 111頁。

三部合唱

タ チ マ フ ソ デ ヤ ク モ ノ ミ ネ

II V I

123小節からのコーダは、アラルガンドで盛り上がり終結する（譜例Ⅱ・2-12）。「君を護りの国民絶えず ゆるがぬ国こそ久しけれ」の歌詞に込められた「神徳と君主の徳は一体とする思想」⁵⁴を謳歌する終止の手法ととらえることができよう。なお、このような終止の手法は信時による《6くろしほ》にも共通して見られる（譜例Ⅱ・2-13）。

譜例Ⅱ・2-12 《白楽天》 K bar. 123-126

出典 文部省『師範音楽 本科用巻一』1943年, 112頁。

ユ ル ガ ヌ ク ニ ゴ ツ ヒ サ シ ケ レ

II V I

譜例Ⅱ-2-13 《くろしほ》 bar. 24-28

出典 文部省『師範音楽 本科用巻一』1943年、37頁。

ノ — ウ カ ラ ヤ カ ラ フ ヒ ノ タ ミ フ
 ま — や ま と し ま ね を ひ の も と を

37

以上、《白楽天》について、次の諸点が挙げられる。

- 1) 謡曲の「白楽天」を基に、西洋音楽様式用ダイジェスト版へと翻案することで、日本礼賛から皇室崇拝、軍国奨励へという思想をより強調している。
- 2) 和声進行、終止法等西洋音楽様式を基本としつつも、能のヨワ吟や序の舞と関連させて構成しており、日本の芸能である「能」を演じ手や観客に意識させる効果を意図している。
- 3) 『師範音楽』の中では唯一の交声曲風の曲であるため、形態等に工夫が見られ、今日における音楽劇に類似する形式でできている。また、音楽だけではなく、舞が挿入されている。

『師範音楽 本科用巻一』（以下、『師範音楽』と略記）は、第1章で述べた通り、1943（昭和18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」に基づいて作成された、本科第1学年用の国定教科書である。この教科書は、新制度が適用される1943（昭和18）年4月1日には間に合わず、7月6日に発行されたため、1年間を通じて計画的に指導されることはなかった（後述）。しかし、次に列記する歌曲は、巻末の「附録」の中で指導する時期について記されている。

《3 ホトトギス》…初夏、《4 平安の花》…1学期、《20 ワガ陸軍》…陸軍記念日（3月10日）の前後

他の歌曲をみても、最初に《1 櫻》が置かれ、《5 夏は来ぬ》、秋の頃に《13 霜月》というように、季節に合わせて歌曲が配列させている。したがって、この歌曲の掲載順に指導を進めることが望まれたと考えられる。今回、分析をした《22 白楽天》は、本科第1学年を締めくくる総括的な歌曲であり、当時の社会情勢と思想が色濃く反映する『師範音楽』の代表的な歌曲である。また、《白楽天》は、単なる歌唱教材ではなく、＜交声曲風＞という形態が採られ、多様な表現活動を展開することも可能な教材である。したがって、第1章で取り上げた教科書編纂の四つの視点「①雄大にして強靱な国民性格を錬成する、②主体的活動精神を鼓吹する、③絶えず創造の熱情を涵養する、④率先窮行を率ゐるの気迫と実践力を培ふ」を十分満たした教材といえよう。

第5節 聞き取り調査から明らかになった歌唱指導の実態

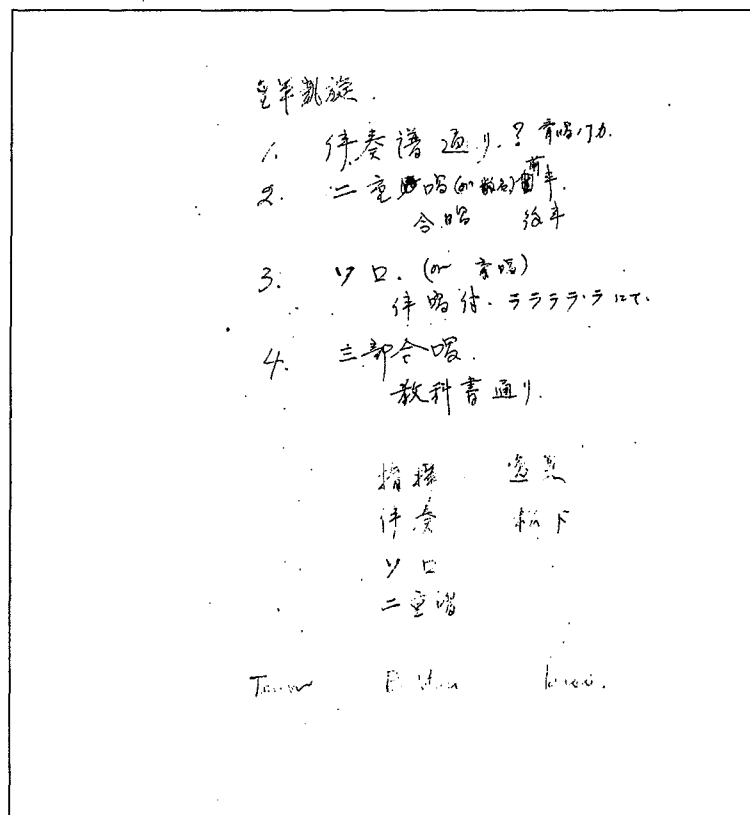
本節では、香川県師範学校音楽科教員の金光武義氏⁵⁵（1941年4月-44年12月在職）ならびに岡山師範学校の卒業生の岡嶋信夫氏⁵⁶（1943年4月-45年9月在籍）、原卯三次氏⁵⁷（1940年4月-45年9月在籍）の証言から、歌唱指導の実態に迫りたい。

1. 『標準師範学校音楽教科書』（1938）の《皇軍凱旋》：香川県師範学校金光氏の実践

第3節で取り上げた『標準師範学校音楽教科書』に掲載されている歌曲が実際にどのように実践されたかについて考察するために、一例として《皇軍凱旋》を取り上げる。取り上げた理由は、香川県師範学校音楽科教員であった金光武義氏の授業メモが残されており、当時の歌曲指導の実態を推察することが可能であるからである。

資料Ⅱ-2-1は金光氏の授業メモである。

資料Ⅱ-2-1 金光武義氏の授業メモ



金光氏は三部合唱だけではなく、独唱、斉唱、重唱の形態で《皇軍凱旋》を指導している。資料Ⅱ-2-1に記されている通り「4. 三部合唱」では、指揮や伴奏も生徒に分担させて、実践的な指導を展開している。

譜例Ⅱ-2-14は、伴唱用⁵⁸の金光氏編曲の楽譜である。資料Ⅱ-2-1に示した通り、金光氏は独唱や斉唱を行う際の伴奏を＜伴唱＞、つまり声を用いて伴奏を加えている。この伴唱は、基本的に『標準師範学校音楽教科書』に掲載されている三部合唱の楽譜の中声部、低声部の旋律を使用している。

譜例Ⅱ-2-14 伴唱用の金光武義氏編曲の楽譜



ここでの伴唱は、4拍子を刻む役割を担っている。譜例Ⅱ-2-14には、スタッカートを付け、「ラ」で歌うよう指示されている。伴唱の旋律は和音を受け持ち、ひたすら行進している歩兵の様子を想像させる。この伴唱に高音部の旋律を加えることで、ミリタリズムの歌曲の持つ雰囲気強調している。

残念ながら、授業の中において歌曲の歌詞の意味をどう指導していたかについては明らかにすることができなかった。しかし、音楽面では伴唱を加えることで、ミリタリズムの歌曲の有する行進曲的な雰囲気を強調していたことが分かる。

2. 『師範音楽 本科用巻一』(1943)：岡山師範学校の卒業生、岡嶋氏の証言

『師範音楽 本科用巻一』の使用状況について、以下の岡山師範学校の卒業生、岡嶋氏の証言から考察したい。

戦争中でしたからたいした授業は受けていません。師範学校は空襲にも遭いました。音楽の授業もそうです。たいしたことはやっていません。戦争のため1年程度しか授業がありませんでした。ただ少し歌を歌っただけです。『師範音楽』という教科書がありまして、その前半を少し歌いました。その他、国民学校の教科書も歌った覚えがあります。

(2003年8月24日 岡嶋氏)

2004年4月5日に行った聞き取り調査では、以下のように『師範音楽』についてさらに追求した。

岡嶋：『師範音楽』は、ほとんど開かなかったと思います。ただ、5曲か6曲しかやっていなかったと思うのです。「時々これをやりましょう」と難波先生がおっしゃってやられたと思うのです。その間何をしていたかというと、小学校の教材をやっていたと思います。音楽の時間はね。

鈴木：その小学校の教材というのは…

岡嶋：唱歌。

鈴木：国民学校の？

岡嶋：国民学校の教科書。

鈴木：子ども用の方ですか。

岡嶋：いや。教師用。

鈴木：教師用の本を買って？

岡嶋：勉強したと思います。歌だけだったと思いますけれどね。私はハーモニーにも興味があったから、他の人は歌唱教材だけだったと思います。

このような曲をやったのですね。全部ではないですよ。《長い道》（『うたのほん下』譜例Ⅱ・2-15）はやった覚えがある。

鈴木：何年生ですか。

岡嶋：2年生。それからなじみのないのはね。《国引き》（『うたのほん下』譜例Ⅱ・2-16）というのはなじみがないでしょ。

こういうのはとばかされたと思うのです。《さくらさくら》（『うたのほん下』譜例Ⅱ・2-17）はやったような気がする。そういうのをやって合間に『師範音楽』をちょっちょつとやったような気がするね。

《夏は来ぬ》（『師範音楽』譜例Ⅱ・2-18）はありふれた曲でしょ。そういうのはやられた。先生がやりやすいのをやられたのではないかな。難波（正）先生も師範学校から東京のね、師範科へ行かれた人だから（東京音楽学校甲種師範科 1940 年 3 月卒業）。まあピアノが特別うまいとか、歌が特別うまいという人ではなかったから。

ただその中で私は《霜月》（『師範音楽』譜例Ⅱ・2-19）というのが非常に印象に残っている。

（♪歌う 「霜のあしたのさやけさや」）



戦争中にね、もう行け進めの曲ばかりの歌を聴いていた中で、私は非常にやさしい、心に染みる歌だなあという覚えがありますよ。

《夏は来ぬ》のようによく知られた歌や、難波先生も好きだったかも分かん。好きな歌を選んで、生徒に教えたという程度ですね。もう動員して作業に出る用意をしていましたからね。入った1年のときから。

鈴木：先生、《白楽天》（『師範音楽』）というのはやられましたか。

岡嶋：いや、やっていなかったと思います。

（楽譜を見る）

岡嶋：やっていないな。

結局今言ったように、子どもも知っているような、難波先生の好きなような曲しか、もうやられなかったような気がします。

鈴木：そうしますと、『師範音楽』の教科書は、歌曲が22曲出ているのですけれども、この順番にやったというよりも、先生の…。

岡嶋：飛び飛び。

鈴木：飛び飛びにやったのですね。儀式唱歌はどうでしたか。

岡嶋：儀式唱歌も儀式唱歌としてはあまり練習をしていなかったと思うけれども、儀式唱歌は入学式のときからやるでしょ。

鈴木：はい。

岡嶋：《君が代》も歌うでしょ。それから《勅語奉答》もやったかもわからん。

鈴木：はい。

岡嶋：だからこれは教えたというよりも、現場教育だったと思います。

鈴木：その都度？

岡嶋：音楽の授業でやるのではなくて、もうこれは知りきっているだろうということ。

鈴木：行事のたびに指導というか、当たり前のように歌うということですか。

岡嶋：歌いながら覚えたぐらいでしょう。しかし、私は両親が教員だったから、こんな歌は小学生のときから知っていましたけれどね、私は。

（2004 年 4 月 5 日）

注 カッコ内は筆者による加筆。

譜例Ⅱ-2-15 《長い道》 bar. 5-8

出典 文部省『うたのほん下 教師用』1941年, 88頁。

ードコマデ イッテモ ナガイミテ
ニどこまで いっでも ながいみち

譜例Ⅱ-2-16 《国引き》 bar. 1-4

出典 文部省『うたのほん下 教師用』1941年, 64頁。

ークニコイ クニコイ
ニしまこい しまこい

快活に ♩=112

譜例Ⅱ-2-17 《さくらさくら》 bar. 5-9

出典 文部省『うたのほん下 教師用』1941年, 60頁。

サクラ サクラ ノヤマモ サトーモ ミワタス

譜例Ⅱ-2-18 《夏は来ぬ》 bar. 4-6

出典 文部省『師範音楽 本科用巻一』1943年, 34頁。

ーウノハナ ノニセフカキネニ
ニさみだれのそとやまだに
ミアチル カハベノヤドノ

譜例Ⅱ-2-19 《霜月》 bar. 1-4

出典 文部省『師範音楽 本科用巻一』1943年, 64頁。

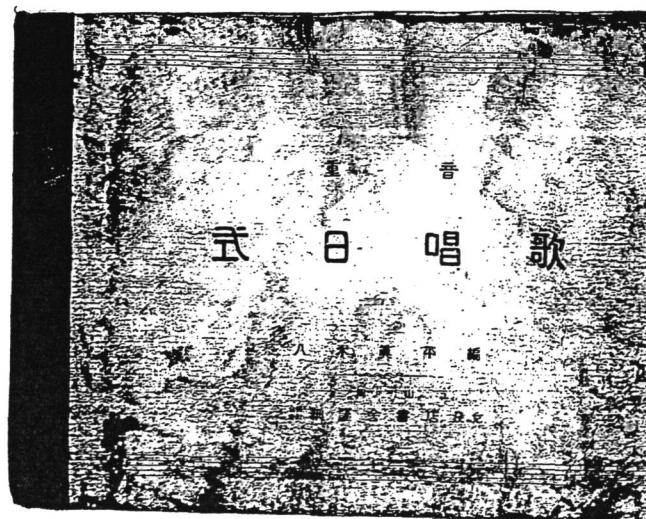
ーシモアシタノサヤケサヤニ
ニひさしあかるきひろにはニ
ミマノヘサムクカカリワタリ

静かに ♩=56

上記から、岡山師範学校における『師範音楽』の活用状況について以下の点が指摘できる。

- 1) 『師範音楽』のほかに国民学校芸能科音楽の教師用指導書が、岡山師範学校の音楽の教科書として使用された。
- 2) 『師範音楽』は、「歌曲」のみ少し取り扱ったに過ぎなかった（参考までに、岡山師範学校の1943年度本科第1学年の音楽の授業では「基本練習」「音楽理論」「日本音楽史」の項は授業で取り扱われなかった）。
- 3) 「歌曲」については、目次に沿って指導されるのではなく、音楽科教員の難波氏の判断によって、5、6曲取り上げられた程度である。

この岡嶋氏の証言は、岡嶋氏と同級生である原卯三次氏の証言ともほぼ一致する。原氏は、岡嶋氏と異なり、岡山師範学校本科入学前に岡山県師範学校本科第一部に3年間在籍している。原氏は、『師範音楽』の他に、八木真平編『重音 式日唱歌』⁵⁹（図Ⅱ-2-6）を所持しており、本科第一部入学当初、その本を使用して校歌（譜例Ⅱ-2-20）の練習をしたと回想している。八木真平は、1928（昭和3）年から1937（昭和12）年の間において、岡山県師範学校音楽科教員として勤めた人物である⁶⁰。なお、岡嶋氏は、『師範音楽』が十分活用されなかった理由として、勤労奉仕や学徒動員等のため授業時数が不足したことを挙げている（第一部第3章参照）。ちなみに、香川師範学校音楽科教員の金光氏も『師範音楽』、国民学校芸能科音楽教師用指導書を所持し、香川師範学校の音楽の授業で使用したと述べている。



図Ⅱ-2-6 八木真平編『重音 式日唱歌』細謹舎書店、1932年 表紙

出典 八木真平編『重音 式日唱歌』1932年，25-26頁

(岡山縣師範學校)

八木真平作曲

Con brio. $\text{♩} = 69$

メロディ (Vocal):

キーン ビー ノー オオ ノー タダ ナー カニ ナガ ビカ レー ナマ キョー ニー ミー
ー ー ャ イ ザ マ フ タ カ タ ビ モ ム カ ー へ マ ツ リ レ

ピアノ (Piano):

メロディ (Piano):

タムコ サキノ ニニ ハハハ ニン カリ ー トー ホー ー ク ノ イ クラ ノ
コ ノ ハ ハ ニン カリ ー トー ホー ー ク ノ イ クラ ノ

Handwritten musical score for "Kikyo" by Kikaku. The score is written on two staves. The top staff is for the vocal line, and the bottom staff is for the piano accompaniment. The key signature is one sharp (F#), and the time signature is 4/4. The vocal line includes lyrics in Japanese. The piano accompaniment features a melody in the right hand and a bass line in the left hand.

Vocal Line:

タ ー し ー オ し ノ ア ト ク ー ナ
 ゴ ン タ ン ル ヲ サ ニ ニ シ ツ ジ ツ ハ
 サ シ ャ ャ ャ ャ ャ ャ ャ ャ ャ ャ ャ ャ

Piano Accompaniment:

The piano accompaniment consists of a melody in the right hand and a bass line in the left hand. The melody is written in a simple, melodic style, and the bass line provides a harmonic foundation. The score is written in a clear, legible hand.

Score for "Korone" (Song of the Crow) by K. Tanabe. The score is in 2/4 time, key of D major (one sharp). It features a vocal line and a piano accompaniment. The vocal line includes lyrics in Japanese: フレガレンハンコイニシヤナ. The piano accompaniment has a rhythmic pattern of eighth and sixteenth notes. The score is marked with "poco rit" (rhythm) and "V" (breath mark).

まとめ

以上、文部省検定済師範学校音楽教科書の『師範音楽教本 二部用』と『標準師範学校音楽教科書』、文部省国定教科書の『師範音楽』における「歌曲」について考察を行ってきた。その結果を一覧にしたものが、表Ⅱ-2-19である。

表Ⅱ-2-19 考察結果

		文部省検定済教科書		文部省国定教科書
		『師範音楽教本 二部用』	『標準師範学校音楽教科書』	『師範音楽 本科用巻一』
発行年月 検定年月日		1932（昭和7）年7月 昭和7年8月23日 ※1931（昭和6）年版使用	1938（昭和13）年3月 昭和14年1月28日	1943（昭和18）年7月
著者、編者 発行 ページ、曲数		福井直秋 帝国書院、A5版 一 …95ページ、25曲 二 …95ページ、25曲	黒沢隆朝・小川一朗 共益商社書店、B5版 第一編…160ページ、28曲 第二編…170ページ、22曲	文部省 師範学校教科書株式会社、B5版 巻一…180ページ、22曲
音 楽 的 特 徴	作曲者	すべて西洋人（民謡含）	西洋人（民謡含）：43曲(86%) 日本人（唱歌含）：7曲(14%)	すべて日本人
	形態	斉唱：46曲(92%) 二部：2曲(4%) 三部：2曲(4%)	斉唱：17曲(34%) 二部：9曲(18%) 三部：12曲(24%) 四部：1曲(2%) 輪唱：1曲(2%) 独唱：8曲(16%) 他：2曲(4%)	斉唱：7曲(32%) 二部：7曲(32%) 三部：7曲(32%) 他：1曲(5%)
	調性	長調：48曲(96%) 短調：2曲(4%)	長調：47曲(94%) 短調：2曲(4%) 日本：1曲(2%)	長調：19曲(86%) 短調：1曲(5%) 日本：2曲(9%)
	拍子	2/2：1曲(2%)、2/4：7曲(14%)、 3/4：12曲(24%)、3/8：3曲(6%)、 4/4：19曲(38%)、4/8：1曲(2%)、 6/4：1曲(2%)、6/8：6曲(12%)	2/2：2曲(4%)、2/4：6曲(12%)、 3/4：9曲(18%)、3/8：1曲(2%)、 4/4：26曲(52%)、 6/8：6曲(12%)	2/2：1曲(5%)、2/4：4曲(18%) 3/4：2曲(9%)、 4/4：13曲(59%)、 6/8：2曲(9%)
	発想標語	イタリア語で表示	イタリア語で表示	日本語で表示
	音域	最低音：a、最高音：e2 最多：c1-d2	最低音：g、最高音：g2 最多：c1-d2	最低音：(f)、最高音：f2 最多：c1-e2、h-e2
歌 詞 分 類	作詞者	すべて日本人	すべて日本人	すべて日本人
	「国家」	7曲(14%)	12曲(24%)	13曲(59%)
	「自然」	23曲(46%)	32曲(64%)	11曲(50%)
	「勤労」	5曲(10%)	2曲(4%)	3曲(13.6%)
	「教訓」	6曲(12%)	4曲(8%)	3曲(13.6%)
	「他」	12曲(24%)	13曲(26%)	1曲(4.5%)
「歌曲」以外に 所収されている領域		「読譜及音程練習」「楽典」	「器楽」「鑑賞」「音楽理論」「音楽基礎」	「儀式唱歌」「基礎練習」「音楽理論」「日本音楽史」

注 歌詞分類：重複カウントしているため、総数は曲数より多くなる。

表Ⅱ-2-19に基づき、これまでの総括を行いたい。

- 1) 作曲者：『師範音楽教本 二部用』ではすべて西洋人であったのに対し、『師範音楽』ではすべて日本人と大きく変化している。
- 2) 形態：『師範音楽教本 二部用』では斉唱が9割を占めていたのに対し、『標準師範学校音楽教科書』では4割程度合唱が占めるようになった。『師範音楽』では、斉唱、二部合唱、三部合唱を同じ比率で取り上げている。四部合唱は含まれていない。また、『標準師範学校音楽教科書』では独唱と合唱を組み合わせたもの、『師範音楽』では交声曲等の多様な形態が含まれている。
- 3) 調性：3書とも、長調が9割近く占め、短調の使用率は低い。『標準師範学校音楽教科書』『師範音楽』では日本旋法も若干含まれている。
- 4) 拍子：3書とも、4/4が最多である。『標準師範学校音楽教科書』『師範音楽』では半数以上が4/4を用いている。
- 5) 発想標語：文部省検定済教科書の場合、イタリア語であったのに対し、『師範音楽』では日本語で表示している。
- 6) 音域：『師範音楽教本 二部用』では1オクターブ程度であったものが、『標準師範学校音楽教科書』『師範音楽』では2オクターブの曲が含まれ、音域が広がっている。
- 7) 作詞者：すべて日本人で一貫している。
- 8) 歌詞：教科書の変遷につれ、「国家」つまり、ナショナリズム、ミリタリズム的色彩の強い歌詞が確実に増加している。特に、『師範音楽』では「歌曲」の他に「儀式唱歌」が8曲掲載されている。それらを含めて考えた場合、全30曲の内、6割の歌が「国家」の分類に該当する。

ナショナリズム、ミリタリズムの傾向は、歌詞において端的に表れていた。このことは第1節で取り上げた「師範学校教授要目」等々に示された事項と重なる。また、歌詞と旋律の関係に関しても、文部省検定済教科書の時代は、西洋の作品に日本語の歌詞を付けるという安易な方法が採られていたのに対し、『師範音楽』では＜我が国＞が特に強調され、すべて日本人の手による歌曲によって占められた。したがって、戦争が激しくなるにつれ、超国家主義、ミリタリズムに関する歌曲を掲載した教科書が増加するといっていよう。

また、聞き取り調査では、1941（昭和16）年4月以降の香川県師範学校、岡山県師範学校の実態をつかむことができた。それによると、『標準師範学校音楽教科書』は1941（昭和16）年から1943（昭和18）年頃の香川県師範学校で、『師範音楽』は1943（昭和18）年以降の香川県師範学校、岡山師範学校で使用されていたことが明らかとなった。

- 1 別府愛「福井直秋の教育活動と当時の教育状況——師範学校の教育を中心に——」武蔵野音楽大学音楽教育学科編集委員会編『福井直秋著作 解題』武蔵野音楽大学音楽教育学科, 2000年, 67頁。
- 2 唐沢富太郎『教科書の歴史』創文社, 1956年, 530頁。
- 3 堀内敬三・井上武士『日本唱歌集』岩波書店, 1958年(2003年重版使用), 260-261頁。
- 4 文部省『新訂尋常小学唱歌』第一学年用～第六学年用, 大日本図書, 1932年。
- 5 木村信之が執筆をした『日本教科書大系 近代編 第二十五巻 唱歌』の中の「唱歌教科書解説」にも『新訂尋常小学唱歌』についての言及がみられる。しかし, 木村は「旧版(『尋常小学唱歌』1911-14年)の中から修身的な内容の曲が削除(かっこ内は筆者による加筆)された」と指摘するのみで, 超国家主義やミリタリズムについては触れていない。一方, 『国民学校初等科教科書』(1941-43年)については, 「軍国主義, 国家主義に徹したものである」と木村は指摘する(木村信之「唱歌教科書解説」海後宗臣編『日本教科書大系 近代編 第二十五巻 唱歌』講談社, 1965年, 654-655頁)。
その他, 坂本明は次のように述べている。「この教科書で意図された「児童への接近と国家意識の育成との融合」は, この教科書が使用された昭和8年から16年にかけて急速に変質していき, 陰にかくれていた国家意識が第3期本では表面におどり出る」(坂本明『文部省唱歌の成立と変遷——「国民教育」の視点から』国定教科書における海外認識の研究——研究報告No.41 別添解説資料, 財団法人中央教育研究所, 1992年, 18頁)。
- 6 文部省『ウタノホン上』東京書籍, 1941年。文部省『うたのほん下』東京書籍, 1941年。文部省『初等科音楽一』大日本図書, 1942年。文部省『初等科音楽二』大日本図書, 1942年。文部省『初等科音楽三』日本書籍, 1942年。文部省『初等科音楽四』大日本図書, 1942年。
- 7 文部省教育調査部『師範教育関係法令の沿革』1938年, 68頁。
- 8 同上, 135, 144-145頁。
- 9 武蔵野音楽大学音楽教育学科編集委員会編『福井直秋著作 解題』武蔵野音楽大学音楽教育学科, 2000年, 25頁, でも紹介されている。
- 10 本研究で分析対象としたのは, 福井直秋編『師範音楽教本 二部用』一・二, 帝国書院, 1931年。文部省『師範学校中学校高等女学校実業学校小学校検定済教科用図書表 自昭和七年四月至昭和八年三月』によると, 検定に合格した『師範音楽教本 二部用』は, 1932(昭和7)年7月27日訂正発行, 1932(昭和7)年8月23日検定となっている。なお, 武蔵野音楽大学音楽教育学科編集委員会編『福井直秋著作 解題』前掲書, 25頁では, 1931(昭和6年)の検定を合格していないものが紹介されている。
- 11 全50曲の調性の内訳は次の通りである。ハ長調9曲, ト長調9曲, 変ホ長調7曲, 変ロ長調7曲, ニ長調6曲, ヘ長調5曲, イ長調3曲, 変イ長調2曲, ハ短調1曲, ヘ短調1曲。
- 12 一編の「読譜及音程練習」は, ハ長調→ト長調→ヘ長調→ニ長調→変ロ長調→変ホ長調の順序(54-62頁)。二編は, ハ長調→変ロ長調→ヘ長調→ニ長調→ト長調→イ長調→ハ短調→変イ長調→ホ短調の順序(54-63頁)。ただし, 途中で既習の調性も再び登場している。なお, 福井直秋『音程教本』(共益商社書店, 1912年)の「諸調の練習」の項では, ハ長調→ト長調→ヘ長調→ニ長調→変ロ長調→イ長調→変ホ長調→ホ長調→変イ長調の順序(31-38頁)。「短音階」の項では, ハ短調→ト短調→ニ短調→イ短調→ホ短調→ロ短調→ヘ短調の順序(39-42頁)。
- 13 福井直秋『伴奏の作り方』共益商社書店, 1930年(1932年重版使用), はしがき。
- 14 福井直秋は, 『和声学』(共益商社書店, 1930年)や『伴奏の作り方』(前掲書)の伴奏付けに関する著書を出している。
- 15 唐沢, 前掲書, 325-329頁。唐沢は「Ⅶ」で, 文部省『尋常小学唱歌』第四学年用(1926年), 第五学年用(1927年), 第六学年用(1928年)の3冊の歌詞の分類を行っている。
- 16 岩井, 前掲書, 151頁。
- 17 黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』第一編・第二編, 共益商社書店, 1938年(昭和14年1月28日文部省検定済, 師範学校音楽科)。
- 18 その他, 参考曲が, 第一編に11曲, 第二編で1曲掲載されているけれども, 分析対象とはしない。
- 19 黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』第一編, 第二編, 共益商社書店, 1938年(昭和14年1月28日文部省検定済), 緒言。
- 20 1943(昭和18)年7月1日『音楽文化新聞』第53号には, 「敵国の楽譜廃棄」の記事がみられる(秋山龍英『日本の音楽百年史』第一法規出版, 1966年, 559頁)。
なお, 沖縄県女子師範学校の音楽会では, 「1942(昭和17)年ごろから三国同盟(ドイツ・イタリア・日本)以外の外国の歌は禁止になった。シューベルトの「野ばら」が多くの生徒の愛唱歌だったが, 次第に軍事色が濃くなり, 士気高揚のために軍歌を歌うことが多くなった」とのことである(ひめゆり平和祈念資料館資料委員会監修『ひめゆり平和祈念資料館 ガイドブック(展示・証言)日本語版』2004年, 17頁)。
- 21 全50曲の調性の内訳は次の通りである。ハ長調11曲, ト長調11曲, ヘ長調9曲, ニ長調6曲, ホ長調3曲, 変ホ長調3曲, 変ロ長調2曲, イ長調1曲, 変イ長調1曲, イ短調1曲, 変ホ短調1曲, 日本旋法1曲。
- 22 黒沢隆朝『図解 世界楽器大事典 普及版』雄山閣, 2005年(普及版使用), 奥付。
- 23 黒沢隆朝・小川一朗・林幸光『改訂標準女子音楽教授資料集成』共益商社書店, 第一編: 1939年・第二編: 1940年, 第三編: 1941年, 第四編: 1942年。『改訂標準女子音楽教授資料集成』は, 以下に列記する文部省検定済師範学校・高等女学校用音楽教科書の教師用指導書として発行された。黒沢隆朝・小川一朗・林幸光『改訂標準女子音楽教科書』第一編, 中等学校教科書, 1938年(1939年修正再版使用)(昭和14年3月11日文部省検定済, 師範学校・高等女学校音楽科)。第三編, 中等学校教科書, 1938年(1943年修正三版使用)(昭和18年8月3日文部省検定済, 高等女学校音楽科)。第四編,

- 共益商社書店、1938年（1939年修正再版使用）、第五編、共益商社書店、1938年（1939年修正再版使用）（昭和14年3月11日文部省検定済、師範学校・高等女学校音楽科）。
- 24 供田武嘉津『日本音楽教育史』音楽之友社、1996年、384・385頁。
- 25 黒沢・小川『標準師範学校音楽教科書』第一編、前掲書、15頁。
- 26 大江志乃夫『靖国神社』岩波書店、1984年（2005年重版使用）、133頁。なお、「春の例大祭日」は、日露戦争後の陸軍凱旋観兵式が行われた記念日に当たる4月30日、「秋の例大祭日」は、日露戦争後の海軍凱旋観艦式が行われた記念日に当たる10月23日である（131頁）。
- 27 同上、14頁。
- 28 「仮に「アラワシノツバサニ」といふ部分の二小節だけをないものとして考へる時は、一見して二部分形式の旋律であることが明瞭になる」（同上、277頁）。
- 29 黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『改訂標準女子音楽教授資料集成』第一編、共益商社書店、1939年、277頁。
- 30 同上、277頁。
- 31 黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『改訂標準女子音楽教授資料集成』第二編、共益商社書店、1940年、222頁。
- 32 新保祐司『信時潔』構想社、2005年、211頁。
- 33 黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『改訂標準女子音楽教授資料集成』第三編、共益商社書店、1941年、330頁。
- 34 黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『改訂標準女子音楽教授資料集成』第三編、共益商社書店、1941年、325頁。
- 35 『改訂標準女子音楽教授資料集成』第三編、325頁では、「三部分型式として見る方が都合がよいと思はれる。勿論二部分型式として最後の二楽段をコードと見る事も出来ないではないが、此の二部分はトニックで終止して居ないので、かかる例外を求めるより、三部分型式とした方がよいのである」と説明されている。
- 36 その他、8曲の「儀式唱歌」が掲載されているけれども、分析対象とはしない。
- 37 平井啓は、『師範音楽』について、「国定となった教科書は、ほとんどが新しい歌」と記述している（平井啓『奈良県音楽近代史——音楽教育を中心に』1995年、438頁）。その他、赤井励「オルガンと唱歌の伴奏」『原典による近代唱歌集成——誕生・変遷・伝播——論文・素引』ビクターエンタテインメント、2000年、215頁にも、『師範音楽』のピアノ伴奏についての言及が見られる。
- 38 石川謙代表『近代日本教育制度史料』第五巻、大日本雄弁会講談社、1956年、576頁。
- 39 文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943年、169頁。
- 40 佐佐木信綱（1872—1963）作詞、小山作之助（1863—1927）作曲。教育音楽講習会編『新編教育唱歌集 第五集』、1896年に掲載発表（読売新聞文化部『唱歌・童謡ものがたり』岩波書店、1999年、84・87頁）。
- 41 『尋常小学唱歌 第四学年用』1912年、に掲載された「花は桜木人は武士…」で始まる《靖国神社》とは異なり、「日の本の光に映えて…」の歌詞で始まる陸軍省・海軍省選定の曲（細淵国造作詞、帝国軍楽隊作曲）。
- 42 加藤義清（1862—1941）作詞、奥好義（1858—1933）作曲、歌詞のみが1894年、『出師軍歌』（大阪積善館発行）に掲載され、10月17日に東京・神田の井上藤吉が出版した単行本で楽譜が初めて公刊された（安田寛「軍歌の流行」『原典による近代唱歌集成——誕生・変遷・伝播——論文・素引』ビクターエンタテインメント、2000年、96頁）。
- 43 鳥居忱（1853—1917）作詞、滝廉太郎（1879—1902）作曲。東京音楽学校編『中学唱歌』1901年、に掲載。
- 44 山本文茂「芸能科音楽教材の特質——教科書・教師用指導書の分析を通して」東京芸術大学音楽教育研究室創設30周年記念論文編集委員会、浜野政雄監修『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社、1999年、293頁。
- 45 赤井励は、「儀式唱歌」の《海ゆかば》の伴奏譜（『師範音楽』20・21頁）について以下のように分析している。
《海ゆかば》の伴奏譜を見ると、「力強く」の指定どおりペダルは踏みっぱなし、同じ音をこれでもか何回も叩きだし、ひたすら澁刺として高揚した（がんばる）情熱を強調している。作曲者の信時潔はたしかに豪快なところのある人物だったようだが、《海ゆかば》の壮重な雰囲気は、ピアノ伴奏よりもオルガンで行われた単純な讃美歌調のほうが心にしみるような気がする。ラジオでは荘重な吹奏楽で聞くと、感銘が深い、
（赤井励「オルガンと唱歌の伴奏」『原典による近代唱歌集成——誕生・変遷・伝播——論文・素引』ビクターエンタテインメント、2000年、215頁）。
- 46 文部省『師範音楽 本科用』師範学校教科書、1946年（昭和21年6月27日文部省検査済）。
- 47 交声曲という言葉は『師範音楽』180頁の「附録」に次のように使用してある。「謡曲＜白楽天＞ニ取材シタ小サナ交声曲風ノ歌」『標準音楽辞典』（音楽之友社、1966年）によると、「カンタータ」と定義されている。
- 48 西野春雄校注「白楽天」『謡曲百番 新日本古典文学大系57』岩波書店、1998年、540頁。
- 49 同上、541・545頁。
廿四世観世元滋「白楽天」『白楽天 實盛 楊貴妃 玉葛 融』櫓大爪堂、1921
- 50 文部省『師範音楽 本科用巻一』師範学校教科書、1943年、180頁。
- 51 山本文茂による伴奏技法の分類に基づいて行った。それに基づくと、A「両手によるコラール風伴奏」B「両手によるリズム・バッテリー」C「左手と右手の組み合わせパターン」に分類できる（山本、前掲書、285・286頁）。
- 52 青海一海音楽。雅楽の名（西野、前掲書、544頁）。『日本音楽大事典』（平野健次・上参郷祐康・蒲生郷昭、平凡社、1989）では、「雅楽曲。唐楽。管弦用。舞は廃絶。楽曲は1876年（明治9）に選定され現行。中曲。黄鐘調。「海仙楽」「清和楽」とも。大戸清上が仁明天皇（在位833—850）の南池院行幸の際に退出音声として作曲（「竜鳴抄」「仁智要録」）。早8拍子、拍子10。」と定義されている。
- 53 文部省『師範音楽 本科用巻一』師範学校教科書、1943年、180頁。

-
- ⁵⁴ 西野，前掲書，545 頁。
- ⁵⁵ 2003（平成 15）年 10 月 1 日（水），於：金光邸（岡山県岡山市）。
- ⁵⁶ 2004（平成 16）年 4 月 5 日（月），於：岡嶋邸（岡山県備前市）。その他，2003（平成 15）年 8 月 24 日（日）に電話による聞き取りを行った。
- ⁵⁷ 2004（平成 16）年 5 月 7 日（金），於：倉敷児島天満屋 2 階喫茶室（岡山県倉敷市）。
- ⁵⁸ 合唱により伴奏を付けている。
- ⁵⁹ 八木真平編『重音 式日唱歌』細謹舎書房，1932 年。八木は，1926（大正 15）年 3 月，東京音楽学校甲種師範科を卒業（『同声会会員名簿』東京芸術大学音楽学部同声会，1999 年，48 頁）。
- ⁶⁰ 八木は，1926（大正 15）年 3 月，東京音楽学校甲種師範科を卒業（『同声会会員名簿』東京芸術大学音楽学部同声会，1999 年，48 頁）。1928（昭和 3）年から 1937（昭和 12）年にかけて，岡山県師範学校音楽科教員として勤務（岡山師範（男子）卒業生名簿作成委員会『岡山師範（男子）卒業生名簿』1982 年，10 頁）。

第3章 師範学校における発声指導

本章では、「師範学校教授要目」、師範学校音楽教科書の分析・検討ならびに聞き取り調査を通して、師範学校における発声指導の内容と実態を明らかにすることを目的とする。

師範学校における発声指導を直接の対象とする先行研究はない。しかし、児童発声の変遷については岩崎洋一が行っている。1932（昭和7）年から1940（昭和15）年頃における児童の発声指導の状況について、岩崎の研究を要約すると次の通りである¹。

- ・草川宣雄は、1932（昭和7）年に、頭声発声に対する概念を福井直秋の提唱した中声発声に近いものへと修正した。『児童発声指導の実際』（1932）の著者である水口廣も中声を支持していた。このようにこの時期は児童発声については中声発声が主流の考え方となっていた。
- ・1932（昭和7）年から「第一回児童唱歌コンクール」が開催された。弱声発声から児童本来の自然の声を見直そうとする動きが、第一回（1932年）、第二回（1933年）、第三回（1934年）と重なるにつれ、反映された。また、「第一回児童唱歌コンクール」では男子の歌声が着目された。
- ・児童発声に対する考え方の急激な変化は、教師や子どもに解釈の混乱をもたらした。

ところで、1941（昭和16）年の国民学校芸能科音楽発足に伴い、「国民学校令施行規則」（文部省令第四号）第十四条では、

発音及聴音ノ練習ヲ重ンジ自然ノ発声ニ依ル正シキ発音ヲ為サシメ且音ノ高低、強弱、音色、律動、和音等ニ対シ鋭敏ナル聴覚ノ育成ニカムベシ、

と規定された²。さらに絶対音感の育成、イロハ音名唱法の導入といった今までにない方法が実践された。このような初等教育の動向に対して、師範学校はどのような発声指導を展開していたのかについて検討していきたい。

第1節 「師範学校教授要目」等における発声指導

表Ⅱ-3-1は、「師範学校教授要目」における発声指導に関する内容を一覧にしたものである。発声指導に関することは、1910（明治43）年の「師範学校教授要目」の中に見ることができ、「基本練習」の中に「発声練習」が含まれている³。

1910（明治43）年では、第一部に限り、基本練習として「発声練習、音程練習、聴音練習、呼吸練習」の4つの練習が示されていた。しかし、1925（大正25）年では、第二部にも置かれ、「発音、音階、拍子」の練習が加わっている。1931（昭和6）年の改正でも、その位置付けは変わっていない。

第Ⅰ部第3章で述べた通り、1943（昭和18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」では、音楽の指導領域が「歌唱、聴覚訓練、器楽、指揮法、音楽理論、鑑賞、音楽史、国民学校芸能科音楽ニ関スル研究」で構成されていた⁴。「歌唱」の下に「基本練習、歌曲」が置かれ、表Ⅱ-3-2に示した通り、「読譜練習、発声練習、発音練習、合唱基礎練習」が位置付けられる。

「発声練習」は本科第3学年を除き、予科、本科ともに置かれている。予科では、第1学年で「呼吸法・発声」、第2学年で「歌唱ノ技巧ニ関スル練習（音階・強弱ノ発想等）」へと発展する。本科では、第1学年で「呼吸法・発声」、第2学年で「音階・分散和音・強弱其ノ他発想ニ関スルモノ」へと進む。

「師範学校教科教授及修練指導要目」について特筆すべき第一のこととして、本科第2学年で「分散和音」が新たに加わったことである。「(二) 合唱基礎練習」の中にも「分散和音唱」が含まれているように、「聴覚訓練」との関係性がうかがえる。第二には、「発想」に意識を置いた点である。また、「歌唱ノ技巧ニ関スル練習」（予科第2学年）と定めてあったり、「歌唱」の傘の下に「基本練習」が位置付けられたりしている。発声練習を単なる機械的な訓練として取り扱うのではなく、歌唱表現と結び付けて規定されている点も、師範学校における発声指導の前進として評価できる。

ちなみに「中学校教科教授及修練指導要目」⁵（1943）や「高等女学校教科教授及修練指導要目」⁶（1943）でも、師範学校と同じように「発声練習」が含まれていたものの、「発声練習」の内容に関する記述はされていない。

表Ⅱ-3-1 「師範学校教授要目」(1910-1942 年)における発声

年	内 容		
	第一部	第二部	
1910 M43	予備科 基本練習：発声練習，音程練習，聴音練習，呼吸練習 第1学年 基本練習：発声練習及音程練習 又時々聴音練習及呼吸練習ヲ行フヘシ 第2学年 基本練習：前学年ニ準ス 第3学年 基本練習：前学年ニ準ス 第4学年 記述なし	男生徒ノ部 第1学年 記述なし	女生徒ノ部 第1学年 記述なし 第2学年 記述なし
1925 T14	第1学年 基本練習：発声発音ノ練習，音階練習，音程練習，聴音練習，呼吸練習及拍子練習 第2学年 基本練習：前学年ニ準ス 第3学年 基本練習：前学年ニ準シ程度稍稍進ミタルモノ 第4学年 基本練習：前学年ニ準シ程度稍稍進ミタルモノ 第5学年 基本練習：前学年ニ準シ程度稍稍進ミタルモノ	男生徒ノ部 第1学年 基本練習：発声発音ノ練習，音階練習，音程練習，聴音練習，呼吸練習及拍子練習	女生徒ノ部 第1学年 基本練習：発声発音ノ練習，音階練習，音程練習，聴音練習，呼吸練習及拍子練習 第2学年 基本練習：前学年ニ準シ程度稍稍進ミタルモノ
1931 S6	発声・発音・音階・音程・聴音・呼吸・拍子等ノ基本練習ハ適宜教授スルモノトス	発声・発音・音階・音程・聴音・呼吸・拍子等ノ基本練習ハ適宜教授スルモノトス	

出典 『明治以降教育制度発達史』第五巻，1939年，pp.671-675，第七巻，1939年，pp.629-634，pp.753-756 から作成。

表Ⅱ-3-2 「師範学校教科教授及修練指導要目」(1943 年)における発声

学年	内 容
予科 第1学年	(一) 基本練習 (イ) 読譜練習 音符記号 ト音記号・ヘ音記号 音符 全音符・二分音符・四分音符・八分音符・十六音符・付点音符 休符 全休符・二分休符・四分休符・八分休符・十六休符・付点休符 音程 全音階音程ニシテ八度以内ノモノ 拍子 四分音符ヲ一拍子トシタル二拍子・三拍子・四拍子 律動 単純ナルモノ・付点音符ニテ表ハシ得ルモノヲ主トシ切分音符三連音符ヲ加フ (ロ) 発声練習 呼吸法・発声 (ハ) 発音練習 母音ヲ主トシ子音ニ及ブ (ニ) 合唱基礎練習 分散和音唱(律動ヲ加味ス) 単音抽出唱 単独ノ音程ニテ同時ニ唱歌スルモノ 三和音ノ和音合唱 幹音ヨリナル終止形合唱
第2学年	(一) 基本練習 (イ) 読譜練習 前学年ニ於ケル教授事項ニ付程度ヲ進メテ課ス 拍子 八分音符ヲ単位トスル拍子ノモノ及複合拍子ヲ加フ 音程 半音階の音程ヲ加フ (ロ) 発声練習 歌唱ノ技巧ニ関スル練習(音階・強弱ノ発想等) (ハ) 発音練習 母音・子音ノ発音 (ニ) 合唱基礎練習 前学年ニ於ケル教授事項ニ付程度ヲ進メテ練習シ派生音ヲ含メル終止形合唱ヲ加フ

本科 第1学年	(一) 基本練習 (イ) 読譜練習 音部記号 ト音記号・ヘ音記号 音程 全音階的音程ニシテ八度以内ノモノ 拍子 単純拍子・四拍子 律動 単純ナルモノ 幹音ヨリナル単純ナルモノヲ主トシ派生音ニ及ブ (ロ) 発声練習 呼吸法・発声 (ハ) 発音練習 母音ヲ主トシ子音ニ及ブ (ニ) 合唱基礎練習 分散和音唱 (律動ヲ加味ス) 単音抽出唱 和音合唱 幹音ニ依リ練習セシム
第2学年	(一) 基本練習 (イ) 読譜練習 音程 半音階的音程ヲ加フ 拍子 複合拍子ヲ加フ 律動 漸次程度ヲ進メテ切分音・三連符ヲ加フ (ロ) 発声練習 音階・分散和音・強弱其ノ他発想ニ関スルモノ (ハ) 発音練習 母音・子音ノ連結ニ及ブ (ニ) 合唱基礎練習 前学年ニ於ケル教授事項ニ付練習セシメ終止形合唱ヲ加フ
第3学年	(一) 基本練習 (イ) 読譜練習 (ロ) 合唱基礎練習 前学年ニ於ケル教授事項ニ付程度ヲ進メテ課ス

出典 文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943年，161-167頁，292-297頁から作成。

第2節 読譜・発声等を扱った教科書の変遷

1. 文部省検定済師範学校音楽教科書

表Ⅱ-3-3は、1888（明治21）年から1942（昭和17）年までの文部省検定済師範学校音楽教科書の中から、読譜・発声等を扱った教科書を一覧にしたものである。

表Ⅱ-3-3 読譜・発声等を扱った文部省検定済師範学校音楽教科書

発行年月日	検定年月日	著者・図書名・発行者
1906 (M39). 4. 5 訂正三版	M39. 4. 9	高井徳造・青木兜『音程教科書』前川一郎
1913 (T2). 7. 12 十版	T3. 3. 27	福井直秋『音程教本』共益商社書店
1915 (T4). 10. 15 訂正再版	T4. 12. 28	開成館音楽課『新撰音程教科書』西野虎吉
1916 (T5). 3. 15 訂正再版	T5. 4. 24	山田耕筰『音程視唱教本』三木佐助
1917 (T6). 3. 5 訂正38版	T6. 3. 8	福井直秋『音程教本』共益商社書店
1918 (T7). 1. 26 訂正再版	T7. 1. 31	大和田愛羅『唱歌基本練習教科書』高井徳造
1924 (T13). 6. 25 訂正再版	T13. 7. 17	音楽研究会『標準音程教本』三木佐助
1925 (T14). 6. 20 訂正再版	T14. 6. 26	山本正夫『新制音程教本』三沢朝一
1926 (T15). 1. 23 再訂再版	T15. 2. 1	大和田愛羅『唱歌基本練習教科書』再訂, 高井徳造
1928 (S3). 2. 28 訂正再版	S3. 4. 5	小川一朗『音楽基礎教本』福居鎌一郎
1929 (S4). 9. 25 三訂	S5. 5. 16	大和田愛羅『唱歌基本練習教科書参訂』高井徳造
1929 (S4). 4. 5	S5. 9. 18	下総皖一『読譜練習教科書』共益商社書店
1930 (S5). 4. 15	S6. 1. 31	楽書刊行協会『新編音程教科書』共益商社書店
1932 (S8). 1. 25 修正再版	S8. 2. 6	池尻景順『複音練習教科書』共益商社書店
1932 (S8). 2. 8 修正再版	S8. 3. 1	水口廣『中等発声練習教本』共益商社書店
1934 (S9). 7. 10 訂正再版	S9. 7. 20	三木佐助『コールユーブンゲン』三木佐助
1936 (S11). 2. 28 訂正再版	S11. 3. 6	大和田愛羅『唱歌教本読譜練習と音程』林甲子太郎
1938 (S13). 2. 14 訂正再版	S13. 3. 2	弘田龍太郎, 林松木『唱歌基礎練習書』岩本景次

出典 文部省『検定済教科用図書表』から作成。

注 横線で実線の部分は、「師範学校教授要目」の改定を意味する。本研究対象時期は二重線以降。

別府愛が指摘しているように福井直秋の『音程教本』は、多くの師範学校、高等女学校において使用された教科書である⁷。『福井直秋伝』(1969)には「これは、その後、4回の改訂を加えて、昭和16年、太平洋戦争が始まり、音楽教育が、戦いの中に消失してしまうまで、876版、876,000冊という驚異的部数が出版されたのである」と記されている⁸。『音程教本』には、ハ長調の2度音程から8度音程までの視唱譜例の他、他の調の視唱譜例が掲載されている。

1934（昭和9）年には大阪開成館発行の『コールユーブンゲン』⁹（図Ⅱ-3-1）が文部省の検定に合格している。これは『コールユーブンゲン』巻一の練習曲から抜粋して編纂された教科書である。

しかし、1910（明治43）年度、文部省『師範学校中学校高等女学校使用教科図書表』には、東京音楽新報社の『コールユーブンゲン』が掲載されている¹⁰。当然のことながらこれは、検定済音楽教科書ではない。この『コールユーブンゲン』は1905（明治38）年2月10日発行で、大阪府女子師範学校、静岡県師範学校、福島県師範学校の3校で使用されている。

ところで、『小学校教員養成課程教科専門「音楽」におけるソルフェージュの学習方法の現代化』（1987）の中には、『コールユーブンゲン』の日本における音楽教育への導入の経緯等が明らかにされている¹¹。そこから本研究に関係する部分を要約すると次の通りである。

- 1) 東京芸術大学附属図書館に保管されている出納簿には、1903（明治 36）年 4 月 1 日に、『コールユーブンゲン』（第 1 巻、ドイツ語、ミュンヘンで印刷）17 冊が、横浜の楽器商を通じて購入された記録がある。
- 2) 日本に『コールユーブンゲン』を導入したのは、アウグスト・ユンケル（1897-98 年の間に来日、東京音楽学校で声楽、和声学、作曲学を指導）である可能性が強い。
- 3) 1925（大正 14）年に信時潔によって邦訳がなされるに至り、『コールユーブンゲン』の普及は加速度的に進行した。

上記 1) に基づいて考えると、原書の『コールユーブンゲン』が日本へ導入された 2 年後の 1905（明治 38）年には、師範学校の教科書として用いられたということになる。実際に、先述の福井直秋は、1903（明治 36）年頃に富山県師範学校へ赴任した際に、『コールユーブンゲン』を指導している¹²。

上記 3) については、京都府師範学校を一例に挙げて考えてみたい。『京都府師範学校沿革史』（1938）には、教科用図書が一覧になっている¹³。一覧になっているのは、1903（明治 36）年度、1912（明治 45）年度、1920（大正 9）年度、1925（大正 14）年度、1931（昭和 6）年度、1935（昭和 10）年度である。その中から『コールユーブンゲン』が掲載されている箇所を以下に抜粋する（下線は筆者による）。

1925（大正 14）年度 『コールユーブンゲン』

1931（昭和 6）年度 三木佐助『コールユーブンゲン』

1935（昭和 10）年度 大阪開成館『コールユーブンゲン』抜粋

このように京都府師範学校では、1925（大正 14）年以降、『コールユーブンゲン』を音楽教科書として用いていた。下線を付した 1935（昭和 10）年度のものは、「抜粋」「大阪開成館」と記されて、時期としても一致するので、表Ⅱ-3-3 に掲げてある検定済音楽教科書に間違いはない。

1931（昭和 6）年度のものは、大阪開成館の社長である「三木佐助」とある。この時期、大阪開成館からは、次の 2 冊が出ているのでどちらかが使用されたと考えられる。2 冊とも検定は受けていない。

・信時潔訳『コールユーブンゲン（一）の全訳』大阪開成館、1925（大正 14）年。

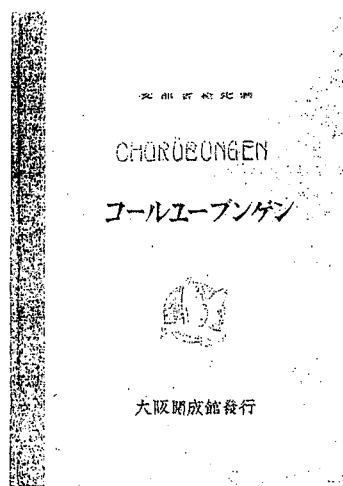
・生徒用抜粋『コールユーブンゲン』大阪開成館、1924（大正 13）年。

なお、奥付の記載事項から推察すると、1924（大正13）年発行の生徒用抜粋『コールユーブンゲン』が、1934（昭和9）年に検定に合格し、文部省検定済、師範学校・中学校・高等女学校音楽科用『コールユーブンゲン』が誕生したと考えられる。

その他、大阪開成館以外からも『コールユーブンゲン』は発行されていた¹⁴。また、共益商社書店の黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』（1938）のように、巻末に「附録」として、「コールユーブンゲン」が掲載されている場合もあった¹⁵。

このように、『コールユーブンゲン』は、文部省の検定済を受ける前から、師範学校音楽教科書として普及していたことが分かる。

発声に関する教科書は、水口廣『中等発声練習教本』（1932）の1種類のみである。水口は、沼津女子小学校訓導の経験があり、岩崎の研究の中でも児童発声における中声発声の支持者として紹介されている¹⁶。緒言では「本書所載の練習曲は何れも編著者多年の実地経験に基き、興味深く最も効果に富んだ曲のみを採つて配列した」と記されている。岩崎によると、水口は、昭和の初期頃、熊本県の天草において中声発声の講習を行っている¹⁷。



図Ⅱ-3-1 『コールユーブンゲン』大阪開成館，1934年 表紙

2. 文部省『師範音楽 本科用巻一』(1943)における「発声練習」

表Ⅱ-3-4に示した通り、「発声練習」は、1943(昭和18)年の『師範音楽 本科用巻一』(以下、『師範音楽』と略記)において「基本練習」の項に置かれる。

表Ⅱ-3-4 「師範学校教科教授及修練指導要目」と『師範音楽 本科用巻一』

「師範学校教科教授及修練指導要目」(1943) 本科第1学年			『師範音楽 本科用巻一』(1943)					
項目		内容	該当	頁	項目	内容		
基本練習	発声練習	・呼吸法 ・発声	△ 一切解説はない	114	基本練習	発声練習	10曲の譜例すべてC	
	発音練習	・母音ヲ主トシテ子音ニ及ブ	◎	115		音程練習	「三度音程」4曲 「四度音程」4曲 「五度音程」3曲 「六度音程」2曲 「七度音程」2曲 「八度音程」1曲 すべてC	
	読譜練習	・音部記号 ト音記号, ヘ音記号	○ ヘ音記号なし					◎
		・音程 全音階的音程ニシテ八度以内ノモノ	◎					
		・拍子 単純拍子, 四拍子	◎					
		・律動 単純ナルモノ	◎					
		・幹音ヨリナル単純ナルモノヲ主トシ派生音ニ及ブ	○ 派生音なし					
	合唱基礎練習	・分散和音唱(律動ヲ加味ス)	△ なし	117		二部合唱	13曲(C:4曲→G:1曲→F:1曲→a-m:1曲→e-m:1曲→d-m:1曲→h-m:2曲→B:1曲→g-m:1曲)	
		・単音抽出唱	△ なし					
		・和音合唱(幹音ニ依リ練習セシム)	◎					
				122	三部合唱	2曲(C:1曲→a-m:1曲)		

注 該当の欄: ◎=該当する, ○=一部該当する, △=該当なし。

譜例Ⅱ-3-1に示したように114ページに10の譜例が掲載されている。この発声練習には、以下の特徴がみられる。

- 1) 「師範学校教科教授及修練指導要目」では、「発声練習」の項の中で、「呼吸法・発声」を扱うように規定されている。しかし、『師範音楽』は言語による説明や写真等は加えられていないため、呼吸法の方法や発声の方法については定かでない。
- 2) 10の譜例が掲載されている。注意として「適宜移調シ、又(レ、リ、ロ、ル、ア、エ、イ、オ、ウ)ニテモ練習セヨ」との指示が付記され、母音練習の他、ラ行でも行うようになっている。これは「師範学校教科教授及修練指導要目」に規定されている内容である。

- 3) 音域について見ると、1 番が 1 度、2 番が 2 度…10 番が 8 度となり、音域の拡張を図った配列が行われている。
- 4) 強弱記号は一切なく、奏法に関する記号として 3 番にかっこ書きの「ブレス」、7、8 番に「アクセント」が記されているのみである。
- 5) 4 番以外の残りの 9 曲は、開始音、終止音が c1 である。福井の主張する中声の中部か高い方の音から始まる順次下行音階で構成された曲¹⁸⁾は、含まれていない。

譜例Ⅱ-3-1 『師範音楽 本科用巻一』における発声練習 (114 頁)

基本練習
発声練習

1  注意 適宜移調シ、又(レリ、ロ、ル、ア、エ、イ、ホウ)ニテモ練習セヨ。以下同ジ
ラ ラー

2 

3 

4 

5 

6 

7 

8 

9 

10 

第3節 国民学校教師用指導書における「発声練習」

本節では、文部省著作兼発行の国民学校初等科音楽教科書のための教師用指導書（以下、国民学校教師用指導書、と略記）における発声指導の内容を検討する。国民学校教師用指導書を分析対象とする理由は、『師範音楽 本科用巻一』の中で発声指導に関する記述が乏しかったからである。第2章でも述べた通り、国民学校教師用指導書は、師範学校の音楽の授業で使用された。また、卒業後、国民学校の教員となる師範学校の生徒にとって、国民学校教師用指導書は熟知していなければならない内容であったと思われる。

国民学校教師用指導書を分析した先行研究としては、近藤幹雄¹⁹ (1983)、宮瀬重美²⁰ (1984)、山本文茂²¹ (1999)、菅道子²² (2004) が挙げられる。しかし、国民学校教師用指導書における発声指導を明らかにした先行研究はない。岩崎洋一²³ (1981) や山本が国民学校教師用指導書における発声指導の在り方について言及しているものの、各学年の内容については紹介されていない。

国民学校教師用指導書の書籍データは以下に列举する。

文部省『ウタノホン上 教師用』日本書籍、1941（昭和16）年6月10日発行。

文部省『うたのほん下 教師用』東京書籍、1941（昭和16）年6月10日発行。

文部省『初等科音楽一 教師用』日本書籍、1942（昭和17）年4月30日発行。

文部省『初等科音楽二 教師用』日本書籍、1942（昭和17）年4月30日発行。

文部省『初等科音楽三 教師用』東京書籍、1943（昭和18）年5月15日発行。

文部省『初等科音楽四 教師用』東京書籍、1943（昭和18）年5月15日発行。

国民学校教師用指導書の中で発声に関する部分は、「歌唱指導」の中の「歌ひ方に就いて」と「基礎練習」の中の「発声発音練習」の項に記載されている。

『ウタノホン上 教師用』には、発声について以下のように定義されている²⁴。

自然の発声とは無理の無い、自然の話し声を基調とした歌声であつて、唱歌を歌ふ際、音楽的表現を自由になし得る声である。即ち特種な所謂声色を持たず、無理のない、自然の声そのままを土台として、之に音楽的な表現力を加へて行けばよいのである。

岩崎は、国民学校教師用指導書について「従来の低音から歌い始めるのではなく、比較的高い音から歌い始め、順次低音へ下る方法が多くみられるようになったことは、児童の発声に対する認識が深まってきたとみてよいだろう」と評価している²⁵。しかし、前述の通り、岩崎は、国民学校教師用指導書の各学年の内容にまで踏み込ん

でない。そこで本節では、以下の視点に基づいて、国民学校教師用指導書の教材分析を行う。

- 1) 大正期以来行われてきた児童発声の研究の成果が反映されているか。
- 2) 国民学校教師用指導書が、国民学校教員に求めているものは何か。






1. 大正期以来行われてきた児童発声の研究の成果との関係

ここでは以下の2点に着目して分析していきたい。


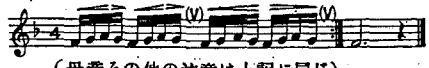



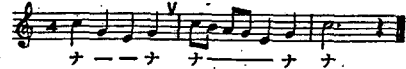
- ・ 中声発声が採られていたか（国民学校教師用指導書に掲載されている譜例の傾向分析から）
- ・ 弱声発声か強声発声のどちらが採られていたか（国民学校教師用指導書の記述から）

譜例Ⅱ-3-2は、国民学校教師用指導書に掲載されている譜例全32曲を一覧にしたものである。

譜例Ⅱ-3-2 国民学校教師用指導書掲載の「発声練習」譜例

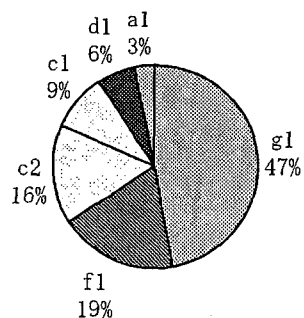
学年	練習 譜 例	
2 年	<p>①歌唱 発音練習</p>  <p>タ タ タ タ タ (テ・トでも練習する) パ パ パ パ パ (ピ・ブ・ベ・ボでも練習する) バ バ バ バ バ (ビ・フ・フェ・フォでも練習する) ダ ダ ダ ダ ダ (デ・ドでも練習する)</p>	<p>②基礎 呼吸練習</p>  <p>ハ ア タ タ タ タ</p> <p>③基礎 音域を広げる練習</p>  <p>ア ア ア ア ア エ エ エ エ エ イ イ イ イ イ オ オ オ オ オ ウ ウ ウ ウ ウ</p>
3 年	<p>④歌唱 発音の練習</p>  <p>パ パ パ パ パ バ バ バ バ バ ダ ダ ダ ダ ダ</p>	<p>⑤歌唱 発音の練習</p>  <p>パ パ パ パ パ バ バ バ バ バ ダ ダ ダ ダ ダ</p>

<p>4 年</p>	<p>⑥歌唱 呼吸</p>  <p>アー (エ、イ、オ、ウでも練習する) ハー (ヘ、ヒ、ホ、フでも練習する)</p>  <p>(母音は上記のものと同じ)</p>  <p>(母音は上記のものと同じ)</p>  <p>(母音は上記のものと同じ)</p> <p>⑧歌唱 共鳴について</p>  <p>マ マ マ マ マー メ メ メ メ メー メ メ メ メ メー</p>  <p>モ モ モ モ モー モ モー モー モー モー モー モー</p>	<p>⑦歌唱 音域の拡張について</p>     
<p>学年</p>	<p>練習譜例</p>	
<p>5 年</p>	<p>⑨歌唱 呼吸</p> <p>ゆつり</p>  <p>アー アー アー アー アー (エ、イ、オ、ウでも練習する) ハー ハー ハー ハー ハー (ヘ、ヒ、ホ、フでも練習する)</p> <p>呼吸をつづける練習として、次のやうなものもよい。</p>  <p>切る場合(スタッカート)と滑らかにする場合(レガート)とを練習する。</p>  <p>⑪歌唱 共鳴について</p>  <p>ネ ネ ネ ネ ネ ネ ネー ネー ネー ネー ネー ネー ネー ネー</p> <p>(ナ、ニ等でも練習する)</p>  <p>ノ ノ ノ ノ ノー ノー ノー</p> <p>(ナ、ヌ等でも練習する)</p>	<p>⑩歌唱 音域の拡張</p>   

<p>6 年</p>	<p>⑫歌唱 呼吸 (呼吸と相俟つて發想法の練習にもなる)  (始めは早く拍子を取り、段々ゆっくりにする。) (エ、イ、オ、ウと母音をかへる。)</p> <p>(歌詞の技巧と相俟つて呼吸の練習にもなる)  (母音その他の注意は上記に同じ)</p> <p>⑬歌唱 音域の拡張 </p>	<p>⑬歌唱 共鳴について  (マ、メでも練習する)</p> <p> (モ、ムでも練習する)</p> <p> (母音 子音をかへて練習する)</p>
------------	--	--

出典 国民学校教師用指導書から作成。

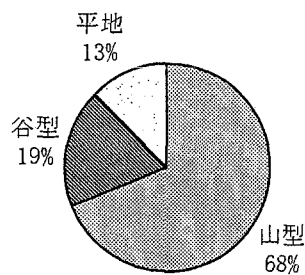
図Ⅱ-3-2は、全32曲の開始音に着目して分類した結果である(ただし、全32曲とも開始音と終止音は一致している)。



図Ⅱ-3-2 国民学校教師用指導書における開始音

旋律線については、以下の基準に基づいて<山型><谷型><平地型>の3種類に分類する。その結果を図Ⅱ-3-3に示す。

- ・<山型> …上行+下行
- ・<谷型> …下行+上行
- ・<平地型>…音高の変化なし



図Ⅱ-3-3 国民学校教師用指導書における旋律線

岩崎が指摘しているように、福井の中声発声は「中声の中部か寧ろ高い音から順次下降」²⁶という特徴が見られる（譜例Ⅱ-3-3）。国民学校教師用指導書では、g1音の開始音が過半数を占めているものの、旋律線としては最初に上行する＜山型＞が7割近くを占める。このように、開始音に関しては、大正期以来行われてきた児童発声の研究の成果との共通点がみられる。

譜例Ⅱ-3-3 福井の中声発声

出典 福井直秋『唱歌の歌ひ方と教へ方』共益商社書店、1924年、108頁。



次に、弱声発声か強声発声のどちらが採られていたかについて検討する。表Ⅱ-3-5は、国民学校教師用指導書の中から「弱声発声」「強声発声」に関係する部分を抜粋して作成したものである。1学年の下線部で示したところで顕著なように、国民学校教師用指導書は「弱声発声」を目指していたわけではない。かといって「強声発声」でもない。あくまでも「自然」な発声を理想としている。

表Ⅱ-3-5 国民学校教師用指導書における「弱声発声」「強声発声」に関連する記述

学年	項目	国民学校教師用指導書における「弱声発声」「強声発声」に関連する記述
1	歌唱	
	姿勢	身体のだこかに不自然な力を入れたり、又は咽喉をつめて顎に青筋を張らせるやうなことは特によろしくない。
	呼吸発想	肩を上下したり、胸に無理な力を入れたりすることは避けなければならない。 唱歌を歌ふ場合のみに発声に注意するのではなく、日常の生活に於ける発声に注意して、不自然な叫び声の如きは、常に避けさせるやうにしなければならない。
	基礎	発声については叫声にならぬやうに、呼吸が乱暴にならぬやうに留意して指導すればよい。 <u>弱い声</u> が必ずしもよい声ではない。自然に児童が歌ひ得る位の声でよいのである。

3	歌唱	姿勢 音域の拡張	身体のどこかに不自然な力を入れたり、または咽喉をつめて顎に青筋を張り、渋面をつくるやうなことは特によろしくない。 低い声を出す場合に無理に咽喉を押しつけて出すことのないやうに注意すべきである。
5	歌唱	音域の拡張	第三学年、第四学年頃から声を無理に使つて来た場合には、第五学年頃になると声が嘎れて来るし、叫び声の弊も現れて来るから、特に男児に於いては十分注意することが肝要である。 発声器官を押へたり、力を入れすぎたりすると高い方が出なくなる。また胸声に力を入れすぎると上の方が出なくなるから、これらの点によく注意しなければならない。

出典 文部省『ウタノホン上 教師用』1941年、文部省『初等科音楽一 教師用』1942年、文部省『初等科音楽三 教師用』1943年。

注 下線、ゴシック体は筆者による。

なお、北村久雄は『新音楽教育の研究』（1934）の中で次のように述べている²⁷。

「自然的な発声」と云うのは児童の「本能的な発声」といふことではない。低学年児童の発声には叫び易い本能的な傾向がある。又集団的に歌ふ場合に、その調子が段々高くなつて行くと云ふ本能的な傾きもある。併し私の云ふ「自然的発声」と云ふのは斯うした本能的な発声を指すのではない。

然らばどういふ意義であるかと云ふに、それは児童らしい素朴な率直な自然的な発声のことである。余り抽象的でまづいが、今少し具体的に云つて見ると、児童らしい発声であつて、而も不自然な感じを与へず、叫ぶ様な感じを与へない発声である。

北村は国民学校芸能科音楽教科書の編纂委員²⁸ではない。しかし、表Ⅱ-3-5の国民学校教師用指導書と北村の記述は共通する部分が多く、叫び声については否定している。

では、＜自然な発声＞を習得するためには、どのような方法が採られたのだろうか。ここでは「声の共鳴」に着目して考察を進めたい。表Ⅱ-3-6は「声の共鳴」の指導段階をまとめたものである。

表Ⅱ-3-6 「声の共鳴」指導段階

年	「国民学校教師用指導書」における「声の共鳴」の部分の要点
1	・頭部共鳴、胸部共鳴または両者の中間的な声を自由に使う。声区についても余り極端に考えすぎない方がよい。 ・声区の境目が判然と分かれるような不自然な発声は、教師の正しい範唱によって正しく指導。
2	記述なし
3	上記に同じ
4	・口腔、鼻腔、咽頭腔、喉頭腔等を十分活用。 ・高い共鳴を出すための練習としては、鼻音を伴った練習。 ・低い共鳴を出すための練習としては、後母音で練習。 ・声区の境界が判然と分かれるようなことがないように練習。
5	・高い共鳴を出すための練習としては、前母音で練習。 ・低い共鳴を出すための練習としては、後母音で練習。 ・なるべく頭部共鳴を低い声まで及ぼすように、声区の境界がわからないように練習。
6	・生理的に声のつやが失われて無味乾燥な声になり易いので、よく共鳴した柔らかい表現力のある声で歌うべき。 ・高い共鳴を出す練習、低い共鳴を出す練習。 ・頭部共鳴、胸部共鳴の利用により、声区の対立をさける。

出典 国民学校教師用指導書から作成。

注 ゴシック体は筆者による。

第1学年から「頭部共鳴」「胸部共鳴」の用語が登場している。それらについて国民学校教師用指導書では次のように定義されている²⁹。

頭部共鳴…頭の方へもっともよく響いているように聞こえる場合

胸部共鳴…胸に一番よく共鳴しているように聞こえる場合

不自然な発声をしている子どもに対しては、教師範唱が提唱されている。しかしながら共鳴を習得させる具体的な方法については、「声を自由に使う」という記述に留まり、具体的な方法は述べられていない。

第4学年になると、共鳴習得のための具体的な練習方法が譜例を加えて提示されている（譜例Ⅱ-3-2⑧）。ここでは高い共鳴を出すためには鼻音、低い共鳴を出すためには後母音で練習するのが有効とされている。

第5、6学年になると、頭部共鳴を低音でも行えるよう練習が組まれている（譜例Ⅱ-3-2⑪⑬）。例えば、⑬の一番下の譜例は、「頭部共鳴」と「胸部共鳴」の「対立」を避けるための練習である。音域は短6度、高音域から始まり下行し上行するW型の旋律である。1小節目の出だしc2からg1に変わる完全4度の間に、「声区変換点」³⁰が含まれている。つまり、地声と裏声の切り替え（「声区変換」）が必要とされ、「声区変換」を自然に行う技術が求められている。高音域では「頭部共鳴」を用いて歌うことができて、中音域では急に地声に変わったり、場合によっては怒鳴ってしまったたりすることが予想される。したがって、高音域から始まる譜例を使用し訓練すれば、子どもたちは頭部共鳴の方法を中音域や低音域に適用しながら発声することが可能となる。

さらに国民学校教師用指導書には「弱声で試み、次第に強さを増すようにする」³¹と記されている。裏声に近い「弱声」を用いることによって、叫声に陥ることを防ぐことができる。「強さを増す」という用語については、鼻腔共鳴などの響きを加えるということを意図していると考えられる。したがって、発声の方法としては、共鳴、とりわけ頭部共鳴を重視した発声指導が展開されていたことが明らかである。なお、このような高音域から始め、弱声で下行して歌わせる方法は、大正期に草川や福井が主張した発声法の流れを受けていると考えられる。

2. 国民学校教師用指導書が求める教師の技術

表Ⅱ-3-7は、国民学校教師用指導書の中から教師の技術に関する記述を抜粋したものである。参考までに各学年の子どもの実態についても併記した。

表Ⅱ-3-7 国民学校教師用指導書が求める教師の技術

年	国民学校教師用指導書が求める教師の技術	国民学校教師用指導書が捉える子どもの実態
1	児童各個の声の状態を十分研究し、観察する必要がある。それ故に、一つの教材を斉唱させて置くだけでは、十分に発声の指導が出来ない。児童の個々の状態に常に注意して、之を適当に指導して行くことが肝要である。	学校といふ団体の生活に入つたばかりであつて、心身の発育状態も極めて不揃ひである。各児童の声の性質も、声域も、又はその声量も一様ではない。
2	之等の技術は、教師の正しい範唱に期待するところが大きい。	幼い感じの声で、一番美しい声の出せる時。
3	声区の境界が判然と分れるやうな不自然な発声は、教師の正しい範唱によつて正しく指導するのがよい。要するに、理論的な説明を行ふよりも、教師の正しい範唱によつて指	心身も漸く発育して声もよく出るやうになつて来てゐる

	導することが適切である。 これ等の技術は、教師の正しい <u>範唱</u> と指導によつて、始めてその効果が期待できるのである。	
4		第四学年から第五学年にかけては、児童の音声が一番美しくなる時であるから、これを十分に伸ばすべきである。この学年頃の児童の歌唱は、純真な美しい感じを与えるが、特に男児の合唱の声の美しさはここに最も発揮される。
5		歌い方の声の使ひ方、歌唱の技巧一の最高を行くべき学年である。児童の声の美しさ、量、音域等、声そのものの持つ立派さ、児童としての歌唱技巧を十分に修練できる学年であるから、この学年までの聴覚訓練によつて得た耳の力と相俟つて、立派に歌へるやうに声の訓練を怠つてはならない。
6		声が子供らしい純な美しさがだんだん減じてくる。

出典 国民学校教師用指導書から作成。

注 下線は筆者による。

「範唱」という用語が第2学年、第3学年で見られるように、教師の範唱が発声指導の一つの方法として奨励されている。範唱については、国民学校教師用指導書の「指導の方法に就いて」の項で以下のように説明されている³²。

巧妙なる範唱と範奏とは、音楽指導の生命である。指導者は、常に技術の修養に志して之を修得練磨しなければならない。しかし、一方に於ては、先づ範唱と範奏とを正確にするといふことが根本的に必要である。巧妙なる範唱及び範奏といふことは、指導者個々の素質にもより、又その技術を修得することは一朝一夕になし得ることでは無い。しかし、正確なる範唱及び範奏をするといふことは指導者の心掛によつて容易になし得ることである。指導者は、教材の形式と内容とを十分に研究して、先づ正確なる範唱と範奏とが出来ようやうに心掛けなければならない。

ところで、教科書の編集委員の一人である井上武士は、「良い声」の条件として、「美しい声」「自由な声」「発音の明瞭な声」の3点を挙げている³³。中でも「美しい声」を指導するためには、「教師に声の自然な美しさに対する批判力がなければならない」と井上は述べ、「美しさ」に対する批判力を持つために次の2点を紹介している³⁴。

- ・教師自身が音楽的の教養を高めること
- ・児童の様々な種類の声を実際に聞くこと

先ほど引用した「巧妙なる範唱と範奏とは、音楽指導の生命である」に端的に表れているように、全教科を担当する国民学校教師であっても、音楽的な能力を修養することが望まれていたのである。このようなことから1943（昭和18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」における「発声練習」の規定が、詳細になったと考えられる。

第4節 聞き取り調査から明らかになった発声指導の実態

本節では、香川師範学校音楽科教員の金光武義氏³⁵（1941年4月－44年12月在職）と卒業生の故田山清美氏³⁶（1937年4月－42年3月在籍）の証言を基に発声指導の実態に迫りたい。

1. 香川県師範学校音楽科教員、金光武義氏による発声指導

金光氏によれば、授業の導入段階の5分程度、「(1)音階練習→(2)分散和音唱→(3)音程練習→(4)母音練習」(譜例Ⅱ-3-4)を実施していたとのことである。『師範音楽』の「発声練習」が使用されたかどうかは定かではない。唱法に関しては、「母音唱、階名唱、音名唱が用いられた」と金光氏は述べている。ところでこれらの方法については井上武士『国民学校芸能科 音楽精義』³⁷（1940）の中に見られる。そこで金光氏の発声練習と『国民学校芸能科 音楽精義』の基礎練習を比較した（表Ⅱ-3-8）。

譜例Ⅱ-3-4 金光武義氏の発声練習

(1) 音階練習

(2) 分散和音唱

(3) 音程練習

(4) 母音練習

アエイオウ ウオアエ イエアオウ ウオアエ

表Ⅱ-3-8 井上武士「基礎練習の種目と其の実際」『国民学校芸能科 音楽精義』（1940）

注 下線は金光武義氏の発声練習に含まれるもの。

イ 声音に関する基礎練習	(イ) 呼吸練習 (ロ) 発声練習 (ハ) 発音練習
ロ 音高に関する基礎練習	(イ) 音名譜練習 (ロ) 音名唱練習 (ハ) 音高記憶練習 <u>(ニ) 音程練習</u> <u>(ホ) 音階練習</u>
ハ 律動に関する基礎練習	(イ) リズム練習 (ロ) 拍子練習
ニ 和音に関する基礎練習	(イ) 和音識別練習 (ロ) 単音抽出唱練習 <u>(ハ) 分散和音唱練習</u> (ニ) 和音合唱練習
ホ 聴覚に関する基礎練習	(イ) 音高聴音練習 (ロ) 強弱聴音練習 (ハ) 音色聴音練習 (ニ) 律動聴音練習 (ホ) 和音聴音練習

金光氏の記憶にある発声練習の中で、「①音階練習」「②分散和音唱」「③音程練習」は『国民学校芸能科 音楽精義』にも含まれている。しかし、「④母音練習」は『国民学校芸能科 音楽精義』に含まれていない。これは「イ

（ハ）発音練習」と内容が相当しているので、項目として挙がってこなかったと思われる。そこで譜例Ⅱ-3-4の練習を『国民学校芸能科 音楽精義』の視点から検討したい。

（１） 「音階練習」

「音階練習」は、『国民学校芸能科 音楽精義』では「音高に関する基礎練習」の中に含まれている。そこには「長音階や短音階を階名とか、音名とか、或いは特別な発音で練習する」³⁸と記されている。ここに出てくる「特別の発音」の中に母音唱が含まれていると考えられる。実際、金光氏も「音階練習に関しては母音唱で、半音ずつ音を上げて行うことが多かった」と述べている。

なお、音階に関しては『師範音楽』の「音楽理論」の項目で10ページにわたって説明されている。そこでは、「全音階（七音音階）」の他、「五音音階」「半音階」「日本音階」についてまで言及されている³⁹。しかしながら、『国民学校芸能科 音楽精義』で取り上げられている音階は「長音階」「短音階」に留まっている。また、金光氏の発声練習（譜例Ⅱ-3-4（1））では「長音階」しか例に挙がってこない。以上のことから、音楽理論の分野では多様な音階に対する理解が認識されつつあったものの、発声練習の分野では「全音階（七音音階）」の練習に留まっていたことが推察される。

（２） 「分散和音唱」

「分散和音唱」は、『国民学校芸能科 音楽精義』では「和音に関する基礎練習」の中に含まれている。そこには「和音を構成する各音を分散和音的に歌ふ練習で之は音程観念の養成の上にも頗る重大な関係のあるものである」⁴⁰と記されている。現在では用いられない「音程観念」という語が登場する。「音程観念」は、現在では「音程感覚」に該当する。したがって、「分散和音唱」は、「音程感覚」養成のために行っていたといえる。唱法については、「ハホト、ハヘイ、ロニト」などの音名唱が採られ、絶対音感の育成を図っていたと考えられる。金光氏も「特に移調することなく、音名唱で行った」と述べている。

なお、国民学校教師用指導書の中で、学年ごとに聴音練習の年間計画が系統的に立てられていたように⁴¹、和音訓練は国民学校でも非常に重要視された。譜例Ⅱ-3-4（2）の練習は国民学校第1学年の内容と基本的に同じである。当然のことながら、当時の師範学校の生徒は「芸能科音楽」がまだ実施されていない間に初等教育を受けた。そのために和音訓練は生徒にとって初めての経験であり、師範学校においてもⅠ、Ⅳ、Ⅴを中心とした主要三和音を使用して初歩的な練習が実施されていたのである（詳細は第6章において後述）。

（３） 「音程練習」

「音程練習」は、『国民学校芸能科 音楽精義』では「音高に関する基礎練習」の中に含まれている。そこには「特に或系統案の中にある音程を音名なり、階名なり又は特別な音で練習し、音程観念を養成する」⁴²と記されている。金光氏は以下のように語っている。

金光：あとソルフェージュ的なものとしては、これを使わせたどうかは定かではないのですけれども、学生用の『コールユーブンゲン』というのがあったのですよ。非常に簡易化したものですね。今でもあるのかもしれませんが。だから増課等ではそれを使ったのかなあと思うのですけれども、ちょっと分かりません。はっきり確信がないのですけれども。

鈴木：先生この前お借りした、『師範音楽』（1943）前の時代の師範教科書2冊（黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』1938年）、あれの巻末に「コールユーブンゲン」が登場しているのですけれども、あれなんか活用されたのですか。

金光：それはやったのだらうと思いますね。ありましたかね、あそこに。

鈴木：はい。

金光：それで譜読みが、階名唱「ドレミ…」と、「ドレミ」で歌えば、これはちゃんと音程感が付いているのですね。こういうのを階名で歌ったり、母音で歌ったりしましたよね。ところがそれを音名の「ニハニホ、ハニホヘト…」であつたら、これはなかなか、一度翻訳して考えないと、音程がすぐ出てこないのですよね。そうでしょ。

鈴木：はい。

金光：「♪ニハニホトホニ…」（「君が代」の旋律）、「ニハ」といったって、中国語みたいで（笑）。確かに階名での音程感があって、それを音名に転換して歌っているわけですからね。音程感に結び付かないのですよ。だから、日本音名使いなさいと言われても、なかなか、たまには歌ったかと思うのですけれども。階名ですと、ちゃんと音程が付いていますからね。「ドレミ」で歌うと…。だから師範では階名を主体として、それで教えるときには「ニハニホ…」とイロハで教えなければいけないのですよということを言ったと思うのです。だからそれを教えたかどうかということはですね。そのころ「固定ド」、「移動ド」という両論がありましてね、どちらがよいかという。それで我々も小学校のときから「移動ド」できているわけですね。音楽専門家になるのであれば、「固定ド」でなければいけないと。「固定ド」だと必然的に音高が記憶できますからね。音楽学校時代は「固定ド」でも歌わされたと思うのですね。ただ、「固定ド」の場合はハ長調の場合はよいのですけれども、色々調号が付いてくると、いちいちその都度シャープだとかフラットだとかを意識して歌わなければならない。「移動ド」だと要するに、ドの位置が移動するだけで、「ドレミファソラシド」のこの音程感覚でみんな歌えるわけです。たとえシャープやフラットが付こうとも、ト長調であろうと、変イ調長であろうと、非常に音程が取りやすいのですよ。「固定ド」だといちいちフラットがどこどこに付くと考えて歌うでしょ。非常にわずらわしいですね。まあ、そんなことをちょっと書いたのですけれども。こういうのを使ったのだらうということで、譜読みは「ドレミ」を使うか、音名唱で、国民学校では「ハニホヘトイロハ」が使われたから、これを指導なさいと。どちらがよいかということは今お話したとおりなのですから、一長一短がありましてね。音高を記憶するには「固定ド」がいいと、それから音程感をつかむためには「移動ド」の方がいいと。ちょっと発声とは外れましたけれども。そういうことで、階名で歌ったり、母音の「ア」で歌ったりしましたよね。

（2003年12月5日 金光氏）

注 カッコ内は筆者による加筆。下線は筆者による。

上記の回答から以下の点が指摘できる。

- 1) 音程練習の教材として、『コールユーブンゲン』を使用。
- 2) 師範学校においては、階名を主体に指導。ただし、生徒が国民学校で指導する際には、イロハ音名を使用するよう指示。

金光氏は、「学生用の『コールユーブンゲン』」を挙げているので、第2節で挙げた大阪開成館から発行された文部省検定済のものが使用された可能性が考えられる。ちなみに、1943（昭和18）年4月から1948（昭和23）年3月まで、香川師範学校に在籍した渋谷清寿氏は、版については定かでないものの、『コールユーブンゲン』を購入したと証言している⁴³。

なお、「移動ド」「固定ド」の話題も挙がっている。沢崎真彦は、「国民学校時代には、絶対音感教育に刺激され、国の政策とも相俟って＜唱法＞の研究は一段と盛んに」なつたと捉えているように、金光氏の証言と一致する⁴⁴。

このように、「音程練習」の目的は、声や発声の追求というよりはむしろ、読譜力の育成に重点が置かれていたと考えられる⁴⁵。

(4) 「母音練習」

金光氏は、「＜母音練習＞では音楽掛図の口型図を使用し、いくつかの音を用いて練習した。特に＜エ＞＜イ＞の母音に気を付けて行った」と述べている。しかしながら、前述の通り「母音練習」は『国民学校芸能科 音楽精義』の中に見られない。そこでここでは内容が相当する「発音練習」を取り上げたい。「発音練習」は「声音に関する基礎練習」の中に含まれる。『国民学校芸能科 音楽精義』では、「声の応用であり、正しい＜日本語の発音＞の為の基礎練習である」⁴⁶とされ、音楽教育だけではなく、国語教育との連携も提示されている。また、「発音の訓練は結局口形の訓練である」⁴⁷と述べられ、以下の3点の理由が挙げられている⁴⁸。

- ・唱歌は大勢で一緒に歌ふ場合が多いから、少し極端に各音に従つて口形を変化しないと歌詞が不明瞭になる。
- ・日常会話の場合よりも、音と音との間の時間的距離が多いから、特に各音の口形を十分に变化させないと発音が不明瞭になる。
- ・唱歌は日常会話よりも概して、誇張された表情をして居るので、その点から云つても口形を十分に变化して、発音を明瞭にしなければならない。

さらに口形の練習方法として次の方法を紹介している⁴⁹。

- (イ) 教材としての歌曲の中から適当な箇所を抽出して練習
- (ロ) 階名模唱による口形練習
- (ハ) 音程練習と結合した発音口形練習
- (ニ) 口形変化の練習
- (ホ) 口形の体操

前述の金光氏の母音練習（譜例Ⅱ-3-4(4)）は上記の「(ニ) 口形変化の練習」の方法に近い。この練習により口形変化を機敏にし、発音を明瞭にすることが図られている。

以上、金光氏による師範学校での実践と井上の『国民学校芸能科 音楽精義』とを照合させて考察した。その結果、師範学校の発声練習では歌唱活動のウォーミングアップ的な要素を含んではいるものの、音階、音程、和音、発音といった「基礎練習」の訓練的な要素が強いということが明らかとなった。

2. 師範学校における増課科目と東京音楽学校における発声指導との関連

田山氏は、1940（昭和 15）年度第 5 学年のときに増課科目の中で金光氏の指導を受けた。そのことについて、次のように語っている。

鈴木：さっき出てきたことなのですが、5 年生のときに金光先生から発声指導を受けた増課科目のことについて教えていただいてもよいですか。

田山：まず腹式呼吸のことを一番に言われましたね。鈴木先生からも腹式呼吸はコーラス、発声、ソロの基本だからということで、お腹に手を当てて、鈴木先生のお腹に手を当てて「だめだ、そのお腹では、もっと堅くして」と…。

鈴木：金光先生の 5 年の増課のときはかなり丁寧に教えてくださったということですか。

田山：そうそう、金光先生はプロ中のプロですからね。上野でお勉強したことをそのままね、あの先生はやさしい先生ですからね。みんなに好かれた。どの生徒も尊敬してね。人間というのは若さと情熱というのが基本だね。教育の原点は情熱です。口先ばかりではね、子どもはついてこない。この先生は本物だということを示さなければいけないね。なんやこれ、この先生、上っ面ばかりだ、だめだ、こんなきかないって。面従腹背っていつてね。ハートと情熱でストレートに子どもの中に飛び込んでいかないといけないね。そういうことを金光先生がいらっしゃって、生徒がみな、あーと思って。先生が模範で範唱するでしょ、もうこれが全然違う。一際光っている。そうすると自然のうちに生徒がついていくでしょ。しかしすごい。

鈴木：そうですか。金光先生の発声でも、金光先生が生徒のお腹を抑えたりとかもされたのですか。

田山：金光先生は若かったからね。鈴木先生はお年がいったからそういうことをされましたけれども、金光先生は「いいですか」で前でやられて、「息を吸って」「長く息をずっと出して」、腹式呼吸、声の出し方、のどをいかにして広げるか、「鏡を見てのどが開いているかどうか自分自分で研究しなさい」。それから体の全身の力を抜いて、ぱっと歌う場合には頭のとっぺんからかかとまで一線になっていなければいけない、いかなれば天井から、君たちの体は吊り下げてこういう状態でやるのだよ」で。「肩の力、抜いていますか」で。「足の力を入れてはだめですよ」「指先まで力がいったらだめよ」「リラックスリラックス」。腹式呼吸で、おへその回り臍下丹田は力を入れて、のどをしっかりと開けて…。それがね、魔術をかけられたようになる。生徒たちが「あー」て出すでしょ。今まで出なかった声がずいぶん出るのですよ。これが本当の発声法かなあと。私も本当に目が覚めたようでした。自分の声がこんなに高い声が出て、そして部屋の隅々まで響くのです。そういう指導はやはり、金光先生のお力ですね。忘れません。金光先生のそういうことの原点はね、薄い本ですけどもよい本でしたけれども、『基礎唱歌法』。『基礎唱歌法』という本は音楽学校の教授の名前はちょっと、以前はその本を金光先生が持っておられたのです。それを借りて勉強したのです。厚い本ではないのです。こんな薄い本でしたが、内容がすごい。

鈴木：沢崎先生ですか。

田山：いや、違う。ちょっと忘れたからね。上野の名教授です。全国的に名前も知れ渡っている。その方の出版された本、その本を先生から借りてね、一生懸命勉強しました。その『基礎唱歌法』には金光先生がおっしゃっていたことと同じことが書いてありました。先生は上野でこういうことを勉強してこられたのだなあと思いました。これは全部覚えなくてはと思いましたね。音楽の名著だね。

（2005 年 3 月 16 日 田山氏）

増課科目では、腹式呼吸を重視した発声指導に加え、第 2 章第 3 節で分析した黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』第一編（1938）所収のナポリ民謡《サンタ・ルチア》（譜例Ⅱ・3・5）やボヘミア民謡《暮の鐘》（譜例Ⅱ・3・6）が、指導されていた⁵⁰。この選曲からも金光氏が腹式呼吸、ベルカント唱法を教えていたことがうかがえる。

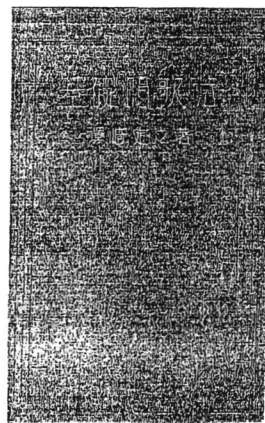
譜例Ⅱ-3-5 《サンタ・ルチア》 bar. 29-35

出典 黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』第一編, 1938年, 87頁。

譜例Ⅱ-3-6 《暮の鐘》 bar. 1-5

出典 黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』第一編, 1938年, 96頁。

なお、『基礎唱歌法』は、東京音楽学校教官の沢崎定之氏が著し、1934（昭和9）年に共益商社書店から発行された本である（図Ⅱ-3-4）。文部省検定済教科書ではない。金光氏は、東京音楽学校甲種師範科在学中においては（1938年4月－1941年3月）、沢崎定之氏ではなく、木下保氏に師事していた。



図Ⅱ-3-4 沢崎定之『基礎唱歌法』共益商社書店, 1934年 表紙

坂本麻実子は、「東京音楽学校卒」の肩書は、特に地方では重みがあったようである」と指摘する⁵¹。上記の田山氏の回答の「上野」という言葉には、ブランドとしての響きを感じさせる。もちろん金光氏を尊敬していることについてはいうまでもない。しかし、田山氏が、東京音楽学校の教育内容に強い関心を寄せていることも事実である。

では、金光氏は、「上野」つまり、東京音楽学校甲種師範科においてどのような発声指導を受けてきたのか。表Ⅱ-3-9は、東京音楽学校甲種師範科の各学科目の毎週教授時数である。金光氏が在籍した1938（昭和13）年度から1940（昭和15）年度に適用されたものを転載した。

表Ⅱ-3-9 東京音楽学校甲種師範科の各学科目の毎週教授時数 1938（昭和13）年度

学科目 学年	修身	唱歌	器楽	音楽理論	和声学	音楽史	教育学	音楽教授法	国語	英語	体操・遊戯	計
第1学年	1	6	2	2	—	2	2	—	3	3	2	23
第2学年	1	6	2	—	2	2	2	—	3	3	2	23
第3学年	1	6	2	—	2	—	—	2	3	3	2	21
計	3	18	6	2	4	4	4	2	9	9	6	67

出典 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』2003年、123・124頁（『東京音楽学校一覧 自昭和十二年至昭和十三年』）。

注 下線は筆者による。

聞き取り調査に基づくと、「唱歌」の毎週6時数の内訳は、表Ⅱ-3-10に示す通りであったようである。

表Ⅱ-3-10 東京音楽学校甲種師範科の「唱歌」の内訳 1938（昭和13）年—1940（昭和15）年度

授業名	教授時数	内容
唱歌 「ソルフェージュ」 （コールシュレー）	毎週2時数	第1学年では『コールユーブンゲン』巻2、巻3を使用。その他、『コールシュレー』や東京音楽学校編纂『合唱歌』共益商社書店、1927年を使用。沢崎定之氏（第1学年）、城多又兵衛氏（第3学年）等が担当。
フェルマー氏による「全校合唱」	毎週2時数	定期演奏会に向けての管弦楽付きの全校合唱。
木下保氏による「合唱」	毎週1時数	日本の作品の合唱。《海道東征》等。学年合唱。
声楽の「レッスン」	毎週1時数	沢崎定之氏（5）、木下保氏（4）、城多又兵衛氏（3）、伊藤武雄氏（11）、長坂好子氏（8）、浅野千鶴子氏（4）、田中伸枝氏（11）、武岡鶴代氏（1）に分かれて師事。

出典 金光武義氏対象の2003年12月5日聞き取り記録。

注 声楽のレッスン：内容の項のカッコ内の数字は、受講生徒数を示す（1941年3月卒業生）。なお、受講生徒数は、『組曲“集い”』芸大・昭和16年組、1972年から算出。

金光氏は、「先生によってみなやり方は違うわけですよ」と断った上で、師事した木下保氏の指導法について以下のように語る。

私なんか1回だって発声について指導は受けたことはありません。有名な木下先生ですけどね。発声なんかというのは歌っているうちにおのずから身に付くものだというそういう説なのです。まあ、一人ひとりの先生はみんなやり方が違いますから、自分がこれがいいということをやられますからね。だからそれにはがむしゃらに歌ってこいと。二つや三つではだめだと。五つ以上必ずやってこいと。まあ、たくさん課題を出されてね。そのうちに色々な歌をやれば、それは声が出しやすいとか、出やすいとか、よい声がでるとか、おのずからつかめるのだということを自分でそのへんは勘定しなければいけないという、そういう方針でした。木下先生はですよ。一番の実力者であったわけですけども、音楽学校では。毎年のように、日本青年館で、日比谷公会堂と、新宿の近くにあります。そこで毎年のようにリサイタルをやられましたね。

(2003年12月5日 金光氏)

逆に、伊藤武雄氏は、徹底的に発声の指導を行った。金光氏の友人は、伊藤武雄氏に師事し、3年になるまで歌曲は教えてもらえず、発声ばかりをやったそうである。

このように東京音楽学校といっても担当教官ごとに発声指導の方法は異なった。また、あまりの違いに戸惑う生徒もいた。ここで金光氏が卒業した年に東京音楽学校へ入学した、長坂幸子氏から得た回答をみたい⁵²。長坂氏は、千葉市立千葉高等女学校卒業後、1941(昭和16)年4月、東京音楽学校甲種師範科入学、1943(昭和18)年9月に同校を卒業している。なお、在籍期間が2年6ヶ月と半年短いのは、1942(昭和17)年11月に公布された「大学学部等の在学年限の昭和18年度臨時短縮に関する省令」を受けてのことである⁵³。

長坂氏は、東京音楽学校を受験直前の10月から、田中伸枝氏のレッスンを受ける。そのことについて長坂氏は次のように語る。

その田中伸枝先生に、受験の前の10月から行ったのですよ。3ヶ月したら、声が変わったのですよ。どういふことかと言うと、ロングトーンをね、アーアー、「1時間しなさい」というのですよ。毎日(笑)。私は必死だから毎日1時間やりだしたらねえ、3ヶ月経ったら、今までのペタッとした声がアーというしっかりした声に変わったのねえ。

(2003年10月10日 長坂氏)

田中伸枝氏に教わったロングトーンを毎日継続した長坂氏は、入学後、平原寿恵子氏のレッスンを1度だけ受ける。しかし、長坂氏は、鼻腔共鳴を重視する平原寿美子氏のレッスンに戸惑い、再度、田中伸枝氏の教えを切願する。

長坂：そうね、歌は田中伸枝先生のところに3人ね。それからピアノは小田先生のところも3人。多い先生ですと6人から7人となっている先生もいらっしゃいました。浅野千鶴子先生のところは割合多くとっていらっしゃいました。平原寿恵子先生を知っている？少し減っていましたね。1回だけその方に回されたのよ。学校の配置で、振り分けでね。1回だけその先生の授業を受けたのだけれども、全然違うのよ。発声の仕方がね。(歌う)響きを焦点にまとめるということにびっくりしてしまってね。田中先生のところへ飛んでいったのですよ。「先生、どうしてもだめですか、とっていただけませんか」と言ったら、「代わってくれるという方がいたらいいわよ」。そしたら石橋さんが代わってくれたの。そしたら田中伸枝先生につけたのです。そして入ったらね、声がぞゅんびゅん出てね。たくさん歌っていたら、音声障害になってしまったのですよ。

鈴木：在学中にですか。

長坂：在学中に。

(2003年10月10日 長坂氏)

注 カッコ内は筆者による加筆。下線は筆者による。

ところで、東京音楽学校ではここまで述べてきた実技の他に、颯田琴次の担当する「音声学」や田辺尚雄が担当する「音響学」といった講義が「随意科目」として開講されていた⁵⁴。長坂氏は、在学中に音声障害を患ったということもあり、これらの講義に対する印象が強く残っている。なお、沢崎定之氏は、東京音楽学校において「音声学」や「音響学」の講義が設置された背景について、以下のように言及している⁵⁵。

学生は何よりも先づ声の出し方、使い方を学び、それに習熟しなければならない。そしてそのためには立派な教師の指導を受けることである。然し余暇を利用して音声科学の研究を始めることは、詩や文学や芸術史や美学などの研究と共に、大いに望ましいことである。これは教師の指導法を明確に会得するためにも役立つであらうし、又広い見地からすれば唱歌学生の一般的教養の問題でもあるから。

最後に金光氏の実践に話を戻したい。金光氏は、東京音楽学校では木下保氏に師事するものの、発声指導そのものについてはレッスンでは教授されていなかった。しかしながら、香川県師範学校では生徒たちに発声指導を行っていた。また、増課科目を受講していた田山氏には、沢崎定之氏の『基礎唱歌法』を紹介していた。これについて金光氏は次のように語っている。

木下先生の指導の他、東京音楽学校在学中、自分で色々勉強をしました。私は、ハイバリトンで、上の f ぐらいで苦しくなるのです。g や a まで出したいと思い、自分で色々練習しました、木下先生は発声について教えてくれませんでしたから。頭声発声、頭から抜ける音の感じを意識して自分でやりました。しかし、腹式ではなく、胸式で歌っていたものでしたから、やりすぎて胸を壊しました。

『基礎唱歌法』の本は、東京音楽学校時代に読んだと思います。沢崎先生は、直接にはレッスンを受けておりませんが、主任教授でしたから。自分なりに色々と考えて読みました。

(2005 年 12 月 23 日 金光氏)

先ほどの田山氏の回答には、金光氏は腹式呼吸を重視したとあった。その理由が上記の下線に表れている。また、「力を入れてはだめですよ」等の助言にみられるように、当時にしては非常に柔らかい指導をしていた。金光氏は、かつて大分県立杵築中学校（現、大分県立杵築高等学校）での教練の時間、配属将校から大声で号令を掛ける練習を命じられ、変声期だったということもあり声を潰した苦い経験をもっている⁵⁶。金光氏は、「香川県師範学校では、自分が苦しんだ苦い経験をしばしば生徒に話し、一番無理がなく声が出る方法を教えたかと思います」と回想している。

まとめ

本章では、師範学校における発声指導の内容と実態を中心に検討してきた。判明した点は以下の通りである。

- 1) 1910（明治 43）年、1925（大正 14）年、1931（昭和 6）年の「師範学校教授要目」ならびに 1943（昭和 18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」では一貫して、「発声練習」は、「基本練習」の項目の下に置かれていた。

1943（昭和 18）年 3 月までに適用された「師範学校教授要目」においては、「発声練習」の内容についての記述はなされていない。一方、1943（昭和 18）年 4 月以降の「師範学校教科教授及修練指導要目」においては、学年ごとに内容に関する記述が若干なされた。しかし、「呼吸法・発声」「音階・分散和音・強弱其ノ他発想ニ関スルモノ」といった文言が加わったにすぎず、具体的な方法等については示されていない。

- 2) 発声指導を扱った文部省検定済師範学校音楽教科書は、中声発声を支持する水口廣の『中等発声練習教本』（1932）の 1 種類だけである。しかし、この教科書が実際に師範学校において使用されたという事実は不明である。

国定教科書である文部省『師範音楽 本科用巻一』（1943）においても「発声練習」が所収された。10 の譜例が音域の拡張に配慮しながら配列されている。しかし、譜例の掲載に留まり、言語による説明や写真等が一切ないため、練習の意図や方法については明確にされていない。なお、現在のところ、『師範音楽 本科用巻一』を使用して発声指導を行ったという事例は得ていない。

その他、『コールユーブンゲン』は、1903（明治 36）年頃には、師範学校の音楽の授業で使用されていたことが確認できた。その後、さらに普及し、1934（昭和 9）年には、文部省検定済音楽教科書として発行された。

- 3) 師範学校でも教科書として使用されることが多かった国民学校教師用指導書においては、譜例の他、言語による説明や写真等を加えて発声指導に関して記されている。それを分析した結果、国民学校教師用指導書における発声指導は、大正期以来行われてきた児童発声の研究成果の流れを受け継いでおり、「自然な発声」を理想としていたことが明らかとなった。また、国民学校教員に対しては、「教師の範唱」という指導技術を求めている。

- 4) 香川県師範学校の金光武義氏の発声指導は、歌唱活動のウォーミングアップ的な要素を含んではいるものの、音階、音程、和音、発音といった「基礎練習」の訓練的な要素が強いことが明らかとなった。田山清美氏の証言にあったように、増課科目ではやや専門的な内容となり、腹式呼吸等が重視されていた。

- 5) 師範学校音楽科教員を養成していた東京音楽学校甲種師範科の発声指導は、担当教官によってかなり異なっていた。金光氏が師事した木下保氏の場合、発声指導そのものの指導は行わなかった。しかし、金光氏は、卒業後、香川県師範学校において発声指導を行っていた。金光氏の場合、東京音楽学校で受けた教育をそのまま師範学校で実践したのではなく、金光氏自身の経験を生かし生徒の実態に合わせて咀嚼しながら指導をしていたといえる。

1943（昭和 18）年，師範学校が官立専門学校程度へと昇格し，「師範学校教科教授及修練指導要目」が制定されたというものの，実態はそれほど変化していなかった。むしろ大きく変わったのは，1941（昭和 16）年の国民学校発足時である。当時，香川県師範学校の中でも，発声練習の中に「分散和音唱」が導入取り入れられたり，「イロハ音名唱」の導入等が試みられたりした。

師範学校における発声指導の中で求められていたものは，生徒自身の発声の技能，歌唱力を高めることと，子どもの発声とその指導法への理解を深めることであった。なお，田山氏の証言によると，香川県師範学校では「校内合唱コンクール」が年 1 回実施され，クラス対抗で熱狂し，競い合っていたそうである（写真Ⅱ・3）⁵⁷。

今後の課題としては以下の点が挙げられる。

・ 声の衛生等に対する指導。

『初等科音楽四 教師用』（国民学校初等科第 6 学年）には，変声期児童に対する配慮に関する記述がみられる⁵⁸。しかし，このような点について，師範学校において指導されたかどうかについては不明である。また，師範学校音楽科教員を養成していた東京音楽学校においては，「音声学」や「音響学」が開講されていた。このような講義が師範学校の教育へどう反映されたかについても調査していきたい。



出典 『わが香川師範時代』1996 年，32 頁。

注 田山氏が在籍した際の「校内合唱コンクール」の写真ではない。

写真Ⅱ・3 香川師範学校生徒の合唱 1943（昭和 18）年音楽会，於：講堂

- 1 岩崎洋一「児童発声の変遷 1」『季刊音楽教育研究』1981 年夏号第 24 卷 3 号, 音楽之友社, 1981 年, 24-27 頁。岩崎洋一「児童発声の変遷 2」『季刊音楽教育研究』1981 年秋号第 24 卷 4 号, 音楽之友社, 1981 年。岩崎洋一「男子児童発声の系譜—1930 年代から 1950 年代にかけて」日本音楽教育学会編『音楽教育学研究 1 音楽教育の理論研究』音楽之友社, 2000 年, 213-214 頁。
- 2 石川謙代表『近代日本教育制度史料』第二巻, 大日本雄弁会講談社, 1956 年, 235 頁。
- 3 教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』第五巻, 教育資料調査会, 1939 年 (1964 年重版), 671-675 頁。
- 4 文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943 年, 157-170 頁, 288-299 頁 (高知大学附属図書館所蔵)。
- 5 文部省『中学校教科教授及修練指導要目』1943 年, 42-47 頁 (駒澤大学図書館)。
- 6 文部省『高等女学校教科教授及修練指導要目』1943 年, 144-152 頁 (北海道大学附属図書館)。
- 7 別府愛「福井直秋の教育活動と当時の教育状況——師範学校の教育を中心にして」武蔵野音楽大学音楽教育学科編集委員会『福井直秋著作解題』2000 年, 69 頁。
実際に滋賀県師範学校の「昭和九年度現在の教科書一覧」には、『音程教本』が掲載されている (滋賀県師範学校編『滋賀県師範学校六十年史』1935 年, 89 頁・92 頁, 日本教育史文献集成, 第一書房, 1981 年復刻版使用)。
- 8 福井直秋伝記刊行会編『福井直秋伝』福井直秋伝記刊行会, 1969 年, 93 頁。
- 9 『コールユーブンゲン』大阪開成館, 1924 年 (1934 年訂正再版) (昭和 9 年 7 月 20 日, 文部省検定済, 師範学校・中学校・高等女学校音楽科用)。
- 10 文部省『師範学校中学校高等女学校使用教科図書表 明治四三年度』1912 年, 147 頁 (教科書研究資料文献第十一集, 芳文閣, 1992 年復刻版使用)。
- 11 福井隼仁「コールユーブンゲンの日本における音楽教育への導入の経緯」奥忍代表『昭和 60・61 年度教育方法等改善経費による 小学校教員養成課程専門「音楽」におけるソルフェージュの学習方法の現代化』1987 年, 奈良教育大学, 36-37 頁。
- 12 『福井直秋伝』福井直秋伝記刊行会, 1969 年, 93 頁, には以下のように記載されている。
福井は, かつて, 東京音楽学校卒業後, ただちに富山師範の教壇にたち, 「コールユーブンゲン」を以て生徒達に教授したのである。しかし, これは, 専門書である。ドレミすらよく理解していない生徒達に, 教師がいくら熱意をこめて指導しても, また生徒達が, いくら懸命に努力しても, 段階を経ずにはとても理解も上達もあり得ないことを, 福井は十分知っていたのだ。
すなわち, 「コールユーブンゲン」は, 普通の学校には不向きであり, これにかわる中等程度のものが当時の日本の現状では, 必要であると考えていたのだ。以来, 何十年の歳月がたったが, そんな本は未だ発行されてなかったわけである。福井の意欲はこの「音程教本」にそそがれた。
- 13 京都府師範学校編『京都府師範学校沿革史』三國谷三四郎編集兼発行人, 1938 年 (日本教育史文献集成, 第一書房, 1982 年復刻版使用)。
- 14 フランツ・ウェルネル著, 信時潔訳『全訳コールユーブンゲン』大阪開成館, 1925 年 (桐朋音楽大学, 大阪教育大学所蔵)。その他, この時期には以下のものも発行されていた。
フランツ・ヴェルネル著, 北村義男・鍋木欽作訳『合唱基礎練習編 コールユーブンゲン』共益商社書店, 1933 年 (北海道教育大学旭川校所蔵)。
徳山『声楽初歩練習: コールユーブンゲン解説』世界音楽講座, 春秋社, 1933 年 (佐賀大学, 東京芸術大学所蔵)。
(NACSIS Webcat <http://webcat.nii.ac.jp/> 参照)。
- 15 黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』第一編, 共益商社書店, 1938 年, 140-145 頁 (二度音程から五度音程)。第二編, 156-161 頁 (二度音程から八度音程)。
- 16 岩崎「児童発声の変遷 1」, 前掲書, 26 頁。岩崎「男子児童発声の系譜」, 前掲書, 215 頁。
- 17 岩崎「男子児童発声の系譜」, 前掲書, 215 頁。
- 18 福井直秋『唱歌の歌ひ方と教へ方』共益商社書店, 1924 年, 107-108 頁。
- 19 近藤幹雄「国民学校芸能科音楽教師用書の成立」『季刊音楽教育研究』1983 年春号, 音楽之友社, 1983 年, 11-20 頁。
- 20 宮瀬重美「〈国民学校〉時代の音楽教育について」『埼玉大学紀要 教育学部 (増刊)』第 33 巻, 1984 年, 169-180 頁。
- 21 山本文茂「芸能科音楽の理念と内容——法令条文の解釈を中心に」東京芸術大学音楽教育研究室創設 30 周年記念論文集編集委員会『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社, 1999 年, 264-277 頁。山本文茂「芸能科音楽教材の特質——教科書・教師用指導書の分析を通して」東京芸術大学音楽教育研究室創設 30 周年記念論文集編集委員会『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社, 1999 年, 278-295 頁。
- 22 菅道子『ウタノホン上』『うたのほん下』『初等科音楽』日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社, 2004 年, 52-53 頁。
- 23 岩崎洋一「児童発声の変遷 1」『季刊音楽教育研究』1981 年夏号第 24 卷 3 号, 音楽之友社, 1981 年, 27 頁。
- 24 文部省『ウタノホン上 教師用』日本書籍, 1941 年, 16 頁。
- 25 岩崎「児童発声の変遷 1」, 前掲書, 27 頁。
- 26 同上, 23 頁。
- 27 北村久雄『新音楽教育の研究』厚生閣, 1934 年, 318 頁。さらに次のように記す。「咽喉に力を入れたり怒鳴つたりする様な生理的に不自然な発声は全く駄目であるが, たとひ生理的には不自然さが無いとしても, 指導者が児童に示す発声が声

楽家を氣どつた様な、大人らしい発声であると、児童の発声は素朴さが失くなる。又指導者が無頓着で居つたり、耳が悪いと児童は一層叫ぶ様になり易い。低学年の頃に自然的な発声に導かれずに、叫びつづけて来た児童は、上級になるに伴れて、その叫ぶ傾向がなほりにくくなる。又叫びつづけて来た児童はその声音に傷が残つて、将来自然的な美しい声が出なくなる」(318-319 頁)。

- 28 小松耕輔、松島彝、井上武士、橋本国彦、下総皖一（以上作曲関係）、小林愛雄、林柳波（以上作歌関係）。橋本国彦は1年後辞任、橋本に代わって城多又兵衛が任命されたが、城多も末期には応召したので会議に参加しなかった（井上武士「教材・教科書にみる明治100年の歩み」『音楽教育研究』4、音楽之友社、1968年、57頁）。

- 29 文部省『ウタノホン上教師用』、前掲書、18頁。

なお、岩崎は以下のように定義している（岩崎「児童発声の変遷2」、前掲書、67頁）。

「頭声発声」＝頭部共鳴を主体とした発声。声帯辺縁部は薄く声帯の辺縁に近い部分のみ振動し、声門は完全に閉じない。

「胸声発声」＝胸部共鳴を主体とした発声。声帯辺縁部は厚く声帯の全幅が振動し、声門は完全に閉じる。

なお、米山文明は「声区変換（声のチェンジ）のメカニズム」について、声区成立の本態は咽頭の調節、主に声帯の使い方の差によるものであるというのが、現在の音声生理学の定説になっていると述べている（米山文明『声と日本人』1998年、平凡社、113～114頁）。

- 30 米山、前掲書、112頁。

- 31 文部省『初等科音楽四 教師用』東京書籍、1943年、17頁。

- 32 文部省『ウタノホン上 教師用』、前掲書、37頁。他の国民学校教師用指導書においても同一の文が掲載されている。

- 33 井上武士『国民学校芸能科音楽精義』教育科学社、1940年（1941年重版使用）、236-240頁。

- 34 同上、236-238頁。

- 35 2003（平成15）年12月5日（金）、於：金光邸（岡山県岡山市）。

- 36 2005（平成17）年3月16日（水）、於：全日空ホテルクレメント高松1階喫茶室（香川県高松市）。

- 37 井上武士『国民学校芸能科 音楽精義』1940年、教育科学社。

- 38 同上、282頁。

- 39 文部省『師範音楽 本科用巻一』師範学校教科書、1943年（昭和18年7月7日、文部省検査済）、123-133頁。

- 40 井上、前掲書、283頁。

- 41 国民学校第6学年では、ト長調、ニ長調、変ロ長調、ト短調の終止形の練習の他、日本音階による合唱基礎練習についても取り上げられている（文部省『初等科音楽四 教師用』、前掲書、33-36頁）。

- 42 井上、前掲書、282頁。

- 43 2004（平成16）年5月9日（日）、2004（平成16）年9月28日（火）、於：渋谷邸（香川県高松市）。

渋谷氏は、『コールユーブンゲン』について以下の点を証言している。

- ・1943（昭和18）年4月、香川師範学校予科へ入学した際に、購入。
- ・1943（昭和18）年度、予科第1学年の「音楽」の授業で使用。しかし、「二度音程」ぐらいまでの最初の部分しか、用いていない。
- ・階名（ドレミ）で歌った（和音訓練はイロハ音名を使用）。

- 44 沢崎真彦「「固定ド」・「移動ド」唱法の変遷——わが国の音楽教育界の動きを中心に」『音楽教育学』第16号、日本音楽教育学会、1986年、84頁。

- 45 唱法については以下の言及がみられる。

柴田篤志「日本の学校教育における唱法」（「唱法」の項に含まれる）日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社、2004年、479頁。

専門教育では、明治の終わり（44年ころ）、東京音楽学校において固定ド唱法が用いられだす。ドイツ人教師のクロースが『コールユーブンゲン』の歌唱に使っていたことから、大正7年ごろからさかんとなる。ただし、歌曲は移動ドで指導されていたので、この固定ド使用は、ソルミゼーション訓練の一環とみることもできる。

城多又兵衛「絶対音感教育の時代」『音楽教育研究』4、音楽之友社、1968年、159頁。

帰国後私の一つの仕事は上野の音楽学校に併置される児童学園を担当することだった。この仕事に音楽の早期教育と固定ド唱法の採用を主張し、先輩の反対もあったが、試験的にやれるようになり、次第に東京音楽学校も固定ド唱法を採用するようになった。

平井康三郎「唱法をめぐる音楽上の問題点」『音楽教育研究』6、音楽之友社、1970年、49頁。

固定ドは大正末期から一部には行われていたようだがその後東京音楽学校（現芸大）で試験的に採用された。それまでは入学試験でコールユーブンゲンも新曲も全部移動ドであったが、昭和14、5年頃には固定ドでも歌えることが要求されるようになった。音楽学校のオーケストラやコーラスは、バロックや古典だけでなく、ワグナー、シュトラウス、ブルックナー、マーラー、ワイルなどの近代音楽も盛んに演奏するようになったので、ひんばんな転調をいちいち読み替える繁雑さが問題になったのは当然で、固定ド唱法はここではじめて実用化されることになった。

- 46 井上、前掲書、281頁。

- 47 同上、243頁。

- 48 同上, 244 頁。
- 49 同上, 245-247 頁。
- 50 金光氏が香川県師範学校音楽科教員の際使用していた黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』第一編(1938)の《サンタ・ルチア》86 頁,《暮の鐘》96 頁には,「増」というメモが残されている。また,金光氏は増課科目で実際に指導したと証言する(2003 年 10 月 22 日, 於:金光邸)。
- 51 坂本麻実子「明治時代の師範学校への音楽教員の配置——東京音楽学校卒業生の勤務校の調査から」『富山大学教育学部紀要』第 54 号, 富山大学教育学部, 2000 年, 51 頁。
- 52 2003(平成 15)年 10 月 10 日, 於:長坂邸(京都府京都市)。長坂幸子氏は, 1943(昭和 18)年 9 月, 東京音楽学校甲種師範科を卒業後, 千葉市立千葉高等女学校に音楽科教員として勤務。その後, 岡山県立玉野高等女学校(1944-1945 年)に転任する。1948(昭和 23)年, 秋田県立横手城南高等学校, 1954(昭和 29)年, 秋田県立秋田北高等学校と転任, 1955(昭和 30)年, 弘前大学教育学部教官となる。1979(昭和 54)年, 京都教育大学, 1982(昭和 57)年, 神戸大学教育学部, 1987(昭和 62)年, 滋賀女子大学短期大学教授となり, 現在, 滋賀女子短期大学名誉教授。声楽(フランス歌曲), 音楽教育学担当。
- 53 1942(昭和 17)年 11 月 25 日,「大学学部等の在学年限の昭和 18 年度臨時短縮に関する省令」公布。大学学部・予科, 高等学校, 専門学校等の修業年限を, 昭和 18 年度に卒業すべき者について 6 ヶ月短縮。一部の実業学校の修業年限を同年度に卒業すべき者について 3 ヶ月短縮(文部省『学制百年史(資料編)』ぎょうせい, 1972 年, 583 頁)。
- 54 1942(昭和 17)年 4 月に設置された「修業年限四箇年ノ甲種師範科」では,「音響学」が第 1 学年で 1 時数,「音声学」が第 3 学年で 1 時数, 必修になっている(国立公文書館所蔵文部省文書『自大正 14 年 3 月至昭 23 年 7 月 東京音楽学校』所収)。
- 「音響学」「音声学」について, 東京芸術大学百年史刊行委員会・財団法人芸術研究振興財団『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第一巻』音楽之友社, 1987 年, 東京芸術大学百年史刊行委員会・財団法人芸術研究振興財団『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第二巻』音楽之友社, 2003 年によると, 以下の通り。
- 「音響学」は, 1900(明治 33)年本科第 1 学年に 2 時数開講(第一巻 466 頁)。(ただし, 明治 26 年の専修部第 2 年の「音楽論」の内容は, 音響学となっている。第一巻 464 頁)。1909(明治 42)年, 本科, 甲種師範科ともに,「音響論」という名称で随意科目として開講(第二巻 13 頁)。1937(昭和 12)年,「音響論」は「音響学」と改称(109 頁)。
- 「音声学」は, 1937(昭和 12)年に随意科目として開講(第二巻 109 頁)。
- 55 沢崎定之『基礎唱歌法』共益商社書店, 1934 年(1935 年重版使用), 29 頁。
- 56 1902(明治 35)年 2 月 6 日「中学校教授要目」(文部省訓令第三号)には「生徒中声嘶, 咳嗽等ノ疾患アル者及変声期ニ際セル者ニハ便宜唱歌ヲ免除スヘシ」と記されている(岩井正浩編『資料日本音楽教育小史』青葉図書, 1978 年 90 頁)。その後, 1911(明治 44)年 7 月 31 日「中学校教授要目ノ改正」(文部省訓令第十五号)「生徒中変声期ニ際スル者ニハ唱歌セシメルコトヲ得」(同上, 123 頁)。1931(昭和 6)年 1 月 20 日「中学校教授要目ノ改正」(文部省訓令第五号)「生徒中変声期ニ際セルモノニハ唱ハシメザルコトヲ得」(同上, 150 頁)。1943(昭和 18)年 3 月 25 日「中学校教科教授及修練指導要目」(文部省訓令第二号)「尚歌唱ニ於テハ生徒ノ変声期ニ於ケル取扱ニ留意シ其ノ期間中歌ハシメザルコトヲ得」(文部省『中学校教科教授及修練指導要目』中等学校教科書, 1943 年, 47 頁, 駒澤大学図書館所蔵)と規定される。
- 上記の通り,「中学校教授要目」においては, 変声期生徒に対する配慮がなされている。しかし, 一般的に中学校における「音楽」の授業においては, 変声期生徒に対する配慮は少なく, 軍歌のような曲を大声で, 声を張り上げて歌うことがよしとされていたように思われる。筆者が名古屋音楽学校で師事した故日比野顕彦氏(名古屋音楽学校事務局長, 名古屋市立菊里高等学校元教諭, 東京音楽学校本科声楽部 1947 年 3 月卒業)は, 愛知中学校(現, 愛知高等学校)の「音楽」の授業について,「大声で元気よく歌えば<優>が付きまして。発声指導は受けていません」と回想していた(1992 年 8 月, 声楽のレッスンの中で, 於:愛知県日進市の日比野邸)。
- また, 金光氏が述べていたように,「教練」や運動部の部活動等においても, 声の衛生に対する配慮が少なかったように思われる。
- 57 「コーラスの成果はね, 校内全体でね, 全体といってもクラスの数からいって 7 つぐらいですかね, 講堂でね, コンクールをやるのですよ。そのコンクールの審査員は一般教科の先生が 10 人程度, 一般教科の中でも音楽が趣味の方がいらっしやるでしょ, そういう先生が採点してね, 順位を決めるのですよ。1 番から 5 番ぐらいでしたかね。「優勝, ○年○クラス」というふうだね, やっておいりました。それがまあまあおもしろかったですよ。まあ, よい声の者はおりませんでしたけれどね。ある程度満足しておりました」(2005 年 3 月 16 日 田山氏)。
- 58 文部省『初等科音楽四 教師用』大日本図書, 1943 年, 17 頁。「ある児童は, 美しい声をもつて十分に歌へるに反し, ある児童は, 既に変声期に入つてゐるといふ複雑した状態になるのである。随つて, 音域, 音量の増強については, 特に注意を払ひ, ある程度にとどめ, 控へ目にするやうなことが必要である。また歌唱技巧の練習についても, 控へ目にしなければならぬ。しかし, 発音については, 十分に明瞭に練習して差支ない」。

第4章 師範学校における器楽指導

本章では、「師範学校教授要目」、師範学校音楽教科書の分析・検討ならびに聞き取り調査を通して、師範学校における器楽指導の内容と実態を明らかにすることを目的とする。

1884（明治17）年の『音楽取調成績申報書』¹によると、音楽取調掛伝習生に授けられた音楽の内容は「唱歌、洋琴、風琴、箏、胡弓及び欧州管絃楽器」²であった。それに対して、東京女子師範学校、東京師範学校では伝習すべきものとして、「唱歌、風琴、箏及び胡弓」³が定められた。風琴については「音調の狂い極めて少く、学校唱歌の教授には最も適当にして、且つ習い易きものなれば、之を該校生徒に伝習せば、他日、唱歌を教授するに当り、大なる助となるべし」⁴と説明されている。師範学校においてピアノではなく、オルガンが用いられた背景について、上野大輔は次のように言及している⁵。

1879（明治12）年には、伊沢修二が音楽取調掛や東京女子師範学校において、ピアノによる音楽教育を試みていた。しかし翌1880年来日したL.W.メーソンがオルガンを持参したことで、わが国の唱歌教育におけるオルガンの役割は決定的なものになった。

歌唱活動中心の当時の音楽教育において、伴奏楽器の習得は初等学校教員にとって必須の要件と考えられ、師範学校では「オルガン・ピアノ奏法」が学科課程の中で重要視されていた。刈田均は、1881（明治14）年の『小学唱歌集初編』⁶が発行される以前から、師範学校ではオルガンやピアノが導入されていたと述べる⁷。また、山住正巳は、「オルガンは府県師範学校から、しだいに小学校へも普及していった」と記している⁸。

ところで、赤井励は、全国的にオルガンが普及する時期を1894（明治27）年から1906（明治39）年までの期間であると推測している⁹。他方、西原稔は、1927（昭和2）年に河合楽器が発売した「昭和型ピアノ」の登場によって¹⁰、ピアノの生産台数が急増したと指摘する¹¹。

また、赤井は小学校の唱歌教育におけるオルガンからピアノへの移行期の時代区分について、『文部省選定祝祭日儀式用唱歌伴奏譜』¹²が出版された1936（昭和11）年から始まるとしている¹³。師範学校についても、初等教育と関連付けて考えれば、オルガンからピアノへの移行期を同時期とするのが合理的であるように思われる。したがって、1931（昭和6）年から敗戦を迎える1945（昭和20）年までの時期を中心に置き、師範学校におけるオルガンからピアノへの変遷にも迫りたい。

第1節 「師範学校教授要目」等における器楽指導

1886（明治19）年の「尋常師範学校学科程度ノ事」（明治19年5月26日，文部省令第九号）の中で「単音唱歌複音唱歌楽器用法及音楽上ノ名称記号旋律和声拍子等ノ要略」（下線は筆者による）とある¹⁴。1892（明治25）年の「尋常師範学校ノ学科及其程度改正ノ事」（明治25年7月11日，文部省令第八号）では，男生徒は第3，第4学年で，女生徒は第2，第3学年に「楽器ノ用法」が置かれた¹⁵。

表Ⅱ-4-1は「師範学校教授要目」，表Ⅱ-4-2は「師範学校教科教授及修練指導要目」から器楽指導に関連する箇所を抜粋し一覧にしたものである。

これらの法規では，1910（明治43）年と1925（大正4）年の第一部では「楽器」，第二部では「楽器使用法」，1931（昭和6）年では「楽器使用」，1943（昭和18）年では「器楽」というように名称が変化している。表Ⅱ-4-1に示したように，師範学校が中等学校程度だった時期は，第一部では第2学年から最終学年まで，第二部では全在学期間にわたって継続的に器楽指導が実施されている。それに対し，表Ⅱ-4-2の官立専門学校程度へ昇格した師範学校では，予科，本科ともに第1学年から器楽指導が開始されている。これには，第Ⅰ部第2章で取り上げた1932（昭和7）年の「師範学校音楽教員協議会」の議論の成果が反映されていると考えられる。

扱われる楽器は，1910（明治43）年，1925（大正14）年で，オルガンが主で，ピアノ，ヴァイオリンは選択的な扱いで記述されていた。それに対し，1931（昭和6）年になると，ヴァイオリンが姿を消し，ピアノが主でオルガンがカッコ付きの補足的な楽器として記された。1943（昭和18）年，官立専門学校程度へ昇格した後もピアノとオルガンが併記されている。また，「必要ニ依リ簡易楽器ヲ併セ課スコトヲ得」とある。簡易楽器については，上田友亀の影響が大きいと考えられる¹⁶。

内容に関しては次の点が指摘できる。

- ・1925（大正14）年では，「進行曲」が含まれている（第4学年以降）。
- ・1931（昭和6）年では，「進行曲」に加えて「祝祭日重音唱歌曲」が挙げられている。
- ・1943（昭和18）年では，「簡易ナル楽曲ヨリ順次諸種ノ楽曲，進行曲及祝祭日重音唱歌曲」となっている（本科第2学年）。

指導方法については，1943（昭和18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」の中で，「器楽ハ個人指導トシ特ニ実習ヲ重ンズベシ」と記されている。

このように，師範学校の器楽指導では，一貫して鍵盤楽器が中心に置かれている。1884（明治19）年の『音楽取調成績申報書』でみられた箏や胡弓の楽器は，姿を消している。オルガンからピアノへの移行については，法令の分析では明確に表れていない。しかし，1931（昭和6）年ではオルガンがカッコ付きで記されていたこと，1943（昭和18）年では，ピアノがオルガンより先に記載されていることから，オルガンよりピアノが重視されていたのではないかと推察される。

表Ⅱ-4-1 「師範学校教授要目」における器楽指導

	内 容	
	第一部	第二部
1910 M43	第二学年 楽器：おるが ^ん ノ構造及各部ノ名称，使用法，基礎的練習，簡易ナル楽曲，但シ ^び あ ^の 若 ハ ^{ばい} お ^り んノ奏法ヲ授クルコトヲ得 第三学年 楽器：前学年ニ準シ程度稍進ミタル楽曲 第四学年 楽器：前学年ニ準シ程度稍進ミタル楽曲 <注意> 唱歌及楽器ノ教授ニハ総テ本譜ヲ用フヘシ	第一学年（第二学年） 楽器使用法
1925 T14	第二学年 楽器：おるが ^ん ノ基礎的練習及簡易ナル楽曲但シ ^び あ ^の 若ハ ^{ばい} お ^り んノ奏法ヲ授クルコ トヲ得 第三学年 楽器：前学年ニ準ス 第四学年 楽器：前学年ニ準シ程度稍進ミタル楽曲並進行曲 第五学年 楽器：前学年ニ準ス <注意> 唱歌及楽器ノ教授ニハ総テ本譜ヲ用フヘシ	第一学年（第二学年） 楽器使用法
1931 S6	楽器使用ハ本科第一部ニ在リテハ第二学年ヨリ始メ先ヅピアノ（又ハオルガン）ノ構造各部ノ名称及其ノ使用上ノ 注意並ニ使用法ヲ授ケ簡易ナル楽曲ヨリ順次諸種ノ楽曲，進行曲及祝祭日重音唱歌曲ニ及ボスモノトス，本科第二 部ニ在リテハ第一部ニ順ジ第一学年ヨリ之ヲ課スルモノトス <注意> 唱歌及楽器ノ教授ニハ総テ本譜ヲ用フヘシ	

出典 『明治以降教育制度発達史』第5巻，第7巻，1939年から作成。下線は筆者による。

表Ⅱ-4-2 「師範学校教科教授及修練指導要目」（1943年）における器楽指導

学年	内 容	教授上ノ注意
予科 第1学年	器楽： 「ピアノ」又ハ「オルガン」 片手練習・両手練習 音部記号 ト音記号 音 符 全音符・二分音符・四分音符・八分音符・十六分音符・附点音符 休 符 全休符・二分休符・四分休符・八分休符・十六分休符・附点休符 拍 子 四分音符ヲ一拍子トシタル二拍子・三拍子・四拍子	・歌曲又器楽曲ノ教材ハ我 ガ国ノ作品ヲ主トシ適宜 外国ノ名曲ヲ加フルコト ヲ得 ・器楽ハ「ピアノ」又ハ「オ ルガン」ヲ課シ必要ニ依 リ簡易楽器ヲ併セ課スコ トヲ得， 器楽ハ個人指導トシ特ニ 実習ヲ重ンズベシ
第2学年	前学年ニ於ケル教授事項ニ付程度ヲ進メテ練習セシム 拍 子 複合拍子ヲ加フ 律 動 切分音・三連符ヲ加フ	
本科 第1学年	器楽： 「ピアノ」又ハ「オルガン」 器楽ハ「ピアノ」又ハ「オルガン」ノ奏法ヲ習得セルモノト然ラザルモノトニ分 チテ之ヲ授ケ前者ハ予科修了程度ニ準ジテ次第ニ其ノ程度ヲ進メ後者ハ初歩ヨ リ始メテ予科二年修了程度マデ進マシム	
第2学年	前学年ニ於ケル教授事項ニ付其ノ程度ヲ進メテ課シ更ニ次ノ事項ヲ練習セシム 「ピアノ」又ハ「オルガン」ノ簡易なる楽曲，合唱楽譜視奏，伴奏練習，祝祭日 唱歌ノ奏法	
第3学年	前学年ニ於ケル教授事項ニ付程度ヲ進メテ課ス	

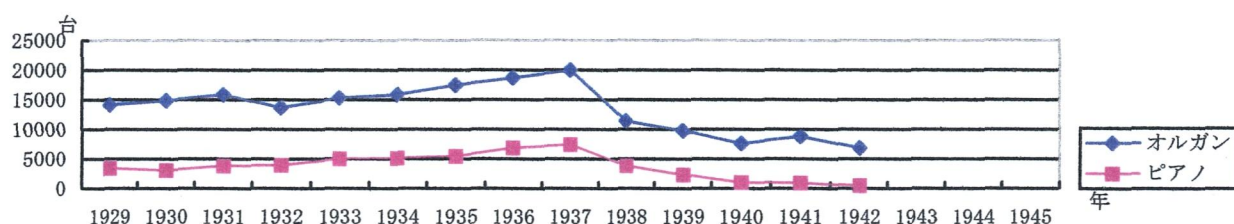
出典 文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943年から作成。

第2節 オルガン・ピアノ教科書の変遷

1. オルガンとピアノの生産状況

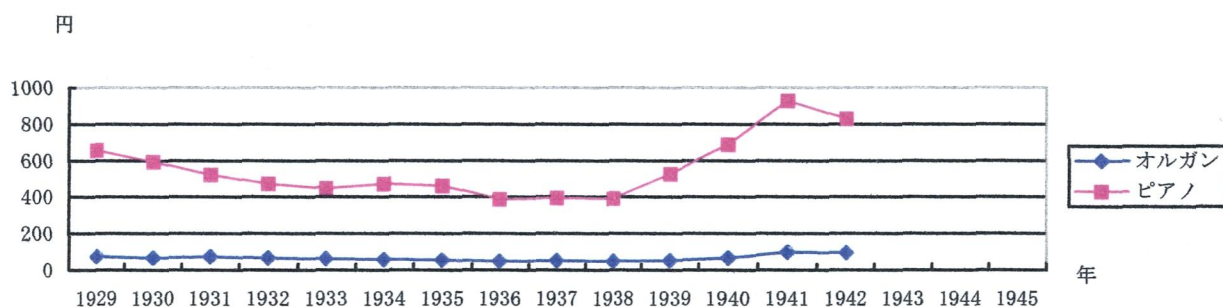
教科書の検討に入る前に、この時期のオルガンとピアノの生産数量（図Ⅱ-4-1）と平均価格（図Ⅱ-4-2）について押さえておきたい¹⁷。『データ・音楽・につぼん』によると、1936（昭和11）年、オルガンの平均価格は49.7円、ピアノの平均価格は391.8円と最低値となる。翌年の1937（昭和12）年には、オルガンの生産数量は19,955台、ピアノの生産数量は7,515台とピークに達する¹⁸。

西原は、1932（昭和7）年以降のピアノの価格が下落する原因として、「ピアノの量産が軌道に乗ってピアノの価格が下落したこと、昭和2年に河合小市が山葉寅楠から袂を分かち、河合楽器研究所を設立するなど、価格競争が行われたこと」を指摘している¹⁹。



岡山女8 → 12 → 20 台

図Ⅱ-4-1 戦前のオルガンとピアノの生産数量
出典 増井敏二『データ・音楽・につぼん』1980年、15頁。



図Ⅱ-4-2 戦前のオルガンとピアノの平均価格
出典 増井敏二『データ・音楽・につぼん』1980年、15頁。

2. 師範学校へのオルガン・ピアノの導入

第Ⅰ部第1章で概観した通り、音楽取調掛への楽器購入依頼の第一号は、1881（明治14）年11月8日に風琴1台を注文した千葉県女子師範学校である²⁰。

例えば、岩手師範学校²¹では、1884（明治17）年にオルガンが購入されたのを発端に、1921（大正10）年頃に堅型ピアノ、1923（大正12）年にグランドピアノが導入されている²²。

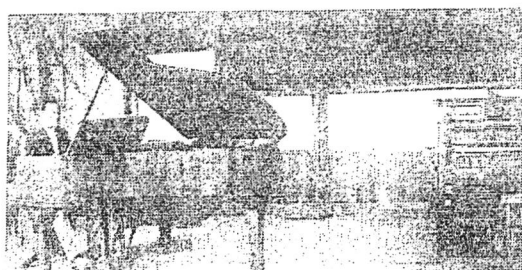
一方、黒沢隆朝によると、1912（明治45）年、在学していた秋田県師範学校にはスタインウェイのグランドピアノが講堂に置かれていたそうである²³。1921（大正10）年、黒沢が東京音楽学校甲種師範科卒業後に就職した、

高知県師範学校にはまだピアノがなく、その年度の途中頃に、やっと老舗のグランドピアノが音楽教室に設置されたとのことである²⁴。

次に事例対象である香川と岡山のケースをみる。

1890（明治 23）年、香川県尋常師範学校の開校式の式次第には、「奏楽（ピアノ）」が含まれ²⁵、1891（明治 24）年の第 2 回卒業証書授与式の中では、楠美恩三郎²⁶助教諭がピアノ奏楽を行っている²⁷。写真Ⅱ-4-1 は、1921（大正 10）年頃の香川県師範学校の音楽教室であり、グランドピアノが置かれている。

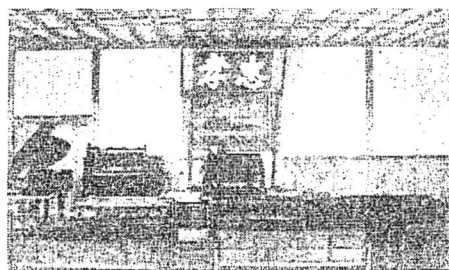
1912（明治 45）年 4 月、香川県師範学校から香川県女子師範学校が分離し、8 月、高松から坂出に移転する。その頃の講堂を写したものが、写真Ⅱ-4-2 である。これを見ると、講堂にはグランドピアノとオルガンが設置されていたことが分かる。その後 1927（昭和 2）年頃から、生徒は一人 50 銭を拠出し、1935（昭和 10）年にはピアノが 3 台と増える²⁸。



出典 『香川大学教育学部百年のあゆみ』1989 年，48 頁。

写真Ⅱ-4-1

1921（大正 10）年頃の香川県師範学校の音楽教室



講 堂 正 面

出典 『香川大学教育学部百年のあゆみ』1989 年，137 頁。

写真Ⅱ-4-2

1912（明治 45）年頃の香川県女子師範学校の講堂

一方、『記念誌岡山県女子師範学校』（1932）には、1929（昭和 4）年の時期を回顧したものが次のように掲載されている²⁹。

ピアノ一括購入の事、本校に這入つて間もない事である、当時校内にピアノ八台オルガン五十台あり、ピアノの実技演習の能率の大なる事近々小学校にもピアノの普及する事及女教員の特質發揮の意味から、ピアノ十二台を購入して二十台とし、オルガンを三十台に削減して数人に楽器一台を与えピアノは四年以上二部に使用させる目的であつた。

当時一台七百円、一年半間に三台、四年半後に十二台、その手始めに三台を購入した。午前六時から、午後

六時まで鳴り続けた。

当時二台を有した男子師範が普通であるからこれで女子師範は全国で珍らしく多い方であろう。費用は従来通りの楽器使用料で足りたのである。他の学校からピアノ購入法を尋ねて来た位である。佐藤吉教諭^{マア}の教授力と相俟ち断然頭角を現はすだろう、

1932（昭和7）年頃において、ピアノ20台、オルガン30台を有している岡山県女子師範学校は、まれな事例といえよう。佐藤吉五郎の存在が大きい³⁰。

以下は、新福祐子『女子師範学校の全容』（2000）からオルガン・ピアノに関連する記述を拾い出したものである³¹。

- ・秋田県女子師範学校…1928（昭和3）年、卒業生、在校生の寄付金でオーストリア製ピアノ（ベーゼンドルファ）を購入。
- ・滋賀県女子師範学校…1923（大正12）年、ドイツピアノ1台寄付を受けた。滋賀県出身の久野久子によってピアノ開きを行った。
- ・兵庫県女子師範学校…1928（昭和3）年、同窓会からピアノの寄贈を受けた。

総括すると、ピアノは、1930（昭和5）年前までに師範学校へ導入されていた。岡山県女子師範学校の事例において顕著に示されていたように、ピアノの台数が増加するのは、1931（昭和6）年以降で、増井のピアノ生産量のデータ（図Ⅱ-4-1）と共通の傾向がみられる。

3. オルガン・ピアノ教科書の変遷

当初、音楽取調掛において、伝習生の洋琴（ピアノ）の教材として使用されていたのは、1880（明治13）年メーソン³²の着任によって移入された英語版『バイエルピアノ教本』であった³³。その際のカリキュラムについては、山住正巳³⁴、小林緑・西恒子³⁵、河口道朗³⁶、市川理恵³⁷、国府華子³⁸によって明らかにされている。一方、メーソンは東京師範学校、東京女子師範学校における唱歌教授では、洋琴（ピアノ）ではなく、風琴（オルガン）を用い、『バイエルピアノ教本』は使用しなかったといわれている³⁹。

1900（明治33）年、東京音楽学校の学科改正が行われ、従来の「師範部」は、本科とは別系統の「師範科」と改組され、中等学校の「音楽」の教員養成を目的とする「甲種師範科」と小学校の「唱歌」の専科教員養成を目的とする「乙種師範科」が誕生した⁴⁰。坂本麻実子は、「甲種と乙種のカリキュラム上の最大の相違点は、学習すべき鍵盤楽器の種類にあり、オルガンは甲種、乙種とも必修だが、ピアノは甲種のみ許された」と指摘する⁴¹。

ところで赤井は、日本最初の実用的オルガン教則本として、島崎赤太郎⁴²『オルガン教則本Ⅰ』（1899）を取り

上げ、「山葉のリードオルガンとともに師範学校でも盛んに使用され、全国に普及し、昭和初期には百版以上を重ねていた」と述べている⁴³。また、上野大輔は、「1899（明治 32）年に発行された島崎赤太郎の『オルガン教則本』は、日本最初の実用的なオルガン教則本であった。島崎の教則本は、特に師範学校において教員養成のために盛んに使用された」と言及している⁴⁴。山本文茂は、『バイエル教則本』で代用されていた従来のオルガン教育を根本から立て直し、わが国の実情に適し、かつ、オルガン固有の奏法・技術を有効に組織した名著であった」と評価している⁴⁵。実際に、村尾忠廣によると、1906（明治 39）年の愛知県師範学校において島崎赤太郎の教科書が使用されている⁴⁶。『オルガン教則本Ⅰ』の「緒言」は、以下の通りである⁴⁷。

世に書を編する程難きものはあらざらむ。殊に教科書は其の最たるものなるべし。余や嘗て音楽学校に在りて、専ら風琴を修め、今現に之を同校に受け、常に自らも修め、又人にも授く。世の教科書、程度分量順序等、其の当を得しもの殆寡し。是れ余の常に痛難する所なり。此の弊や独り本邦のみ然るにあらず。英に、独に、仏に、米に、又皆然りとなす。聊か試に其の然る所以を述べむか。其の編纂の目的たる、純ら音楽教育の為のみならず。或は花の晨、或は月の夕、家族団楽、朋友集会、一座娯楽の資料に供せむが為なり。聞く或は又一種の目的の為にも亦之を作れりと。偶音楽教育の為作れる者あるも、独は高尚に奔せ、米は浅薄に逸す。英も仏も亦自から一得一失の存するあり。概して之を許せば、外国編纂の書は本邦の士女に適せざるは殆ど一般の通弊たらむか。

本書は素より自ら完全善良のものとは信ぜず、然れども斯の点には深く観る所ありて以て、茲に編纂することを得たり、

抑風琴の奏法や、目に楽譜を見、手足同時に其の作用をなすものなり。其れ斯の如く此の三点に三箇の注意を要す。豈に手芸中最も至難のものにあらずや。

本書は、務めて其の程度の高さを避け、其の分量の少きに附く。而して其の順序の如きは、簡より繁に、易より難に、徐々として進み行くこととはなせり。

実に本書は音楽初歩の階梯に過ぎざるのみ。然れども学者此の階梯により、其の門に入り、其の堂に昇り自から漸く進みて其の蘊奥を極むるに至らば、余の本懐又何ぞ之に若かむや、

表Ⅱ-4-3は、1886（明治 19）年から 1942（昭和 17）年における文部省検定済教科書の中から、オルガン・ピアノ教科書を抽出して作成したものである。1910（明治 43）年度に限っては、文部省によって各師範学校で使用されたオルガン・ピアノ教科書が明らかにされているので、表Ⅱ-4-4に示した⁴⁸。

先ほども紹介したように、赤井や上野は、島崎の『オルガン教科書Ⅰ』について「師範学校でもさかんに使用され」と述べる。しかし、表Ⅱ-4-3には島崎赤太郎『オルガン教則本Ⅰ』が掲載されていない。ということは、島崎の『オルガン教科書Ⅰ』は、文部省の検定を受けていないということである。表Ⅱ-4-5に示したように、京都府師範学校の 1903（明治 36）年度教科用図書の中に、島崎赤太郎『オルガン教則本』が確認できる。しかし、

1912（明治45）年になると、田村虎蔵『オルガン教科書』へと変わり、表Ⅱ-4-4で示した内容と一致している。
愛知県第一師範学校の場合も同様である。愛知県第一師範学校では、1906（明治39）年には、島崎の『オルガン教則本』が使用されていたのに対し、1910（明治43）では天谷秀・多梅稚『初等オルガン教科書』⁴⁹が用いられている。

表Ⅱ-4-3 文部省検定済オルガン・ピアノ教科書の一覧

発行年月日	検定年月日	著者・図書名・発行者
1905 (M38). 1. 27 訂正再版	M38. 2. 7	天谷秀・多梅稚『初等オルガン教科書』西野虎吉
1907 (M40). 2. 4 訂正再版	M40. 2. 20	田村虎蔵『オルガン教科書』2巻, 安井清
1911 (M44). 10. 5 再版発行	M44. 11. 1	楠美恩三郎『オルガン軌範』共益商社書店
1911 (M44). 4. 25 訂正再版	M44. 11. 28	吉田信太『オルガン軌範教本』2巻, 三木佐助
1915 (T4). 4. 2 訂正再版	T4. 4. 15	中田章『オルガン教科書』共益商社書店
1916 (T5). 1. 7 修正再版	T5. 1. 17	共益商社書店『オーガン教本』共益商社書店
1916 (T5). 3. 25 訂正再版	T5. 4. 14	天谷秀『中等オルガン教科書』鈴木常松・鈴木常次郎
1917 (T6). 1. 23 修正再版	T6. 1. 26	共益商社書店『続オーガン教本』共益商社書店
1917 (T6). 1. 28 訂正再版	T6. 2. 2	田村虎蔵・吉田信太『オルガン教科書』松邑孫吉
1917 (T6). 3. 1 訂正再版	T6. 3. 20	開成館音楽課『実用オルガン教本』三木佐助
1917 (T6). 2. 28 訂正再版	T6. 4. 9	音楽研究会『新撰オルガン教科書』三木佐助
1918 (T7). 1. 26 訂正再版	T7. 1. 31	楠美恩三郎『オルガン, ピアノ教科書』高井徳造
1920 (T9). 3. 25 再修訂11版	T9. 6. 25	中田章『オルガン教科書』共益商社書店
1923 (T12). 12. 12 再修35版	T13. 2. 16	共益商社書店『オーガン教本』共益商社書店
1924 (T13). 6. 20 訂正再版	T13. 7. 17	田中銀之助『標準オルガン教本』三木佐助
1928 (S3). 1. 27 修正再版	S3. 2. 2	小笠原良造『新撰オルガン学習教本』大蔵廣三郎
1930 (S5). 12. 7 修正再版	S5. 12. 20	真篠俊雄『初等オルガン教科書改訂版』三木佐助
1931 (S6). 2. 20 修正10版	S6. 2. 28	高折宮次・平田義宗『バイエル新訂教則本』平田義宗
1931 (S6). 11. 1 再訂修正	S6. 11. 9	楠美恩三郎・楽書刊行協会『オルガン・ピアノ教科書』高井徳造
1931 (S6). 11. 7 訂正	S6. 11. 25	楽書刊行協会『昭和オルガン教科書』高井徳造
1932 (S7). 3. 15 修正再版	S7. 3. 22	宮原禎次・林松木『昭和ピアノオルガン教本』三沢朝一
1932 (S7). 6. 27 修正27版	S7. 7. 9	萩原英一『バイエルピアノ教則本』共益商社書店
1933 (S8). 2. 10 修正再版	S8. 2. 21	萩原英一『ピアノオルガン音階指づかひ教本』共益商社書店
1933 (S8). 9. 15 修正再版	S8. 10. 3	小笠原良造『新選ピアノ教本』大倉克次
1933 (S8). 10. 7 修正再版	S8. 10. 19	高折宮次『ピアノ新教本』東洋図書
1933 (S8). 12. 23 訂正再版	S9. 1. 24	島崎赤太郎・白井保男『新訂オルガン教科書』共益商社書店
1933 (S8). 11. 15 修正再版	S9. 2. 22	萩原英一『ソエルニー (30 番) ピアノ教本』共益商社書店
1934 (S9). 3. 5 訂正再版	S9. 3. 13	田村虎蔵『最新オルガン教科書』松邑孫吉
1936 (S11). 3. 22 修正再版	S11. 3. 28	真篠俊雄・草川宣雄『オルガン新教本』東洋図書
1936 (S11). 6. 5 再版訂正	S11. 6. 24	楽書刊行協会『昭和オルガン教科書再訂』高井徳造
1936 (S11). 11. 15 訂正再版	S11. 11. 30	高折宮次・真篠俊雄『初等ピアノ, オルガン教科書』三木佐助
1938 (S13). 2. 22 修正再版	S13. 3. 2	真篠俊雄・草川宣雄『高等オルガン新教本』東洋図書
1940 (S15). 7. 19 修正再版	S15. 8. 28	黒沢隆朝・小川一朗『標準オルガン教則本』2巻, 共益商社書店

出典 文部省『検定済教科用図書表』から作成。

注 横線で実線の部分は、「師範学校教授要目」の改定を意味する。本研究対象時期は二重線以降。

表Ⅱ-4-4 1910（明治43）年度における師範学校で使用されたオルガン・ピアノ教科書

図書名	冊数	発行年月日	検定年月日	定価	著作者	発行者	使用師範学校
初等オルガン教科書	1	38. 3. 6	38. 3. 8	50	天谷秀・多梅稚	開成館	岩手男女, 長岡女, <u>愛知第一</u> , 愛知第二, 福岡, 熊本女, 滋賀, 長崎, 山形, 奈良男女, 鹿児島 男女, 香川, 池田, 天王寺, 大

							阪女, 三重, 大分女, 長野女, 岡山女, 高知男女, 石川, 佐賀男女, 青森
オルガン教科書	2	40. 2. 4	40. 2. 20	85	田村虎蔵	安井清	岩手女, 富山男女, 京都, 青山, 豊島, 東京女, 新潟, 福岡, 福岡女, 熊本, 群馬男女, 広島, 山形女, 徳島男女, 栃木, 静岡女, 千葉女, 福島, 愛媛男女
新編オルガン教科書		41. 11. 31		50	天谷秀	鈴木常松	京都女, 三重女, 岡山, 徳島, 愛媛
ピアノオルガン手ほどき	1	39. 6. 18		30	石原重雄	富山房	長岡女
ピアノオルガン楽譜	1	32. 6. 22		50	音楽学校	大日本図書	長岡女, 熊本女, 群馬女
撰定オルガン教本	1	42. 7. 5	42. 7. 6	50	開成館音楽部	開成館	福岡女, 秋田男女, 池田, 福島, 愛媛女, 山梨男女, 青森
オルガン教則書	1	37. 6. 22		50	島崎赤太郎	白井直	長野
風琴階梯	1	36. 5. 3		50	田村虎蔵・多梅稚	中村善吉	福島

出典 文部省『師範学校中学校高等女学校 使用教科図書表 明治43年度』1912年, 142-147頁(『師範学校・中学校・高等女学校使用教科図書表 明治43年度 文部省』教科書研究資料文献第十一集, 芳文閣, 1992年復刻版使用)。

注 発行, 検定の年号は明治。使用師範学校の欄で, 男女の明記のないものはすべて男子部。下線は筆者による。

表Ⅱ-4-5 京都, 奈良, 滋賀, 福岡の師範学校で使用されたオルガン・ピアノ教科書の推移

年度	京都府師範学校	奈良県師範学校	滋賀県師範学校	福岡県内師範学校
1903 (M36)	多梅稚『風琴階梯』(1903) 島崎赤太郎『オルガン教則本』(1899)	多梅稚『風琴階梯』(1903)	『初等オルガン教科書』	楠美恩三郎『オルガン軌範』(1911)(福岡一部) 吉田信太『オルガン軌範教本』(1911)(福岡二部)
1910 (M43)		天谷秀・多梅稚『初等オルガン教科書』(1905)		
1912 (M45)	田村虎蔵『オルガン教科書』(1907)	天谷秀・多梅稚『初等オルガン教科書』(1905)		
1913 (T 2)				
1918 (T 7) 1919 (T 8)				音楽研究会『新撰オルガン教科書』(1917)(小倉) 共益商社『オール ^ア ルガン教科書』(1916)(小倉)
1920 (T 9)	楠美恩三郎『オルガン、ピアノ教科書』(1918)		田中銀之助『標準オルガン教本』(1924)	
1924 (T13)				
1925 (T14)	楠美恩三郎『ピアノ、オルガン教本』			
1931 (S 6)	真篠俊雄『初等オルガン教科書』(1930)			
出典	『京都府師範学校沿革史』1938年。	『奈良県師範学校五十年史』1940年。	『滋賀県師範学校六十年史』1935年。	平田宗史『福岡県教員養成史研究——戦前編』1994年。

1931（昭和6）年から1942（昭和17）年においては、文部省検定済のオルガン・ピアノ教科書が15種類発行されている。15種類を図書名で大別すると、オルガン教科書が7種類、オルガン・ピアノ教科書が4種類、ピアノ教科書が4種類となる。師範学校が昇格した1943（昭和18）年には、国定である文部省『師範器楽 本科用巻一』に結実する。

なお、第1章で掲載した表Ⅱ-1-7の「文部省選定昭和17年度中等学校・青年学校音楽教科書」の一覧を再度みると、国定教科書の『師範器楽 本科用巻一』（1943）が発行される直前の時期には、『バイエルピアノ教則本』『ツェルニー（30番）ピアノ教本』『標準オルガン教則本』が出回っていたことが分かる。その他、『標準師範学校音楽教科書』にも「楽器奏法練習」が含まれている。これについては次節で分析をしたい。

第3節 黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』(1938)における器楽

本節の目的は、1938（昭和13）年に共益商社書店から発行された黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』における器楽の内容を明らかにすることである⁵⁰。

編者の一人である黒沢隆朝は、音階の発生に関する「黒沢学説」を発表するなど、民族音楽学者としての活躍は広く知れ渡っている⁵¹。東南アジアの音楽の研究を中心に取り組んでいた黒沢は、『楽器大図鑑・西洋編』⁵²、『西洋楽器の歴史』⁵³、『楽器の歴史』⁵⁴、『図解世界楽器大事典』⁵⁵等、楽器学に関しても多くの著書がある。

国民学校における器楽指導の開始の動向ならびに編者の一人が黒沢であることから、『標準師範学校音楽教科書』において楽器に対する斬新な視点が含まれているのではないと思われる。そこで本節では、『標準師範学校音楽教科書』における器楽の掲載部分に着目して検討する。

1. 『標準師範学校音楽教科書』における器楽教材の検討

第1章で紹介した通り、『標準師範学校音楽教科書』は、「教材歌曲」「読譜基礎練習」「楽典及び音楽に関する理論」「楽器奏法練習」「主要音楽家の小伝」「鑑賞用名曲」「解説」等で構成されている。器楽に関する内容は、次の二つの項で扱われている。

- ・「解説」
- ・「楽器奏法練習」

「解説」では各楽器が写真や絵、簡単な説明文を交えて紹介されている。「楽器奏法練習」ではピアノ・オルガン奏法の基礎的な伴奏技術の取得のための曲が掲載されている。

(1) 「解説」の中の楽器

それでは「解説」の項について検討したい。表Ⅱ-4-6は、その一覧である。

表Ⅱ-4-6 『標準師範学校音楽教科書』における「解説」の中の楽器

編	p.	項	楽 器	説明
一	2	ピアノとピアノ音楽 (一)	ハックブレット、クラヴィコールド、スピネット、ハーブシコールド、クリストフォーリの最初のハムマーピアノ	発達
	3	ピアノとピアノ音楽 (二)	グランドピアノ、アブライトピアノ	発達
	7	打楽器 (その一) 太鼓	未開人種の太鼓各種、大太鼓、タンボリン、小太鼓、ティンパニー、打楽器セット	発達
	10	オルガンの発達 (一)	パイプオルガン、コンソール	
	11	オルガンの発達 (二)	シリックス、リードオルガン、ベビーオルガン	生成
	19	打楽器 (その二)	カスタネット、シンバル、トライアングル、チャイム、リラベル、チェレスタ、シロフォン (木琴)、グロッケンスピール、ヴィブラフォン	

	44	木管楽器（一）	ファゴット、オーボエ、バスクラリネット、バセットホルン、クラリネット、フリュート、サキソフォーン、イングリッシュホルン、ベームフリュート	
	45	木管楽器（二）	クラリネット、バスクラリネット、フリュート、イングリッシュホルン、オーボエ、サキソフォーン	
	98	弦楽器（一）	ギター、バンジョー、バラライカ、リュート、テオルベ、キタローネ、ヴィオラダモーレ、ヴィオラダカムバ	
	99	弦楽器（二）	リュートとクラヴィコールドの合奏、ヴァイオリン、ヴィオラ、ハーブ、コントラバス、ヴィオロンチェロ	
二	3	雅楽	箏、龍笛、鳳笙、神楽笛、高麗笛、楽琵琶、楽箏、和琴、羯鼓、楽太鼓、鉦鼓、笏拍子	楽器
	68	金管楽器（一）	フレンチホルン、コルネット、トラムペット、スライドトロンボーン、スーザホーン、バリトン、バスチューバ	
	69	金管楽器（二）	軍楽隊プラスバンド	

楽器の分類方法としては、ピアノ、オルガンを別扱いにし、打楽器、木管楽器、弦楽器、金管楽器というように、西洋楽器を基準に行っている。打楽器の中には、タンバリン、カスタネット、トライアングル等のリズム楽器も含まれている。第一編では、ピアノ、オルガンを除いて考えると、打楽器、木管楽器、弦楽器の順に掲載されている。これは、黒沢の『西洋楽器の歴史』によると、楽器の発達に基づいた「発生的分類」に当たる⁵⁹。

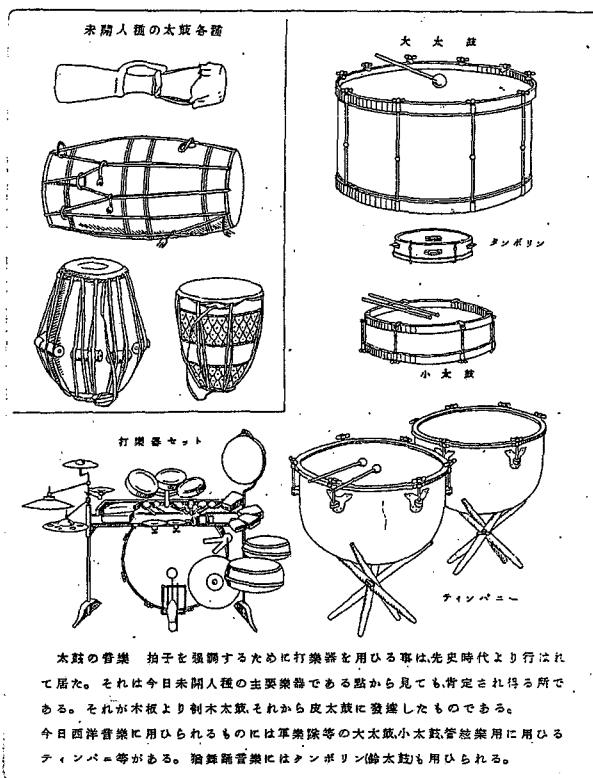
表Ⅱ-4-7に示した通り、ピアノ、打楽器、オルガンについては各楽器の発達、生成に関する記述が見られる。図Ⅱ-4-3は、『標準師範学校音楽教科書』第一編7ページ、「打楽器（その一）太鼓」の項である。今日の西洋音楽で用いる大太鼓等の打楽器5種類と並んで、「未開人種の太鼓各種」が掲載されている。このように楽器について文字だけではなく、視覚的にも理解できるよう掲載の工夫が見られる。

なお、第二編については3ページに「雅楽」が取り扱われている。日本の楽器が紹介されているのは、この箇所だけである。図Ⅱ-4-4に示した通り、雅楽の楽器について絵を用いて紹介している他、「越天楽」の譜例を挙げている。

表Ⅱ-4-7 楽器の発達に関する記述

p.	楽器	記 述
7	打楽器	拍子を強調するために打楽器を用いる事は、先史時代より行われていた。それは今日未開人種の主要楽器である点から見ても、肯定され得る所である。それが木板より削木太鼓、それから皮太鼓に発達したものである。
12	オルガン	古代民族は葦笛を並べてパンの笛（今日猶未開人種に用いられている）が作られた。それに箱が取り付けられ、鍵が装置され、送気装置が施されてオルガンが出来たのである。
2	ピアノ	オルガンの鍵盤は古くから発達したものであるが、これに準へてハーブの如き弦楽器に鍵盤を工夫したのがピアノ発明の動機である。

出典 『標準師範学校音楽教科書』第一編。



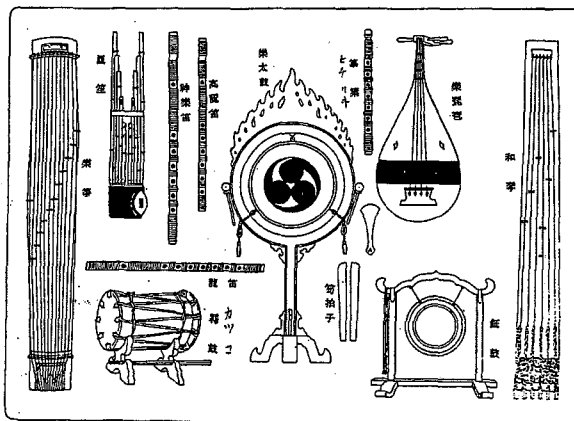
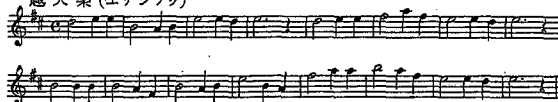
図Ⅱ-4-3 【解説】 打楽器（その一）太鼓 （第一編7頁）

【解 說】

雅樂……雅樂の名はもと市井の卑俗なる音楽に對して、雅正なる音楽を意味するために用ひられた語である。今日雅樂とよぶものは宮内省雅樂部に於て演奏せられる、古來宮中に傳はつた音楽をいふのである。

之には神樂、久米歌の如き聲樂あり、蘭陵王、太平樂の如
きは舞樂あり、又萬歲樂、越天馬の如き管絃樂がある、樂器等
は管に笛、笙、篳篥、笙、箏等の三管、それに神樂、高麗笛等鼓
あり、弦に琵琶、樂琴、和琴等があり、打物に樂太鼓、鉦鼓
羯鼓の三鼓等である。之等は音樂の種類によつてその編成も
も差異あるものである。

越天樂 (エテンラク)



図Ⅱ-4-4 【解説】 雅楽 (第二編3頁)

(2) 楽器奏法練習

次に「楽器奏法練習」の項について検討したい。表Ⅱ-4-8は第一編（全47曲）、表Ⅱ-4-9は第二編（全24曲）に掲載されている「楽器奏法練習」の音楽的特徴を一覧にしたものである。「楽器奏法練習」が他の活動にも利用されている場合、「関連」の欄にその活動名を記入した。また、「備考」の欄では、強弱記号が使用されている場合、「強弱」と表記している。全71曲ともピアノ・オルガン奏法習得のための曲に限定され、他の楽器のための曲は一切ない。表Ⅱ-4-8、表Ⅱ-4-9から次の点が指摘できる。

- ・作曲者の不明なものは、第一編では33曲（70.2%）、第二編では7曲（29.2%）であった。このような偏りが見られるのは、第一編では右手練習、左手練習、両手練習、音階練習等の訓練的な曲が多いためである。それに対して第二編では、Mozart や Beethoven といった西洋の作曲家によってつくられた名曲が使用されている。『バイエルピアノ教則本』に掲載されている練習曲は、第一編で4曲（8.5%）、第二編で1曲（4.1%）、計5曲（7.0%）用いられている。なお、『バイエルピアノ教則本』の練習曲は、他の師範学校用オルガン教科書の中でもしばしば使用されていた⁵⁷。
- ・全71曲のうち、68曲が長調の曲である。ハ長調の曲は29曲（40.8%）である。
- ・歌唱との関連の見られる曲は、第一編では4曲（8.5%）、第二編では2曲（8.3%）の計6曲（8.5%）である。鑑賞との関連の見られる曲は、第一編では3曲（6.4%）、第二編では5曲（20.8%）の計8曲（11.3%）である。

表Ⅱ-4-8 黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』第一編における「楽器奏法練習」の音楽的特徴

番	表題	作曲者	拍子	調	小節	標語	速度	関連	備考
1	ピアノ・オルガン奏法								
2a	右手練習		4/4	C	13				
2b	左手練習		4/4	C	13				
2c	右手練習		4/4	C	8				
2d	左手練習		4/4	C	8				
2e	両手練習		4/4	C	6				
3	蜂がなく	ドイツ民謡	4/4	C	12				ユニゾン
4	Lightly Row		4/4	C	16	Allegretto	112	歌唱	ユニゾン
5	The Cuckoo		3/4	C	12	Allegretto	132	歌唱	
6	五指練習		4/4	C	10				ユニゾン
7	分散和音の練習（左手）								I, IV, V
8	見わたせば	J. J. Rousseau	4/4	C	17				強弱
9	歌劇「オルフェオ」のアンダンテ	Gluck	3/4	C	9	Andante		鑑賞	強弱
10			4/4	C	13				
11	行進曲		4/4	C	24	Moderato			強弱
12		Beyer	4/4	G	8				強弱
13	誕生日行進曲		4/4	G	25				強弱
14	ワルツ調		3/4	G	32				強弱
15		Beyer	3/4	C	17	Allegretto			
16	英国国歌	H. Carey	3/4	G	14	Moderato		歌唱	強弱
17		Beyer	4/4	C	20				
18			4/4	C	11				
19a			4/4	F	9				
19b			4/4	F	12	Moderato			
19c			4/4	C	8	Moderato			強弱
20	紅葉	新訂尋常小学唱歌	4/4	F	16			歌唱	
21			4/4	D	10				
22	Old Folks at Home	Foster	4/4	D	16	Moderato			強弱
23a			4/4	C	6				
23b			4/4	C	16				
23c			4/2	C	6				右手練習
23d			4/4	C	7				右手練習
24	人魚の唄	Weber	6/8	G	36	Andante con moto		鑑賞	強弱
25a		Beyer	3/4	D	16	Moderato			強弱
25b		Kohler	3/4	D	16	Allegretto			
26			4/4	B	15				
27	聖夜	Franz Gruber	6/8	B	12				強弱
28a	ハ調長音階		4/4	C	7				
28b	イ調和声的短音階		4/4	a	7				
28c	イ調旋律的短音階		4/4	a	7				
29		Beethoven	6/8	a	16	Andantino			強弱
30	四重奏曲「死と少女」より	F. Schubert	2/2	B	24	Andante con moto		鑑賞	強弱
31	五指練習		4/4	C	5				
32	行進曲		4/4	G	16				
33	音階練習		4/4	Es	7				
34			4/4	Es	17				強弱
35	音階練習		4/4	E	7				
36			3/4	E	13	Allegretto			強弱
37			3/4	E	8	Andante			強弱

表Ⅱ-4-9 黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』第二編における「楽器奏法練習」の音楽的特徴

番	表題	作曲者	拍子	調	小節	標語	速度	関連	備考
1	両手重音練習		4/4	C	16	Allegretto			強弱
2	歌劇「魔の弾丸」より	Weber	4/4	C	16	Andante			強弱
3	春のほほえみ (Waltz)	M. Depret	3/4	F	36	Allegretto			強弱
4	行軍	R. Schumann	2/4	G	32	Con moto e ben marcato			強弱
5	右手換指練習		4/4	C	9				
6			4/4	F	16				強弱
7			6/4	G	16				強弱
8	ラルゴ「新世界交響曲」より	A. Dvorak	4/4	Es	15	Largo	52		強弱
9	菩提樹	F. Schubert	3/4	F	18	Moderato		歌唱	
10		Beyer	4/4	G	24	Moderato			強弱
11	「ウィリアム・テル」の牧歌調	G. Rossini	3/8	G	28	Andante			
12	歌劇「トロヴァトーレ」より	G. Verdi	6/8	Es	24	Andante		鑑賞	強弱
13	音階練習		4/4	As	9				
14	子守歌	J. Brahms	3/4	As	16			歌唱	
15	音階練習		4/4	A	9				
16			4/4	A	24	Moderato			
17	「ピアノソナタ」の主題	Mozart	6/8	A	18	Andante grazioso	120	鑑賞	強弱
18	ミヌエット (歌劇「ドン・ジョヴァンニ」より)	Mozart	3/4	G	16	Allegretto			強弱
19	土耳其行進曲	Beethoven	2/4	C	46	Allegro		鑑賞	強弱
20	送葬行進曲	Beethoven	4/4	c	32	Maestoso			強弱
21	舟唄	Otto Hackh	6/8	C	56	Allegretto moderato			強弱
22	アンダンテ・カンタービレ	Tschaikowsky	2/4	B	33			鑑賞	強弱
23	歌劇「タンホイザー」中の順礼の合唱	R. Wagner	3/4	E	28	Andante maestoso			強弱
24	フーガ	J. S. Bach	3/4	B	55	Fugue	84	鑑賞	強弱

2. 「解説」と「楽器奏法練習」との関係性

では、どのような学習順序で「楽器奏法練習」が展開されていたのか。また、先ほど検討した「解説」との関係性はまったくなかったのか。これらの点を明らかにするために、第一編の1から23ページの教材配列の方法について検討したい。なおこのページを抽出したのは、次の理由からである。

- ・楽器奏法練習の導入の部分に該当するため、ピアノやオルガンの初学者がどのような方法で学習を進めていくかについて考察できる点。
- ・「解説」と「楽器奏法練習」との関連性が見られる唯一の場所である点。

表Ⅱ-4-10に示した通り、「楽器奏法練習」は12ページから始まっているのに対して、「解説」では2, 3ページでピアノを、10, 11ページでオルガンを扱っている。つまり、ピアノ・オルガン奏法の実技の学習に入る前に、楽器の発達や構造等について学べるように教材配列がなされている。楽器の発達の視点から考えると、「解説」の項の最初には打楽器が本来置かれるべきだが、ここではピアノが最初となっている。「楽器奏法練習」を開始する前に、何とかピアノとオルガンを概観させたいという編纂者の意図が読み取れる。これは、他の師範学校用オルガン・ピアノ教科書に比べ、『標準師範学校音楽教科書』の大きな特徴となっている。

「楽器奏法練習」の学習の順序として、12 ページ「ピアノ・オルガン奏法」の項で、姿勢、運指法、踏板の踏み方、増音器、音栓について学習する。その後、13 ページ「五指練習」の中で、右手練習、左手練習、両手練習へと進む（譜例Ⅱ-4-1）。

表Ⅱ-4-10 「解説」と「楽器奏法練習」との関係性

P.	解説	楽器奏法練習	教材歌曲	鑑賞歌曲	楽理	参考
1					鍵盤と音名	
2	ピアノとピアノ音楽 (一)					
3	ピアノとピアノ音楽 (二)					
4					音符と休符	楽譜の発達
5					譜表と音部記号	"
6			A B C		拍子	
7	打楽器 (その一) 太鼓					
8					長音階と音程	階名の起源
9			春露			
10	オルガンの発達 (一)					
11	オルガンの発達 (二)					
12		ピアノ・オルガン奏法				
13		五指練習、蜂がなく				
14			靖国神社			
15		Lightly Row	Lightly Row			
16			なみ風			
17		The Cuckoo	The Cuckoo			
18		五指練習			八分音符によるリズム	
19	打楽器 (その二)					
20		分散和音の練習	五月の野邊			
21		見わたせば				
22		"			楽曲の最小形態 (一部分形式)	
23		歌劇「オルフェオ」の アンダンテ 練習曲		グルック 歌劇「オルフェオ」 のアンダンテ ガヴオット		

注 網掛けは筆者による。

譜例Ⅱ-4-1 五指練習 (第一編 13 頁)

13

【楽器奏法】2 五 指 練 習

a 右手練習

b 左手練習

c 右手練習

d 左手練習

e 両手練習

以上、『標準師範学校音楽教科書』における器楽について検討してきた。検討の結果、次の2点が指摘できる。

- 1) 『標準師範学校音楽教科書』では理論を主とする「解説」と実技を主とする「楽器奏法練習」との項で楽器が取り上げられている。ピアノ、オルガンについては「解説」と「楽器奏法練習」との相互の関係性が見られる。「楽器奏法練習」では、歌唱と鑑賞との関連が図られて編纂されている。
- 2) 「解説」の項では、「雅楽」を除き西洋楽器で占められている。各楽器は、黒沢の提唱した「発生的分類」に基づいて分類されている。打楽器、オルガン、ピアノについては、楽器の絵や写真の他、楽器の発達や構造に関する解説が加えられている。

なお、1940（昭和15）年には、黒沢隆朝・小川一朗『標準オルガン教則本』第一編・第二編（昭和15年8月28日、文部省検定済、師範学校・高等女学校音楽科）が出版された⁵⁸。「緒言」に「本書はオルガン音楽の理解の他に、ピアノ演奏の基礎となる可き練習曲をも多数に加へた」と記されている通り、ピアノ演奏にも対応できるオルガン教科書である⁵⁹。『標準師範学校音楽教科書』同様、オルガンやピアノの発達や構造に関する解説が掲載されている。また、作曲家、曲名等の解説が加えられ、鑑賞指導との関連が図られている。

第4節 文部省『師範器楽 本科用巻一』（1943）

1. 『師範器楽 本科用巻一』の特徴

師範学校が官立専門学校程度へと昇格する1943（昭和18）年には、「師範学校教科教授及修練指導要目」（1943）に基づき、国定教科書の文部省『師範器楽 本科用巻一』が作成される⁶⁰。

編纂の様子については、木村信之が橋本清司に行ったインタビューの中で以下のように記されている⁶¹。

橋本：それから『バイエル』流の、オルガン・ピアノ教則本もできたんです。

木村：オルガンやピアノ用の教則本ですか。

橋本：ええ、当時はできるだけわが国の教材でという考えなんです。高折先生もついていらしたから、できた曲をいちいちひいて、「これは使える」「使えない」とやって。

（中略）

木村：それはぜひ見たいものですね。その教科書の曲は、どういう先生がおつくりになったのですか。

橋本：ほとんど他には依頼せずに、委員の先生がおおかたやってしまったと思っています。でも若干はほかに頼んだかもしれない。

第Ⅱ部第1章で検討した通り、1943（昭和18）年の「師範学校音楽科講習会」では、高折宮次が「器楽及伴奏ニツイテ」の科目を担当し、木村のインタビューとも重なる。したがって、『師範器楽 本科用巻一』の編纂は、高折が中心となって行ったと考えられる。

しかし、『師範器楽』には「緒言」に当たる文章がないため、編纂趣旨は明らかでない。

表Ⅱ-4-12は、『師範器楽』における練習曲、76曲についての調性、拍子、小節数、発想標語、形式、シンコーペーションの有無、音域、作曲技法の分類、分散和音の有無について一覧にしたものである。なお、作曲技法の分類については、表Ⅱ-4-11に示すように行った。分類の方法は、山本文茂の国民学校「芸能科音楽」教師用指導書の伴奏譜に対する分類方法を参考とした⁶²。

表Ⅱ-4-11 作曲技法の分類の方法

i	コラール風
ii	分散和音
iii	右手：旋律，左手：和音
iv	ユニゾン
v	バッテリーリズム
vi	その他

注 バッテリーリズム…あるリズムフレーズを二つのパートに分けて表現する形。野球の投手と捕手が互いにボールをやり取りしている感じをなぞらえている（『小学生の音楽2 指導書研究編』教育芸術社、2002年、37、52頁）。

表Ⅱ-4-12 『師範器楽』の音楽的特徴

番		調性	拍子	小節数	発想標語	形式	シンコペーション	音域	作曲技法の分類	分散和音
3	両手練習	C	4/4	9		1		c1-g2	iv	
4		C	4/4	11		1		c1-g2	iv	
5		C	3/4	11		1		c1-g2	iv	
6		C	4/4	8		1		c1-g2	iv	
7		C	4/4	8		1		c1-g2	vi	
8		C	4/4	8		1		c1-g2	vi	
9		C	3/4	8		1		c1-g2	vi	
10		C	4/4	8		1		c1-g2	vi	
11		C	4/4	8		1		c1-g2	ii	○
12		C	4/4	16		2		c1-g2	ii	○
13		C	3/4	16		2		c1-g2	vi	
14		C	4/4	16		2		c1-g2	vi	
15		C	4/4	16		2		c1-g2	vi	
16		C	3/4	16		2		c1-g2	vi	
17		C	4/4	16		2	○	c1-g2	vi	
18		C	4/4	16		2		c1-g2	vi	
19		C	4/4	16		2		g-g2	ii	○
20		C	4/4	16		2		g-g2	vi	
21		C	4/4	15		2		g-g2	vi	
22		C	3/4	24		3		h-g2	ii	○
23		C	2/4	16		2		h-g2	ii	○
24		C	3/4	16		2		h-g2	ii	○
25		C	4/4	20		3		h-g2	ii	○
26		C	6/8	24		2		h-g2	ii	○
27		C	4/4	24		2		h-g2	ii	○
28		C	4/4	16		2		h-g2	ii	○
29		C	2/4	16		2	○	g-g2	ii	△
30		C	4/4	20		3		g-g2	ii	○
31	ハ調長音階	C	4/4	11		1		c-c2	vi	
32		C	4/4	11		3		c-c2	vi	
33		C	4/4	14		3	○	c-c2	vi	
34		G	3/4	16		2		g-e2	vi	
35		C	2/4	16		2		c-c2	vi	
36		C	4/4	11		3	○	c-d2	vi	
37		C	3/4	15		2		c-c2	vi	
38		C	4/4	11		1		c-c2	vi	
39		G	3/4	16		2		g-e2	ii	○
40		G	3/4	64		2		g-g2	ii	○
41		C	4/4	8		1		c1-d3	iv	
42		G	4/4	12		3		g-d3	ii	○
43		G	3/4	20		2		g1-d3	vi	
44		C	4/4	12		3	○	c-a1	vi	
45		C	3/4	12		1	○	c-f2	vi	

46		C	2/4	24		3		h-d3	ii	○
47	(イ短調)	a-m	4/4	13		1	○	A-a1	vi	
48	(イ短調)	a-m	3/4	16		2		e-g2	ii	○
49		C	2/4	20		2		H-c2	iii	
50	ト調長音階	C	2/2	8		1		G-a2	vi	
51		G	2/2	7		1		c-e2	vi	
52		G	3/4	16		2		f-h2	ii	○
53	(ホ短調)	e-m	4/4	5		1		dis-e2	iii	
54	(ホ短調)	e-m	4/4	6		1		e-e2	vi	
55		e-m	6/8	24	やはらかに	3	○	E-h2	vi	
56	ヘ調長音階	F	3/4	16		2		e-a2	vi	
57		F	4/4	7		1		A-d2	iii	
58		F	3/4	14		3		e-a2	iii	
59		F	4/4	23	早く楽しく	3		E-a2	ii	○
60		F	6/8	24	静かに	2		c-c3	ii	○
61	(ニ短調)	d-m	4/4	8		1	○	cis-e2	vi	
62		d-m	3/4	15	楽しく	3		cis-f2	ii	△
63		d-m	2/4	20	歯切れよく	2+		H-e2	vi	
64	ニ調長音階	D	4/4	16		2	○	G-d2	ii	△
65		D	3/4	24		3		d-h2	vi	
66		D	2/4	24	軽快に	3	○	c-h2	vi	
67		D	3/4	25		3	○	cis-e3	ii	○
68	(ロ短調)	h-m	6/8	12	静かに	3		Fis-d2	vi	
69		h-m	4/4	17	早く	2	○	f-h2	vi	
70		B	4/4	12		3	○	A-es2	vi	
71	変ロ調長音階	B	3/4	27	早く楽しく	3	○	B-f2	ii	△
72	(ト短調)	g-m	4/4	16		2	○	G-g2	vi	
73		g-m	6/8	18	軽く	2		G-a2	ii	○
74		C	3/4	24	軽快に	3	○	G-a2	ii	△
75		G	4/4	16	静かに	2		G-d2	ii	○
76		e-m	3/4	41	軽快に	3+	○	H-c3	ii	○
77		G	4/4	82	活発に	3+	○	G-c3	vi	
78		F	2/4	24	軽快に	3	○	c-c3	ii	○

注 ○：あり，△：一部あり。

表Ⅱ-4-12の分析を通して、音楽的特徴をまとめると、次の通りである。

- 1) 調性：ハ長調 40 曲 (52.6%)，ヘ長調 7 曲 (9.2%)，ト長調 6 曲 (7.9%)，ニ長調 5 曲 (6.6%)，ホ短調 4 曲 (5.3%)，ニ短調 4 曲 (5.3%)，変ロ長調 3 曲 (3.9%)，ロ短調 3 曲 (3.9%)，イ短調 2 曲 (2.6%)，ト短調 2 曲 (2.6%)。

これらの調性はすべて国民学校「芸能科音楽」で指導される範囲内である⁶³。ただし、国民学校「芸能科音楽」で重要視された日本音階でできた曲については『師範器楽』の中で使用されていない。

- 2) 拍子：4/4 が 39 曲 (51.3%)，3/4 が 22 曲 (28.9%)，2/4 が 8 曲 (10.5%)，6/8 が 5 曲 (6.6%)，2/2 が 2 曲 (2.6%)。「師範学校教科教授及修練指導要目」で示されていない 2/2 も含まれている。

- 3) 小節数：小節数には反復する小節も含めている。5～82の構成で、16小節でできた曲が21曲（26.9%）でもっとも多い。
- 4) 発想標語：15曲に日本語の発想標語が付いている。しかし、イタリア語の発想標語を和訳したものにはすぎない。「軽快に」が4曲（5.3%）でもっとも多い。なお、『師範音楽』の歌曲で使用されていた発想標語と比較すると、両教科書で共通しているものは、「軽快に」「静かに」である。
『師範音楽』で使用されていた「元氣よく」「力強く」「勇敢の心で」等の発想標語は、『師範器楽』ではみられない。
- 5) 形式：『バイエルピアノ教則本』同様、一部形式、二部形式、三部形式によって占められている⁶⁴。最初から11番までは一部形式、その後、二部形式、三部形式が加わっている。
- 6) その他：三連符は使用されていない。

なお、シンコペーションの有無、音域、作曲技法の分類、分散和音の有無については、次項以降、考察を進める中で取り上げたい。

2. 真篠俊雄編『改訂初等オルガン教科書』（1930）と『師範器楽 本科用巻一』（1943）との比較

『師範器楽 本科用巻一』は、本科第1学年向けの教科書であるので、「師範学校教科教授及修練指導要目」（1943年）の以下の規定に基づいて作成されている⁶⁵。

器楽ハ「ピアノ」又ハ「オルガン」ノ奏法ヲ習得セルモノト然ラザルモノトニ分チテ之ヲ授ケ前者ハ予科修了程度ニ準ジテ次第二其ノ程度ヲ進メ後者ハ初歩ヨリ始メテ予科二年修了程度マデ進マシム、

ここで問題となるのは、『師範器楽 本科用巻一』（以下、『師範器楽』と略記）が、「予科修了程度ニ準ジテ次第二其ノ程度ヲ進メ」る内容なのか、それとも「初歩ヨリ始メテ予科二年修了程度マデ進マシム」内容なのかということである。また、『師範器楽』が、ピアノ用教科書なのかオルガン用教科書なのか、はたまた、両者を併用した教科書なのかを明確にすることも重要な点であると思われる。

そこで、ここでは上記の疑問を解決するために、『師範器楽』（1943）と『改訂初等オルガン教科書』（1930）との比較を行う。『改訂初等オルガン教科書』（以下、『初等オルガン教科書』と略記）を比較対象としたのは以下の理由である。

- 1) オルガンを専門とする東京音楽学校教授、真篠俊雄が編集した教科書である点。実際に真篠俊雄は、東京音楽学校甲種師範科の生徒にもオルガン指導を行っていたため、卒業後、師範学校の音楽科教員になる生徒にも影響を与えたと考えられる⁶⁶。
- 2) 高折宮次と真篠俊雄との間に密接な関係がうかがえる点。実際に1936（昭和11）年に高折・真篠共編で『初

等ピアノ・オルガン教科書』(昭和 11 年 11 月 30 日, 文部省検定済)が発行されている⁶⁷。

- 3) 『初等オルガン教科書』が多く、の師範学校で使用されたと考えられる点。第 2 節で述べた通り、この教科書は京都府師範学校の 1931 (昭和 6) 年度教科用図書として列記されている⁶⁸。また、聞き取り調査によると、香川県師範学校でも使用されていた (聞き取り調査の結果は第 5 節で取り上げる)。

『初等オルガン教科書』は、1930 (昭和 5) 年、真篠俊雄によって編集された文部省検定済師範学校音楽教科書である (昭和 5 年 12 月 20 日, 文部省検定済, 師範学校・高等女学校音楽科用)。『初等オルガン教科書』の「緒言」は以下の通り。これを読むと、真篠の『初等オルガン教科書』は、1905 (明治 38) 年発行の天谷秀・多梅稚『初等オルガン教科書』(明治 38 年 2 月 7 日, 文部省検定済)を基に、島崎赤太郎らの影響を受けて作成されたことが分かる。

緒言

- 一、本書は師範学校高等女学校其他同一程度の学校のオルガン教科書に充てんがために編纂したるものなり。
- 二、本書の材料は唱歌教授との連絡を計らんがために難解なる楽曲を避け専ら簡易にして高尚而も趣味深き歌詞的のものを主として選択せり。
- 三、本書は実地教授上の便利を計り楽曲の排列及び順序等特に意を用ひたれども多少の変更は教授者の任意とす。
- 四、本書は大別して第一部を予備練習及二重音曲第二部を三十音及び四十音曲に分つ。
- 五、本書は故天谷秀並びに多梅稚兩氏の編纂せる初等オルガン教科書を基礎となし之れに修正を加へて編纂せり。
- 六、本書を編するに當り恩師島崎赤太郎並びにワルターフィッシャーの兩先生に謹しんで感謝の意を表す。

編者識

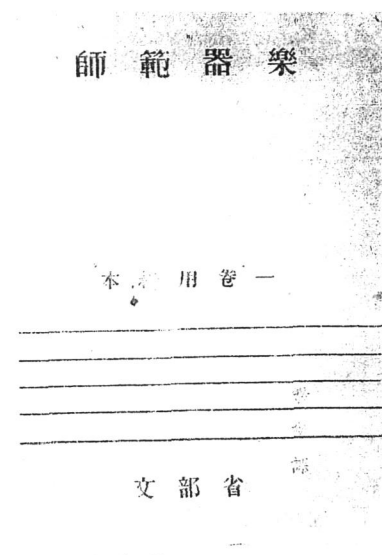
各教科書の概要については表Ⅱ-4-13 に示した (図Ⅱ-4-5, 図Ⅱ-4-6)。

表Ⅱ-4-13 『初等オルガン教科書』と『師範器楽』

著名	『改訂初等オルガン教科書』	『師範器楽 本科用巻一』
年	1930 (昭和 5) 年	1943 (昭和 18) 年
著・編者	真篠俊雄編	文部省
教科書	文部省検定済教科書	文部省国定教科書
発行	大阪開成館	師範学校教科書株式会社
ページ数	55 ページ	54 ページ
備考		同時期に『師範音楽 本科用巻一』が発行。



図Ⅱ-4-5 『初等オルガン教科書』表紙



図Ⅱ-4-6 『師範器楽』表紙

表Ⅱ-4-14 は、教科書の内容構成を表す⁶⁹。『初等オルガン教科書』は、「単音複音練習」や「スタッカート練習」といった演奏技術を項目に立てて編纂されている。それに対し、『師範器楽』では「ハ調長音階」に始まって「変ロ調長音階」というように音階別に編纂されている。音階について『初等オルガン教科書』では「は調長音階」「と調長音階」「へ調長音階」の3種類しか項目には挙がっていない。

表Ⅱ-4-14 教科書の内容構成

『初等オルガン教科書』 真篠俊雄 (1930)		『師範器楽』 文部省 (1943)		参 考	
				『オルガン教則本』 壺 島崎赤太郎 (1899)	『バイエルピアノ教則本』 萩原英一 (1924)
p.	第一部	p.		p.	p.
1	踏板練習	3	右手練習	1	右手練習
	右手練習	4	左手練習		21 左手練習
	左手練習	5	両手練習	2	25 両手練習
2	両手練習			3	44 八分音符の練習
8	五指練習			5	54 ハ長長音階
	左手練習			6	55 複音練習
10	増音器練習			9	56 ト調長音階
12	は調長音階	17	ハ調長音階 (イ短調)	12	58 三連音符
14	と調長音階	28	ト調長音階 (ホ短調)	16	59 ニ調長音階
16	へ調長音階	31	ヘ調長音階 (ニ短調)		61 イ調長音階
		36	ニ調長音階 (ロ短調)	17	63 ホ調長音階
		41	変ロ調長音階 (ト短調)	19	67 各音符の音長練習
18	五指練習			22	70 イ調短音階
	第二部			26	72 ヘ調長音階
19	単手複音練習			30	74 変ロ長調
21	スタッカート練習			33	80 半音階
22	換指練習				
46	音階	52	終止形の練習		83 指の練習
50	附録	54			89
55					

注 『初等オルガン教科書』と『師範器楽』で重複する項目には下線を付した。

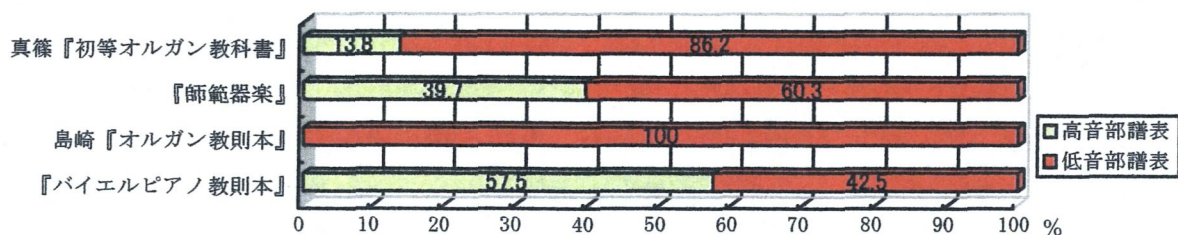
しかし、表Ⅱ-4-15 に示した通り、『初等オルガン教科書』に掲載されている練習曲の調性は、『師範器楽』よりも多様である。一方、『師範器楽』では、「ハ調長音階」「ト調長音階」「ヘ調長音階」「ニ調長音階」「変ロ調長音階」とそれぞれの平行調を扱っている。前述の通り、これらはすべて国民学校「芸能科音楽」で指導される範囲内である⁷⁰。

表Ⅱ-4-15 使用されている調

	『初等オルガン教科書』 全 87 曲		『師範器楽』 全 76 曲	
	%	曲	%	曲
C	46.0	40	52.6	40
F	9.2	8	9.2	7
G	12.6	11	7.9	6
D	4.6	4	6.6	5
e	1.1	1	5.3	4
d	1.1	1	5.3	4
B	3.4	3	3.9	3
h	2.3	2	3.9	3
a	2.3	2	2.6	2
g	2.3	2	2.6	2
A	4.6	4	0	0
Es	3.4	3	0	0
fis	1.1	1	0	0
c	1.1	1	0	0
E	1.1	1	0	0
cis	1.1	1	0	0
as	1.1	1	0	0
f	1.1	1	0	0

また、『初等オルガン教科書』では、附録として儀式唱歌が掲載されていたり⁷¹、練習曲の中でも『小学唱歌集』の旋律⁷²が使用されていたりといった初等教育との教材の関連が一部みられた。しかし、『師範器楽』は、木村が行ったインタビューでも話題になった通り、新作の練習曲によって構成され、国民学校の教材等は一切掲載されていない。

なお、低音部譜表が練習曲全体のどの部分で登場するかを示したのが、図Ⅱ-4-7である。『師範器楽』は、最初は右手左手とも高音部譜表を用い、31番で初めて低音部譜表が登場する。全練習曲の39.7%の地点で切り替わり、『バイエルピアノ教則本』より早いところで、低音部譜表が使用されている。



図Ⅱ-4-7 全練習曲に占める低音部譜表導入の位置

これ以降、次の視点に基づき比較を進める。

視点1：『師範器楽』は、「初歩ヨリ始メテ予科二年修了程度」の教科書か否か。

視点2：『師範器楽』は、ピアノ用の教科書か否か。

(1) 視点1：「初歩ヨリ始メテ予科二年修了程度」の教科書か否か

両教科書が初学者用か否かを明らかにするために、教科書の導入部分の比較を行う。

譜例Ⅱ-4-2の『初等オルガン教科書』では、「踏板練習」から始まり、「右手練習」「左手練習」と続き、「両手練習」へと展開していく⁷³。最初の「踏板練習」ではいきなり和音が使用されているため、初心者の生徒にとって難解である。しかし、その後の「右手練習」「左手練習」は換指の技術を必要としないため、無理なく練習することができたと考えられる。

一方、譜例Ⅱ-4-3の『師範器楽』では「右手練習」から始まり、「左手練習」「両手練習」へと展開されている。『初等オルガン教科書』の「右手練習」では2曲しか練習曲が掲載されていなかったのに対し、『師範器楽』では12曲掲載されている。同様なことは「左手練習」でもいえ、導入として一定量の練習曲が確保されている。なお、『師範器楽』では、3、4ページに限ったことではあるけれども、「ハニハ」のように音名が音符の下に付記され、当時重要視された聴覚訓練の影響を垣間見ることができる。

このように両教科書とも、練習曲が、「右手練習」「左手練習」から「両手練習」へと配列され、『バイエルピアノ教則本』や島崎赤太郎『オルガン教則本』等の入門書とも共通する編纂方法である。したがって、『初等オルガン教科書』『師範器楽』ともに初学者用の本科第1学年用の教科書である。

次に『師範器楽』が、「師範学校教科教授及修練指導要目」の「予科二年修了程度マデ進マシム」内容に到達していたかどうか検討をしたい。再度、第1節で取り上げた表Ⅱ-4-2をみると、予科第2学年は、「前学年ニ於ケル教授事項ニ付程度ヲ進メテ練習セシム」とスモールステップの原理が採られている。さらに以下の点が書き加えられている。

拍 子 複合拍子ヲ加フ

律 動 切分音・三連符ヲ加フ

表Ⅱ-4-12で示した通り、『師範器楽』の練習曲には三連符は使用されていないものの、複合拍子である6/8拍子が5曲あり、20曲でシンコペーションが用いられているので、予科第2学年の指導内容を満たしている（譜例Ⅱ-4-4）。

以上、『師範器楽』は、易から難へと進む練習曲の配列になっている点、「師範学校教科教授及修練指導要目」で規定されている予科第2学年の指導内容がほぼ含まれている点から、「初歩ヨリ始メテ予科二年修了程度マデ進

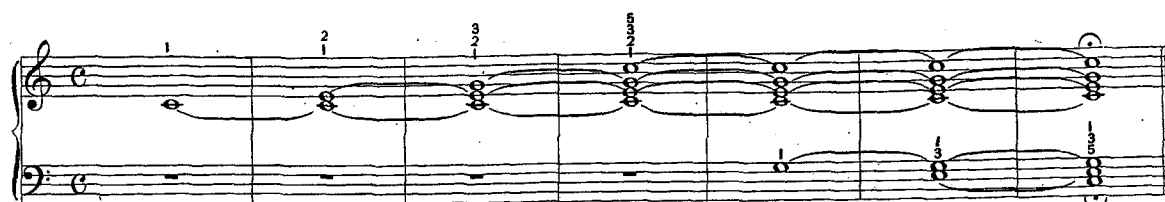
マシム」内容の教科書と捉えることができる。

譜例Ⅱ-4-2 『初等オルガン教科書』における導入部分

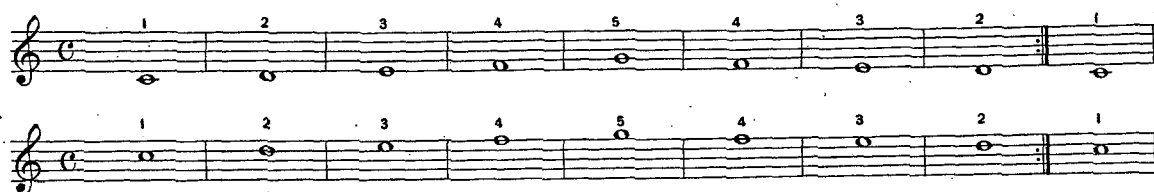
出典 真篠俊夫編『改訂初等オルガン教科書』大阪開成館、1930年、1頁。

1

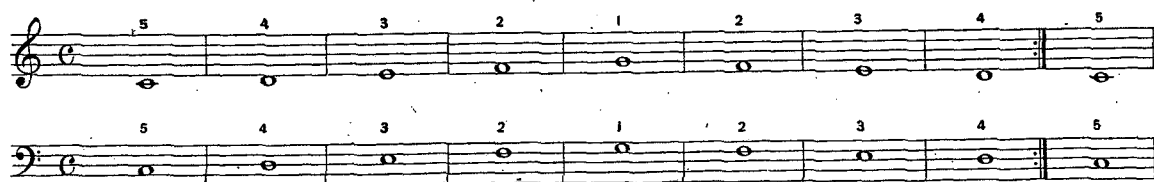
第 一 部
踏 板 練 習



右 手 練 習



左 手 練 習



譜例Ⅱ-4-3 『師範器楽』における導入部分

出典 文部省『師範器楽 本科用巻一』師範学校教科書, 1943 年, 3 頁。

右手練習

12 numbered staves of musical notation for the right hand practice section. The notation includes various musical symbols such as notes, rests, and fingerings, with some notes marked with 'ハ', 'ニ', 'ホ', 'ト' (Fa, Ni, Ho, To) and 'ト' (To).

譜例Ⅱ-4-4 『師範器楽』における最後の練習曲 78

出典 文部省『師範器楽 本科用巻一』師範学校教科書, 1943 年, 51 頁。

5 staves of musical notation for the final exercise piece 78. The notation includes various musical symbols such as notes, rests, and fingerings, with some notes marked with 'f' (forte) and 'p' (piano).

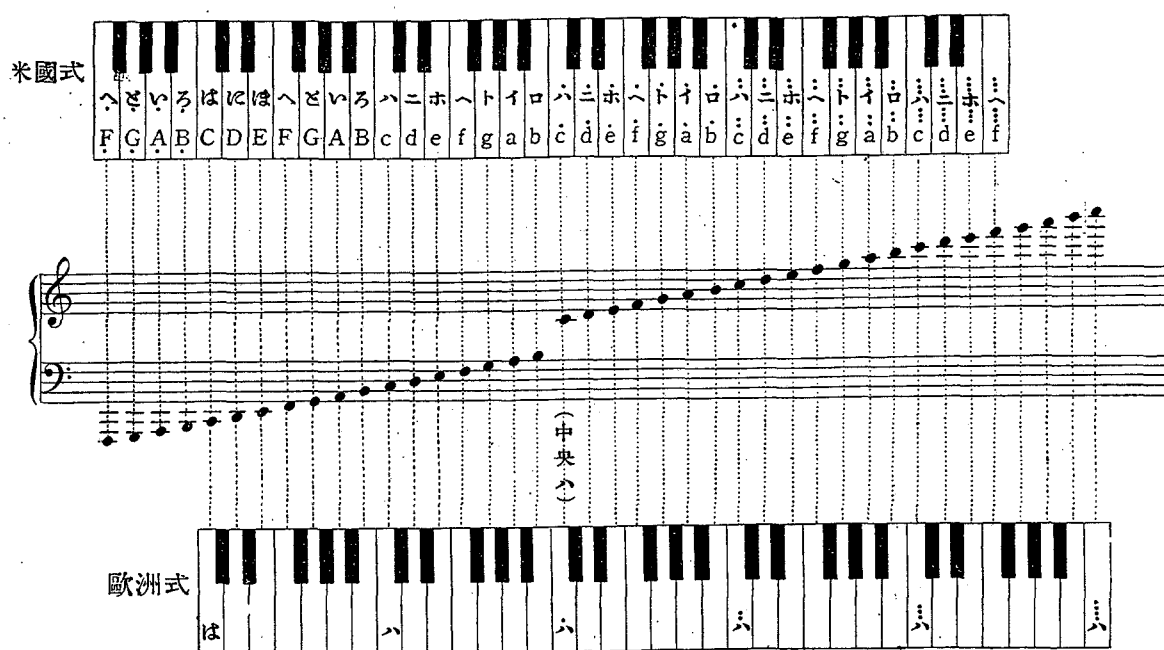
(2) 視点2: ピアノ用の教科書か否か

次に『師範器楽』が、ピアノ用の教科書か否かについて検討したい。

『初等オルガン教科書』には、「米国式」と「欧州式」の2種類、いずれも61鍵の鍵盤が掲載されている（図Ⅱ-4-8）。

一方、『師範器楽』の1ページには「鍵盤・音名・譜表の関係」として88鍵の鍵盤が示される(図Ⅱ-4-9)。2ページに進むと、「弹奏姿勢図」としてグランドピアノを弾いている男性の写真が掲載される(図Ⅱ-4-10)。また、『師範器楽』では、『初等オルガン教科書』で所収されていたオルガン演奏に必要な内容は、まったく含まれていない。したがって『師範器楽』はピアノ志向の教科書である。

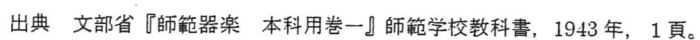
鍵盤と樂譜との對照 (一) 幹音列



出典 真篠俊夫編『改訂初等オルガン教科書』大阪開成館，1930年。

図Ⅱ-4-8 『初等オルガン教科書』における鍵盤図・大譜表

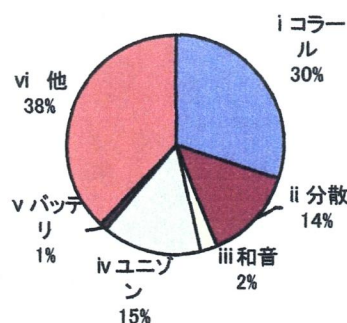
11



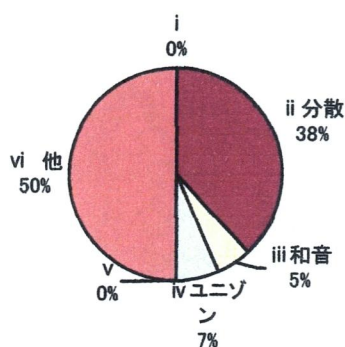
出典 文部省『師範器楽 本科用巻一』師範学校教科書, 1943年, 2頁。

200

練習曲の作曲技法の傾向からみてみたい。表Ⅱ-4-11に従って分類した結果は、図Ⅱ-4-11、図Ⅱ-4-12に示す。



図Ⅱ-4-11 『初等オルガン教科書』の作曲技法



図Ⅱ-4-12 『師範器楽』の作曲技法

『初等オルガン教科書』(図Ⅱ-4-11)では3割近く占めていた「i コラール風」のオルガン様式が、『師範器楽』(図Ⅱ-4-12)ではまったくみられない。その代わり、『師範器楽』では「ii 分散和音」が38%占める。分散和音については、両教科書の巻末に掲載されている。譜例Ⅱ-4-5の『初等オルガン教科書』では「属七の和音」「は長調主三和音」の分散和音を取り上げている。しかし、これらは歌唱教材の伴奏に使用される分散和音の音型とは異なり、音域が広く指や手首のテクニック習得の要素が強い。

譜例Ⅱ-4-5 分散和音

出典 真篠俊夫編『改訂初等オルガン教科書』大阪開成館，49頁。

分散和音

属七の和音

は長調主三和音

一方、譜例Ⅱ-4-6に示したように、『師範器楽』の巻末にも分散和音を取り上げられている。ここでは指や手首のテクニックではなく、伴奏型に近い5種類の分散和音が掲載されている。ちなみに、譜例Ⅱ-4-6に掲載した「(ハ)」以外の分散和音は、『師範音楽 本科用巻一』（以下、『師範音楽』と略記）の「音楽理論」の項でも紹介されている（譜例Ⅱ-4-7）⁷⁴。その背景には、分散和音は「聴覚訓練」で重要視されていたので、「器楽」や「音楽理論」の分野でもくまなく扱われたと考えられる。

譜例Ⅱ-4-6 分散和音

出典 文部省『師範器楽 本科用巻一』師範学校教科書, 1943 年, 54 頁。

(分散和音)

(イ)

(ロ)

(ハ)

(ニ)

(ホ)

譜例Ⅱ-4-7 『師範音楽』における分散和音

出典 文部省『師範音楽 本科用巻一』師範学校教科書, 148 頁。

コノコトノ意味ヲ更ニ廣ゲルト分散和音トイフ形ニ進展スル。分散和音トハ、同一ノ和音ノ各聲部ノ音ヲ一音マタハ數音ヅツ、時間ヲ別ニシテ響カセルコトヲイフ。ハホトノ一和音ヲトツテソノ種々ノ形ヲ示ス。

イ ロ ハ ニ

I ————— I ————— I ————— I —————

ところで、国民学校初等科音楽教科書のための教師用指導書には、「伴奏楽器としては、ピアノの方が効果的であることはいふ迄も無いが、オルガンでも奏し得る」とある⁷⁵。また、国民学校の音楽教科書の編纂委員⁷⁶の一人である井上武士は、「ピアノは教授用、伴奏用楽器として最もすぐれて居る」と、オルガンよりピアノを推奨している⁷⁷。つまり、ピアノの弾ける国民学校教員が、待ち望まれていたのだろう。

以上、『師範器楽』は、88 鍵の「鍵盤図」やグランドピアノを写した「弹奏姿勢図」が掲載されている点、オルガン奏法に関する内容が含まれていない点、「コラール風」のオルガン様式がみられない点、伴奏型に近い5種類の分散和音が掲載されている点から、ピアノ用の教科書であることが明らかである。

以上の比較考察を通して、以下の点が明らかとなった。

- 1) 『師範器楽』は「初歩ヨリ始メテ予科二年修了程度」の内容を掲載した本科第1学年用の教科書である。このことは次の点から判明した。
 - ・「右手練習」「左手練習」「両手練習」と易から難へと進む練習曲の配列となっている。
 - ・三連符は使用されていないものの、複合拍子やシンコペーションが用いられ、予科第2学年の指導内容が含まれている。
- 2) 『師範器楽』はピアノ用の教科書である。このことは次の点から判明した。
 - ・「鍵盤図」では88 鍵の鍵盤を、「弹奏姿勢図」ではグランドピアノの写真が掲載されている。
 - ・「踏板練習」や「増音器練習」等のオルガン奏法に関する内容が含まれていない。
 - ・オルガン特有のコラール風な作曲技法は用いられていない。

『師範音楽』がナショナリズム、ミリタリズム的傾向が強かったのに対し、『師範器楽』はそのような傾向が強調されていない。事実、敗戦後、多くの国定教科書が墨塗り処分を受けたにもかかわらず、『師範器楽』は使用を許されていたことがそれを裏付けている⁷⁸。

第5節 聞き取り調査から明らかになった器楽指導の実態

第1節で明らかにしたように、師範学校では以下のように器楽指導が位置付けられていた。

1931（昭和6）年～1942（昭和17）年

：第一部（修業年限5年）第2学年～第5学年， 第二部（修業年限2年）全学年

1943（昭和18）年～1945（昭和20）年

：予科（修業年限2年）全学年， 本科（修業年限3年）全学年

授業確保が保証されていた1931（昭和6）年から1942（昭和17）年までをみると、第一部は4年間、第二部においても2年間の器楽指導が行われていたことになる。週1，2時間程度の音楽の授業で歌唱や鑑賞等の他の領域とのやりくりをしながらの器楽指導であるので、けっして多いとはいえないけれども、年数だけはかけられていた。

師範学校における器楽指導を回想したものは、いくつかの文献の中でみられる。まずはそれらを列記したい。

・後藤重樹「新制大学の発足と教員養成」⁷⁹（1971）

- ・女子師範では一部生二部生とも、大抵はバイエル教則本全部終えて卒業させた。
- ・男子師範では学生の大部分はピアノやオルガンから逃げようとする。教師はそれを追いかけて捕えて勉強させようとする。
- ・ピアノが二台、オルガン七台（教授用共）の状態。
- ・この中でも一クラス一名か二名位は夢中で教師の要求に飛びついてくる者もあった。それは、食事もとらないでピアノの練習に熱中しているという類である。

・『宇都宮大学教育学部百五十年史』⁸⁰（1989）

入学当初、多くの生徒は、楽譜は読めない、オルガンも弾けない、という状態だったのが、短期間に皆、上達した。それは、魔法使いのしわざのようにはやかった。

オルガンの試験（当時は検閲といった）が近づくと、不思議なことに、楽器の故障（わざとこわす）が多くなる。こわれた楽器に割りあてられた生徒は、読譜の試験にきりかえられる。また、読譜はオルガンの成績がわるい者の救済措置でもあった。この楽器がこわれるわけを、先生は全部お見通しであった。

以下、香川師範学校音楽科教員の金光武義氏⁸¹（1941年4月-44年12月在職）と卒業生の故田山清美氏⁸²（1937年4月-42年3月在籍）、渋谷清寿氏⁸³（1943年4月-48年3月在籍）ならびに岡山師範学校の卒業生の岡嶋信夫氏⁸⁴（1943年4月-45年9月在籍）、原卯三次氏⁸⁵（1940年4月-45年9月在籍）の証言から、器楽指導の実態に迫りたい。

1. オルガン・ピアノの設置状況

表Ⅱ-4-16は、香川師範学校、岡山師範学校のオルガン・ピアノの設置状況について、渋谷氏と原氏の聞き取り調査の結果を基にまとめたものである。グランドピアノが講堂と音楽教室に1台ずつの計2台というのは、共通している。

ここで師範学校のオルガン・ピアノ環境について考察するために、岡山師範学校の音楽教室の様子を原氏の証言を基に復元する。図Ⅱ-4-13は、岡山師範学校の木造平屋個室練習小屋と岡山師範学校、新館（鉄筋校舎）の2階にあった音楽教室の様子を表したものである。図Ⅱ-4-14は岡山師範学校の校舎平面図であり、木造平屋練習小屋と音楽教室の位置を表している。

岡山師範学校には8室の個室練習室があり、その内3室にアップライトピアノが置かれていた。音楽教室の中には、グランドピアノ1台、オルガン1台が置かれていた。グランドピアノは図Ⅱ-4-13で示したとおり、教室の中央よりやや前に置かれ、教師が生徒たちに向かって指導しやすいように配置されていた。隣の教官室には、アップライトピアノ1台が置かれていた。その他、鉄筋校舎の階段の踊り場にもアップライトピアノが置かれていた。師範学校創設期のオルガン1台の時代と比較すれば環境改善されたというものの、1学年160名在籍していたため8室の練習室では生徒全員が練習するには少なすぎただろう。また、ピアノが個室の練習室にも設置され、生徒たちがそれに触れることができたということが、器楽指導がピアノへと移行しつつあることを象徴している。

この点について原氏は、「個室練習室のオルガン、ピアノは自由に使用できたものの、上級生が優先的に使用していた」と当時の状況を語り、渋谷氏の証言とも重なる。また、第2節で紹介した、ピアノ20台を揃えた岡山県女子師範学校が希少な事例であったことがよく分かる。

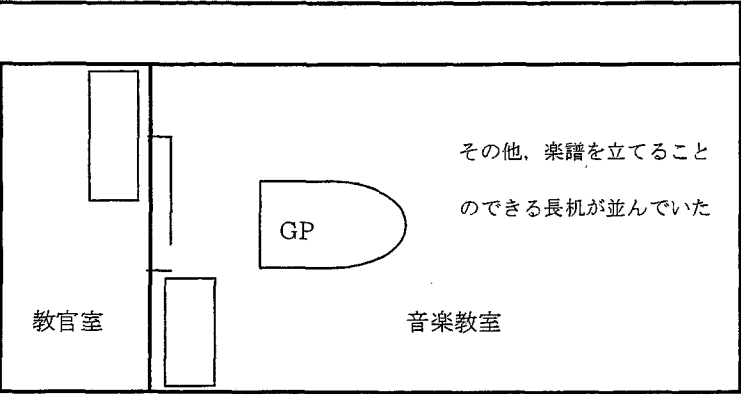
表Ⅱ-4-16 昭和前期における師範学校のオルガン・ピアノの設置状況

	岡山師範学校（原氏の証言）	香川師範学校（渋谷氏の証言）
グランドピアノ	・グランドピアノは、講堂と音楽教室に1台ずつの計2台（普段は鍵がかけてある）。	・グランドピアノは、講堂と音楽教室に1台ずつの計2台。
アップライトピアノ	・アップライトピアノは、音楽教官室、階段の踊り場に1台ずつ、個室練習室に2台の計4台（階段踊り場と個室練習室のピアノは自由に使用することができたものの、上級生が占拠）。	・アップライトピアノは、音楽教官室に1台、個室練習室に6台の計7台（個室練習室のピアノは自由に使用できたものの、上級生が優先的に使用）。
オルガン	・オルガンは、音楽教室に1台と、個室練習室に5台の計6台（個室練習室のオルガンは自由に使用できたものの、上級生が優先的に使用）。	・オルガンは、音楽教室に1台と、各学級の教室に3、4台。
授業	・予科の時代のときのみ、授業があった。特に教員の指導はなく、生徒に課題を与え、検閲方式で進めていった。そのときは、音楽教室のオルガンを使用した。増音器は使用しなかった。	・本科1年次からオルガン・ピアノ奏法の授業があり、検閲方式で進めた。そのときは主としてアップライトピアノを使用した。
備考	・1945（昭和20）年6月29日の岡山空襲により、校舎の大部分を消失。かろうじて鉄筋校舎内にあった音楽教室は焼け残る。	・1945（昭和20）年7月4日の高松空襲により、全焼。

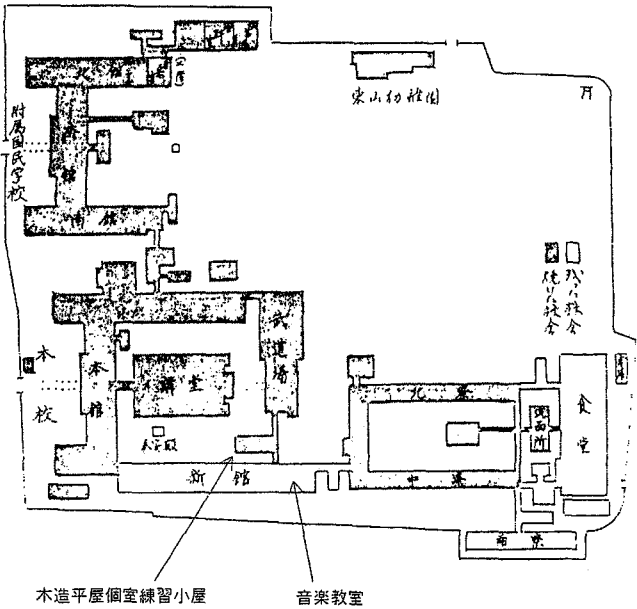
[木造平屋個室練習小屋]

UP	OR	UP	OR
OR	UP	OR	OR

[音楽教室]



注 GP=グランドピアノ、UP=アップライトピアノ、OR=オルガン。
図Ⅱ-4-13 岡山師範学校の木造平屋個室練習小屋と音楽教室の平面図



注 新館（鉄筋2階校舎）の2階，一番東側に位置。黒色の部分は戦災で焼失。
出典 『岡大附小百十年の歩み』1987年，28頁から転載。
図Ⅱ-4-14 岡山師範学校の校舎配置図（1945，昭和20年）

2. オルガン・ピアノ教科書

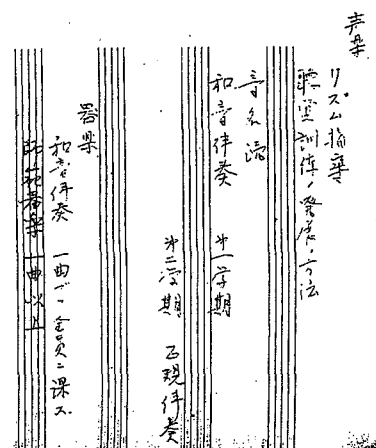
ここで、聞き取り調査で名前の挙がったオルガン・ピアノ教科書について検討したい（表Ⅱ-4-17）。第4節で取り上げた真篠俊雄編『初等オルガン教科書』（1930）が香川県師範学校で使用されている。第3節で指摘した通り、『初等オルガン教科書』は京都府師範学校や、その他、愛知県第一師範学校、北海道女子師範学校でも用いられている（後述）。その背景には、真篠俊雄が東京音楽学校のオルガンの教授であり、東京音楽学校甲種師範科の生徒は真篠から指導を受けていたことが関係していると考えられる⁸⁶。

ところで、岡嶋氏、原氏は1943（昭和18）年度に岡山師範学校本科第1学年の生徒であった。にもかかわらず、彼らは『師範器楽』を手にしていない。金光氏も1943（昭和18）年度は香川師範学校の音楽科教員ではあったものの、『師範器楽』に対する印象は薄い。しかし、資料Ⅱ-4-1の金光氏のメモには、「師範器楽一曲以上」とある。ということは、香川師範学校では『師範器楽』が指導されていたことになる。ちなみに筆者は岡山大学教育学部音楽教育講座所蔵の『師範器楽』を用いて分析を行った。それには「大阪第二師範学校」の校名と持ち主であったであろう生徒の氏名が奥付のページに記されている。『師範器楽』は『師範音楽』と比べて知名度が低いかいけれども、師範学校において指導されていた点は、確実である。

表Ⅱ-4-17 聞き取り調査で登場したオルガン・ピアノ教科書

書名	新選オルガン学習教本	改訂初等オルガン教科書	バイエルピアノ教則本
編者	小笠原良造	真篠俊雄	萩原英一
発行年	1927（昭和2）年	1930（昭和5）年	1924（大正13）年
教科書	昭和3年2月2日文部省検定済	昭和5年12月20日文部省検定済	昭和7年7月9日
出版社	廣文堂	大阪開成館	共益商社書店
形態	31×21cm 46ページ	31×21cm 55ページ	31×21cm 89ページ
使用が判明している師範学校	岡山県師範学校	香川県師範学校、 愛知県第一師範学校、 北海道女子師範学校	香川県女子師範学校、 大阪府天王寺師範学校、 北海道女子師範学校
備考	オルガン用初級教則本。「緒言」ではピアノへの適用性を言及している。バイエル練習曲の他、モーツァルトやベートーベンのピアノ用小品が含まれている。唱歌の旋律は使用されていない。「君が代」が掲載されている。	オルガン用初級教則本。「緒言」にはピアノについての言及はない。練習曲の中には「見わたせば」「霞か雲か」「ローレライ」等の唱歌の他、「イギリス国歌」やヴェルディの「女心の歌」の旋律、バイエル練習曲等、既成曲が多く含まれている。	『バイエル教則本』は、1880（明治13）年のメーソン来日の際に日本に持ち込まれて以来、多くの出版社、編者によって出版されている。

資料Ⅱ-4-1 金光武義氏のメモ



3. オルガン・ピアノ指導の実態

(1) 香川師範学校

① 香川県師範学校卒業生、故田山清美氏の証言（1937-42 年）

1937（昭和 12）年 4 月から 1942（昭和 17）年 3 月にかけて香川県師範学校に在籍した田山氏は、以下のよう
に語った（下線は筆者による。以下同様）。

田山：あの 1 年からずっと音楽の授業が 2 時間あるでしょ。1 時間はさっき言ったように合唱、西洋の歌曲を
中心とした声楽の勉強。あとの 1 時間がピアノ・オルガンです。それで 2 時間です。
鈴木：では、オルガン・ピアノ奏法の 1 時間は、生徒みんなが先生にみてもらう検閲ですか。
田山：そうそうそう、検閲が中心で、ピアノはあそこら師範学校には 2 台しかなかったからね。オルガン、楽
器練習室のようなものが音楽教室の裏にあるのです。楽器練習が 6 つぐらい、小さい個室、1 坪ぐら
いの個室がありましてね。そこでみんな放課後練習できるのです。音楽ができない連中は苦勞していまし
たよ。全員弾けないといけないということで、小学校は全教科教えるということから…。かわいそうで
した。なかなか弾けなくて、先生に叱られて…。

鈴木：5 年生の金光先生ときは 1 時間は歌で、ピアノも金光先生がみられたのですか。
田山：ピアノはもう一人の…。お年の…。
鈴木：鈴木先生？
田山：よくご存知で、鈴木先生の方がピアノでね。金光先生は声楽が得意でしたから、声楽、合唱指導をなさ
っていました。
鈴木：2 時間をばさっと分けて、1 時間は金光先生、もう 1 時間は鈴木先生というふうですか。
田山：楽器の方と声楽の方と先生二人おられるから、お話し合いで分けられたとは違いますか。そのあたりの
事情は知りませんが。
鈴木：1 年から 4 年までの音楽の授業も声楽とピアノに分けてされていたのですか。
田山：だいたいそうです。金光先生が見える前は、1 年から 4 年までは鈴木武五郎が一人でやられていたの
で、忙しかった。
鈴木：2 時間とも鈴木先生ですか。
田山：そうそうそう。金光先生がいらっしゃって、鈴木先生はご老体だからだいが楽をしたわけですね。
鈴木：鈴木先生の授業で印象に残っていることはないですか。
田山：そうね、やっぱり器楽の基礎をね、指導を受けました。特に運指法、指使いね、ピアノの教則本には最
初、指使いの番号が記載されていますけれども、全部マスターしないと上達が遅いからね、指使いのこ
とをよく言われましたね。自分が上手く弾けていると思っていましたけれども、「だめだ、だめだ、もう
一度」と言われてやり直しをしましたけれどね。

（2005 年 3 月 16 日 田山氏）

田山氏が在籍した頃の香川県師範学校では、2 時間の音楽の授業を器楽と声楽に分けて行っていたことが分か
る。金光氏が赴任した 1941（昭和 16）年度は、器楽を鈴木武五郎氏、声楽を金光氏が担当している。鈴木氏は
「検閲」方式を採り、運指法に重点を置いて指導していたようである。

『香川大学教育学部百年のあゆみ』（1989）には、鈴木氏によって、第 1 学年からオルガン・ピアノ指導が実施
されるようになったと記載されている⁸⁷。実際に田山氏は第 1 学年から最終学年の第 5 学年までオルガン・ピ
アノ指導を受けている。今日の小学校教員養成の現状と比較すると、5 年間の指導というのは時間的にかなり保証
されている。実際はどうだったのだろうか。

鈴木：1年から5年までオルガンをやると、かなり弾けるようになるのではないですか。5年間もやったら。
 田山：それがね、やっぱり男性ばかりだからね、師範学校を出れば小学校でオルガンを弾いて児童に教えなければいけないけれども、オルガンをマスターできない人もいました。不器用でね。やはり大半の生徒はね、5年間の効果があつて簡単な伴奏ぐらいいは弾けるようになりました。そうでないと、卒業証書が与えられませんからね、ほとんどの生徒がマスターしておりましたけれどね。ものにならないのが中にはいますよね、一人や二人は。そんなのに限って運動神経は抜群だからね、バレーボールの国体選手に選ばれたりとかね、大活躍をしていましたけれどね。ですから先生方も大目に見てね、卒業させていました。しかし、その人たちは卒業したらずいぶん苦労したでしょうね。香川県には音楽の専科の教員というのは小学校にはいなかったのです。東京や大阪はいました。昔から。しかし、地方では専科制度はありませんでしたからね、だいたい小学校の学年のクラスは男女で持っていました。女の女子師範学校を出た者は全員上手ですからね。

(2005年3月16日 田山氏)

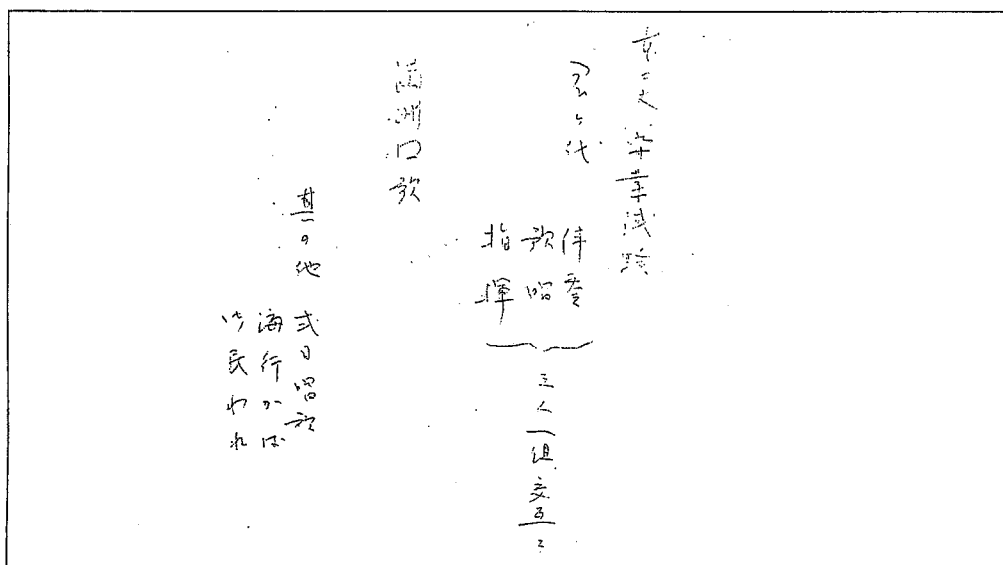
このように、5年間もの年月をかけたただけあり、大部分の生徒は簡単な伴奏の技術を習得したそうである。どの程度を目標として指導をしたかについては、次の金光氏の証言からみてみたい。

② 香川県師範学校（後、香川師範学校）音楽科教員、金光武義氏の証言（1941-1944年）

音楽科教員の金光氏は、「香川師範学校の器楽指導の最終目標は、師範学校卒業時に《君が代》⁸⁸の伴奏がきちんとできることであつた」と回想する。資料Ⅱ-4-2は、黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』第一編（1938）の裏表紙に記された金光氏のメモである。卒業試験として、《君が代》《満州国国歌》、その他、「式日唱歌」や《海ゆかば》《御民われ》が課せられていたことが分かる。《君が代》に関しては、3人一組でグループをつくり、「伴奏・歌唱・指揮」を交互にさせるといった徹底振りである。

資料Ⅱ-4-2 卒業試験についての金光武義氏のメモ

黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』第一編（1938）の裏表紙に記載。



その一方、金光氏は、真篠俊雄編『初等オルガン教科書』（1930）を使用し、歌唱活動や鑑賞活動と関連付けて器楽指導を行っていた。金光氏が所持した教科書の中で、例えば、ヴェルディの《女心の歌》の旋律を使用した練習曲（55番）には、「歌曲鑑賞 教科書（声楽）第二編 ヴェルディと関連して」と氏自身のメモが残されて

いる（譜例Ⅱ-4-8）。また、金光氏は『初等オルガン教科書』の練習曲の旋律を発声練習や合唱にも使っていた（資料Ⅱ-4-3）。このようにして金光氏は機械的で訓練的な器楽指導ではなく、他の音楽表現と関連付ける視点からさまざまな工夫を凝らして指導をしていた。しかしながら、男子生徒にとって器楽指導は苦痛であったことが、次の文から読み取れる⁸⁹。ちなみに「ヤギソ」「ヤギ先生」は、鈴木氏のニックネームである。「見藤はん」は、金光氏の旧姓の見藤からきている⁹⁰。

「室長、昼からオトの本あいとらんかい。あいとったら貸して」

小柄な副室長の大馬さんが、まばらなあごの髭を指先でつまみ、引き抜きながら聞いています。

「あいとるぜ。どしたん。副室長や、オトはヤギソと違うん。ヤギソなら本のこと余りやかまし言わしまい」
実谷室長さんが眼鏡の奥の目を細めて聞きます。

「それが、見藤はんじゃ。室長やの学年は教生もすんどるし、余りやかまし言わんのじゃろ。ところがおれらの学年、教生に行くまでにオトの本全部オルガンで弾けるようにさす言うて、見藤はんうるそうてな」

「ほうや。ヤギソとは違うんかの」

「ぼっきゃの組担任はヤギ先生です。オルガンの検閲はヤギ先生厳しいです。」

「ヤギソがの。へエー」

勇は大馬副室長さんが音楽の時間のことを「オト」と言ったり、「オトガク」などと呼んでいるのを面白いと思いながら聞いていました。

ところで、第Ⅰ部第2章で示した通り、師範学校には「増課科目」（1943年以降は「選修教科」という選択授業があった。金光氏によると、増課科目の音楽の授業では、ピアノまたは声楽の個人レッスンが行われ、通常の授業よりは高度な実技の内容が展開されたそうである。

譜例Ⅱ-4-8 練習曲 55

出典 真篠俊雄編『改訂初等オルガン教科書』大阪開成館、1930年、28頁。

28

55.

Moderato.

G. dur.

初等オルガン教科書	
合唱	斉唱
26	30 霞の雲か
27	32 ドイツ国歌
28	34 イギリス国歌
29	46 夜は静か
30	51 菊
37	54 小唄歌
42	55 海辺の眺望
47	61 植生の宿
48	64 ローレライ
57	

③ 香川師範学校卒業生、渋谷清寿氏の証言（1943-48年）

昇格後の香川師範学校予科に在籍していた渋谷氏は、当時使用した教科書について「編集者や出版社は分かりませんが、バイエルではなく、オルガン教則本を使いました」と語っている。授業の方法としては、教員が生徒の進度に合わせてチェックをしながら練習していく「検閲方式」で学習が進められた⁹¹。難易度はオルガン・ピアノの初心者を対象としているため、高度なことは行っていないとのことである。

前述の通り、香川師範学校でのオルガン・ピアノ指導を行っていたのは、鈴木武五郎氏と金光（旧姓、見藤）武義氏の2名であった。渋谷氏が指導を受けたのは鈴木氏である。しかし、生徒たちの間では「2人の先生の指導方法は異なり、鈴木先生は比較的甘かったのに対して、見藤先生は丁寧で、しっかり弾けていないと合格にしてくれなかった」といった内容の話が話題に上がっていたそうである。『わが香川師範時代』の「恩師の思い出」の項でも、その違いが次のように表れている⁹²。

・鈴木 武五郎

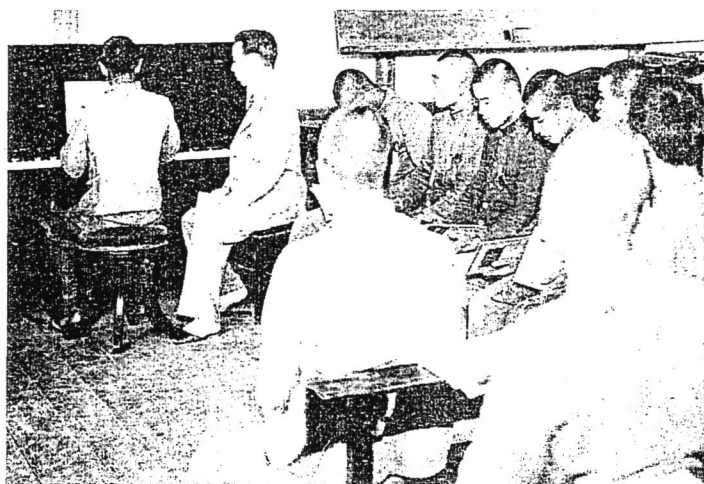
オルガンの検閲の時など、失敗すると「ニャンダ、駄目じゃないか」と言いつつも、合格の判を押してくれたこともあった。次は頑張れよと励ましの教えでもあった。

・見藤 武義（現姓、金光）

オルガン検閲の時は丁寧で、細かいところまで指導され、うまく弾けないとなかなか前へ進めてもらえなかった。

写真Ⅱ-4-3は、鈴木武五郎氏が器楽指導している場面である。渋谷氏の話によると、香川師範学校では入学すると、学級全員でお金を少し出し合い、上級生たちが使っていたオルガンを購入するという伝統があったそう

である。そのため、各教室にはオルガンが3、4台あり、普段はそのオルガンで練習したとのことである。個室の練習室にはアップライトのピアノが置かれていた。しかし、生徒の間では、オルガンよりピアノの方が高級という意識があり、上級生が優先的に使用するという師範学校特有のルールがあったようである⁹³。



出典 『わが香川師範時代』1996年、31頁。
写真Ⅱ-4-3 オルガン・ピアノ検閲の様子

(2) 岡山師範学校

岡嶋氏と原氏については、師範学校が官立専門学校程度へと昇格する1943(昭和18)年に本科に在籍しており、昇格後の本科の師範教育を受けている。

2氏が在籍したときの岡山師範学校の本科における音楽の授業では、器楽指導は実施されず、第2章で前述したように『師範音楽 本科用巻一』を使っの歌唱指導が行われていた。岡山師範学校における器楽指導は、本科に入学する前の予科で行われていたのである。したがって、中学校から本科へ入学した岡嶋氏の場合は器楽指導を一切受けていない。そこでここでは、予科から進学した原氏の回答を見ることにする⁹⁴。

オルガン奏法は予科の音楽の授業でやりました。『バイエル』ではなく、小笠原良造『新選オルガン学習教本』(1928, 廣文堂書)を使ってやりました。小学校の先生になる程度ですから難しいことはやっていませんが、なんせ初めてオルガンをやるのですから大変でした。しかし、男ばかりでしたから、中には「けがをした」と言ってさぼる場合もありましたけれど…。

音楽室の他に練習室が数室ありまして、練習室で練習したのを先生に検印してもらおうというやり方でした。各学年でどこまで進まなければいけないというノルマのようなものもありましたけれど…。

(2003年9月28日 原氏)

2004(平成16)年5月7日(金)の聞き取り調査の際に、原氏は1908(明治41)年から1928(昭和3)年まで、岡山師範学校の音楽科教員を勤めた小笠原良造編『新選オルガン学習教本』⁹⁵(1928)を提示した(図Ⅱ-4-15)。内容は、オルガン用の初級教則本であり、右手練習、左手練習、両手練習と進み、オルガン奏法に関する

る記述も含まれている。しかし、緒言に「本書の書名はこれを新選オルガン学習教本となせるも、ピアノ学習者もまたこれに依りて学び得るように考慮せり」と記され、ピアノへの配慮が見られる。例えば、バイエルの練習曲の他、モーツァルトやベートーヴェン作曲のピアノ用小品等も掲載されている（譜例Ⅱ-4-9）。なお、西洋音楽に混じって《君が代》が含まれているものの、小学唱歌は使われていない。

器楽指導の進め方として「検閲方式」が採られ、合格すると検印された。師範学校の音楽科教員は、「今回は、この曲のテストをします」と課題を予告し、生徒たちが各自練習してきたかどうかを確認するだけで、特別な指導はなかったそうである。「音楽室にはドイツ製のグランドピアノが1台あったにもかかわらず、普段は鍵が掛けであり、テストでもオルガンを使用した」と原氏は述べている。

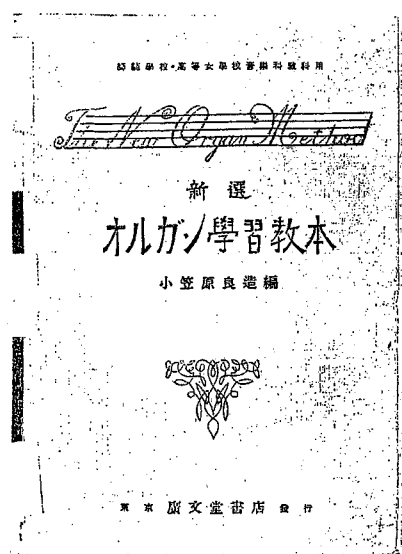
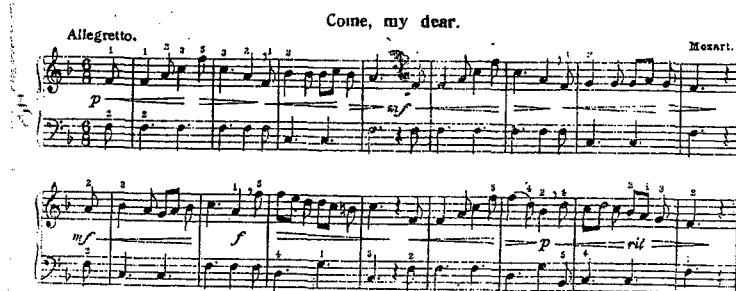
1943（昭和18）年、師範学校が官立専門学校程度へ昇格した際、岡山師範学校においても＜音楽会＞が開催された。原氏は以下のようにその会でピアノを独奏したとのことである。

ベートーヴェンのドイツ円舞曲だったのですが、ワルツです。手を交差して弾く曲です。それを弾いたら、農業の先生から「君は器用なことを、どこで覚えたのか」といわれて（笑）。それは先輩のやっているのを見て、「ああいうことをやってみたいなあ」ということでやったのですよ。

（2004年5月7日 原氏）

譜例Ⅱ-4-9 “Come, my dear” Mozart

出典 小笠原良造編『新選オルガン学習教本』廣文堂書店、1927年、10頁。



図Ⅱ-4-15 小笠原良造編『新選オルガン学習教本』

廣文堂書店、1927年 表紙

4. 他校の事例

では、他の師範学校ではどうだったのだろうか。ここでは金光氏と同窓である 1941（昭和 16）年 3 月に東京音楽学校甲種師範科を卒業した人から得た資料から考察したい。2003 年 9 月、東京音楽学校甲種師範科 1941（昭和 16）年 3 月卒業生 5 名に質問紙調査を実施した⁹⁶。表Ⅱ-4-18 は、師範学校における器楽指導に関する部分を抜粋したものである。

表Ⅱ-4-18 質問紙調査の回答

2003 年 9 月実施

回答者	師範学校	内 容
安城政三氏	沖縄県師範学校 (1941～1944 年) 愛媛師範学校 (1944～1949 年)	私は旧制中学校を卒業してから、(大阪府天王寺) 師範学校第二部に入学した。そこでは、『オルガン教則本』の第一巻の個人レッスンを終えた者から、ピアノの『バイエル教則本』に入ることになっていた。しかし、そこまで進んだ者は 120 名中数人しかいなかった。私は個人レッスンの約 5 年通って、先生に勧められて東京音楽学校甲種師範科に兵役 5 ヶ月を終えてから、入学した。
滝沢美恵子氏	北海道女子師範学校 (1941～1942 年)	『初等オルガン教科書』(真篠俊雄)、『バイエル』使用。新設校で備え付けのオルガンの台数が少なく、個人レッスンが主。 男子師範は一斉指導で行われていた。女子師範は男子師範に併設され、一部教室共用だったが、音楽室と家事裁縫室だけは新しく教室が設けられていた。
真篠将氏	愛知県第一師範学校 (1941～1942 年)	テキストは真篠俊雄編集の『初等オルガン教科書』だったと記憶しています。一般的な基礎指導は一斉に指導し、あとは名簿順に個人指導を行い、うまく弾けた曲目(番号)にはOKの印を付けて、次の曲目に進めていくという原始的な方法を探っていました。ピアノは特に希望するわずかな生徒だけに個人指導をしていました。
水の上政子氏	香川県女子師範学校 (1941～1943 年)	『バイエル(教則本)』を個人レッスンしました。授業時間で4, 5人しか指導できないので、放課後下校時刻まで個人レッスンをしておりました。オルガン練習室が8部屋でピアノは2部屋に1台ありました。ピアノは1台がスタンド、もう1台はグランドピアノでした。
横田勇氏	青森県女子師範学校 (1941～1942 年)	授業時間がないので、放課後個人指導をした。まったく初歩の内容。

1941（昭和 16）年 3 月東京音楽学校甲種師範科卒業生の中には、師範学校における器楽指導について著書の中で著している者もいるので、以下に列記する。

- ・浜野政雄『戦後音楽教育は何をしたのか』⁹⁷（1982） 福井県鯖江女子師範学校、青山師範学校

私は短いながら小学校で教えた経験はあり、音楽教師の仕事そのものには特にまごつく程のことはなかったが、ただご承知のように師範学校では、器楽（オルガン、ピアノ）の指導というのがある。これはなかなか時間はかかるし、こっちはあきるし、たいへんな仕事だった。生徒も要領のよいのがいて、急に指が霜やけになったり、私が本につけた進度の印がゴムで消えていたり、意地になってそれをつついてみたり、全くこの指導にはエネルギーをつかった。

- ・供田武嘉津『日本音楽教育史』⁹⁸（1996） 沖縄県師範学校、福島師範学校

当時の師範学校の音楽科では、一般的に、『新訂尋常小学唱歌』の伴奏をこなすほどの音楽的技能が養成されていなかったのである。

・森脇憲三「迷路遍歴」『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』⁹⁹ (2003) 福岡県師範学校

バイエル五曲の宿題をやってこなかった学生たちをひっぱたいたのは、その仕事始めだった。

たった二組のひっぱたきで、学校中でオルガンの先取り合戦が始まった。しかし、当時の男子師範（福岡師範学校）には、練習用のオルガンが八台、アップライトのピアノ二台しかなかった。たった十台では四百人の学生が練習できるはずがない。

さいわい全寮制だから、学生は夜も学校にいる。オルガンは遊びごとではなく、卒業すればみんな自分の学級を持って音楽を指導せねばならぬことを舎監の教師に説明して、夜間の練習を認めてもらった。

それにしても足りない。先輩の音楽教師は教頭職なのに、どうして三十台くらいにする努力をしなかったのかと不満であった。私が心を鬼にし、学生がやる気になっても、十台では弾ける力をつけようがない。

羽織袴姿で、校長を官舎に訪ね、礼を尽くしてオルガン購入をお願いした。結果は、終戦までの四年間、昇給差し止めだった。

先輩の音楽教師は教頭で、管理職だから、学生のオルガンの進度を検閲する時間がない。私が代わって指導したのが、全校を一人でやるには、毎日午前八時から午後八時までかかる。二年目からは、音楽専攻の学生と進度の早い学生十人に応援させた。

一部生の予科二年間でバイエルを終えたのだから、将来を楽しみにしていた。ところが、三年目の昭和十八年から学徒動員が始まり、応召、戦死した学生も多く「全県下に音楽を」という私の野望は、ついに果たせなかった。

上記の質問紙調査の結果と文献における記述ならびに香川師範学校、岡山師範学校の事例を総括すると以下のようになる。

- 1) 学校によっては、「師範学校教授要目」で規定されている以外の時間においても、オルガン・ピアノ指導が実施されていた。水の上氏、横田氏の回答では、「放課後個人指導」を行ったとある。1931（昭和6）年の「師範学校教授要目」では、第2学年から器楽指導が開始されたにもかかわらず、森脇氏は第一部第1学年から指導していた。第1学年開始に関しては、香川県師範学校の事例と共通する。また、森脇氏は「舎監の教師に説明して、夜間の練習を認めてもらった」と記す。
- 2) オルガン・ピアノの設置状況は、生徒が練習する上で十分ではなかった。該当する回答は次の通り。滝沢氏「オルガンの台数が少なく」。水の上氏「オルガン練習室が8部屋でピアノは2部屋に1台ありました。ピアノは1台がスタンド、もう1台はグランドピアノ」。森脇氏「練習用のオルガンが八台、アップライトのピアノ二台しかなかった。たった十台では四百人の学生が練習できるはずがない」。このような状況から、岡山県女子師範学校のピアノ20台、オルガン30台というのは恵まれた環境であったことが分かる。
- 3) 教科書としては、『オルガン教則本』や『バイエルピアノ教則本』が挙げられている。滝沢氏、真篠氏は、真篠俊雄の『初等オルガン教科書』を使用したと述べる。安城氏の回答のように、まずオルガン指導を行い、卓越

した生徒にピアノ指導を施すという方法が採られていたところもある。

- 4) 指導方法としては、「検閲方式」が採られていたことが、真篠氏の回答や、浜野氏、森脇氏の記述から分かる。
この方法は香川県師範学校や岡山県師範学校でも行われていた。
- 5) 供田氏の記述が端的に表しているように、初歩的な内容が指導されていた。この点も香川県師範学校や岡山県師範学校の事例と共通する。

まとめ

本章では、師範学校における器楽指導の内容と実態を中心に検討してきた。判明した点は以下の通りである。

- 1) 取り扱う楽器について：1925（大正 14）年までの「師範学校教授要目」で示されていた「ばいおりん」の記述は、1931（昭和 6）年ではなくなり、「ピアノ（又ハオルガン）」と鍵盤楽器に限定された。

1943（昭和 18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」では、「ピアノ」又は「オルガン」と記され、必要によっては「簡易楽器」を加えることが可能となった。

聞き取り調査によると、1943（昭和 18）年以降の師範学校では、オルガンとピアノが共存した状況であった。

しかし、生徒が自由に使用する個室練習室にもアップライトピアノが設置されるようになり、生徒の間では、オルガンよりピアノの方が上級向き、高級といったピアノ志向の傾向が見られた。このことは、器楽指導がオルガンからピアノへと移行しつつあることを象徴しているといえよう。

- 2) 指導学年について：1931（昭和 6）年の「師範学校教授要目」では、本科第一部（修業年限 5 年）については、第 2 学年から第 5 学年まで、本科第二部（修業年限 2 年）については、全学年でオルガン・ピアノが指導されることになっていた。しかし、香川県師範学校や福岡県師範学校では、本科第一部においても第 1 学年から器楽指導を開始していた。

一方、1943（昭和 18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」では全学年に器楽指導が置かれた。にもかかわらず、1943（昭和 18）年度の岡山師範学校の本科第 1 学年では、器楽指導が一切実施されていなかった。

このように、法規通りに指導が行われておらず、制度と実態との乖離がみられた師範学校も存在した。

- 3) 教科書について：1931（昭和 6）年から 1942（昭和 17）年までは、文部省検定済であるオルガン・ピアノ教科書 15 種類が発行されていた。1943（昭和 18）年 4 月から国定制が採られ、文部省『師範器楽 本科用巻一』（1943）1 種類だけ発行された。

- 4) 『標準師範学校音楽教科書』（1938）について：黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』は、歌唱、器楽、鑑賞、楽典等を総合的に扱った教科書であるため、歌唱や鑑賞との関連を図った「楽器奏法練習」が掲載されている。また、楽器学への造詣が深い黒沢隆朝が編纂者の一人であるため、楽器に対する解説も掲載されている。

なお、『標準師範学校音楽教科書』は、香川県師範学校において使用されていた。

- 5) 『師範器楽』（1943）について：真篠『初等オルガン教科書』（1930）と比較した結果、『師範器楽』は「初歩ヨリ始メテ予科二年修了程度」の内容を掲載した本科第 1 学年用のピアノ教科書であることが明らかとなった。また、香川師範学校や大阪第二師範学校において『師範器楽』の使用が確認できた。とはいうものの、1943（昭和 18）年度の岡山師範学校第 1 学年において、『師範音楽』は使用されていたにもかかわらず、『師範器楽』は用いられていない。したがって、『師範器楽』の普及・徹底は十分行われていなかったといえる。

- 6) 指導方法について：指導の方法は音楽科教員が生徒の進度を点検しながら進める＜検閲方式＞が採られてい

た。初等教員として必要とされる伴奏の技術を修得するために、初歩的な内容から年月をかけて指導されていた（第一部4年間、第二部2年間）。しかしながら、一部の生徒にとっては苦痛であり、練習が進まなかったことを確認した。その一方、原氏のように、オルガン・ピアノに関心を示し、校内演奏会で独奏できるだけの技術を身に付けた生徒もいた。

本章では音楽の授業の中で展開されたオルガン・ピアノ指導を中心に述べてきた。最後に、師範学校では部活動という形で、ブラスバンドやオーケストラ活動が展開されていた点を付記したい。香川県師範学校卒業生の田山氏は、「香川県師範管弦楽団」に所属し、ヴァイオリンを担当していた。一方、岡山師範学校卒業生の原氏は、次のように語っている。

師範学校は全員何らかの部活に入らなければならず、水泳部に入っていました。ただ、秋になると寒くて泳げないものですから、ブラスバンド部に変わるのです。難波正先生が指揮を振ってくださいました。特に、3月10日に「陸軍記念日」がありまして、競技場を中学校の生徒たちが行進をするのです。そのときにブラスが演奏して、トランペットを吹いたことが印象に残っています。

(2003年9月28日 原氏)

塚原康子は、「1931年（昭和6年）の満州事変以後は、時局にかなう吹奏楽にたいする関心がいつそう高まり、全国で学校バンドの結成が相次ぐようになる」と指摘する¹⁰⁰。原氏によると、音楽科教員の故森清氏が、岡山県師範学校へ赴任した1936（昭和12）年頃、ブラスバンド部をつくったそうである。ちなみに、『京都府師範学校沿革史』（1938）には、「昭和六年五月音楽同好会創立」と記載されている¹⁰¹。このような動きは、中等教育、高等教育に限ったことではない。供田武嘉津によると、初等教育の場においても音楽隊が結成されたとのことである¹⁰²。師範学校は部活動が盛んなところであったことは有名である¹⁰³。したがって、師範学校における授業外での音楽活動が、卒業後教員となった際にどのように生かされていったかについては今後の課題である。

¹ 伊沢修二『音楽取調成績申報書』東京、1884年、23頁（山住正巳校注『洋楽事始』平凡社、1971年を使用）。

² 同上、27頁。

³ 同上、28頁。

⁴ 同上、29頁。

⁵ 上野大輔「オルガン」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社、2004年、96頁。

その他、東京芸術大学百年史刊行委員会、財団法人芸術研究振興財団『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』音楽之友社、1987年、111-116頁、参照。

⁶ 文部省音楽取調掛編『小学唱歌集』三編、1881-1884年。

⁷ 刈田均「学校教育とオルガン・ピアノ」横浜市立歴史博物館・横浜開港資料館編『製造元祖 横浜 風琴洋琴ものがたり』横浜市歴史博物館・（財）横浜市ふるさと歴史財団、2004年、10頁。

⁸ 山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』復刊学術書、東京大学出版会、1967年（1979年復版使用）、186頁。山住は次のように続ける。「しかし、全国の学校へ普及させるには、音楽取調掛をとおしてアメリカから購入するだけではまったく不十分であり、日本の業者によるオルガン製作の発展がなければならなかった。民間業者は、取調掛におけるオルガン製作の努力とは別に、独自に研究をかさね、（明治）17（1884）年ごろから製作が可能となったようである。二十年代になると、山葉寅楠も製作にとりかかった」（カッコ内は筆者による加筆）。また、山住はさらに次の注を加えている。「しかし全国のす

すべての師範学校にいきよにオルガンがそろったわけではない。たとえば山口師範学校では、「当時本校には生徒練習用の風琴が1台あったのみ」。

- 9 赤井励『オルガンの文化史』青弓社、1995年、51頁。
- 10 檜山陸郎『楽器産業』音楽・楽器ビジネス早わかり読本、1990年、223頁。
- 11 西原稔「産業史の視点から見た戦前における日本のピアノ産業」比較文明学会編『比較文明』13、刀水書房、1998年、108頁。
- 12 『文部省選定祝祭日儀式用唱歌伴奏譜』大日本図書、1936年。
- 13 赤井励「オルガンと唱歌の伴奏」『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』ビクターエンタテインメント、2000年、215頁。

京都市学校歴史博物館編『我が国の近代教育の魁 京の学校・歴史探訪』京都市社会教育振興財団、160頁にはこう書かれている。「明治期の教授用楽器は風琴（オルガン）であった。古い記録によると、明治19年の小学校令で、尋常小学校で裁縫科が廃止され、裁縫専科の先生たちは、転科のため風琴による唱歌指導の講習会を受けた。講習会修了者には資格が与えられ、各小学校は競って唱歌授業を実施しようとしていたが、風琴の購入が容易ではなかった。（中略）輸入ピアノが入ってきたのは、大正末期から昭和初期にかけてであった」。
- 14 文部省教育調査部『師範教育関係法令の沿革』1938年、68頁。
- 15 同上、135、144-145頁。
- 16 上田友亀『国民学校器楽指導の研究』共益商社書店、1943年。遠藤尚子によると、「簡易楽器」が学校教育の中で用いられ始めたのは、1932（昭和7）年ころのことである（遠藤尚子「簡易楽器」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』、前掲書、267頁）。なお、山住は、1881（明治14）年末頃、日本でオルガン製造が始まるまでの数年間、「簡易楽器」が用いられていたと述べる（山住、前掲書、63頁）。
- 17 先行研究としては以下のものがある。西原稔『ピアノの誕生』講談社、1995年。西原稔「産業史の視点から見た戦前における日本のピアノ産業」比較文明学会『比較文明』13号、刀水書房、1997年、98-115頁。田中健次『近代日本における洋楽器産業と音楽文化』大阪大学大学院文学研究科博士論文、1998年。
- 18 増井敬二『データ・音楽・につぼん』民主音楽協会、1980年、15頁、には次のように記されている。「ピアノもオルガンもその平均価格が、昭和11年を最低として昭和4年からだんだんと下がっている事である。では物価が昭和11年は安かったのかと（中略）物価指数を見ると、当時の最低は6年の物価指数74.8で、11年は物価指数が103.6とかなり物価が高くなっているのである」。
- 19 西原稔「産業史の視点から見た戦前における日本のピアノ産業」比較文明学会編『比較文明』13、刀水書房、1998年、107頁。西原は、1927（昭和2）年、河合楽器が350円で発売した64鍵（5オクターブ）の「昭和型ピアノ」と呼ばれるアップライトピアノが、ピアノの普及に影響を与えたと述べている（108頁）。
- 20 村尾忠廣「唱歌教育の地方への普及」『音楽教育研究』8月号、音楽之友社、1970年、145頁。村尾忠廣「学校唱歌の開設と地方への普及」東京芸術大学音楽取調掛研究班編『音楽教育成立への軌跡』音楽之友社、1976年、423頁。
- 21 便宜上「岩手師範学校」を使用しているけれども、次に示すように校名が改称されている。1876（明治9）年、盛岡師範学校創設、1879（明治12）年、県立岩手師範学校と改称、1886（明治19）年、岩手県尋常師範学校と改称、1898（明治31）年、岩手県師範学校と改称、1923（大正12）年、女子部独立、岩手県女子師範学校設置、1943（昭和18）年、岩手県師範学校ならびに岩手県女子師範学校を官立に移官、岩手師範学校と改称（作道好男・作道克彦編『岩手大学教育学部百年史』教育文化出版、1983年、1019-1022頁）。
- 22 岩手大学教育学部創基百年刊行委員会編『創基百年 岩手大学教育学部』1976年、145-155頁。なお、音楽取調掛への楽器購入依頼は、1883（明治16）年1月23日に風琴1台が出されている（村尾「学校唱歌の開設と地方への普及」前掲書、423頁）。
- 23 黒沢隆朝『図解 世界楽器大事典』雄山閣、2005年（初版1972年）、392-395頁。「私が初めてピアノを見たのは16歳であり、秋田市の師範学校の講堂に、外国製のキイの重いグランドピアノがあつて、先輩成田為三などが、ソナチネの一番を得意そうに弾いていたのが印象的であつた」（392頁）。なお、筆者は、故黒沢隆朝氏の甥の武石佳久氏や秋田県立博物館学芸主事の糸田和樹氏から資料の提供を受け、参考にしていく。
- 24 同上。なお、音楽取調掛への楽器購入依頼は、1883（明治16）年1月27日に風琴1台が出されている（村尾「学校唱歌の開設と地方への普及」前掲書、423頁）。

嶋田由美は、「全国学校音楽の状況」『音楽』8巻1号、1905（明治38）年5月18日に基づき、「明治30年代前半になっても地方の師範学校の中にさえピアノを所有していない学校もあった」と指摘する（嶋田由美「小学校校歌制定に関する研究——明治後期における東京府内小学校校歌制定過程の分析を通して」『音楽教育学』第16号、日本音楽教育学会、1987年、24頁）。
- 25 香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会『香川大学教育学部百年のあゆみ』香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会、1989年、15頁。
- 26 安田寛・北原かな子「楠美恩三郎と弘前」『弘前大学教育学部紀要』第81号、弘前大学教育学部、1999年、71頁。
- 27 同上、33頁。式次第の中で「ピアノ奏楽」は4回組み込まれている。最初の3曲は、《碧蹄館戦歌》（男子2年生）、《保児ノ歌》（女子第3・2年生）、《仰げば尊し》（卒業生神船幸吉氏）とあるので、歌と組み合わせられて演奏、最後の1曲は曲目が記されていないけれども、楠見助教諭のピアノ独奏であつたと考えられる。

熊野勝祥『香川県明治教育史』香川県図書館学会・香川県中学校社会科研究会、2000年、423頁。『香川新報』1891年5

月6日。

- ²⁸ 香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会『香川大学教育学部百年のあゆみ』香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会、1989年、174頁。「熱心な人は寸暇を惜しんで、ツェルニー、更にソナチネ・ソナタと、力をつける者も多くなった」。
- ²⁹ 岡山県女子師範学校編『記念誌岡山県女子師範学校』1932年、143頁。
- ³⁰ 佐藤吉五郎（1902～1991）、堺市における和音感教育の推進。1921（大正10）年秋田県師範学校卒業後、教職に就く。1923（大正12）年東京音楽学校甲種師範科入学、1926（大正15）年卒業、岡山県女子師範学校教諭となる。1934（昭和9）年大阪府堺市視学に転出。1943（昭和18）年海軍教授となり、神奈川県久里浜の対潜学校に赴任（木村信之『音楽教育の証言者たち上 戦前を中心に』音楽之友社、1986年、187頁）。
- 佐藤自身、岡山県女子師範学校について以下のように著している。
- 私は大正15年に東京音楽学校を卒業、岡山県女子師範学校教諭として足かけ10か年の間、移動階名唱による音楽教育を真剣に実施した。
- ご承知のように、師範学校は小学校教員の養成が主目的であるから、歌唱・器楽・和声学・教授法・音楽理論を教えたが、そのいずれの1つを取り上げてみても、困難なものばかりである。特に女教師は全員音楽科を担任しなければならない不文律のようなものがあって、音楽科は彼女たちにとって、重要な学科であった。（中略）
- 器楽は、小学校1年から高等2年までの伴奏が弾けなければならないのに、5か年間の力では弾けない。特に当時の文部省唱歌の伴奏は非常にむずかしかった。
- （佐藤吉五郎「戦中の音感教育——現場からの証言」『日本の音楽教育』音楽之友社、1975年、74頁）。
- その他、筆者は、佐藤吉五郎が岡山県女子師範学校音楽科教員だったころに、岡山県女子師範学校附属小学校教員（1927～40年）であった恒次恒次氏に聞き取り調査を行った。2005（平成17）年6月3日（金）、於：エスペランスわけ（岡山県和気郡和気町）。岡山師範学校卒業生の岡嶋信夫氏も同席。恒次氏は、岡山県女子師範学校について「オルガンは、20～30台あった。各教室（普通教室）の中や廊下に置いてあり、休み時間や放課後に生徒が練習をした。運動会の際は、オルガンを数台持ち出し、伴奏に使った」と回想する。また、中田吉昭編『恒次恒次先生百年記念誌』2005年、15頁の中で、恒次氏は以下のように著している。
- 岡山女子師範学校の音楽の先生に佐藤吉五郎という先生が昭和9年3月まで十ヶ年居られた。津山民謡や奥津小唄を作曲された有名な先生である。私は本校と附属との関係で何時も指導をしてもらったり、仕事を共にしたりすることが多かった。
- ³¹ 新福祐子『女子師範学校の全容』家政教育社、2000年、344、686、729頁。なお、新福は、岡山県女子師範学校、香川県女子師範学校のオルガン・ピアノの設置状況についても言及している（806、872頁）。
- ³² Mason, Luther Whiting, 1818-1896年。
- ³³ 森節子「明治前期」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社、2004年、755頁。西原稔『ピアノの誕生』講談社、1995年、221-222頁。
- ³⁴ 山住、前掲書、119-148頁。
- ³⁵ 小林緑・西恒子「取調掛における授業」東京芸術大学音楽取調掛研究班編、浜野政雄・服部幸三監修『音楽教育成立への軌跡』音楽之友社、1976年、341-367頁。
- ³⁶ 河口道朗『近代音楽教育論成立史研究』音楽之友社、1996年、156-182頁。
- ³⁷ 市川理恵「音楽取調掛におけるピアノ教育の導入」『日本女子大学人間社会研究科紀要』第2号、日本女子大学、1996年、41-51頁。市川理恵「音楽取調掛におけるピアノ教育の実態——「教授細目」及び使用教則本の考察を中心に」『音楽教育史研究』第2号、音楽教育史学会、1999年、1-11頁。
- ³⁸ 国府華子「わが国における明治期のピアノ教育——音楽取調掛、東京音楽学校を中心に」『音楽教育史研究』第2号、音楽教育史学会、1999年、25-26頁。
- ³⁹ 森節子「明治前期」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』、前掲書、755頁。河口、前掲書、183-193頁。
- ⁴⁰ 坂本麻実子「東京音楽学校の青春——明治36年度～40年度入学生修学状況からの考察」『桐朋学園大学研究紀要』第26集、2000年、29頁。
- ⁴¹ 坂本麻実子「明治中等音楽教員養成の研究——『田舎教師』とその時代」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士論文、2003年（『人間文化研究年報』第26号別冊、お茶の水女子大学人間文化研究科、2003年、41頁から引用）。
- ⁴² 島崎赤太郎、東京音楽学校教官…専門・担当：オルガン、和声学、楽式一班、事務、邦楽調査掛、唱歌編纂掛、楽語調査掛。在職期間：1893（明治26）年8月31日～1933（昭和8）年4月13日。生没年：1874（明治7）年7月9日～1933（昭和8）年4月13日（東京芸術大学百年史編集委員会・財団法人芸術研究振興財団編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編 第二巻』音楽之友社、2003年、1560頁）。
- ⁴³ 赤井『オルガンの文化史』、前掲書、119頁。その他、島崎の『オルガン教則本Ⅰ』が売れた理由について、赤井は「官立の東京音楽学校の先生が書いた教科書というのが、師範学校の先生たちには使いやすかったのだろう」と考察している（同上、122頁）。
- ⁴⁴ 上野「オルガン」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』、前掲書、97頁。
- ⁴⁵ 山本文茂「唱歌教育の時代（明治後期）＝試行・定着期」奥田真丈監修『教科教育百年史』建帛社、1985年、403頁。
- ⁴⁶ 村尾忠廣「藤原彦吉による唱歌教育の実践（一）——明治期、愛知県八名郡における一教師の記録」『音楽教育研究』第16巻第6号、音楽之友社、1973年、31頁。
- ⁴⁷ 島崎赤太郎編『オルガン教則本』巻、共益商社書店、1899年（1926年重版使用）。

- 48 文部省『師範学校中学校高等女学校 使用教科図書表 明治43年度』1912年、142-147頁（『師範学校・中学校・高等女学校使用教科図書表 明治43年度 文部省』教科書研究資料文献第十一集、芳文閣、1992年復刻版使用）。
- 49 浜野政雄は、天谷秀・多梅稚編『初等オルガン教科書』1905年について次のように考察している。「はじめにオルガンの使用法として姿勢や手指の運用法、踏板、増音器の練習法などをあげ、ハ長調、ト長調、ヘ長調と順次唱歌旋律、民謡、各国々歌等に簡単な伴奏をつけた練習曲をあげている。興味深いのは、今日も多く音楽科授業の始めと終りに楽器で演奏される三挙動あるいは四挙動の挨拶用合図の楽譜を掲げていることである」（浜野政雄「音楽」財団法人教科書研究センター編『旧制中等学校教科内容の変遷』ぎょうせい、1984年、370-371頁）。
- 50 黒沢隆朝・小川一朗『標準師範学校音楽教科書』第一編・第二編、共益商社書店、1938年（昭和14年1月28日、文部省検定済、師範学校音楽科）。
- 51 黒沢隆朝『音階の発生よりみた音楽起源論』音楽之友社、1978年。
- 52 黒沢隆朝『楽器大図鑑』共益商社書店、1938年。
- 53 黒沢隆朝『西洋楽器の歴史』音楽之友社、1949年。
- 54 黒沢隆朝『楽器の歴史』音楽之友社、1956年。
- 55 黒沢『図解 世界楽器大事典』前掲書。
- 56 黒沢『西洋楽器の歴史』前掲書、25-41頁。
- 57 管見の限り、小笠原良造編『新選オルガン学習教本』廣文堂、1927年や真篠俊雄編『改訂初等オルガン教科書』大阪開成館、1930年には、バイエル練習曲が含まれている。
- 58 黒沢隆朝・小川一朗編『標準オルガン教則本』第一編・第二編、共益商社書店、1940年修正再版発行（1939年印刷、発行）（昭和15年8月28日、文部省検定済、師範学校・高等女学校音楽科）。
- 59 主な「緒言」は以下の通り。「本書は師範学校及び高等女学校のオルガン教科書として編纂されたものである。本書の編纂にあたって特に意を用いたのは次の諸点である。
- 一 本書はオルガン音楽の理解の他に、ピアノ演奏の基礎となる可き練習曲をも多数に加へた。（中略）
 - 二 練習曲及び楽曲は極めて漸進的に前後の関係を綿密にし、然も和音旋律等を理解把束せしめることに務めた。（中略）
 - 三 練習曲、楽曲には必要に応じて奏法上の注意、楽曲の形式、和音の構成、その他作曲家、曲名等の解説を加へ、又は写真図解等を十分に利用した。（中略）
 - 四 練習曲楽曲の数は種々の場合を考慮して豊富にこれを集めた。（中略）
 - 五 オルガンの音栓の使用については、前編に於いては二列笛の場合は①と②とを抽出することを原則とし、強弱は増音器（スウェル）を用ひる事として音栓による発想は考へない事にした。（中略）
 - 六 ピアノ曲、合奏曲、変奏曲の著名な楽曲の鑑賞に資するために、名曲の断片主題等をく参考として旋律のみを、又はオルガン演奏には無理なものであるがオルガンによつて名曲の輪郭をしのぶたよりとして示したものである。
 - 七 伴奏の奏法を習得せしめるために後編に若干の歌曲を挿入した。
- 以上の諸点について見るごとく、本書は趣味的であると共に実用を主として編纂されたものである。それ故オルガンによつて音楽を学ばんとする一般の人々にも好適の教則本であらう。
- 60 文部省『師範器楽 本科用巻一』師範学校教科書、1943年。
- 61 木村、前掲書、230-231頁。
- 62 同上、285-286頁。
- 63 山本文茂「芸能科音楽教材の特質——教科書・教師用指導書の分析を通して」浜野政雄監修・東京芸術大学音楽教育研究室創設30周年記念論文集編集委員会編『音楽教育の研究——理論と実践の統一めざして』音楽之友社、1999年、293頁。
- 64 西村和子「バイエルピアノ教則本についての一考察」『山口女子大学研究報告』第7号、山口女子大学、1981年、63-68頁。西村は、『バイエルピアノ教則本』の形式について、「一部形式・二部形式・三部形式が圧倒的に多く」（68頁）と分析する。
- 65 文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943年、163頁。
- 66 赤井『オルガンの文化史』前掲書、242頁。
- 67 高折宮次・真篠俊雄編『初等ピアノ・オルガン教科書』大阪開成館、1936年（昭和11年11月30日、文部省検定済）。「緒言」は以下の通り。「本書は師範学校・女子師範学校・高等女学校及び実業学校のピアノ又はオルガンの教科用に充てんがために編纂したものである。本書はピアノ並にオルガンの初歩の課程を会得せしめんがためにバイエル、ラインハルト、チエルニー並びにダム等の教則本中よりピアノ又オルガンに併用して不都合なく且つ奏法の一般技術を会得せしめんがために重要な楽曲を選び之に趣味ある材料を加え無味乾燥にして厭倦を起さしむることのなき様配列せり。本書中に選びたる楽曲はピアノ又はオルガンの専門的見地より見れば極めて初歩たるのみであるが学習者は幸ひこれを以て階梯とし其の門に入り其の堂に上ることを得ば編者の本懐とするところである」。
- 68 三国谷三四郎編『京都府師範学校沿革史』京都府師範学校、1938年（第一書房、1982年復刻版使用）、205頁。
- 69 比較対象は次の通り。『初等オルガン教科書』：両手練習以降の1番から87番までの全87曲。「附録」として掲載されている儀式唱歌は含めない。『師範器楽』：両手練習以降の3番から78番までの全76曲。
- 70 山本文茂「芸能科音楽教材の特質——教科書・教師用指導書の分析を通して」浜野政雄監修・東京芸術大学音楽教育研究室創設30周年記念論文集編集委員会編『音楽教育の研究——理論と実践の統一めざして』音楽之友社、1999年、293頁。
- 71 《君が代》《一月一日》《紀元節》《天長節》《明治節》《勅語奉答》（2種類）。いずれも歌詞は付いていない。
- 72 30番：《霞か雲か》『小学唱歌集二』1883年（D→Gへ移調）、51番：《庭の千草》『小学唱歌集三』1884年（E→Gへ移

調)。

- 73 島崎赤太郎『オルガン教則本』宅 (1926) は、「踏板練習」で始まり、「右手練習」7 曲、「左手練習」7 曲の後、「両手練習」へと進む。
- 74 文部省『師範音楽 本科用巻一』師範学校教科書, 1943 年, 148 頁。分散和音について次のように定義されている。「分散和音トハ、同一ノ和音ノ各声部ノ音ヲ一音マタハ数音ツツ、時間ヲ別ニシテ響カセルコトヲイフ」。
- 75 文部省『ウタノホン上 教師用』日本書籍, 1941 年, 19 頁。他の学年の『国民学校初等科音楽教科書のための教師用指導書』にも同様の記述がみられる。伴奏については次のように記されている。「伴奏は、歌唱の誘導補佐の任に当るばかりで無く、和音訓練及び聴覚訓練等と密接な関係があるから、常に正しく奏するやうに心掛けなければならない。教師は、先づ児童の歌唱に耳を傾け、伴奏の強弱緩急等を明確に表現することが肝要である。伴奏は、従来ややもすると軽視される傾向があつたが、国民学校の音楽教育に於ては、之を重視する必要がある」。
- 76 井上武士「教材・教科書にみる明治 100 年の歩み」『音楽教育研究』4, 音楽之友社, 1968 年, 57 頁。
- 77 井上武士『国民学校芸能科 音楽精義』教育科学社, 1940 年 (1941 年重版使用), 329 頁。下記のように記してある。

(イ) ピアノ

ピアノは教授用、伴奏用楽器として最もすぐれて居る。その理由は次の如くである。

- (1) ピアノの音は明快で児童の心情に適する。
- (2) ピアノは断音的で、リズムや音程を明瞭に表現することが出来る。
- (3) 唱歌の伴奏楽器としてピアノは最も簡易であり、好適である。(多くの唱歌曲の伴奏譜はピアノ用として作られてある)

竪型(アップライト)よりも平型(グランド)の方が、児童の管理上からいっても、又演奏上からいっても好適である。高いもの程良いといへるが、大体二千元内外位で適当なものが得られる。

(ロ) オルガン

時によつて教授上、又は伴奏用としてオルガンも使用したい時があるから、之も必要である。大体三百円内外で適当なものが得られる。

- 78 「国民学校・青年学校・中等学校・師範学校及び青年師範学校において使用する教科用図書に関する件」1946 (昭和 21) 年 7 月 20 日, 地方長官, 各学校長宛, 教科書局長 (発教八七号)。「但し実業学校学科教科書及び師範学校の器楽の教科書に限り追て何分の指示ある迄は従来の通り取扱つてよろしい」(石川謙代表『近代日本教育制度史料』第二十五巻, 大日本雄弁会講談社, 1958 年, 311 頁)。
- 79 後藤重樹「新制大学の発足と教員養成」『音楽教育研究』8, 音楽之友社, 1971 年, 62-63 頁。
- 80 宇都宮大学教育学部史編纂委員会『宇都宮大学教育学部百十五年史』1989 年, 70 頁。
- 81 2003 (平成 15) 年 10 月 1 日 (水), 於: 金光邸 (岡山県岡山市)。
- 82 2005 (平成 17) 年 3 月 16 日 (水), 於: 全日空ホテルクレメント高松 1 階喫茶室 (香川県高松市)。
- 83 2004 (平成 16) 年 5 月 9 日 (日), 於: 渋谷邸 (香川県高松市)。
- 84 2004 (平成 16) 年 4 月 5 日 (月), 於: 岡嶋邸 (岡山県備前市)。
- 85 2004 (平成 16) 年 5 月 7 日 (金), 於: 倉敷児島天満屋 2 階喫茶室 (岡山県倉敷市)。
- 86 2004 (平成 16) 年 10 月 24 日 (日), 於: 真篠邸 (東京都世田谷区), 真篠将氏への聞き取り調査 (滝沢美恵子氏同席)。真篠氏は、東京音楽学校甲種師範科における真篠俊夫氏のオルガンの授業では、「記譜法とそれから、移調、転調ですね。それから実際に楽譜の上だけではなく、鍵盤で、音を聴きながらどういうふうになるかということ」を指導されたと言語。
- 87 香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会, 前掲書, 100 頁。「音楽部に初めてバイオリンやチェロなどを取り入れたら、1 年生からピアノを弾かせたり、公開公演を催すなど、意欲的な行事も実施した」。
- 88 『改訂初等オルガン教科書』(1930) と『師範音楽 本科用巻一』(1943) に掲載されている「君が代」と比較すると、『師範音楽本科用巻一』の方が厚みのある和声進行をしている。なお、『師範音楽 本科用巻一』と『文部省選定祝祭日儀式用唱歌伴奏譜』(1936) の伴奏譜は同じである。
- 89 「勅語と風」という題で、当時の香川師範学校の学習・寮生活の様子を仮名の人物を配して述べた文章から抜粋した (香川師範学校男子部本科・昭和 23 年 3 月卒同窓生『わが香川師範時代』1996 年, 75 頁)。
- 90 明石要一は、1979 (昭和 54) 年、千葉師範の 1926 (昭和元) 年から 1947 (昭和 22) 年度卒の男子生徒対象にアンケート調査を行った。その結果、師範学校において「名物教師がいた」と答えたものは、91.1% にのぼることが明らかとなった。9 割を超えた生徒が、「尊敬」「信頼」「親しみ」という肯定的な感情で、名物教師にニックネームを付けていた。ニックネームの付け方としては、①身体的な特徴をとらえたもの、②服装や人柄に関するもの、③授業の仕方や話し方に関するもの、④名前をもじったものに分類できる (明石要一「昭和期師範生の生活史」石戸谷哲夫・門脇厚司編『日本教員社会史研究』亜紀書房, 1981 年, 487-489 頁)。
- 91 オルガン検閲の様子について、『わが香川師範時代』には次のように記されている。
「師範ならではの体験ににくい音楽の、必須にオルガン検閲があった。＜1, 2, 3, 4＞とか、＜1 と 2 と＞などと拍子を取りながら、教則本どおりに弾いているかどうか。1 人ずつ順番を待ちながら、ドキドキしながら検閲を受けたものである。合格すれば次に進めるシステムなので、昼休み等の自由時間を見つけて、練習したことを思い出す」(香川師範学校男子部本科・昭和 23 年 3 月卒同窓生, 前掲書, 31 頁)。
- 92 香川師範学校男子部本科・昭和 23 年 3 月卒同窓生, 前掲書, 1996 年, 97-98 頁。
- 93 師範学校では寄宿舎制度が採られていた (三好信浩『日本師範教育史の構造——地域実態史からの解析』東洋館出版社,

1991 年, 57-65 頁)。香川師範学校では、「たこをつる」という上級生がもっともらしい理由をつけて下級生をなぐる行為がしばしば行われていた(香川師範学校男子部本科・昭和 23 年 3 月卒同窓生, 前掲書, 71 頁)。このような行為は, 香川師範学校に限ったことではなく, 全国的にも行われていたように思われる(山田昇「明治国家の教師像と養成機構の整備」中内敏夫・川合章編『教員養成の歴史と構造』日本の教師 6, 1974 年, 116-117 頁)。

寄宿舎制度について, 海後宗臣は次のように述べている。「全員寄宿生であることから, 寮内においては軍隊の内務班のような教育方法がとられ, 被服の支給と相まってそれらの整頓作業まで軍隊に順ずる方法を採用していた。このような学校内の空気が, 固定した<師範型>をつくりあげる大きな要因となっていた」(海後宗臣編『教員養成』戦後日本の教育改革第 8 巻, 東京大学出版会, 1971 年, 8 頁)。

上記のような環境から, ピアノ使用に関しても師範学校独特のルールが生まれたと考えられる。

94 2003 (平成 15) 年 9 月 28 日 (日), 電話による聞き取り。

95 小笠原良造は, 1905 (明治 38) 年 3 月 27 日に東京音楽学校甲種師範科を卒業している。1952 (昭和 27) 年 12 月 18 日に物故者となる(東京芸術大学音楽学部同声会『同声会会員名簿』1999 年, 29 頁)。岡山師範学校の在職年については, 岡山師範<男子>卒業生名簿作成委員会『岡山師範(男子)卒業生名簿』1982 年, 8 頁を参照した。岡山県女子師範学校訓導, 寺尾勝年との共著『本譜教授の実際』(1924, 廣文堂書店)の著書がある。

96 2003 年 9 月 26 日に開催された「昭和 16 年 3 月卒業師範科級会」の場を借りて, アンケート調査を依頼, 回答は後日郵送された。

97 浜野政雄著作集編集委員会編, 浜野政雄評論集『戦後音楽教育は何をしたか』音楽之友社, 1982 年, 116 頁。.

98 供田武嘉津『日本音楽教育史』音楽之友社, 362 頁。

99 東京芸術大学百年史編集委員会, 財団法人芸術教育振興財団編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』音楽之友社, 2003 年, 1535-1536 頁。

100 塚原康子「軍楽隊と戦前の大衆音楽」『プラスバンドの社会史』青弓社ライブラリー20, 青弓社, 2001 年 (2004 年重版使用), 115 頁。

101 三国谷, 前掲書, 176 頁。

102 供田, 前掲書, 369 頁。

103 明石, 前掲書, 476 頁には以下のように記されている(調査対象: 千葉師範の 1926 年から 1945 年度卒の男子生徒)。

放課後多くの生徒がクラブ活動に参加していたが一部生は必須だったので彼らが中心となっていた。クラブの種類は運動系や文化系などさまざまあった。しかし, 文武を両立させる剛健な精神をもつことが教育目標の一つであったから, 運動系のクラブが奨励され盛んであった。一番人気のあったクラブは「柔剣道」で 3 割をこえるものが参加している。次が「陸上競技」(11.2%) で, そのあとに「バスケット」(6.6%), 「野球」(5.5%), 「庭球」(5.5%) と続いている。その他, 「ボート部」「バレー部」「弓道部」「グライダー部」「音楽部」などがあるが, これらはとりたてて人気のあるものではなかった。

第5章 師範学校における鑑賞指導

本章では、「師範学校教授要目」、師範学校音楽教科書の分析・検討ならびに聞き取り調査を通して、師範学校における鑑賞指導の内容と実態を明らかにすることを目的とする。

1941（昭和16）年、「国民学校芸能科音楽」発足に伴い、鑑賞の領域が新設され¹、国民学校初等科音楽教科書のための教師用指導書（以下、国民学校教師用指導書、と略記）が発行された²。国民学校教師用指導書には鑑賞教材が掲載され、各楽曲の指導方法の他、授業で使用するためのレコードが紹介されている。これについては寺田貴雄³の他、山本文茂⁴や本多佐保美・国府華子⁵によって教材分析を中心とした研究が行われている。また、本多⁶、菅道子⁷の研究では、鑑賞指導が一部の国民学校において実施されていたことが明らかにされている⁸。

鑑賞指導の方法について国民学校教師用指導書には「主として演奏、音盤、ラジオ、音楽映画、等による」と規定された⁹。これについて寺田は、もっとも実用的な方法は、音盤（レコード）であったと指摘している¹⁰。『蓄音機とレコードの選び方・聴き方』（1931）を著した田辺尚雄は、「レコードを使用すれば任意の時に任意の順序で任意の曲をしかも何回でも繰返して聞くことが出来る。それ故鑑賞教育はレコードを利用するのを本体とすべく、実演ラジオ等は適当に補助として利用するのがよい」と、学校教育においてレコードが最善であると推奨している¹¹。また、柴田知常¹²や足羽章¹³の研究では、学校において使用される鑑賞用レコードの制作、普及の状況が明らかにされている。

このような学校教育における鑑賞指導の導入の背景には、当時の洋楽レコード界の動向が影響していると考えられる¹⁴。歌崎和彦は、昭和10年代前半を洋楽レコード界の黄金時代ととらえている¹⁵。事実、蓄音機の生産数量は1937（昭和12）年に271,460台、レコードの生産数量は1936（昭和11）年に29,682,590枚といずれもピークに達している¹⁶。このような時期に師範学校の鑑賞指導においてどのような音楽が選曲され、どのような視点で授業が展開されたかは、教師の養成、音楽教育観の形成、ならびに音楽表現力の育成を考える上でも重要であると考ええる。

本章では以下の3つの研究方法をとる。第一に、「師範学校教授要目」等の法令を検討する。第二に、文部省検定済師範学校音楽教科書である黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』¹⁷（1938）における鑑賞教材の傾向を分析する。第三に、『標準師範学校音楽教科書』を使用していた香川県師範学校の事例に着目し、師範学校音楽科教員の授業メモや聞き取り調査記録、師範学校の卒業生を対象とした聞き取り調査から、鑑賞指導の実態を明らかにする。

第1節 「師範学校教授要目」等における鑑賞指導

法規の中に師範学校における鑑賞指導が規定されたのは、1925（大正14）年の「師範学校教授要目」改正である¹⁸（表Ⅱ-5-1）。「注意」の項で「読譜力及鑑賞力ノ養成ニカムヘシ」と規定されているのみで、各学年の内容や指導方法等に関する規定はない¹⁹。1931（昭和6）年に「師範学校教授要目」が全面改正²⁰された際にも、鑑賞に関しては上記の規定を継承している²¹。

表Ⅱ-5-1 「師範学校教授要目」

年	法 令
1925（大正14）年	読譜力及鑑賞力ノ養成ニカムヘシ
1931（昭和6）年	読譜力及鑑賞力ノ養成ニカムヘシ

出典 教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』第七巻、1939年から作成。

では、官立専門学校程度に昇格する1943（昭和18）年以降の法令によって、師範学校の鑑賞指導がどう変えられたのだろうか。1943（昭和18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」²²では「芸能科音楽」の内容が、「歌唱、聴覚訓練、器楽、指揮法、音楽理論、鑑賞、音楽史、国民学校芸能科音楽ニ関スル研究」の8領域に分けられている。表Ⅱ-5-2は、そこから「鑑賞」ならびに「鑑賞」との密接な関係をもつ「音楽史」に関する部分を抜粋したものである。

表Ⅱ-5-2 「師範学校教科教授及修練指導要目」

1943（昭和18）年 「師範学校教科教授及修練指導要目」制定		
	鑑賞	音楽史
予科 第1学年	(一)声楽曲 (二)器楽曲 形式ノ整備セルモノ 特ニ日本古来ノ音楽ノ器乐的ノモノヲ加フ	
予科 第2学年	(一)声楽曲 (二)器楽曲 形式ノ整備セル合唱曲、合奏曲、日本古来ノ音楽 日本古来ノ音楽ノ説明ニ留意スベシ	
予科	<教授上ノ注意> 音楽鑑賞ハ我ガ国ノ作品ヲ主トシテ外国ノ名曲ヲモ鑑賞セシメ我ガ国音楽ノ特質ヲ会得セシムベシ 鑑賞ニ当タリテハ作品ノ精神ヲ感得セシメ其ノ気韻ヲ味ハシムベシ 鑑賞ニハ演奏、音盤、放送等ヲ利用スベシ	
本科 第1学年	(一)声楽曲 (二)器楽曲 形式ノ整備セルモノ	我ガ国ニ於ケル音楽ノ発達（江戸時代末期マデ） 東洋音楽トノ関連ヲ明ナラシム
本科 第2学年	日本古来ノ音楽、小編成ノ合奏、合唱曲・室内楽	我ガ国ニ於ケル音楽ノ発達（明治時代以降） 西洋音楽トノ関連ヲ明ナラシム
本科 第3学年	大編成ノ合奏曲、合唱曲、日本古来ノ音楽	

本科	<p><教授上ノ注意> 音楽鑑賞ハ我が国ノ作品ヲ主トシテ外国ノ名曲ヲ モ鑑賞セシメ我が国音楽ノ特質ヲ会得セシムベシ 鑑賞ニ当タリテハ作品ノ精神ヲ感得セシメ其ノ気 韻ヲ味ハシムヲ旨トシ必要ニ応ジテ創作ノ由来、其 ノ歴史的意義等ヲ説明スベシ</p>	<p><教授上ノ注意> 音楽史ニ在リテハ我が国音楽ノ史的発達ヲ授ケ之 ト関連シテ東西ニ於ケル音楽ノ発達ヲ知ラシムベ シ</p>
----	---	--

出典 文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943年から作成。

この1943（昭和18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」を先の1931（昭和6）年の「師範学校教授要目」と比較すると、以下の点が加えられている。

- ・各学年の内容や指導方法等の具体的な規定がなされた。
- ・従来からあった「鑑賞」の他、「音楽史」の領域が本科第1，2学年に新設されている²³。
- ・「鑑賞」では「日本古来ノ音楽」，「音楽史」では「我が国ニ於ケル音楽」と示されているように、日本音楽を重要視した内容になっている。
- ・「鑑賞ニハ演奏，音盤，放送等ヲ利用スベシ」と、鑑賞指導の方法が具体的に提示されている。

以上、「師範学校教授要目」における鑑賞指導に関する規定を概観した。1931（昭和6）年の改正では、1925（大正14）年の条文が踏襲されたに過ぎなかった。学年別に具体的な内容が示されるようになったのは、1943（昭和18）年の改正である。

なお、第1章で述べた通り、1943（昭和18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」に基づき、国定師範学校音楽教科書である『師範音楽 本科用巻一』²⁴（以下『師範音楽』と略記）と『師範器楽 本科用巻一』²⁵（以下『師範器楽』と略記）が作成される。しかし、『師範音楽』の中に「日本音楽史」の記述があるのみで²⁶，これらの国定教科書には鑑賞教材が掲載されていない。また、『師範音楽』『師範器楽』の普及・伝達のために実施された「師範学校音楽科教員講習会」（1943年5月24日・25日）の中に、「音楽史」は含まれているものの、鑑賞指導は取り扱われていない²⁷（第1章第2節）。したがって、具体的な規定がなされた「師範学校教科教授及修練指導要目」の精神を教科書分析の視点から明らかにすることはできない。

第2節 黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』（1938）における鑑賞

ここでは師範学校音楽教科書における鑑賞教材の分析をするために、1938（昭和13）年に共益商社書店から出版された、黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』を取り上げる。『標準師範学校音楽教科書』は、1931（昭和6）年「師範学校教授要目」に準拠し、本科第二部音楽科用教科書として編纂された文部省検定済師範学校音楽教科書である。第一編と第二編の2冊から成る。この教科書を選定した理由は以下の点からである。

- ・共益商社書店という主流の出版社から発行され、多くの師範学校において使用されたと推定される点。実際に香川県師範学校や福島師範学校において使用されていた²⁸。
- ・鑑賞を取り上げた希少な師範学校音楽教科書である点。歌唱、器楽、楽典を取り扱う師範学校音楽教科書は、数多く発行されているものの、鑑賞を取り上げた師範学校音楽教科書は管見の限り他には見られない。
- ・編者の一人の黒沢は、戦前、戦後を通じて鑑賞指導に関する著書を多く発表し、この分野の先駆者である点²⁹。

この教科書には「教材歌曲」「読譜基礎練習」「楽典及び音楽に関する理論」「楽器奏法練習」「主要音楽家の小伝」「鑑賞用名曲」等の分野が掲載されている³⁰。ここでは、鑑賞教材に該当する「主要音楽家の小伝」「鑑賞用名曲」に着目して考察したい。

1. 鑑賞指導の根本方針と「主要音楽家の小伝」

編纂者は、鑑賞に関して緒言で次のように述べている。

参考曲は教材歌曲学习上参考となるべき歌曲で、之は自学用に供することが出来、鑑賞用の名曲断片はそれぞれ代表的のものを集め、又音楽家の小伝は音楽史上の功績を明らかにすることにつとめた。

表Ⅱ-5-3は、「主要音楽家の小伝」に取り上げられている音楽家である。第一編で10人、第二編で11人、計21人の音楽家が紹介されている。日本人は含まれておらず、21人全員が西洋のバロック時代以降の音楽家である。

表Ⅱ-5-3 主要音楽家の小伝

編	頁	音楽家
一	22	グルック (1714-1787, 奥)
	40	ヨハン・シュトラウス (1825-1899, 奥)
	57	ルービンシュタイン (1887-1982, ポーランド)
	58	シューマン (1810-1856, 独)
	59	ハイドン (1732-1809, 奥)
	69	フォースター (1826-1864, 米)

	72	グリンカ	(1804-1857, 露)
	73	モーツァルト	(1756-1791, 奥)
	79	ウェーバー	(1786-1826, 独)
	100	シューベルト	(1797-1828, 奥)
二	22	ドゥヴォルジャック	(1841-1904, チェコ)
	30	ロッシニー	(1792-1868, 伊)
	38	ヴェルディ	(1813-1901, 伊)
	42	ブラームス	(1833-1897, 独)
	56	ベートーヴェン	(1770-1827, 独)
	77	プッチーニ	(1858-1924, 伊)
	86	ショパン	(1810-1849, ポーランド)
	93	ワグナー	(1813-1883, 独)
	96	メンデルスゾーン	(1809-1847, 独)
	103	ヘンデル	(1685-1759, 独)
	104	バッハ	(1685-1750, 独)

2. 「鑑賞用名曲」

次に「鑑賞用名曲」の項について検討する。表Ⅱ-5-4は第一編, 17 曲, 表Ⅱ-5-5は第二編, 42 曲の「鑑賞用名曲」計 59 曲である。前述の通り『標準師範学校音楽教科書』には「教授資料集成」が作成されていないため, 鑑賞に用いるレコードが紹介されていない。そこで、『音楽鑑賞図譜 音楽史・上篇』(1935)『小学校唱歌教授資料集成』(1935-37)『女子音楽教授資料集成』(1933-37)『改訂標準女子音楽教授資料集成』(1939-1942)に掲載されているレコードを確認し, その数を示している³¹。国民学校教師用指導書についても参考までに挙げている³²。

表Ⅱ-5-4 『標準師範学校音楽教科書』第一編における「鑑賞用名曲」

頁	曲目	作曲者	SP レコード (枚, セット)					楽器
			黒沢隆朝編纂				文部省	
			音楽鑑賞図譜	小学校唱歌教授資料集成	女子音楽教授資料集成	改訂標準女子音楽教授資料集成	国民学校教師用指導書	
22	歌劇「オルフェオ」のアンダンテ	☆Gluck	1		1	1		○
23	ガヴオット	☆Gluck	4		1			
23	ガヴオット	F.Jos.Gossec		1		△	○	
28	驚愕シンフォニー	☆Haydn	1	1		1		
31	信号喇叭	陸軍正式信号喇叭				△		
40	ワルツ「碧きドナウ河」	☆J.Strauss	1		3	3	◎	
40	ワルツ調	F.Lehar			6	△		
58	トロイメライ	☆R.Schumann	20	4	4	4		
59	ドイツ国歌	☆Haydn	2			△		
78	人魚の唄 歌劇「オベロン」より	☆Weber						○
100	四重奏曲「死と少女」より	☆F.Schubert			2			○
102	歌劇「ローエングリン」中の結婚行進曲より	☆R.Wagner	2	1	3	3		
107	四つ葉のクローヴァー	R.F.Reutel						

118	歌劇「椿姫」より	☆G.Verdi	1				
119	ミスエット（ト長調）	☆Beethoven	7				
120	送葬行進曲	☆F.Chopin	5	1			
121	スーヴニール	Franz Drdla		1	3		

注 ☆：「音楽家小伝」で取り上げられている作曲家。各本で紹介されている曲数を表記（同じレコードであっても各本ごとにカウントしている）。

△：鑑賞教材として取り上げられているものの、レコードが紹介されていない。

国民学校の教師用指導書については、本多佐保美・国府華子（2000）の研究に基づき、次のように分類した。

◎：鑑賞教材でありレコードがある。○：鑑賞教材ではあるものの、レコード所在の確認がとれていない。

表Ⅱ-5-5 『標準師範学校音楽教科書』第二編における「鑑賞用名曲」

頁	曲目	作曲者	SPレコード（枚，セット）					楽器
			黒沢隆朝編纂				文部省 国民学 校教師 用指導 書	
			音楽鑑賞図 譜	小学校唱歌 教授資料集 成	女子音楽教 授資料集成	改訂標準女 子音楽教授 資料集成		
10	春の歌	☆F.Mendelssohn	10	2	4		○	
10	春の囁き	Sinding						
10	春に寄す	E.Grieg						
15	魔王	☆F.Schubert	5		1	1		
15	アヴェマリア	☆F.Schubert	17	1				
15	「未完成交響曲」より	☆F.Schubert	4			△		
21	吾が母の教へ給ひし歌	☆Ant.Dvorak			3	3		
23	ユモレスク	☆Ant.Dvorak		1	4	2		
29	歌劇「アイダ」中の行進曲	☆G.Verdi	12	8	7			
29	歌劇「ファウスト」中の兵士の合唱	C.Gounod			5			
29	歌劇「カルメン」中の闘牛士の歌	G.Bizet		10	4	4		
30	歌劇「シヴィリヤの理髪師」中の仄かなる歌声	☆G.Rossini	1	1	1			
30	歌劇「ウィリアム・テル」中の行進曲	☆G.Rossini	9	1	5	5	◎	
36	蓮の花	☆R.Schumann						
36	二人の擲弾兵	☆R.Schumann	4					
38	歌劇「トロヴァトーレ」中の兵士の合唱	☆G.Verdi	9	5	1	5		
39	歌劇「トロヴァトーレ」より	☆G.Verdi			6			○
39	鍛冶屋の合唱(歌劇「トロヴァトーレ」より)	☆G.Verdi			2			
43	ハンガリア舞曲(第五番)	J.Brahms	7					
48	歌劇「清教徒」中の歌調	☆Bellini						
54	「ピアノソナタ」の主題	☆Mozart	6		1	△		○
55	もう飛ぶまいぞ可愛い蝶々 歌劇「フィガロの結婚」より	☆Mozart				△		
60	土耳其行進曲	☆Beethoven	3		3	3		○
70	搖籃の歌	Hauser				△		
70	搖籃の歌	A.Iljinsky				△		
71	ガヴォット	David Popper				1		

76	歌劇「蝶々夫人」中の舟唄	☆G.Puccini			1	1		
77	或る晴れた日 歌劇「蝶々夫人」より	☆G.Puccini			6	6		
82	サドコ(インドの歌)	Rimsky-Korsakow		1				
83	アンダンテ・カンターピレ	Tschaikowsky		1	3	3		○
86	「ポロネーズ」より	☆F.Chopin	1		1			
86	「幻想的即興曲」より	☆F.Chopin	1		1	△		
87	「マヅルカ」より	☆F.Chopin	2			1		
87	「夜想曲」より	☆F.Chopin	12	1		△		
92	舞踏への勧誘	☆Weber	4	1	2	3		
93	歌劇「タンホイザー」中の大行進合唱	☆R.Wagner	8	2				○
94	紡ぎ歌(「彷徨る和蘭人」中の合唱)	☆R.Wagner	2					
95	歌劇「タンホイザー」中の順禮の合唱	☆R.Wagner	2	1				
98	ヴァイオリン協奏曲 作品六十四番	☆Mendelssohn	2		1	1		
103	ラルゴ	☆G.F.Händel	12	1	3			
107	G線上のアリア	☆J.S.Bach	7		1			
108	フーガ	☆J.S.Bach						○

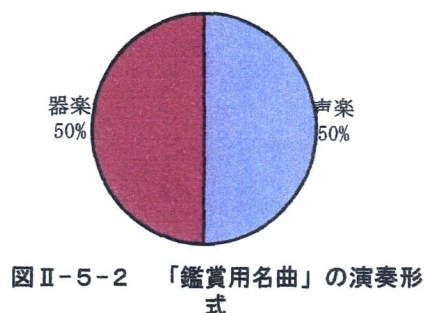
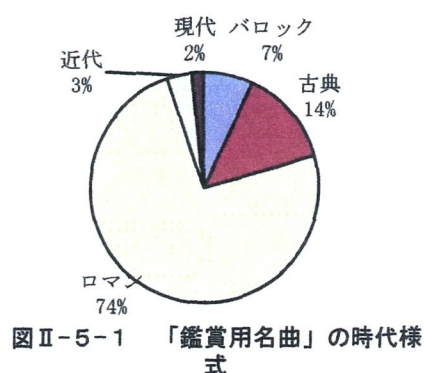
注 表Ⅱ・5・4の注と同じ。

表Ⅱ・5・4、表Ⅱ・5・5から以下の点が指摘できる。

- ・ 国民学校教師用指導書を含めたすべての教科書等で鑑賞曲として位置付けられている楽曲
…《歌劇「ウィリアム・テル」中の行進曲》
- ・ 国民学校教師用指導書を含めない、黒沢が編纂に関わった教科書等で鑑賞曲として位置付けられている楽曲
…《トロイメライ》《歌劇「ローエングリン」中の結婚行進曲より》《舞踏への勧誘》
- ・ 『標準師範学校音楽教科書』のみでしか取り上げられていない楽曲
…《人魚の唄 歌劇「オベロン」より》《四つ葉のクローヴァー》《春の囁き》《春に寄す》《蓮の花》《歌劇「清教徒」中の歌調》《フーガ》³³

音楽的特徴に着目すると、「鑑賞用名曲」は、第一編 31 ページの《信号喇叭》以外、西洋の作品によって構成されている。日本音楽は含まれていない³⁴。西洋音楽の 58 曲については、時代様式（バロック、古典、ロマン、近代、現代の五区分）、演奏形式（声楽、器楽の二区分）の 2 視点から分類した。それらの結果を図Ⅱ・5・1、図Ⅱ・5・2に示す。それらを総括すれば、次の諸点を指摘できる。

- ・ 「鑑賞用名曲」の時代様式は、74%がロマン派の音楽である。
- ・ 「鑑賞用名曲」の演奏形態は、声楽曲と器楽曲の割合は、同じである。



その他、一部の「鑑賞用名曲」は、ピアノ・オルガンの技能を習得するための「楽器奏法練習」としても利用されている。それについては表Ⅱ-5-4, 5に「楽器」という欄を設け、「○」と明記した。楽器欄について該当するのは全 59 曲中、8 曲、13.6%に留まっている。

以上の結果、「主要音楽家の小伝」「鑑賞用名曲」は、西洋の音楽家、作品によって構成されていることが分かる。表Ⅱ-5-4, 5に示した通り、『標準師範学校音楽教科書』の「鑑賞用名曲」の大部分は、黒沢が編纂した他の音楽教科書や関連書籍でも取り上げられている。特に、『女子音楽教授資料集成』や『改訂標準女子音楽教科書』の生徒用教科書にあたる『標準女子音楽教科書』や『改訂標準女子音楽教科書』と『標準師範学校音楽教科書』は、共通した編纂方法が採られ、同一教材もみられる。しかし、「鑑賞用名曲」を「楽器奏法練習」としても使用する編纂方法は、『標準師範学校音楽教科書』以外では採られていない。

第3節 聞き取り調査から明らかになった鑑賞指導の実態

国民学校発足の1941（昭和16）年4月から勤務を開始した師範学校の音楽科教員の大部分は、1941（昭和16）年3月に東京音楽学校甲種師範科を卒業した者である。1941（昭和16）年3月卒業の48名の内、10名（男10名）が師範学校、8名（男4名、女4名）が女子師範学校に就職した³⁵（補論において後述）。彼らが東京音楽学校に在籍した時期には、国民学校初等科音楽教科書（以下、国民学校音楽教科書、と略記）や国民学校教師用指導書がまだ出版されていない。そのため、東京音楽学校の授業の中で、国民学校の教科書類が直接使用されることはなかった³⁶。しかし、国民学校の音楽教科書の編纂委員であった下総皖一や城多又兵衛の講義の中では、新教科書に掲載される内容の一つである聴覚訓練の話題がしばしば挙がったそうである³⁷。

なお、表Ⅱ-5-6に示した通り、国民学校教師用指導書の出版に合わせ、各府県学校教員対象に「国民学校芸能科音楽講習」が開催され、鑑賞指導の方法についても伝達されている。「鑑賞」に関する内容は、小松耕輔、下総皖一、井上武士が担当している。

表Ⅱ-5-6 国民学校芸能科音楽講習の実施状況と「鑑賞」担当講師

年	月/日	場所	目的	「鑑賞」担当	『同声会報』
1941（S16）	6/28-30	東京音楽学校	「ウタノホン」教師用書の研究	小松耕輔	第259号
1942（S17）	5/29-31	大阪府天王寺師範学校	「初等科音楽」教師用一、二の研究	下総皖一	第262号
1942（S17）	6/27-29	東京音楽学校	「初等科音楽」教師用一、二の研究	下総皖一	第263号
1943（S18）	5/22-23	東京音楽学校	「初等科音楽」教師用三、四の研究	井上武士	第264号

師範学校音楽科教員は、表Ⅱ-5-6に挙げた「国民学校芸能科音楽講習」のいくつかに参加し、各府県内の現職教育を対象に講習を実施している。東京音楽学校を1941（昭和16）年3月に卒業し、愛知県岡崎師範学校に勤めた故永見貞三氏は、1941（昭和16）年度1学期を次のように回想している³⁸。

授業時数は1週23時間、一部1年の学級担任、作業班の理事、バレー部の監督、県内三河地方の国民学校へ講師として出張すること10有5回、学校内では国民学校教員の再教育の為の講習が既に4回（1回6時間講義）、現在では8月中にも拘らず、これ等の講習の続きと、又検定試験の為の県主催の音楽講習が向ふ2週間続きます。これ等を殆んど私一人がやっているの、流石の永見式エネルギーも今は全く枯渇状態です。

ではその当時の師範学校における鑑賞指導は、どのような内容だったのだろうか。表Ⅱ-5-7は、東京音楽学校甲種師範科を1941（昭和16）年3月に卒業し、師範学校に勤務した6名を対象に行った聞き取り調査の結果である³⁹。水の上氏や真篠氏の回答にみられるように、プロの音楽家を呼んで全員で鑑賞をするという方法が採られていた師範学校もあったことが分かる。

ここで着目したい点は、香川県師範学校の金光氏⁴⁰が、『標準師範学校音楽教科書』を使用して実際に鑑賞指導

を行っている点である。したがって、これ以降については、香川県師範学校の金光氏の事例を検討したい。

表Ⅱ-5-7 師範学校における鑑賞指導の実態

回答者	師範学校名	在職期間	鑑賞指導の実態
安城政三氏	沖縄県師範 愛媛師範	1941・44 年 1944・49 年	沖縄県師範には蓄音器がなかったので購入した。どちらの師範ともに、西洋の名曲中心の鑑賞。国民学校の鑑賞教材については特に意識をしなかった。
金光武義氏	香川県師範	1941・44 年	黒沢隆朝・小川一朗『標準師範学校音楽教科書』(1938)を使用して鑑賞指導を行う。鑑賞の方法としては主にSPレコードを用いる。
滝沢美恵子氏	北海道女子 師範	1941・42 年	東京音楽学校で行われた「国民学校芸能科音楽講習会」で伝達された内容に基づき、曲を選んだ。
水の上政子氏	香川県女子 師範	1941・43 年	声楽家の長門美保を呼び、全員で鑑賞した。蓄音機が音楽教室にあったかどうかは不明。
真篠将氏	愛知県第一 師範	1941・42 年	名曲のレコード鑑賞の他、声楽家の四谷文子を呼び、全員で鑑賞した。蓄音機に竹針を使用したため、やわらかくて弱い音がした。鑑賞指導に関するカリキュラムが決まっていたかどうかは不明だが、名曲中心であった。
横田勇氏	青森県女子 師範	1941・42 年	名曲のレコード鑑賞の他、授業で取り組んでいる歌唱教材の範唱レコードを聴いた。蓄音機を使用したけれども、あまりよい音はしなかった。鑑賞指導に関するカリキュラムは特に決まっていなかった。

注 下線は筆者による。

1. 香川県師範学校における鑑賞指導計画

それでは『標準師範学校音楽教科書』は、鑑賞指導の中でどのように活用されていたのだろうか。60年以上も時代が経っていることもあり、金光氏は師範学校の音楽の授業内容についての記憶が薄い。しかし、金光氏によって記された授業メモがいくつか残されているため、それらのメモから当時の鑑賞指導の実態が推察できる。さらに金光氏の指導を受けた、故田山清美氏⁴¹(1942年3月本科第一部卒業)へ行った聞き取り調査の記録も加え、教師と生徒の視点から香川県師範学校の鑑賞指導の事例を検討したい⁴²。以下は使用する主な資料である。

- ・金光氏の授業メモ、講義ノート、教科書への書き込みメモ
- ・金光氏の聞き取り記録(主に2005年5月14日)
- ・田山氏の聞き取り記録(2005年3月16日)
- ・当時のSPレコード(金光氏所持、倉敷公民館音楽図書室収蔵)

(1) 香川県師範学校の音楽科教員と生徒の実態

金光氏は、1941(昭和16)年3月、東京音楽学校甲種師範科を卒業後、1944(昭和19)年12月まで香川県師範学校へ在職した。その間、鈴木武五郎氏(東京音楽学校甲種師範科1930年3月卒業)と二人で香川県師範学校の音楽教育を担う。なお、金光氏は、週2回、香川県立高松中学校(現、香川県立高松高等学校)の音楽の授業も担当していた。金光氏は、香川県師範学校と香川県立高松中学校との違いについて次のように述べている⁴³。

高松中学での音楽の授業は講堂で行いました。音楽室や音楽準備室はありませんでした。2クラス合同で行ったこともあり、元気のよい男子生徒を静かにさせるのに苦労しました。授業の初めに「聴覚訓練」を行ったりして授業に集中させようとしていました。

それに引き換え、師範学校の生徒は騒ぎません。1クラスごとに音楽室でやっていたという違いはありますが、授業に対する心構えができていました。

(2005年5月14日 金光氏)

金光氏が在職した1941(昭和16)年から1944(昭和19)年の期間は、師範学校が官立専門学校程度へと昇格する制度改革(1943年)前後である。国民学校の発足(1941年)や戦時色の強化の影響を受け、香川県師範学校(1943年以降は香川師範学校)における音楽教育において以下の内容が重要視された⁴⁴。

- ・国民学校芸能科音楽の教材研究の指導
- ・「聴覚訓練」の指導
- ・「儀式唱歌」の指導

その他、金光氏は、寮生活や兵営宿泊の際に必要なため、入学したばかりの第1学年の生徒を対象に《信号喇叭》の指導を行ったと回想している⁴⁵。表Ⅱ・5・4に示した通り、『標準師範学校音楽教科書』第一編31ページには《信号喇叭》が掲載されている⁴⁶。《信号喇叭》の鑑賞ではレコードを使用せず、金光氏がピアノを用いて指導を行っている⁴⁷。

(2) 音響設備

金光氏の証言によると、香川県師範学校の音楽教室には電気蓄音機1台が設置されていたそうである。

1938(昭和13)年、蓄音機と針に鋼鉄の使用が禁止された⁴⁸。しかし、金光氏は学生時代に鋼鉄が使用できなくなるという情報を聞き、予備を買っていたため、師範学校の音楽科教員になったときにも、鋼鉄針を所持、使用していた。金光氏は「竹針より鋼鉄針の方が音がよかった」と回想している。

授業で使用したレコードは、香川県師範学校のものの他、兼任していた香川県立高松中学校所持のレコードや金光氏所持のレコードが使用された。

2. 『標準師範学校音楽教科書』を使用した鑑賞指導

(1) 鑑賞指導計画

表Ⅱ・5・8は、金光氏保持の授業メモから鑑賞指導に関係する教材を抜粋したものである。ここからは、どの学年、学級で実施されたかについては特定できないものの、どの教材が使用されたかについては分かる。

表Ⅱ-5-8 金光武義氏の鑑賞指導の計画

分野	第一編 大一	分野	第二編 大二	分野	第一編 N1	分野	第二編 本二大
小伝 鑑賞	シューマン トロイメライ ※リード曲	歌曲 小伝 鑑賞	狩人の合唱 ショパン 「マヅルカ」より 「夜想曲」より	歌曲 小伝 鑑賞	郭公ワルツ ヨハン・シュトラウス シューマン トロイメライ ※リード曲	解説 歌曲 歌曲 鑑賞 鑑賞 鑑賞	シューベルトの歌謡 野薔薇 菩提樹 魔王 アヴェマリア 「未完成交響曲」 より
小伝 鑑賞	ハイドン ドイツ国歌 ※イギリス国歌	小伝 鑑賞	ドウヴォルジャック ラルゴ「新世界交響曲」 より	小伝 鑑賞	ハイドン ドイツ国歌 ※イギリス国歌	歌曲 歌曲 鑑賞 鑑賞	夜の曲 出陣の歌 蓮の花 二人の擲弾兵
楽理 楽理 歌曲 解説 鑑賞	声楽 合唱と指揮 「雲雀の歌」より 弦楽器（一）（二） ヴァイオリン協奏曲 作品六十四番 シューベルト 子守歌	鑑賞 歌曲 楽器 小伝 鑑賞	ユモレスク 菩提樹 菩提樹 ロッシーニ 歌劇「ウィリアム・テル」 中の行進曲 「ウィリアム・テル」の 牧歌調	楽理 楽理 歌曲 小伝 参考 解説 鑑賞	声楽 合唱と指揮 「雲雀の歌」より モーツァルト モーツァルトの子守歌 弦楽器（一）（二） ヴァイオリン協奏曲作 品六十四番 シューベルト 子守歌	小伝 小伝 小伝 小伝 参考	ヴェルディ ロッシーニ ブラームス 山の古寺 子守歌
小伝 参考		解説 小伝 鑑賞	歌劇の話 ベートーヴェン 或る晴れた日（歌劇 「蝶々夫人」より）	小伝 参考			

注 金光氏の手書きのメモから鑑賞指導の部分を抜粋して作成。表記に関しては、『標準師範学校音楽教科書』における教材名に基づいている。

斜体の部分は、メモの内容が不明の部分である。

下線：国民学校芸能科音楽鑑賞教材，ゴシック体：シューベルトに関係する教材。※：『標準師範学校音楽教科書』に掲載されていない教材。

表Ⅱ-5-8の下線部分に示したように，香川県師範学校では，国民学校の鑑賞教材である《歌劇「ウィリアム・テル」中の行進曲》《「ウィリアム・テル」の牧歌調》が指導され，NIPPON TELEFUNKENの「国民学校音楽鑑賞盤」が使用されている⁴⁹。

その他，表Ⅱ-5-8の4列すべてにシューベルトの内容が見られる。以下，紙幅の関係もあるので，シューベルトの鑑賞指導に焦点を当て検討していきたい。選定理由は，シューベルトに関する授業メモや音源資料も残っているため，当時の実態を多角度から考察することができるからである。また，金光氏自身「シューベルトの歌曲は好きです」と語っている⁵⁰。

（２）『標準師範学校音楽教科書』におけるシューベルト

『標準師範学校音楽教科書』におけるシューベルトの教材を一覧にしたものが，表Ⅱ-5-9である。掲載資料の中で『音楽鑑賞図譜 音楽史・上篇』から転載しているものについては，該当ページを併記している。また，金光氏が実践した内容については「○」，実践した可能性が強いものについては「△」印を付けた。それ以外は無印とした。

表Ⅱ-5-9 『標準師範学校音楽教科書』におけるシューベルト

編	p.	内容	分野	掲載資料	『音楽鑑賞図譜』	金光氏
一	100	小伝	小伝	肖像 シューベルトの墓標（ウィーン市）	p. 92 の図 10 p. 93 の図 17	○
	100	四重奏曲「死と少女」より	鑑賞用名曲, 楽器奏法			
	101	子守歌	参考曲			○
二	12-13	野薔薇	教材歌曲	シューベルトの野薔薇の原稿 シューベルト会のメダル	p. 94 の図 21 p. 94 の図 21	○
	14	シューベルトの歌謡	解説	「魔王」の扉表紙 「美しき水車小屋の娘」を生んだ水車小屋 「美しき水車小屋の娘」の扉表紙	p. 93 の図 15 p. 93 の図 16	○
	15	魔王	鑑賞用名曲			○
	15	アヴェマリア	鑑賞用名曲			○
	15	「未完成交響曲」より	鑑賞用名曲			○
	16-17	夜の曲	教材歌曲			○
	24-25	菩提樹	教材歌曲			○
	26	菩提樹	楽器奏法			△
	32-33	海辺にて	教材歌曲			
	84-85	小琴のしらべ	教材歌曲			

注 金光氏：○＝実践した内容（授業メモあり），△＝実践した可能性が強い内容（授業メモはないけれども，教科書に書き込みが見られる）。

資料Ⅱ-5-1 は，鑑賞指導に関する金光氏の授業メモである。「二大 鑑賞教育」と記されていることから，表Ⅱ-5-8 の右の欄「第二編 本二大」で行われた鑑賞指導である。

資料Ⅱ-5-1 金光武義氏の授業メモ

二大 鑑賞教育	
Schubert	解説。レコード。
傳説。	
歌謡。	小夜曲 魔王。
	野バラ 菩提樹
	アヴェマリア
交響曲 未完成。	
Ant. Bruckner	
エモレスク。	高々
ラールゴ	高々
音の舟の歌へ給ひし歌。自宅	
歌劇	
歌劇の話。(P. 37)	
アイダ	トロバドール
ファウスト	
カルメン	
クイランテル。我教師	
蝶々夫人	P. 77

この資料Ⅱ・5・1から次の点が指摘できる。

- ・「小伝」（第一編 100 ページ。資料Ⅱ・5・1 では「伝記」と表記）が指導の中に含まれている。
- ・鑑賞指導の方法としては、教師による独唱とレコードの二つが採られている。
- ・《小夜曲》（『標準師範学校音楽教科書』では《夜の曲》と表記）《野薔薇》は、教師による独唱、《魔王》《菩提樹》《アヴェマリア》《「未完成交響曲」より》はレコードによる鑑賞が行われた。
- ・《菩提樹》は、『標準師範学校音楽教科書』では「鑑賞用名曲」として掲載されていないにもかかわらず、金光氏はレコード鑑賞を実施している。

（３） 教師による独唱を用いた鑑賞

資料Ⅱ・5・1 に示されていた通り、《小夜曲》と《野薔薇》は、金光氏の独唱により鑑賞活動が展開された。この2曲は『標準師範学校音楽教科書』においては「教材歌曲」として掲載され、実際に香川県師範学校において歌唱活動にも使用されている。金光氏は、「生徒が曲の感じをつかみやすくするために、範唱を行った」と述べている。

以下の田山氏の聞き取り記録には、金光氏の範唱の様子が語られている。男子生徒たちみんなが、東京音楽学校を卒業したての若き金光氏の美声に圧倒させられている。

金光先生はプロ中のプロですからね。上野でお勉強したことをそのままね、教えてくださいました。また、あの先生はやさしい先生ですからね、みんなから好かれた。どの生徒も尊敬してね。人間というのは若さと情熱というのが基本だね。教育の原点は情熱です。口先ばかりではね、子どもはついてこない。この先生は本物だということを示さなければいけないね。なんやこれ、この先生、上っ面ばかりだ、だめだ、こんなの聞かないって、面従腹背とってね。ハートと情熱でストレートに子どもの中に飛び込んでいかないといけないね。そういうことを金光先生がいらっしゃって、生徒がみな、あーと思って。先生が模範で範唱するでしょ、もうこれが全然違う。一際光っている。そうすると自然のうちに生徒がついていくでしょ。いやあ、本当にすごかった。

(2005 年 3 月 16 日 田山氏)

（４） SP レコードを用いた鑑賞

先述の通り、《魔王》《菩提樹》《アヴェマリア》《「未完成交響曲」より》は SP レコードによる鑑賞が行われた。ここではまず、香川県師範学校の鑑賞指導で使用された音源資料である《魔王》《「未完成交響曲」より》の SP レコード分析を行う。その際、野村長一『名曲決定盤 あらえびす』（1939）⁵¹（以下『あらえびす』と略記）を用い、各 SP レコードが当時どのように評価されていたかを参考とする。

次に、師範学校の生徒がレコード鑑賞に対してどのような反応を示したかを明らかにするために、田山氏の聞き取り記録の考察を行う。

① 《魔王》の SP レコード分析

表Ⅱ-5-10 は、表Ⅱ-5-5 で提示した《魔王》のレコードの種類を一覧にしたものである。

表Ⅱ-5-10 《魔王》の SP レコード一覧

レコード 番 号	声種	演奏者又は指揮者	黒沢紹介				金光 所持
			鑑賞	小学	女子	改女	
C.J 3094	テノール	フランクテイタートン	○				
P 60121	アルト	ルラ・ミスグライネル	○				
C.J 7902	アルト	ソフィーブラスロー	○				
V 6704	アルト	エリツツア	○				
V 7177	アルト	シューマン・ハインク	○		○	○	
C S-1006	バス	アレクサンダー・キプニス					○

注 レコード番号の記号：V＝ビクターレコード，C＝コロムビアレコード，P＝ポリドールレコード。

鑑賞＝『音楽鑑賞図譜』，小学＝『小学校唱歌教授資料集成』，女子＝『女子音楽教授資料集成』，改女＝『改訂標準女子音楽教授資料集成』

「V 7177」アルト，シューマン・ハインク（以下，シューマン・ハインク，と略記）は、『音楽鑑賞図譜』『女子音楽教授資料集成』『改訂標準女子音楽教授資料集成』の3冊の本で紹介されている。しかし，金光氏はシューマン・ハインクの SP レコードではなく，「CS 1006」バス，アレクサンダー・キプニス（以下，キプニス，と略記）を用いている。表Ⅱ-5-11 は，キプニスの SP レコードの概要である。

表Ⅱ-5-11 アレクサンダー・キプニスの《魔王》の SP レコード

番号	C S- 1006 (Columbia)	
声種	バス	
演奏者	ALEXANDER KIPNIS (1891-1978)	
伴奏	ピアノ，GERALD MOORE	
録音年	1936	
あ ら え び す	演奏者	オペラもリードも何でも相応にこなして行く達者なバスである。技巧は拔群だが，芝居気が相当にあり，声も緻密さを欠くのが欠点だろう。 この人のレコードをかけていると，山田耕筈氏が『ドイツ人ではないね』と言ったことがある。さすがに慧眼で，この人のリードを聴くと，非常に巧みであるが，ドイツ人でない匂いを感じさせるだろう。これは併しキプニスに対してお点の辛い批評である。この人のシューベルトは達者ではあるが，情熱が中庸で，技巧にすぐれている点に於ては，比類の少ない人である。『さすらい人』（コロムビア J7334），『影法師』（J7335）などは，何んと言つても，優れたものであるに相違ない（p. 539）。
レコード所蔵	私蔵	

出典 野村長一『名曲決定盤 あらえびす』中央公論社，1939。

実際に SP レコードを聴いてみると，キプニスの演奏は，役割に応じてテンポや声を変化させるという点では他の推奨レコードより表現が抑えられている⁵²。金光氏は，キプニスの SP レコードを選んだ理由として「男子師範だから，女声の歌手よりも男声の方がよかった」ことを挙げている。

② 《未完成交響曲》より》の SP レコード分析

歌崎と対談した蘆科雅美は，「昭和十年代は管弦楽の時代」ととらえ，ピアノや管弦楽の音を十分に再生できる

電気吹き込み法が出現したことを原因として挙げている⁵³。また、この時期、有名曲については、＜同曲異盤＞の増加が話題に挙がっている。有名曲の例示の中にはシューベルトの《未完成交響曲》が含まれている。当時、どのような種類のレコードが出ていたのか。表Ⅱ-5-12 から検討したい。

表Ⅱ-5-12 《「未完成交響曲」より》のSPレコード一覧

レコード番号	演奏者、指揮者	黒沢紹介				金光所持
		鑑賞	小学	女子	改女	
C J 7025-27	ニコウ・クインズ・ホール管弦楽団、ヘンリー・J・ウツド卿指揮	○				
P 60086-88	伯林フィルハーモニック管弦楽団、ニーリツヒ・クライベル指揮	○				
P 40312-14	伯林フィルハーモニック管弦楽団、ユリウス・ブリュウエル指揮	○				
V 6663-65	フィラデルフィア交響管弦団、ストコフスキー指揮	○				
NT 13612-14	伯林フィルハーモニック管弦楽団、ニーリツヒ・クライベル指揮					○

注 表Ⅱ-5-10 の注と同じ。

金光氏は、NIPPON TELEFUNKEN 発売のベルリンフィルハーモニック管弦楽団の「NT13612-14」を使用している。金光氏自身、学生時代に東京の大塚の映画館で、映画「未完成交響楽」⁵⁴を実際に観たと語っている。多くの音楽映画を観た中、シューベルトの名曲が随所に流れる映画「未完成交響楽」から受けた印象は大きかったとのことである⁵⁵。

表Ⅱ-5-13 は、金光氏が香川県師範学校で使用したベルリンフィルのSPレコードの概要である。NIPPON TELEFUNKEN は、ドイツの技術力によって、録音がよいことで評判であった⁵⁶。ちなみに《未完成交響曲》短調の場合、裏表3枚のSPレコードに分かれて録音されている。

表Ⅱ-5-13 ベルリンフィルハーモニーの《「未完成交響曲」より》のSPレコード

レコード番号	NT 13612-14 (NIPPON TELEFUNKEN)	
演奏者	Berliner Philharmoniker	
指揮者	Erich Kleiber	
録音年	不明	
あ ら え び す	演奏者	クライバーは欧州で一流の指揮者であることは論を俟たないが、非常に特色のある人で、通俗音楽の中から気高い良さを引き出すことと、難しいものを一般人の趣味に引下げて聴かせてくれるといふ二つの違った方面に対して、不思議な才能を恵まれてゐる。この人の指揮するベートーヴェンの交響曲は、非常に情緒的な甘美なものだが、そのヨハン・シュトラウスのワルツは、この上も無く芸術的な香気の高いものだ。この人が割合に出世しなかったのは、背の低いからだといふゴシップが伝えられてゐるが、背の低いことはレコードとしては一向苦にならない。 (中略)
	『未完成交響曲』	クライバーのレコードは、最初ポリドールに入り、中頃ビクターに出た。最近ではテレフンケンに専ら入つてゐるが、ポリドールのは余りに古く、ビクターも余り良くないから、やはり最近のテレフンケンにクライバーを求めるのが順当だらう。最も良いのはヨハン・シュトラウスのワルツ集で、その中の傑作は『碧きドナウの流れ』(13104)であらう。『酒・女・唄』(13102)も良く、それに次いで『アッチェレチオーネン』(13105)、『皇帝』(13101)、『千一夜物語』(13103)といふ順序だらう。他に『蝙蝠』(23605)『ジプシー男爵』(23623)と序曲が二つあり、それからスッペの『軽騎兵一序曲』(13627)といつたものがクライバーの特色的レコードであらう。
レコード所蔵		私蔵

出典 野村長一『名曲決定盤 あらえびす』中央公論社、1939。

注 下線、ゴシック体は筆者による。

『標準師範学校音楽教科書』にはチェロによる第二主題(44～53 小節)の旋律が掲載されている(譜例Ⅱ-5)。実際に聴いてみると、雑音が入っているというものの、クラリネットとヴィオラのリズムの刻みにより、チェロの第二主題が浮かび上がっている。

このように、金光氏は生徒の実態を考慮しながら SP レコードを用いた鑑賞指導を行っている。《未完成交響曲》のような交響・管弦楽曲の SP レコードも使用されている。この背景には、昭和 10 年代において交響・管弦楽曲のレコードが製作・普及されたことに関係していると考えられる。

また、金光氏は鑑賞の授業の進め方について、説明を先に行ってから鑑賞を行う場合と、説明をせずにいきなり鑑賞を行う場合があったと述べている。この方法は田辺の提唱する「解説法」と「静聴法」に当たる⁵⁷。同一曲について異なる演奏者の表現を比較するといった方法は実施されていない⁵⁸。

譜例Ⅱ-5 「未完成交響曲」より

出典 黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』第二編, 1938 年, 15 頁。

【鑑賞】 「未完成交響曲」より Schubert.

Allegro moderato.



後略

(5) SP レコード鑑賞に対する生徒の反応

以下の文章は、田山氏からの聞き取り記録である。ここからレコード鑑賞に対する香川県師範学校の生徒の反応を見てみたい。

田山：ときどき先生が名曲を聴かせてくれて、その時間がとても良かったですね。みんな男ばかりだったけれども、みんなうっとりして聴いていました。これはという曲ばかりを選曲してくださったからね。

鈴木：このときにうっとりしたのは、田山先生だけではなく、他の男子生徒もですか。

田山：はい。男みんなです。人間ですから美しいものに触れれば感動するでしょ。美しい名曲を聴けば自然にささくれだった心も穏やかな気持ちになるのですよ。このレコード鑑賞は評判が良かったです、授業の中では。

鈴木：そうしますと、先生が子どもころ、小学生のころは、ほとんど鑑賞はなかったのですか。

田山：ほとんどないね。半世紀、70 年よりもっと昔ですから、日本の音楽教育は遅れていたからね。音楽が盛んになったのはここ 20 年くらいですよ。外国のコンクールで日本人が優勝するのもここ最近のことです。戦前なんてさっきいったように、「男の癖に音楽やるなんて非国民だ」といって憲兵がマークする。憲兵というのは兵隊の中の警察官ですね。憲兵が「あれは反軍思想の持ち主だ」とマークする。でも今から考えますと、嘘のような環境でしたけれどね。

鈴木：たとえばラジオがあったと思うのですがけれども、その当時の生徒たちは、香川県の状況ですがけれども、ラジオで名曲を聴いたりとか、音楽会に出掛けたりとか…。

田山：そんなね、ラジオ、ラジオおっしゃるけれども、僕の家にもラジオがなかったのですよ。
 鈴木：ラジオがなかったのですか。
 田山：それくらい、レベルが低いのです。
 鈴木：それでは名曲に触れる機会がなかったのですね。
 田山：ないない。
 鈴木：それで師範の音楽鑑賞の授業が新鮮なのですね。
 田山：そうそう。そのころラジオを持っていたのはきわめて裕福なお家だけで、戦争が始まってしばらく経ってから安いラジオが普及したのですよ。一般の家庭にラジオが普及したのは、昭和16年に戦争が始まって18年、19年、このころやっと一般の庶民の家庭にラジオが普及したのですね。戦争前にラジオを持っているのは、ものすごくお金のあるお家です。

(2005年3月16日 田山氏)

香川県師範学校の生徒の大部分は、農村地域に育っているということもあり、学校教育、生活環境ともにクラシックの名曲に接する機会がほとんどない。このことが師範学校における鑑賞指導を新鮮なものへとさせている。

金光氏は、生徒の反応をつかむために、「楽曲を鑑賞させた後に生徒に対しその感想を簡単に又もつとも素直に発表させる」⁵⁹方法の他に、紙に感想等を書かせることもあった。次の資料Ⅱ・5・2は、金光氏が所持する教科書に挟んであった当時の師範学校生徒の感想である。鑑賞曲は特定できない。しかし、表Ⅱ・5・8の金光氏の鑑賞指導計画に記載されているメンデルスゾーンの《ヴァイオリン協奏曲》を聴いた可能性が強い。

資料Ⅱ・5・2 師範学校生徒の感想

一東三 U. S.

- 1
 楽器 ヴァイオリン
 調子 明らか、☐ ☐ つはつ、男らしい
 気持 ヴァイオリンの音は静かな所を突き破って行く様な物である。聞いてみると非常に心持がよくなる。調子の高低が鋭いので勇ましめ。
- 2
 音楽はただ単に人々の心をほがらかするだけでなく今日では音楽をやつて耳を発達させ物の音で物を分類する様にしなければなりません。国防の為にもなります。色々なエンジン発動機のコ障を知る事も出来ます。自分は始音楽についてきやう味を持つてゐましたがだんだん声が変わるにしたがつて音楽をすかなるなりました。左耳もあまり聞えません。が音楽を聞くのは大好きです。
 自分はおと年ドンまで約一年間ピアノを習ひました。

注 生徒の氏名はイニシャルで表した。下線は筆者による。

この感想文の中の「1」では、「楽器」「調子」「気持」が指定項目として指示されているので、これらの3項目を金光氏は鑑賞に際して重要視していたことが分かる。「2」の部分は自由記述である。「音楽を聞くのは大好きです」から、生徒のU. S.は、鑑賞に対する関心・意欲の高いことが読み取れる。しかし、「耳を発達させ物の音で物を分類する様にしなければなりません」という記述があり、国防上、産業上にとって音楽が貢献できるという内容が書かれている。このことから鑑賞指導は単に音楽美を味わっているだけではなく、別の目的も合わせて持っていたことが分かる⁶⁰。

以上、香川県師範学校を事例に音楽科教員と生徒の視点から考察を行った。金光氏は、『標準師範学校音楽教科書』に基づいて鑑賞指導を展開し、SPレコードを中心としながらも、教師による生の独唱も取り入れている。また、授業メモや教科書への書き込みメモが多数残っているように、金光氏は入念に準備をして授業に臨んでいる。一方、生徒の側にとっても、金光氏の熱意を受け入れ、鑑賞曲に対する強い関心を示している。師範学校入学前に鑑賞指導を受けてこなかったことも彼らの心理に影響していると考えられる。

まとめ

本章では、黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』を手掛かりとして、香川県師範学校における金光氏が実践した鑑賞指導の実態を中心に検討してきた。判明した点は以下の通りである。

- 1) 「師範学校教授要目」において鑑賞指導の規定がなされたのは、1925（大正 14）年である。
1943（昭和 18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」では、鑑賞指導の方法として「演奏、音盤、放送等」が挙げられ、日本音楽を重要視した内容になった。しかし、これを受けて作成された国定師範学校音楽教科書である『師範音楽 本科用巻一』には鑑賞教材は掲載されていない。
- 2) 1931（昭和 6）年の「師範学校教授要目」に基づいて作成された黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』（1938）では 59 曲の「鑑賞用名曲」が掲載されている。ここでは西洋の名曲が中心で、ロマン派の音楽が 74% を占める。全 59 曲中の 8 曲（13.6%）はオルガン・ピアノの練習曲としても利用できるように編纂されていた。
- 3) 香川県師範学校の鑑賞指導では、『標準師範学校音楽教科書』に基づき、教師の独唱を用いた鑑賞と SP レコードを用いた鑑賞の方法が採られていた。昭和 10 年代に普及した交響・管弦楽曲の SP レコードも使用されている。授業の進め方については、田辺の提唱する「解説法」と「静聴法」のどちらかで進められていた。また、生徒たちの反応は、師範学校入学前には鑑賞指導を受けていなかったことも影響し、好評であった。

上記 1) で挙げた「師範学校教科教授及修練指導要目」の内容は十分実施されないまま、敗戦を迎えることになる。仮に『師範音楽 本科用巻一』の続編の『師範音楽 本科用巻二』『師範音楽 本科用巻三』が出版され、授業時数が確保されていたとすれば、より専門的で幅広い内容の鑑賞指導が展開されていたのではないかと推測する。

なお、香川師範学校（女子部）では、学徒動員先（愛知県半田市）においてもレコード鑑賞が行われていたそうである⁶¹。

今後の課題として、以下の 3 点が挙げられる。

- 1) 実践事例のさらなる検証。1943（昭和 18）年 7 月に『師範音楽 本科用巻一』が出版されたことに伴い、『標準師範学校音楽教科書』等の検定済教科書が使用されなくなったかどうかについては不明である。前述の通り供田によれば、福島師範学校では戦後においても『標準師範学校音楽教科書』が使用されていた。今回の中心事例である金光氏の実践に関しても 1943（昭和 18）年 4 月の制度変革を境として鑑賞指導がどう変わったかといったところまで追求することができなかった。前述の通り、江利川春雄は、「戦前では文部省法令と現場の実態との乖離は珍しくなく、中央法令のみから演繹的に各校の実状を推測することは危険である」と述べている⁶²。今後、聞き取り調査の対象者の拡大と資料の発掘を継続して明らかにしていきたい。

- 2) 高等女学校における音楽教育との相関性。高等女学校においては鑑賞指導が熱心に行われていた⁶³。また、多くの女子師範学校は、高等女学校と併設され、同一敷地内、同一教員で教育が行われていた⁶⁴。師範学校は、1942（昭和 17）年までは中等教育段階の学校であったということもあり、同一教材で授業が展開されていた可能性が強い。
- 3) 日本の音楽の取扱い。師範学校の鑑賞指導は、法令上において日本音楽重視の傾向を確認することができる。また、山本が指摘している通り、国民学校芸能科音楽の鑑賞教材に関しては日本の音楽が含まれている。金光氏は『標準師範学校音楽教科書』や国民学校芸能科音楽の鑑賞教材に含まれていない《海道東征》⁶⁵を鑑賞の授業で扱っていた。授業の中で金光氏は、「日本の音楽も何時迄も西洋の音楽のみを尊重し、そのみに頼ってはいならない」と生徒たちに訴えている⁶⁶。このような日本の音楽重視の動向には、音楽教育の指導領域の拡大と国家主義・軍国主義の動向が関係していると考えられる。

¹ 1941（昭和 16）年 3 月 14 日、「国民学校令施行規則」（小学校令施行規則改正，文部省令第四号）第十四条（石川謙『近代日本教育制度史料』第二巻，大日本雄弁会講談社，1956 年，235 頁）。なお、この分野に関しては、山本文茂「芸能科音楽の理念と内容——法令条文の解釈を中心に」浜野政雄監修『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社，1999 年，264・277 頁が詳しい。

² 文部省『ウタノホン上 教師用』日本書籍，1941 年。文部省『うたのほん下 教師用』東京書籍，1941 年。文部省『初等科音楽一 教師用』日本書籍，1942 年。文部省『初等科音楽二 教師用』日本書籍，1942 年。文部省『初等科音楽三 教師用』東京書籍，1943 年。文部省『初等科音楽四 教師用』東京書籍，1943 年。

³ 寺田貴雄「戦時期の鑑賞教育——鑑賞指導の明文化と，軍国主義的逸脱」『音楽鑑賞教育』11 月号，音楽鑑賞振興会，2001 年，12・15 頁。

⁴ 山本文茂「芸能科音楽教材の特質——教科書・教師用指導書の分析を通して」浜野政雄監修『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社，1999 年，286・295 頁。

⁵ 本多佐保美・国府華子「国民学校期における鑑賞教材の音楽内容に関する一考察——教師用指導書と音盤の分析を中心に」『音楽教育史研究』音楽教育史学会，2000 年，43・58 頁。

⁶ 藤井康之「国民学校期における音楽指導の実態——東京女子高等師範学校附属国民学校と青森市立新町国民学校の教師を中心に」『音楽教育研究ジャーナル』第 14 号，東京芸術大学音楽学部音楽教育研究室，2000 年，19・32 頁。本多佐保美「国民学校期における音楽教育の受容——東京女高師附属国民学校と青森市立新町国民学校の卒業生へのインタビュー調査に基づいて」『音楽教育研究ジャーナル』第 14 号，東京芸術大学音楽学部音楽教育研究室，2000 年，33・45 頁。本多・藤井・中里南子・勝谷祥子・幸山良子「誠之国民学校における音楽授業の諸相——学校所蔵文書とアンケート調査にもとづく実践史の試み」『音楽教育学』第 32・2 号（通巻 66 号），日本音楽教育学会，2003 年，1・8 頁。本多代表『音楽教育史研究における制度・教師・学習者の関係性の探究——国民学校時代の音楽教育体験者の聞き取り調査に基づいて』平成 13～15 年度科学研究費補助金研究成果報告書，2004 年。

⁷ 菅道子「国民学校における芸能科音楽のカリキュラム編成」『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』第 54 集，2004 年，和歌山大学教育学部，114 頁。

⁸ しかし、西島央は、「制度上は鑑賞を取り入れることになっているが、実際には蓄音器がないなどの設備上の問題や戦中の混乱状態であったことから、ほとんど実施されていなかったようだ」と述べている（西島央「児童からみた国民学校芸能科音楽——音楽教育の歴史の読み直しに向けて」『音楽教育研究ジャーナル』第 14 号，東京芸術大学音楽学部音楽教育研究室，2000 年，11 頁）。

⁹ 文部省『ウタノホン上 教師用』，前掲書，20 頁。

文部省図書監修官の角南元一は，以下のように述べる。

第一に期待するのは教師その人の演奏による鑑賞教育である。併し，これは実際問題としては相当の困難が伴ふであらうことは想像するに難くない。そこで，これが補助として第二にレコード・ラヂオ・音楽会等が併用されるのである。注意しなければならぬのは，鑑賞教育とし言へば，直ちにレコード第一と考へる考へ方である。その結果，教師は偏へにレコードに依存して，指導なき放任に陥り，その弊の流るると

ころややもすれば、遊び半分の余興的享楽に終る処がある。鑑賞も亦一つの行的修練であり、もつとも真摯なる態度を要することを忘れてはならないのである。

(文部省『国民学校教科書編纂趣旨解説』日本放送出版協会、1941年、68頁)。

10 寺田、前掲書、13頁。

11 田辺尚雄『蓄音機とレコードの選び方・聴き方』先進社、1931年、170頁。田辺については次の寺田の研究がある。寺田貴雄「田辺尚雄の音楽鑑賞論——〈音楽の聴き方〉(1936)を中心として」『音楽教育学』第27-2号、日本音楽教育学会、1997年、1-10頁。

12 「わが国における音楽の鑑賞教育は、いつごろから始ったかというに、これは外国のレコード、ことにビクター盤やコロンビア盤の輸入が、ようやくふえて来てからで、大体大正の終わりごろからである。

何しろその当時は、学校の音楽教育に用いられるような日本製の音楽レコードは皆無であったから、どうしても外国のレコードに頼らなければならなかった。ところがこれがなかなかの高価で、(中略)一般の学校では容易にこれらを購入することができなかったし、また音楽鑑賞指導の方法も全然分らなかったのである。(中略)

蓄音機のレコードは、その後片面のみのものが両面の録音となり、昭和になってからは、外国の原盤を輸入して、これを日本でプレスして発売するようになったから、品切れということが少なくなり、価格も比較的安くなってきたので、一般に買い易くなってきたところから、東京市内の小・中学校でも、音楽の指導の中に、音楽レコードの聴取を加えるところが、だんだんできてきた」

(柴田知常「教育用鑑賞レコード選定の仕事」『音楽教育研究』第4号、音楽之友社、1968年、147-148頁)。

13 木村信之『音楽教育の証言者たち上 戦前を中心に』音楽之友社、1986年、148-149頁。

14 加藤善子『近代日本における西洋音楽の普及——社会学的考察』大阪大学大学院人間科学研究科博士論文、2000年。

15 歌崎和彦『証言／日本洋楽レコード史』(戦前編)音楽之友社、1998年、202頁。

16 増井敬二編『データ・音楽・につぼん』民音音楽資料館、1980年、16-17頁。倉田喜弘『日本レコード文化史』東京書籍、1979年、406頁。

17 黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』第一編、第二編、共益商社書店、1938年。

18 別府愛は「ちょうどこの時期はラジオで日本放送協会が放送を開始(大正14年)しており、また蓄音器やレコードの販売が安価に行われるようになったこととも関連があるようだ」と言及している(別府愛「福井直秋の教育活動と当時の教育状況——師範学校の教育を中心にして」武蔵野音楽大学音楽教育学科編集委員会『福井直秋解題』2000年、67頁)。

19 教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』第七巻、教育資料調査会、1939年(1964重版使用)、756頁。

20 学科課程の構成が、必修である〈基本科目〉と選択である〈増設科目〉に二分された。基本科目の音楽の毎週教授時数は、5年制の本科第一部では、男子の第1、2学年は2時間、第3～5学年は1時間。女子の第1～3学年は2時間、第4、5学年は1時間である。2年制の本科第二部では、第1、2学年とも2時間である。1931年師範学校規定・教授要目改正に関しては、清水康幸『教育審議会の研究 師範学校改革』野間教育研究所紀要 第42集、野間教育研究所、116-127頁、が詳しい。

21 1937(昭和12)年3月にも「師範学校教授要目」が改訂されている(文部省訓令第八号)。しかし、修身、公民科、国語漢文、歴史及地理の改正のみで、音楽については特に変更点は見られない(石川、前掲書『近代日本教育制度史料』第五巻、540-567頁)。また、1941(昭和16)年3月、「師範学校教授要目中改正」(文部省訓令第八号)が行われた。ここでは「小学校ニ於ケル唱歌」を「国民学校ニ於ケル芸能科音楽」というように用語が改められた(570-571頁)。

22 文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943年(高知大学附属図書館所蔵)。

23 1932(昭和7)年2月18日から20日にかけて東京音楽学校において開催された「全国師範学校音楽教員協議会」の中でも、音楽史の新設が熱望されている(同声会編集部『同声会報』第182号、同声会編集部、1932年、40頁)。

24 文部省『師範音楽 本科用巻一』師範学校教科書株式会社、1943年(昭和18年7月7日文部省検査済)。

25 文部省『師範器楽 本科用巻一』師範学校教科書株式会社、1943年(昭和18年7月31日文部省検査済)。

26 文部省『師範音楽 本科用巻一』、前掲書、158-174頁。

27 同声会編集部『同声会報』第264号、1948年。

28 香川県師範学校の使用事例については第3節において後述。福島師範学校の使用事例については、供田武嘉津『日本音楽教育史』音楽之友社、1996年、384-385頁に掲載。その他、共益商社書店が発行した「文部省選定昭和17年度中等学校・青年学校音楽教科書」には、『標準師範学校音楽教科書』が含まれている。

29 黒沢隆朝・真篠将・浜野政雄『音楽鑑賞指導集成——文部省学習指導要領準拠』第一～四編、全音楽譜出版社、1953-54年。

30 緒言に「本書一部を以つて、音楽の時間に課せられる教材の総ての分野を網羅することにつとめた」と記されている。

31 『音楽鑑賞図譜 音楽史・上篇』では別刷附録の「作曲者別レコード番号表」42-78頁、『小学校唱歌教授資料集成』では六学年用の「鑑賞レコード総覧」412-419頁、『女子音楽教授資料集成』では補遺及索引の「鑑賞レコード索引」157-169頁、に基づいている。『改訂標準女子音楽教授資料集成』にはレコードが一覧とな

って示されていない。

- ³² 本多・国府, 前掲書「国民学校期における鑑賞教材の音楽内容に関する一考察」47-49 頁, に基づいている。
- ³³ なお、『SPレコード 60,000 曲総目録』には、『四つ葉のクローヴァー』『春の囁き』『春に寄す』『蓮の花』の SPレコードのデータが掲載されている (昭和館監修『SPレコード 60,000 曲総目録』アテネ書房, 2003 年)。
- ³⁴ 第二編の 3 ページには, 「解説」の項の中で「雅楽」が紹介され, 『越天楽』の譜例と雅楽器の絵が掲載されている。しかし, 鑑賞教材としては取り扱われていない。
- ³⁵ 同声会編集部『同声会報』第 259 号, 1941 年, 26-28 頁。
- ³⁶ 真篠将氏は, 「文部省『新訂尋常小学唱歌』(大日本図書, 1932 年) を使用して, 初見で弾いたり, 歌ったりした」と語る (2004 年 10 月 24 日, 於: 真篠邸)。
- ³⁷ 「東京音楽学校・師範学校に関するアンケート調査」2003 年 9 月実施, 対象者: 東京音楽学校甲種師範科 1941 (昭和 16) 年 3 月卒業者。なお, アンケート調査の概要については, 鈴木, 前掲書, 42-43 頁, に掲載。その他, 浜野政雄は, 卒業の際に「固定音名唱法について」のレポートを書いたと著している (浜野政雄「私の学生時代を思う」『季刊音楽教育研究』春号第 31 巻第 2 号, 音楽之友社, 57 頁)。
- ³⁸ 芸大・昭和 16 年組『組曲く集い』1972 年, 17 頁。
- ³⁹ 6 名の回答は, 2003 (平成 15) 年 9 月に実施したアンケート調査 (鈴木, 前掲書, pp.42-43) の他, 以下の聞き取り調査に基づくものである。内容は ICレコーダーとメモで記録し, 文字化した。
- 時: 2005 (平成 17) 年 6 月 7 日 (火)
- 場所: KKR HOTEL OSAKA (大阪府大阪市)
- 備考: 「昭和 16 年 3 月卒業師範科級会」(卒寿祝いのお集まり) の場を借りて行った。
- 真篠氏, 水の上氏に関しては個別に聞き取り調査を行った。
- (1) 真篠将氏, 2004 (平成 16) 年 10 月 24 日 (日), 於: 真篠邸 (東京都世田谷区), 滝沢美恵子氏も同席
- (2) 水の上政子氏, 2005 (平成 17) 年 2 月 11 日 (金), 於: 喫茶リオ (広島県尾道市)。
- ⁴⁰ 金光武義氏。旧姓見藤。1941 (昭和 16) 年 3 月, 東京音楽学校甲種師範科を卒業後, 香川県師範学校へ就職。1944 (昭和 19) 年 12 月まで在職し, その後岡山県第一岡山高等女学校へ移る。戦後は, 岡山大学教育学部の教官となり, 現在, 岡山大学教育学部名誉教授。
- 筆者は 2003 (平成 15) 年 10 月から継続的に聞き取り調査を行っている。
- ⁴¹ 故田山清美氏。1942 (昭和 17) 年 3 月, 香川県師範学校本科第一部を卒業後, 香川県公立学校 (義務教育) の教員を務めた。
- 筆者は 2005 (平成 17) 年 3 月 16 日, 全日空ホテルクレメント高松内のロビーラウンジフォンティーンズにおいて聞き取り調査を行った。
- ⁴² 香川大学編『香川大学十年史』香川大学, 1959 年。香川大学 30 年史編集委員会編『香川大学三十年史』香川大学, 1980 年, の 2 冊には音楽に関する記述は見られない。香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会編『香川大学教育学部百年のあゆみ』香川大学, 1989 年, には音楽に関する記述が少し含まれている。その他以下の, 同窓会発行の回想録や附属小学校発行の書籍等を参考としている。香川師範学校男子部本科・昭和 23 年 3 月卒同窓生『わが香川師範時代』1996 年。香川師範学校男子部本科・昭和 23 年 3 月卒同窓生『年表わが香川師範時代』1996 年。田尾義行『国民学校の実践的研究』香川県師範学校附属小学校, 1940 年 (香川県立図書館所蔵)。
- ⁴³ 三好信浩『日本師範教育史の構造——地域実態史からの解析』東洋館出版社, 1991 年, 117-129 頁。
- ⁴⁴ 鈴木慎一郎「師範学校における音楽教育——〈師範教育令改正〉(1943) 前後の動向を中心として」『教育実践学論集』第 5 号, 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科, 77-79 頁。
- ⁴⁵ 『改訂標準女子音楽教授資料集成』第二編, 16 頁には「軍隊喇叭 (複式) の指導要項」として次の 3 点が列挙されている。1. 陸海軍諸礼式喇叭の知識を与へ, 銃後の活知識としたい。2. 信号喇叭の構造機能を知らしめ, 楽器としての意義を知らしめる。即ち発音の原理, 音階, 楽器等の知識を与へる。3. これを通してリズムの練習を兼ねる。
- ⁴⁶ 信号喇叭を扱った先行研究として, 江崎公子「明治初期の信号喇叭について——赤松小三郎訳『英国歩兵練法』をめぐる」『音楽研究』大学院研究年報第 15 集, 国立音楽大学大学院, 2003 年, 83-109 頁, が挙げられる。
- ⁴⁷ 「もちろん寮では生徒が喇叭を吹いていました。しかし, 上級生は上級生用の別の授業を受けていたと思いますから, 1 年生の音楽の授業に呼ぶことはできなかったでしょう。私が音楽教室にあるピアノでそれぞれの旋律を弾いて, 生徒に覚えさせたいと思います」(2005 年 5 月 14 日)。
- ⁴⁸ 歌崎, 前掲書, 208 頁。
- ⁴⁹ 金光氏は次の SPレコードを所持している。NIPPON TELEFUNKEN, 国民学校音楽鑑賞盤 K-250, 7-20739, 文部省指定曲「ウィリアムテル」の序曲 (ロッシェニ曲) (上) 伯林フィルハーモニー交響楽団, ハンス・シュミット・イツセルシュテット指揮, 大日本雄弁会講談社, 7-20740, 文部省指定曲「ウィリアムテル」の序曲 (ロッシェニ曲) (下) 伯林フィルハーモニー交響楽団, ハンス・シュミット・イツセルシュテット指揮, 大日本雄弁会講談社。
- ⁵⁰ 田山氏は「香川県師範学校では鈴木先生が器楽を中心に, 金光先生が声楽を中心に指導を行っていた」と回

想している（2005年3月16日）。

51 野村長一『名曲決定盤 あらえびす』中央公論社，1939年。

52 先行研究として，荒川恵子「声楽における演奏様式の定量的分析——シューベルト〈魔王〉の歴史的録音資料を用いて」『音楽学』第40号3号，日本音楽学会，1994年，181-193頁，が挙げられる。荒川は，キプニスを含めてインテンポの演奏に分類している。

53 歌崎，前掲書，213頁。

54 「未成交響楽」1933，ドイツ＝オーストリア作品。監督・脚本：ヴィリ・フォルスト，原作：ヴァルター・ライシュ，音楽：フランツ・シューベルト，編曲：ヴィリ・シュミット＝ゲントナー，演奏：ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団，ウィーン少年合唱団，ウィーン国立オペラ合唱団，ギウラ・ホルファート・ジブシー楽団，キャスト：ハンス・ヤーライ，マルタ・エッゲルト，ルイーゼ・ウルリッヒ。

55 『コロンビア 50 年史』1961 年では，次のように記されている。

昭和 10 年 3 月に特別発売のウッド卿指揮シューベルトの「未成交響曲」は，わが洋楽史上においても特記すべき事項であろう。東和商事提供シネ・アリアンツ映画「未成交響楽」とタイアップのレコードだが，映画がトーキー化されて以来，最初に最も大きな反響を呼んだのがこの映画で，そして洋楽ファンを何十倍にも激増させたのがこの快作である。アルバムに入ったこのレコードの売上げは，当時としては全く空前のものだった。

56 歌崎，前掲書，211-213 頁，311 頁に記載されているテレフンケンに関する部分を要約すると次の通りである。

- ・1935（昭和 10）年，大日本雄弁会講談社がテレフンケンと原盤契約を結んだ。当初発売は日本ポリドールが代行していた。
- ・1936（昭和 11）年 9 月，講談社のレコード部門がキングレコードとして独立し，11 月からテレフンケン・レーベルの新譜を出すようになった。
- ・ドイツの技術力があつたこともあり，録音がよいことで評判だった。
- ・ドイツ音楽の名曲が中心で，ベルリンフィルやアムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団といった第一級のオーケストラを押さえていた。
- ・同盟国ドイツのテレフンケンであったため，戦時統制下の中でもレーベル名が変更されていない。

57 「解説法」…レコードの音楽内容の説明を主としレコードを其の実例として聴かせる仕方。概念的教授法で，個々の材料を分析的に説明し理解せしめる方法。

「静聴法」…レコードを聴かせることを主としてその内容の説明をなるべく少く簡単にする仕方。直感的教授法で，児童の可能な範囲で総合的に全能力を働かせる方法。

（田辺，前掲書，171 頁）。

58 昭和 10 年代からレコード評論家として活躍されてきた藁科雅美は次のように語っている。「解説書などもほとんど曲中心でし，演奏家や演奏について盛んに書かれるようになったのは，やはり LP になってからでしょう。レコード雑誌の月評も，大半が曲の解説で，演奏についていろいろ書かれるのは，よほどの大家の，それもほかにレコードのある有名曲が中心でした」（歌崎，前掲書，352 頁）。

59 矢島繁太郎『国民学校教師のための音楽鑑賞指導の実践』共益商社書店，1942 年，116 頁。なお，国民学校の鑑賞の指導法について書かれた本であるため，「生徒」ではなく，「児童」の用語が使用されている。

60 その他，兵庫県姫路師範学校編『姫路師範学校の教育』兵庫県姫路師範学校校友会，1936 年，には次の記述が見られる。「優秀なる音楽を心から傾聴玩味し，その音楽美を体験せしめて情操陶冶をなさうとするのが鑑賞の目的である」（90 頁）。「ラヂオ，レコード，音楽会により絶えず耳からの鑑賞をなさしめることは言う迄もないが，本校に於ては各自の能力に応じてその音楽的生活体験を指導し，真の鑑賞能力を得しめるやうに努めてゐる」（183-184 頁）。

61 1945（昭和 20）年 5 月 24 日から 6 月 2 日にかけて，尾形サダ教授によって，「拡声器を通しての音楽鑑賞の指導，レコードの聴き方」の講義が行われる。以下の文章は生徒の感想である。「就寝時，拡声器から流れるレコードの旋律は，大変うれしい贈り物」（香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会『香川大学教育学部百年のあゆみ』香川大学教育学部松楠会，1989 年，198 頁）。

62 江利川春雄「師範学校における英語科教育の歴史（1）——明治・大正期」『日本英語教育史学会』第 12 号，日本英語教育史学会，1997 年，123 頁。

63 草川宣雄『国民学校音楽教授論』音楽教育体系第一巻，晃文社，1940 年，92-128 頁。

64 三好，前掲書，129-139 頁。なお，香川県女子師範学校は，香川県立坂出高等女学校と併設。その他，江崎の研究の中でも高等女学校と女子師範学校の生徒の気質について少し取り上げられている（江崎公子「高等女学校の音楽教育——高等女学校規定と臨時教育会議の審議を中心として」『音楽研究』大学院研究年報第十輯，国立音楽大学，1998 年，96-97 頁）。

65 信時潔編，財団法人日本文化中央連盟主催，皇紀二千六百年奉祝芸能祭制定『交声曲 海道東征』共益商社書店，1941 年（初版は 1940 年）。SP レコード：ビクター A504-511。

66 金光氏所有の『交声曲 海道東征』（共益商社書店，1940 年）に挟んであった B4 用紙 2 枚の手書きの講義ノート。なお，筆者は，2005 年 5 月 14 日に借用し，2005 年 5 月 23 日に返却した。

第6章 師範学校における聴覚訓練

本章では、「師範学校教科教授及修練指導要目」、国民学校芸能科音楽講習の分析・検討ならびに聞き取り調査を通して、師範学校における聴覚訓練の内容と実態を明らかにすることを目的とする。「聴覚訓練」という語に類似した用語として「音感訓練」「音感教育」「和音感教育」「音感指導」「聴音練習」「基礎練習」等がある。本章では、1943（昭和18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」¹で使用された「聴覚訓練」という用語を使用する。

1941（昭和16）年の「国民学校令施行規則」第十四条には「鋭敏ナル聴覚ノ育成ニカムベシ」²と規定された。それに伴い、1941（昭和16）年、「師範学校教授要目中改正」（昭和16年3月28日文部省訓令第八号）が行われ³、これまで本科第一部第4学年に行われていた「小学校ニ於ケル唱歌教授法及教材ノ研究」⁴が「国民学校ニ於ケル芸能科音楽教授法及教材ノ研究」⁵へと改正された⁶。これを受け、師範学校においては国民学校「芸能科音楽」の教材研究の一環として聴覚訓練の指導が開始された。その後1943（昭和18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」には、「聴覚訓練」という新領域が設置された（第Ⅰ部第3章参照）。

聴覚訓練に関する先行研究は、1)聴覚訓練の全体の動向を扱ったもの、2)国民学校の教科書分析の中で聴覚訓練を扱っているもの、3)聞き取り調査等を通して聴覚訓練の実態を紹介したもの、の三つに大別できる。

- 1) 聴覚訓練の全体の動向を扱った研究としては、河口道朗が挙げられる⁷。河口は「音感教育」の提唱者として、園田清秀を挙げ、1935（昭和10）年頃を「＜国防＞上ないし＜産業＞上役に立つとか利用されるとかいった考え方はまったくなかった」と捉えている⁸。それが、国民学校が発足する1941（昭和16）年頃には、「音感の訓練は、（前記）松久督学官の解説にみたように、まさしく＜国防＞上ないし＜産業＞上の要請と密接な関係に位置づけられていった」（かっこ書きは筆者による）と河口は指摘する⁹。また、河口は、聴覚訓練の普及の媒体として、文部省が主催する各地域での講習に着目している¹⁰。
- 2) 国民学校初等科音楽教科書（以下、国民学校音楽教科書、と略記）や同教科書のための教師用指導書（以下、国民学校教師用指導書、と略記）分析の中で聴覚訓練を扱った研究としては、水島昭男¹¹、佐藤敏雄¹²、宮瀬重美¹³、菅道子¹⁴が挙げられる。菅は、「器楽や鑑賞に比べると基礎練習は和音笛といったものも普及し、実施の容易な領域であり、全国的に広く行われていたと考えられる」¹⁵と述べる¹⁶。しかし、国民学校音楽教科書や国民学校教師用指導書がどのように普及していったかについては論及されていない。
- 3) 聞き取り調査等の方法を採用している研究としては、木村信之が行った足羽章¹⁷、佐々木基之¹⁸、佐藤吉五郎¹⁹、橋本清司²⁰へのインタビューがある。また、本多佐保美、藤井康之、今川恭子、西島央らは、国民学校における聴覚訓練の実態を描き出している²¹。実際に、西島は、「聴音練習は一定程度普及していたが、鑑賞や器楽は

かなり実施率が低かった」²²。本多は、「和音の聴き取りとハニホヘトによる唱法は、鑑賞や器楽といった他の活動領域に比べ、（中略）かなり指導が徹底して行われた領域と言えるのではないだろうか」²³と述べる。

その他、『音楽教育研究』二月号（1974）には、聴覚訓練に関する重要な資料²⁴が整理されている²⁵。

このように聴覚訓練を扱った先行研究はいくつかあるものの、これらの研究では、聴覚訓練の普及のために師範学校がどのような役割を果たしたかについて明らかにされていない。唯一、河口が1940（昭和15）年5月26日から6月6日にわたり、大阪府天王寺師範学校で開催された国民学校講習を取り上げているものの、一例に過ぎない²⁶。

ところで、井上武士は、国民学校制度を実施しても直ちに变革することができないものとして、「教員」「児童」「設備」を挙げている²⁷。井上は、「教員」について「全国の小学校教員を罷免して、新らしく国民学校教員として養成されたものを一斉に採用するなどといふことは到底出来ないのであるから、之は将来師範学校制度が改革されて新らしく養成される教員の普及を待つか、又は小学校教員の再教育といふ方法によるより仕方がない」と述べている²⁸。

1940（昭和15）年6月4日、「国民学校教員講習会実施要綱」が国民学校制度の導入に伴い、制定される²⁹。井上はそのときの状況について次のように著している³⁰。

文部省では昭和15年5月下旬、主として文部省官吏とか、教科調査委員を講師として、東京その他全国の数箇所に於て師範学校教員の講習を開催し、更に8月初旬ラジオ放送によつて国民学校案の骨子を説明したが、尚昭和15年度から全国小学校教員の再教育を計画し、之を実施して居る。

長浜功は、国民学校の教員講習を扱った先行研究が少ないことを問題視し、「教師が實際上、己の教育方針を変更するのは法の改正による制度変更とか教育論文による啓発などといった要因よりも、具体的にその内容を示される、この種の講習会によることが決定的だから」と指摘する³¹。「聴覚訓練」という新教育内容についても講習を通して浸透していったと考えられる。実際に師範学校音楽科主任、附属小学校音楽科主任、各府県音楽科視学等を対象とした「聴覚訓練を主とせる音楽教育講習」が、1940（昭和15）年10月9日から16日までの8日間、東京音楽学校において開催されている³²（後述）。

そこで、師範学校における聴覚訓練の実態を明らかにするために、次の二つの視点を設定することにする。

視点1：文部省が定めた「師範学校教科教授及修練指導要目」（1943）と実際の師範学校における「聴覚訓練」の内容との間に乖離がなかったか。

視点2：師範学校の音楽科教員は、講習を通して「聴覚訓練」という新教育内容、方法をどのように獲得して

いったか。

使用する資料としては、第一に、「師範学校教科教授及修練指導要目」（昭和 18 年）を用いる。第二に、聴覚訓練の内容を扱った講習の実施状況が掲載されている、東京音楽学校同声会発行の『同声会報』を用いる。その際、講習で使用された教材、音源資料等も加味する。さらに上記の資料と、香川県師範学校の音楽科教員の金光武義氏³³（1941 年 4 月～1944 年 12 月在職）や卒業生の故田山清美氏³⁴（1937 年 4 月～1942 年 3 月在籍）、渋谷清寿氏³⁵（1943 年 4 月～1948 年 3 月在籍）を対象に実施した聞き取り調査記録との照合を行いたい。

第1節 「師範学校教科教授及修練指導要目」における聴覚訓練

先述の通り、「聴覚訓練」の領域が新しく含められたのは、1943（昭和18）年に制定された「師範学校教科教授及修練指導要目」である³⁶。聴覚訓練の目的は「教授上の注意」の中で次のように定められた。なお、以下の条文は「中学校教科教授及修練指導要目」³⁷（1943）、「高等女学校教科教授及修練指導要目」³⁸（1943）と同じものである。

聴覚訓練ハ鋭敏ナル聴覚ヲ育成スルト共ニ音楽ノ理解ヲ促進センコトヲ期シ兼テ産業及国防ニ於ケル利用ニ資セシムベシ、

表Ⅱ-6-1は、「師範学校教科教授及修練指導要目」の中から、「聴覚訓練」と「歌唱」の中の「合唱基礎練習」の箇所を抜粋したものである。内容を見ると、本科では第1学年で幹音を扱った後、第2学年以降で派生音を加え、段階を踏んだ指導が展開されている。一方、「合唱基礎練習」については「分散和音唱、単音抽出唱、和音合唱」によって構成されている。この点については国民学校の芸能科音楽で採られていた方法と共通する。

表Ⅱ-6-1 「師範学校教科教授及修練指導要目」（1943）における聴覚訓練

年齢	学年	聴覚訓練	歌唱		
19	本科	3年	前学年ニ於ケル教授事項ニ付程度ヲ進メテ課ス	合唱基礎練習 前学年ニ於ケル教授事項ニ付程度ヲ進メテ課ス	
18		2年	前学年ニ於ケル教授事項ニ付程度ヲ進メテ課シ派生音ヲ加フ	合唱基礎練習 前学年ニ於ケル教授事項ニ付練習セシメ終止形合唱ヲ加フ	
17		1年	音ノ高低、音ノ強弱・律動、音色ニ関スルモノ 幹音ニ依ル和音聴音	合唱基礎練習 分散和音唱（律動ヲ加味ス）、 単音抽出唱、和音合唱 幹音ニ依リ練習セシム	
16	予科	2年	前学年ニ於ケル教授事項ニ付練習セシム派生音、嬰ヘ・変ロ・嬰ハ・変ホヲ加フ旋律ノ聴音練習ヲ行ハシム	合唱基礎練習 前学年ニ於ケル教授事項ニ付程度ヲ進メテ練習シ 派生音ヲ含メル終止形合唱ヲ加フ	中 学 校 高 等 女 学 校
15		1年	音ノ高低・強弱、律動、音色ニ関スルモノ、幹音ニ依ル和音聴音及派生音、嬰ヘ・変ロ・嬰ハヲ加ヘタル和音聴音	合唱基礎練習 分散和音唱（律動ヲ加味ス）、単音抽出唱、 単独ノ音程ニテ同時ニ歌唱スルモノ 三和音ノ和音合唱、幹音ヨリナル終止形合唱	
14-13					
12-6	高等科				
	国民学校 初等科				

出典 文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943年から作成。

第Ⅱ部第1章で取り上げた通り、1943（昭和18）年5月24日、25日には、『師範音楽 本科用巻一』³⁹『師範器楽 本科用巻一』⁴⁰の普及・伝達を目的とする「師範学校音楽科教員講習会」が開催された⁴¹。その中で、城多又兵衛が「聴覚訓練」の講習を行った。しかし、これらの国定教科書には、聴覚訓練の内容が掲載されていないため、教科書分析を通して聴覚訓練の指導内容を明らかにすることができない。

第2節 講習における聴覚訓練の内容

師範学校音楽科教員は講習に参加し、聴覚訓練に関する情報を入手していたと考えられる。そこで、本節では講習に着目して考察したい。

表Ⅱ-6-2は、1931（昭和6）年から1945（昭和20）年の間の『同声会報』に掲載されている聴覚訓練に関する講習の記事を一覧にしたものである。

表Ⅱ-6-2 『同声会報』に掲載の「聴覚訓練」を扱っている講習

発行年	号	講習名	期間	場所	対象教員	講師
1940(S15)	255, 256	文部省中等教員音楽講習	7/22-31	東京音楽学校	師範学校, 附属小学校, 視学,	颯田琴次
	256, 257	聴覚訓練を主とする音楽教育講習	10/9-16	東京音楽学校	師範学校	複数名によって担当
1940(S15)	257	国民学校芸能科音楽講習会	1941 3/27-29	東京音楽学校	学校	颯田琴次
1941(S16)	259, 260	国民学校芸能科音楽講習	6/28-30	東京音楽学校	学校	下総皖一, 城多又兵衛
1942(S17)	262, 263	国民学校初等科音楽講習	5/29-31	大阪府天王寺師範学校	学校	城多又兵衛, 朝倉
1942(S17)	263	初等科音楽講習会	6/27-29	東京音楽学校		城多又兵衛
1943(S18)	264	国民学校芸能科音楽講習会	5/22-23	東京音楽学校	学校	城多又兵衛
		新制度師範学校音楽科教員講習会	5/24, 25	東京音楽学校	師範学校	城多又兵衛
1943(S18)	265	初等科音楽三, 四児童用書講習	3/26-28	東京音楽学校		城多又兵衛
		初等科音楽教師用講習	5/22, 23	東京音楽学校	学校	城多又兵衛

注 講師：「複数」は、田辺尚雄、颯田琴次、城多又兵衛、小松耕輔、井上武士、沢崎定之、下総皖一、橋本国彦、松島彝。
下線は筆者による。

聴覚訓練の内容が含まれたのは、1940（昭和15）年の「文部省中等教員音楽講習」である。颯田琴次が「聴覚と音声」について講義を行っている。講習の目的は、「本講習は国民学校芸能科音楽の研究と教員学力補充」と謳われた⁴²。この講習以降「国民学校芸能科音楽講習」が順次開催されている。

以下、紙幅の関係上、師範学校音楽科教員を主対象とした1940（昭和15）年の「聴覚訓練を主とする音楽教育講習」と『ウタノホン上 教師用』の伝達を目的とした1941（昭和16）年の「国民学校芸能科音楽講習」に限定して検討する。

1. 「聴覚訓練を主とする音楽教育講習」

「聴覚訓練を主とする音楽教育講習」が、1940（昭和 15）年 10 月 9 日から 16 日までの 8 日間、東京音楽学校において開催された。師範学校音楽科主任，附属小学校音楽科主任，各府県音楽科視学等を対象に，以下の内容が伝達されている⁴³。

音響学	東京音楽学校講師	田辺 尚雄
音と耳	東京音楽学校講師，東京帝国大学助教授	颯田 琴次
音名視唱	東京音楽学校助教授	城多又兵衛
	東京女子高等師範学校教授	小松 耕輔
	東京高等師範学校訓導	井上 武士
聴音	東京音楽学校助教授	城多又兵衛
	東京高等師範学校訓導	井上 武士
合唱練習	東京音楽学校教授	沢崎 定之
	東京音楽学校助教授	城多又兵衛
和声学	東京音楽学校助教授	下総 皖一
旋律学	東京音楽学校教授	橋本 国彦
楽式論	女子学習院教授	松島 彝

沢崎以外の講師は、「聴覚訓練準備調査会」の委員であり⁴⁴，城多，小松，井上，下総，橋本，松島については国民学校芸能科音楽教科書の編纂委員も兼ねている⁴⁵。

講習会の様子については、「講習員は全国師範学校教員外市内学校教官等二百余名に及び，本省よりは中野普通学務局長，伊藤初等教育課長以下連日視察せられ，講習員も重大なる責任を感じて，欠席者なく，頗る緊張した講習であつた」と『同声会報』第 257 号に記されている⁴⁶。中野普通学務局長は講習開会式の挨拶の中で，「現在の小学校に於ては取扱はれておらなかつた新分野が特に採り入れられてをりますので之が教授の実際に当りまして遺憾なきを期する為に本講習会を開催致すことになった」と講習の目的について述べる⁴⁷。さらに「聴覚の訓練は産業国防等国民のあらゆる部面の実生活に重要な役割を担ふものである」と言及する⁴⁸。この中野の挨拶から 1940（昭和 15）年の時点で，産業国防を意識して聴覚訓練の実施が計画されていたことが分かる。

なお，下総の和声学についてのみ，『同声会報』第 257 号に講演の速記記録が掲載されている。下総は和音を中心に講義をし，「聴覚訓練用の楽器」については「先づ一番良いのがピアノ，それからオルガン，シロホン，和音笛，蓄音機，ラジオ」と言及している⁴⁹。

以上，「聴覚訓練を主とする音楽講習」は，「音声学，音と耳，音名唱法，聴音，合唱練習，和声学，旋律学，楽式論」の内容で構成され，各分野の専門家による概説を聞くという形態で展開された。この段階では，国民学

校の教科書が刊行されていなかったため、実際の音楽の授業の中でどのように指導をしていくのかといった具体的な方法は示されず、啓蒙的な意味合いが強い。

2. 「国民学校芸能科音楽講習」

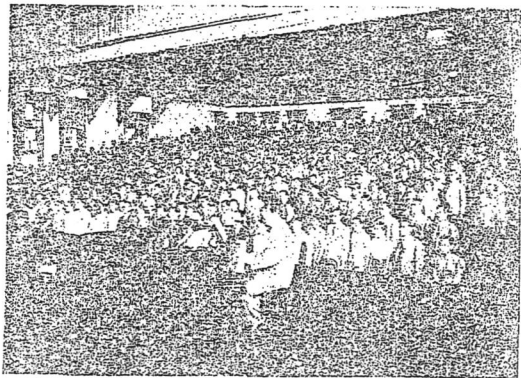
表Ⅱ・6・3に示したように、国民学校音楽教科書と国民学校教師用指導書が出版されるのに合わせて、「国民学校芸能科音楽講習」が開催された。この講習は「全国各学校教員」を対象としているものの、参加者の大部分は師範学校の音楽科教員であったと考えられる。ここでは1941（昭和16）年6月28日から30日にかけて、東京音楽学校において開催された「国民学校芸能科音楽講習」について検討したい。この講習の目的は、「国民学校芸能科音楽『ウタノホン』教師用書の研究」とされている。

表Ⅱ・6・3 「国民学校芸能科音楽講習」の実施状況

年	月/日	講習会名	場所	目的
1941	3/27-29	国民学校芸能科音楽講習	東京音楽学校	「ウタノホン」児童用の講習
1941	6/28-30	国民学校芸能科音楽講習	東京音楽学校	「ウタノホン」教師用書の研究
1942	5/29-31	国民学校初等科音楽講習	大阪府天王寺師範学校	「初等科音楽」教師用一、二の研究
1942	6/27-29	国民学校初等科音楽講習	東京音楽学校	「初等科音楽」教師用一、二の研究
1943	5/22-23	国民学校芸能科音楽講習	東京音楽学校	「初等科音楽」教師用三、四の研究

注 表Ⅱ・6・2から「国民学校芸能科音楽講習」を抽出して作成。下線は筆者による。
出典 『同声会報』。

『同声会報』第260号には、「教師用書上下七百五十部一千五百冊を準備した所受講者多数にて教師用書は全部売切れとなり尚希望者が庭前に長蛇の列をなしたが講習場と講習用書に限りがあるので遺憾ながら当日の御申込に対してはお断りをした」と大盛況であった様子が記されている（写真Ⅱ・6）⁵⁰。



出典 『同声会報』第260号，1941年，19頁。

写真Ⅱ-6 国民学校芸能科音楽講習

資料Ⅱ・6・4は、この講習の時間割である。「聴覚訓練」は、29日に下総皖一が、30日には城多又兵衛が担当して、計4時間となっている。

金光武義氏所持。

- 一、講習員は出席席に坐仰すること。
- 一、講習員は必ず所定の貴重書を左胸部に附すること。
- 一、講習員は所定の教書、貴重書の外に立入らぬこと。
- 一、食事、喫煙は貴重書は教室内食卓に於てすること。
- 一、講習品は各自に於て充分注意すること、貴重品は常に携帯すること。

まず、主要三和音の弁別に始まり、続いて、主要三和音の分割唱（分割和音）と分離唱（単音抽出）、さらに、終止形へ範囲を拡げていく、というものであった。

資料Ⅱ-6-1 金光武義氏のメモ

张克训 1. 50. 城昌先生
 1. 50. 主三知音判号7
 2. 50. 书6120.
 介教知音唱

表Ⅱ-6-5 国民学校初等科第1学年における聴覚訓練の方法

学期	月	内 容
1	4	<p><ものおと>の識別</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鐘、太鼓、笛等の異種類の<ものおと>で、各々の音に特色あるもの。 ・異種類の<ものおと>で音の似ているもの。 ・同種類の<ものおと>のもの。
	5	<ul style="list-style-type: none"> ・楽器（ピアノ又はオルガン）による高い低い音のもの。
	6	<p>和音の訓練</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主要三和音（ハホト→ハヘイ→ロニト）の記憶（ピアノ又はオルガン使用）。 <p>※分散和音的に弾かないで一つの和音として弾く。</p>
2	9	<ul style="list-style-type: none"> ・和音の書取（五線譜使用）。 ・分散和音唱（律動や歌詞を加味する）。 ・単音抽出唱（単音の音高記憶に導く）。
3	1	和音合唱の練習

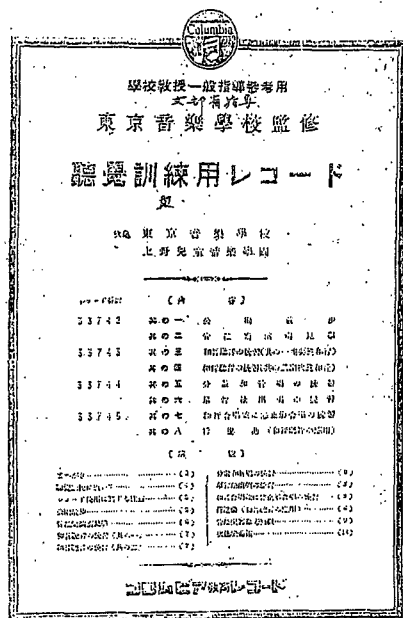
出典 文部省『ウタノホン 上 教師用』1941年、30・36頁から作成。

講習の記録は、まだ入手できていない。代わりに、『国民学校芸能科音楽指導解説』（1941）に掲載されている城多又兵衛の「音名視唱と聴覚訓練の実際」の論稿が、今回の講習と類似する内容なので取り上げる⁵³。城多は、その中で主要三和音の指導法について次のように述べている⁵⁴。

和音は先づハホトの和音をよく覚えさせる。この和音をピアノで弾くときに分散的に弾かないで、音の「かたまり」として弾き、音の「いろあひ」で記憶させる。次にハヘイの和音を弾く。次にロニトの和音を記憶させる。以上3個の和音は主要なる三和音であるから、必ず覚えるやうに努力する必要がある。以上の和音が覚えられたら和音の内容の検討にうつる。和音の構成をしらべるわけである。和音を分散的に弾き、又は歌ひ、その構成して居る音を記憶する。これが出来たならば、和音から一音を抽出して唱ふことである。即ち単音抽出唱をする（以下略）。

また、城多は、次の点を強調する⁵⁵。

- ・音を絶対的の見方にすること（勿論関係的にも見る）。
- ・音の記憶、音に関心をもたせる。
- ・物音より和音へ導入。
- ・和音の記憶より音高の記憶。
- ・和音の結合——和音合唱。
- ・和音練習に律動（リズム）を加味す。

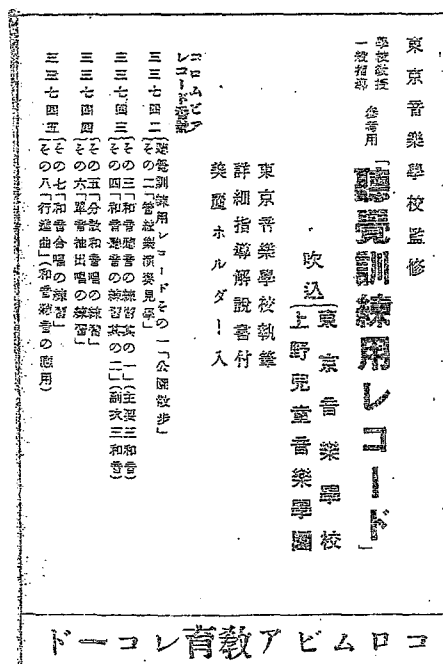


金光武義氏所持。

図Ⅱ-6-2 「東京音楽学校監修聴覚訓練用レコード」指導解説書

3. 聴覚訓練用レコード

「国民学校芸能科音楽講習」で使用された「東京音楽学校監修聴覚訓練用レコード」は、1941（昭和 16）年 5 月にコロンビア教育レコードから出された（図Ⅱ-6-3）^{59）}。4 枚の SP レコードの他、指導解説書が付いている。



出典 『同声会報』第 259 号、1941 年から転載。

図Ⅱ-6-3 「東京音楽学校監修聴覚訓練用レコード」の広告

東京音楽学校校長の乗杉嘉壽は、指導解説書の中で次のように述べている⁶⁰。

国民学校制実施に伴い芸能科音楽教育の飛躍的改善が企画せられたことは誠に欣快とする所である。この芸能科音楽の授業に際して、特に留意すべきは聴覚訓練の重視である。音楽修学上鋭敏なる聴覚の必要なことは言を俟たぬが、一般産業上、国防上にも亦非常に期待せられて居る所である。従来この問題は決して等閑に附せられて居たのではなかつたが、系統立てて教へられるのは今回が最初のことで、教授者としても理解し難い点が多いと考へられる。随つてこの練習の普及、徹底を計る為めこのレコードを製作し、その利用により教育者に其の方法を理解せしめることは勿論、実際教授用にも、又一般家庭用にも便せしめられたことは誠に結構なことと思ふ。

幸にこのレコードが廣く普及され欺の教育に貢献さるることを希ふ次第である。

また、まへがきには、「音楽教育は広範囲によるものでありますから勿論レコード全能を考へるものではないのですが、しかしレコードによらなければ理解出来ない点も多数ありますので、ここにその一端として『聴覚訓練用レコード』を出し」と記されている。

「東京音楽学校監修聴覚訓練用レコード」が発売されたことをきっかけに、1941（昭和16）年7月12日、「聴覚訓練の諸問題―聴覚訓練レコード―を中心に―」を扱った座談会が催された⁶¹。出席者⁶²の一人、コロンビア教育部の足羽章⁶³は、「東京音楽学校監修聴覚訓練用レコード」の制作の経緯について次のように発言している⁶⁴。

これは初め計画しましたのは「うたのほん」の上下が出ました時…、その前に4月から国民学校芸能科音楽が実施されて、いろいろ根本的な規則が発表されたのでありますけれども、其の後直ぐ実際の具体的な指導要旨が出なかつたのであります。ところが世間一般の教授者の人達から具体的にはどうしたらいいかといふ非常な疑問をもつて心配して居る方が多いので、さういふ方達にかういふ方法でお進みになつたら文部省の差し示されて居る方向にいらつしやるのに間違ひなく行けるでせうといふものを紹介したいと思つて計画したのであります。それぢやどういう人達に願ひしたらいいかと言へば、東京音楽学校を動かすより仕方がない。それで願ひしてこのプランを立てた訳であります。音楽学校の乗杉先生が非常に熱意を以て援助下さいましてこれだけのものが出来たのであります。会社としての立場は、要するに文部省のおやりになることを民間側から出来るだけの力を以てお助けしたいといふ気持ちにほかならなかつたのであります。その意味でこのレコードがいい方向に使つて戴けたら一番幸ひだと思ふのであります。その後、文部省から教授要旨も出たのでありますけれども、それにしても唯文字だけで読むのではなく、実際の音を使つて実際に示された音が聴かれてよりはつきりすれば指導者には便利だらうと思つたからやつたのです。

「東京音楽学校監修聴覚訓練用レコード」は当時、どのように評価されていたのだろうか。山口保治は、『国民学校と家庭に於ける聴覚訓練』⁶⁵（1942）の中で次のように解説している⁶⁶。先述の「国民学校芸能科音楽講習」でも、下総皖一、城多又兵衛が「聴覚訓練」を主として担当していたように、彼らが「東京音楽学校監修聴覚訓練用レコード」作成に関与していることが分かる。

東京音楽学校監修とあるが実際其の考案指導に当つたのは下総皖一、城多又兵衛の両氏の様である。之は日本音名を使用してゐる。大体初等科一、二年の教材を主として取扱い、物音・音色・律動等の聴音にも意が用ひられてゐる。参考及び実用になる点が多いと思ふ。上野児童音楽園の児童が唱つてゐるらしく、全体の発声一殊に終止形及び和音合唱一が美しく吹き込まれている。

また、山口の『国民学校と家庭に於ける聴覚訓練』（1942）や1979年発行された倉田喜弘の『日本レコード文化史』⁶⁷には、「東京音楽学校監修聴覚訓練用レコード」以外の聴覚訓練用レコードが紹介されている。表Ⅱ-6-6はそれらを一覧にしたものである。なお、昭和館監修『SPレコード60,000曲総目録』（2003）に掲載されているものも併記してある。

表Ⅱ-6-6 聴覚訓練用のレコード

レコード会社	レコード番号	内 容	文献での紹介			音源 筆者
			山口	倉田	昭和	
コロンビア	33742	東京音楽学校監修とあるが実際その考案指導に当つたのは下総皖一、城多又兵衛の両氏のようなのである。これは日本音名を使用している。大体初等科1、2年の教材を主として取扱い、物音・音色・律動等の聴音にも意が用いられている。参考及び実用になる点が多いと思う。上野児童音楽園の児童が歌っているらしく、全体の発声——殊に終止形及び和音合唱——が美しく吹き込まれている（山口1942：32-3）。	○	○	○	△
	33743		○	○	○	△
	33744		○	○	○	△
	33745		○	○	○	
	A-2511	<初等科第1学年用> 和音聴音の練習一	○		○	
	A-2512	和音聴音の練習二 分散和音唱並に和音合唱	○		○	
	A-2513	単音抽出唱 速度感訓練 音色聴音	○		○	
	A-2514	<初等科第2学年用> 和音聴音の練習一	○			
	A-2515	和音聴音の練習二 和音聴音の練習三	○			◎
	A-2516	分散和音唱 単音抽出唱 和音合唱	○			◎

テイチク	N-7	国民学校芸能科音楽 ＜第1学年用＞ 物音の聴音。ハホト・ハヘイ・ロニトの和音聴音の練習。		○			
	N-8A(イ 746)	第二部 分散和音唱の練習（ハホト・ハヘイ・ロニト） 単音抽出唱の練習・分散和音唱の練習（二拍子の律動に依る）（始メニイノ音ガアリマス）		○			◎
	N-8B(イ 747)	第二部 分散和音唱の練習（四拍子・三拍子の律動に依る）		○			◎
	N-9	分散和音唱の応用（ハホト・ハヘイ・ロニト）（始メニイノ音ガアリマス） 分散和音唱の応用，和音合唱の練習，律動の練習，単音記憶の練習。		○			
	N-10	＜第2学年用＞ ニヘイの和音の（種々の）練習，ホトハの和音の練習。単音記憶の練習。		○			
	N-11	ホトロの和音の練習。トハホの和音の練習。		○			
	N-12	イハホの和音の練習。応用と復習。		○			
	N-13A(イ 971)	＜第1学年用＞ 練習盤 ハホト・ハヘイ・ロニトの和音識別及記憶（始メニイノ音ガアリマス）					◎
N-13B(イ 972)	練習盤 ハホト・ハヘイ・ロニトの和音の分散和音唱（二，三，四拍子に依る）（始メニイノ音ガアリマス）					◎	
キング	56017	和音の聴き分け方。分散和音唱。色々な律動に依る分散和音唱。		○			
	56018	和音の聴き分け方並に練習。分散和音唱。単音抽出唱。		○			
ポリドール		未詳。		○			
タイヘイ		未詳。		○			
ビクター	A・3085	幼稚園の音感（1）	佐藤吉五郎君が指導して堺市の児童が吹き込んだものでドイツ音名を用いて歌っている。幼稚園児のものの方が参考になる点が多いと思う。全体の歌う声は美しいと言われない（山口 1942：32）。	○		○	
A・3085	幼稚園の音感（2）					○	
A・3086	幼稚園の音感（3）					○	
A・3086	幼稚園の音感（4）					○	
A・3087	国民学校の音感（1）					○	
A・3087	国民学校の音感（2）					○	
A・3088	国民学校の音感（3）					○	
A・3088	国民学校の音感（4）					○	
A・3089	国民学校の音感（5）					○	
A・3089	国民学校の音感（6）					○	
	A・149(C・316)	国民学校芸能科音楽 聴覚訓練（一）－初等科低学年用－ 祭りの日（ものの音の識別）			○		△
	A・149(C・318)	聴覚訓練（二）－初等科低学年用－ 和音聴音（上）			○		△
	A・150(C・319)	聴覚訓練（三）－初等科低学年用－ 分散和音唱 単音抽出唱 和音合唱（上）			○	○	△
	A・150(C・317)	聴覚訓練（四）－初等科低学年用－ 小さな音楽会（和音合唱の応用）			○	○	△
	A・151(J C E・331)	聴覚訓練（五）－初等科低学年用－ 和音聴音（下）			○		◎
	A・151(J C E・332)	聴覚訓練（六）－初等科低学年用－ 分散和音唱 単音抽出唱 和音合唱（下）			○		◎

	A-179(J-389)	聴覚訓練（一）－初等科中学年用－ 和音聴音				◎
	A-179(J-390)	聴覚訓練（二）－初等科中学年用－ 分散和音唱・単音抽出唱 和音合唱				◎
	A-180(C-391)	聴覚訓練（三）－初等科中学年用－ ハ長調終止形合唱				◎
	A-180(C-392)	聴覚訓練（四）－初等科中学年用－ 歌詞のついた終止形合唱 春の小川（単音抽出唱）				◎
	A-180(C-393)	聴覚訓練（五）－初等科中学年用－ 和音聴音				◎
	A-181(C-394)	聴覚訓練（六）－初等科中学年用－ 分散和音唱 イ短調終止形合唱				◎
	A-183(C-397)	聴覚訓練（九）－初等科中学年用－ 終止形風主題による変奏曲				◎
	A-183(C-400)	聴覚訓練（十）－初等科中学年用－ 高嶺（合唱及ピアノ）				◎
	AN-3	航空機爆音 海軍技術研究所音響研究部			○	
	AN-4				○	
	AN-5				○	
	AN-6				○	
	AN-7				○	
	AN-8				○	
	AN-33	航空機爆音・米機マーチン（防空監視哨員訓練用） 内務省防空研究所			○	
	AN-34	航空機爆音・米機ロッキードハドソン（防空監視哨員訓練用） 内務省防空研究所			○	
ニッチク		敵機爆音集		○		

出典 山口保治『国民学校と家庭に於ける聴覚訓練』1942年。倉田喜弘『日本レコード文化史』1979年。昭和館監修『SPレコード60,000曲総目録』2003年。

注 文献での紹介：「山口」＝『国民学校と家庭に於ける聴覚訓練』，「倉田」＝『日本レコード文化史』，「昭和」＝『SPレコード60,000曲総目録』。

音源：「◎」＝筆者が所蔵している音源資料，「△」＝筆者が所蔵している複製音源資料。

では、「東京音楽学校監修聴覚訓練用レコード」は、どのような特徴を有しているのだろうか。ここでは、ビクターの「国民学校芸能科 聴覚訓練」（A-149）と比較をしたい（表Ⅱ-6-7）。

表Ⅱ-6-7 聴覚訓練用レコード

名称	学校教授一般指導参考用 東京音楽学校監修 聴覚訓練用レコード	国民学校芸能科音楽 聴覚訓練 (一) - (六) 初等科低学年用
レコード会社	コロンビア教育レコード	ビクターレコード
年	1941 (昭和 16)	
構成	33742 其の一 公園散歩 其の二 管弦楽演奏見学 33743 其の三 和音聴音の練習 (其の一主要三和音) 其の四 和音聴音の練習 (其の二副次三和音) 33744 其の五 分散和音唱の練習 其の六 単音抽出唱の練習 33745 其の七 和音合唱並に終止形合唱の練習 其の八 行進曲 (和音聴音の応用)	A-149 (C-316) 聴覚練習 (一) 祭りの日 (もの音の識別) A-149 (C-318) 聴覚訓練 (二) 和音聴音 (上) A-150 (C-319) 聴覚訓練 (三) 分散和音唱 単音抽出唱 和音合唱 (上) A-150 (C-317) 聴覚訓練 (四) 小さな音楽会 (和音合唱の応用) A-151 (J C E-331) 聴覚訓練 (五) 和音聴音 (下) A-151 (J C E-332) 聴覚訓練 (六) 分散和音唱 単音抽出唱 和音合唱 (下)
吹込	東京音楽学校 上野児童音楽学園	
備考	倉敷公民館音楽図書室所蔵	教科書資料館 (平和人権子どもセンター) 所蔵

コロンビアの「東京音楽学校監修聴覚訓練用レコード」(以下、東京音楽学校レコード、と略記)は、4枚、ビクターの「国民学校芸能科 聴覚訓練」(以下、ビクターレコード、と略記)は3枚のSPレコードによって構成されている。いずれも両面に録音されている。ビクターレコードに関しては、同じシリーズで「初等科中学年用」が出ている⁶⁸。

表Ⅱ-6-7で挙げた聴覚訓練用レコードに話を戻すと、ビクターレコードは「初等科低学年用」と明記してある。東京音楽学校レコードについては、指導解説書の中で、

このレコードに於ては、聴覚訓練全過程の第一歩から、大体二ヶ年間乃至三ヶ年間位に於て行はれる程度の処迄取扱つてあります。即ち和音の種類も極く初歩のものだけです。国民学校で御参考に御使ひ下さるのでしたら、大体第二学年程度迄の材料となるわけであり、一般御家庭で御利用下さる場合でしたら、この聴覚訓練開始の可能年齢である四、五歳位より六、七歳乃至八歳迄の材料となるのであります。

と記されているように、こちらも初等科低学年を対象とした内容である。表Ⅱ-6-7の「構成」の欄に関しては、『ウタノホン上 教師用』に示されている「(イ) ものおとの識別→(ロ) 幹音からなる長調主要三和音の記憶→(ハ) 分散和音を歌ふ練習→(ニ) 和音を弾き、単音抽出唱の練習→(ホ) 和音を弾き、分散和音唱の練習→(ヘ) 単独の和音合唱 (以下略)」の系統に沿っている。実際に聞いてみてもほぼ同レベルであることが分かる。なお、東京音楽学校レコードについては、「其の二 管弦楽演奏見学」という題で、管弦楽の楽器名、音色、形を理解させるための下総皖一作曲の《舞曲》が録音されている。また、「ものおとの識別」については、各社によりアプローチの仕方が異なるので、以下で取り上げたい。

・「ものおとの識別」

再度、表Ⅱ-6-7の「構成」の欄を見たい。東京音楽学校レコードでは「其の一 公園散歩」、ビクターレコードでは「祭りの日（もの音の識別）」によって始まっている。これらの部分を文字化したものが表Ⅱ-6-8である。

表Ⅱ-6-8 「ものおとの識別」の比較

コロンビア 学校教授一般指導参考用 東京音楽学校監修 聴覚訓練用レコード	ビクター 国民学校芸能科音楽 聴覚訓練 (一) - (六) 初等科低学年用
<p>(ピアノで行進曲)</p> <p>太郎：花子、これから上野公園を散歩しよう。</p> <p>花子：ええ、散歩しましょう。</p> <p>(管弦楽で行進曲)</p> <p>(鐘) 2回</p> <p>花子：<u>鐘だわ、あの有名な鐘ね</u></p> <p>太郎：そうだよ、あの左手にあるのだよ。</p> <p>(鐘) 1回、(ピアノで行進曲)</p> <p>太郎：さあ動物園にきた、あの白い塀が動物園だよ。</p> <p>花子：そう？</p> <p>(小鳥の鳴き声)</p> <p>花子：<u>あら鳥の鳴き声がきこえるわね。</u></p> <p>太郎：何の鳥だろう。</p> <p>(ライオンのなき声)</p> <p>花子：あれは？</p> <p>太郎：ライオンだろう。</p> <p>(管弦楽で行進曲-汽笛)</p> <p>花子：あれは？</p> <p>太郎：あれは省線電車じゃないか。</p> <p>花子：<u>何だかもっと近くの様だわ。</u></p> <p>太郎：そうだそう地下鉄だ。<u>花子によく音の方向がわかるね。</u></p> <p>(管弦楽でベートーベンの第九交響曲)</p> <p>太郎：ああ、管弦楽がきこえる。音楽学校の前を通ってみようよ。</p> <p>花子：ええ。</p> <p>(ピアノで<ハホト>の和音)</p> <p>太郎：あ、和音だ<ハホト>だな。</p> <p>花子：よくわかるわね。</p> <p>(ピアノで<ロニト>の和音)</p> <p>太郎：あれは<ロニト>だ。</p> <p>(ピアノ、管弦楽で行進曲のコード)</p>	<p>(前奏《アマリス》)</p> <p>今日はお祭りなので、花子さんとはるえさんと二人で鎮守様へお参りに行きました。</p> <p>(太鼓、拍手を打つ音、太鼓、《アマリス》)</p> <p><u>あ、太鼓が聴こえてくるわ。早く行きましょう。</u></p> <p>(拍手を打つ音、太鼓、《アマリス》)</p> <p>(おもちゃの音、《アマリス》)</p> <p><u>きれいなおもちゃがたくさんあるわね。</u></p> <p>(おもちゃの音、《アマリス》)</p> <p>(うぐいす笛、《アマリス》)</p> <p><u>うぐいす笛も売っているわ。</u></p> <p>(うぐいす笛、太鼓のおはやしに鐘が加わる)</p> <p>おかぐらだわ。おもしろそうね。</p> <p><u>あのおはやしは笛に太鼓ね。それから鐘も入っているわ。</u></p> <p>(2つの鈴の音、拍手を打つ音)</p> <p><u>今の鈴は音が違っていたわね。</u></p> <p><u>「ええ」</u></p> <p><u>あの方が高かったわ。</u></p> <p>(ブラスバンドの軍艦マーチ)</p> <p>あら、楽隊だわ。どこでしょう。</p> <p>お宮の後ろだわ。行ってみましょう。</p>
「レコードの解説」5・6頁から転載。	筆者によるテープ起こし。

注 下線は筆者による。

東京音楽学校レコードでは太郎と花子の二人、ビクターレコードではナレーター、花子、はるえの三人の対話により物語が進んでいく点は共通している。しかし、ビクターレコードは同一人物がそれぞれの役を担当していることもあり、役柄がはっきりとしない。いずれも最初に音楽が挿入されている。東京音楽学校レコードでは、ピアノと管弦楽（ベートーベンの第九交響曲も使用）が交互に使用され、途中で鐘、動物の鳴き声が登場する。一方、ビクターレコードでは、《アマリス》が使用されている。途中で太鼓、拍手を打つ音、おもちゃの音、鐘、鈴の音が加わり、ブラスバンドの《軍艦マーチ》で締めくくっている。『ウタノホン上 教師用』では<ものおと>の識別に関して次のように説明されている⁶⁹（下線は筆者による）。

音を覚える練習の第一段階としては、先ず児童をして音に注意を向けるような練習をする。「ものおと」の識別から始めて、児童にその物音を聴く態度を養成する。「ものおと」は、児童の生活に即したものが適当で、しかもなるべく美しい音の出るものがよい。一例を挙げると、鐘、太鼓、笛、等は適当で、「ものおと」をよく覚えさせた後、二三の数へた音の中から何の音かを識別させるようにする。聴かせる「もの音」は、児童の最も覚え易い音がよい。次に音が似て居るが、発音物体が異なるものを識別させる。例へば、ブリキの鐘と洗面器の如く近い音のするものがよい。最後は、同種のものから出る音の識別にもつて行く。例へば、大きい太鼓と小さい太鼓のやうなものがよい。期間は、約四月中の練習であるが、早く出来れば、次に移つてよい、

「何の音かを識別させるようにする」（上記引用、下線部分）とあるように、実際に表Ⅱ-6・8でも、音が鳴った直後に何の音かを言葉で答えている（下線部分）。例えば、東京音楽学校レコードでは、鐘の音の後に「鐘だわ、あの有名な鐘ね」、ビクターレコードでは、太鼓の音の後に「あ、太鼓が聴こえてくるわ」となっている。ビクターレコードでは、『ウタノホン上 教師用』で一例に挙げられている「鐘、太鼓、笛」がすべて使用されている。

引用箇所「次に音が似て居るが、発音物体が異なるものを識別させる」が、これらのレコードにどのように吹き込まれているかについては具体的には指摘することができない。しかし、最後の引用箇所「最後は、同種のものから出る音の識別にもつて行く」については、ビクターレコードの鈴の音の部分で行われている（二重下線部分）。「今の鈴は音が違っていたわね」と投げ掛け、「ええ、あの方が高かったわ」と音の高低を識別させている。

東京音楽学校レコードでは、音の高低ではなく、音の方向性が取り上げられている（波線部分）。これについては『ウタノホン上 教師用』では説明されていない。しかし、金光氏は指導解説書（p. 6）に「音の方向性は音楽上にはさして必要はないが、産業、国防上非常に必要である。もの音に注意を向ける様に」とメモを加えている。講習で伝達された内容であると考えられる。

このように、一例として挙げた「ものおとの識別」のような新教育方法であっても、教師用指導書にプラスしてレコードがセットにしてあれば、理解も深まる。師範学校音楽科教員らは、「国民学校芸能科講習」でこれらの資料を手にし、伝達を受けた。また、入手した情報を各府県に持ち帰り、地元の現職教員を対象に講習を開いている⁷⁰。

管見の限り、師範学校の音楽の授業において、国民学校教師用指導書を教科書として使用することがあっても、聴覚訓練用のレコードを使用したケースは見られない。師範学校音楽科教員の大部分は、東京音楽学校甲種師範科を卒業しているため、和音の知識やピアノの演奏技能を兼ね備えている。そのため、聴覚訓練の指導手順を理解さえすれば、わざわざレコードに頼らなくても、自分でピアノを弾いて指導を進めた方が効率的であったからだと考えられる。

第3節 聞き取り調査から明らかとなった聴覚訓練の実態

1937（昭和12）年4月から1944（昭和17）年3月まで香川県師範学校本科第一部に在籍した故田山清美氏によると、香川県師範学校では1940（昭和15）年頃から聴覚訓練の指導が開始されたとのことである⁷¹。内容は、「ハホト・ハヘイ・ロニト」に留まっていたようである。

1. 香川県師範学校音楽科教員、金光武義氏の実践

ここでは香川県師範学校において金光武義氏が行った聴覚訓練の実践について検討する。主な資料は金光氏の授業メモである。

資料Ⅱ-6-2のメモには、年月日は記されていない。しかし、「二部一年」「大陸科」という用語が使用されていることから、官立専門学校程度へと師範学校が昇格する前の1941（昭和16）年か1942（昭和17）年までであると推定できる。金光氏は「イロハ音名唱」を取り入れていたことが分かる。

資料Ⅱ-6-2 金光武義氏の授業メモ

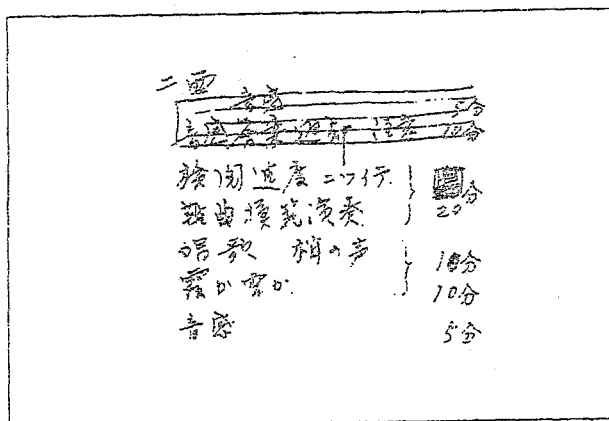
注意事項

- 1, 二部一年は補欠入学者が揃ふ迄は、揃はなくても差支のない程度の授業をすること。
- 2, 新入生に直ちに日本音名にて歌唱させることは困難であるから、読譜練習を繰返してやること。
- 3, 新入生には又、音感訓練の基礎を授けること。大陸科は一時間程説明の程度にてよし。

注 金光氏の手書きのメモを筆者によって打ち直した。

次は資料Ⅱ-6-3。音楽の授業では5分間程度、聴覚訓練に充てられていたことが分かる。五線が引いてある部分の下には、「音感 5分、音感答案返却 注意 10分」と書かれているので、和音の書き取りも行われていた。

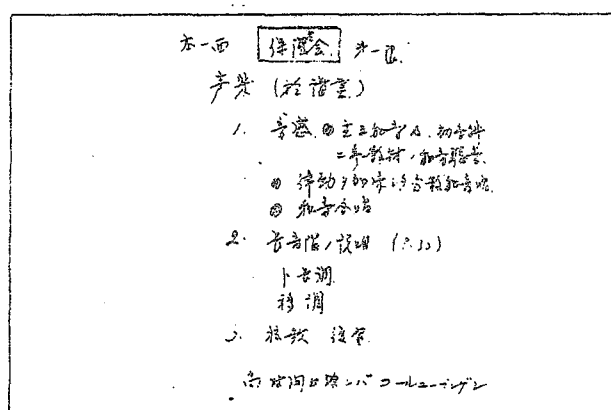
資料Ⅱ-6-3 金光武義氏の授業メモ



続いて資料Ⅱ-6-4。「保護者会」と四角で囲ってある。香川師範学校では保護者会の中で授業参観が行われていた。ここでは、本科第1学年西組の生徒を対象に講堂において音楽の授業が行われている。実施年月日は記されていない。しかし、『年表 わが香川師範時代』によると、保護者会が実施されたのは、1943（昭和18）年10月23日（土）と記載されている⁷²。

授業の導入部分に聴覚訓練が置かれ、「主三和音及初等科二年教材ノ和音聴音→律動ヲ加味シタ分散和音唱→和音合唱」と進んでいる。「初等科二年教材ノ和音聴音」とあることから、指導される和音の中には、「ニヘイ」「ホトハ」「ホトロ」「トハホ」「イハホ」も含まれていたと考えられる⁷³。

資料Ⅱ-6-4 金光武義氏の授業メモ



これについて金光氏は、「とにかく和音感訓練、音感訓練にずいぶん力を入れてやったのですわ。鋭敏な聴覚を養うためにね。和音を使ってやるのが一番よいということで」と語っている⁷⁴。

先行研究で取り上げた本多らによると、東京の誠之国民学校でも保護者会の中で、和音の聴き分けが講堂で実演され、聴覚訓練が保護者たちに学校制度が変わったことを示す格好の例（象徴）となっていた⁷⁵。今回の香川師範学校の金光氏の実践でも、聴覚訓練がプロパガンダ的に扱われている側面が見られる。

その他、資料Ⅱ-6-5、資料Ⅱ-6-6に示したように、聴覚訓練は、「教育実習」における「芸能科音楽」の授業でも実施されていた。資料Ⅱ-6-5は、1942（昭和17）年11月12日に実施された「初等科第二学年芸能科音楽授業案」、資料Ⅱ-6-6は、1943（昭和18）年12月9日に実施された「初一芸能科音楽指導案」である⁷⁶。これらには金光氏の朱書きが残されている。両案に示された「指導過程」について共通することは、以下の点である。

佐藤 仁興ノ創成
本村 ① ビアノタ修ク彈ク
② 児童トノ話ト合ヒ音
九ノ問題
発声練習

新編歌集は、音楽の若手ノ人々が、
精選するが早に、
出来ぬ。
新編歌集に、
自信を持って、
やれ。

初等科第二学年芸能科音楽授業案

授業者 第十三學級 尾崎正明

一日時 昭和十七年十一月十二日(金曜日) 第三時限

二教材 菊の花(うたのほん 下十三)

三趣旨 美しく、氣高い菊の花の歌を歌はせて、快活純美の情を養ひ、國民的
情操の醇化に資す。

着眼點

四時間配當及必要項
第一時 歌曲の概観と第一歌詞の取扱ひをなし、音名唱に導く(本時)

第二時 第二第三歌詞の取扱ひ及び三拍子の拍子練習。

第三時 總結練習及び鑑賞。

五準備 菊の花 歌詞の板書。

六本時の目的

児童の語合より入り、菊の花の歌曲全體の取扱ひをなし、菊の花の
美しき氣高きと感得せしめ、音名唱より音名唱に導く。

七指導過程

一 既習歌曲の練成 富士の山

二 目的指示

三 菊の花の歌曲の取扱ひ

四 歌曲の練習

五 拍子練習

六 音名唱

七 音名唱

八 和音練習

九 和音練習

十 和音練習

十一 和音練習

十二 和音練習

十三 和音練習

十四 和音練習

十五 和音練習

初一藝能科音楽指導案
第十八學級 教生 今田 覺樹

日時 昭和十八年十二月九日(木) 第二校時

教材 デンジャゴゴ(ウタノホシ上十六)

目的 樂曲、電車についての歌曲を歌はせて純真な童心を培ひ快活の情を養ふ。

時間 配當及び指導要項

第一時(本時) 歌詞の指導をなして歌曲の概略を把握せしむ

第二時 歌唱練習をなして音名唱に導き律動の指導をなす

第三時 歌唱練習(音名唱) 律動の練習

準備 歌曲板書

一本時の目的 歌詞の指導をなして電車についての面白さを味はせながら歌詞を音名唱から微唱へ進導せしむ

指導過程
1. 既習歌曲の練習「カモリワタ」(歌詞を音名唱で)

2. 新教材「デンジャゴゴ」の歌曲の指導

イ 目的指導

ロ 歌詞の指導

ハ 範奏(伴奏譜二回)

ニ 範唱(明快にはざれよくはきはきと唱ふ)

ホ 歌唱練習

模唱 (全員 四小節一)

微唱 (全員)

男子 一番 ヤチ 一番
女子 二番 男子 二番

3. 聴覚訓練

イ 和音聴音

ロ 和音書取

ハ 分散和音唱

ロニトの分散和音唱 (兒童用音四八頁一二番)

4. 既習歌曲の練習「オ人ギヤウ」

連絡 ヨミカタニ 十二デンジャゴゴ

歌「ト土ノ徳」

1. 直進前「デンジャゴゴ」

2. 直進前「マキ」

3. 直進前「カモリワタ」

- ・「既習歌曲の錬成」が授業の導入と終末に位置付けられ、「歌で始まり歌で終わる」授業の形態が採られている点。
- ・授業の導入段階で、「目的指示」が児童に対し行われ、授業の目的に沿った内容が組まれている点。
- ・主要教材は、歌唱教材である点。
- ・「聴覚訓練」は、授業の導入時ではなく、終末に置かれている点。

さらに「聴覚訓練」について着目すると、第1学年の資料Ⅱ・6・6では、「和音聴音、和音書取、分散和音唱」、第2学年の資料Ⅱ・6・5では、「和音聴音、分散和音唱、単音抽出唱、和音合唱」で構成されている。これらは国民学校教師用指導書に記載されている方法に拠っている。金光氏の朱書きが明確に示されている資料Ⅱ・6・5をみてみたい。資料Ⅱ・6・5には、金光氏の朱書きが「最初ノ授業デアルノデ、馴レナイ為、技術ノマヅイ点モアルガ、教師ガ非常ニ熱心ニヤツタ点ハ認メタイト思フ」とある。「以下は「指導過程」から「聴覚訓練」の部分を抽出し、横書きに直したものである。

四、聴覚訓練

未ダシ——イ、和音聴音。
 律動加味——ロ、分散和音唱。
 マヅイ——ハ、単音抽出唱。
 二、和音合唱。

ハヘイ

和音合唱 モット好イ声デ而モ音程ヲ正シク
 和音ノ美、ハーモニー、美シサヲ悟ラセル様指導スベキダ
 唯イイ加減ナ音程デ施シ歌ワセテイルノヲ
 ソノ促ニシテ置イタガ、訂正シタ歌唱シテ正シイ音程ニテ歌ハスベキダ。
 同時ニガムシヤラニ大声ニテ歌ハセズ、充分ニ耳ヲ働カセテ、ヨク、
 ハーモニーヲ聞カセル寡ズ必要。
 ヨクキカセル為ニハ弱イ声デ歌ハセタリ、ハミングデアルノモヨカロウ。

朱書きを見る限り、やはり初めての授業ということもあり、実習生の児童に対する指導は不十分であったと推察する。金光氏は、「和音合唱」については、弱声を推奨し、発声指導と関連付けて朱書きを行っている。「ハヘイ」以外にどのような和音が指導されたのかは分からない。前述した通り、『うたのほん下 教師用』には、第2学年の指導内容として、「ニヘイ」「ホトハ」「ホトロ」「トハホ」「イハホ」の和音が掲載されているので、それらの和音が指導された可能性が強い⁷⁷。いずれにしても聴覚訓練を指導するためには、教師は音を聴き分ける耳を持っていなければいけない。これについて金光氏は「教師ガ耳ヲ持ツテ間違ヲ訂正スル余裕ノアツタ事ハ喜ブベキ点ダ」と生徒を賞賛している。

では、金光氏はどのような意識を持って聴覚訓練の指導にあたっていたのだろうか。金光氏は、師範学校の他、香川県立高松中学校の音楽の授業も担当していた。資料Ⅱ・6・7は、中学校第2学年の最初の授業における金光氏の訓話の一部である。金光氏は、「産業及国防ニ於ケル利用ニ資セシムベシ」の目的を忠実に守り、指導に当

っていたことが読み取れる。

資料Ⅱ-6-7 香川県立高松中学校における金光武義氏の授業メモ

国防上から云っても音楽が非常に役立つということが此の頃、はっきり認められる様になった。遠くから飛んで来る飛行機の爆音を聞き分けたり、飛行機のエンジンの故障や、又、潜水艦の中のあの複雑なエンジンの□□した故障でも、よく訓練された耳には直ちに聞き分けることが出来るのです。

こういう点に於て、軍隊に於て耳、聴覚の訓練といふことが非常に喧ましく言はれる様になった。此の聴覚の訓練には音楽が最もいいのである。

以上述べた様に音楽によつて耳を訓練しておくということは、直接に又間接に国家の為になることであるから、音楽を決して蔑視してはいけない。音楽を蔑視にする奴は、これからの世の中に於ては非国民だといふことになるんだぞ。

注 金光氏の手書きのメモを筆者によって打ち直した。□：判読不能。

2. 香川師範学校卒業生、渋谷清寿氏の証言

香川師範学校男子部 23 年卒業同窓生によって編集された『年表 わが香川師範時代』の中に、聴覚訓練に関する記述が見られる⁷⁸。この年表は、香川師範学校 1948（昭和 23）年の卒業生 3 名の日記を基にしている。表Ⅱ-6-9 は、この年表から聴覚訓練に関連する部分を抜粋したものである。

表Ⅱ-6-9 『年表 わが香川師範時代』における聴覚訓練の記述

年	月	日	曜	内 容	学年
1943 S18	4	14	水	校長講話（常会について） あと、音感訓練、石拾い	予科 2 年
		17	土	1 校時 音感訓練と声楽（講堂） ※ 音感訓練 軍隊で飛行機の爆音や潜水艦のスクリュー音の識別の必要から訓練されていた音感訓練が、学校でも実施された。 <u>一年に入学した時から講堂朝礼等でよく訓練された。</u> <u>ハホト・ハヘイ・ロニト</u> と和音の違いを識別できるようになった。 かつて、中川校長が「トシ イロハというのは、あれ一体なんだね」と鈴木先生に聞かれたという。	
	5	27	火		
		18	火	4 校時 音楽練習（講堂） 6 校時 音楽、音感、オルガン検閲	

注. 下線は筆者による。

表Ⅱ-6-9 から、香川師範学校では聴覚訓練が音楽の授業のみならず、全校生徒対象に講堂においても実施されていたことが読み取れる。1942（昭和 17）年においては、聴覚訓練に関する記述は見られない。しかしながら、下線部分「1 年に入学した時から講堂朝礼等でよく訓練された」と記述されているので、1942（昭和 17）年度においても聴覚訓練が実施されていたと推定される。

内容については、「ハホト・ハヘイ・ロニトと和音の違いを識別できるようになった」とある。実際に卒業生の一人である渋谷清寿氏によると、香川師範学校で指導された和音は、「ハホト、ハヘイ、ロニト」の主要三和音に留まり、派生音を加えた和音聴音までには発展していないとのことである。また、表Ⅱ-6-9 の記述では、「和音

の識別ができるようになった」とあるものの、これは全生徒が達成できたわけではないことが、次の記録から分かる。

鈴木：それを例えば、和音を弾きますよね。集会だと、だれか代表が答えるのですか。

渋谷：あのね、実に曖昧です。曖昧だったと思うけれどね。先生がポーンと弾くと、「ハホト」と言う人も「ハヘイ」という人もおり、結局みんなでわっと答えるということ。

鈴木：ああ、一斉に答えるのですね。

渋谷：一斉に、一斉に。ときには指名しておった。だけど3つだったよ、本当に。「ハホト、ハヘイ、ロニト」。

(2004年9月28日 渋谷氏)

10代後半の師範学校の生徒に対する聴覚訓練の指導は、思うようにはかどらなかったと推察される。『和音感教育』⁷⁹⁾の著者であり、大阪府堺市の幼稚園、小学校における和音感教育で成果を上げた、佐藤吉五郎ですら、海軍対潜学校の将兵の訓練には音を上げている⁸⁰⁾。したがって、「師範学校教科教授及修練指導要目」の内容は、師範学校の生徒にとって難易度が高く、現実には規定通りに実施されなかったと考えられる。

まとめ

以上、師範学校における聴覚訓練の内容と方法について次の点が明らかになった。

- 1) 師範学校における聴覚訓練の目的は、「師範学校教科教授及修練指導要目」(1943)によると、鋭敏なる聴覚の育成、音楽理解の促進、産業・国防における利用のためと定められた。また、内容に関しては幹音だけではなく派生音まで発展した和音聴音等も指導することになっていた。しかし、実際には「ハホト・ハヘイ・ロニト」の主要三和音の指導が中心であったように、「師範学校教科教授及修練指導要目」と実際の師範学校における聴覚訓練の指導内容には乖離が見られた。
- 2) 師範学校音楽科教員は、「聴覚訓練を主とせる音楽教育講習」(1940年10月)や「国民学校芸能科音楽講習」(1941年6月)等の講習を通して、聴覚訓練の指導内容や方法を習得していった。
『ウタノホン上 教師用』や聴覚訓練用レコードでは、「ものおと」の識別から始め→「主要三和音の記憶」→「分散和音唱」→「単音抽出唱」→「和音合唱」という学習過程で進められていた。
多くの師範学校では、国民学校第1学年で指導される内容に留まっていたということもあり、『ウタノホン上 教師用』の記載事項に沿った内容が指導された。
- 3) 香川県師範学校における「音楽」の授業での聴覚訓練は、保護者会でも公開され、いわばプロパガンダ的に取り扱われていた。また、教育実習における「芸能科音楽」の授業においても聴覚訓練が取り扱われていた。

以上、師範学校における聴覚訓練の実施は、1943(昭和18)年の「師範学校教科教授及修練指導要目」の制定というよりはむしろ、1941(昭和16)年の国民学校発足を受けている。そのため、「国民学校ニ於ケル芸能科音楽教授法及教材ノ研究」の側面が強く、また、師範学校の生徒が聴覚訓練をまったく受けてこなかったことも重なり、主要三和音の識別という国民学校第1学年の指導内容が中心になっている。

今後の課題としては以下の点が挙げられる。

- 1) 師範学校において「産業・国防における利用のため」に重点を置いた聴覚訓練の指導がなされたのか。
1943(昭和18)年5月にはニッチクから「敵機爆音集」⁸¹⁾が出た⁸²⁾。香川県師範学校では、今回検討をした聴覚訓練用レコードを含め、レコードを使用した聴覚訓練は実施されていない。今後、他校の事例についても検証していきたい。
- 2) 女子師範学校における聴覚訓練の指導はどのようであったのか。
香川県女子師範学校では、音楽の授業以外に、寮生活の中でも聴覚訓練が行われていた⁸³⁾。また、派生音を含んだ和音聴音も少し取り入れられていた⁸⁴⁾。一般に男子師範より女子師範の方が、熱心に音楽教育を実施されていた。今後、男子師範と女子師範の比較についても行っていきたい。

参考資料 聴覚訓練に関する文献

年 月	法令	出版された論文, 書籍, 教科書等
1931 (S 6). 1	「師範学校規定」改正	園田清秀「天才の水準を凌ぐ音楽教育」『婦人の友』4-6月
1931 (S 6). 3	「師範学校教授要目」改正	
1935 (S 10). 4	文部省「教学刷新評議会官制」公布	
1935 (S 10). 11		
1937 (S 12). 2		酒田富次「絶対音感について」『教育音楽』2-7月
1937 (S 12). 4		田辺尚雄「音名問題と階名唱法との優劣問題」『教育音楽』4月 幾尾純「音名唱法と階名唱法について」『教育音楽』4月 牛山充「音名唱法と階名唱法の得失」『教育音楽』4月 佐藤謙三「音名唱法と階名唱法の問題について」『教育音楽』4月 伊藤完夫「音名と階名に就いて」『教育音楽』4月 草川宣雄「絶対音感教育の研究」『教育音楽』4-5月 小泉恰「聴覚の教育」『教育音楽』4-8月 笈田光吉『絶対音感及和音感教育法』
1937 (S 12). 4	文部省「教育審議会」発足	陸軍防空学校「音感教育ニ関スル調査問題」
1937 (S 12). 4		菰田中将「陸軍防空学校長の堺市に於ける音感教育実現に就て」
1937 (S 12). 7		井上武士『音楽精義』
1937 (S 12). 12		文部省『ウタノホン上 教師用』『うたのほん下 教師用』 日本放送協会編『国民学校芸能科音楽指導解説』 座談会「国民学校における聴覚訓練教育」『音楽倶楽部』8月 佐藤吉五郎『和音感教育』 下総皖一『音楽倶楽部』8月 北村久雄『和音感覚訓練の実際』 小原国芳「国防と音楽」『教育音楽会報』 山口保治『国民学校と家庭に於ける聴覚訓練』 坂本栄三『聴覚訓練』 二葉薫『音感教育』 小松耕輔「芸能科音楽の諸問題」『音楽教育』4月 古武善松『村の音楽教育』 文部省『初等科音楽一 教師用』『初等科音楽二 教師用』
1940 (S 15). 6	「国民学校令」発足 「聴覚訓練準備調査会」の 設置 (～1944年夏まで)	文部省『初等科音楽三 教師用』『初等科音楽四 教師用』
1940 (S 15). 10		
1941 (S 16). 4		
1941 (S 16). 6		
1941 (S 16). 8		
1941 (S 16). 9	「師範教育令」改正 「師範学校規定」制定 「師範学校教科教授及修 練指導要目」制定	
1942 (S 17). 1		
1942 (S 17). 2		
1942 (S 17). 3		
1942 (S 17). 4		
1942 (S 17). 5		
1942 (S 17). 8		
1943 (S 18). 3		
1943 (S 18). 4		
1943 (S 18). 5		

出典 河口道朗「十五年戦争と音感教育」『音楽教育研究』1974年, 木村信之『音楽教育の証言者たち上 戦前を中心に』1996年, 近藤幹雄「国民学校芸能科音楽教師用書の成立」『季刊音楽教育研究』1983年, 文部省『学制百年史(資料編)』1972年から作成。その他, 筆者が国立国会図書館で入手した資料も加えている。

¹ 文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943(高知大学附属図書館蔵)。

² 石川謙代表『近代日本教育制度史料』第二巻, 大日本雄弁会講談社, 1956年, 235頁。

³ 石川謙代表『近代日本教育制度史料』第五巻, 大日本雄弁会講談社, 1956年, 570-571頁。

⁴ 1931(昭和6)年「師範学校教授要目改正」。なお, 本科第二部については, 「本科第一部ニ於ケル教授事項ニ就キ適宜斟酌シテ之ヲ課スベシ」と規定されている(教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』第七巻, 教育資料調査会, 1939年(1964年重版使用), 755頁)。

⁵ 石川『近代日本教育制度史料』第五巻, 前掲書, 570-571頁。

⁶ 1943(昭和18)年の「師範学校教科教授及修練指導要目」では, 本科第3学年に「国民学校芸能科音楽ニ関スル研究」が

- 置かれている（文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943年，169頁）。
- 7 河口道朗「十五年戦争と音感教育——「教学刷新」下の学校音楽の変質と「音感教育」の問題を中心に」『音楽教育研究』2月号第17巻第2号，音楽之友社，1974年，63-75頁。河口道朗「軍国主義と音楽教育」『小学校音楽教育講座 第2巻 音楽教育の歴史』音楽之友社，1983年，78-93頁。
 - 8 河口「十五年戦争と音感教育」，前掲書，72頁。
 - 9 同上。なお，河口は，松久義平「芸能科に就いて」日本放送協会編『文部省国民学校教則案説明要領及解説』1940年，を引用している。
 - 10 河口道朗「軍国主義と音楽教育」，前掲書，90頁。
 - 11 水島昭男「『国民学校』時代の音楽教育」『音楽教育学』第3号，日本音楽教育学会，1973年，90-92頁。
 - 12 佐藤敏雄「国民学校の音楽教育」『秋田大学教育学部研究紀要 教育科学』第二十七集，1977年，167-173頁。
 - 13 宮瀬重美「『国民学校』時代の音楽教育について」『埼玉大学紀要 教育学部（増刊）』第33巻，1984年，176-179頁。
 - 14 菅道子『『ウタノホン上』『うたのほん下』『初等科音楽』『日本音楽教育事典』音楽之友社，2004年，52-53頁。
 - 15 菅道子「国民学校における芸能科音楽のカリキュラム編成——明石女子師範学校附属小学校の「研究授業案」を事例として」『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』第54集，和歌山大学教育学部，2004年，115頁。
 - 16 国民学校における聴覚訓練に関する先行研究としては，宮瀬重美（1984），平井啓（1995），山本文茂（1999），赤井励（2000），本田佐保美他（2003），村上康子（2004），中里南子（2004），菅道子（2004）等が挙げられる。
 - 17 足羽章（1912～），コロンビア教育レコードの制作。1933（昭和8）年鳥取県師範学校卒業後，東京音楽学校甲種師範科入学。1936（昭和11）年同校卒業後，和歌山県立粉河高等女学校教諭となる。1939（昭和14）年日本コロンビアに入社，教育レコードの制作に当たる（木村信之『音楽教育の証言者たち 上 戦前を中心に』音楽之友社，1986年，145頁）。
 - 18 佐々木基之（本名幸徳，1901～），和音感教育と合唱指導の先駆。1924（大正13）年東京音楽学校乙種師範科卒業後，東京市小石川区（現文京区）金富小学校に勤務（木村，前掲書，167頁）。
 - 19 佐藤吉五郎（1902～1991），堺市における和音感教育の推進。1921（大正10）年秋田県師範学校卒業後，教職に就く。1923（大正12）年東京音楽学校甲種師範科入学，1926（大正15）年卒業，岡山県女子師範学校教諭となる。1934（昭和9）年大阪府堺市視学に転出。1943（昭和18）年海軍教授となり，神奈川県久里浜の対潜学校に赴任（木村，前掲書，187頁）。
 - 20 橋本清司（1906～1991），「聴覚訓練準備調査会」での活動。1926（大正15）年奈良県師範学校卒業後，小学校に勤務。1930（昭和5）年東京音楽学校甲種師範科入学，1933（昭和8）年卒業後，東京盲学校へ勤務。1941（昭和16）年東京府立第一高等女学校へ転じる（木村，前掲書，223頁）。
 - 21 本多佐保美・藤井康之・中里南子・勝谷祥子・幸山良子「誠之国民学校における音楽授業の諸相——学校所蔵文書とアンケート調査にもとづく実践史の試み」『音楽教育学』第33-2号（通巻66号），日本音楽教育学会，2003年，1-8頁。村上康子「高遠国民学校・誠之国民学校における和音聴音」本多佐保美代表『音楽教育史研究における制度・教師・学習者の関係性の探究——国民学校時代の音楽教育体験者の聞き取り調査に基づいて』平成13～15年度科学研究費補助金研究成果報告書，2004年，53-56頁。中里南子「学齢簿に見られる音感に関する記述」本多佐保美代表『音楽教育史研究における制度・教師・学習者の関係性の探究——国民学校時代の音楽教育体験者の聞き取り調査に基づいて』平成13～15年度科学研究費補助金研究成果報告書，2004年，57-58頁。
 - 22 西島央「児童からみた国民学校芸能科音楽——音楽教育の歴史の読み直しに向けて」『音楽教育研究ジャーナル』第14号，東京芸術大学音楽教育研究室，2000年，12頁。
 - 23 本多佐保美「国民学校期における音楽教育の受容——東京女高師附属国民学校と青森市立新町国民学校の卒業生へのインタビュー調査に基づいて」『音楽教育研究ジャーナル』第14号，東京芸術大学音楽教育研究室，2000年，40頁。
 - 24 資料1「音感教育ニ関スル調査問題」（昭和15，6 陸軍防空学校），資料2「陸軍防空学校長の堺市に於ける音感教育実現に就て」（昭和15，6 菰田中将），資料3「聴覚訓練準備調査会」（昭和16年度内に於ける調査研究事項），資料4「聴覚訓練準備調査会」（自昭和17年4月至昭和19年3月），資料5「第35回会合」，資料6「第39回会合」，資料7「聴覚訓練に関する準備調査会の経過報告（案）」，資料8「覚書」。
 - 25 その他，以下の先行研究がある。沢崎眞彦「『固定ド』・『移動ド』唱法の変遷——わが国の音楽教育界の動きを中心に」『音楽教育学』第16号，日本音楽教育学会，1986年，84-91頁。
 - 26 河口「軍国主義と音楽教育」，前掲書，90頁。なお，河口は，大阪府天王寺師範学校内，社団法人友松会主事，東捨三郎編『国民学校精鋭附録 文部省国民学校講習の実際』東洋図書，1940年。
 - 27 井上武士『国民学校芸能科音楽精義』教育科学社，1940年，215頁。
 - 28 同上，215-216頁。
 - 29 関係する資料としては以下のものが挙げられる。大阪府天王寺師範学校内社団法人友松会東捨三郎編『国民学校精説附録 文部省国民学校講習の実際』東洋図書，1940年。文部省『国民学校教則案説明要領及解説』日本放送出版協会，1940年。文部省『国民学校教科書編纂趣旨解説』日本放送出版協会，1941年。
 - 30 井上，前掲書，216頁。
 - 31 長浜功『国民学校の研究——皇民化教育の実証的解明』明石書店，1985年，97頁。
その他，佐藤幹男『近代日本教員現職研修史研究』風間書房，1999年，387-395頁がある。
 - 32 東京音楽学校同声会『同声会報』第257号，1940年，2-3頁。

- 33 岡山県第二岡山中学校（現、岡山県立岡山操山高等学校）卒業後、1938（昭和13）年4月に、東京音楽学校甲種師範科へ入学。1941（昭和16）年3月、東京音楽学校を卒業、香川県師範学校へ勤務。1944（昭和19）年12月、岡山県第一岡山高等女学校（現、岡山県立岡山操山高等学校）へ移る。1951（昭和26）年、岡山大学教育学部へ変わり、現在、岡山大学教育学部名誉教授。筆者は2003年10月から継続的に聞き取り調査を行っている。
- 34 香川県師範学校附属小学校高等科卒業後、1937（昭和12）年4月、香川県師範学校本科第一部へ入学。1942（昭和17）年3月、香川県師範学校本科第一部を卒業。その後、香川県の義務教育学校の教員を務める。師範学校在学中、1937（昭和12）年度から1940（昭和15）年度まで、鈴木武五郎氏、1941（昭和16）年度、金光武義氏の音楽の授業を受ける。2005年3月16日、於：全日空ホテルクレメント高松。
- 35 高等小学校卒業後、1943（昭和18）年4月、香川師範学校予科へ入学。1945（昭和20）年4月、本科へ進み、1948（昭和23）年3月、香川師範学校本科を卒業。その後、香川県の義務教育学校の教員を務める。師範学校在学中、鈴木武五郎氏の音楽の授業を受ける。2004年5月9日、2004年9月28日於：渋谷邸（香川県高松市）。
- 36 『師範学校教科教授及修練指導要目』では「歌唱」「聴覚訓練」「器楽」「指揮法」「音楽理論」「鑑賞」「音楽史」「国民学校芸能科音楽ニ関スル研究」の領域ごとに内容が示されている。
- 37 『中学校教科教授及修練指導要目』（文部省訓令第二号、昭和18年3月25日）中等学校教科書、1943年。
- 38 『高等女学校教科教授及修練指導要目』（文部省訓令第三号、昭和18年3月25日）中等学校教科書、1943年。
- 39 文部省『師範音楽 本科用巻一』師範学校、1943年。『師範音楽 本科用巻一』には、「基本練習」の項があり、「発声練習」（114頁）「音程練習」（115-116頁）「二部合唱」（117-121頁）「三部合唱」（122頁）の練習曲が掲載されている。これらは、『師範学校教科教授及修練指導要目』の「一、歌唱（一）基本練習」に該当する。
- 40 文部省『師範器楽 本科用巻一』師範学校教科書、1943年。ピアノ、オルガン奏法のための教科書。「右手練習」（3頁）と「左手練習」（4頁）の項の一部分では、階名ではなく音名が振ってある。
- 41 同声会編集部『同声会報』第264号、1943年。
- 42 同声会編集部『同声会報』第255号、1940年。
- 43 同声会編集部『同声会報』第256号、1940年、26頁。
- 44 藤田敏彦（主査）、田辺尚雄（副主査）、井上武士、城多又兵衛、小松耕輔、小出浩平、颯田琴次、下総覚三、橋本国彦、橋本清司、松島彝。この中で橋本国彦は辞任し、1943（昭和18）年9月佐藤吉五郎を追加嘱託、城多又兵衛は1944（昭和19）年3月応召になり、その後は委員会を欠席（井上武士「音名問題のいきさつ」あの日あの頃『教育音楽 小学版』12月号、音楽之友社、1963年、47頁）。
- 45 小松耕輔、松島彝、井上武士、橋本国彦（1941年に辞任、後任は城多又兵衛）、下総皖一、小林愛雄、林柳波（井上武士「教材・教科書にみる明治一〇〇年の歩み」『音楽教育研究』第4号、音楽之友社、1968年、55頁）。
- 46 同声会編集部『同声会報』第257号、1940年、2頁。
- 47 同上。
- 48 同上。
- 49 同声会編集部『同声会報』第257号、1940年、19頁。
- 50 同声会編集部『同声会報』第260号、1941年、18頁。
- 51 供田武嘉津『日本音楽教育史』音楽之友社、1996年、372頁。
- 52 文部省『ウタノホン上 教師用』日本書籍、1941年。
- 53 城多又兵衛「音名視唱と聴覚訓練の実際」日本放送協会編『国民学校芸能科音楽指導解説』日本放送出版協会、1941年、64-79頁。
- 54 同上、67-68頁。
- 55 同上、78-79頁。
- 56 真浄一雄「園田氏と音感教育」『音楽教育研究／4』特大号、音楽之友社、1968年、161-163頁。藤井綾「創られる天才——昭和初期の絶対音感教育」大阪大学大学院文学研究科日本学研究室編『日本学報』第23号、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室、2004年、103-125頁。
- 57 「学園で二つの大きな独創とも云ふべき試みをしたことは一つは器楽と唱歌とを並べて教授をしたこと、この教授に最も適して居る、固定ド唱法を採用したこと」（城多又兵衛「児童学園を顧みて」同声会編集部『同声会報』第223号、1936年、47頁）。「帰国後私の一つの仕事は上野の音楽学校に併置される児童学園を担当することだった。この仕事に音楽の早期教育と固定ド唱法の採用を主張し、先輩の反対もあったが、試験的にやれるようになり、次第に東京音楽学校も固定ド唱法を採用するようになった」（城多又兵衛「絶対音感教育の時代」『音楽教育研究／4』特大号、音楽之友社、1968年、159頁）。また、中野義見は、「当時、東京音楽学校の中には、児童学園という一般小学校の児童を課外に教える機関があったので、この研究実験はそこで行なわれていた」と述べている（中野義見「東京市における音感教育の経緯」『音楽教育研究／4』特大号、音楽之友社、1968年、156頁）。なお、上野児童音楽学園については、東京芸術大学百年史編集委員会・財団法人芸術研究振興財団『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』音楽之友社、2003年、1070-1122頁が詳しい。
- 58 沢崎、前掲書、86頁。
- 59 東京芸術大学百年史編集委員会編・芸術研究振興財団『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』音楽之友社、2003年、822頁。

木村信之『音楽教育の証言者たち上 戦前を中心に』音楽之友社, 1986年, 35頁。

60 乗杉嘉壽「聴覚訓練用レコード製作に就いて」『東京音楽学校監修聴覚訓練用レコード 指導解説書』コロンビア教育レコード, 1941年, 3頁。

61 座談会「聴覚訓練の諸問題——「聴覚訓練レコード」を中心に」『レコード音楽』8月号, レコード音楽社, 1941年, 43-55頁。

62 出席者: 井坂行男(文部省), 田辺秀雄(コロンビア洋楽部), 辻莊一(評論家), 牛山充(評論家), 野村光一(評論家), 足羽章(コロンビア教育), 佐野健児(本社側)。

63 足羽章は, 木村信之が行ったインタビューの中でも聴覚訓練用レコードについて言及している(木村信之『音楽教育の証言者たち上 戦前を中心に』音楽之友社, 1986年, 152-153頁)。

64 座談会「聴覚訓練の諸問題」, 前掲書, 51頁。

65 昭和館監修『SPレコード60,000曲総目録』アテネ書房, 2003年, においても日本コロンビア, 日本ビクター, 各社の聴覚訓練用レコードが掲載されている。

66 山口保治『国民学校と家庭に於ける聴覚訓練』照林堂書店, 1942年, 32-33頁。

67 倉田喜弘『日本レコード文化史』東京書籍, 1979年, 474-476頁。

68 筆者は, 初等科中学年用の「聴覚訓練(一)」(A-179), 「聴覚訓練(二)」(A-179), 「聴覚訓練(三)」(A-180), 「聴覚訓練(四)」(A-180), 「聴覚訓練(五)」(A-180), 「聴覚訓練(六)」(A-181), 「聴覚訓練(九)」(A-183), 「聴覚訓練(十)」(A-183)を所持。これらのSPレコードについては, 『SPレコード60,000曲総目録』の中にも掲載されていない。初等科高学年用が出ていたかどうかは現在のところ不明。

69 文部省『ウタノホン上 教師用』, 前掲書, 30頁。

70 「文部省は, 昭和16年の『ウタノホン』(上・下), 続いて17年の『初等科音楽』(1~4)の刊行に合わせて, 芸能科音楽の内容に関する講習会を開催し, 受講した県代表の教師たちは, その後県下の各区を巡回, 当然ながら芸能科音楽の目玉の一つともいえる和音感教育についても伝達講習を行っている」(供田, 前掲書, 372頁)。

金光氏のメモによると, 香川県師範学校では以下のように香川県下の国民学校教員を対象に「国民学校芸能科音楽講習会」が開催された。

・期間 1942(昭和17)年12月11日から1943(昭和18)年2月13日までの計10回。

(12/11, 12/18, 12/27, 1/8, 1/14, 1/21, 1/28, 2/4, 2/11, 2/13…試験)

・日程 1日に5時間の講習(全50時間)

・担当者 香川県師範学校音楽科教員

鈴木武五郎氏(30時間担当)…一般音楽常識, 聴覚訓練の理論と実際, 器楽, 教材研究(『うたのほん下』『初等科音楽二』)

金光 武義氏(20時間担当)…音楽理論(楽典, 和声学初歩), 教材研究(『ウタノホン上』『初等科音楽一』)

その他, 『昭和十八年四月 学校日誌 愛知第一師範学校』(愛知教育大学附属図書館所蔵)には, 1943(昭和18)年7月8日(木)に, 以下の記載がみられる。東京音楽学校の城多又兵衛が講師として招かれている。

庶務課事項

大詔奉戴日

勅書奉読ヲ举行

昭和十八年度国民学校職員講習会

指導者ノ講習会本校ニ於テノ開催

せらん(文部省国民教育局青少年教育課)主催

本日 習字(講師 田代其次)音楽(城多又兵衛講師)

71 故田山清美氏への聞き取り。2005(平成17)年3月16日(水), 香川県高松市の全日空ホテルクレメント高松1階喫茶において。

72 香川師範学校男子部本科・昭和23年3月卒同窓生『年表 わが香川師範時代』15頁。

73 文部省『うたのほん下 教師用』日本書籍, 1941年, 25-29頁。

74 2003(平成15)年10月22日(水), 於: 金光邸。

75 本多他「誠之国民学校における音楽授業の諸相」, 前掲書, 6頁。

76 『香川大学教育学部百年のあゆみ』と照合させた結果, 資料Ⅱ-6-5の1942(昭和17)年11月12日の「初等科第二学年芸能科音楽授業案」は, 高松の附属国民学校で実施された教育実習の際に書かれたものである。この実習の期間は, 10月19日から10週間で, 本科第2学年東組の生徒が参加した。なお, 附属国民学校における教育実習が終了後, 彼らは12月7日からの10日間, 「地方教育実習」に参加した(香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会編『香川大学教育学部百年のあゆみ』香川大学教育学部松楠会, 1989年, 110頁)。

77 文部省『うたのほん下 教師用』, 前掲書, 25-29頁。

78 香川師範学校男子部本科・昭和23年3月卒業生『年表 わが香川師範時代[昭和17年2月15日~昭和23年3月6日]』。

79 佐藤吉五郎『和音感教育』三喜堂, 1940年。

80 佐藤吉五郎「戦中の音感教育——現場からの証言」『日本の音楽教育』教育音楽別冊, 音楽之友社, 1975年, 76-79頁。なお, 海軍対潜学校については, 加藤省吾「耳で海を征く——海軍対潜学校訪問記」『音楽知識』第2巻9号, 日本音楽雑

誌, 1944 年, でも取り上げられている。

⁸¹ 千葉陸軍防空学校の監修のもとに, ボーイング B17D 重爆機, ロッキード・ハドソン重爆機, カーチス P40 戦闘機が, 高度によって爆音がどうちがうかを浅沼博のナレーションで吹き込んでいる。また同社は「B29 の爆音」(20 年 2 月) も発売する。が, そのころにはあの B29 の来襲を知るために, レコードを買う必要はなくなっていた(倉田, 前掲書, 475 頁)。

⁸² 倉田, 前掲書, 475 頁。

⁸³ 香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会編『香川大学教育学部百年のあゆみ』香川大学教育学部松楠会, 1989 年, 192 頁。

⁸⁴ 同上。

補 論

補論 戦前における音楽教員養成

1. 東京音楽学校における教育実習の実態：『同声会報』の記事と聞き取り調査から

本稿は、東京音楽学校甲種師範科における教育実習の実態について明らかにすることを目的とする。

音楽教員の養成は、他の教科と異なり、高等師範学校では行われていない。ちなみに東京音楽学校以外で、中等学校における音楽教員の無試験検定の許可を受けていたのは、東京女子高等師範学校、広島女子高等師範学校や私立の東京高等音楽学院、武蔵野音楽学校に限られていた¹。なお、表1-1には、東京音楽学校の教員養成組織を一覧にした。

表1-1 東京音楽学校における音楽教員養成組織

種 類	修業年限	目 的
甲種師範科	3～4年	師範学校、中学校、高等女学校の音楽教員養成（1918年以降、国語の免許状も可）。1900（明治33）年設置。
乙種師範科	1年	小学校唱歌教員養成。1900（明治33）年設置、1926（大正15）年2月生徒募集を中止。
第四臨時教員養成所	2年	師範学校、中学校、高等女学校の音楽教員養成。1922（大正11）年設置、1932（昭和7）年3月廃止。

出典 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編第二巻』音楽之友社、2003年から作成。

東京音楽学校甲種師範科は、1921（大正10）年に定められた「高等師範学校等卒業生服務規則」（大正10年4月26日文科省令第二十九号）の適用を受け、生徒たちには以下の「服務義務」が課せられていた²。

第二条 卒業生ハ卒業証書受得ノ日より左ノ期間引続き教育ニ関スル職務ニ従事スル義務ヲ有ス

一、学資ノ支給ヲ受ケタル者ハ修業年限ノ一倍半ニ相当スル期間

二、学資ノ支給ヲ受ケサル者ハ其ノ修業年限ノ二分ノ一ニ相当スル期間

山田昇は、「高等師範学校においては、教職的教養とりわけ教育実習が重視され、全体の教育計画の中で、重要な位置を占めていた」と述べる³。では、東京音楽学校甲種師範科における教育実習は、どのようなものであったのだろうか。

東京音楽学校師範科を取り上げた先行研究⁴はいくつかあるものの、音楽教員養成の具体的な実態に着目した研究は少なく、学科目としての「音楽教授法」や教育実習の内容は明らかにされていない。そのような中、『季刊音楽教育研究』（1988年春号第31巻第2号）の「私の学生時代を思う」の中で、当時の実態をかいま見ることができる。例えば、浜野政雄は、「教育学」や「音楽教授法」の学科目について、「その内容はお座成りだった」⁵と

述べ、また木村信之は「音楽教育の理論や教授法について、知りたいとはほとんど誰も思わなかったのではなかろうか」⁶と述べている。

その他、師範科の生徒の意識や実態についてより明確な証言を行っているのは、下総皖一である。彼は、東京音楽学校最後の卒業式の際に配布された『回顧特集号』（1952）の中で、「勉強の目的は本科の卒業生と力を競いたいのであつて、決して教壇にたつてより力の優れた教育者になりたいというためではない。これは実際一人や二人の例ではない。殆ど全部なのである」と指摘している⁷。

上記のことから、東京音楽学校師範科では音楽教育に対する生徒の意識は低く、「音楽教授法」や教育実習等が高等師範学校に比べて整備されていなかったのではないかと推測される。現に 1944（明治 19）年の「東京音楽学校規定」改正により、「音楽教授法」は正規の学科目には含まれず、「増課」の中で扱われるようになる⁸。

そこで本稿では、次の方法を通して東京音楽学校における教育実習の実態を明らかにしたい。

- 1) 「東京音楽学校規定」における教育実習に関する条項の検討。
- 2) 東京音楽学校の同窓会組織＜同声会＞が編集・発行する『同声会報』における教育実習関係記事の検討。
- 3) 東京音楽学校甲種師範科 1941（昭和 16）年 3 月卒業生対象に実施した聞き取り調査記録、アンケート調査の分析。
- 4) 実習校の一つである本郷区昭和尋常小学校（現、文京区立昭和小学校）を事例分析。授業実習の全体計画を示した「学習指導案」や研究授業の際の「教案」、写真資料から教育実習における音楽の授業についての考察。

1) 「東京音楽学校規定」に見る教育実習

まずは、カリキュラム等が規定されている「東京音楽学校規定」において教育実習はどのように定めてあったのかをみてみたい。表 1-2 に示したように、1900（明治 33）年から 1908（明治 41）年の学科課程⁹では、「唱歌教授法」の学科目の中に「実地授業若干時」という記載があった。その後、1909（明治 42）年に改正され、削除されている。再び学科課程に教育実習に関連する文言が登場するのは、4 年制の甲種師範科が誕生する 1942（昭和 17）年である。「学則」第十条には「第四学年第三学期ニ於テハ授業実習ヲ行フ」という備考が加えられた。

しかし、実際には規定上のみで成立したに過ぎなく、現実には実施されていない。表 1-3 の下線部分に示したように、4 年制になったというものの、修業年限が半年短縮されている。また、1942（昭和 17）年入学生が、第 4 学年となる 1945（昭和 20）年には、「決戦教育措置要綱」が出され、授業が停止されている¹⁰。とても教育実習を実施する余裕はない。

ところで、1900（明治 33）年の「東京音楽学校規定」には、甲種師範科の生徒らが、乙種師範科の授業を分担するという規定が見られる¹¹。再度、表 1-2 をみると、

第十五条では、

乙種師範科ノ学科目中唱歌，オルガン及学理ノ教授ハ甲種師範科第三年生及本科第三年生ニシテ教育学及教授法ヲ修メタル者ヲシテ分担セシメ本科教員之ヲ監督シ他ノ学科ハ本校教員之ヲ教授ス，

と規定されている¹²。

1909（明治 42）年，東京音楽学校規定は大幅に改正され，上記の第十五条の内容は削除される¹³。しかし，1912（明治 45）年度から 1913（大正 2）年度まで，授業補助者として嘱託勤務をした大和田愛羅は，乙種師範科が置かれていた分教場について次のように回想する¹⁴。

本科生の教育学受講者は毎年 3 年生になると 2 学期頃から実習生として 1 週間ずつ出張し，当時の乙種師範科生に唱歌を主として指導実習をしたものです。主事さんは国語の先生鳥居枕先生でした。時々私共の授業振りをご覧になつて色々にご注意を戴いたものでした。

1926（大正 15）年 3 月，乙種師範科は生徒募集を中止した。このときに出された以下の説明にも，乙種師範科が実地授業の場として継続して利用されていたことが記されている¹⁵。

乙種師範科ハ甲種師範科及本科三学年生徒ノ実地授業ヲ行ハシムル為ニ設置シタルモノナルモ近来乙種師範科生徒ノ学力大ニ進歩シ，教生ヲシテ授業ヲ担任セシムルノ不適當ナルヲ認メタルニ依リ本年度ハ乙種師範科生徒ノ募集ヲ中止シ甲種師範科生徒ヲ増募シタリ，

表 1・2 「東京音楽学校規定」における教育実習に関する条項

年	「東京音楽学校規定」における教育実習に関する条項
1900（M33）	第十三条「唱歌教授法」の第三学年の欄，「実地授業若干時」 第十五条「乙種師範科ノ学科目中唱歌，オルガン及学理ノ教授ハ甲種師範科第三年生及本科第三年生ニシテ教育学及教授法ヲ修メタル者ヲシテ分担セシメ本科教員之ヲ監督シ他ノ学科ハ本校教員之ヲ教授ス」
1902（M35）	第十三条「唱歌教授法」の第三学年の欄，「実地授業若干時」
1903（M36）	第十三条「実地授業ヲ課スルトキハ他ノ学科目ノ教授時数若干ヲ減シテ之ニ充ツルコトアルベシ」
1909（M42）	上記の「実地授業」に関する条項は，削除される。
1942（S17）	第十条「修業年限四箇年ノ甲種師範科第四学年第三学期ニ於テハ授業練習ヲ行フ」

出典 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』音楽之友社，1987 年，『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』音楽之友社，2003 年から作成。

表 1-3 戦時体制化に伴う東京音楽学校甲種師範科の修業年限短縮

	入学	卒業	修業年限	備考
三年制	1938 (S13) 年4月	1941 (S16) 年3月	3年	大学学部等の在学年限の昭和16年度臨時短縮に関する省令 大学学部等の在学年限の昭和17年度臨時短縮に関する省令 大学学部等の在学年限の昭和18年度臨時短縮に関する省令 大学学部等の在学年限の昭和19年度臨時短縮に関する省令
	1939 (S14) 年4月	1941 (S16) 年12月	2年9ヶ月	
	1940 (S15) 年4月	1942 (S17) 年9月	2年6ヶ月	
	1941 (S16) 年4月	1943 (S18) 年9月	2年6ヶ月	
	1942 (S17) 年4月	1944 (S19) 年9月	2年6ヶ月	
四年制	1942 (S17) 年4月	1945 (S20) 年9月	3年6ヶ月	決戦教育措置要綱
	1943 (S18) 年4月	1947 (S22) 年3月	4年	
	1944 (S19) 年4月	1948 (S23) 年3月	4年	
	1945 (S20) 年4月	1949 (S24) 年3月	4年	
	1946 (S21) 年4月	1950 (S25) 年3月	4年	
	1947 (S22) 年4月	1951 (S26) 年3月	4年	
	1948 (S23) 年4月	1952 (S27) 年3月	4年	

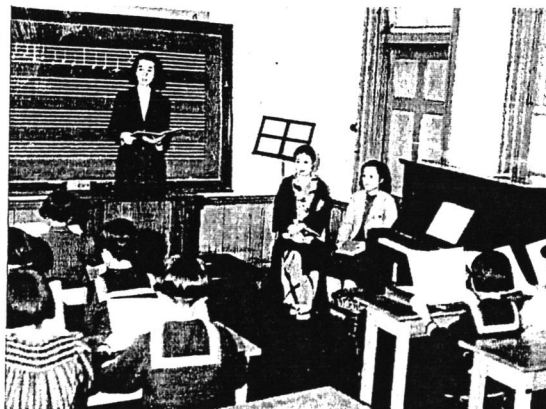
出典 『同声会会員名簿』東京芸術大学音楽学部同声会、1999年。文部省『学制百年史』1972年。

注 下線は筆者による。

その他、1933（昭和8）年6月に開園した＜上野児童音楽学園＞においても教育実習が行われていた¹⁶。学園の機能として、「東京音楽学校生徒の音楽教育に関する実地練習に提供すること」が掲げられ、東京音楽学校の附属学校としての役割が含まれている¹⁷。上野児童音楽学園の園長であり、東京音楽学校の校長でもある乗杉嘉壽は、次のように述べている¹⁸。

本校には師範科なる制度があるので、中等教員を養成する上に、その教授法の実習上必要なる対象として、ここに新たに案出されたものが、即ち本園であつた。もとより大分前に、本部本省に対して、予算請求の際、特殊の音楽高等女学校案を提出したこともあるが、経済的に学制上の関係で本省の容るる所とならなかつたのである、

このように東京音楽学校では附属学校の代わりに、乙種師範科（1900～1927年）や上野児童音楽学園（1933～1944年）が、甲種師範科の生徒と本科の教員免許所得希望生徒の教育実習の場として活用されている。佐野靖は、甲種師範科と乙種師範科の関係について、重層構造を持つ音楽教員養成制度が確立され、学校段階別の教員格差を生み出したことを問題視している¹⁹。上野児童音楽学園については、音楽の早期英才教育を目的としていたため、この種の問題は見られない²⁰。



出典 「卒業アルバム」東京音楽学校甲種師範科昭和16年3月卒業
写真1-1 上野児童音楽学園における教育実習

2) 『同声会報』からみた教育実習

表 1-4 は、東京音楽学校同声会『同声会報』から教育実習関係の記事を抽出して作成したものである。

1940（昭和 15）年では「各校委託教育実習」という用語が使用されている。なお、『同声会報』では、1934（昭和 9）年から 1939（昭和 14）年の間については、教育実習に関連する記事が掲載されていない。しかし、教育実習が中止されたという記事もないため、何らかの形で継続されていたと推察される。

表 1-4 『同声会報』中の教育実習関連記事

発行年	号	頁	記事名	期間	実習校	備考
1931（S6）	169	14-15	実地授業及び批評会	1/28 2/2 2/5	東京府立一中、東京第五高女 東京府青山師範、東京府女子師範 日本橋城東小、総批評会	
		19	実地授業に就ての礼状			
1932（S7）	180	20-21	実地授業の練習	1/25 1/28 2/2 2/5 2/6	日本橋城東小、本郷誠之小 府立三中、府立第五高女 山谷堀小、常盤小 青山師範、東京女子師範 総批評会	代表者（師範科 3 年、 本科 3 年、臨時教員養成所）が研究授業を行い、岡野教授、草川講師、沢崎教授が指導
1933（S8）	191	21	唱歌教授練習	1/24 1/27 1/30 2/8 2/9	本郷誠之小（本科、師範科 3 年男） 本郷眞砂小（本科、師範科 3 年女） 浅草金龍小（師範科 3 年男） 浅草山谷堀小（師範科 3 年女） 日本橋常盤小（本科 3 年男） 日本橋城東小（本科 3 年女） 小石川金富小（師範科 3 年男） 本郷昭和小（師範科 3 年女） 総批評会	
1933（S8）	199	41	唱歌教授参観	12/8	府立第三高女（3 年男、岡野指導） 府立第六高女（3 年女、草川指導）	本科、師範科 3 年生徒
1940（S15）	256	26	音楽教授法特別講義			師範科 3 年生徒
			各校委託教育実習	9/24-30	本郷区昭和尋常小学校、府立第六中学校、府立第五高等女学校	
1941（S16）	260	13	授業参観	6/26	東京高等師範学校（本科、師範科 3 年男、橋本引率） 東京府女子師範学校（本科、師範科 3 年女、下総引率）	

表 1-4 から指摘できる特徴は、次の 3 点である。

- 1) 教育実習の期間が数日から 1 週間というように短い点である。教育実習に 1 学期間充てていた高等師範学校や女子高等師範学校とは比べものにならないほど短い。
- 2) 最終学年の生徒が履修している点である。『同声会報』の記事をみる限り、1933（昭和 8）年までの教育実習では、師範科だけではなく教員免許の取得を希望する本科の生徒も一緒に参加している。1932（昭和 7）年 3 月まで第四臨時教員養成所（以下、臨時養成所、と略記）の生徒が在籍しているため、1932（昭和 7）年の教育実習では彼らの参加もみられる。なお、この年の研究授業担当する代表生徒の内訳は、臨時養成所：9 名、

師範科：7名，本科：6名である。

- 3) 1931（昭和6），1932（昭和7），1933（昭和8）年においては，授業実習終了後，批評会が行われ，なおかつ最終日には総批評会が開催されている点である。乗杉校長自ら授業を巡視し，総批評会において講評をしている。

以下は，1933（昭和8）年の総批評会における乗杉校長の講評である²¹。

総批評会に於ける注意すべき事を二三摘出すれば

- 一，教案の作成及び教授法は逐次良好になり本年は概して良好であつた。
- 一，教案作成にあたりて対象たる児童の学力程度を心得て，しかも授業中その教案にのみ（時間的にも）拘束せられ，その結果実際の教授を疎にせぬこと。
- 一，児童や生徒に対する教室内での教授者としての態度に注意し教材をよく吞み込み従つて伴奏もマスターしておいて，ピアノや譜面にのみ拘束されないで児童を教へるといふ積極的態度に出る様に心がけること。
- 一，児童に対し愛と熱とをもつて人格的にも直面すること。

授業実習では教案が作成され，指導技術や教師としての態度について事細かに指導されている。乗杉校長の指摘は，唱歌教授法の権威者である青柳善吾²²，工藤富次郎²³の見解と共通する。当時の唱歌教授法の動向を受けた発言といえる。

3) 聞き取り調査とアンケート調査から明らかになった教育実習

(1) 調査の概要

教育実習に関する文献資料が乏しいため，甲種師範科 1941（昭和 16）年 3 月卒業生を対象に聞き取り調査²⁴，アンケート調査²⁵を行った。1941（昭和 16）年 3 月卒業生を調査対象者にした理由は，次の通りである。

- 1) 国民学校制度が発足する 1941（昭和 16）年に東京音楽学校甲種師範科を卒業したため，制度変革，教科の再編の一番影響を受ける時期に学生生活を送り，就職していった点。
- 2) 女子生徒が多かった甲種師範科において，男子と女子が半々で入学した画期的な学年である点（図 1-1）。
- 3) 1941（昭和 16）年 3 月の卒業生は，軍事教練の実施等，多少の戦争の影響を受けたというものの，修業年限は 3 年間保証され，比較的落ち着いて勉学に励むことができた点。なお，1941（昭和 16）年度以降，修業年限の短縮が決定された（表 1-3）。
- 4) 戦後の音楽教育の中核的存在である供田武嘉津氏，浜野政雄氏，真篠将氏を輩出した学年である点。
- 5) 回想録の『組曲“集い”』（芸大・昭和 16 年組，1972 年発行）や卒業アルバムをはじめとした当時の資料が

比較的保存されている点。

図1-1には、入学前の出身校、図1-2には卒業後の勤務先を校種ごとに分類している。

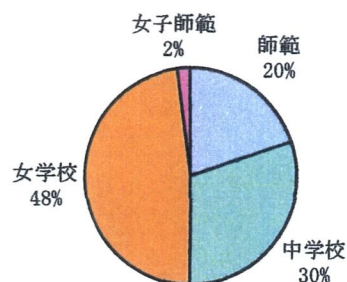


図1-1 1938（昭和13）年度甲種師範科新入生徒の出身校
（男子25人，女子25人，計50人）
出典 『同声会報』第241号，1938年，4-5頁から作成。

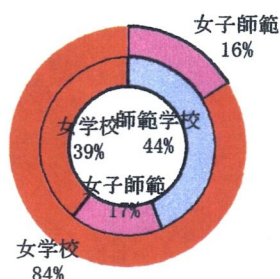


図1-2 1941（昭和16）年3月甲種師範科卒業生の勤務校
注 内円：男子23人，外円：女子25人
出典 『同声会報』第259号，1941年，26-28頁から作成。

（2）「各校委託教育実習」

聞き取り調査は、『同声会報』第256号（1940年）の26ページの記事に基づいて進めた。したがって，ここでもその記事を引用しながら進める。『同声会報』第256号では「各校委託教育実習」という記事名で以下の内容が掲載されている。これまでの実習と大きく異なる点は，第一に「教育実習」という用語が使用されている点，第二に1週間という連続した日程で実施されている点である。

1941（昭和16）年6月に発行された『東京音楽学校一覧 補遺』にも，「初メテ各校委託教育実習ヲ行フ」と記載されている²⁶。以下は，『同声会報』第256号の記事である²⁷。

一、期 間 九月二十四日（火）より同三十日迄一週間

一、教生配当 （師三）

本郷区昭和尋常小学校 凡十名

府立第六中学校 凡十五名

府立第五高等女学校 凡二十名

一、指導教官 下総助教授外関係教官

表 1-5 に示した聞き取り調査の結果においても実習校として本郷区昭和尋常小学校、府立第六中学校、府立第五高等女学校が挙げられ、記事の内容と一致する。師範学校では行われていない。表 1-5 から実習校の振り分けについては次のように実施されていることが分かる。

- 1) 府立第六中学校では男子生徒、府立第五高等女学校では女子生徒が実習を行っていた。
- 2) 本郷区昭和尋常小学校では、師範学校と女子師範学校の出身者以外の生徒が実習を行っていた。

表 1-5 聞き取り調査対象者

名前	出身校	実習校	勤務校	備考
安城政三氏	八尾中，天王寺師	第六中	沖縄県師	
金光武義氏	岡山二中	昭和小	香川県師	音楽会を行った
真篠将氏	山形師	第六中	愛知県第一師	
横田勇氏	茨城師	第六中	青森県女子師	
小林俊子氏	福井高女	昭和小	岡山県立林野高女	児童音楽学園でも実習した
滝沢美恵子氏	米沢高女	第五高女	北海道女子師	
内藤和子氏	東京五高女	昭和小	岐阜県立大垣高女	
秦祥子氏	京都一高女	第五高女	神奈川県女子師	
平山岸子氏	東京一高女	第五高女	栃木県宇都宮実践女	
水の上政子氏	尾道高女	第五高女	香川県女子師	

注 2005 年 6 月 7 日，「昭和 16 年 3 月卒業師範科級会，卒寿祝いのお集まり」出席者。

出身校は『同声会報』第 241 号，勤務校は『同声会報』第 259 号から作成。

（3） 「音楽教授法特別講義」

その他、『同声会報』第 256 号には「音楽教授法特別講義」に関する以下の記事が予告されている。

本校では今回本三，師三の音楽教授法の授業として音楽教育実践家の特別臨時講義を聴かせしめる事となし九月以降十二月迄にとりあへず市内左記諸氏を招する事となつた。

男 師（青山） 鳥居忠五郎氏

女 師 大和田愛羅氏

二部師（大泉） 小島喜久壽氏

中 学（府立六中）	水田 勝美氏
高 女（府立第五高女）	安藤 タカ氏
ブラスバンド（府立一商）	廣岡 九一氏
小学校（東京市視学）	中野 義見氏

『東京音楽学校一覧補遺』にも、「初メテ音楽教授法特別講義ヲ施行ス」と記載されている²⁸。

聞き取り調査の際、卒業生たちに上記の資料のコピーしたものを配布し確認をお願いした。しかし、残念ながら、「音楽教授法特別講義」に対して記憶がある人がいなかった。そこで、後日、「音楽教授法特別講義」の内容に限定せず、各講師についての印象等についてアンケート調査を行った。各講師ごとに自由記述で書いてもらった結果を一覧にしたものが表1-6である。

表1-6 「音楽教授法特別講義」の講師についてのアンケート結果 （回答者4名）

講師名	所属	アンケートの記述の内容
鳥居忠五郎	男師 青山	<ul style="list-style-type: none"> ・我々の世代では、長老的存在で、むしろ男性は師範学校の先生として習ってきたと思う。 ・個人的には知っている。先輩だから。しかし講義は受けていない。
大和田愛羅	女師	<ul style="list-style-type: none"> ・一度、講義に来てくれた。「女子校では男女関係に注意しなさい」と雑談的な講義。女師の生徒や卒業生の一部からは、大和田先生が生徒を不平等な扱いをする先生だという話を耳にした。
小島喜久壽	二部師 大泉	<ul style="list-style-type: none"> ・男生徒の元気さ、スポーツ系には熱心だが、音楽に向かう生徒はいない等々。 ・東京の第三師範学校（大泉師範学校）の音楽担当教諭としての講義でしたが、ヒットラーを礼賛して熱弁を振るったのが妙に今でも思い出される。
水田勝美	中学 府立六中	<ul style="list-style-type: none"> ・男性（東京音楽学校生徒）が授業参観に行ったので、内容は分からないが、六中は戦後、男声合唱が全国大会で優勝したのを切っ掛けに、今も60～70歳の当時のメンバーがく六声会>として2年に一度、発表会を行っている。戦前、戦中、男子校で専任の音楽教師がいたのは珍しく、地方の中学校（旧制）には音楽の専任教師はいなかった。女学校の先生が兼任で、主として式日唱歌や校歌を教えるくらいだった。 ・授業参観に訪問して、当時の中学校（男子のみの）の音楽授業の特殊性等について講話を聞き、その困難点や問題点等について質問したことを覚えている。
安藤タカ	高女 府立第五高女	<ul style="list-style-type: none"> ・第五高女の学校へ伺ったことは覚えているが、内容は覚えていない。 ・（昭和）15年は在学中で女性だけ、音楽科教授の実地授業見学に出掛けている。内容は授業参観だけと思う。 ・直接には存じ上げないが、女学校の音楽教育で立派な人。
廣岡九一	ブラスバンド 府立一商	<ul style="list-style-type: none"> ・ブラスバンドまでもてない段階の鼓笛隊について、指導を受けたように記憶。 ・廣岡先生は当時府立一商の音楽担当で吹奏楽の権威者だった。そして東京女高師（今のお茶の水女子大学）の附属で講師（非常勤）として吹奏楽を指導していた。廣岡先生は東京音楽学校時代、私の父の教え子だった関係で、長く指導を受けたが、このときの印象はあまり残っていない。
中野義美	小学校 東京市視学	<ul style="list-style-type: none"> ・この先生は小学校教育の方が専門だったと思うので、東京音楽学校に小学校教員の免状は取れなかったから、直接の講義は受けた覚えはなし。学外の指導（全国〇〇研究会のような形）で男性は小学校免許を持っている人が多かったので、講習会などあったかと思う。 ・小学校の音楽教育には熱心だった先輩。役人型の人だったよう。 ・このときの記憶は定かではないが、中野先生には私が愛知一師から東京市の永田町国民学校に移るときに採用試験をしていただいた先生。後、文部省の実験学校で、移動ド唱法の研究で活躍。指導要領の作成や音楽教育研究組織の構成等でも大変な協力支援を得た。

表1-6から講師について次の3点の特徴がつかめる。

- 1) 多様な校種から講師が招かれている点である。甲種師範科が養成目的とする師範学校、中学校、高等女学校はもちろんのこと、小学校や実業学校も含まれている。
- 2) 師範学校に関しては、男子師範、女子師範、第二部の3校の教員によって担当されている点である。このことによって、それぞれの師範における教育課程の特徴や生徒の実態等について知ることができる。
- 3) ブラスバンドに関する講義が用意されている点である。塚原康子によると、府立第一商業は、逗子開成中学と並んで1928（昭和3）年に関東地方の第一号の学校バンドが結成されたところである²⁹。1931（昭和6）年以後は、全国において学校バンドの結成が進む³⁰。甲種師範科において随意科目として「管楽」が開講されたのが、1934（昭和9）年である³¹。このような動向を受け、今回、ブラスバンドが「音楽教授法特別講義」の中に含まれたと考えられる。

4) 事例～本郷区昭和尋常小学校における教育実習の中での「唱歌」の授業

それでは、どのような教育実習が実施されていたのか。ここでは、資料として、1930（昭和15）年9月の教育実習に参加した金光武義氏（旧姓、見藤）³²による「学習指導案」「教案」、写真資料を利用し、本郷区昭和尋常小学校（現、文京区立昭和小学校。以下、昭和尋常小学校、と略記）における教育実習の実態の中でも「唱歌」の授業に着目して検討する。

（1）「学習指導案」「教案」

表1-7は、「第四週 学習指導案（唱歌科）」である。日付は、「自九月二十四日至九月三十日」とあり、『同声会報』に掲載されている期間と一致する。金光氏は、6年生に1時間《故郷》の授業を担当することとなっている。この授業の「教案」が、資料1である。昭和15年9月25日、第6学年合組対象。25日ということで、教育実習が始まって2日目にしてすでに授業実習が行われている。「要旨」や「区分」の項が空欄になっているというものの、授業の流れは示されている。

次に教材に着目する。主要教材は《故郷》³³で、既習教材として《滝》³⁴《東京市歌》³⁵、その他、鑑賞教材として、《交響曲トイ（玩具）》《交響曲第四番ニ長調（作品95の2）クロック（時計）》《交響曲サープライズ（驚愕）》³⁶が扱われている。《故郷》《滝》は、『新訂 尋常小学唱歌 第六学年用』³⁷に掲載されている。ここで強調すべきことは、歌唱活動のみで占められていた教科名が「唱歌」の時代でありながらも、鑑賞活動が取り入れられていることである。鑑賞指導が明文化されたのは、1941（昭和16）年の国民学校「芸能科音楽」発足以降であったから³⁸、昭和尋常小学校では比較的早い時期に蓄音器やレコードといった環境が整えられ、鑑賞指導が可能であったことがうかがえる³⁹。

指導の順序は、「既習教材滝ノ復習」「故郷を歌詞を附して練習」「階名にて故郷練習」「東京市歌復習」「レコード鑑賞」⁴⁰の5段階で構成されている。

次に主教材である《故郷》が置かれている。ここでは、歌詞唱の後に階名唱で練習を行っている。

ところで、「ハ、階名にて故郷練習」には、「黒板に譜をかく。その間生徒に階名で読譜練習をさす」という箇所があるように、一斉授業を進めていく過程で必要とされる指導技術が、配慮されている箇所も見られる。このような指導技術について、金光氏は、「東京音楽学校で指導されたのではなく、北村久雄や草川宣雄が著した教授法の本を自分で買って独学した」と述べている⁴¹⁾。

表 1-7 学習指導案

第 四 週 学 習 指 導 案 (唱歌科)				
		自九月二十日	至九月三十日	受持 認印
学年	題目及範囲	時間	準備	指導要項並注意事項
一 年				
二 年				
三 年				

学年	題目及範囲	時間	準備	指導要項並注意事項
四 年				
五 年				
六 年	故郷	1 時	唱歌帳 1コート Nagata Symphonie (Joy)	既習教材能く復習 ハ 幸と幸の移り注 故郷 歌詞を讀せよ f. mf. p. mp. a 意義を明 曲想に注意 故郷を階名にて歌はせ 東京市歌を歌はせ レコードを鑑賞 支那曲 玩具
備 考				

第一覽表

東京市昭和尋常小學校

教案

昭和十五年九月二十日

本郷区 昭和尋常小学校 第三年合唱組
教員 見藤武義

一 教材 一 要旨 故郷

一 区分 1.

一 指導の順序 1. 既習教材の復習

1. 先づ一回ピアノにて一度通して弾く。(生徒は此曲を思い出す)
2. 女声のみ
3. 男声のみ
4. 伴奏を附し男女一組は 一番 二番 6. クラウド
5. 伴奏を附し男女一組は 一番 二番 6. クラウド
6. 故郷の歌詞を附して練習
7. 歌詞を讀み通して弾くと共に生徒に小声にてつづき歌はせよ。
8. 歌詞を讀み通して弾くと共に生徒に小声にてつづき歌はせよ。
9. 皆一組は 一番のみ
10. 皆一組は 一番のみ
11. 表情(思)をつけて三番を
12. 男声のみ
13. 女声のみ
14. 一人づつ唱はせよ。

二 東京市歌復習

三 レコード観賞 トイ交響音楽

ハイドン 時計の聲

ハ 階名にて故郷練習

1. 階名にて故郷練習
2. 階名にて故郷練習
3. 階名にて故郷練習
4. 階名にて故郷練習
5. 階名にて故郷練習
6. 階名にて故郷練習

(2) 写真資料

この写真1・2は、昭和尋常小学校における教育実習の場面を撮ったものである。ここで授業を担当しているのは、金光氏ではない（この写真では金光氏は参観者として写っている）。しかし、教育実習における「唱歌」の授業の様子を表している貴重な写真であるので、取り上げる。



出典 「卒業アルバム」東京音楽学校甲種師範科昭和16年3月卒業

写真1・2 昭和尋常小学校における教育実習

この写真から、当時の小学校における唱歌の授業の雰囲気や東京音楽学校の実習生たちの様子を感じ取ることができる。実習生たちは、スーツを着用し正装で参加している。

一方、以下の疑問点が挙げられる。ただし、この事例だけでは究明できませんので、今後の課題としたい。

- ・ 写真では女子の姿が見られない。当時の多くの初等学校の高学年では、男女別の学級編成が行われていたように、この写真の唱歌科の授業では男女別で行われていたのではないかと⁴²。しかし、先述の金光氏の授業では、男女が一緒に活動する教案が立てられていた。金光氏の教案（資料1）には「第六学年合組」とある。「合」というのは、男女合同ということの意味しているのではなかろうか。つまり、通常の教育活動では男女別の学級編成がなされ、必要に応じて男女合同で活動することがあったのではないかと。

(3) 昭和尋常小学校における教育実習の総括

金光氏は、教育実習の期間中、授業観察や授業実習の他、ミニコンサートが開かれたと回想する。ミニコンサートの出演者は、実習生の東京音楽学校の生徒である。声楽が得意な金光氏は、《児島高德》⁴³を独唱した。《児島高德》を選曲した理由について金光氏は、「小学校第5学年の教材で、既習曲であるということ。岡山出身のため、児島高德に関心があったこと」を挙げている。また、そのときの子どもたちの反応もすこぶるよかったと述べる。このように、昭和尋常小学校における教育実習では、単なる実地の場としての意味だけではなく、生の音楽鑑賞を提供する機会をも有していた。

譜例1 《児島高德》

出典 文部省『新訂尋常唱歌』第五学年用、1932年、60-63頁（海後宗臣編『日本教科書大系近代編第二十五巻 唱歌』1965年使用）。

児島高德



二、三、児島高德

船取山や杉坂と、
御あと慈ひて院の庄、
微衷をいかで聞えんと、
櫻の幹に十字の時、
天勾踐を空しうする矣れ、
時范蠡無きにしも非ず。

以上、昭和尋常小学校における教育実習を総括すると以下の点が挙げられる。

- 1) 1週間の実習期間の内、授業実習は一人1時間あるかないかである。実習内容の大部分は、観察が主体となっている。
- 2) 唱歌科の授業では、文部省『新訂 尋常小学唱歌』を使用した授業が展開された。唱歌科時代にもかかわらず、歌唱活動の他に鑑賞活動が取り入れられていた。音楽教室にはグランドピアノや蓄音器が設置されている。
- 3) 実習生の東京音楽学校生徒が演奏するミニコンサートが開かれ、子どもたちの音楽鑑賞の機会が設けられている。

今回、金光氏の授業記録や、その後の批評会の内容に関する資料を入手することができなかった。参考までに府立第六中学校における教育実習での批評会の写真を紹介する。写真1-3では東京音楽学校の下総助教授が加わり、円になって会を進めている。下総助教授の参加は、前述の『同声会報』第256号の記事と一致する。



出典 「卒業アルバム」東京音楽学校甲種師範科昭和16年3月卒業

写真1-3 府立第六中学校における教育実習の批評会

まとめ

本稿では、東京音楽学校甲種師範科における教育実習の実態について検討を行った。明らかになったことは以下の通りである。

- 1) 1909（明治42）年から1941（昭和16）年の間の「東京音楽学校規定」では、教育実習の規定が削除されていた。1942（昭和17）年の「学則」第十条には「第四学年第三学期ニ於テハ授業実習ヲ行フ」と規定されたとはいうものの、実際には修業年限の短縮に伴い、実施できなかった。
- 2) 『同声会報』では1931（昭和6）年、1932（昭和7）年、1933（昭和8）年、1940（昭和15）年、1941（昭和16）年の教育実習に関する記事が掲載されている。したがって、上記1)で指摘した教育実習の規定が削除されていた期間においても教育実習が行われていたことが分かった。
- 3) 1940（昭和15）年の教育実習は、「各校委託教育実習」と呼ばれ、1週間という連続した日程で行われた。東京音楽学校の生徒たちは、昭和尋常小学校、府立第六中学校、府立第五高等女学校に分かれて実習を行っていた。教育実習の期間は、高等師範学校と比べて少ないとはいうものの、教案作成、批評会は行われていた。

今後は、聞き取り調査の対象者の拡大を図り、中学校や高等女学校で行われた教育実習の実態ならびに1940（昭和15）年度以外の教育実習の実態について調査を進めたい。

参考年表 1931（昭和6）年から1945（昭和20）年における東京音楽学校・師範学校・小学校（国民学校）

年	東京音楽学校	師範学校	小学校（国民学校）
1931（S6）		「師範学校規定」全面改正（本科第二部の修業年限を2年とする。基本科目・増課科目を設ける） 「師範学校教授要目」を全面改正	
1932（S7）			文部省『新訂尋常小学唱歌』発行
1933（S8）	上野児童音楽学園を設置		
1936（S11）	邦楽科開設 山田喜志教官着任（音楽教授法） ～1942年		
1937（S12）		「師範学校教授要目」を改訂	
1940（S15）			「国民学校教員講習会実施要綱」を制定 「国民学校令」公布
1941（S16）	修業年限短縮令 本科，甲種師範科，邦楽科の繰り上げ卒業式挙行		文部省『ウタノホン上』発行 文部省『うたのほん下』発行
1942（S17）	4年制甲種師範科の設置 最高学年の繰り上げ卒業式 翌18年度の入学試験における外国語試験廃止令文部省より通達	師範学校を3年制専門学校程度にする昇格案を閣議決定	文部省『初等科音楽（一）』発行 文部省『初等科音楽（二）』発行
1943（S18）	最高学年の繰り上げ卒業式 男子生徒，陸軍および海軍に学徒出陣。女子生徒は各工場において勤労動員	「師範教育令」を改正（師範学校を官立にし，本科3年・予科2年の専門学校程度とする） 「師範学校規定」を制定 「師範学校教科教授及修練指導要目」「師範学校体錬科教授要目」を制定	文部省『初等科音楽（三）』発行 文部省『初等科音楽（四）』発行
1944（S19）	「東京音楽学校規定」改正（甲種師範科は「師範科」という名称に改正され，修業年限は4年） 戦時非常の際にかんがみ，日曜日にも授業を行う旨，文部省から通達 最高学年の繰り上げ卒業式 残留男子生徒陸軍軍楽隊に入隊	師範学校教育の戦時非常措置を通達	国民学校教育の戦時非常措置について通達
1945（S20）	「決戦教育措置要綱」を閣議決定 「戦時教育令」公布		

出典 『日本教科書大系近代編第二十五巻 唱歌』1965年。文部省『学制百年史（資料編）』1972年。『季刊音楽教育研究』春号第31巻第2号，1988年。『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』2003年。

¹ 上原一馬『日本音楽教育文化史』音楽之友社，1988年，273-274頁。大谷奨「中等教員無試験検定取り扱いの許可過程に関する研究——審査における復命書の視点」『日本教育史研究』第21号，日本教育史研究会，2002年，1-24頁。船寄俊雄，無試験検定研究会編『近代日本中等教員養成に果たした私学の役割に関する歴史的研究』学文社，2005年，416頁。

東京高等音楽学院については以下の研究が詳しい。

- ・ 渋谷久子「東京高等音楽学院の研究」『研究紀要』第22集，国立音楽大学，1988年，262-233頁。
- ・ 渋谷久子「東京高等音楽学院史の研究（二）」『研究紀要』第23集，国立音楽大学，1988年，196-74頁。
- ・ 渋谷久子「東京高等音楽学院・国立音楽学校史の研究」『研究紀要』第24集，国立音楽大学，1990年，230-208頁。

武蔵野音楽学校については以下の研究が詳しい。

- ・ 福井直秋伝記刊行会，加藤成之編『福井直秋伝』1969年。

² 教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』第七巻，教育資料調査会，1939年，507頁。

³ 山田昇「戦前における中等学校教員の目的養成——高等師範学校等における教職教育及び教育実習」日本教育学会教師教

- 育に関する研究委員会『教師教育の改善に関する実践的諸方策についての研究（第二次報告）』1980年、189-190頁。
- 4 東京音楽学校に関する先行研究としては、以下のものが挙げられる。
 - ・山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会、1967年。
 - ・浜野政雄「教員養成制度と音楽教育」『音楽教育研究』第4号、音楽之友社、1968年、69-81頁。
 - ・中山裕一郎「わが国における音楽教員養成の歴史」『季刊音楽教育研究』76年春号第19巻第2号、音楽之友社、1976年、78-87頁。
 - ・篠田弘「音楽・美術・体育の教員養成」仲新監修『教員養成の歴史』学校の歴史 第5巻、第一法規出版、1979年。
 - ・田甫桂三『近代日本音楽教育史Ⅰ』学文社、1980年。
 - ・玉川裕子「明治日本と西洋音楽——制度史からみた「美的受容」の成立」『比較文学・文化研究会』vol.2-1、1986年、31-49頁。
 - ・佐野靖「東京音楽学校と教員養成——その教育内容の変遷をめぐって」『季刊音楽教育研究』1988年春号第31巻第2号、音楽之友社、1988年、24-40頁。
 - ・坂本麻美子『明治中等音楽教員の研究——《田舎教師》とその時代』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士論文、2002年。
 - ・杉江淑子「近代日本の学校教育体制における専門的音楽家養成機能——歴史社会的アプローチの試み」『関西楽理研究X』関西楽理研究会、2003年、66-73頁。
 - ・瀧井敬子『漱石が聴いたベートーヴェン』中央公論新社、2004年。
 - その他、以下の文献を参照した。
 - ・乗杉惇『乗杉嘉壽文集』1995年。
 - ・浜野政雄著作編集委員会『浜野政雄評論集 戦後音楽教育は何をしたか』音楽之友社、1982年。
 - 5 浜野政雄「私の学生時代を思う」『季刊音楽教育研究』1988年春号第31巻第2号、音楽之友社、1988年、57頁。
 - 6 木村信之「私の学生時代を思う」『季刊音楽教育研究』1988年春号第31巻第2号、音楽之友社、1988年、59頁。
 - 7 東京芸術大学百年史刊行委員会・財団法人芸術教育振興財団『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編第二巻』音楽之友社、2003年、1537頁。
 - 8 同上、176頁。
 - 9 学科課程の出典は、東京芸術大学百年史刊行委員会・財団法人芸術研究振興財団『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編第一巻』音楽之友社、1987年、東京芸術大学百年史刊行委員会・財団法人芸術教育振興財団『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編第二巻』音楽之友社、2003年による。
 - 10 石川謙代表『近代日本教育制度史料』第7巻、大日本雄弁会講談社、1956年、273-274頁。
 - 11 坂本麻美子は「乙種師範科は、初等教員を養成する学科であるが、さらに、在学生による教育実習の場でもあった」と指摘する（坂本麻美子「東京音楽学校の青春——明治36年度～40年度入学生の修学状況からの考察」『桐朋学園大学研究紀要』第26集、桐朋学園大学、2000年、34頁）。
 - 12 東京芸術大学百年史刊行委員会・財団法人芸術研究振興財団『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編第一巻』音楽之友社、1987年、448頁（『東京音楽学校一覧 自明治三十三年至明治三十四年』39頁）。
 - 13 東京芸術大学百年史刊行委員会・財団法人芸術教育振興財団『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編第二巻』音楽之友社、2003年、11-21頁（『東京音楽学校一覧 自明治四十二年至明治四十三年』32-58頁）。
 - 14 同上、1540頁。
 - 15 東京芸術大学百年史刊行委員会・財団法人芸術教育振興財団『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編第二巻』音楽之友社、2003年、63頁（『昭和2年度東京音楽学校年報』）。
 - 16 上野児童音楽学園については、同上の『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編第二巻』1070-1119頁の中で取り上げられている。
 - 17 その他の学園の機能と卒業後の指導として、『同声会報』第193号、1933年、12-13頁に以下の点が列挙されている。
 - ・学園に於ける研究を発表し又は授業を公開して音楽教育の一般的指導機関とすること。
 - ・音楽演奏会研究教授等により児童の成績を公表し、児童の研究心及興味を助成すること。
 - ・在学中声楽又は器楽の成績優秀なるものは、卒業後東京音楽学校選科に入学せしめて、其技能を伸ばし得るやう指導すること。
 - 18 東京芸術大学百年史刊行委員会『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編第二巻』、前掲書、1099-1100頁。
 - 19 佐野靖「東京音楽学校と教員養成——その教育内容の変遷をめぐって」『季刊音楽教育研究』春号第31巻第2号、1988年、35、37頁。
 - 20 東京音楽学校甲種師範科を1941（昭和16）年3月に卒業した滝沢美恵子氏が、上野児童音楽学園出身者の者に聞いた話によると、上野児童音楽学園では次のような授業が展開されていた（2005年10月31日滝沢氏書簡から）。
 - ＜授業日＞
 - 尋常科 水曜午後3時半から 2時間
 - 土曜午後1時から 2時間
 - 高等科 月曜午後3時半から 2時間
 - 木曜午後3時半から 2時間

<内容>

・ピアノの個人レッスン

・歌は文部省唱歌の二部、三部合唱曲。《おぼろ月夜》のきれいなハーモニーを今でも覚えているとのこと。

・絶対音感訓練ということは知らされず、週2回の歌の授業中に和音ばかりでなく、メロディー聴音をやらされた。尋常科は「固定ド唱法」、高等科は「ドイツ音名唱法」だった。

21 同声会編集部『同声会報』第191号、1933年、21頁。

22 青柳善吾『音楽教育』東洋図書、1927年。

23 工藤富次郎『改革の途にある唱歌教授法要領（後編）』共益商社書店、1925年（1929年重版使用）。

24 2005（平成17）年6月7日（火）、於：KKR HOTEL OSAKA（大阪府大阪市）。「昭和16年3月卒業師範科級会」（卒寿祝いのお集まり）の場を借りて行った。対象者は、安城政三氏、金光武義氏、小林俊子氏、滝沢美恵子氏、内藤和子氏、秦祥子氏、平山岸子氏、真篠将氏、水ノ上政子氏、横田勇氏の10名。

25 「東京音楽学校・師範学校に関するアンケート調査」2003（平成15）年9月実施、対象者：東京音楽学校甲種師範科1941（昭和16）年3月卒業生6名（師範学校へ勤務）。6名中、5名から回答を得た。調査方法：2003年9月26日に開催された「昭和16年3月卒業師範科級会」の場を借りて、アンケート調査を依頼、回答は後日郵送された。

26 東京音楽学校『東京音楽学校一覧 補遺（自昭和十五年至昭和十六年）』1941年、2頁。

27 同声会編集部『同声会報』第256号、1940年、26頁。

28 東京音楽学校『東京音楽学校一覧 補遺（自昭和十五年至昭和十六年）』1941年、2頁。

29 塚原康子「軍楽隊と戦前の大衆音楽」青弓社ライブラリー20『プラスバンドの社会史』青弓社、2001年、115頁。

30 同上。

31 同声会編集部『同声会報』第201号、1934年、44頁。「此制度は我国の音楽学校の組織上からも又師範科生として一般に音楽上の知識や技能を習得する為にも必要なことで、卒業後地方に在つて各学校や青少年団等のオーケストラやプラスバンドの指導に当る上からは、是非管楽器取扱の経験を持たねばならぬといふことから、新設されたものである」。

なお、東京音楽学校本科に管楽器専攻が置かれたのは、1930（昭和5）年である（塚原、前掲書、103頁）。

32 1941（昭和16）年3月、東京音楽学校甲種師範科卒業後、香川県師範学校（1941年～1944年）、岡山県立岡山第一高等女学校（1944～1948年）等へ勤める。現在、岡山大学教育学部名誉教授。

33 高野辰之作詞、岡野貞一作曲。

34 長谷川良夫作曲、作詞者は不詳。

35 高田耕甫作詞、山田耕筰作曲。

36 《驚愕シンフォニーのアンダンテ》は、井上武士・黒沢隆朝『小学校唱歌教授資料集成』四学年用、共益商社書店、1936年、136-140頁、の中に掲載されている。ここでは、クーセヴィツキー指導、ボストン交響楽団「ビクター 7059」のレコードが紹介されている（136頁）。

37 文部省『新訂尋常小学唱歌』大日本図書、1932年。その他、文部省『新訂尋常小学唱歌 伴奏譜 第六学年用』第日本図書、1933年が出ていた。

38 国民学校令施行規則（文部省令第四号、昭和16年3月14日）第十四条「芸能科音楽ハ歌曲ヲ正シク歌唱シ鑑賞スルノ能力ヲ養ヒ国民的情操ヲ醇化スルモノトス（以下略）」（石川譲代表『近代日本教育制度史料』第二巻、大日本雄弁会講談社、1956年、235頁）。なお、この時期の鑑賞指導については、寺田貴雄「戦時期の鑑賞教育——鑑賞指導の明文化と、軍国主義的逸脱」音楽鑑賞教育振興会『音楽鑑賞教育』11月号、2001年、12-15頁、が詳しい。

39 嶋田由美は、1903（明治36）年の時点における東京府内、特に市内小学校について、唱歌室や楽器等の設備の充実さを指摘している（嶋田由美「小学校校歌制定に関する研究——明治後期における東京府内小学校校歌制定過程の分析を通して」『音楽教育学』第16号、日本音楽教育学会、1986年、24-25頁）。

40 「教案」には、「三、レコード鑑賞」と記されているけれども、「ホ、レコード鑑賞」が正しいと思われる。

41 北村久雄『新音楽教育の研究』厚生閣、1934年。

草川宣雄『現代教育学大系各科篇第二十二巻 音楽教授学』成美堂書店、1936年。

42 「戦前日本では、小学校高学年以上のすべての学校階梯が男女別学を前提として成立していた」（井上恵美子「男社会に参入した女性たち——中学校外国人女教員の場合」橋本紀子・逸見勝亮編『ジェンダーと教育の歴史』川島書店、2003年、79頁）。

43 文部省唱歌、岡野貞一作曲。文部省『新訂 尋常小学唱歌 第五学年用』大日本図書、1933年。

2. 音楽教員養成の独自性

最後に中等教員養成の動向について概観し、音楽教員養成の独自性を指摘したい。船寄俊雄によると、中等教員の免許状を取得するには、「①高等師範学校・女子高等師範学校を中心とする検定を必要としないルート、②無試験検定のルート、③試験検定のルート」があった¹⁾。ここでは、①高等師範学校・女子高等師範学校を中心とする検定を必要としない取得方法に限定して述べる。

「音楽・美術・体育の教員養成」は、仲新監修『学校の歴史 第5巻 教員養成の歴史』（1979）の中で独自の項が立てられ、篠田弘が執筆している²⁾。このような編纂方法が採られているように、これらの教科に関しては、高等師範学校ではなく、専門学校を中心に独自の教員養成が展開されていた。したがって、音楽・美術・体育の教員養成の視点から上記①を正確に定義するならば、＜師範学校、中学校、高等女学校教員無試験検定の取扱を許可された専門学校＞といえる。

表2-1は、篠田の研究を基に作成した。ここでは、音楽、美術、体育の教員養成史を鳥瞰し、考察することで、音楽教員養成の独自性を指摘したい。

表2-1 音楽・美術・体育の教員養成

年	音楽教員の養成	美術教員の養成	体育教員の養成
1878 (M11)			「体操伝習所」を開設（わが国学校体操の創始者、米人リーランドを教師とする。伊沢修二を主幹）
1879 (M12)	文部省「音楽取調掛」を設置（東京師範学校校長伊沢修二、音楽取調掛御用掛兼勤）		
1880 (M13)	東京師範学校、女子師範学校、音楽取調掛においてメーソンによる唱歌教授を開始		
1882 (M15)			「伝習員規則」制定
1884 (M17)	「府県派出音楽伝習生」を開始		
1885 (M18)	音楽取調掛を「音楽取調所」と改称 音楽取調所を音楽取調掛と改め、大臣官房の附属とする	文部省学務一局に「図画取調掛」を置く（東京美術学校の全身）	体操伝習所を「東京師範学校附属」とする
1886 (M19)			東京師範学校附属体操伝習所廃止。高等師範学校に体操専修科を設置
1887 (M20)	音楽取調掛を「東京音楽学校」と改称、改組	図画取調掛を「東京美術学校」と改称・改組	
1892 (M25)		東京美術学校規則を改定。課程を予備科・本科とし、別に「図画講習科」を置く	
1893 (M26)	東京音楽学校を「高等師範学校附属音楽学校」とする		日本体育会「体操練習所」を設置（最初の私立体育教員養成機関）
1894 (M27)	「小学唱歌講習科」が開設		

1899 (M32)	高等師範学校附属音楽学校が独立して「東京音楽学校」と改称（甲種師範科，乙種師範科設置）	高等師範学校に「手工専修科」が設置	
1903 (M36)	東京音楽学校を専門学校令による専門学校とする	東京美術学校を専門学校令による専門学校とする	
1905 (M38)			大日本武徳会「武術教員練習所」を設立
1906 (M39)		高等師範学校の手工専修科を「図画手工専修科」に改編	
1907 (M40)		「東京美術学校図画師範科規定」を制定	
1909 (M42)	「東京音楽学校規定」を制定	京都市立絵画専門学校が設立	
1912 (M45)			武術教員練習所は「日本武徳会武術専門学校」となる
1914 (T 3)		「東京美術学校規定」を制定（8学科，修業年限5か年）	
1915 (T 4)			「高等師範学校規定」を改正（学科を文科・理科とし，別に特科として，東京高等師範学校に体育科を置く）
1918 (T 7)			東京女子高等師範学校内の第六臨時教員養成所に体操科が設置
1919 (T 8)			東京高等師範学校内の第一臨時教員養成所に体操科が設置（1933年廃止）
1922 (T 11)	東京音楽学校に第四臨時教員養成所が設置（1932年廃止）		大日本武徳会武術専門学校を「大日本武徳会武道専門学校」と改称
1924 (T 13)		女子美術学校に無試験検定の認可	
1929 (S 4)		女子美術専門学校，専門学校令により認可	
1930 (S 5)		広島高等師範学校内の第二臨時教員養成所に「図画手工科」が新設（1934年廃止）	
1933 (S 7)	武蔵野音楽学校，専門学校令により認可		
1937 (S 12)			東京女子高等師範学校体育科設置
1941 (S 16)			日本体育専門学校，専門学校令により認可
1944 (S 19)			東京高等体育学校設置
1945 (S 20)			東京高等体育学校を「東京体育専門学校」と改称
			広島女子高等師範学校体育科設置

出典 篠田弘「音楽・美術・体育の教員養成」『学校の歴史 第5巻 教員養成の歴史』第一法規，1979年，文部省『学制百年史（資料編）』ぎょうせい，1972年から作成。

音楽教員養成は，音楽取調掛を前身とする東京音楽学校が中核的な存在を占めている。東京音楽学校の校名が，1893（明治26）年から1899（明治32）年にかけて「高等師範学校附属音楽学校」と改称された時期があったというものの，それ以降，高等師範学校において音楽教員養成が実施されていない。この点が美術や体育とは異なる。美術は，1899（明治32）年に高等師範学校に「手工専修科」が設置されている。また，1930（昭和5）年，広島高等師範学校附設の第二臨時教員養成所に「図画手工科」が設置される（1934年廃止）。

一方、体育は、1915（大正4）年に東京高等師範学校に特科として「体育科」が置かれている（1921年には特科ではなくなり、文科、理科と並んで体育科が置かれる）。また、1937（昭和12）年には東京女子高等師範学校、1945（昭和20）年には広島女子高等師範学校に体育科が設置されている。なお、両女子高等師範学校の体育科では体操の教員免許状の他に音楽の教員免許状を取得することができた。このことについて本稿では、「体育・音楽教員養成」という用語で表したい。

以下、「音楽教員養成と美術教員養成」「音楽教員養成と体育教員養成」の2点から考察を行い、音楽教員養成の独自性を明確にする。

1) 音楽教員養成と美術教員養成

美術教員養成史に関しては、松本健義³、安部崇慶⁴、疋田祥人⁵、宮崎擴道⁶等の先行研究がある。なお、当時の中等学校では「美術」ではなく、「図画」「手工」の教科名が使用されていた。本研究では、「図画」「手工」の教員養成を総称して「美術教員養成」の用語を使用していきたい。

美術教員養成は、主として東京美術学校、東京高等師範学校において行われている。ここでは、東京音楽学校と教育制度上類似する組織である東京美術学校を取り上げる。

1887（明治20）年に創設された東京美術学校の当初の様子について、安部は、「（岡倉）天心が東京美術学校で目指した芸術教育の真髄は、まさにこの「師匠養成」にあり、それはまた芸術教育にとって唯一最善の方法」であったと分析する⁷。

また、疋田は東京美術学校の教員養成について次のように述べる⁸。

1907（明治40）年には、「本校における中等教員養成が本格化した」とされる図画師範科が東京美術学校に設置された。図画師範科は、「師範学校、中学校、高等女学校ノ図画教員タルベキモノヲ養成スルヲ主旨」とし、主に図画科の教員を養成することを目的としていた。学科目は、倫理、教育学及教授法、美学及美術史、解剖学、図案法、自在画、幾何画法、手工、習字、英語、教授練習、体操とされ、第1学年および第2学年では、それぞれ毎週39時間中4時間、第3学年では毎週39時間中2時間手工科が課されることになった。そして、同師範科の全卒業生には、図画科のほかに、手工科の教員免許状が与えられることになった。第1回の卒業生が出た1910（明治43）年3月から1941（昭和16）年3月までに、同師範科の卒業生605名が、図画科と手工科の教員免許状を取得した。

そこで、中等教員養成を行っていた東京美術学校図画師範科と東京音楽学校甲種師範科のカリキュラムに着目したい（表2-2）。

表 2-2 東京音楽学校甲種師範科（1937）と東京美術学校図画師範科（1933）の教授時数比較

	修身	哲学	国語	外国語	体操	音楽	美術	教授法	教育学	心理学	合計
東京音楽学校	3	0	9	9	6	34	0	3	4	0	68
東京美術学校	3	2	0	4	6	0	93	5	2	2	117

出典 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』2003年、音楽之友社、138-139頁、『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』1987年、ぎょうせい、643頁から作成。

注 3年間の毎週教授時数の合計を示す。

表 2-2 から以下の点が指摘できる。

- 1) 総授業時数は、東京美術学校の方が多い。
- 2) 音楽や美術等の専門の教授時数は、東京美術学校の方が多い（東京音楽学校：東京美術学校＝34：93）。
- 3) 「教授法」と「教育学」を合計した教授時数は、どちらも7時数、同数である。
- 4) 「国語」は東京音楽学校にのみ開講されている。「外国語」の教授時数は、東京音楽学校の方が多い。

東京美術学校と比較して東京音楽学校の専門の教授時数が少なかった理由は、東京音楽学校ではレッスンを形態とする個人指導が中心となり、授業外で練習することが求められていたからと考えられる。また、東京音楽学校において「国語」や「外国語」の教授時数が多いのは、歌と言葉の関係が密接であるように、専門教育としても言語が重要視されていたからと推察する。なお、東京音楽学校では希望者に限り、国語の免許状も取得できた。

2) 音楽教員養成と体育教員養成

ここでは1937（昭和12）年に設置された東京女子高等師範学校体育科⁹を取り上げる¹⁰。東京女子高等師範学校体育科については掛水通子（1987）、外山友子¹¹（2003）の先行研究がある¹²。

まず、掛水は、東京女子高等師範学校体育科について、

体育に加えて声学、器楽等の時間配分が多くなされており、昭和21年入学生から体育選修と音楽選修に分かれるまで両方の教員免許状が授与された。体育と音楽の併修は、これまでの国語と体操、家事と体操の併修とは意味を異にしていえるといえる。

と述べる¹³。一方、外山は、1940（昭和15）年4月から1943（昭和18）年9月まで東京女子高等師範学校体育科に在籍していたため、当時の様子を回想しながら東京女子高等師範学校・お茶の水女子大学における音楽教育の変遷を辿っている。

『お茶の水女子大学百年史』（1984）では、体育と音楽という異なった内容の学科が、一つの学科で構成されていた点について、次のように説明されている¹⁴。

この段階で独立した音楽科ができず、体育科のなかで音楽の教育が行なわれたのは、良い体育教師の育成には音楽の訓練もまた不可欠である、という発想に基づいたものといわれている。

表 2-3 は、1943（昭和 18）年に改正された東京女子高等師範学校各学科課程及毎週教授時数である。この改正によって、1937（昭和 12）年の学科課程では設けられていた増課科目がなくなり、生徒は、体育と音楽を一律に履修するようになった。

音楽関係の授業は、「音楽理論」「声楽」「器楽」「音楽史」「美学」の学科目で構成され、「声楽」「器楽」は個人教授まで施されている。「声楽」の中に含まれている「聴覚訓練」は、1937（昭和 12）年の学科課程では置かれていなかった内容である。

表 2-3 東京女子高等師範学校体育科各学年学科課程及毎週教授時数 1943（昭和 18）年度

	時 数	第 1 学年 学科課程	時 数	第 2 学年 学科課程	時 数	第 3 学年 学科課程	時 数	第 4 学年 学科課程
修身公民	2	倫理概説 礼法	3	公民 東洋倫理 哲学概説	2	東洋倫理 国民道德	3	皇道 礼法
教育	2	心理学 論理学	2	教育史	4	教育史 教育学 学校衛生	4	教育法令 学校管理法 保育法 教授法
家政			1	家政学			1	家庭教育
国語	2	購読	2	〃	2	〃	1	〃
体育学	4	生理衛生 運動医学 体育概論	1	体育概論	2	体育概論 体育史	2	体育概論 体育史
体操	6	体操 遊戯 競技、球技	6	〃	6	〃	6	〃
武道	2	弓道	2	薙刀	1	〃	1	〃
教練	2	教練	2	〃	2	〃	2	〃
音楽理論	1	楽典	3	楽典 楽式 和声学	3	管弦楽大意 和声学	3	対位法 指揮法 作曲
声楽	5	基本練習 聴覚訓練 合唱	3 2	合唱 独唱（個人教授）	3 2	〃	3 2	〃
器楽	2	ピアノ（個人教授）	2	〃	2	〃	2	〃
音楽史			1	日本音楽史	2	西洋音楽史	1	〃
美学							1	美学
外国語（独語）	2	講読 文法 作文	2	〃	1	講読		
計	30	（個人教授 2）	32	（個人教授 4）	32	（個人教授 4）	32	（個人教授 4）
本表ノ外夏期ニ於テ水泳、冬期ニ於テ雪滑ヲ課シ、第四学年ニ於テ教育実習及保育実習ヲ課ス								

出典 『東京女子高等師範学校規則』1943 年、30-32 頁。

注 「〃」＝「同左」。

図2-1は、表2-3に示した4年間の授業時数の総数を「体育」（体育学、体操、武道、教練）、「音楽」（音楽理論、声楽、器楽、音楽史、美学）、「教育」「他」に分類して表記したものである。

総授業時数 126 時数は、「体育」が 37%（47 時数）、「音楽」が 34%（33 時数）、「教育」が 10%（12 時数）、「他」が 19%（24 時数）という内訳である。「体育」「音楽」が、学科課程の 71%を占め、「体育」と「音楽」の比率はほぼ同数である。このように東京女子高等師範学校体育科は、「体育科」という名称を用いながらも、音楽の授業も確保されていたことが分かる。

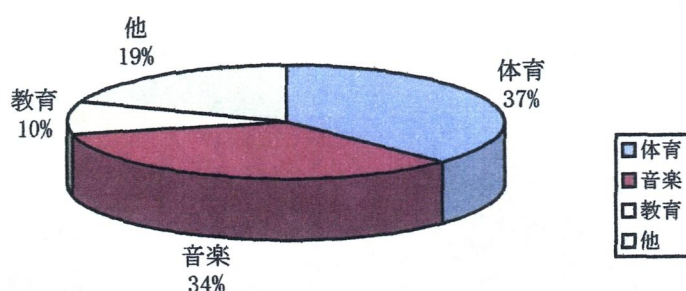


図2-1 東京女子高等師範学校体育科教授時数

ここで、中等音楽教員養成の中核的存在である東京音楽学校甲種師範科(1943 年度)の授業時数と比較したい。修業年限 4 年の総授業時数は、東京女子高等師範学校で 126 時数、東京音楽学校で 97 時数が課されている。音楽関係の授業時数の合計は、東京女子高等師範学校では 43 時数に対して、東京音楽学校で 59 時数と、16 時数の差である。東京女子高等師範学校を 1 とすると、東京音楽学校では約 1.37 の比率の関係である。

次にそれぞれの学科目ごとについて比べてみよう。その結果を図2-2に示した。

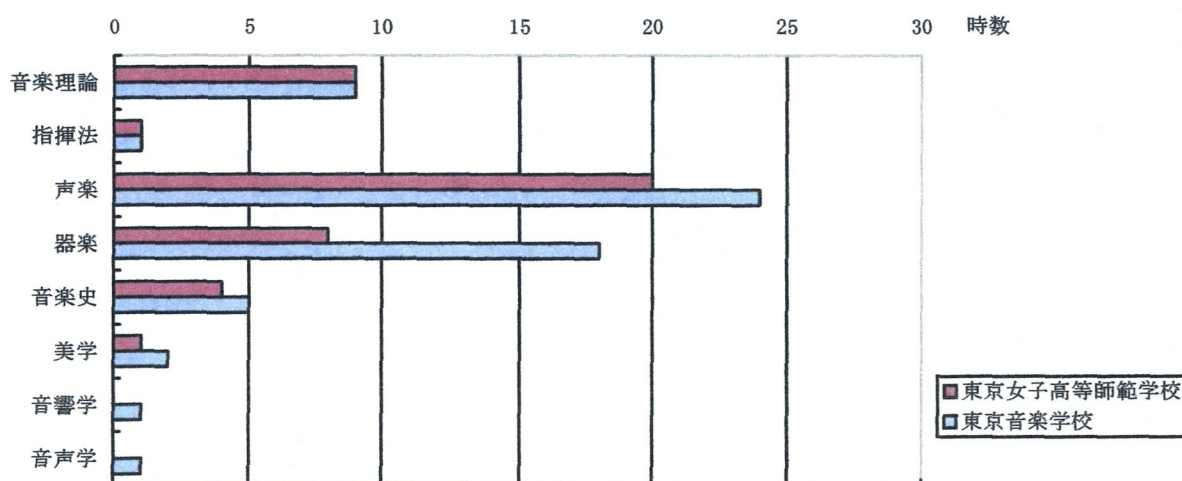


図2-2 東京女子高等師範学校と東京音楽学校の授業時数（4年間）の比較
1943（昭和18）年

東京女子高等師範学校の学科課程が、東京音楽学校のものと異なる点を以下に示す。

- ・東京女子高等師範学校では「音響学」「音声学」が開講されていない。
- ・東京女子高等師範学校の「器楽」の時数は、東京音楽学校の半数以下である。その原因には、東京音楽学校ではピアノの他にも管楽器や弦楽器等の副科の楽器を課していたのに対し、東京女子高等師範学校ではピアノのレッスンしか課していなかったからである。

では、体育と音楽の履修を一緒に行うことに無理はなかったのだろうか。以下は、1946（昭和 21）年に行われた座談会の記録である¹⁵。出席者は、青砥道雄、井上武士、園田誠一、野村光一、司会は清水修である。

清水：高等師範には音楽科はないのですか。

井上：芸能科の中に図画工作の教師養成があるだけです。一つの型としては、女高師の体育科があります。

実際の内容は体育音楽科なんです。音楽の資格も与へるやうになつてをります。

園田：体操と音楽では両方ともなかなかうまく両立しないのです。体育でうんと運動すると、音楽の練習ができない。それでどっちつかずになつて、体育科の教官も分かれたいといふ話がある。上野の内部でも師範科は女高師に合併してしまつたらどうかといふことをいつてゐる人があるさうですから、或はさういふことも一つの問題になりはしないかと思ふのです。

生徒の意識はどうだったのだろうか。外山は次のように回想する¹⁶。

実は、筆者が四年生在学中のある日、下村寿一校長の所へ直接訴えに行ったのである。音楽も体育もそれぞれ適性があり、その専門性をもっと高めたいこと、そのためには、ぜひ専攻を分けて欲しい…と。その時、下村校長はただ、だまっとうなずいておられた。

上記から体育・音楽教員養成にはかなり無理があったことが分かる。また、教師、生徒ともに、体育と音楽が別々の専攻に分かれることを望んでいたようである。しかしながら利点として、「唱歌遊戯」のように音楽と体育の連携を必要とする分野の研究が進んだことが挙げられる¹⁷。なお、東京女子高等師範学校以外にも、私学の東京女子体操音楽学校（現、東京女子体育大学）が存在し、体育・音楽教員養成を行っていた¹⁸。女子教育においては音楽と体育の関係が密接であったことについて、掛水は「当時の体操、遊戯の伴奏には音楽が不可欠であった」と指摘する¹⁹。実際に名須川知子によると、東京女子高等師範学校教授であった戸倉ハルが、唱歌遊戯の指導を行う際、レコードよりもピアノによる伴奏が多かったそうである²⁰。

以上、音楽、美術、体育の教員養成は、やや美術が遅れるというものの、ほぼ同時期に「音楽取調掛」「図画取調掛」「体操伝習所」が発端となり展開された。音楽が、美術、体育と決定的に異なるのは、高等師範学校における音楽教員養成の場を獲得していなかったことである。かろうじて、女子高等師範学校の体育科に補助的に置かれたに過ぎない。音楽教員養成を実施するためには、個人レッスンを展開するために必要な教授陣、楽器等の設備を必要とする。これらを整備することが容易ではないということで、音楽教員養成の場が東京音楽学校に留まったと考えられる。現に、臨時的に中等音楽教員を養成する「第四臨時教員養成所」は、東京音楽学校内に設置された（1922年）²¹。

さらに付け加えるとするならば、男子の教育には音楽が重要視されていなかったことが挙げられる。男子の在籍する中学校において「音楽」が必修になるのは、1931（昭和6）年の「中学校令施行規則改正」からである²²。このような実情もあり²³、高等師範学校への音楽の導入が見送られたのだろう。

ちなみに、美術に関しては、女子への門戸が閉ざされていた。東京美術学校は男子校であり、女子高等師範学校内においても美術教員養成は実施されていない。女子で美術を学びたいと思うならば、官立では許されず、私学の女子美術専門学校（現、女子美術大学）に通学する他はなかった²⁴。他方、体育に関しては、高等師範学校、女子師範学校、専門学校と男女共に門戸が開かれ、教員養成が展開されていた。

このようにジェンダーの視点で教科を見た場合、とかく戦前においては不均等な面が多くあった。ここで音楽教員養成の点で締めくくるとするならば、東京音楽学校は、官立専門学校の中で唯一、男女共学制を採っていた学校である²⁵。このことも音楽教員養成の独自性といってよいだろう。

ところで、本稿では中等教員養成の動向を概観すると最初に述べ、ここまで論を進めてきた。独自性について最後にもう一つ付け加えると、音楽教員養成は中等教員養成と初等教員養成が混在した形態を採っていたことである。東京音楽学校には、師範学校・中学校・高等女学校の「音楽」の教員を養成する甲種師範科の他に、小学校の「唱歌」専科教員養成を目的とする乙種師範科が存在した²⁶。嶋田由美によると、明治後期における東京府内の小学校には、乙種師範科の卒業生の他、音楽取調掛ならびに東京音楽学校本科や甲種師範科の卒業生が比較的多く勤務していたそうである²⁷。昭和期においても、嶋田の指摘と同様の傾向がうかがえた。例えば、聞き取り調査を行った真篠将氏は、東京音楽学校甲種師範科卒業後、1941（昭和16）年3月、愛知県第一師範学校教諭兼訓導として勤めた後、1942（昭和17）年10月に東京市永田町国民学校訓導となっている²⁸。この理由として、まず、兵役との関係がある。男子の師範学校卒業生は5ヶ月の「短期現役兵」を終えた後、「国民兵役」に入り、満28歳まで小学校の訓導を勤務すれば、兵役を免除される制度があったからである²⁹。これを受けて、真篠氏の場合、愛知県第一師範学校教諭という肩書きの他、附属小学校訓導を兼務していた。もう一つの理由は、下総皖一が指摘するように、その当時の東京音楽学校卒業生の間には、音楽の勉強は東京でしかできない。東京に残って音楽活動を続けたいという意識が働いていたからだと考える³⁰。

最後にこれまで述べてきた音楽教員養成の独自性について以下に要約し、補論を閉じたい。

- ・音楽教員養成の場合は、高等師範学校には置かれず、東京音楽学校が中心となっていた点。
- ・東京音楽学校においては官立の中で唯一、男女共学制を採っていた点。
- ・東京音楽学校は、中等教員養成以外に、初等学校の専科教員の養成にも携わっていた点。

-
- 1 船寄俊雄「戦前日本における中等教員検定制度史」『大阪教育大学紀要』第IV部門第37巻第2号、1988年、134頁。
 - 2 篠田弘「音楽・美術・体育の教員養成」仲新監修『学校の歴史 第5巻 教員養成の歴史』第一法規出版、1979年、150-155頁。
 - 3 松本健義「日本近代学校教育における美術教員養成カリキュラム史研究（1）——第1期＜西洋美術教育萌芽期＞より第2期＜近代教育制度創始期＞まで」『山口女子大学研究報告』第15号、山口女子大学、1989年、29-51頁。松本健義「日本近代学校教育における美術教員養成カリキュラム史研究（2）——第3期＜教育制度基本樹立期＞より第4期＜教育制度整備期＞まで」『山口女子大学研究報告』第16号、山口女子大学、1990年、35-51頁。
 - 4 安部崇慶『芸道の教育』ナカニシヤ出版、1997年。
 - 5 正田祥人「師範学校手工科教員の養成における直接養成と間接養成」『産業教育学研究』第29巻第2号、日本産業教育学会、1999年、36-42頁。正田祥人「東京高等師範学校図画手工専修科における師範学校手工科教員養成の歴史と帰結」東京学芸大学大学院教育学研究科修士論文、2000年。正田祥人「東京高等師範学校図画手工専修科における中等学校教員養成の変容——卒業生の勤務先動向から」『産業教育学研究』第31巻第1号、日本産業教育学会、2001年、111-118頁。正田祥人「東京美術学校図画師範科による手工科担当師範学校教員の供給に関する量的分析」『日本教師教育学会年報』第11号、日本教師教育学会、2002年、77-87頁。正田祥人・田中喜美・坂口謙一「東京高等師範学校図画手工専修科における教員養成の営み——学科課程の特徴から」『東京学芸大学紀要』第6部門第54集、東京学芸大学、2002年、11-19頁。正田祥人「師範学校手工科検定教科書における実習の内容と教授法」『産業教育学研究』第35巻第1号、日本産業教育学会、2005年、50-57頁。
 - 6 宮崎廣道『創始期の手工教育実践史』風間書房、2003年。
 - 7 安部、前掲書、201頁。
 - 8 正田「東京美術学校図画師範科による手工科担当師範学校教員の供給に関する量的分析」、前掲書、78頁。
 - 9 「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会『お茶の水女子大学百年史』1984年、183頁。
 - 10 体育教員養成史の研究としては、木下秀明「体育教員養成の歴史的変遷」『体育の科学』第36巻・第12号、1986年、938-941頁、がある。
 - 11 外山友子『音楽の歩み：年譜 お茶の水女子大学：明治から平成へ』2003年。
その他、東京女子高等師範学校に附設された「第六臨時教員養成所体操科」を扱った研究として以下のものが挙げられる。
国枝タカ子「東京女子高等師範学校第六臨時教員養成所体操科に関する研究（第一報）」『体育学研究 13-5』1969年、32頁。国枝タカ子・沢本和子「東京女子高等師範学校第六臨時教員養成所体操科に関する研究（第二報）」『体育学研究 14-5』1970年、21頁。
 - 12 その他、湯沢雍彦・古谷恵子『戦時女高師卒業者のライフコース——教育と戦争の影響を中心に』地域社会研究所、1996年の研究がある。
 - 13 掛水通子「昭和期旧制度における中等学校体育科（体錬科）教員免許状女子取得者について」『藤村学園東京女子体育大学紀要』22巻、1987年、3頁。
 - 14 「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会『お茶の水女子大学百年史』1984年、575頁。
 - 15 財団法人芸術研究振興財団・東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』音楽之友社、2003年、1466頁。
 - 16 外山、前掲書、113頁。
 - 17 以下は唱歌遊戯に関する先行研究である。
・曾我芳枝「第二次改正学校体操教授要目における唱歌遊戯及行進遊戯に関する一考察（Ⅱ）——舞踊教育の問題点と要目委員三浦ヒロ・舞踊家石井漠の交流について」『名古屋女子商科短期大学紀要』第34号、名古屋女子商科短期大学、1994年。
・名須川知子『唱歌遊戯作品における身体表現の変遷』風間書房、2004年。
 - 18 藤村学園創立百周年記念記録等作成実行委員会『藤村学園100年のあゆみ』学校法人藤村学園、2002年。寺田和子『気骨の女』白揚社、1997年。東京女子体操音楽学校の無試験検定制度認可学校方式における認可過程については、大谷奨「体操科」の場合、船寄俊雄・無試験検定研究会編『近代日本中等教員養成に果たした私学の役割に関する歴史的研究』学文社、2005年、51-73頁が詳しい。

- 19 掛水通子「戦前のわが国の女子体育教師の教育に関する研究」『東京女子体育大学紀要』第30号、東京女子大学、1995年、14頁。
- 20 名須川『唱歌遊戯作品における身体表現の変遷』、210頁。
- 21 財団法人芸術研究振興財団・東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』音楽之友社、2003年、1052-1070頁。
- 22 財団法人教科書研究センター『旧制中等学校教科内容の変遷』ぎょうせい、1984年、364頁。
- 23 東京音楽学校「全国中学校音楽科に関する調査概要」同声会編集部『同声会報』第194号、1933年、14-15頁。
- 24 桑原實監修、磯崎康彦・吉田千鶴子著『東京美術学校の歴史』日本文教出版、1977年、288-291頁。
なお、東京美術学校の女子への開放計画については、湯川次義『近代日本の女性と大学教育——教育機会開放をめぐる歴史』不二出版、2003年、259-263頁、の中で言及されている。
- 25 井上恵美子・伊藤めぐみ「旧学制下における「共学」—「別学」の存在構造」『名古屋大学教育学部紀要（教育学科）』第39巻第1号、名古屋大学教育学部、1992年、249-250頁。井上恵美子「戦前中等教員免許状制度における男女差別に関する研究——その成立と撤廃を中心に」佐々木亨編『技術教育・職業教育の諸相』大空社、1996年、315頁。橋本紀子『男女共学制の史的研究』大月書店、1992年（1995年重版使用）、119頁。
- 26 服部幸三「芸大百周年と音楽教育」『季刊音楽教育研究』春号第31巻第2号、音楽之友社、1988年、12頁。
- 27 嶋田由美「小学校校歌制定に関する研究——明治後期における東京府内小学校校歌制定過程の分析を通して」『音楽教育学』第16号、日本音楽教育学会、1986年、24-25頁。
- 28 真篠将先生退官記念著作集編集委員会編『真篠将先生退官記念著作集 真篠将音楽教育を語る』音楽之友社、1986年、356頁。
- 29 2004（平成16）年10月24日（日）、於：真篠邸（東京都世田谷区）、滝沢美恵子氏も同席。
「師範学校ヲ卒業シタル者（小学校ノ教職ニ就クノ資格ヲ失ヒタル者ヲ除ク）ノ現役ハ第五条ノ規定ニ拘ラス五月トス但シ師範学校ノ教員ヲ修了セサル者ニ在リテハ七月トス」（太田公秀『陸軍法規』文芸春秋社、1932年、330頁）。
逸見勝亮によると、1889（明治22）年まで師範学校卒業者にはいっさいの兵役が免除されていたが、1889年の徴兵令改正以後、短期現役制度が設けられ、これを終ったものは、第一国民兵役に編入されて、戦時、または事変に召集される以外、兵役を免除された。（中略）戦線の拡大に伴う深刻な兵員不足を補うために、教員をも兵員供給源とみなした時、学校教練、および数ヶ月の訓練ではどうい兵員たり得なかったために1938（昭13）年に兵役法が改正されて、この制度が廃止された（逸見勝亮「満州事変前後における師範学校政策に関する一考察」『北海道大学教育学部紀要』第17号、1970年、85-86頁）。なお、逸見は、「戦時体制下における師範学校政策の展開に関する一考察」『北海道大学教育学部紀要』第19号、1972年、117-119頁の中で、「短期現役制度の廃止と学校教練の強化」について論じている。
- 30 財団法人芸術研究振興財団・東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』音楽之友社、2003年、1537頁。

結 論

<結論> 昭和前期の師範学校における音楽教育実践

1. 要 約

本研究では1931(昭和6)年4月から1945(昭和20)年8月までにおける師範学校の音楽教育実践について、制度・内容・実態に着目して論じてきた。その要旨は以下の通りである。

(1) 第Ⅰ部 師範学校における制度の変遷と音楽教育

第Ⅰ部では、師範学校における制度の変遷の中で音楽教育がどのように位置付けられてきたかについて分析・検討した。研究方法としては、「師範学校規定」「師範学校教授要目」等の法規の分析と検討をし、学科課程の特徴、音楽の授業時数、「師範学校教授要目」等に定められている音楽の内容の特徴を明確にした。

第1章では、本研究の対象時期以前の1872(明治5)年から1930(昭和5)年までの師範学校における音楽教育の変遷を概観した。

第2章では、1931(昭和6)年から1942(昭和17)年における府県立師範学校の音楽のカリキュラムについて検討した。明らかになったのは以下の3点である。

- ・学科課程の構成は、必修の「基本科目」と選択の「増課科目」に分けられ、両方に音楽が置かれた。
- ・「増課科目」の音楽では、「基本科目」を補充、発展させた内容が展開された。また、生徒の履修率も比較的高かった。
- ・「基本科目」の毎週授業時数は、1925(大正14)年の改正の際に削減された時数と同じであった。そのため、1932(昭和7)年2月に開催された「師範学校音楽教員協議会」では、授業時数の増加を請願する声が強かった。

第3章では、1943(昭和18)年から1945(昭和20)年、すなわち官立専門学校程度昇格後の音楽のカリキュラムについて検討した。明らかになったのは以下の3点である。

- ・学科課程の構成は、必修の「基本教科」と選択の「選修教科」に分けられ、両方に音楽が置かれた。「基本教科」の音楽の授業時数は増大した。
- ・「師範学校教科教授及修練指導要目」(1943)の中で「歌唱、聴覚訓練、器楽、指揮法、音楽理論、鑑賞、音楽史、国民学校芸能科音楽に関する研究」の8領域が明確に示され、「聴覚訓練」や「音楽史」の領域が新設された。
- ・1944(昭和19)年度以降、勤労働員や徴兵等のため、授業確保が困難となった。

(2) 第Ⅱ部 師範学校における音楽教育実践：教科書分析と聞き取り調査

第Ⅱ部では、師範学校における音楽教育実践の内容と実態を分析・検討した。研究方法としては、師範学校音楽教科書の変遷を概観した後、「歌唱」「発声」「器楽」「鑑賞」「聴覚訓練」の領域ごとに、「師範学校教授要目」（「師範学校教科教授及修練指導要目」）の検討と師範学校音楽教科書の分析を行った。また、師範学校音楽教科書を使って行われた実践事例についても考察した。

第1章では、文部省検定済師範学校音楽教科書の変遷および、国定師範学校音楽教科書の編纂の経緯について概観した。

第2章では、歌唱を対象とした。

「師範学校教授要目」等を歌唱の視点から検討した結果、歌詞、曲調に関して、1931（昭和6）年「国民精神ヲ涵養シ得ル」、1943（昭和18）年「国民的情操ヲ涵養スルモノ」とあるように、改訂を重ねるにつれ国家主義的な内容が重要視されていたことが分かった。なお、1910（明治43）年、1925（大正14）年においては、このような文言は使用されていない。

文部省検定済師範学校音楽教科書である福井直秋編『師範音楽教本 二部用』（1932）と黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』（1938）、国定師範学校音楽教科書である文部省『師範音楽 本科用巻一』（1943）における歌曲の分析を音楽的特徴と歌詞内容分類の2視点から行った。その結果、『師範音楽教本 二部用』『標準師範学校音楽教科書』『師範音楽 本科用巻一』と時代が経つにつれ、ナショナリズム、ミリタリズム的傾向が濃厚になっていったことが明らかとなった。その原因として、「師範学校教授要目」等にも示されていたように、当時の社会情勢の影響を受けてのことだと考えられる。

また、実際の授業においてもこの傾向を重視した指導がなされていた。

第3章では、発声を対象とした。

「師範学校教授要目」等が改正されても、「発声練習」は、一貫して「基本練習」の項目の下に置かれていた。1943（昭和18）年3月までに適用された「師範学校教授要目」においては、「発声練習」の内容についての記述はない。1943（昭和18）年になり、学年ごとに内容に関する記述が若干なされたというものの、具体的な方法については示されていない。

発声指導を扱った文部省検定済師範学校音楽教科書は、中声発声を支持した水口廣の『中等発声練習教本』（1932）の1種類だけであった。発声指導に関する内容は、黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』（1938）等、他の文部省検定済師範学校音楽教科書においても含まれていなかった。しかし、文部省『師範音楽 本科用巻一』（1943）においては、10の譜例が「発声練習」として掲載された。その他に師範学校でもしばし使用された国民学校教師用指導書（1941-43）における発声指導は、大正期以来行われてきた児童発声の研究成果の流れを受け継いで「自然な発声」を理想とし、「教師の範唱」という指導技術を求めていることが明らかとなった。

香川県師範学校の発声指導は、歌唱活動のウォーミングアップ的な要素と並んで、音階、音程、和音、発音といった「基礎練習」の訓練的な内容が含まれていた。また、国民学校「芸能科音楽」発足の影響を受け、発声練

習の中に「分散和音唱」や「イロハ音名唱」の導入も試みられていた。なお、増課科目ではやや専門的な内容となり、腹式呼吸が重視されていた。

第4章では、器楽を対象とした。

「師範学校教授要目」等を器楽の視点から検討した結果、1910（明治43）年、1925（大正14）年で示されていた「ばいおりん」の記述は1931（昭和6）年に削除され、「ピアノ（又ハオルガン）」と鍵盤楽器に限定されていたことが分かった。その後、1943（昭和18）年には、「「ピアノ」又は「オルガン」」と記され、必要に応じて「簡易楽器」を加えることが可能となった。

文部省検定済師範学校音楽教科書である『標準師範学校音楽教科書』（1938）には、「楽器奏法練習」が掲載されている。その編纂の特徴としては、編者の一人が楽器学への造詣が深い黒沢隆朝であったこともあり、楽器に対する解説が加わっている。また、国定師範学校音楽教科書である文部省『師範器楽 本科用巻一』は、「初歩ヨリ始メテ予科二年修了程度」の内容を掲載した本科第1学年用のピアノ教科書であったことが明らかとなった。

指導の方法としては、音楽科教員が生徒の進度を点検しながら進める〈検閲方式〉が採られていた。

第5章では、鑑賞を対象とした。

「師範学校教授要目」等を鑑賞の視点から検討した結果、1925（大正14）年には、鑑賞指導が明文化された。1943（昭和18）年では、鑑賞指導の方法として「演奏、音盤、放送等」が挙げられ、日本音楽を重視した内容になっていたことが分かった。

文部省『師範音楽 本科用巻一』には鑑賞教材が所収されていないため、黒沢・小川編『標準師範学校音楽教科書』（1938）における鑑賞教材の分析を行った。その結果、『標準師範学校音楽教科書』の鑑賞教材は、西洋の名曲によって占められ、全59曲中の8曲（13.6%）はオルガン・ピアノの練習曲としても利用できるようになっていたことが明らかとなった。

香川県師範学校における鑑賞指導は、『標準師範学校音楽教科書』に基づき、SPレコード、曲によっては教師の独唱によって行われていたことが明らかとなった。また、生徒たちは、師範学校入学前に鑑賞指導を受けていなかったことも影響し、好評であった。

第6章では、聴覚訓練を対象とした。

「師範学校教科教授及修練指導要目」を聴覚訓練の視点から検討した結果、師範学校における聴覚訓練の目的は、鋭敏なる聴覚の育成、音楽理解の促進、産業・国防における利用のためと定められていたことが分かった。

師範学校音楽科教員は、1940（昭和15）年10月に開催された「聴覚訓練を主とする音楽教育講習」や1941（昭和16）年6月に開催された「国民学校芸能科音楽講習」等を通して、聴覚訓練の指導内容や方法を習得していった。

香川師範学校における聴覚訓練は、文部省『ウタノホン上 教師用』（1941）で示されている指導方法に基づき、主要三和音を中心に行われていたことが明らかとなった。また、指導の場としては、音楽の授業の他、朝礼

や保護者会が挙げられる。

補論では、師範学校音楽科教員の養成を担っていた東京音楽学校甲種師範科における音楽教員養成について、とりわけ教育実習に着目して、聞き取り調査から得た資料を基に実態を考察した。また、美術教員養成や体育教員養成との比較を行い、音楽教員養成の独自性を指摘した。

2. 総 括

ここでは序論で提示した論点にしたがって、本論で明らかになった結果を基に総括を行いたい。

(1) 1943（昭和 18）年 「師範教育令改正」について

中等学校程度であった師範学校が、1943（昭和 18）年の「師範教育令改正」を受け、「官立専門学校程度」へと昇格を果たす。その昇格に伴い、音楽教育の内容も充実したか、否か。また、師範学校において求められていた音楽教育の内容は何であったのか。

ここでは、「法規」「師範学校音楽教科書」「授業の実態」の視点から述べる。

・法規（「師範学校教授要目」等）の視点から

昇格に伴い、1910（明治 43）年度から 1942（昭和 17）年度まで「師範学校教授要目」と呼ばれていた法規は、1943（昭和 18）年度に「師範学校教科教授及修練指導要目」と名称が変わった（第Ⅰ部第 3 章）。「師範学校教科教授及修練指導要目」では、学年ごとの指導内容が示された。また、「歌唱」「発声」「器楽」「鑑賞」「聴覚訓練」ごとに分けて検討した結果においても、従来の「師範学校教授要目」では示されていなかった新しい内容が付加されている。したがって、法規の面では音楽教育の内容はこの昇格に伴い、従来のものより詳細な規定になったといえる。

・師範学校音楽教科書の視点から

昇格に伴い、1943（昭和 18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」に基づいて国定師範学校音楽教科書が作成されたものの、本科第 1 学年用しか発行されなかった（第Ⅱ部第 1 章）。そのため、本科第 1 学年以外の学年の「師範学校教科教授及修練指導要目」の内容は、教科書として発行されずに終わってしまったということになる。

国定師範学校音楽教科書である文部省『師範音楽 本科用巻一』（1943）、『師範器楽 本科用巻一』（1943）はともに、従来の文部省検定済師範学校音楽教科書と比べてそれほど難易度は高くなっていない。むしろ、「歌曲」に関してはミリタリズム・ナショナリズムの傾向が（第Ⅱ部第 2 章）、「器楽」に関してはピアノ志向の傾向が強化されたといえる（第Ⅱ部第 4 章）。

・ 師範学校における「音楽」の授業の実態の視点から

昇格後の師範学校において通常の授業が確保できたのは、多少各校によって時期はずれるものの、1943（昭和18）年度のみである（第Ⅰ部第3章第2節）。教科書は発行が遅れた上で本科第1学年用だけしか発行されず、授業も確保されなかった。このような状況下で、昇格前の教育内容ですら縮小せざるをえないような現実があった。岡山師範学校では、『師範音楽 本科用巻一』が指導されるものの、5、6曲の「歌曲」が歌われただけであった（第Ⅱ部第2章）。

また逆に、師範学校音楽科教員が、昇格に伴い急に音楽の授業の内容を充実させたという証言も得ていない。師範学校音楽科教員は、「師範学校教授要目」等の法規の内容を知らないで授業をしていたような感触もあった。

なお、当時において『師範音楽 本科用巻一』『師範器楽 本科用巻一』の知名度はそれほど高くはなかったと推察する。木村信之ですら、1985（昭和60）年に橋本清司にインタビューを行うまでこれらの教科書の存在を知らなかった¹。国定師範学校教科書の編纂過程の状況は、『教育週報』によって数回にわたり報告されていた（第Ⅱ部第1章）。また、「師範学校音楽科教員講習会」が、1943（昭和18）年5月、東京音楽学校において実施され、『師範音楽 本科用巻一』『師範器楽 本科用巻一』の普及が図られた（第Ⅱ部第1章）。とはいえ、このような情報に関心を寄せたのは一部の師範学校音楽科教員に限られていたと推察する。

以上、師範学校は制度としては官立専門学校程度に昇格され、制度上大きな変革がなされたものの、音楽教育の実態はそれほどの改善はなされなかったのである。

（2） 1941（昭和16）年 国民学校「芸能科音楽」発足について

1941（昭和16）年、国民学校において「芸能科音楽」が発足したことを受け、国民学校の音楽教育の内容には鑑賞や器楽等が加えられた。師範学校における音楽教育は、国民学校「芸能科音楽」発足に伴い、どのような対応を行ったか。

ここでは、「法規」「授業の実態」「芸能科音楽」「講習」の視点から述べる。

・ 法規（「師範学校教授要目」等）の視点から

1941（昭和16）年3月、「師範学校教授要目中改正」（文部省訓令第八号）が行われ、法令中「小学校ニ於ケル唱歌」は「国民学校ニ於ケル芸能科音楽」と用語が改められた（第Ⅰ部第2章）。また、1943（昭和18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」によると、本科第3学年に「国民学校芸能科音楽に関する研究」が置かれていた（第Ⅰ部第3章）。このように、師範学校の昇格は、国民学校発足より遅れて行われたというものの、「師範学校教授要目」の改正が国民学校発足と同時に行われ、昇格前の師範学校においても国民学校に関する内容が取り入れられていたのである。

・師範学校における「音楽」の授業の実態の視点から

聞き取り調査の結果、国民学校教師用指導書が師範学校において歌唱や発声や聴覚訓練の指導の際に活用されていたことが判明した（第Ⅱ部第2章、第3章、第6章）。また、香川県師範学校においては、《歌劇「ウィリアム・テル」中の行進曲》《「ウィリアム・テル」の牧歌調》の鑑賞の指導の際、「国民学校音楽鑑賞盤」が使用されていた（第Ⅱ部第5章）。さらに香川県師範学校の卒業試験では、《君が代》の「伴奏・歌唱・指揮」が課せられていたことから、国民学校教師用指導書掲載の譜例が使用された可能性も強い（第Ⅱ部第4章）。このことから、師範学校と国民学校の指導内容が、密接に結び付いていたことが指摘できる。

・「芸能科音楽」の視点から

1941（昭和16）年発足の国民学校における「芸能科音楽」では、「鑑賞」「器楽」「楽典」「基礎練習」の4領域が新設された。一方、1943（昭和18）年の師範学校「芸能科音楽」では、「聴覚訓練」と「音楽史」の2領域が新設された。ここで両校において共通する領域は、国民学校の「基礎練習」と師範学校の「聴覚訓練」である。国民学校教師用指導書によると、「基礎練習」は、「発声発音練習」「聴音練習」（「聴覚訓練」）「視唱練習」で構成され、もっとも重要視されたのが、「聴音練習」（「聴覚訓練」）であった。

・講習の視点から

師範学校音楽科教員らは、東京や大阪で実施された「聴覚訓練を主とする音楽教育講習」や「国民学校芸能科音楽講習」に参加し、聴覚訓練の指導内容や方法を習得し、師範学校の音楽の授業でも実践していた（第Ⅱ部第6章）。その他、師範学校音楽科教員は、初等学校の教員対象に新設された国民学校「芸能科音楽」の講習の講師としての役割を担っていた（第Ⅱ部第5章第6章）。このように師範学校は現職教員の再教育という役割も果たしていたため、師範学校の音楽の授業は、国民学校との結び付きが強かったのである。

以上、師範学校は、在学する生徒に対する教育と現職教員に対する講習の実施という二つの方法によって、国民学校「芸能科音楽」の普及の役目を果たしていたのである。中でも新設された「聴覚訓練」については、国民学校教師用指導書に基づき、熱心に指導が行われていたことが判明した。

（3） 戦時期における師範学校について

本研究の対象とする1931（昭和6）年から1945（昭和20）年までの間は、戦時期にあたり、社会全体が戦争協力を強いられていた。そのような中、師範学校における音楽教育も影響を受けたのだろうか、否か。とりわけ歌唱教材の歌詞等ではどうだったのだろうか。

ここでは、「法令」と「歌詞」の視点から述べる。

・法令の視点から

法令上、師範学校における授業の停止が明文化されたのは、1945（昭和 20）年 3 月 18 日の「決戦教育措置要綱」であった（第 I 部第 3 章）。しかし、逸見勝亮は、1944（昭和 19）年 8 月 14 日通牒「学徒勤労働員ノ徹底強化ニ伴フ師範学校教育ニ関スル件」の段階で師範学校における授業はほぼ完全に停止したと分析している²。この点について聞き取り調査、文献調査から、香川師範学校、岡山師範学校に関しては多少時期が前後するものの、逸見の指摘とほぼ同様であったことが判明した。

この通牒は、「通年動員ノ場合ニ於ケル教育」と「通年動員ニ非ザル場合ニ於ケル教育」に分けて規定され、双方とも音楽教育に関する記述がみられた。「通年動員ノ場合ニ於ケル教育」の場合、音楽鑑賞指導が教養の向上のために重視された。一方、「通年動員ニ非ザル場合ニ於ケル教育」の場合には、動員計画に伴い削減された授業時数が示されていた。「芸能科」の授業時数も削減されたとはいうものの、他教科と比べると、削減率は低い（男子部 41.2%，女子部 24.5%）。1943（昭和 18）年の「師範学校規定」制定の際においても、「芸能科」の授業時数の増加がみられた。このように、戦時下においても「芸能科」は、国防、産業上、有益であると捉えられていたため重要視された教科の一つであった。実際にこの通牒には「科学的技術ノ基礎訓練及音楽練習ヲ重視ス」と記されている。

1943（昭和 18）年 3 月の「師範学校規定」第十条に示された「芸能科」の目的では、戦争協力に関する文言は含まれていない。しかし、「師範学校教科教授及修練指導要目」（1943）における「聴覚訓練」の目的には、「産業及国防ニ於ケル利用ニ資セシムベシ」と明記された。実際に、師範学校において聴覚訓練の指導は、主要三和音の識別という国民学校第 1 学年の内容であったというものの、積極的に実施されていた。

・歌唱教材の歌詞の視点から

歌唱教材の歌詞における戦時色は、文部省『師範音楽 本科用巻一』（1943）に顕著に表れていた（第 II 部第 2 章）。このような歌詞は、「師範学校教科教授及修練指導要目」（1943）の「歌詞及楽曲ハ国民的情操ヲ涵養スルモノタルベク特ニ雄渾ニシテ青年ノ志気ヲ鼓舞シ大国民タルノ気迫ヲ養フニ足ルモノヲ採択スベシ」に基づいている。

以上、師範学校は、戦争の影響を受け、授業を確保できなかったため、「師範学校教科教授及修練指導要目」に示された教育内容を完全実施することができなかった。また、師範学校音楽教科書の内容にも戦時色が強調されたのである。

なお、これまで述べてきたことを一覧にしたものが、表 2 である。

表2 各領域における昇格・国民学校・戦時色の関係

	師範学校の昇格		国民学校の指導内容	戦時色
	「師範学校教科教授及修練指導要目」	教科書		
歌唱	<ul style="list-style-type: none"> 我が国の作品を主 国民的情操を涵養するための歌詞及楽曲 五線譜使用 発音指導 	『師範音楽 本科用巻一』 「儀式唱歌」8曲, 「歌曲」22曲 ・長調19曲(86%), 短調1曲(5%), 日本2曲(9%) ・斉唱7曲(32%), 二部7曲(32%), 三部7曲(32%), 他1曲(5%)	<ul style="list-style-type: none"> 歌詞は, 第3学年まで口語体, 第4学年後半から文語体 長調87曲(72.5%), 短調10曲(8.3%), 日本23曲(19.2%) 斉唱102曲(84.3%), 輪唱3曲(2.5%), 二部3曲(2.5%), 三部13曲(10.7%) 	<ul style="list-style-type: none"> ナショナリズム, ミリタリズム的色彩の強い歌詞が確実に増加する。
発声	<ul style="list-style-type: none"> 呼吸法・発声 音階・分散和音・強弱其の他発想に関するもの 	『師範音楽 本科用巻一』 「発声練習」10	<ul style="list-style-type: none"> 自然の発声 頭部共鳴と胸部共鳴の併用 	<ul style="list-style-type: none"> 分散和音唱が取り入れられ, 聴覚訓練との関連がみられる。
器楽	<ul style="list-style-type: none"> 「ピアノ」又は「オルガン」必要により簡易楽器 我が国の作品を主 個人指導 	『師範器楽 本科用巻一』	<ul style="list-style-type: none"> ピアノ, オルガン, 木琴, 笛, ハーモニカ, 手風琴, 太鼓, その他の打楽器(1・2年) 鈴, カスタネット, 四ツ竹, 一絃琴等(3, 4年) 吹奏楽器等(5, 6年) 	<ul style="list-style-type: none"> 特になし
鑑賞	<ul style="list-style-type: none"> 我が国の作品を主 	掲載なし	<ul style="list-style-type: none"> 全71曲, 音盤で鑑賞可能 低学年では外国通俗曲, 描写曲が多く, 高学年では絶対音楽や日本伝統音楽がこれに替わる 演奏形態は6割以上が器楽合奏曲 	<ul style="list-style-type: none"> 国民学校の鑑賞教材では, 《特別攻撃隊》のような軍国主義的内容の鑑賞曲も含まれる。
聴覚訓練	<ul style="list-style-type: none"> 鋭敏なる聴覚を育成すると共に音楽の理解を促進せんことを期し兼て産業及国防に於ける利用に資せしむべし 	掲載なし	<ul style="list-style-type: none"> 鋭敏なる聴覚の育成に力むべし 	<ul style="list-style-type: none"> 航空機爆音を録音したSPレコードも出ている。

3. 昭和前期の師範学校における音楽教育実践の歴史的意義

ここでは1931（昭和6）年4月から1945（昭和20）年8月までにおける師範学校の音楽教育実践に関する制度・内容・実態の検討を通して明らかにされた歴史的意義を4点に整理する。

その第一は、1931（昭和6）年3月までは、全員一律のカリキュラムであったのに対し、この時期においては、「増課科目」（1931年4月～1943年3月）、「選修教科」（1943年4月～1945年8月）という専修制が導入された点である。「増課科目」の設置理由は、師範教育における必要性ではなく、中学校に「増課科目」が設置されたことを受けていた³。一方、「選修教科」の設置理由は、全科担任制の国民学校教員であっても専門教科をもった教員が望ましいという師範学校の設置目的に絡む考え方である（第Ⅰ部第3章）。つまり、教師像の転換が行われ、これは戦後の多くの教員養成大学の小学校教員養成課程で導入された「ピーク制」の基になる考えが始まったのである。

第二の意義は、日本音楽教育史上未だかつてないほど「音楽」が重要視された点である。1943（昭和18）年の昇格の際には、授業時数が増加した（表3）。また、第Ⅱ部第6章で取り上げたように、香川県師範学校では聴覚訓練は通常の授業の他、全校生徒が集まる朝礼の場においても実施されていた。この背景には、音楽が国民的情操の涵養上ならびに聴覚の育成という国防上にとって有益であると評価されたことにあった。このことは、小学校が国民学校と改称され、「芸能科音楽」が発足したことにも大きく関係する。このように政治的手段として音楽教育が利用されたというものの、師範学校音楽科教員らはこの動向に便乗し、授業や講習等を通して新教育の内容の普及、伝達を図っていたのである。なお、これらの動向には、大正期にさかんに行われた音楽教育研究の成果が影響している。

第三の意義は、初等教員養成における音楽教育の方法が確立、標準化された点である。『バイエルピアノ教則本』が1932（昭和7）年、『コールユーブンゲン』が1934（昭和9）年に文部省検定済教科書として認可を受け、多くの師範学校で使用されていた（第Ⅱ部第3章、第4章）。また、これらの教則本は、戦後の小学校教員養成課程においても多く用いられ、継承されている。なお、『コールユーブンゲン』は、戦後の中学校教員養成課程の入学試験や「ソルフェージュ」の教科書としても使用されている。

第四の意義は、日本音楽教育史上、はじめて「日本音楽」が脚光を浴び、文部省『師範音楽 本科用巻一』（1943）には、「日本音楽史」が掲載された点である（第Ⅱ部第1章）（表3）。しかし戦争により、師範学校官立専門学校程度昇格後のカリキュラムが十分機能しなかったため、「日本音楽」が実践、普及される段階には至らなかった。また、「日本音楽」は国民的情操の涵養という国策として利用されたため、戦後においては排除され、一過性の現象に過ぎなかった。

次に当時の師範学校における音楽教育実践の利点と課題について列挙する。

<利点>

- ・在学全期間を通して、音楽の授業が開講されていた。
- ・オルガン・ピアノの指導の際に採られていた<検閲方式>のように、一斉指導だけではなく、個別指導が取り入れられていた。
- ・師範学校の授業においても、初等教育の教科書がしばしば使用され、初等教育との関連が図られていた。

<課題>

- ・年々整備されてきたというものの、施設・設備が十分ではなかった。特にオルガン、ピアノの台数が不足した。
- ・音楽科教員の不足。
- ・授業時数の不足。1943（昭和18）年の昇格時のカリキュラムでは改善されたというものの、「師範学校教科教授及修練指導要目」に規定されている内容を指導するための時数が確保されていなかった。

なお、戦後の師範学校、新制大学教員養成学部においても上記に挙げた課題を抱えることになる。特に音楽科教員の不足、授業時数の不足の課題は、今日の教員養成学部においても十分解決されたとはいえない。

表3 師範学校における「音楽」の内容構成

期		教授時数				歌唱	基本練習	聴覚訓練	器楽	指揮法	音楽理論 (楽典)	鑑賞	音楽史	教授法	西洋音楽	日本音楽	『近代音楽・歌謡の成立過程における国民性の問題』(2003)における時代区分
		男子		女子													
		一部	二部	一部	二部												
模索	1880 M13					○			○ 風琴, 箏, 胡弓		○			○	↓		西洋文化の受容を推進する一方で、江戸時代まで続いた中国文化への依存関係を断ち切り、日本文化の独自性・固有性を強調しようとする傾向がみられた時期。
確立	1892 M25					○			○		○			○			西洋音楽の直輸入に対する反発がいろいろな形で起こり、また録音・採譜などの新しい手段を用いて、民俗音楽をふくむ「日本音楽」の本格的な探究が始まった時期。
整備	1910 M43	2	2	2	1.75	○	○		○ オルガン, ピアノ, ヴァイオリン	○	○			○			
展開	1925 T14	1.4	2	1.6	1.25	○	○		○ オルガン, ピアノ, ヴァイオリン	○	○	○		○			
戦時	1931 S6	1.4	2	1.6	2	○	○		○ ピアノ, オルガン	○	○	○		○			
	1943 S18	2		2		○	○	○	○ ピアノ, オルガン, 簡易楽器	○	○	○	○	○			
戦後	1943 S18 1951 S26	本科1年, 2年前: 2時間 2年後, 3年: 3時間 (音, 図, 工, 書, 体の内, 1科目選択)				○			○						↓		戦後の芸術主義, 伝統文化存続への危機感を背景とした文化財保護政策。

4. 今後の課題

最後に今後の課題について述べたい。

(1) 未着手に終わった領域の分析・検討

師範学校では、本研究で対象とした「歌唱」「発声」「器楽」「鑑賞」「聴覚訓練」の領域以外に、「音楽理論（楽典）」「音楽史」「指揮法」「音楽教授法」等の領域も指導内容に含まれていた。これらの未着手の領域については、今後、資料収集を行い、分析・検討をしていきたい。

特に「音楽教授法」に関連して、師範学校音楽科教員が、＜授業力＞に長けていたか否かについては、まだ検討を要する。補論で明らかにした通り、東京音楽学校甲種師範科においては、教育実習を含めて教職関係の授業が充実していたとはいいい難い。しかしながら、師範学校音楽科教員の＜授業力＞の有無については、各個人の経歴や性格、能力、意識等に左右される部分が多く、個々の検証が必要とされる。

(2) 子どもへの影響

本研究では制度と内容の他に実態を加え、師範学校音楽教科書、師範学校音楽科教員、師範学校生徒の視点から師範学校における音楽教育実践について考察してきた。今後は、師範学校の生徒が、師範学校の音楽の授業で指導された内容を卒業後の教員生活にどのように生かし、そして、子ども一人ひとりにどのように働き掛けたかという点を加えていきたい。近年、＜ライフヒストリー＞や＜エスノグラフィー＞等の質的調査の方法も開発されてきた。今後、そのような研究手法も取り入れながら、＜子ども＞に焦点を当てた研究を進めていきたい。

(3) 戦後の師範学校

師範学校は、1945（昭和20）年8月に廃止されたのではない。戦後の師範学校は1951（昭和26）年3月31日までの約5年半の間存続した。1946（昭和21）年には暫定教科書である文部省『師範音楽 本科用』が発行された。しかし、戦後の師範学校では芸術教科の選択制が導入され⁴、音楽教育は縮小された。また、聞き取り調査によると、戦後の師範学校を卒業すると、小学校教諭免許状の他に中学校教諭免許状も授与されたそうである⁵。師範学校は官立専門学校程度へと昇格してはいたものの、音楽教育の内容は充実していたとはいいがたい。このような状況で、中等学校の教員養成を開始したということには、かなりの困難があったのではないかと推察する。また、1949（昭和24）年5月に誕生した新制大学の学芸学部、教育学部においても、初等教員養成と中等教員養成の役割が課せられた。序論で提起したように、このことによって、中等教員養成の機能が重視されすぎ、これまで培ってきた初等教員養成の機能は軽視されたのではないか。このような戦後の教員養成の課題についても、今後取り組んでいきたい。

さらにこの議論については、中等音楽教員をどのような方法で養成したらよいかという課題へと発展する。奥忍は、「音楽の専門家養成と学校の音楽教員養成の共通点と相違点が検討されねばならない」と指摘する⁶。このような作業を経た後、音楽教員は、音楽学部で養成した方がよいのか。それとも、教育学部で養成した方がよいのか。初等、中等と両方の免許を要していた方がよいのか否か等、今日的な課題へと直面する。これらを解決するためにも、本研究で行った歴史的手法という縦の軸で考察する他、諸外国ではどうなのかといった横の軸で検討する必要もあるだろう。

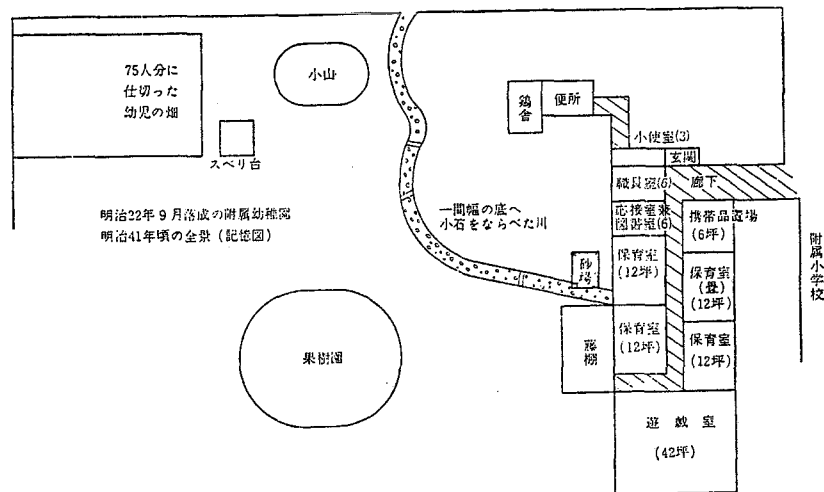
（４） 他教科・他領域との関連

初等教育の教員は全科担任制を原則とするため、他教科・他領域との関係が密接である。本研究で取り上げた昇格後の師範学校では、「音楽」「書道」「図画」「工作」を「芸能科」と合科にして制度上扱っていたものの、各教科の連携はほとんど行われていなかった。しかしながら、国民学校に目を向けてみると、第1、2学年の「芸能科音楽」の授業時数は「体錬科体操」のものを合わせた時数表記となっている⁷。特に運動会や学芸会等の行事では、他教科との連携は欠かすことができない。したがって、特に初等教員養成について研究を進める際には、他教科の変遷や動向を踏まえる必要がある。これについては筆者一人の力では難しいので、将来的には他の教科教育学の研究者との共同研究等を視野に入れていきたい。

（５） 保育者養成機関としての師範学校

『幼稚園教育百年史』には、「岡山県師範学校では明治17年、東京女子師範学校卒業生榎本常を迎えて、附属幼稚園の創設に当たらせ、併せて保母を養成させた」と記されている⁸。また、竹田宏子は、岡山県の師範学校が、明治・大正期において中国地方の保育界の中心的存在であったと指摘する⁹。このように本研究の事例対象の一つである岡山は、保育者養成機関としての伝統も有している¹⁰（図1）。

今日、幼稚園・保育所・小学校の連携が求められている¹¹。また、これらの関係をつなぐ教育者・保育者が必要とされている。師範学校が保育者養成機関としてどのような役割を果たし、その中で音楽教育がどのように展開されてきたのかについて、今日的な課題と関連付けながら研究を継続していきたい。



出典 日本保育学会編『日本幼児保育史』第二巻, 1968年, 281頁。

図1 岡山県師範学校附属幼稚科 1889(明治22)年

- 1 木村信之『音楽教育の証言者たち上 戦前を中心に』音楽之友社, 1986年, 231頁。
- 2 逸見勝亮『師範学校制度史研究——十五年戦争下の教師教育——』北海道大学図書刊行会, 1991年, 382-383頁。
- 3 清水康幸『教育審議会の研究 師範学校改革』野間教育研究所紀要第42集, 2000年, 120-121頁。
- 4 奥山桂(昭和24年3月卒)「当時の思いで」岡山師範(男子)卒業生名簿作成委員会編『岡山師範(男子)卒業生名簿』1982年, 156頁。
- 5 筆者は、岡山師範学校本科を1951(昭和26)年3月に卒業した坂口進氏に「戦後の岡山師範学校」について次のように聞き取り調査を行った。2003(平成15)年10月24日(金), 於:岡山県生涯学習センター(岡山県岡山市)。その際に棚田国雄氏も同席。棚田氏の略歴は、1946(昭和21)年4月, 岡山師範学校予科へ入学した後, 1950(昭和25)年4月, 岡山大学教育学部I類初等教員養成4年課程へ入学, 1954(昭和29)年3月に同校を卒業した。棚田氏に対しては、2003(平成15)年10月3日(金), 於:岡山県生涯学習センターにおいて調査を行った。
- 6 奥忍「音楽教員養成機関における入学試験制度に関する比較教育学的研究」日本音楽教育学会編『音楽教育学研究1 音楽教育の理論研究』音楽之友社, 2000年, 360-361頁。その他に、奥忍「教員養成における音楽コアカリキュラムの編成をめぐって」『関西楽理研究XX』関西楽理研究会, 2003年, 145-150頁がある。
- 7 水原克敏『近代日本カリキュラム政策史研究』風間書房, 1997年, 808頁。
- 8 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに, 1979年, 85頁。その後については、「大正11年4月, 岡山県女子師範学校に保母養成講習会が開設された」(168頁)と記されている。その他、以下の本を参照した。
 - ・岡山県保育史編集委員会『岡山県保育史』フレーベル館, 1964年, 33-36頁。
 - ・日本保育学会編『日本幼児保育史』第二巻, フレーベル館, 1968年(1974年重版使用), 280-282頁。
 - ・附幼100周年記念誌編集委員会『附幼百年のあゆみ——創立100周年記念誌』岡山大学教育学部附属幼稚園, 1985年, 1-4頁。
- 9 竹田宏子「岡山県の師範学校における保育者養成史の研究(第一報)」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』第38巻第1部, 中国四国教育学会, 1992年, 78-83頁。竹田宏子「岡山県の師範学校における保育者養成史の研究(第二報)」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』第39巻第1部, 中国四国教育学会, 1993年, 82-87頁。
- 10 なお、岡山大学教育学部附属幼稚園と岡山大学教育学部附属小学校は、2001(平成13)年度から2004(平成16)年度まで文部科学省の研究開発学校の指定を受け、幼稚園と小学校の9年間を一貫した教育観で貫き、発達段階に沿った教育内容と教育方法を整備したカリキュラムを構築するために共同研究を行った(岡山大学教育学部・岡山大学教育学部附属小学校編『今その時の子どもの成長を支える学校づくり——発達段階に沿った教育課程と指導のあり方』岡山大学教育学部・岡山大学教育学部附属小学校, 2005年)。
- 11 無藤隆『知的好奇心を育てる保育——学びの三つのモード論』フレーベル館, 2001年, 188-190頁。無藤隆「あとがき」東京都中央区立有馬幼稚園・小学校, 秋田喜代美監修『幼小連携のカリキュラムづくりと実践事例——子どもが会える教師がつなげる 幼小連携3年の成果』小学館, 2002年, 204-207頁。

1. 資料

[文書]

- ・『自大正14年3月至昭和23年7月 東京音楽学校』（国立国会図書館公文書館所蔵）。
- ・『自昭和18年至20年 学生生徒総規』（国立国会図書館公文書館所蔵）。
- ・『昭和19年～昭和20年 師範学校令・昭和19年 青年師範学校規定』（国立国会図書館公文書館所蔵）。
- ・『昭和十八年四月 学校日誌 愛知第一師範学校』1943年（愛知教育大学附属図書館所蔵）。
- ・岡山師範学校『岡山師範学校一覧（自昭和十八年至昭和十九年）』1944年（宮城教育大学附属図書館所蔵）。
- ・東京音楽学校『東京音楽学校一覧 補遺（自昭和十五年至昭和十六年）』1941年（国立教育政策研究所教育研究情報センター教育図書館所蔵）。

[師範学校音楽教科書（含、教授資料集成）]

- ・小笠原良造編『新選オルガン学習教本』廣文堂書店、1927年（1928年重版使用）（文部省検定済、昭和3年2月2日、師範学校・高等女学校音楽）（原氏寄贈）。
- ・共益商社書店編『オーガン教本』共益商社書店、1925年（筑波大学附属図書館所蔵）。
- ・黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『標準女子音楽教科書』第二編、共益商社書店、1932年（文部省検定済、昭和8年3月2日、師範学校・高等女学校音楽科）（私蔵）。
- ・黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『標準女子音楽教科書』第四編、共益商社書店、1932年（文部省検定済、昭和8年3月2日、師範学校・高等女学校音楽科）（私蔵）。
- ・黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』第一編、共益商社書店、1938年（文部省検定済、昭和14年1月28日、師範学校音楽科）（金光氏寄贈）。
- ・黒沢隆朝・小川一朗編『標準師範学校音楽教科書』第二編、共益商社書店、1938年（文部省検定済、昭和14年1月28日、師範学校音楽科）（金光氏寄贈）。
- ・黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『改訂標準女子音楽教科書』第一編、中等学校教科書、1938年（1939年重版使用）（文部省検定済、昭和14年3月11日、師範学校・高等女学校音楽科）（私蔵）。
- ・黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『改訂標準女子音楽教科書』第三編、中等学校教科書、1938年（1943年重版使用）（文部省検定済、昭和14年3月11日、師範学校・高等女学校音楽科）（私蔵）。
- ・黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『改訂標準女子音楽教科書』第四編、共益商社書店、1938年（1939年重版使用）（私蔵）。
- ・黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『改訂標準女子音楽教科書』第五編、共益商社書店、1938年（1939年重版使用）（文部省検定済、昭和14年3月11日、師範学校・高等女学校音楽科）（私蔵）。
- ・黒沢隆朝・小川一朗編『標準オルガン教則本』第一編、共益商社書店、1939年（1940年重版使用）（文部省検定済、昭和15年8月28日、師範学校・高等女学校音楽科）（私蔵）。
- ・黒沢隆朝・小川一朗編『標準オルガン教則本』第二編、共益商社書店、1939年（1940年重版使用）（文部省検定済、昭和15年8月28日、師範学校・高等女学校音楽科）（奈良教育大学教育資料館所蔵）。
- ・黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『女子音楽教授資料集成』第一編、共益商社書店、1934年（1936年重版使用）。
- ・黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『女子音楽教授資料集成』第二編、共益商社書店、1934年。
- ・黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『女子音楽教授資料集成』第三編、共益商社書店、1934年（1937年重版使用）。
- ・黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『女子音楽教授資料集成』第四編、共益商社書店、1934年（1937年重版使用）。
- ・黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『女子音楽教授資料集成』補遺・索引、共益商社書店、1937年。
- ・黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『改訂標準女子音楽教授資料集成』第一編、共益商社書店、1939年（愛知教育大学附属図書館所蔵）。
- ・黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『改訂標準女子音楽教授資料集成』第二編、共益商社書店、1940年（愛知教育大学附属図書館所蔵）。
- ・黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『改訂標準女子音楽教授資料集成』第三編、共益商社書店、1941年（愛知教育大学附属図書館所蔵）。
- ・黒沢隆朝・小川一朗・林幸光編『改訂標準女子音楽教授資料集成』第三編、共益商社書店、1942年（愛知教育大学附属図書館所蔵）。
- ・『コールユーブンゲン』大阪開成館、1924年（1934年訂正再版）（昭和9年7月20日、文部省検定済、師範学校・中学校・高等女学校音楽科用）。
- ・島崎赤太郎編『オルガン教則本』巻、共益商社書店、1899年（1926年重版使用）（私蔵）。
- ・高折宮路編『ピアノ新教本』東洋図書、1918年（国立国会図書館所蔵）。
- ・高折宮次・真篠俊雄編『初等ピアノ・オルガン教科書』大阪開成館、1936年（国立国会図書館所蔵）。

- ・田村虎蔵・吉田信太編『オルガン教科書』松邑三松堂, 1916 年 (私蔵)。
- ・東京音楽学校編『小学校唱歌用ピアノ・オルガン楽譜』1899 年 (東京芸術大学附属図書館所蔵)。
- ・東京音楽学校編『祝日大祭日唱歌重音譜』共益商社書店, 1927 年 (東京芸術大学附属図書館所蔵)。
- ・中田章編『オルガン教科書』共益商社書店, 1915 年 (1923 年重版使用) (文部省検定済, 大正 9 年 6 月 25 日) (私蔵)。
- ・信時潔訳『全訳コールユープンゲン』1925 年 (私蔵)。
- ・萩原英一編著『バイエル ピアノ教則本』(文部省検定済, 大正 7 年 7 月 9 日, 師範学校音楽科) (私蔵)。
- ・福井直秋『音程教本』共益商社書店, 1912 (1917 年重版使用) (文部省検定済, 大正 3 年 3 月 27 日, 師範学校音楽科, 文部省検定済, 大正 2 年 1 月 14 日, 高等女学校音楽科) (私蔵)。
- ・福井直秋『師範学校楽典教本』共益商社書店, 1916 年 (文部省検定済, 大正 5 年 3 月 17 日, 師範学校音楽科) (武蔵野音楽大学図書館所蔵)。
- ・福井直秋編『師範音楽教本 二部用』一・二, 帝国書院, 1931 年 (武蔵野音楽大学図書館所蔵)。
- ・福井直秋編『修訂 女子音楽教本』一・二・三・四・五, 帝国書院, 1938 年 (1939 年重版使用) (武蔵野音楽大学図書館所蔵)。
- ・真篠俊雄編『改訂初等オルガン教科書』大阪開成館, 1930 年 (金光氏寄贈)。
- ・水口廣編『中等発声練習教本』共益商社書店, 1932 年 (国立国会図書館所蔵)。
- ・文部省『師範音楽 本科用巻一』師範学校教科書, 1943 年 (昭和 18 年 7 月 7 日, 文部省検査済) (私蔵)。
- ・文部省『師範音楽 本科用』師範学校教科書, 1946 年 (昭和 21 年 6 月 27 日文部省検査済) (奈良教育大学教育資料館所蔵)。
- ・文部省『師範器楽 本科用巻一』師範学校教科書株式会社, 1943 年 (昭和 18 年 7 月 31 日文部省検査済)。
- ・八木真平編『重音 式日唱歌』細謹舎書房, 1932 年。

【教科書・師範学校音楽教科書以外】

- ・井上武士・黒沢隆朝編『小学校唱歌教授資料集成』一学年用, 共益商社書店, 1935 年 (愛知教育大学附属図書館所蔵)。
- ・井上武士・黒沢隆朝編『小学校唱歌教授資料集成』二学年用, 共益商社書店, 1936 年 (愛知教育大学附属図書館所蔵)。
- ・井上武士・黒沢隆朝編『小学校唱歌教授資料集成』三学年用, 共益商社書店, 1936 年 (愛知教育大学附属図書館所蔵)。
- ・井上武士・黒沢隆朝編『小学校唱歌教授資料集成』四学年用, 共益商社書店, 1936 年 (愛知教育大学附属図書館所蔵)。
- ・井上武士・黒沢隆朝編『小学校唱歌教授資料集成』五学年用, 共益商社書店, 1937 年 (愛知教育大学附属図書館所蔵)。
- ・井上武士・黒沢隆朝編『小学校唱歌教授資料集成』六学年用, 共益商社書店, 1937 年 (愛知教育大学附属図書館所蔵)。
- ・楠美思三郎編『オルガン曲集』共益商社書店, 1913 年 (金光氏寄贈)。
- ・真篠俊雄編『こうたのつどひ (オルガン曲)』共益商社書店, 1925 年 (金光氏寄贈)。
- ・水口廣編『初等発声練習教本』共益商社書店, 1932 年 (国立国会図書館所蔵)。
- ・文部省『ウタノホン上 教師用』日本書籍, 1941 年 (私蔵)。
- ・文部省『うたのほん下 教師用』東京書籍, 1941 年 (私蔵)。
- ・文部省『初等科音楽一 教師用』日本書籍, 1942 年 (私蔵)。
- ・文部省『初等科音楽二 教師用』日本書籍, 1942 年 (私蔵)。
- ・文部省『初等科音楽三 教師用』東京書籍, 1943 年 (私蔵)。
- ・文部省『初等科音楽四 教師用』東京書籍, 1943 年 (私蔵)。
- ・文部省『新訂尋常小学唱歌伴奏附 第一学年用』大日本図書, 1932 年 (私蔵)。
- ・文部省『新訂尋常小学唱歌伴奏附 第二学年用』大日本図書, 1932 年 (私蔵)。
- ・文部省『新訂尋常小学唱歌伴奏附 第三学年用』大日本図書, 1932 年 (私蔵)。
- ・文部省『新訂尋常小学唱歌伴奏附 第四学年用』大日本図書, 1932 年 (私蔵)。
- ・文部省『新訂尋常小学唱歌伴奏附 第五学年用』大日本図書, 1932 年 (私蔵)。
- ・文部省『新訂尋常小学唱歌伴奏附 第六学年用』大日本図書, 1932 年 (私蔵)。
- ・文部省『新訂高等小学唱歌伴奏附 第一学年用』大日本図書, 1935 年 (私蔵)。
- ・文部省『新訂高等小学唱歌伴奏附 第二学年用』大日本図書, 1935 年 (私蔵)。
- ・文部省選定『祝祭日儀式用唱歌伴奏附 (並ビニ合唱譜)』大日本図書, 1936 年 (私蔵)。
- ・文部省図書局編『小学校・師範学校・中学校・高等女学校検定済教科用図書表』1886-1912 年。文部省図書局編『師範学校中学校高等女学校小学校検定済教科用図書表』1912-1935 年。文部省図書局編『師範学校中学校高等女学校小学校検定済教科用図書表』1935-1939 年 (上記の 3 冊は国立国会図書館蔵)。なお, 1940-45 年については, 中村紀久二編『検定済教科用図書表』教科書研究資料文献第九集 七 (文部省「師範学校・中学校・高等女学校・実業学校・小学校 至昭和十二年四月至昭和十二年四月至昭和十九年十二月, 付: 不認定図

書表」1986年、国立国会図書館等所蔵本の復刻版を使用。

- ・文部省『師範学校中学校高等女学校使用教科図書表 明治四三年度』1912年、147頁（教科書研究資料文献第十一集、芳文閣、1992年復刻版使用）。
- ・山形県教育会・山形県音楽連盟編『山形県小学唱歌』尋常四年、京文社出版、1930年（滝沢氏寄贈）。

〔新聞・雑誌〕

- ・『香川新報』1891年5月6日（香川県立図書館所蔵）。
- ・同声会編集部編『同声会報』1930-1942年（国立音楽大学附属図書館、東京芸術大学附属図書館所蔵）。
- ・座談会「聴覚訓練の諸問題——「聴覚訓練レコード」を中心に」『レコード音楽』8月号、レコード音楽社、1941年、43-55頁。
- ・受験研究社編集部山田眞雄編『全国師範学校入学試験解答附問題集 昭和十二年度準備用』昭和十一年度施行第二部用、受験研究社、1936年。
- ・日本教育音楽協会編『教育音楽』日本教育音楽協会、1923-40年（東京芸術大学附属図書館所蔵）。
- ・学校音楽研究会編『学校音楽』共益商社書店、1933-1941年（東京芸術大学附属図書館所蔵）。
- ・『教育週報』。
- ・『日本教育』国民教育図書、1941-1947年（岡山大学附属図書館所蔵）。

〔戦前 学校史〕

- ・秋田県師範学校編『創立六十年』秋田県師範学校、1933年（日本教育史文献集成、第一書房、1981年復刻版使用）。
- ・岡山県女子師範学校附属小学校初等教育研究会編著（下村千代松代表）『教育教授の要訣』細謹舎書店、1931年。
- ・岡山県女子師範学校編『記念誌岡山県女子師範学校』1932年。
- ・京都府師範学校編『京都府師範学校沿革史』三國谷三四郎編集兼発行人、1938年（日本教育史文献集成、第一書房、1982年復刻版使用）。
- ・滋賀県師範学校編『滋賀県師範学校六十年史』滋賀県師範学校、1935年（日本教育史文献集成、第一書房、1981年復刻版使用）。
- ・東京府青山師範学校編『創立六十年青山師範学校沿革史』東京府青山師範学校、1936年（私蔵）。
- ・奈良県師範学校『奈良県師範学校五十年史』1940年（1988年復刻版、第一書房）。
- ・兵庫県明石女子師範学校編『回顧三十年』兵庫県明石女子師範学校、1933年（日本教育史文献集成、第一書房、1983年復刻版使用）。
- ・兵庫県姫路師範学校編『姫路師範学校の教育』1936年（私蔵）。
- ・福島県師範学校編『福師創立六十年』福島県師範学校、1933年（日本教育史文献集成、第一書房、1982年復刻版使用）。
- ・山梨県師範学校『沿革史 其の四』昭和二年以降 附録、1934年（山梨大学附属図書館所蔵）。

〔戦後 学校史〕

- ・今井孝『青森県師範学校 草創もの語り』1989年。
- ・岩手大学教育学部創基百年刊行委員会編『創基百年 岩手大学教育学部』1976年、145-155頁。
- ・宇都宮大学教育学部史編纂委員会『宇都宮大学教育学部百十五年史』1989年、70頁。
- ・大阪音楽大学八〇年史編集室『大阪音楽大学八〇年史——楽のまなびや』大阪音楽大学、1996年。
- ・岡山大学二十年史編さん委員会編『岡山大学二十年史』1969年。
- ・岡山師範学校記念碑建立委員会『回想岡山師範学校』1976年。
- ・お茶の水女子大学百年史刊行委員会編『お茶の水女子大学百年史』1984年。
- ・香川師範学校男子部本科・昭和23年3月卒同窓生『わが香川師範時代』1996年。
- ・香川師範学校男子本科・昭和23年3月卒同窓生『年表 わが香川師範時代 [昭和17年2月15日～昭和23年3月6日]』1996年。
- ・香川大学編『香川大学十年史』香川大学、1959年。
- ・香川大学30年史編集委員会編『香川大学三十年史』香川大学、1980年。
- ・香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会『香川大学教育学部百年のあゆみ』香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会、1989年。
- ・熊谷勉編『愛知教育大学史』愛知教育大学、1975年。
- ・群馬大学教育学部百年史編修委員会編『群馬大学教育学部百年史』1979年。
- ・芸大・昭和16年組『組曲<集い>』1972年（私蔵）。
- ・高知師範学校略史編集委員会『高知師範学校略史』高知師範百年祭実行委員会、1974年。
- ・興水はる海編『写真でつづる お茶の水の体育110年』1998年。
- ・作道好男・作道克彦編『岩手大学教育学部百年史』教育文化出版、1983年。

- ・東京芸術大学百年史刊行委員会・財団法人芸術研究振興財団『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編第一巻』音楽之友社, 1987年。
- ・東京芸術大学百年史編集委員会・財団法人芸術研究振興財団編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』音楽之友社, 2003年。
- ・長野県教育史刊行会『長野県教育史 第一巻 総説編一』長野県教育史刊行会, 1978年。
- ・奈良教育大学創立百周年記念会百年史部編『奈良教育大学——百年の歩み』1990年。
- ・広島大学二十五年史編集委員会『広島大学二十五年史包括校史』広島大学, 1977年。
- ・藤村学園創立百周年記念記録等作成実行委員会『藤村学園 100年のあゆみ』学校法人藤村学園, 2002年。
- ・丸田銚二郎『山梨大学学芸学部沿革史』山梨大学学芸学部 1964年 (山梨大学附属図書館所蔵)。
- ・竜城会『竜城会 60年誌』竜城会, 1968年。

【史料集・索引】

- ・秋田県立博物館編『「秋田の音楽家」展示解説資料』平成 15 年度秋田の先覚記念室企画コーナー展, 秋田県立博物館, 2003 年。
- ・秋山龍英『日本の洋楽百年史』第一法規出版, 1966 年。
- ・石川謙代表『近代日本教育制度資料』1956 年 (野間教育研究所蔵)。
- ・岩井正浩『資料日本音楽教育史』青葉図書, 1978 年 (1979 年改訂版使用)。
- ・大阪音楽大学音楽文化研究所編『大阪音楽文化史資料』昭和編, 大阪音楽大学, 1970 年。
- ・大阪府天王寺師範学校・同附属小学校共著, 国民学校精説附録『文部省国民学校講習の実際』東洋図書, 1940 年 (私蔵)。
- ・奥田真丈監修『教科教育百年史』建帛社, 1985 年。
- ・教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史』第 1 巻—第 12 巻, 1938-1939 年 (岡山大学附属図書館所蔵)。
- ・京都市学校歴史博物館編『我が国の近代教育の魁 京の学校・歴史探訪』財団法人京都市社会教育振興財団, 1998 年。
- ・黒田茂次郎・土館長言『明治学制沿革史』金港堂書籍, 1906 年 (有明書房, 1992 年復刻版使用)。
- ・『コロンビアレコード』邦楽・洋楽, 四月新譜, 1934 年 (私蔵)。
- ・『コロンビア教育レコード総目録』(私蔵)。
- ・日本教育音楽協会『本邦音楽教育史』音楽教育書出版協会, 1934 年 (第一書房, 1982 年復刻版使用)。
- ・日本近代教育史料研究会編『資料 文政審議会 第一集 総覧』明星大学出版部, 1989 年。
- ・日本放送協会編, 文部省『国民学校教則案説明要領及解説』日本放送出版協会, 1940 年 (私蔵)。
- ・日本放送協会編, 文部省『国民学校教科書編纂趣旨解説』日本放送出版協会, 1941 年 (私蔵)。
- ・日本放送協会編, 文部省『国民学校芸能科音楽指導解説』日本放送出版協会, 1941 年 (私蔵)。
- ・乗杉嘉壽『聴覚訓練用レコード製作に就いて』『東京音楽学校監修聴覚訓練用レコード 指導解説書』コロンビア教育レコード, 1941 年, 3 頁。
- ・森恭子・吉永誠吾『戦前の音楽関係文献目録——熊本大学所蔵』熊本大学教育実践研究第 15 号, 1998 年, 171-177 頁。
- ・文部省普通学務局編『全国師範学校ニ関スル諸調査』1907 (明治 40) -1940 (昭和 15) 年 (佐々木享監修, 文部省教育統計・調査資料集成, 第一巻—第九巻, 1987 年復刻版を使用) (岡山大学附属図書館所蔵)。
- ・文部省教育調査部『師範教育関係法令の沿革』1938 年 (私蔵)。
- ・文部省総務局調査課『師範教育関係法令の沿革 続篇』1943 年 (文部省調査部調査資料第十集, 湘南堂書店, 1981 年復刻版使用)。
- ・文部省『高等女学校教科教授及修練指導要目』1943 年, 144-152 頁 (北海道大学附属図書館)。
- ・文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943 年 (高知大学附属図書館所蔵)。
- ・文部省『中学校教科教授及修練指導要目』1943 年, 42-47 頁 (駒澤大学図書館)。
- ・文部省『学制百年史』ぎょうせい, 1972 年。
- ・文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに, 1979 年。
- ・増井敬二『データ・音楽・につぼん』民主音楽協会, 1980 年。

【著書】

- ・青柳善吾『音楽教育』東洋図書, 1927 年。
- ・伊沢修二『音楽取調成績申報書』1884 年, 23 頁 (山住正巳校注『洋楽事始』平凡社, 1971 年を使用)。
- ・石川寅吉編『音楽の話と唱歌集 (上級用)』小学生全集第六十七巻, 文芸春秋社, 1927 年。
- ・井上武士『国民学校芸能科音楽精義』教育科学社, 1940 年 (1941 年重版) (私蔵)。
- ・井上武士「音名問題のいきさつ」あの日あの頃『教育音楽 小学版』12 月号, 音楽之友社, 1963 年, 46-47 頁。
- ・井上武士「国民学校における音名唱法決定のいきさつ」『音楽教育研究』6, 音楽之友社, 1968 年, 28-41 頁。

- ・上田友亀『国民学校音楽指導の研究』共益商社書店, 1943 年 (国立国会図書館所蔵)。
- ・小川一朗『ピアノ・オルガンの教え方』新教育音楽叢書, 音楽之友社, 1949 年。
- ・草川宣雄『現代教育学大系各科篇第二十二卷 音楽教授学』成美堂書店, 1936 年。
- ・草川宣雄『国民学校音楽教授論』音楽教育体系第一巻, 晃文社, 1940 年 (私蔵)。
- ・黒沢隆朝『音楽史』洋楽叢書第二冊, 敬文館, 1927 年 (重版 1932 年使用) (東京芸術大学附属図書館所蔵)。
- ・黒沢隆朝・小川一朗『音楽鑑賞図譜』共益商社書店, 1935 年 (私蔵)。
- ・黒沢隆朝『戦争と音楽』学校音楽研究会編『学校音楽』昭和 13 年 2 月号, 共益商社書店, 1938 年, 13-15 頁。
- ・黒沢隆朝『レコード音楽と人生』学校音楽研究会編『学校音楽』昭和 13 年 8 月号, 共益商社書店, 1938 年, 36-39 頁。
- ・黒沢隆朝『楽器大図鑑』共益商社書店, 1938 年。
- ・黒沢隆朝『南洋の音楽教育』学校音楽研究会編『学校音楽』昭和 14 年 11 月号, 共益商社書店, 1939 年, 9-12 頁。
- ・北村久雄『新音楽教育の研究』厚生閣, 1934 年 (私蔵)。
- ・北村久雄『文部省案準拠 和音感覚訓練の実際』厚生閣, 1941 年 (私蔵)。
- ・工藤富次郎『改革の途にある唱歌教授法要領 (後編)』共益商社書店, 1925 年 (1929 年重版使用)。
- ・坂本栄三『聴覚訓練』帝国出版協会, 1942 年 (私蔵)。
- ・佐藤吉五郎『和音感教育』三喜堂, 1940 年 (岡山大学附属図書館所蔵)。
- ・沢崎定之『基礎唱歌法』共益商社書店, 1934 年 (1935 年重版使用) (私蔵)。
- ・塩野先生追想集刊行委員会『隋流導流——塩野直道先生の業績と思い出』新興出版社啓林館, 1982 年。
- ・田尾義行『国民学校の実践的研究』香川県師範学校附属小学校, 1940 年 (香川県立図書館所蔵)。
- ・田辺尚雄『蓄音機とレコードの選び方・聴き方』先進社, 1931 年 (国立音楽大学附属図書館所蔵)。
- ・谷原義一『教科書行政法』有斐閣, 1935 年 (私蔵)。
- ・中田吉昭編『恒次恒次先生百年記念誌』2005 年。
- ・野村長一『名曲決定盤 あらえびす』中央公論社, 1939 年 (私蔵)。
- ・乗杉享『乗杉嘉壽文集』1995 年。
- ・福井直秋『唱歌の歌ひ方と教へ方』共益商社書店, 1924 年 (私蔵)。
- ・福井直秋『伴奏の作り方』共益商社書店, 1930 年 (1932 年重版使用) (国立音楽大学附属図書館所蔵)。
- ・堀内敬三『戦争と音楽家』学校音楽研究会編『学校音楽』昭和 13 年 8 月号, 共益商社書店, 1938 年, 40-44 頁 (東京芸術大学附属図書館所蔵)。
- ・矢島繁太郎『国民学校教師の為の音楽鑑賞指導の実際』共益商社書店, 1942 年 (私蔵)。
- ・松宮哲夫監修・著『塩野直道関係著作展目録』京都教育大学附属図書館編集・発行, 2005 年。
- ・武蔵野音楽大学音楽教育学科編集委員会『福井直秋著作 解題』2000 年。
- ・山口保治『国民学校と家庭に於ける聴覚訓練』照林堂書店, 1942 年, 32-33 頁。

2. 参 考 文 献

[教員養成史の分野]

- ・阿波根直誠代表『沖縄県の戦前における師範学校を中心とする教員養成についての実証的研究』1980年。
- ・安部崇慶『芸道の教育』ナカニシヤ出版、1997年。
- ・石戸谷哲夫『日本教員史研究』講談社、1958年。
- ・石戸谷哲夫・門脇厚司『日本教員社会史研究』亜紀書房、1981年。
- ・井上恵美子・伊藤めぐみ「旧学制下における「共学」－「別学」の存在構造」『名古屋大学教育学部紀要（教育学科）』第39巻第1号、名古屋大学教育学部、1992年、249-250頁。
- ・井上恵美子「戦前中等教員免許状制度における男女差別に関する研究——その成立と撤廃を中心に」佐々木亨編『技術教育・職業教育の諸相』大空社、1996年、315頁。
- ・江利川春雄「師範学校における英語科教育の歴史（1）——明治・大正期」『日本英語教育史研究』第12号、日本英語教育史学会、1997年、123頁。
- ・江利川春雄「師範学校における英語科教育の歴史（2）——昭和期」『日本英語教育史研究』第13号、日本英語教育史学会、1998年、173-202頁。
- ・大江志乃夫『国民教育と軍隊』新日本出版社、1974年（1980年重版使用）。
- ・小沢薫「教育審議会における師範学校制度の改革構想に関する一研究」『弘前大学教育学部紀要』第32A、弘前大学教育学部、1974年、11-24頁。
- ・海後宗臣編『教員養成（戦後日本の教育改革 第八巻）』東京大学出版会、1971年。
- ・影山昇『愛媛県師範教育の歴史』青葉図書、1974年。
- ・門脇厚司『東京教員生活史研究』学文社、2004年。
- ・神立春樹『明治高等教育制度史論』御茶の水書房、2005年。
- ・木全清博「大津師範学校における小学校教員養成教育の展開——滋賀県教員養成史研究（Ⅱ）」『実践センター紀要』第6巻、1998年、17-43頁。
- ・木村元「戦時教育史研究の動向と課題——近年の教育科学運動研究に注目して」藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学編『教育史像の再構築』教育学年報6、世織書房、1997年、199-214頁。
- ・熊野勝洋『香川県明治教育史』香川県図書館学会・香川県中学校社会科研究会、2000年。
- ・倉沢剛『教育令の研究』講談社、1975年。倉沢剛『続学校令の研究』講談社、1980年。
- ・倉沢剛『続学校令の研究』講談社、1980年。
- ・国立教育研究所編『日本近代教育百年史 5』第3巻、1974年。
- ・佐藤幹男『近代日本教員現職研修史研究』風間書房、1999年。
- ・清水康幸『教育審議会の研究 師範学校改革』野間教育研究所第42集、2000年。
- ・陣内靖彦『日本の教員社会』東洋館出版社、1981年。
- ・陣内靖彦『東京・師範学校生活史研究』東京学芸大学出版会、2005年。
- ・新福祐子『女子師範学校の全容』家政教育社、2000年。
- ・杉森知也「師範学校の学校制度体系における地位の転換——1890年代における師範学校の変動」『教育学雑誌』30巻、日本大学教育学会事務局、1996年、74-86頁。
- ・杉森知也「臨時教員養成所の設立と機能について」『教育学雑誌』31巻、日本大学教育学会事務局、1997年、94-106頁。
- ・杉森知也「中等教員の「計画的養成」と臨時教員養成所——1922～1932年頃における実態の検討から」『研究紀要』60巻、2000年、129-142頁。
- ・杉森知也「中等教員養成史上における臨時教員養成所の位置と役割」『日本の教育史学』教育史学会紀要第43集、2000年、60-76頁。
- ・高木太郎・杉山明男編『教員養成大学』三一書房、1959年。
- ・竹田宏子「岡山県の師範学校における保育者養成史の研究（第一報）」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』第38巻第1部、中国四国教育学会、1992年、78-83頁。
- ・竹田宏子「岡山県の師範学校における保育者養成史の研究（第二報）」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』第39巻第1部、中国四国教育学会、1993年、82-87頁。
- ・田甫桂三編『近代日本音楽教育史Ⅰ』学文社、1980年。
- ・田甫桂三編『近代日本音楽教育史Ⅱ』学文社、1981年。

- ・千葉昌弘「高知県教員養成史研究ノート（Ⅰ）——〈学制〉期高知県の教員及び教員養成——」『高知大学教育学部研究報告』第1部第33号, 1981年, 1-21頁。
- ・千葉昌弘「高知県教員養成史研究ノート（Ⅱ）——〈教育令〉期高知県の教員及び教員養成——」『高知大学教育学部研究報告』第1部第34号, 1982年, 43-70頁。
- ・千葉昌弘「高知県教員養成史研究ノート（Ⅲ）——所謂諸〈学校令〉期高知県の教員及び教員養成——」『高知大学教育学部研究報告』第1部第35号, 1983年, 25-44頁。
- ・千葉昌弘「高知県教員養成史研究ノート（Ⅳ）——〈教育勅語〉の渙発から〈師範教育令〉の公布に至る時期の高知県の教員及び教員養成」『高知大学教育学部研究報告』第1部第36号, 1984年, 27-48頁。
- ・千葉昌弘「高知県教員養成史研究ノート（Ⅴ）——〈師範教育令〉から〈師範学校規定〉に至る時期の高知県の教員及び教員養成——」『高知大学教育学部研究報告』第1部第37号, 1985年, 57-69頁。
- ・千葉昌弘「高知県教員養成史研究ノート（Ⅵ）——〈師範学校規定〉以降の高知県の教員及び教員養成——」『高知大学教育学部研究報告』第1部第38号, 1986年, 39-53頁。
- ・千葉昌弘「高知県教員養成史研究ノート（Ⅶ）——明治末〜大正期における高知県の教員及び教員養成——」『高知大学教育学部研究報告』第1部第39号, 1987年, 27-48頁。
- ・千葉昌弘「高知県教員養成史研究ノート（Ⅷ）——大正末〜昭和戦前期における高知県の教員及び教員養成——」『高知大学教育学部研究報告』第1部第40号, 1988年, 99-127頁。
- ・寺崎昌男「師範学校改革諸案と師範学校の昇格」中内敏夫・川合章編『日本の教師6教員養成の歴史と構造』1974年。
- ・寺崎昌男・戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育——皇国民「練成」の理念と実践』1987年。
- ・寺崎昌男編『〈文検〉の研究』学文社, 1997年。
- ・十川秀雄『哲人教育家 三国谷三郎伝』青森県地方出版物流通センター, 1984年。
- ・富樫裕・黒岩祐一郎「明治末期における教育実習の実状について——明治43年度群馬県師範学校における一教生の日誌より」『群馬大学教育実践研究』第9号, 群馬大学教育学部, 1992年, 81-92頁。
- ・仲新監修, 篠田弘・手塚武彦編『学校の歴史第5巻 教員養成の歴史』第一法規出版, 1979年。
- ・仲新・稲垣忠彦・佐藤秀夫『近代日本教科書教授法資料集成』第十巻教師用書6図工・音楽篇, 東京書籍, 1983年。
- ・中内敏夫・川合章編『日本の教師6／教員養成の歴史と構造』明治図書出版, 1974年。
- ・中島太郎『教員養成の研究』第一法規出版, 1961年。
- ・西村誠「戦前中等教員養成と私立学校——『哲学館事件』にふれて」『東洋大学紀要（文学部篇）』第21集——東洋大学創立八十周年記念号, 東洋大学学術研究会, 1967年, 117-133頁。
- ・野村新・佐藤尚子・神崎英紀『教員養成史の二重構造的特質に関する実証的研究——戦前日本における地方実践例の解明』溪水社, 2001年。
- ・橋本紀子『男女共学制の史的研究』大月書店, 1992年（1995年重版使用）。
- ・橋本紀子・逸見勝亮編『ジェンダーと教育の歴史』川島書店, 2003年。
- ・林三平「教員養成構想の変容と制度の改革」仲新監修『学校の歴史 第5巻 教員養成の歴史』第一法規出版, 1979年, 60-76頁。
- ・林竹二「小学校教員養成のための教育における二、三の問題点と改善の方向について（私見）」日本教育学会大学教育研究委員会編『宮城教育大学の大学改革』1974年, 46-48頁。
- ・平田宗史「福岡県教員養成史研究（一）」『福岡教育大学紀要』1975年, 39-50頁。
- ・平田宗史「福岡県教員養成史研究（二）」『福岡教育大学紀要』1976年, 37-52頁。
- ・平田宗史「福岡県教員養成史研究（三）」『福岡教育大学紀要』第27号第4分冊, 1977年, 35-52頁。
- ・平田宗史「福岡県教員養成史研究（四）」『福岡教育大学紀要』第28号第4分冊, 1975年, 35-47頁。
- ・平田宗史「福岡県教員養成史研究（五）」『福岡教育大学紀要』第29号第4分冊, 1979年, 65-76頁。
- ・平田宗史「福岡県教員養成史研究（六）」『福岡教育大学紀要』第30号第4分冊, 1980年, 109-122頁。
- ・平田宗史「福岡県教員養成史研究（七）」『福岡教育大学紀要』第31号第4分冊, 1981年, 105-117頁。
- ・平田宗史「福岡県教員養成史研究（八）」『福岡教育大学紀要』第33号第4分冊, 1983年, 123-131頁。
- ・平田宗史「福岡県教員養成史研究（九）」『福岡教育大学紀要』第34号第4分冊, 1984年, 111-118頁。
- ・平田宗史「福岡県教員養成史研究（十）」『福岡教育大学紀要』第35号第4分冊, 1985年, 119-128頁。
- ・平田宗史『福岡県教員養成史研究——戦前編』海鳥社, 1994年。
- ・平田宗史・平田トシ子「師範学校令期の地方における女教員養成機関について」『福岡教育大学紀要』第28号第4分冊, 1978年, 49-58頁。

- ・平田宗史・平田トシ子「師範学校令期の地方における女教員養成機関について——各府県における女教員養成の実態についての宮崎県の照会（明治35年）の分析——」『福岡教育大学紀要』第29号第4分冊，1978年，77-84頁。
- ・平田宗史「官立長崎師範学校」『福岡教育大学紀要』第32号第4分冊，1982年，109-120頁。
- ・廣畑力『史料でみる大阪府池田師範学校の軌跡』2003年。
- ・藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学編『教育史像の再構築』教育学年報6，世織書房，1997年。
- ・船寄俊雄「戦前日本における中等教員検定制度史」『大阪教育大学紀要』第IV部門第37巻第2号，1988年，134頁。
- ・船寄俊雄『近代日本中等教員養成論争史——〈大学における教員養成〉原則の歴史的研究』学文社，1998年。
- ・船寄俊雄・無試験検定研究会編『近代日本中等教員養成に果たした私学の役割に関する歴史的研究』学文社，2005年。
- ・逸見勝亮「満州事変前後における師範学校政策に関する一考察」『北海道大学教育学部紀要』第17号，北海道大学教育学部，1970年，73-88頁。
- ・逸見勝亮「戦時体制下における師範学校政策の展開に関する一考察」『北海道大学教育学部紀要』第19号，北海道大学教育学部，1972年，111-126頁。
- ・逸見勝亮『師範学校制度史研究——十五年戦争下の教師教育——』北海道大学図書刊行会，1991年。
- ・牧昌見『日本教員資格制度史研究』風間書房，1971年。
- ・水原克敏『近代日本教員養成史研究——教育者精神主義の確立過程——』風間書房，1990年。
- ・水原克敏『近代日本カリキュラム政策史研究』風間書房，1997年，806-813頁。
- ・三好信浩『日本師範教育史の構造——地域実態史からの解析——』東洋館出版社，1991年。
- ・文部省『学制百年史（記述編）』前掲書，590頁。
- ・柳井久雄『師範学校——太平洋戦時下の教育』上毛新聞社，1999年。
- ・山崎博敏『教員採用の過去と未来』玉川大学出版部，1998年，67-87頁。
- ・山崎博敏「21世紀における学校教員の養成と確保——教員需要の変動と計画養成」『教育学研究』第70巻第2号，2003年，204-211頁。
- ・山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会，1967年。
- ・山田昇「戦前における中等学校教員の目的養成——高等師範学校等における教職教育及び教育実習」日本教育学会教師教育に関する研究委員会『教師教育の改善に関する実践的諸方策についての研究（第二次報告）』1980年，日本教育学会，189-190頁。
- ・山田昇「『大学における教員養成』と教員養成の研究」『教育学研究』第54巻第3号，日本教育学会，1987年，247-257頁。
- ・山田昇『戦後日本教員養成史研究』風間書房，風間書房，1993年（2002年重版使用）。
- ・山田浩幸『教師の歴史社会学——戦前における中等教員の階層構造——』晃洋書房，2002年。
- ・湯沢雍彦・古谷恵子『戦時女高師卒業者のライフコース——教育と戦争の影響を中心に』地域社会研究所，1996年。
- ・横須賀薫「教員養成専門大学の必要性と可能性」日本教育大学協会『会報』第84号，2002年6月，1頁。
- ・横畑知己「1943年〈師範教育令〉に関する一考察——師範学校昇格運動とその思想」日本教育学会『教育学研究』第54巻第3号，1987年，258-267頁。
- ・横畑知己「教員養成諸学校」寺崎昌男，戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育——皇国民「練成」の理念と実践』東京大学出版会，1987年，142-168頁。
- ・米田俊彦『教育審議会の研究 中等教育改革』野間教育研究所紀要第38集，財団法人野間教育研究所，1994年。

【教科書の分野】

- ・井上武士「教材・教科書にみる明治一〇〇年の歩み」『音楽教育研究』第4号，1968年，44-60頁。
- ・井上武士「教科書教材の変遷と子どもの歌」『音楽教育研究』9，音楽之友社，1969年，50-58頁。
- ・海後宗臣編『日本教科書体系近代編』第二十五巻唱歌，講談社，1965年。
- ・海後宗臣監修『図説教科書の歴史』日本図書センター，1996年。
- ・梶山雅史『近代日本教科書史研究——明治期検定制度の成立と崩壊』ミネルヴァ書房，1988年。
- ・唐沢富太郎『教師の歴史』創文社，1955年。
- ・菅道子『「ウタノホン上」『うたのほん下』『初等科音楽』日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社，2004年，52-53頁。
- ・財団法人教科書センター『旧制中等学校教科内容の変遷』ぎょうせい，1984年。
- ・坂本明『文部省唱歌の成立と変遷——「国民教育」の視点から』国定教科書における海外認識の研究——研究報告No.41 別添解説資料，財団法人中央教育研究所，1992年。
- ・佐藤秀夫・中村紀久二編『文部省掛図総覧』十 音楽・図工掛図，東京書籍，1989年。
- ・沢崎眞彦・平沢元編『なつかしの音楽教科書——あの小学校6年間はよみがえる』ヤマハミュージックメディア，2003年。

- ・谷原義一『教科書行政法』有斐閣, 1935年。
- ・近森一重「最初の指導要領と最後の国定教科書」『音楽教育研究』4, 音楽之友社, 1968年, 166-169頁。
- ・辻本雅史『「学び」の復権——模倣と習熟』角川書店, 1999年(2002年重版使用)。
- ・東京書籍株式会社社史編集委員会『教科書の変遷——東京書籍五十年の歩み』東京書籍, 1959年。
- ・仲新『近代教科書の成立』大日本雄弁会講談社, 1949年。
- ・中村紀久二『教科書の社会史』岩波書店, 1992年(2001年重版使用)。
- ・H.J.ワンダーリック, 土持ゲーリー法一『占領下日本の教科書改革』玉川大学出版部, 1998年。
- ・平田宗史『教科書でつづる近代日本教育制度史』北大路書房, 1991年(1998年重版使用)。
- ・山住正巳『教科書』岩波書店, 1970年。
- ・山住正巳『学校教科書』朝日新聞社, 1982年。
- ・山本文茂『教科書』日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社, 2004年, 300-306頁。

〔音楽教育学の分野〕

- ・赤井励『オルガンの文化史』青弓社, 1995年。
- ・赤井励「《尋常小学唱歌》研究の現状」安田寛代表編『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』ビクターエンタテインメント, 2000年, 206-210頁。
- ・赤井励「オルガンと唱歌の伴奏」『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』ビクターエンタテインメント, 2000年, 211-215。
- ・秋山治子「東京女子師範学校附属幼稚園の保育音楽について——先行研究の検証及び音楽美学的立場からの考察」『白梅学園短期大学紀要』第33号, 白梅学園短期大学, 1997年, 57-72頁。
- ・荒川恵子「声楽における演奏様式の定量的分析——シューベルト〈魔王〉の歴史的録音資料を用いて」『音楽学』第40号3号, 日本音楽学会, 1994年, 181-193頁。
- ・市川理恵「音楽取調掛におけるピアノ教育の導入」『日本女子大学人間社会研究科紀要』第2号, 日本女子大学, 1996年, 41-51頁。
- ・市川理恵「音楽取調掛におけるピアノ教育の実践——「教授細目」及び使用教則本の考察を中心に」『音楽教育史研究』第2号, 音楽教育史学会, 1999年, 1-11頁。
- ・岩井正浩『子どもの歌の音楽文化史的研究——日本伝統音楽を視座とした1900-1940年の展開』神戸大学大学院文化学研究科博士論文, 1995年。
- ・岩井正浩『増補子どもの歌の文化史——二〇世紀前半期の日本』第一書房, 1998年(2003年重版使用)。
- ・岩崎洋一「児童発声の変遷1」『季刊音楽教育研究』1981年夏号第24巻3号, 音楽之友社, 1981年, 24-27頁。
- ・岩崎洋一「児童発声の変遷2」『季刊音楽教育研究』1981年秋号第24巻第4号, 音楽之友社, 1981年。
- ・岩崎洋一「男子児童発声の系譜——1930年代から1950年代にかけて」日本音楽教育学会編『音楽教育学研究1 音楽教育の理論研究』音楽之友社, 2000年, 213-226頁。
- ・岩上行忍「鳥取県における音楽教育の変遷—主として鳥取師範学校および鳥取大学の音楽科教員と卒業生について—」『鳥取大学教育学部研究報告教育科学』第12巻第2号, 1970年。
- ・上田誠二「第一次世界大戦後日本の音楽教育運動——日本教育音楽協会の設立と展開」歴史学研究会編『歴史学研究』No.799, 青木書店, 2005年, 1-20頁・64頁。
- ・上田友亀「器楽教育の黎明期」『音楽教育研究』4, 音楽之友社, 1968年, 150-154頁。
- ・上原一馬『日本音楽教育文化史』音楽之友社, 1988年。
- ・歌崎和彦『証言／日本洋楽レコード史』(戦前編) 音楽之友社, 1998年, 202頁。
- ・江崎公子「高等女学校の音楽教育——高等女学校規定と臨時教育会議の審議を中心として」『音楽研究』大学院研究年報第十輯, 国立音楽大学, 1998年, 96-97頁。
- ・江崎公子「明治初期の信号喇叭について——赤松小三郎訳《英国歩兵練法》をめぐって」『音楽研究』大学院研究年報第15集, 国立音楽大学大学院, 2003年, 83-109頁。
- ・江崎公子「唱歌科と教科書(一)」『音楽研究』大学院研究年報第十五輯, 国立音楽大学大学院, 2004年, 132-102頁。
- ・江崎公子「唱歌科と教科書(二)」『音楽研究』大学院研究年報第十七輯, 国立音楽大学大学院, 2005年, 132-102頁。
- ・国府華子「わが国における明治期のピアノ教育——音楽取調掛, 東京音楽学校を中心に」『音楽教育史研究』第2号, 音楽教育史学会, 1999年, 25-36頁。
- ・奥忍「「コールユーブンゲン」を用いた場合」『昭和60・61年度教育方法等改善経費による小学校教員養成課程教科専門「音楽」におけ

- るソルフェージュの学習方法の現代化』奈良教育大学, 1987年, 35頁。
- ・奥忍「大正時代に日本人の音感覚はどのように変化したか——アメリカ起源の3つの流行歌の音律の分析」『奈良教育大学教育研究所紀要』Vol.24, 1988年, 1-9頁。
 - ・奥忍「中山晋平の流行歌はどのように歌われていたか——松井須磨子, 後藤紫雲, 佐藤千代子の場合」『奈良教育大学紀要』第37巻第1号(人文・社会), 1988年, 37-47頁。
 - ・奥忍「音楽教員養成機関における入学試験制度に関する比較教育学的研究」日本音楽教育学会編『音楽教育学研究1 音楽教育の理論研究』音楽之友社, 2000年, 349-362頁。
 - ・奥忍「教員養成における音楽コアカリキュラムの編成をめぐって」『関西楽理研究XX』関西楽理研究会, 2003年, 145-150頁。
 - ・奥中康人『唱歌と規律——近代日本の統治技術としての音楽』大阪大学大学院文学研究科博士論文, 2002年。
 - ・奥中康人「五線譜による儀式唱歌の国楽化」劉麟玉代表『近代音楽・歌謡の成立過程における国民性の問題』平成13・14年度科学研究費補助金研究成果報告書, 2003年, 73-84頁。
 - ・加藤晴子『「こもりうた」にみる音楽教育的機能——音楽感覚の形成を視点とした教育実践への提案』兵庫教育大学大学院連合学校教育研究科博士論文, 2004年。
 - ・加藤善子『近代日本における西洋音楽の普及——社会学的考察』大阪大学大学院人間科学研究科博士論文, 2000年。
 - ・河口道朗「戦後の音楽と音楽教育(17) 音楽教育の新動向(その八)」『音楽教育研究』1月号, 音楽之友社, 1973年, 32-40頁。
 - ・河口道朗「十五年戦争と音感教育——「教学刷新」下の学校音楽の変質と「音感教育」の問題を中心に」『音楽教育研究』2月号第17巻第2号, 音楽之友社, 1974年, 63-75頁。
 - ・河口道朗「軍国主義と音楽教育」『小学校音楽教育講座 第2巻 音楽教育の歴史』音楽之友社, 1983年, 78-93頁。
 - ・河口道朗『音楽教育の理論と歴史』音楽之友社, 1991年。
 - ・河口道朗『近代音楽教育成立史研究』音楽之友社, 1996年。
 - ・菅忠道「昭和期(戦前・戦中)の子どもの歌」『音楽教育研究』9, 音楽之友社, 1969年, 74-81頁。
 - ・北原かな子「明治期津軽地方における唱歌の普及——地方への唱歌普及の一例として」安田寛代表編『原典による近代唱歌集成——誕生・変遷・伝播——解説・論文・索引』ビクターエンタテインメント, 2000年, 198-205頁。
 - ・城多又兵衛「絶対音感教育の時代」『音楽教育研究』4, 音楽之友社, 1968年, 159頁。
 - ・教員養成学部教員研究集会音楽科教育部会『音楽科教育の研究』東京書籍, 1972年。
 - ・木村信之「教育思潮を背景にした音楽教育の流れ」『音楽教育研究』4, 音楽之友社, 1968年, 24-43頁。
 - ・木村信之『音楽教育の証言者たち上 戦前を中心に』音楽之友社, 1986年。
 - ・木村信之『音楽教育の証言者たち下 戦後を中心に』音楽之友社, 1986年。
 - ・木村信之『昭和戦後 音楽教育史』音楽之友社, 1993年。
 - ・倉田喜弘『日本レコード文化史』東京書籍, 1979年, 474-476頁。
 - ・黒沢隆朝『西洋楽器の歴史』音楽之友社, 1949年。
 - ・黒沢隆朝『楽器の歴史』音楽之友社, 1956年。
 - ・黒沢隆朝・真篠将・浜野政雄『音楽鑑賞指導集成——文部省学習指導要領準拠』第一〜四編, 全音楽譜出版社, 1953-54年。
 - ・黒沢隆朝「国定教科書から検定教科書へ」『音楽教育研究』8月号, 第14巻第8号, 音楽之友社, 1971年, 66-70頁。
 - ・黒沢隆朝『音階の発生よりみた音楽起源論』音楽之友社, 1978年。
 - ・高仁淑(Ko, Insuk)『近代朝鮮の唱歌教育』九州大学出版会, 2004年。
 - ・小島美子「明治一〇〇年の音楽教育と伝統音楽の行方」『音楽教育研究』4, 音楽之友社, 1968年, 82-91頁。
 - ・小関崇司「音楽科学習指導案の史的研究——明治期から現代までの変遷」上越教育大学大学院修士論文, 2003年。
 - ・後藤重樹「新制大学の発足と教員養成」『音楽教育研究』8月号第14巻第8号, 音楽之友社, 1971年, 57-65頁。
 - ・坂本麻実子「代用音楽教員の領域——『田舎教師』からの近代音楽史展望」『お茶の水女子大学人間文化研究年報』第19号, お茶の水女子大学, 1995年, 9-15頁。
 - ・坂本麻実子「卒業演奏会とショパン——東京音楽学校の事例からの歴史的考察」『桐朋学園大学研究紀要』第21集, 桐朋学園大学, 1995年, 1-17頁。
 - ・坂本麻実子「近藤朔風とその訳詞曲最考」『富山大学教育学部紀要A(文科系)』第50号, 富山大学教育学部, 1997年, 11-22頁。
 - ・坂本麻実子「明治青年の立志と西洋音楽——『田舎教師』とその時代」『桐朋学園大学研究紀要』第25集, 桐朋学園大学, 1999年, 1-16頁。
 - ・坂本麻実子「明治時代の公立高等女学校への音楽教員の配置——東京音楽学校卒業生の勤務校の調査から」『富山大学教育学部紀要』第53号, 富山大学教育学部, 1999年, 45-55頁。

- ・坂本麻実子「東京音楽学校の青春——明治36年度～40年度入学生の修学状況からの考察」『桐朋学園大学研究紀要』第26集，桐朋学園大学，2000年，27-47頁。
- ・坂本麻実子「明治時代の師範学校への音楽教員の配置——東京音楽学校卒業生の勤務校の調査から」『富山大学教育学部紀要』第54号，富山大学教育学部，2000年，49-61頁。
- ・坂本麻実子「稽古する娘たちの明治日本と西洋音楽」『富山大学教育学部紀要』第56号，富山大学教育学部，2002年，61-68頁。
- ・坂本麻実子『明治中等音楽教員の研究——《田舎教師》とその時代——』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士論文，2002年。
- ・佐藤吉五郎「私はなぜ固定ドを主張するか——ドレミ式固定音名唱」『音楽教育研究』6，音楽之友社，1970年，72-84頁。
- ・佐藤吉五郎「戦中の音感教育——現場からの証言」『日本の音楽教育』教育音楽別冊，音楽之友社，1975年，76-79頁。
- ・佐野靖「東京音楽学校と教員養成——その教育内容の変遷をめぐって——」『季刊音楽教育研究』1988年春号第31巻第2号，音楽之友社，1988年。
- ・佐野靖「音楽科教員養成に期待されるもの——「専門職化」の視点から」浜野政雄監修『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社，1999年，340-351頁。
- ・沢崎真彦「「固定ド」・「移動ド」唱法の変遷——わが国の音楽教育界の動きを中心に」『音楽教育学』第16号，日本音楽教育学会，1986年，84頁。
- ・柴田知常「教育用鑑賞レコード選定の仕事」『音楽教育研究』4，音楽之友社，1968年，147-149頁。
- ・渋川久子「東京高等音楽学院の研究」『研究紀要』第22集，国立音楽大学，1988年，262-233頁。
- ・渋川久子「東京高等音楽学院史の研究（二）」『研究紀要』第23集，国立音楽大学，1988年，196-74頁。
- ・渋川久子「東京高等音楽学院・国立音楽学校史の研究」『研究紀要』第24集，国立音楽大学，1990年，230-208頁。
- ・嶋田由美「小学校校歌制定に関する研究——明治後期における東京府内小学校校歌制定過程の分析を通して」『音楽教育学』第16号，日本音楽教育学会，1987年，16-27頁。
- ・嶋田由美「唱歌会の系譜——明治20年前後の東京府下における唱歌教員養成機関としての役割」『音楽教育史研究』第3号，音楽教育史学会，2000年，19-30頁。
- ・嶋田由美「戦前の高等女学校の音楽教育実践——大阪府立大手前高等女学校における牛屋リョウの実践を中心として」『関西楽理研究XXII』関西楽理研究会，2005年，1-16頁。
- ・真常一雄「園田氏と音感教育」『音楽教育研究』4，音楽之友社，1968年，161-162頁。
- ・杉江淑子「近代日本の学校教育体制における専門的音楽家養成機能——歴史社会的アプローチの試み」『関西楽理研究XX』関西楽理研究会，2003年，66-73頁。
- ・杉田政夫『わが国の学校音楽教育におけるヘルバート主義の受容と展開——明治期における唱歌教材の構成理念にみる影響を中心に』広島大学大学院教育学研究科博士論文，2002年。
- ・杉田政夫『学校音楽教育とヘルバート主義——明治期における唱歌教材の構成理念にみる影響を中心に』風間書房，2005年。
- ・鈴木治「文部省唱歌成立の一断面」日本音楽教育学会編『音楽教育学研究1 音楽教育の理論研究』音楽之友社，2000年，178-189頁。
- ・瀬戸尊「明治・大正・昭和の音楽指導」『音楽教育研究』4，音楽之友社，1968年，99-108頁。
- ・第30回全国大会記念誌編集委員会『30年のあゆみ』日本教育大学協会全国音楽部専門大学部会第30回全国大会記念誌，日本教育大学協会全国音楽部専門大学部会事務局，2005年。
- ・高橋巖夫『昭和激動の音楽物語』葦書房，2002年。
- ・瀧井敬子『漱石が聴いたベートーヴェン』中央公論新社，2004年。
- ・田中健次『近代日本における洋楽器産業と音楽文化』大阪大学大学院文学研究科博士論文，1998年。
- ・田辺尚雄「田辺尚雄思い出ばなし その23 国民精神文化研究所」『季刊邦楽』通巻23号夏，邦楽社，1980年，109-113頁。
- ・田甫桂三編『近代日本音楽教育史Ⅰ』学文社，1980年。
- ・田甫桂三編『近代日本音楽教育史Ⅱ』学文社，1981年。
- ・玉川裕子「明治日本と西洋音楽——制度史からみた「美的受容」の成立」『比較文学・文化研究会』vol.2-1，1986年，31-49頁。
- ・塚原康子『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』多賀出版，1993年。
- ・塚本康彦・斎藤博「明治期の師範学校での音楽教育と音楽——内田采太郎の生涯と音楽作品——」『群馬大学教育学部紀要』第24巻，1989年。
- ・寺田和子『気骨の女』白揚社，1997年。
- ・寺田貴雄「田辺尚雄の音楽鑑賞論——〈音楽の聴き方〉（1936）を中心として」『音楽教育学』第27-2号，日本音楽教育学会，1997年，1-10頁。
- ・寺田貴雄「戦時期の鑑賞教育——鑑賞指導の明文化と，軍国主義的逸脱」音楽鑑賞教育振興会『音楽鑑賞教育』11月号，2001年，12-15

頁。

- ・東京芸術大学音楽取調掛研究班編、浜野政雄・服部幸三監修『音楽教育成立への軌跡』1976年、音楽之友社。
- ・東京新聞出版局編『上野奏楽堂物語』東京新聞出版局、1987年（1994年重版）。
- ・戸澤義夫「中等学校音楽教科書における「故郷」の位置」『群馬県立女子大学紀要』第22号、群馬県立女子大学、2001年、65-161頁。
- ・戸澤義夫「絶対の創失——音楽に見る近代—中等学校音楽教科書における《故郷》像の変遷（2）」『群馬県立女子大学紀要』第24号、群馬県立女子大学、2003年、97-222頁。
- ・戸ノ下達也「音楽による国民教化動員——演奏家協会、日本音楽文化協会の活動から」『立命館大学人文科学研究所紀要』1999年、82頁。
- ・中野義見「東京市における音感教育の経緯」『音楽教育研究／4』特大号、音楽之友社、1968年、156-158頁。
- ・中山裕一郎「わが国における音楽教員養成の歴史」『季刊音楽教育研究』76年春号第19巻第2号、音楽之友社、1976年。
- ・中山裕一郎「音楽教員養成の歴史」『小学校音楽教育講座2 音楽教育の歴史』音楽之友社、1983年。
- ・仲万美子『日本・中国・西洋音楽文化の重層的対話』大阪大学大学院文学研究科博士論文、1996年。
- ・西島央「ヘゲモニー装置としての唱歌科の成立過程——教案に示された授業実践の変遷を手かがりに」『教育社会学研究』第60集、日本教育社会学会、1997年、23-42頁。
- ・西島央「唱歌教育の受容・消費と国民意識に関する社会学的考察——長野県高遠町における聞き取り調査をもとに」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第39巻、1999年、125-136頁。
- ・西島央「児童からみた国民学校芸能科音楽——音楽教育の歴史の読み直しに向けて」『音楽教育研究ジャーナル』第14号、東京芸術大学音楽教育研究室、2000年、3-4頁。
- ・西島央「文部省唱歌と「日本人」意識」安田寛代表編『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』ビクターエンタテインメント、2000年、192-197頁。
- ・西島央「学校音楽はいかにして“国民”をつくったか」『編成されるナショナリズム』岩波講座近代日本の文化史5、岩波書店、2002年、237-270頁。
- ・西原稔『ピアノの誕生』講談社、1995年。
- ・西原稔「産業史の視点から見た戦前における日本のピアノ産業」比較文明学会編『比較文明』13、刀水書房、1998年、98-115頁。
- ・長谷川慎「師範学校」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社、2004年。
- ・畑中良輔『音楽青年誕生物語——繰り返せない旅だから・2』音楽之友社、2004年。
- ・服部幸三「芸大百周年と音楽教育」『季刊音楽教育研究』1988年春号第31巻第2号、音楽之友社、1988年。
- ・浜野政雄「教員養成制度と音楽教育」『音楽教育研究』第4号、音楽之友社、1968年、69-81頁。
- ・浜野政雄著作集編集委員会編、浜野政雄評論集『戦後音楽教育は何をしたか』音楽之友社、1982年、116頁。
- ・浜松敦子「民衆の音楽活動と唱歌教育の関連性についての一考察——東京都台東区住民の実態調査にもとづいて」『音楽教育学』第15号、日本音楽教育学会、1986年、76-87頁。
- ・朴成泰（パクソンテ）『韓国近代学校における民族主義教員養成の成立過程』風間書房、1996年。
- ・橋本清司「戦時下の絶対音感教育」『音楽教育研究』6、音楽之友社、1970年、85-91頁。
- ・橋本静代「サテイス・コールマンによる“Creative Music”の思想——米国における資料と日本の簡易楽器導入時への影響について」『音楽教育史研究』第3号、音楽教育史学会、2000年、31-42頁。
- ・檜山陸郎『ピアノものがたり』芸術現代社、1986年。
- ・檜山陸郎『楽器産業』音楽・楽器ビジネス早わかり読本、音楽之友社、1990年。
- ・平井啓『奈良県音楽近代史——音楽教育を中心に——』1995年。
- ・平井建二「1920・1930年代の音楽教育の動向に関する一考察——奈良女子高等師範学校附属小学校を中心に」『音楽教育学』11号、日本音楽教育学会、1981年。
- ・平井建二「わが国の音楽教育における創造性の思想的系譜」日本音楽教育学会編『音楽教育学の展望Ⅱ（上）』音楽之友社、1991年、32-39頁。
- ・平井康三郎「唱法をめぐる音楽上の問題点」『音楽教育研究』6、音楽之友社、1970年、46-55頁。
- ・福井直秋伝記刊行会、加藤成之編『福井直秋伝』1969年。
- ・藤井綾「創られる天才——昭和初期の絶対音感教育」大阪大学大学院文学研究科日本学研究室編『日本学報』第23号、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室、2004年、103-125頁。
- ・別府愛「福井直秋の教育活動と当時の教育状況——師範学校の教育を中心に——」武蔵野音楽大学音楽教育学科編集委員会編『福井直秋 解題』2000年。
- ・堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』岩波書店、1958年。

- ・真篠将先生退官記念著作集編集委員会編『真篠将先生退官記念著作集 真篠将音楽教育を語る』音楽之友社, 1986年。
- ・丸山太郎「音楽科教員養成研究の歴史的展開に関する研究——1945年から1995年の研究文献の分析を通して——」『東京学芸大学紀要 第5部門』第49集, 1997年, 33-51頁。
- ・水野康孝「絶対音感教育物語」『音楽教育研究』4, 音楽之友社, 1968年, 163-164頁。
- ・三村真弓「大正後期から昭和初期の小学校唱歌科における児童作曲法の展開と特質」『音楽教育学』30-1号, 日本音楽教育学会, 2000年。
- ・虫明眞砂子「児童に対する歌唱指導の研究(I)——発声について」『研究収録』第119号, 岡山大学教育学部, 2002年, 31-39頁。
- ・村尾忠廣「唱歌教育の地方への普及」『音楽教育研究』8月号, 音楽之友社, 1970年, 145頁。
- ・村尾忠廣「藤原彦吉による唱歌教育の実践(一)——明治期, 愛知県八名郡における一教師の記録」『音楽教育研究』第16巻第6号, 音楽之友社, 1973年。
- ・村尾忠廣「学校唱歌の開設と地方への普及」東京芸術大学音楽取調掛研究班編『音楽教育成立への軌跡』音楽之友社, 1976年, 423頁。
- ・安田寛・北原かな子「楠美恩三郎と弘前」『弘前大学教育学部紀要』第81号, 弘前大学教育学部, 1999年, 65-73頁。
- ・安田寛「<君が代>と儀式唱歌」安田寛代表編『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』ビクターエンタテインメント, 2000年, 90-93頁。
- ・安田寛「軍歌の流行」安田寛代表編『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』ビクターエンタテインメント, 2000年, 94-97頁。
- ・山住正巳「昭和初期の音楽教育」『音楽教育研究』11, 音楽之友社, 1966年, 12-19頁。
- ・山住正巳「『文部省唱歌』に対する師範学校の意見について」『音楽教育研究』6, 音楽之友社, 1967年。
- ・山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会, 1967年。
- ・山本文茂「芸能科音楽教材の特質——教科書・教師用指導書の分析を通して」浜野政雄監修『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社, 1999年, 290頁。
- ・横浜市立歴史博物館・横浜開港資料館編『製造元祖 横浜 風琴洋琴ものがたり』横浜市歴史博物館・(財)横浜市ふるさと歴史財団, 2004年。
- ・吉永誠吾『音楽教員養成制度——カリキュラムおよび教授内容についての一考察』東京芸術大学大学院音楽研究科修士論文, 1977年。
- ・米山文明『声と日本人』1998年, 平凡社, 113~114頁。
- ・劉麟玉代表『近代音楽・歌謡の成立過程における国民性の問題』平成13・14年度科学研究費補助金研究成果報告書, 2003年。
- ・劉麟玉(リュウ・リンギョク)『植民地下の台湾における学校唱歌教育の成立と展開』雄山閣, 2005年。
- ・Masafumi OGAWA EARLY NINETEENTH CENTURY AMERICAN INFLUENCES ON THE BEGINNING OF JAPANESE PUBLIC MUSIC EDUCATION:AN ANALYSIS AND COMPARISON OF SELECTED MUSIC TEXTBOOKS PUBLISHED IN JAPAN AND THE UNITED STATES, Submitted to the graduate faculty of the School of Music in partial fulfillment of the requirements for the degree, Doctor of Music Education, Indiana University, 2000.
- ・Shinobu OKU Changes of Temperaments in Japan before the Second World War, The First International Conference on Music Perception and Cognition, Japanese Society for Music Perception and Cognition, 1989, pp.175-178.

〔国民学校の分野〕

- ・赤井励「唱歌の終焉」安田寛代表編『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』ビクターエンタテインメント, 2000年, 82-87頁。
- ・菅道子「国民学校における芸能科音楽のカリキュラム編成」『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』第54集, 2004年, 和歌山大学教育学部, 114頁。
- ・近藤幹雄「国民学校芸能科音楽教師用書の成立」『季刊音楽教育研究』1983年春号, 音楽之友社, 1983年, 11-20頁。
- ・榎藤敦子「芸能科音楽の成立経緯」浜野政雄監修『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社, 1999年, 253-263頁。
- ・佐藤敏雄「国民学校の音楽教育」『秋田大学教育学部研究紀要 教育科学』第二十七集, 1977年, 167-173頁。
- ・戸田金一『昭和戦争期の国民学校』吉川弘文館, 1993年。
- ・長浜功『国民学校の研究——皇民化教育の実証的解明』明石書店, 1985年, 97頁。
- ・西島央「児童からみた国民学校芸能科音楽——音楽教育の歴史の読み直しに向けて」『音楽教育研究ジャーナル』第14号, 東京芸術大学音楽学部音楽教育研究室, 2000年, 3-18頁。

- ・藤井康之「国民学校期における音楽指導の実際——東京女子高等師範学校附属国民学校と青森市立新町国民学校の教師を中心に」『音楽教育研究ジャーナル』第14号、東京芸術大学音楽学部音楽教育研究室、2000年、19-32頁。
- ・本多佐保美「芸能科音楽の指導実践——「総合授業」の授業細目の検討」浜野政雄監修『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社、1999年、296-307頁。
- ・本多佐保美「国民学校期における音楽教育の受容——東京女高師附属国民学校と青森市立新町国民学校の卒業生へのインタビュー調査に基づいて」『音楽教育研究ジャーナル』第14号、東京芸術大学音楽学部音楽教育研究室、2000年、33-45頁。
- ・本多佐保美・国府華子「国民学校期における鑑賞教材の音楽内容に関する一考察——教師用指導書と音盤の分析を中心に」『音楽教育史研究』音楽教育史学会、2000年、43-58頁。
- ・本多佐保美・藤井康之・中里南子・勝谷祥子・幸山良子「誠之国民学校における音楽授業の諸相——学校所蔵文書とアンケート調査にもとづく実践史の試み」『音楽教育学』第32・2号（通巻66号）、日本音楽教育学会、2003年、1-8頁。
- ・本多佐保美代表『音楽教育史研究における制度・教師・学習者の関係性の探究——国民学校時代の音楽教育体験者の聞き取り調査に基づいて』平成13年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究B1）、2004年。
- ・前田一男「戦時下教育実践の史的研究——東金小学校・国民学校を事例として」『日本教育史研究』第14号、日本教育史研究会、1995年、1-35頁。
- ・水島昭男「「国民学校」時代の音楽教育」『音楽教育学』第3号、日本音楽教育学会、1973年、90-92頁。
- ・宮瀬重美「＜国民学校＞時代の音楽教育について」『埼玉大学紀要 教育学部（増刊）』第33巻、1984年、169-180頁。
- ・山本文茂「芸能科音楽の理念と内容——法令条文の解釈を中心に」浜野政雄監修『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社、1999年、264-277頁。
- ・山本文茂「芸能科音楽教材の特質——教科書・教師用指導書の分析を通して」浜野政雄監修『音楽教育の研究——理論と実践の統一をめざして』音楽之友社、1999年、286-295頁。
- ・山中恒『ボクラ少国民の作り方』戦争のための愛国心、勁草書房、2004年。
- ・吉岡数子『「在満少国民」の20世紀——平和と人権の語り部として』解放出版社、2002年。
- ・米田利彦『教育審議会の研究 教育行財政改革——付 国民学校・幼稚園審議経過』野間教育研究所紀要第44集、2002年。

【その他の分野】

- ・岡山県保育史編集委員会『岡山県保育史』フレーベル館、1964年。
- ・掛水通子「昭和期旧制度における中等学校体育科（体錬科）教員免許状女子取得者について」『藤村学園東京女子体育大学紀要』22巻、藤村学園東京女子体育大学、1987年、1-10頁。
- ・掛水通子「戦前の学校体育制度における女子の特性について」『藤村学園東京女子体育大学紀要』23巻、藤村学園東京女子体育大学、1988年、1-9頁。
- ・掛水通子「女子体育教員養成機関卒業生の職歴に関する研究（1）——私立東京女子体操音楽学校、東京女子体育専門学校、東京女子体育短期大学、東京女子体育大学1920-84年卒業生への調査から」『東京女子体育大学紀要』第28号、東京女子体育大学、1993年、1-10頁。
- ・掛水通子「昭和旧制時期における「女子体育は女子の手で」に関する研究」『東京女子体育大学紀要』第29号、東京女子体育大学、1994年、1-8頁。
- ・掛水通子「戦前のわが国の女子体育教師の教育に関する研究」『東京女子体育大学紀要』第30号、東京女子体育大学、1995年、13-26頁。
- ・滝沢美恵子『公舎物語——接収家屋にまつわる証言』不忘出版、2001年。
- ・東京都中央区立有馬幼稚園・小学校、秋田喜代美監修『幼小連携のカリキュラムづくりと実践事例——子どもが会う 教師がつなげる 幼小連携3年の成果』小学館、2002年。
- ・名須川知子『唱歌遊戯作品における身体表現の変遷』風間書房、2004年。
- ・日本保育学会編『日本幼児保育史』第二巻、フレーベル館、1968年（1974年重版使用）。
- ・附幼100周年記念誌編集委員会『附幼百年のあゆみ——創立100周年記念誌』岡山大学教育学部附属幼稚園、1985年。
- ・山中恒『アジア・太平洋戦争史』岩波書店、2005年。
- ・前田一男「国民精神文化研究所の研究——戦時下教学刷新における「精研」の役割・機能について」『日本の教育史学』教育史学会紀要第25集、講談社、1982年、53-81頁。
- ・無藤隆『知的好奇心を育てる保育——学びの三つのモード論』フレーベル館、2001年。

【事典】

- ・大阪教育大学附属図書館情報管理係編集『大阪教育大学附属図書館所蔵教科書目録 第一集——明治初年から昭和 20 年まで 小学校 中学校編 付：往来物』大阪教育大学附属図書館, 1998 年。
- ・黒沢隆朝『図解 世界楽器大事典』雄山閣, 2005 年 (初版 1972 年)。
- ・昭和館監修『SP レコード 60,000 曲総目録』アテネ書房, 2003 年。
- ・『昭和史の地図』尚美堂出版, 2005 年。
- ・『新版 現代学校教育大事典』ぎょうせい, 2002 年。
- ・鳥居美和子『教育文献総合目録 第 3 集 明治以降教科書総合目録 II 中学校篇』小宮山書店, 1985 年。
- ・日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社, 2004 年。
- ・細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜清編『新教育学大事典』第一法規, 1990 年。
- ・安田寛代表編『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』ビクターエンタテインメント, 2000 年。

3. 聞き取り調査

- ・金光武義氏「香川県師範学校における音楽教育について」2003年10月1日（水）13時，金光邸（岡山市）。
- ・棚田国雄氏「戦後の岡山師範学校と新制の岡山大学教育学部について」2003年10月3日（金）13時30分，岡山県生涯学習センター（岡山市）。
- ・長坂幸子氏「東京音楽学校甲種師範科について」2003年10月10日（金）14時，長坂邸（京都市）。
- ・金光武義氏「師範学校音楽教科書について」2003年10月22日（水）10時，金光邸。
- ・坂口進氏「戦前の国民学校と戦後の岡山師範学校について」2003年10月24日（金）13時30分，岡山県生涯学習センター，棚田国雄氏同席。
- ・金光武義氏「師範学校における聴覚訓練と国民学校芸能科音楽講習について」2003年10月29日（水）10時，金光邸，※資料借用。
- ・金光武義氏「師範学校における発声指導について」2003年12月5日（金）10時，金光邸。
- ・金光武義氏「師範学校音楽教科書について」2004年2月2日（月）14時，金光邸，※資料返却（2003.10.29）。
- ・高橋恒治氏「京都府師範学校と戦後の音楽教員養成の動向について」2004年3月22日（月）14時，高橋邸（京都市），奥忍氏同席。
- ・岡嶋信夫氏「昇格時の岡山師範学校の音楽教育について」2004年4月5日（月）15時，岡嶋邸（岡山県備前市）。
- ・原卯三次氏「岡山県師範学校と昇格後の岡山師範学校の音楽教育について」2004年5月7日（金）14時30分，倉敷児島天満屋2F喫茶室（岡山県倉敷市）。
- ・渋谷清寿氏「昇格時の香川師範学校予科と戦後の香川師範学校本科の音楽教育について」2004年5月9日（日）10時，渋谷邸（香川県高松市）。
- ・金光武義氏「東京音楽学校甲種師範科について」2004年8月21日（土）16時，金光邸。
- ・金光武義氏「東京音楽学校甲種師範科について」2004年9月12日（日）10時，金光邸。
- ・渋谷清寿氏「香川師範学校におけるオルガン検閲と聴覚訓練について」2004年9月28日（火）10時，渋谷邸。
- ・金光武義氏「香川県師範学校における器楽指導について」2004年10月2日（土）10時，金光邸。
- ・真篠将氏「東京音楽学校と師範学校における音楽教育について」2004年10月24日（日）14時，真篠邸（東京都世田谷区），滝沢美恵子氏同席。
- ・吉岡数子氏「国民学校における聴覚訓練について」2004年11月24日（水）14時，平和人権子どもセンター（大阪府堺市）※11月18日に借用した「聴覚訓練」のテープを返却。
- ・水の上政子氏「香川県女子師範学校の音楽教育について」2005年2月11日（金）13時，喫茶リオ（広島県尾道市）。
- ・岡嶋信夫氏「昇格時の岡山師範学校の音楽教育について」2005年3月10日（木）16時，岡嶋邸。
- ・故田山清美氏「香川県師範学校の音楽教育と金光先生の指導について」2005年3月16日（水）10時，全日空ホテルクレメント高松1F喫茶室（香川県高松市）。
- ・入谷千代子氏・鬼無玲子氏「香川県女子師範学校の音楽教育について」2005年3月16日（木）13時，村井建設K.K.（香川県高松市），渋谷清寿氏同席。
- ・金光武義氏・渋谷清寿氏「香川師範学校について（師弟再会，会食）」2005年5月3日（火）11時30分，ホテルグランヴィア岡山「吉備膳」（岡山市）。
- ・金光武義氏「香川県師範学校における鑑賞指導について」2005年5月14日（土）10時，金光邸。
- ・金光武義氏「香川県師範学校における鑑賞指導について」2005年5月23日（月）10時，金光邸。
- ・恒次恒次氏「岡山県女子師範学校附属小学校における音楽教育について」2005年6月3日（金）10時，エスペランスわけ（岡山県和気郡和気町），岡嶋信夫氏同席。
- ・安城政三氏・金光武義氏・小林俊子氏・内藤和子氏・滝沢美恵子氏・秦洋子氏・平山岸子氏・真篠将氏・水の上政子氏・横田勇氏「東京音楽学校甲種師範科の教育実習について等」2005年6月7日（火）13時，KKRホテル大阪（大阪市），※「昭和16年3月卒業師範科級会」（卒寿祝いのお集まり）。
- ・金光武義氏「東京音楽学校甲種師範科の教育実習について」2005年10月1日（土）10時，金光邸。

4. 書簡

- ・滝沢美恵子氏「戦前の教育について等」2004年8月5日。
- ・滝沢美恵子氏「真篠先生との聞き取り調査を終えて、戦前の教員養成制度について等」2004年10月29日。
- ・吉岡数子氏「聴覚訓練レコードについて等」2004年12月20日。
- ・糸田和樹氏（元秋田県立博物館学芸主事，現秋田県教育庁生涯学習課）「黒沢隆朝の資料について等」2005年3月14日。
- ・武石佳久氏（黒沢隆朝氏の甥）「黒沢隆朝の資料について等」2005年3月15日。
- ・故田山清美氏「香川県師範学校における音楽教育について等」2005年3月19日。
- ・恒次恒次氏「岡山県女子師範学校附属小学校について等」2005年6月5日。
- ・金光武義氏「東京音楽学校における教育実習について等」2005年7月26日。
- ・滝沢美恵子氏「上野児童音楽学園について，東京音楽学校における教育実習について等」2005年10月31日。
- ・金光武義氏「《御民われ》について等」2005年12月3日。
- ・武石佳久氏「黒沢隆朝の教科書編纂について等」2005年12月25日。

5. その他

- ・授業メモ等
- ・授業で使用した楽譜，SPレコード等
- ・「教案」等

図書名	巻	発行年月日	検定年月日	著者	発行者
音楽之枝折	2	M21.4 訂正三版	M21.4.25	大村芳樹	辻敬之
新編音楽理論	1	M26.10.29 訂正再版	M26.11.15	鈴木米次郎	小林新兵衛
小学唱歌	4	M27.1.26	M27.2.19	伊沢修二	大日本図書
小学唱歌 乙号	6	M27.6.13 改正分巻	M27.6.30	伊沢修二	大日本図書
明治唱歌抜粋 中等唱歌	1	M28.8.11 訂正再版	M28.9.14	大和田建樹 奥好義	宮川保全
新選楽典大要	1	M30.7.30 訂正再版	M30.9.14	石原重雄	富山房
新編中等唱歌	1	M27.7.8 訂正再版	M27.9.27	奥好義	内田正義
補修楽典入門	1	M34.8.1 訂正四版	M34.8.22	多梅稚	中井善吉
新選小学唱歌教授法	1	M34.9.13 再版	M34.9.23	石原重雄	白井銑造
近世楽典教科書	1	M34.11.5 修正再版	M34.11.5	田村虎蔵	西野虎吉
楽典教科書	1	M36.3.19 訂正再版	M36.3.30	入江好治郎	入江好治郎
中等教育教科用楽典	2	M38.4.25 訂正三版	M38.5.17	高井徳造	吉川弘文館
初等楽典教科書	1	M37.3.11 訂正再版	M37.3.16	山田源一郎 多梅稚	西野虎吉
教科適用進行曲粹	1	M37.12.9 訂正再版	M37.12.27	開成館音楽部	西野虎吉
初等オルガン教科書	1	M38.1.27 訂正再版	M38.2.7	天谷秀 多梅稚	西野虎吉
		M38.3.6 訂正四版	M38.3.8		
新編教育唱歌集	8	M39.1.28 訂正六版	M39.2.20	教育音楽講習会	西野虎吉
デュエットトリオ唱歌集伴奏附	1	M40.2.20 再版	M40.4.17	楠美恩三郎	白井直
音程教科書	1	M39.4.5 訂正三版	M39.4.9	高井徳造 青木兒	前川一郎
教科適用進行曲粹	2	M39.3.6 訂正	M39.4.11	開成館音楽課	西野虎吉
女子日新唱歌	1	M39.12.17 訂正再版	M39.12.26	大和田建樹	大日本図書
オルガン教科書	2	M40.2.4 訂正	M40.2.20	田村虎蔵	安井清
日本唱歌集	1	M41.4.13 再版	M40.4.11	楽書刊行協会	大橋新太郎
オルガン軌範	1	M44.10.5 再版	M44.11.1	楠美恩三郎	共益商社書店

普通楽典大要	1	M44.11.6 訂正再版	M44.11.24	開成館音楽課	
オルガン軌範教本	2	M44.4.25 訂正再版①	M44.11.28	吉田信太	三木佐助
		M44.6.25 訂正再版②	M44.11.28		
天象唱歌 一名 式拾四時間星めぐり	1	T2.2.2 訂正三版	T2.2.20	小野謙太郎	小野謙太郎
	1	T2.4.8 修正四版	T2.5.13	小野謙太郎	小野謙太郎
乃木大将の歌	1	T1.12.17 増補 21 版	T2.2.17	吉丸一昌 小松耕輔	倉田繁太郎
教科統合 女学唱歌	4	M45.5.1 訂正再版	M45.5.3	田村虎蔵	国定教科書
近世楽理書	1	T2.9.10 修訂	T2.9.17	森山保	大倉廣三郎
師範学校楽典教科書	1	T2.12.15 訂正再版	T2.12.5	楽書刊行協会	高井徳造
音程教本	1	T2.7.12 十版	T3.3.27	福井直秋	共益商社書店
新定楽典教科書	2	T3.9.25 訂正再版	T3.10.15	石原重雄	富山房
オルガン教科書	1	T4.4.2 訂正再版	T4.4.15	中田章	共益商社書店
新撰音程教科書	1	T4.10.15 訂正再版	T4.12.28	開成館音楽課	西野虎吉
オーガン教本	1	T5.1.7 修正再販	T5.1.17	共益商社書店	共益商社書店
師範学校本科二部楽典教本	1	T5.2.28 修正再販	T5.3.9	福井直秋	共益商社書店
師範学校楽典教本	1	T5.2.28 修正再販	T5.3.17	福井直秋	共益商社書店
中等オルガン教科書	1	T5.3.25 訂正再版	T5.4.14	天谷秀	鈴木常松 鈴木常次郎
音程視唱教本	1	T5.3.15 訂正再版	T5.4.24	山田耕筰	三木佐助
続オーガン教本	1	T6.1.23 修正再版	T6.1.26	共益商社書店	共益商社書店
オルガン教科書	1	T6.1.28 訂正再版	T6.2.2	田村虎蔵 吉田信太	松邑孫吉
師範学校楽典教科書	1	T6.1.20 訂正再版	T6.2.8	開成館音楽課	三木佐助
近代楽典大要	1	T6.2.12 訂正再版	T6.3.5	音楽研究会	三木佐助
進行曲教本	1	T5.12.31	T6.3.6	共益商社書店	共益商社書店
音程教本	1	T6.3.5 訂正 38 版	T6.3.8	福井直秋	共益商社書店
実用オルガン教本	1	T6.3.1 訂正再版	T6.3.20	開成館音楽課	三木佐助
新撰オルガン教科書	1	T6.2.28 訂正再版	T6.4.9	音楽研究会	三木佐助
女子教育音楽教科書	4	T6.3.20 訂正再版	T6.4.12	音楽研究会	三木佐助
海外雄飛	1	T6.4.1 訂正再版	T6.7.17	岡本米蔵	岡本米蔵
オルガン、ピアノ教科書	1	T7.1.26 訂正再版	T7.1.31	楠美恩三郎	高井徳造

唱歌基本練習教科書	1	T7.1.26 訂正再版	T7.1.31 大和田愛羅	高井徳造
三重唱歌教本	1	T7.2.17 訂正再版	T7.3.6 福井直秋	共益商社書店
師範学校楽典教科書	1	T7.12.15 訂正	T7.12.28 楽書刊行協会	高井徳造
二重唱歌教本	1	T8.2.17 訂正再版	T8.2.24 福井直秋	共益商社書店
単唱歌教本	1	T8.2.23 訂正再版	T8.2.28 福井直秋	共益商社書店
オルガン教科書	1	T9.3.25 再修訂 11 版	T9.6.25 中田章	共益商社書店
中等教育模範唱歌	4	T11.9.15 訂正再版	T11.10.11 楠美恩三郎	三木佐助
大正唱歌教本	1	T12.3.29 訂正再版	T12.5.19 福井直秋	共益商社書店
オーガン教本	1	T12.12.12 再修 35 版	T13.2.16 共益商社書店	共益商社書店
師範学校楽典教本	1	T13.3.1 再訂正 16 版	T13.3.6 福井直秋	共益商社書店
師範学校本科二部楽典教本	1	T13.3.1 再訂正 12 版	T13.3.6 福井直秋	共益商社書店
標準オルガン教本	1	T13.6.20 訂正再版	T13.7.17 田中銀之助	三木佐助
標準音程教本	1	T13.6.25 訂正再版	T13.7.17 音楽研究会	三木佐助
新制音程教本	1	T14.6.20 訂正再版	T14.6.26 山本正夫	三沢朝一
新制楽典教本	1	T14.12.1 訂正再版	T14.12.8 山本正夫	三沢朝一
教科適用楽典精義	1	T14.12.13 訂正再版	T15.1.29 渡辺彌蔵	大葉久吉 柏佐一郎
唱歌基本練習教科書再訂	1	T15.1.23 再訂再版	T15.2.1 大和田愛羅	高井徳造
師範学校本科二部楽典教科書	1	T15.2.3 訂正再版	T15.2.6 楽書刊行協会	高井徳造
師範学校楽典教科書再訂	1	T15.2.3 訂正再版	T15.2.9 楽書刊行協会	高井徳造
中等教育唱歌新教材	1	T15.2.20 訂正再版	T15.3.11 岡野貞一	共益商社書店
中等教育近世楽典教本	1	T14.11.5	T15.11.6 楠美恩三郎・吉田恒三	積善館
標準楽典教科書	1	S2.8.5 訂正再版	S2.8.12 信時潔	三木佐助
教範マーチ、アルバム	1	S2.9.20 訂正	S2.9.27 楠美恩三郎・中田章	中村時之助
新編女学唱歌	1	S2.12.15 訂正再版	S3.1.17 成田為三	三木佐助
新撰オルガン学習教本	1	S3.1.27 修正再版	S3.2.2 小笠原良造	大倉廣三郎
音楽基礎教本	1	S3.2.28 訂正再版	S3.4.5 小川一朗	福居鎌一郎
現代女子音楽教科書	4	S3.6.12 訂正再版	S3.6.21 東京音楽協会	山本慶治

夏のひかり	1	S3.6.20	S3.10.19	下総皖一	福居鎌一郎
子守歌	1	S3.6.20	S3.10.19	下総皖一	福居鎌一郎
ゆく雲	1	S3.7.5	S3.10.19	下総皖一	福居鎌一郎
最新楽典教科書	1	S3.11.30 訂正再版	S3.12.8	門馬直樹	岡田栄太郎
ベネチアの舟歌	1	S4.1.20 訂正再版	S4.2.21	下総皖一	福居鎌一郎
憧れの夢	1	S4.1.20 訂正再版	S4.3.8	下総皖一	福居鎌一郎
散る柳	1	S3.8.20	S4.3.27	下総皖一	福居鎌一郎
夜船	1	S3.8.20	S4.3.27	下総皖一	福居鎌一郎
雁の叫	1	S3.8.20	S4.3.17	下総皖一	福居鎌一郎
朝の歌	1	S3.8.20	S4.3.27	下総皖一	福居鎌一郎
旅の秋	1	S3.8.20	S4.3.27	下総皖一	福居鎌一郎
箱	1	S3.9.1	S4.3.27	下総皖一	福居鎌一郎
草笛	1	S4.1.20 訂正再版	S4.3.27	下総皖一	福居鎌一郎
歌唱基本練習教科書参訂	1	S4.9.25 三訂	S5.5.16	大和田愛羅	高井徳造
読譜練習教科書	1	S4.4.5	S5.9.18	下総皖一	共益商社書店
昭和声楽教科書	3	S5.11.20 修正再版	S5.11.28	永井幸次、田中銀之助	永井幸次
新楽典	1	S5.11.26 訂正再版	S5.12.3	兼常清佐	富山房
新撰音楽教科書	5	S5.11.25 訂正再版	S5.12.3	東京音楽協会	山本慶治
初等オルガン教科書改訂版	1	S5.12.7 修正再版	S5.12.20	真篠俊雄	三木佐助
実習併用音楽教科書	1	S5.12.27 修正	S6.1.9	楽書刊行協会	高井徳造
中等教育音楽教科書	4	S5.12.23 修正	S6.1.9	楽書刊行協会	高井徳造
新編音程教科書	1	S5.4.15	S6.1.31	中田章	共益商社書店
バイエル新訳教則本	1	S6.2.20 修正十版	S6.2.28	高折宮次、平田義宗	平田義宗
祖国愛唱歌	1	S6.3.28 修正再販	S6.4.8	福井直秋	共益商社書店
現代楽典教科書	1	S6.4.20 訂正再販	S6.5.9	吉田恒三	三木佐助
オルガン、ピアノ教科書	1	S6.11.1 再訂修正	S6.11.9	楠美恩三郎 楽書刊行協会	高井徳造
新定音楽教科書	1	S6.11.8 再訂修正	S6.11.20	楽書刊行協会	高井徳造
昭和オルガン教科書	1	S6.11.7 訂正	S6.11.25	楽書刊行協会	高井徳造
新編楽典教科書	1	S6.12.5 修正再版	S6.12.11	小泉治	三省堂
中等新楽典	2	S6.12.17 訂正再版	S6.12.26	兼常清佐	富山房
女子音楽教科書	5	S7.2.5 訂正再版	S7.2.12	永井幸次 田中銀之助	三木佐助
中等新楽典教科書	2	S7.2.8 訂正再版	S7.2.15	真篠俊雄	東洋図書

中等教科音楽概要	1	S7.2.24 修正再版	S7.2.27	水谷式夫	共益商社書店
唱歌教授法教本	1	S7.2.19 修正再版	S7.2.27	工藤富次郎	共益商社書店
昭和ピアノオルガン教本	1	S7.3.15 修正再版	S7.3.22	宮原禎次 林松木	三沢朝一
新調女声唱歌	3	S7.3.29 修正再版	S7.4.7	青木歌子	共益商社書店
中等最新楽典	1	S7.6.14 修正再版	S7.6.17	若狭萬次郎	共益商社書店
爆弾三勇士の歌	1	S7.6.29 訂正	S7.7.8	大阪毎日新聞社東京支店	大阪毎日新聞社東京支店
バイエルピアノ教則本	1	S7.6.27 修正 27 版	S7.7.9	萩原英一	共益商社書店
神社参拝唱歌	1	S7.1.30	S7.7.13	全国神職会	全国神職会
中等教科世界名曲集	1	S7.7.15 訂正再版	S7.8.17	菅雄太郎	日本唱歌出版社
標準男子音楽教科書初級用	3	S7.7.10 訂正再版	S7.8.22	小川一朗 黒沢隆朝	共益商社書店
師範音楽教本二部用	2	S7.7.27 訂正	S7.8.23	福井直秋	帝国書院
大東京市歌	1	S7.9.25	S7.9.26	大阪毎日新聞社東京支店	大阪毎日新聞社東京支店
新定女子音楽教科書	5	S7.10.10 修正再版	S7.10.22	吉田信太 井上武士	合資会社共益商社書店
日本国民歌	1	S7.10.20	S7.10.27	大阪毎日新聞社東京支店	大阪毎日新聞社東京支店
栄養の歌	1	S7.10.1	S7.11.8	佐伯矩	岩井七郎
中等音楽教科書	5	S7.11.20 訂正再版	S7.12.5	船橋栄吉 内藤俊二	三木佐助
新制中等音楽教科書	3	S7.12.5 訂正再版	S7.12.14	内藤俊二 杉本秀治	三木佐助
複音練習教科書	1	S8.1.25 修正再版	S8.2.6	池尻景順	共益商社書店
ピアノオルガン音階指づかひ教本	1	S8.2.10 修正再版	S8.2.21	萩原英一	共益商社書店
中等発声練習教本	1	S8.2.18 訂正再版	S8.3.1	水口廣	共益商社書店
標準女子音楽教科書	5	S8.2.10 修正再版	S8.3.2	黒沢 隆朝 小川一朗 林幸光	共益商社書店
新制女子音楽教科書	5	S8.3.17 訂正再版	S8.3.28	成田為三	岡田栄太郎
新制中等音楽教科書	5	S8.3.17 訂正再版	S8.3.28	成田為三	岡田栄太郎
中等教育音楽通論教科書	2	S8.3.10 修正再版	S8.4.8	田辺尚雄	鈴木伸吉
新選ピアノ教本	1	S8.9.15 修正再版	S8.10.3	小笠原良造	大倉克次
ピアノ新教本	1	S8.10.7 修正再版	S8.10.19	高折宮次	東洋図書
新訂オルガン教科書	1	S8.12.23 訂正再版	S9.1.24	島崎赤太郎著 白井保男補	共益商社書店
中等教育女子新音楽	4	S8.12.24 訂正再版	S9.1.27	大和田愛羅	林甲子太郎
新制中楽典	1	S9.1.22 訂正再版	S9.1.29	酒井悌	吉田末一
ツェルニー(30 番)ピアノ教本	1	S8.11.15 修正再版	S9.2.22	萩原英一	共益商社書店
最新オルガン教科書	1	S9.3.5 訂正再版	S9.3.13	田村虎蔵	松邑孫吉
日の丸の旗	1	S9.3.13		大阪毎日新聞社東京支店	大阪毎日新聞社東京支店

新女子音楽教科書	5	S9.3.14 修正再版	S9.3.30	若狭萬次郎	共益商社書店
新選重音唱歌集	1	S9.7.11 修正再版	S9.7.15	井上武士	共益商社書店
コールユーブンゲン	1	S9.7.10 訂正再版	S9.7.20	三木佐助	三木佐助
日本産業歌	1	S9.9.3 修正再版	S9.9.10	大阪商工会議所	高柳松一郎
奉迎歌	1	S9.10.14 修正再版	S9.10.15	群馬県	共益商社書店
中等音楽教科書	1	S10.1.4 訂正	S10.1.19	楽書刊行協会	高井徳造
元師東郷	1	S9.12.28 修正再版	S10.1.30	小松耕輔	共益商社書店
満州国皇帝陛下奉迎歌	1	S10.3.15 訂正再版	S10.3.20	小松耕輔 葛原幽	太平蓄音機株式会社
満州国皇帝陛下奉迎歌	1	S10.3.20 訂正	S10.3.22	読売新聞社	庄田良
日本精神作興歌	1	S10.3.20	S10.5.29	中央教化国体総合会	中央教化国体総合会
吾等の日本	1	S10.6.5 修正再版	S10.6.21	永井幸次	永井幸次
師範学校楽典教科書五訂	1	S10.7.18 五訂訂正	S10.7.20	楽書刊行協会	高井徳造
音楽通論教科書	2	S10.7.20 訂正	S10.8.24	片山頼太郎	高井徳造
大日本消防歌	1	S10.5.20	S10.9.4	大日本消防協会	大日本消防協会
女子中等音楽教科書	4	S10.9.3 訂正再版	S10.9.9	長坂好子	富山房
奉迎歌	1	S10.9.23	S10.10.2	宮崎県	共益商社書店
御親閲奉迎歌	1	S10.10.28 修正再版	S10.10.29	鹿児島県	共益商社書店
選挙肅正の歌選ぼうよ、みんな	1	S10.12.22	S10.12.24	北原白秋 山田耕筰	横山正一
新男子音楽教科書	3	S10.11.5 修正再版	S10.12.27	若狭萬次郎	共益商社書店
唱歌教本読譜練習と音程	1	S11.2.28 訂正再版	S11.3.6	大和田愛羅	林甲子太郎
鶯絲の歌	1	S11.3.23 修正	S11.3.24	長岡哲三	長岡哲三
オルガン新教本	1	S11.3.22 修正再版	S11.3.28	真篠俊雄 草川宣雄	東洋図書
オリンピック応援歌あげよ日の丸	1	S11.4.12 修正	S11.4.10	大阪毎日新聞社東京支店	
群馬県の歌	1	S11.4.11	S11.4.13	群馬県音楽協会	共益商社書店
新選唱歌集	1	S11.1.30 訂正再版	S11.4.27	青柳善吾	目黒甚七
満洲出動皇軍歓送歌	1	S11.5.5 訂正再版	S11.5.4	日本民謡協会	野口雨情
オリンピック応援歌起てよ若人	1	S11.5.19 修正	S11.5.26	読売新聞社	庄田良
昭和オルガン教科書再訂	1	S11.6.5 再版訂正	S11.6.24	楽書刊行協会	高井徳造
女子音楽新教本	5	S11.6.10 訂正再版	S11.7.1	青柳善吾	目黒甚七
後親閲奉唱歌	1	S11.8.18	S11.8.19	北海道府	共益商社書店
奉迎歌	1	S11.8.19	S11.8.24	北海道府	共益商社書店

群馬県の子守歌	1	S11.8.19 修正再版	S11.8.24	群馬県児童保護協会	共益商社書店
生きよ国民結核予防の歌	1	S11.10.19	S11.10.20	内務省	浜野規矩雄
初等ピアノ、オルガン教科書	1	S11.11.15 訂正再版	S11.11.30	高折宮次 真篠俊雄	三木佐助
女子音楽教本	5	S12.4.1 訂正再版	S12.4.23	小松耕輔	目黒甚七
奉迎歌	1	S12.5.11 訂正再版	S12.5.15	三重県	共益商社書店
航空愛国の歌	1	S12.6.15 修正	S12.6.19	帝国飛行協会	帝国飛行協会
奉迎歌	1	S12.6.21	S12.6.22	愛知県	伊奈森太郎
奉迎記念日奉唱歌	1	S12.8.19	S12.8.23	青森県	共益商社書店
進軍の歌	1	S12.10.2 修正	S12.10.4	大阪毎日新聞社東京支店	大阪毎日新聞社東京支店
愛国軍歌海軍将校の母	1	S12.10.16 修正再版	S12.10.28	小松耕輔	共益商社書店
愛国軍歌長城高し日の御旗	1	S12.10.16 修正再版	S12.10.28	小松耕輔	共益商社書店
賀茂神社式年正遷宮奉祝歌	1	S12.11.8 修正再版	S12.11.9	天野裕	共益商社書店
愛国行進曲	1	S12.12.20	S12.12.20	内閣情報部	内閣情報部
改訂現代音楽通論	1	S13.1.13 修正再版	S13.1.27	小笠原良造	大倉廣文
楽典	1	S13.1.25 訂正再版	S13.2.2	弘田龍太郎 林松木	岩本景次
唱歌基礎練習書	1	S13.2.14 訂正再版	S13.3.2	弘田龍太郎 林松木	岩本景次
高等オルガン新教本	1	S13.2.22 修正再版	S13.3.2	真篠俊雄 草川宣雄	東洋図書
音楽新教本	1	S13.3.4 訂正再版	S13.3.10	青柳善吾	目黒甚七
女子楽典教科書	1	S14.1.26 訂正	S14.1.31	楽書出版協会	守屋 大森 岡本
皇后宮御歌やすらかに	1	S13.4.5 修正	S13.4.7	全国神職会	全国神職会
紀元二千六百年記念日本万国博覧会行進曲	1	S13.4.8	S13.4.11	紀元 2600 年記念日本万国博覧会	日本万国博覧会協会
紀元二千六百年頌歌	1	S13.4.10	S13.5.3	紀元二千六百年奉祝会	紀元二千六百年奉祝会
道民奉公歌	1	S13.4.17	S13.5.3	北海道府	北海道府
日の丸行進曲	1	S13.5.5 修正	S13.5.18	大阪毎日新聞社東京支店	大阪毎日新聞社東京支店
国民精神総動員軍国唱歌集	1	S13.6.25 修正再版	S13.7.13	大日本作曲家協会 日本作歌者協会	共益商社書店
大日本の歌	1	S13.7.21 修正再版	S13.7.27	日本文化中央連盟	日本文化中央連盟
婦人愛国の歌	1	S13.7.23 訂正	S13.8.5	上條操 瀬戸口藤吉	石川武美
勤儉貯蓄の歌みのり	1	S13.9.15	S13.9.21	貯金局	貯金局
傷疾の勇士	1	S13.10.5	S13.10.6	傷兵保護院	傷兵保護院
音楽	5	S13.9.30 訂正	S13.10.7	乗杉嘉壽	帝国書院
健生歌	1	S13.10.14	S13.10.18	日比野寛	共益商社書店
大陸行進曲	1	S13.12.13 修正	S13.12.13	大阪毎日新聞社東京支店	大阪毎日新聞社東京支店

愛馬進軍歌	1	S13.12.28	S14.1.9	陸軍省馬政課	陸軍省馬政課
標準師範学校音楽教科書	2	S13.12.20 修正再版	S14.1.28	黒沢隆朝 小川一朗	共益商社書店
大日本傷疾軍人歌	1	S14.2.4	S14.2.6	大日本傷疾軍人会	大日本傷疾軍人会
修訂女子音楽教本	5	S14.2.10 訂正	S14.2.10	福井直秋	帝国書院
改訂女子音楽教科書	5	S14.2.25 修正再版	S14.3.11	黒沢隆朝 小川一朗 林幸光	共益商社書店
明治天皇御製馬	1	S14.3.16	S14.3.27	仁保活曉	畜類慈愛会
軍馬祭, 傷痍軍馬	1	S14.4.4	S14.4.13	仁保活曉	畜類慈愛会
太平洋行進曲	1	S14.5.1	S14.5.5	海軍省海軍軍事普及部	海軍省海軍軍事普及部
国民歌	1	S14.5.3	S14.5.10	都新聞社	都新聞社
愛国歌 戦時市民の歌 銃は執らねど	1	S14.4.29	S14.5.26	大阪市	大阪市役所
愛国勤労歌	1	S14.5.25	S14.6.6	福岡日日新聞合資会社	福岡日日新聞合資会社
皇紀二千六百年奉祝歌	1	S14.6.16	S14.6.22	国民音楽協会	共益商社書店
山縣神社奉讃歌	1	S14.8.1	S14.8.8	山縣神社奉賞会	山縣神社奉賞会
長崎県自嘲歌	1	S14.8.20	S14.8.24	長崎県	長崎県
体育行進曲 くろがねの力	1	S14.8.24	S14.8.24	財団法人大日本体育協会	大日本体育協会
和歌山県勢歌	1	S14.8.31	S14.9.7	和歌山県統計協会	和歌山県統計協会
世界一周大飛行の歌	1	S14.8.19	S14.9.16	大阪毎日新聞社東京支店	大阪毎日新聞社東京支店
宮城県民歌	1	S14.5.15	S14.10.10	宮城県教育会	宮城県教育会
官幣近江神宮奉讃大社歌	1	S14.9.25	S14.10.16	近江神宮奉賛会	藤原嘉治
明治神宮国民体育大会の歌	1	S14.10.18	S14.10.19	厚生省体力局	厚生省体力局
令旨奉體結核予防の歌 太陽の愛子	1	S14.10.19	S14.10.19	結核予防会	結核予防会
九州健児の歌	1	S14.9.19	S14.10.25	朝日新聞社朝日新聞発行所	朝日新聞社朝日新聞発行所
御神火行進曲	1	S14.9.19	S14.10.25	朝日新聞社朝日新聞発行所	朝日新聞社朝日新聞発行所
空の勇士	1	S14.10.30	S14.11.4	読売新聞社	読売新聞社
奉祝国民歌	1	S14.12.7	S14.12.19	日本放送協会	紀元二千六百年奉祝会
軍人援護に関する皇后宮御歌	1	S14.12.16	S14.12.19	軍事保護院	軍事保護院
皇軍に捧ぐる感謝の歌	1	S14.11.30 修正再版	S14.12.20	藤井清水	共益商社書店
英霊讃歌	1	S15.1.25	S15.2.16	報知新聞社	報知新聞社
象山佐久間先生	1	S14.12.13 訂正	S15.2.21	信濃教育会埴科部会	藤原嘉治
山口県民歌	1	S15.1.29	S15.2.28	山口県	共益商社書店
紀元二千六百年讃歌	1	S15.3.3	S15.3.13	読売新聞社	読売新聞社
○国聖地の歌	1	S15.3.7	S15.3.16	紀元二千六百年鹿児島県奉祝会	紀元二千六百年鹿児島県奉祝会

満洲建国の歌	1	S15.3.8	S15.4.5	長岡彌一郎	藤原嘉治
防空の歌	1	S15.4.15	S15.4.20	富岡東四郎	富岡東四郎
満洲帝国皇帝陛下奉迎国民歌	1	S15.5.31	S15.6.4	日満中央協会	日満中央協会
興亜行進曲	1	S15.7.25	S15.8.8	朝日新聞社支店東京朝日新聞発行所	朝日新聞社支店
此一戦	1	S15.8.15 修正	S15.8.19	粥川進策	粥川進策
標準オルガン教則本	2	S15.7.19 修正再版	S15.8.28	黒沢隆朝・小川一朗	共益商社書店
日本勤労の歌	1	S15.8.20	S15.8.31	勤労者教育中央会	勤労者教育中央会
国民進軍歌	1	S15.8.20	S15.8.31	教藤鐵臣	教藤鐵臣
みんな兵士だ弾丸だ	1	S15.8.25	S15.9.13	大阪毎日新聞社東京支店	大阪毎日新聞社東京支店
航空日本の歌	1	S15.9.25	S15.10.1	朝日新聞社支店	朝日新聞社支店
靖国神社の歌	1	S15.10.15	S15.10.14	石川武美	石川武美
国民協和の歌	1	S15.12.25	S16.1.13	中央協和会	中央協和会
靖国神社の歌	1	S16.1.15 修正第一版	S16.1.28	石川武美	石川武美
国民歌 出せ一億の底力	1	S15.12.25	S16.1.29	大阪毎日新聞社東京支店	大阪毎日新聞社東京支店
埼玉青年の歌	1	S15.12.10	S16.2.5	朝日新聞社支店	朝日新聞社支店
「戦陣訓」の歌	1	S16.3.15	S16.3.19	日本ビクター蓄音器	日本ビクター蓄音器
大政翼賛の歌	1	S16.3.1	S16.3.19	久富達夫	大政翼賛会宣伝部
皇后陛下御誕辰奉祝歌	1	S16.3.3	S16.3.26	東京音楽学校 日本教育音楽協会	藤原嘉治
同胞融和の歌	1	S16.3.15	S16.3.26	中央融和事業協会	中央融和事業協会
生民健生歌	1	S16.3.15	S16.3.26	日比野寛	共益商社書店
国民学校の歌	1	S16.3.18	S16.3.27	朝日新聞社	朝日新聞社
護れ太平洋	1	S16.3.15	S16.3.31	日本ビクター蓄音器	日本ビクター蓄音器
国民総意の歌「さうだその意気」	1	S16.5.25	S16.6.10	読売新聞社	田辺則雄
農民歌・国の幸	1	S16.6.2	S16.6.16	大阪毎日新聞社東京支店	大阪毎日新聞社東京支店
大日本青少年国制定歌「世紀の若人」	1	S16.7.25	S16.7.26	読売新聞社	田辺則雄
女子体育の歌	1	S16.3.23	S16.7.31	女子体育振興会	東京女子高等師範学校内
芸能科音楽指導法教本	1	S16.9.8	S16.12.10	工藤富次郎	共益商社書店
空襲なんぞ恐るべき	1	S16.11.1	S16.12.11	大阪毎日新聞社東京支店	大阪毎日新聞社東京支店
興亜大行進曲「アジャの力」	1	S16.11.10	S16.12.11	大政翼賛会宣伝部	入沢文明
翼賛愛知の歌	1	S16.12.6	S16.12.27	愛知県	愛知県
大東亜決戦の歌	1	S17.1.15	S17.1.31	大阪毎日新聞社東京支店	大阪毎日新聞社東京支店
十億の進軍	1	S17.2.12	S17.2.12	読売新聞社	田辺則雄
信濃宮（宗良親王）御歌君のため	1	S17.1.8	S17.2.28	信濃宮神社奉賛会	信濃宮神社奉賛会

戦時名古屋市民歌	1	S17.3.6	S17.3.13	名古屋市	名古屋市
大詔奉戴の歌	1	S17.3.10	S17.3.16	鈴木幾三郎	共益商社書店
防空監視の歌	1	S17.3.28	S17.3.24	大日本防空協会	大日本防空協会
大詔奉戴日の歌	1	S17.2.25	S17.4.2	大政翼賛会宣伝部	大政翼賛会宣伝部
特別攻撃隊	1	S17.4.8	S17.4.11	読売新聞社	田辺則雄
軍神岩佐中佐	1	S17.4.8	S17.4.11	読売新聞社	田辺則雄
大南洋唱歌	1	S17.7.5	S17.7.16	木村毅	木村毅
七洋制覇の秋「海行く日本」	1	S17.7.29	S17.8.15	金子義男	大阪毎日新聞社東京支店
大君の醜の御槍	1	S17.8.15	S17.8.28	栃木県教育会	栃木県教育
橋本左内	1	S17.9.16	S17.9.25	福井県職合教育会	福井県職合教育会
子賓の歌	1	S17.7.3	S17.9.28	厚生省人工局	厚生省人工局
小国民進軍歌	1	S17.10.5	S17.10.6	軍事保護院	軍事保護院
アジアの青雲	1	S17.10.1	S17.10.5	大日本興亜同盟	大日本興亜同盟
大日本婦人会合歌	1	S17.10.5	S17.10.5	大日本婦人会本部	大日本婦人会本部
日本の母の歌	1	S17.10.22	S17.10.22	文化事業報国会	文化事業報国会
日本の母を頌ふ	1	S17.10.27	S17.10.29	読売新聞社	田辺則雄
愛知県勤労報国歌	1	S17.9.10	S17.11.7	愛知県	愛知県
日本の母の歌（二部合唱用）	1	S17.10.28	S17.11.18	文化事業報国会	文化事業報国会
青年歌 起てよアジアの若き友	1	S18.1.15	S18.2.17	大日本青少年団本部	大日本青少年団本部
女子青年歌をとめの幸	1	S18.1.15	S18.2.17	大日本青少年団本部	大日本青少年団本部
大日本航空青少年隊々歌	1	S18.4.30	S18.5.11	大日本飛行協会	大日本飛行協会
国民歌 みたみわれ	1	S18.7.5	S18.7.9	大政翼賛会宣伝部	大政翼賛会宣伝部
ますらをの道（山本元師遺詠）	1	S18.7.6	S18.7.10	朝日新聞東京本社	朝日新聞東京本社
行軍歌「学徒空の進軍」	1	S18.11.3	S18.11.13	読売新聞社	読売新聞社
佐々木軍神讃歌集	1	S18.11.5	S18.11.24	島根県教学課	共益商社書店
都竹兵曹長を讃ふる歌	1	S18.12.20	S18.12.21	大政翼賛会岐阜県支部事務局長	大政翼賛会岐阜県支部事務局長
大航空の歌	1	S19.1.1	S19.1.7	航空局	大日本飛行協会
大アジア獅子○の歌	1	S18.11.1	S19.1.10	軍事保護院	軍事保護院
応徴戦士の歌	1	S19.2.14	S19.2.22	朝日新聞東京本社	朝日新聞東京本社

出典 文部省『師範学校中学校高等女学校小学校検定済教科用図書表』から作成。

参考年表 1931（昭和6）年から1945（昭和20）年における東京音楽学校・師範学校・小学校（国民学校）

年	東京音楽学校	師範学校	小学校（国民学校）	音楽	社会
1931（S6）		「師範学校規定」全面改正（本科第二部の修業年限を2年とする。基本科目・増課科目を設ける） 「師範学校教授要目」を全面改正			3月事件 第2次若槻礼次郎内閣成立 満州事変起こる 犬養毅内閣成立 上海事変起こる 満州国、建国宣言を発表 上海停戦協定調印 5・15事件 斉藤実内閣成立 社会大衆党結成 国民精神文化研究所設立 日満議定書に調印 大日本国防婦人会創立 長野県下で教員多数検挙 国際連盟を脱退 岡田啓介内閣成立 美濃部達吉の「天皇機関説」問題起こる 衆議院、国体明徴決議案可決
1932（S7）	作曲科設立		文部省『新訂尋常小学唱歌』発行	日本楽器、初のパイプオルガン製造	
1933（S8）	上野児童音楽学園を設置				ロンドン軍縮会議脱退 2・26事件 東京市内戒厳令施行 広田弘毅内閣成立 メーデー禁止 軍部大臣現役制復活 日独防共協定調印 林銑十郎内閣成立 文部省編「国体の本義」刊行 第1次近衛文麿内閣成立 日華事変起こる（盧溝橋事件） 国民精神総動員実施要綱を閣議決定。国民精神総動員運動始まる。 内閣情報部設置 国民精神総動員中央連盟
1934（S9） 1935（S10）					
1936（S11）	邦楽科開設 山田喜志教官着任（音楽教授法）～ 1942年			東京音楽協会、大日本音楽協会と改称 大日本連合合唱団組織	
1937（S12）		「師範学校教授要目」を改訂		愛国音楽連盟結成 音楽週間（五万人の大合唱）	

1938 (S13)				文部省、国民歌の指導にのりだす	結成。 全日本労働総同盟、事変中の罷業中止と戦争支持を決議 日・独・伊防共協定調印 人民戦線第1次一斉検挙 国家総動員法公布 日中国交調整の三原則を声明
1939 (S14)		短期現役制度の廃止		ロシア・オペラ・バレエ団の上演禁止、外国劇団の公演不可となる 大日本音楽著作権協会設立	平沼騏一郎内閣成立 青年学校義務制 ノモンハン事件起こる 国民徴用令公布 阿部信行内閣成立
1940 (S15)			「国民学校教員講習会実施要綱」を制定	帝劇閉鎖 ダンスホール禁止 大日本音楽協会解散 大日本作曲家協会解散 紀元2600年奉祝演奏会	第2次世界大戦始まる 米内光政内閣成立 新聞雑誌用紙統制委員会設置 贅沢品禁止令施行 第2次近衛文麿内閣成立 日独伊3国同盟成立 大政翼賛会結成 紀元2600年式典挙行
1941 (S16)	修業年限短縮令 本科、甲種師範科、邦楽科の繰り上げ卒業式举行		「国民学校令」公布 文部省『ウタノホン上』発行 文部省『うたのほん下』発行	音楽新体制協議会 日本音楽文化協会創立 音楽挺身隊結成	治安維持法改正 日ソ中立条約調印 国防保安法公布 第3次近衛文麿内閣成立 東条英機内閣成立
1942 (S17)	4年制甲種師範科の設置 最高学年の繰り上げ卒業式 翌18年度の入学試験における外国語試験廃止令文部省より通達	師範学校を3年制専門学校程度にする昇格案を閣議決定	文部省『初等科音楽(一)』発行 文部省『初等科音楽(二)』発行	楽壇から片仮名追放 帝劇再開 新響、日本交響楽団と改称 国民音楽協会の合唱競演会、第17回で最後となる 大東亜戦争一周年記念音楽会	太平洋戦争起こる 米軍機、日本本土初空襲 大東亜省設置
1943 (S18)	最高学年の繰り上げ卒業式 男子生徒、陸軍および海軍に学徒出陣。女子生徒は各工場において勤労動員	「師範教育令」を改正(師範学校を官立にし、本科3年・予科2年の専門学校程度とする) 「師範学校規定」を制定 「師範学校教科教授及修練指導要	文部省『初等科音楽(三)』発行 文部省『初等科音楽(四)』発行	松竹交響楽団、大東亜交響楽団と改称 楽壇総動員血戦大演奏会 音楽文化協会、演奏家協会と合同。演奏会には必	イタリア無条件降伏 徴兵適齢1年引下げ

1944 (S19)	「東京音楽学校規定」改正（甲種師範科は「師範科」という名称に改正され、修業年限は4年） 戦時非常の際にかんがみ、日曜日も授業を行う旨、文部省から通達 最高学年の繰り上げ卒業式 残留男子生徒陸軍軍楽隊に入隊	目「師範学校体錬科教授要目」を制定 師範学校教育の戦時非常措置を通達	国民学校教育の戦時非常措置について通達	ず邦人作曲を加えること と情報局の指示 音楽報国挺身隊、全国に派遣 米英楽曲 1000 曲禁止、 ジャズレコード禁止 個人の演奏会禁止、交響楽団の会員制取り止めとなる スチールギター、バンジョー、ウクレレ、ジャズ用打楽器の使用禁止	国民登録制を拡大 小磯国昭内閣成立 男子満 18 歳以上を兵役編入決定 鈴木貫太郎内閣成立 ポツダム宣言受諾
1945 (S20)	「決戦教育措置要綱」を閣議決定 「戦時教育令」公布				

出典 『日本教科書大系近代編第二十五巻 唱歌』1965 年。秋山龍英『日本の洋楽百年史』1966 年。文部省『学制百年史（資料編）』1972 年。『季刊音楽教育研究』春号第 31 巻第 2 号、1988 年。『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』2003 年。

謝 辞

本研究を行うにあたり、多数の皆様から多大なご援助、ご協力をいただきました。ここに記して厚くお礼申し上げます。

とりわけ金光武義先生、滝沢美恵子先生につきましては、資料収集の面で大変お世話になりました。

また、SPレコードの再生にあたっては、倉敷公民館音楽図書室の稲田憲哉様、柿本早織様に多大なご協力をいただきました。文献資料に関しては、岡山大学附属図書館の皆様にご援助をいただきました。

さらに、懇切なるご指導をたまわりました主指導教員の奥忍先生ならびに副指導教員の安部崇慶先生、虫明眞砂子先生（D2，3年次）、有道惇先生（D1年次）に、深く感謝いたします。

なお、香川県師範学校卒業生の田山清美先生が、2005（平成17）年9月22日に永眠されました。ご冥福をお祈りいたします。